静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第39集

長崎遺跡 II

（遺構編）

昭和62・63・平成元年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第39集

長崎遺跡 II

（遺構編）

昭和62・63・平成元年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

長崎遺跡は、弥生時代から古墳時代前期にかけての水田を中心とした遺跡である。

当研究所は、静清バイパス着工に伴って埋蔵文化財の発掘を実施しているが、静岡市側で池ヶ谷遺跡、川合地区の遺跡群、瀬名遺跡、清水市側で能島遺跡・長崎遺跡の調査を実施し、それぞれ特色のある成果を得ている。

長崎遺跡は昭和62年度・昭和63年度・平成元年度の３ヶ年にわたって現地調査を実施し、平成二年度から整理報告作業を行っており、また平成４年度に西側の現地調査も計画されている。

本県は登呂遺跡の調査にみられるように水田調査では多数の成果をあげ、注目されてきた。ところがその後の研究状況は、必ずしも進展していたわけではない。

本研究所が実施した静清バイパスの発掘調査の成果は、登呂遺跡以降の水田にたいする認識を改めて問い直すチャンスとなろう。

本報告書は長崎遺跡の調査報告の第２冊目にあたり、中世の河道と弥生時代から古墳時代前期にかけての水田と低地に位置する墳丘墓？を中心にしている。その中でも、水田の検出方法や古墳時代前期から中期の土師器についての問題について、いくつかの提示を行っており、意義深い。

なお調査や本書作成にあたっては、建設省・清水市教育委員会・静岡市教育委員会を始めとする関係各位に心から謝意を表するとともに資料整理にあたった研究所職員や作業に参加された多くの方々の労苦をねぎらいたい。

平成４年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1．本書は静岡県清水市長崎・長崎新田地先に所在する長崎遺跡の調査報告書の第２分冊である。

2．調査は昭和62年度～平成元年度まで静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関静岡県教育委員会・調査調整機関清水市教育委員会とし、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施した。

3．現地発掘調査は昭和62年４月１日から平成元年11月20日まで行った。整理作業は平成２年度より継続して実施しており、平成３年度は４～６区を対象に報告する。

4．調査体制は次の通りである。

昭和62年度　所長斎藤忠　常務理事大石保夫　調査研究部長兼調査研究一課長山下晃　主任調査研究員栗野克己　調査研究員志村廣三、伊藤豪、佐藤雅明、足立順司、曽根辰雄、守谷孝治、矢田勝、加藤真澄、中山正典、村瀬隆彦

昭和63年度　所長斎藤忠　常務理事亀山千鶴男　調査研究部長山下晃　調査研究三課長佐藤達雄　調査研究員伊藤豪、足立順司、矢田勝、竹山喜章、村瀬隆彦

平成元年度　所長斎藤忠　常務理事亀山千鶴男　調査研究部長山下晃　調査研究三課長佐藤達雄　主任調査研究員足立順司、調査研究員矢田勝

平成２年度　所長斎藤忠　常務理事亀山千鶴男　調査研究部長山下晃　調査研究三課長佐藤達雄　主任調査研究員足立順司、調査研究員矢田勝

平成３年度　所長斎藤忠　常務理事鈴木勲　調査研究部長山下晃　調査研究三課長佐藤達雄　主任調査研究員足立順司、矢田勝

5．本書の遺物写真は池田洋仁・楠本真紀子氏に撮影を依頼した。

6．本報告書の作成にかかわる資料整理・図版作成等については、海野ひとみ、佐々木富士子、川渕由美子、落合高志を中心としながら、杉山暁子、河西淑乃、岩辺友子、岩辺芳江、両角治子、笠井昌枝、山田みのる、山梨昌子、井上隆子、藤森三千代、志村ひろみ、新村佳子、杉山久美子、外岡みつ子、藤川みどり、中村由美子、葉山安子、堀八重子、小野間薫子、望月万左枝、中島頼英他の協力を得た。

7．本書は調査研究三課長佐藤達雄と整理を担当した主任調査研究員足立順司・矢田勝及び落合高志が執筆した。分担は下記の通りである。

第Ⅱ章第３節、第４節、第Ⅳ章、第Ⅴ章第２節……足立順司

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章第１節……矢田　勝

第Ⅱ章第１節、第２節……落合高志

第Ⅵ章……佐藤達雄

8．地質関係の調査は、静岡大学名誉教授　加藤芳朗先生に依頼し、その報告を特論１として本書に収録した。

9．出土した塔婆類の理解については、静岡大学　湯ノ上隆助教授、土器については加納俊介氏、赤塚

次郎氏のご指導をえた。

10. 動物遺存体については、早稲田大学　金子浩昌先生、樹種鑑定については、元国立科学博物館　山内文先生に委嘱した。その報告は次の報告書に収録予定であるが、その成果については、一部本報告書に引用させていただいている。

11. 長崎遺跡２区の断層地形については、静岡県地震対策課　岩田孝仁氏のご教示をえた。

12. 本書の編集は佐藤達雄が行った。その際、各調査員の見解をそこなわない範囲で用語の統一と整理を行った。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

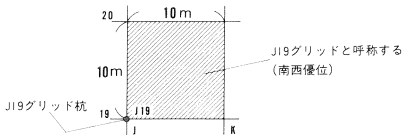
1．調査区の座標軸は、平面直角座標Ⅷ系を用いた。

2．本書で使用した方位は、上記の座標系の方位（座標北）である。

3．１辺10ｍ方眼のグリッド配置は、５区南西端から南へ約40ｍにあるＸ＝－109500ｍ軸を調査区南北軸の０とした。また５区南西端から西へ約60ｍにあるＹ＝－5100ｍ軸を調査区東西軸のＡとした。

4．南北軸は通し番号（－３～48)、東西軸はアルファベットを用いて区毎に（『長崎遺跡Ⅰ』第４図を参照）設定した。

5．グリッド杭とグリッドのそれぞれの名称については下記のように設定した。



6．調査区の中の一部を限定する場合、南北・東西のグリッド座標により、それぞれ35列～40列、Ｆ列～Ｈ列のように用いた。

7．遺物実測図には、報告書の見出し番号を左下に、遺物番号を右下に記入した。ただし、木製品については、遺物実測図と図版の遺物写真の見出し番号の前に「*w*」を付けた。

8．遺構・遺物の標記は次の通りである。

例）ＳＲ２ ０１
区　遺構番号

遺　構　（　Ｓ　）		遺　物
Ａ　柵・杭列	Ｈ　掘立柱建物	Ｗ　木製品
Ｂ　竪穴式住居	Ｋ　畦畔	Ｐ　土器
Ｃ　祭祀遺構	Ｌ　護岸遺構	ＰＴ　土製品
Ｄ　溝	Ｐ　小穴・土坑	Ｓ　石製品
Ｅ　井戸	Ｒ　河道	Ｍ　金属器
Ｆ　土壙	Ｓ　地点貝塚	Ｂ　自然遺物
Ｇ　小鍛冶遺構	Ｘ　その他	Ｅ　その他

9．遺物番号は各区毎に設定したため同一番号が重複している場合もある。遺構番号は通常2桁を使用したが、5区については遺構の数が多くなったため、途中より3桁に切り換えた。（ＳＰ5074より）なお、遺物番号及び遺物の見出し番号は、遺構図・遺物実測図・遺物図版についても統一し、共通の番号を付した。

10．木製品実測図における加工等の細部の特徴の表現は次の通りである。

炭　化		うるし		欠　損	
使用痕 圧痕（柱痕）		黒色処理 （墨痕？）		樺　皮	

目　　次

序

例言・凡例

第Ⅰ章　土　層 …… 1

第１節　４～６区の土層の概要 …… 1

第２節　４区の土層の特色 …… 3

第３節　５区の土層の特色 …… 4

第４節　６区の土層の特色 …… 5

第Ⅱ章　４区の遺構と遺物 …… 8

第１節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構 …… 8

1．土器集中箇所 …… 8

2．掘立柱建物群 …… 18

3．ＳＲ440南岸護岸杭列群 …… 21

4．畦畔 …… 27

5．杭列 …… 27

6．溝状遺構 …… 31

7．河道 …… 32

8．微高地と低地 …… 33

9．その他の遺構 …… 33

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物 …… 37

1．土器 …… 37

2．石器 …… 48

3．木製品（礎板を含む） …… 48

第３節　中世の遺構 …… 58

1．馬埋葬 …… 58

2．橋状遺構ＳＸ402 …… 58

3．河道ＳＲ401 …… 61

第４節　中世の遺物 …… 62

1．陶磁器 …… 62

2．墨書土器 …… 65

3．金属製品 …… 65

4．木製品 …… 65

5．小結 …… 66

第Ⅲ章　5区の遺構と遺物 …… 74
第1節　遺構 …… 74
1．溝状遺構群 …… 85
2．掘立柱建物群 …… 95
3．炭化物焼土面の遺構 …… 122
4．台状遺構 …… 127
5．台状遺構上面の土器群 …… 135
6．水田遺構 …… 136
第2節　遺物 …… 144
1．土器 …… 144
2．木製品 …… 152
第Ⅳ章　6区の遺構と遺物 …… 169
第1節　遺構 …… 169
1．弥生中期の遺構 …… 170
2．弥生後期の遺構 …… 170
3．弥生後期から古墳前期の遺構 …… 179
4．古墳時代の遺構 …… 193
第2節　出土遺物 …… 197
1．土器 …… 197
2．木製品 …… 210
3．石器 …… 229
4．骨製品 …… 229
第Ⅴ章　考　察 …… 231
第1節　長崎遺跡の遺構立地の2・3の問題 …… 231
第2節　長崎遺跡の遺構の変遷について …… 236
第Ⅵ章　まとめ …… 242
特論1．長崎遺跡の水田立地に関する地学的・土壌学的検討 …… 245

挿図目次

第 1 図　各区南壁土層図（1）4区 …… 6
第 2 図　各区南壁土層図（2）5・6区 …… 7
第 3 図　4区全体図（1） …… 9
第 4 図　4区全体図（2） …… 10
第 5 図　4区土器集中箇所実測図（1）ＳＸ410・ＳＸ450 …… 12
第 6 図　4区土器集中箇所実測図（2）ＳＸ411・ＳＸ465 …… 13
第 7 図　4区土器集中箇所実測図（3）ＳＸ412・ＳＦ423・ＳＸ424 …… 14
第 8 図　4区土器集中箇所実測図（4）ＳＤ432・ＳＤ433・ＳＡ468 …… 15・16
第 9 図　4区土器集中箇所実測図（5）ＳＸ4101 …… 17
第 10 図　4区掘立柱建物群全体図 …… 22
第 11 図　4区掘立柱建物跡実測図（1）ＳＨ4108・ＳＨ4109 …… 23
第 12 図　4区掘立柱建物跡実測図（2）ＳＨ4110・ＳＨ4111・ＳＨ4112 …… 24
第 13 図　4区畦畔ＳＫ494実測図 …… 28
第 14 図　4区護岸杭列実測図（1）ＳＡ443・ＳＡ483・ＳＡ484・ＳＡ485 …… 29・30
第 15 図　4区護岸杭列実測図（2）ＳＡ477 …… 31
第 16 図　4区その他の遺構実測図　ＳＸ409礫群・ＳＡ456杭列・ＳＸ445・ＳＡ460 …… 34
第 17 図　4区出土土器実測図（1）弥生式土器・古式土師器 …… 39
第 18 図　4区出土土器実測図（2）弥生式土器・古式土師器 …… 41
第 19 図　4区出土土器実測図（3）弥生式土器・古式土師器 …… 44
第 20 図　4区出土土器実測図（4）弥生式土器・古式土師器 …… 46
第 21 図　4区出土土器実測図（5）弥生式土器・古式土師器（拓影） …… 47
第 22 図　4区出土石器実測図 …… 49
第 23 図　4区出土木製品実測図（1） …… 51
第 24 図　4区出土木製品実測図（2） …… 52
第 25 図　4区出土木製品実測図（3） …… 53
第 26 図　4区出土木製品実測図（4） …… 54
第 27 図　4区出土木製品実測図（5）礎板 …… 55
第 28 図　4区出土木製品実測図（6）礎板 …… 56
第 29 図　4区出土木製品実測図（7）礎板 …… 57
第 30 図　4区河道ＳＲ401実測図 …… 59・60
第 31 図　4区馬埋葬集成図（1） …… 61
第 32 図　4区馬埋葬集成図（2） …… 62
第 33 図　4区橋状遺構ＳＸ402実測図 …… 63

第 34 図　4 区ＳＲ401出土土器実測図 …… 64
第 35 図　4 区出土金属製品・墨書土器実測図 …… 66
第 36 図　4 区木製塔婆実測図（1） …… 69
第 37 図　4 区木製塔婆実測図（2） …… 70
第 38 図　4 区木製塔婆実測図（3） …… 71
第 39 図　4 区板状木製品他実測図 …… 72
第 40 図　4 区金剛草履実測図 …… 73
第 41 図　5 区遺構変遷図（1） …… 77・78
第 42 図　5 区遺構変遷図（2） …… 79・80
第 43 図　5 区遺構変遷図（3） …… 81・82
第 44 図　5 区遺構変遷図（4） …… 83・84
第 45 図　5 区溝状低地遺物分布図（1） …… 90
第 46 図　5 区溝状低地遺物分布図（2） …… 91
第 47 図　5 区溝状低地遺物分布図（3） …… 92
第 48 図　5 区溝状遺構遺物分布図（4） …… 93・94
第 49 図　5 区掘立柱建物群全体図 …… 97・98
第 50 図　5 区掘立柱建物詳細図（1） …… 99
第 51 図　5 区掘立柱建物詳細図（2） …… 100
第 52 図　5 区掘立柱建物実測図（1） …… 110
第 53 図　5 区掘立柱建物実測図（2） …… 111
第 54 図　5 区掘立柱建物実測図（3） …… 112
第 55 図　5 区掘立柱建物実測図（4） …… 113
第 56 図　5 区掘立柱建物実測図（5） …… 114
第 57 図　5 区掘立柱建物実測図（6） …… 115
第 58 図　5 区掘立柱建物実測図（7） …… 116
第 59 図　5 区掘立柱建物実測図（8） …… 117
第 60 図　5 区掘立柱建物実測図（9） …… 118
第 61 図　5 区掘立柱建物実測図（10） …… 119
第 62 図　5 区掘立柱建物実測図（11） …… 120
第 63 図　5 区掘立柱建物実測図（12） …… 121
第 64 図　5 区掘立柱建物実測図（13） …… 122
第 65 図　5 区炭化物焼土面遺構実測図 …… 126
第 66 図　5 区台状遺構群関連土層図（1）台状遺構断面図 …… 129・130
第 67 図　5 区台状遺構群関連土層図（2）台状遺構廃絶後の土層堆積状況 …… 131
第 68 図　5 区台状遺構上面土器群（西斜面）出土状況 …… 132

第 69 図　5 区台状遺構群出土土器分布図 …… 133・134
第 70 図　5 区堰状遺構ＳＸ5114実測図 …… 140
第 71 図　5 区水田遺構断面図（１） …… 141
第 72 図　5 区水田遺構断面図（２） …… 142
第 73 図　5 区水田遺構断面図（３） …… 143
第 74 図　5 区出土土器実測図（１） …… 146
第 75 図　5 区出土土器実測図（２） …… 147
第 76 図　5 区出土土器実測図（３） …… 148
第 77 図　5 区出土土器実測図（４） …… 149
第 78 図　5 区出土土器実測図（５） …… 150
第 79 図　5 区出土土器実測図（６） …… 151
第 80 図　5 区出土木製品実測図（１） …… 154
第 81 図　5 区出土木製品実測図（２） …… 155
第 82 図　5 区出土木製品実測図（３） …… 156
第 83 図　5 区出土木製品実測図（４） …… 160
第 84 図　5 区出土木製品実測図（５） …… 161
第 85 図　5 区出土木製品実測図（６） …… 162
第 86 図　5 区出土木製品実測図（７） …… 163
第 87 図　5 区出土木製品実測図（８） …… 166
第 88 図　5 区出土木製品実測図（９） …… 167
第 89 図　5 区出土木製品実測図（10） …… 168
第 90 図　6 区全体図 …… 171・172
第 91 図　6 区土層図 …… 173
第 92 図　6 区弥生中期遺物集中箇所実測図 …… 174
第 93 図　6 区河道ＳＲ601（古）実測図 …… 175・176
第 94 図　6 区溝状遺構ＳＤ627実測図 …… 177・178
第 95 図　6 区掘立柱建物ＳＨ642実測図 …… 181
第 96 図　6 区掘立柱建物ＳＨ643・644実測図 …… 182
第 97 図　6 区掘立柱建物ＳＨ645・646実測図 …… 183
第 98 図　6 区溝状遺構ＳＤ613他実測図 …… 185
第 99 図　6 区畦畔ＳＫ621実測図 …… 187
第 100 図　6 区畦畔ＳＫ631・621実測図 …… 188
第 101 図　6 区畦畔ＳＫ622実測図 …… 189
第 102 図　6 区畦畔ＳＫ629・634実測図 …… 191
第 103 図　6 区溝状遺構ＳＤ610（新）実測図 …… 192

第104図　6区ＳＸ626実測図 …… 194
第105図　6区ＳＸ602・ＳＸ603土器集中箇所実測図 …… 195・196
第106図　6区出土土器実測図（1） …… 199
第107図　6区出土土器実測図（2） …… 200
第108図　6区出土土器実測図（3） …… 201
第109図　6区出土土器実測図（4） …… 202
第110図　6区出土土器実測図（5） …… 203
第111図　6区出土土器実測図（6） …… 204
第112図　6区出土土器実測図（7） …… 206
第113図　6区出土土器実測図（8） …… 207
第114図　6区出土土器実測図（9） …… 208
第115図　6区出土土器実測図（10） …… 209
第116図　6区出土木製品実測図（1） …… 211
第117図　6区出土木製品実測図（2） …… 212
第118図　6区出土木製品実測図（3） …… 213
第119図　6区出土木製品実測図（4） …… 214
第120図　6区出土木製品実測図（5） …… 215
第121図　6区出土木製品実測図（6） …… 216
第122図　6区出土木製品実測図（7） …… 217
第123図　6区出土木製品実測図（8） …… 218
第124図　6区出土木製品実測図（9） …… 219
第125図　6区出土木製品実測図（10） …… 220
第126図　6区出土木製品実測図（11） …… 221
第127図　6区出土木製品実測図（12） …… 222
第128図　6区出土木製品実測図（13） …… 223
第129図　6区出土木製品実測図（14） …… 224
第130図　6区出土木製品実測図（15） …… 225
第131図　6区出土木製品実測図（16） …… 226
第132図　6区出土木製品実測図（17） …… 227
第133図　6区出土骨製品・石斧実測図 …… 230
第134図　5区地形起伏変遷図 …… 234
第135図　4区ＳＲ401断面図 …… 235

特論挿図

図1　遺跡周辺の地形分類図（門村、1966を簡略化）……246
図2　静清バイパスぞいの地下地質断面図（1）……247
図3　静清バイパスぞいの地下地質断面図（2）……247
図4　静清バイパスぞいの地下地質断面図（3）……247
図5　遺跡周辺低地の地質柱状図（1）……249
図6　遺跡周辺低地の地質柱状図（2）……249
図7　遺跡とその周辺の礫層の岩質組成……252
図8　2区土層断面図……252

特論挿表

表1　1－3区SR118の白色粒子まじりの土層の細砂画分……252
表2　湛水土壌中における還元過程……252

挿表目次

第1表　基本層序一覧表……6
第2表　4区溝状遺構一覧表……36
第3表　4区塔婆計測一覧表……68
第4表　4区金剛草履計測値一覧表……73
第5表　5区南西部溝状遺構・杭列一覧表……89
第6表　5区掘立柱建物跡柱穴一覧表……104
第7表　5区掘立柱建物群の各群の柱穴の切り合関係一覧表……108
第8表　5区水田関連溝状遺構・畦畔状遺構一覧表……138
第9表　長崎遺跡土器編年対比表……240

図版目次

カラー図版１　　４区出土金鋺・中国陶磁

図版１　１．４(Ａ)区全景－東より
　　２．４(Ｂ)区黒色粘土層上面全景空中写真
図版２　１．４区土器集中箇所ＳＸ410
　　２．４区土器集中箇所ＳＸ411
　　３．４区土器集中箇所ＳＸ412
図版３　１．４区土器集中箇所ＳＸ424
　　２．４区ＳＤ432・433内土器集中箇所
　　３．４区土器集中箇所ＳＸ450
図版４　１．４区土器集中箇所ＳＸ465
　　２．４区土器集中箇所ＳＸ4101
図版５　１．４区ＳＨ4108～4111－北より
　　２．４区ＳＰ475（ＳＨ4109）礎板出土状況
　　３．４区ＳＰ411（ＳＨ4110）礎板出土状況
　　４．４区ＳＰ478・457（ＳＨ4110・4111）礎板出土状況
　　５．４区ＳＰ452（ＳＨ4112）礎板出土状況
図版６　１．４区ＳＰ451（ＳＨ4112）礎板出土状況
　　２．４区ＳＰ462・463礎板出土状況
　　３．４区ＳＰ471礎板出土状況
　　４．４区ＳＰ498礎板出土状況
　　５．４区畦畔ＳＫ494全景－北より
　　６．４区畦畔ＳＫ494横断面
図版７　１．４区ＳＲ440護岸杭列群－西より
　　２．４区護岸杭列ＳＡ496－西より
図版８　１．４区護岸杭列ＳＡ443・483～485－西より
　　２．４区護岸杭列ＳＡ443・485－北より
　　３．４区護岸杭列ＳＡ443・483～485近景
　　４．４区護岸杭列ＳＡ443壺・石錘出土状況
図版９　１．４区護岸杭列ＳＡ477縦断面－北より
　　２．４区杭列ＳＡ456・溝状遺構ＳＤ427－北より
　　３．４区杭列ＳＡ456全景－西より
図版10　１．４区杭列ＳＡ468・溝状遺構ＳＤ432・433－北東より

２．４区杭列ＳＡ468縦断面－南より
３．４区溝状遺構全景（西側）－北より
図版11　１．４区溝状遺構ＳＤ404・405・421－東より
２．４区溝状遺構ＳＤ415・416・419・420－東より
３．４区溝状遺構ＳＤ427・428・430・431・河道ＳＲ429－東より
４．４区溝状遺構ＳＤ467・河道ＳＲ469－西より
５．４区溝状遺構ＳＤ432～435・杭列ＳＡ468－東より
図版12　１．４区溝状遺構ＳＤ403－東より
２．４区溝状遺構ＳＤ406－東より
３．４区溝状遺構ＳＤ413－東より
４．４区溝状遺構ＳＤ414－東より
５．４区溝状遺構ＳＤ417・418－北より
６．４区溝状遺構ＳＤ418内炭化物出土状況
図版13　１．４区溝状遺構ＳＤ425－北より
２．４区溝状遺構ＳＤ428－西より
３．４区溝状遺構ＳＤ433内建築材出土状況
４．４区溝状遺構ＳＤ436－東より
５．４区溝状遺構ＳＤ404横断面
６．４区溝状遺構ＳＤ405横断面
図版14　１．４（Ｂ）区Ｃ層除去後全景－西より
２．４区河道ＳＲ429－西より
３．４区河道ＳＲ440内Ｐ162壺形土器出土状況
４．４区河道ＳＲ440内Ｐ228小型壺出土状況
図版15　１．４区河道ＳＲ440内W262多又鍬（鋤）出土状況
２．４区河道ＳＲ440内W220高杯脚部出土状況
３．４区河道ＳＲ440内W066掘り棒出土状況
４．４区礫群ＳＸ409
図版16　１．４区低地ＳＸ490全景－西より
２．４区低地ＳＸ490内土器出土状況
３．４区土坑ＳＦ423内木片出土状況
４．４区土坑ＳＦ423完掘状況
５．４区盛土状遺構ＳＸ445・杭列ＳＡ460
６．４区盛土状遺構ＳＸ445横断面
図版17　４区出土土器（１）弥生式土器・古式土師器
図版18　４区出土土器（２）弥生式土器・古式土師器

図版19　4区出土土器（3）弥生式土器・古式土師器
図版20　4区出土土器（4）弥生式土器・古式土師器
4区出土石器
図版21　4区出土木製品（1）
図版22　4区出土木製品（2）
図版23　4区出土木製品（3）
図版24　4区出土木製品（4）礎板
図版25　4区出土木製品（5）礎板
図版26　1．4区馬埋葬1.2出土状況（1）
2．4区馬埋葬1出土状況（2）
3．4区馬埋葬下顎骨出土状況（3）
図版27　1．4区馬埋葬3出土状況
2．4区馬埋葬4頭骨出土状況
図版28　1．4区ＳＲ401内馬埋葬4出土状況
2．4区馬埋葬出土状況
3．4区馬埋葬4腰骨出土状況
4．4区馬埋葬頭骨出土状況
図版29　1．4区金鋺出土状況
2．4区小皿出土状況
3．4区馬埋葬2出土状況
図版30　1．4区塔婆出土状況W012
2．4区塔婆出土状況W004、W005
3．4区塔婆出土状況W006
4．4区金剛草履出土状況
図版31　1．4区7本塔婆出土状況W009
2．4区塔婆出土状況W059
3．4区塔婆出土状況W008
図版32　1．4区ＳＲ401と梶原山－南より
2．4区ＳＸ402全景
図版33　1．4区ＳＸ402全景
2．4区ＳＸ402橋状遺構
3．4区ＳＸ402ソダ
図版34　1．4区ＳＲ401とＳＸ402の関係
2．4区ＳＲ401とＳＸ402－東より
3．4区ＳＸ402－北より

図版35　4区中世出土土器（1）
図版36　4区中世出土土器（2）中国陶磁器・小皿・かわらけ
図版37　4区出土木製品（1）塔婆1
図版38　4区出土木製品（2）塔婆2
図版39　4区出土木製品（3）塔婆3
図版40　4区出土木製品（4）その他・金剛草履
図版41　5区西半部溝状遺構群全景空中写真
図版42　1．5区西半部溝状遺構群全景－東より
2．5区西半部溝状遺構群全景－北西より
図版43　1．5区溝状遺構ＳＤ5108の護岸杭列検出状況－西より
2．5区溝状遺構ＳＤ5108断面検出状況－西より
3．5区溝状遺構ＳＤ5108・5437と杭列ＳＡ5275・5307・5449断面検出状況－西より
4．5区溝状遺構ＳＤ5108・5436と杭列ＳＡ5449断面近接－西より
図版44　1．5区溝状遺構ＳＤ5108断面（西端部）－東より
2．5区溝状遺構ＳＤ5108断面－東より
3．5区溝状遺構ＳＤ5108断面（最深部）－東より
図版45　1．5区溝状低地ＳＸ5110覆土上面検出状況全景－北より
2．5区溝状低地ＳＸ5110覆土内遺物検出状況全景－南より
3．5区溝状低地ＳＸ5110覆土内遺物検出状況全景－東より
図版46　1．5区溝状低地ＳＸ5110覆土内遺物検出状況－北より
2．5区溝状低地ＳＸ5110覆土内遺物検出状況－南より
3．5区溝状低地ＳＸ5110に打込まれた杭列群－北より
図版47　1．5区溝状遺構ＳＤ5297覆土上面の炭化物・土器検出状況－東より
2．5区溝状遺構ＳＤ570覆土中遺物検出状況－北より
図版48　1．5区溝状遺構ＳＸ5248覆土上面遺物検出状況－西より
2．5区溝状遺構ＳＸ5248完掘・遺物検出状況－西より
3．5区溝状遺構ＳＸ5248完掘・遺物検出状況－北より
図版49　1．5区溝状遺構ＳＸ5110覆土上部遺物出土状況－北より
2．5区集石遺構ＳＸ5150検出状況－南より
3．5区溝状低地ＳＸ5110覆土上部での壺（Ｐ5344）出土状況－東より
4．5区溝状遺構ＳＸ5248覆土内遺物出土状況－北より
図版50　1．5区溝状遺構ＳＤ570断面－東より
2．5区溝状遺構ＳＤ569断面－東より
3．5区ＳＤ570とＳＤ569との間の断面－東より
図版51　1．5区溝状遺構ＳＤ5283完掘状況－西より

２．５区溝状遺構ＳＤ5283完掘状況と南北中央断面－西より

３．５区溝状遺構ＳＤ5283とＳＤ5336の切り合い－南より

図版52　１．５区溝状遺構ＳＤ5283－１の断面と溝上部から検出された壺（Ｐ5666）－東より

２．５区溝状遺構ＳＤ5220全景－西より

３．５区旧河道ＳＲ5234断面（南西端部分）－東より

４．５区溝状遺構ＳＤ5290断面－北より

図版53　１．５区上位での柱穴検出状況全景－北西より

２．５区下位での柱穴検出状況全景－北西より

図版54　１．５区上位での柱穴群検出状況－北西より

２．５区上位での柱穴群検出状況－北より

３．５区上位での柱穴群検出状況－北東より

図版55　１．５区上位での柱穴群検出状況－北より

２．５区上位での柱穴群検出状況－北より

図版56　１．５区掘立柱建物１群礎板検出状況

２．５区掘立柱建物２群ＳＨ5362礎板検出状況ＳＰ5126・5091での柱痕

３．５区掘立柱建物２群ＳＨ5362礎板検出状況ＳＰ5091（柱痕）

４．５区掘立柱建物２群ＳＨ5362礎板検出状況ＳＰ5111・ＳＰ5112

５．５区掘立柱建物２群ＳＨ5362礎板検出状況ＳＰ5109の掘方断面

６．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5183の掘方断面

７．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5183[1][3][4]

図版57　１．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5113[3][4]

２．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5093[1][6]

３．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5076[2][5]

４．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5076の完掘状況

５．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5076の最下位の礎板

図版58　１．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況ＳＰ5157[1][2][5]

２．５区掘立柱建物２群ＳＨ5363礎板検出状況

３．５区掘立柱建物２群ＳＨ5381礎板検出状況ＳＰ5160

４．５区掘立柱建物２群ＳＨ5381礎板検出状況ＳＰ5177

５．５区掘立柱建物２群ＳＨ5414柱穴検出状況ＳＰ5079

６．５区掘立柱建物２群ＳＨ5414礎板検出状況ＳＰ5155

７．５区掘立柱建物２群ＳＨ5419礎板検出状況ＳＰ5156[9]

８．５区掘立柱建物２群ＳＨ5419礎板検出状況ＳＰ5203[9]

図版59　１．５区掘立柱建物２群北東部柱穴切り合い状況

２．５区掘立柱建物２群南東部ＳＰ5077内礎板

３．５区掘立柱建物２群柱穴ＳＰ5161礎板検出状況
４．５区掘立柱建物２群南西部の同一位置から検出された柱穴
５．５区掘立柱建物２群南西部の隣接する柱穴
６．５区掘立柱建物２群北部の南北土層断面（20トレンチ）－東より
７．５区掘立柱建物２群西部の南北溝ＳＤ5222－北より
図版60　１．５区掘立柱建物３群ＳＨ5364礎板検出状況ＳＰ5192
２．５区掘立柱建物３群柱穴切り合い状況
３．５区掘立柱建物３群ＳＨ5386礎板検出状況ＳＰ5211
４．５区掘立柱建物３群ＳＨ5386礎板検出状況ＳＰ521111の完掘状況
５．５区掘立柱建物３群南西部礎板群検出状況
図版61　１．５区掘立柱建物４群ＳＨ5388礎板検出状況ＳＰ5145
２．５区掘立柱建物４群ＳＨ5388礎板検出状況ＳＰ5145完掘状況
３．５区掘立柱建物４群ＳＨ5388礎板検出状況ＳＰ514814
４．５区掘立柱建物４群ＳＨ5389礎板検出状況ＳＰ523915
５．５区掘立柱建物４群北東部柱穴群検出状況
６．５区掘立柱建物４群南東部柱穴群検出状況
７．５区掘立柱建物４群ＳＨ5390礎板検出状況ＳＰ518917
図版62　１．５区掘立柱建物４群北東部柱穴群検出状況
２．５区掘立柱建物４群ＳＨ5390礎板検出状況ＳＰ518518
３．５区掘立柱建物４群ＳＨ5391礎板検出状況ＳＰ518816
４．５区掘立柱建物４群ＳＨ5392礎板検出状況ＳＰ508255
５．５区掘立柱建物４群ＳＨ5392礎板検出状況ＳＰ517455
６．５区掘立柱建物４群ＳＨ5392礎板検出状況ＳＰ5081
７．５区掘立柱建物４群ＳＨ5392礎板検出状況ＳＰ5081
図版63　１．５区掘立柱建物４群ＳＨ5393柱穴検出状況ＳＰ5089平面確認状況
２．５区掘立柱建物４群ＳＨ5393柱穴検出状況ＳＰ5089断面検出状況
３．５区掘立柱建物４群ＳＨ5393柱根検出状況ＳＰ5147
４．５区掘立柱建物４群ＳＨ5393柱穴完掘状況ＳＰ514719 21
５．５区掘立柱建物４群ＳＨ5394礎板検出状況ＳＰ513920
６．５区掘立柱建物４群ＳＨ5394礎板検出状況ＳＰ508020
７．５区掘立柱建物４群ＳＨ5418礎板検出状況ＳＰ5138
８．５区掘立柱建物４群ＳＨ5418礎板検出状況ＳＰ5193
図版64　１．５区掘立柱建物４群ＳＨ5418礎板検出状況ＳＰ5086
２．５区掘立柱建物４群ＳＨ5418礎板検出状況ＳＰ5144
３．５区掘立柱建物５群北東部柱穴切り合い状況ＳＰ5346

４．５区掘立柱建物５群北東部柱穴切り合い状況ＳＰ5346㉓㉕完掘状況

５．５区掘立柱建物５群ＳＨ5365礎板検出状況ＳＰ5294㉖

６．５区掘立柱建物５群ＳＨ5407礎板検出状況ＳＰ5317㉛㉕

図版65　１．５区掘立柱建物５群ＳＨ5365礎板検出状況ＳＰ5265㉖

２．５区掘立柱建物５群ＳＨ5366礎板検出状況ＳＰ5311掘方断面検出状況

３．５区掘立柱建物５群ＳＨ5366礎板検出状況ＳＰ5309㉙堀方断面検出状況

４．５区掘立柱建物５群ＳＨ5366礎板検出状況ＳＰ5244㉙

５．５区掘立柱建物５群ＳＨ5366・5396礎板隣接検出状況ＳＰ5276（ＳＨ5366）㉙

６．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5312㉘

７．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5349

８．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5349完掘状況

図版66　１．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5186㉔

２．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5186㉔完掘状況

３．５区掘立柱建物５群ＳＨ5395礎板検出状況ＳＰ5322㉔

４．５区掘立柱建物５群ＳＨ5396礎板検出状況ＳＰ5242㉞（柱痕）

５．５区掘立柱建物５群ＳＰ5316㊾

６．５区掘立柱建物５群礎板検出状況ＳＰ5310㊾

７．５区掘立柱建物５群中西部柱穴群検出状況

８．５区掘立柱建物５群中東部柱穴群検出状況

図版67　１．５区掘立柱建物５群南東部柱穴群検出状況ＳＰ5318㉗

２．５区掘立柱建物７群ＳＨ5435礎板検出状況

３．５区掘立柱建物６群ＳＨ5400礎板検出状況ＳＰ5218㉜

４．５区掘立柱建物８群ＳＨ5437礎板検出状況ＳＰ5219㊷

５．５区掘立柱建物８群南西部柱穴群検出状況

図版68　１．５区掘立柱建物８群南西部柱穴群検出状況

２．５区掘立柱建物８群北西部柱穴群検出状況

３．５区掘立柱建物８群南西部柱穴群検出状況

４．５区掘立柱建物８群南西部柱穴群検出状況

５．５区掘立柱建物８群北西部柱穴群検出状況

６．５区掘立柱建物８群北西部柱穴群検出状況

７．５区掘立柱建物８群ＳＰ5340礎板検出状況

８．５区掘立柱建物８群北東部柱穴群検出状況

図版69　１．５区掘立柱建物８群南東部柱穴群検出状況

２．５区掘立柱建物８群南東部柱穴群検出状況

３．５区掘立柱建物８群ＳＨ5441礎板検出状況ＳＰ5293

４．５区掘立柱建物８群ＳＰ5224礎板検出状況（柱痕）
５．５区掘立柱建物８群ＳＰ5225礎板検出状況（柱痕）
６．５区掘立柱建物８群北東部柱穴群検出状況
図版70　１．５区掘立柱建物３群ＳＰ5074完掘状況
２．５区掘立柱建物３群ＳＰ5074検出状況と周辺の土器群
３．５区掘立柱建物３群ＳＰ5074検出状況（近接）
４．５区掘立柱建物３群ＳＰ5074の掘方覆土下部から出土した鏃（M006）
５．５区掘立柱建物３群ＳＰ5074の掘方覆土下部から出土した鏃（M005）
図版71　１．５区整地層検出土器Ｐ4265（壺）他出土状況
２．５区整地層検出土器Ｐ4279（壺）他出土状況
３．５区整地層検出土器Ｐ4244（壺）他出土状況
４．５区整地層検出土器Ｐ4290出土状況
５．５区整地層検出土器Ｐ4608出土状況
６．５区整地層検出土器Ｐ4608出土状況（近接）
図版72　１．５区台状遺構長軸土層帯Ｋ６グリッド杭付近－北より
２．５区台状遺構長軸土層帯Ｋ６グリッド杭付近東連続部分
３．５区整地層最下面の直下から検出された土器集中箇所ＳＸ5314－南より
図版73　１．５区炭化物・焼土面全景－西より
２．５区炭化物・焼土面全景－東より
３．５区炭化物・焼土面遺構群ＳＸ562・560・561・564－南より
４．５区炭化物堆積土坑ＳＸ558－南より
図版74　１．５区土器集中土坑ＳＸ571・572－北西より
２．５区土坑ＳＸ571での土器出土状況－北より
３．５区土坑ＳＸ572での土器出土状況－南より
４．５区土坑ＳＸ572覆土の上面と断面の状況－北より
図版75　１．５区炭化物・焼土面遺構ＳＸ560・561・564－南より
２．５区炭化物・焼土面遺構ＳＸ560断面－東より
３．５区炭化物面遺構ＳＸ561上面－北東より
４．５区炭化物面遺構ＳＸ561東半分完掘状況と断面－東より
５．５区炭化物面遺構ＳＸ565上面－北より
６．５区炭化物・焼土面遺構ＳＸ564上面－南西より
図版76　１．５区炭化物堆積土坑ＳＸ5367断面－北より
２．５区炭化物堆積土坑ＳＸ5367完掘状況－北より
３．５区炭化物・焼土堆積土坑ＳＸ5459断面－東より
４．５区焼土面遺構ＳＸ557

５．５区炭化物・焼土堆積土坑ＳＸ555検出状況－南より
６．５区炭化物面遺構ＳＸ566上面で検出された蓆状の植物遺体
７．５区溝状遺構ＳＤ5290上面で検出されたヨシの敷かれたもの
８．５区炭化物堆積土坑ＳＸ558完掘状況－南より
９．５区炭化物堆積土坑ＳＸ559完掘状況－北西より
図版77　５区台状遺構群全景空中写真
図版78　１．５区台状遺構群検出状況全景－西より
２．５区台状遺構群検出状況全景－北より
３．５区台状遺構群検出状況全景－北東より
図版79　１．５区台状遺構群腐植質暗茶褐色粘土層上面検出状況－北西より
２．５区台状遺構群腐植質暗茶褐色粘土層上面検出状況－西より
図版80　１．５区台状遺構群腐植質暗茶褐色粘土層上面検出状況－東より
２．5区台状遺構（ＳＸ551）腐植質暗茶褐色粘土層上面検出状況－北より
３．５区台状遺構（ＳＸ551）腐植質暗茶褐色粘土層上面検出状況－北西より
図版81　１．５区台状遺構群を覆う土層（南壁東部）－北より
２．５区台状遺構群を覆う土層（南壁中部）－北より
３．５区台状遺構群を覆う土層（南壁東端部）－北より
４．５区台状遺構群を覆うＣ層群（南壁中部）から検出された舟釘－北より
図版82　１．５区台状遺構群北側裾部の浅い溝状遺構ＳＤ5461断面（7トレンチ）－東より
２．５区ＳＤ5461断面（20トレンチ）－東より
３．５区ＳＤ5461断面（８トレンチ）－東より
図版83　５区台状遺構ＳＸ510上部の腐植質暗茶褐色粘土層から検出された土器群（西斜面南部）
図版84　５区台状遺構ＳＸ510上部の腐植質暗茶褐色粘土層から検出された土器群（西斜面北部）
図版85　５区台状遺構ＳＸ510上部の腐植質暗茶褐色粘土層から検出された土器群（北斜面）
図版86　５区台状遺構ＳＸ510上部の腐植質暗茶褐色粘土層から検出された土器群の空中写真（東斜面）
図版87　１．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群全景－北西より
２．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群南端部付近（近接）－西より
３．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群南部付近（近接）－西より
図版88　１．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群南半部－北より
２．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西・北斜面土器群－西より
３．５区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群北西部（近接）－西より

図版89　1．5区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群（近接）
2．5区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群（さらに近接）
3．5区台状遺構ＳＸ510上部北西斜面出土土器（小型壺）
4．5区台状遺構ＳＸ510上部北西斜面出土土器（壺）
図版90　1．5区台状遺構ＳＸ510上部出土東斜面土器群－北東より
2．5区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群（近接）－南より
3．5区台状遺構ＳＸ510上部出土西斜面土器群（近接）
図版91　1．5区台状遺構ＳＸ510上部西斜面の土器群の包含層に根を張る立木
2．5区台状遺構ＳＸ510上部西斜面土器群（器台）出土状況
3．5区台状遺構ＳＸ510上部西斜面土器群（器台）出土状況
4．5区台状遺構ＳＸ510上部西斜面土器群（土器群包含層の最下部の状況）
図版92　1．5区台状遺構ＳＸ510上部土器群全景－北東より
2．5区台状遺構ＳＸ510上部土器群全景－北西より
3．5区台状遺構ＳＸ510上部土器群全景（近接）－北西より
図版93　5区台状遺構ＳＸ510上面（5区西半部）と水田関連遺構（5区東部）
図版94　1．5区東半部水田関連遺構完掘状況－西より
2．5区東半部水田関連遺構完掘状況－北東より
3．5区東半部水田関連遺構完掘状況－南より
図版95　1．5区東半部溝状遺構群－東より
2．5区東半部（南部）溝状遺構群と大畦畔ＳＫ518－西より
3．5区東半部（北部）溝状遺構群－西より
4．5区東半部（北部）土坑ＳＸ523土器出土状況－北より
図版96　1．5区東半部溝ＳＤ513と大畦畔ＳＫ518－西より
2．5区東半部大畦畔ＳＫ518の杭列縦断面－南より
3．5区東半部炭化物散布遺構ＳＸ521検出状況－西より
図版97　1．5区西半部大畦畔ＳＫ5140北西端部断面－北西より
2．5区西半部大畦畔ＳＫ5140北西端部盛土除去状況－東より
3．5区西半部大畦畔ＳＫ505・553・552・5464交差部分－東より
4．5区西半部大畦畔ＳＫ505縦断面－南より
図版98　1．5区東半部溝ＳＤ514断面－北より
2．5区東半部溝ＳＤ524・525断面切り合い状況－東より
3．5区東半部溝ＳＤ513東端部断面－西より
4．5区東半部土坑ＳＸ5451断面－北より
5．5区東半部土坑ＳＸ5453断面－北より
図版99　1．5区溝ＳＤ5270－西より

２．５区大畦畔ＳＫ5053縦断面－西より
３．５区杭列ＳＡ5271と溝ＳＤ5436断面－西より
４．５区杭列ＳＡ5271と溝ＳＤ5437断面－西より

図版100　１．５区東半部南部の立木－北より
２．５区溝ＳＤ513断面－東より
３．５区溝ＳＤ5270断面肩部（近接）－西より
４．５区溝ＳＤ5221断面－北より

図版101　１．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114－南より
２．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114－北より
３．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114－西より

図版102　１．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114（近接）－南より
２．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114（近接）－北より
３．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114（近接）－西より
４．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114（近接）－東より

図版103　１．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114出土横槌（W1171）
２．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114出土竪杵（W1169）
３．５区溝状低地ＳＸ5110出土槽（W832）
４．５区大畦畔（堰状遺構）ＳＸ5114出土ミニチュア梯子（W1102）
５．５区溝状低地ＳＸ5110出土ホゾ材（W500）
６．５区溝状低地ＳＸ5110出土腰掛け（W019）
７．５区溝状遺構ＳＸ5248出土四角器（W1627）
８．５区溝状低地ＳＸ5110出土楕円形容器（W1165）

図版104　１．５区溝状遺構ＳＸ5248出土楕円形容器（W1185）
２．５区溝状遺構ＳＸ5248出土楕円形容器（W108）
３．５区溝状遺構ＳＸ5248出土楕円形容器（W1634）
４．５区溝状低地ＳＸ5110出土木製高杯（W550）
５．５区溝状低地ＳＸ5110出土鍬（W737）
６．５区溝状低地ＳＸ5110出土鍬（W581）
７．５区溝状遺構ＳＸ5108出土鍬（W360）
８．５区溝状低地ＳＸ5110出土鍬（W345）

図版105　１．５区溝状低地ＳＸ5503出土鏡（M003）
２．５区溝状低地ＳＸ5503出土鏡（M003）検出状況
３．５区溝状遺構ＳＸ5110出土建築材（W051）
４．５区溝状遺構ＳＸ5135-2出土建築材（W222）
５．５区溝状遺構ＳＤ5220出土壺（Ｐ5680）

６．５区溝状遺構ＳＤ5220出土壺（Ｐ5648）
７．５区溝状低地ＳＸ5110出土壺（Ｐ1958）
図版106　１．５区溝状遺構ＳＤ570土器出土状況（Ｐ5140）
２．５区台石（Ｓ037）出土状況
３．５区摺り石（Ｓ093）出土状況
４．５区溝状遺構ＳＸ5108出土有頭石錘（Ｓ173）
５．５区砥石（Ｓ092）出土状況
図版107　５区出土土器（１）
図版108　５区出土土器（２）
図版109　５区出土土器（３）
図版110　５区出土土器（４）
図版111　５区出土土器（５）
図版112　５区出土土器（６）
図版113　５区出土木製品（１）農具１
図版114　５区出土木製品（２）農具２
図版115　５区出土木製品（３）農具３
図版116　５区出土木製品（４）農具４
図版117　５区出土木製品（５）建築材１
図版118　５区出土木製品（６）建築材２
図版119　５区出土木製品（７）建築材３
図版120　５区出土木製品（８）
図版121　５区出土木製品（９）容器１
図版122　５区出土木製品（10）容器２
図版123　５区出土礎板接合状況
図版124　１．６区調査区全景空中写真
２．６区水田検出状況（表土除去後）
図版125　１．６区弥生中期遺物集中箇所
２．６区土器Ｐ1206出土状況
３．６区木製品W740出土状況
４．６区土器Ｐ1214・Ｐ1215出土状況
５．６区土器Ｐ1215出土状況
図版126　１．６区ＳＲ601（古）遺物出土状況
２．６区木製品W674・W675出土状況
３．６区木製品W016出土状況
４．６区木製品W563出土状況

5．6区木製品W565出土状況
図版127　1．6区舟形木製品W566出土状況
2．6区舟形木製品W682出土状況
3．6区舟形木製品W688出土状況
図版128　1．6区鋤W322出土状況
2．6区三本鍬W290出土状況
3．6区田下駄W705出土状況
4．6区木製品W057出土状況
5．6区木製品W091出土状況
図版129　1．6区鹿角B81出土状況
2．6区釣針出土状況
3．6区下顎骨出土状況
4．6区鹿角出土状況
5．6区鉄斧M002出土状況
6．6区炭化米出土状況
図版130　1．6区SD627全景
2．6区SD627土器出土状況
3．6区SD627土器出土状況
図版131　1．6区SF639土器出土状況
2．6区SF639全景
3．6区SF630全景
図版132　6区水田畦畔全景－東より
図版133　1．6区SK621断面
2．6区SK631断面
3．6区SK629断面
図版134　1．6区SK621土器出土状況
2．6区SK621鋤W659出土状況
3．6区SK621未製品W560出土状況
図版135　1．6区SK634検出状況
2．6区SK634横板と杭の関係
3．6区SK634杭の組み合せ状況
図版136　1．6区SK631全景
2．6区SK631転用された梯子
3．6区SK631北側東西杭列
図版137　1．6区SK622内ト骨B22出土状況

２．６区卜骨Ｂ34出土状況
３．６区卜骨Ｂ30出土状況
４．６区Ｙ字形把頭Ｂ78出土状況
５．６区卜骨Ｂ36出土状況
図版138　１．６区掘立柱建物跡ＳＨ642～ＳＨ644全景
２．６区掘立柱建物跡ＳＨ642～ＳＨ644重複関係
図版139　１．６区微高地全景－西より
２．６区溝状遺構ＳＤ613全景
３．６区小穴ＳＰ606全景
図版140　１．６区柱穴群全景
２．６区柱穴ＳＰ608全景
３．６区柱穴ＳＰ615全景
図版141　１．６区ＳＸ626全景
２．６区ＳＫ629杭列
３．６区ＳＸ626土器出土状況
４．６区ＳＸ625全景
５．６区杭列ＳＡ609全景
図版142　１．６区ＳＤ610（新）全景
２．６区ＳＤ610（新）土器出土状況
３．６区ＳＤ610（新）土器出土状況
図版143　１．６区ＳＸ602第１群土器出土状況
２．６区ＳＸ602第２群土器出土状況Ｐ89
３．６区ＳＸ602第３群土器出土状況
図版144　１．６区ＳＸ602第４群土器出土状況
２．６区ＳＸ602第５群土器出土状況
３．６区ＳＸ602第６群土器出土状況
図版145　１．６区ＳＸ603全景
２．６区ＳＸ603土器出土状況
図版146　６区出土土器（１）弥生中期土器
図版147　６区出土土器（２）
図版148　６区出土土器（３）
図版149　６区出土土器（４）
図版150　６区出土土器（５）
図版151　６区出土土器（６）
図版152　６区出土土器（７）

図版153　6区出土土器（8）
図版154　6区出土木製品（1）弥生中期
図版155　6区出土木製品（2）農具1
図版156　6区出土木製品（3）農具2
図版157　6区出土木製品（4）農具3
図版158　6区出土木製品（5）梯子
図版159　6区出土木製品（6）ネズミ返し
図版160　6区出土木製品（7）
図版161　6区出土木製品（8）舟1
図版162　6区出土木製品（9）舟2
図版163　6区出土木製品（10）容器1
図版164　6区出土木製品（11）容器2
図版165　6区出土木製品（12）容器3
図版166　6区出土木製品（13）容器4
図版167　6区出土木製品（14）容器5
図版168　6区出土木製品（15）
図版169　6区出土木製品（16）
図版170　6区出土木製品（17）
図版171　6区出土石器・つり針・Y字形把頭

第Ⅰ章　土　層

長崎遺跡の基本的な層序は、１～３区について報告した『長崎遺跡Ⅰ』と同じであるので、基本土層の詳細については、本報告書では割愛する。基本的な層序の概略は第１表に記したとおりであるが、４～６区の土層の共通事項と各区の特色について述べたい。

第１節　４～６区の土層の概要

長崎遺跡は、北側の庵原山地と南側の有度丘陵の間を東西方向に流れる巴川の流域の巴川低地に立地している。庵原山地が急傾斜で、沈降性なのに対して、有度丘陵は隆起性の地盤運動を約10万年前から継続し、遺跡の立地する巴川低地は沈降域に入っている。地盤の傾斜について述べると、南北方向では、調査範囲が狭いので、判然とはしないが、やや北が下がる傾斜を示している。これは現在の巴川が調査区の北側を流れていることとも整合している。これに対して、東西方向については、800ｍほどの連続トレンチでの観察ができた。調査区の中央部である３区西部と４区東部が最も高く、調査区の東西分水嶺となっている。東側では１－２区、西側では６区中央部が最も低くなっている。この傾向は縄文晩期のカワゴ平軽石層から、水田耕作が行われていた昭和40年代まで、基本的には同じである。この背景には、調査区の中央部の深部に庵原山地から派生する埋没山脈が南北方向に通っているためと考えられる。ただし、既報のように分水嶺の東側では、２区で西高東低の傾斜が断層運動によって分断されているが、西側では、断層運動による段差線は発見できなかった。古墳時代前期の水田面であるＤⅡ層上面での比高差は、分水嶺付近と東西の最低所付近とで約１ｍである。

次に、主要な土層・遺構・時代についてのべたい。

弥生中期後半と推定できる当遺跡の最初の水田が営まれたのは、Ｅ層群最上部の黒色粘土層であり、この黒色粘土層は、縄文晩期のカワゴ平軽石層・大沢スコリア層を包含する泥炭層が次第に陸化した過程で形成されたものである。ただし、黒色粘土層それ自体が水田作土となったのではなく、その上面を覆った灰色の洪水堆積土を含めて攪拌され、作土（ＤⅢ層）となった様子が、全調査区で観察できた。しかも、この洪水堆積土をもたらしたと考えられる、弥生中期後半の遺物が覆土から出土する小河道が１区、３区、６区で検出されている。時期比定のできる土器の出土はないものの同期と推定できる小河道は４区？からも検出されている。ただし、同期の水田遺構として、この小河道に設置された堰状遺構と付属する導水路を伴う杭打畦畔が検出されたのは３－３区のみであり、プラント・オパール分析では、水田の可能性を指摘できる数値は得られているが、他の調査区では、同層に対応する明瞭な畦畔・水路は検出できなかった。この原因として、ＤⅢ層期の弥生中期後半から、水田が廃絶される古墳前期まで、基本的には杭列大畦畔の位置が踏襲されること、さらにＤⅢ層期の盛土畦畔としての小区画の手畦が、ＤⅡ－２層の耕作によって多くが破壊されたこと等が考えられる。杭列大畦畔の起伏が明瞭に観察できたのはＤⅡ層水田もしくはＤⅡ－２層水田である。１－３区のＤⅡ－２層水田からは２時期の小区画水田が検出されている。しかし、既報の３－２区・３－３区のように、また、今回報告する６区のように杭列大畦畔でも、若干の打直しがみられる。さらに、ＤⅡ層上面または、同層をほぼ均一に覆う泥炭層

（ＤＩ層）の上面での水準測量の結果、既報の２区のように、ＤⅡ層上部（ＤⅡ－１層）で、杭列大畦畔から盛土大畦畔への大きな移行が見られたり、３－２区、３－３区でも下層の杭列大畦畔とは異なる位置に盛土大畦畔の検出をすることができた。今回報告する５区でも同様の成果を得ることができ、したがって、最終段階の古墳前期の水田は湿田が、やや乾燥の方向に向う傾向を示していたと考えられる。

このことは、全調査区のＤⅡ－２層下部で、炭酸鉄結核が検出されたこと、またＤⅢ層やＤⅡ－２層下部ではヨシのプラント・オパールが多く検出されたのに対して、ＤⅡ層上部（ＤⅡ－１層）では、３－３区のように乾燥地を好む珪藻が検出されたり、２区のようにタケのプラント・オパールが多く検出されることでもわかる。ただし、当初のＤⅢ層水田（３－３区）でも堰と導水路を備えた湿田であることに注意したい。堰や導水路を備えた埋没水田は乾田であるという通念があるようだが、この３－３区の事例は、この通念が誤りであることを示していると考えられる。

なお、ＤⅡ－１層の上部は、水田廃絶期の湿地化が顕著であるため、再びヨシのプラント・オパールが多く検出されている。

この弥生中期後半から古墳前期までの水田遺構は全調査区で、検出されているが、今回報告する４～６区では、それぞれの調査区の南部から微高地部分が検出され、ここに居住域・墓域が検出されている。これは、既報の１～３区とは、大きく異なる点である。これらの微高地は、いずれも東西性の方向を持ち、草薙川の自然堤防の末端部分の北西側斜面と考えられる（『長崎遺跡Ｉ』第Ⅱ章第１節位置参照）。いずれの微高地でも弥生後期～古墳前期の掘立柱建物跡が検出されている。また、５区では、この掘立柱建物跡地の上に整地がなされ台状遺構が検出されている。

しかし、これらの居住域・台状遺構と水田域の全てが、古墳前期の泥炭層に被覆され、さらに、洪水堆積物のラミナが顕著に観察できる厚さ約１ｍの粘土層（Ｃ層群）、さらにその上に厚さ約70～80㎝の砂礫層（Ｂ層群）によって覆われている。再び、当地が開発されるのは、Ｂ層群上部に堆積した粘土層（Ａ層群）が耕作される時期である。Ａ層群の遺構は、全調査区に及んでいる近代の大規模な瓦粘土採掘のための攪乱によって殆どが破壊され、明瞭な遺構を検出することができなかった。既報では、３－１区の、調査区南壁で、溝もしくは小穴の検出、３－３区で、杭列の検出を報告するのみであったが、今回は４区から鎌倉時代の遺物を包含する河道と橋脚がＡ層群から検出され、少なくとも同区では、鎌倉時代には再開発がなされていることがわかった。また、明治期の地籍図を検討すると、長崎遺跡を含む巴川低地全体にＮ38～39°Ｗの表層条里型地割が確認できる。これは、2000ヶ坪以上に及ぶ静清平野広域条里型地割の一部分を構成している。現在、静岡平野北部の池ヶ谷遺跡・瀬名遺跡では、平安前期のＮ38～39°Ｗの埋没条里型地割が、表層条里型地割のほぼ直下で発見されており（瀬名遺跡）、瓦粘土採掘のための攪乱が少なければ、長崎遺跡でも埋没条里型地割が発見できた可能性は十分考えられる。少なくとも、中世段階では存在していたと思われる。

なお、『長崎遺跡Ｉ』（以下既報と略す）で、２区大段差部分ＳＸ229での、Ｆ層群以上Ｂ層群下部までの撓曲現象についての記述の中で、説明が不足していた部分についてここで補説したい。この段差はＩ層群の堆積がほぼ完了した段階で生起こしたものであるが、この成因として、縄文河道ＳＫ240の河道浸食による微高地部分の崩落現象がまずあって、次にその崩落部分から東側の河道部分の低地に泥炭が堆

積し、この泥炭が圧密沈下して前述の撓曲現象が生じたとする説に対して、この河道浸食による微高部分の崩落箇所のような形状と考えられたものは、実は地震に伴う断層崖の断面ではないかという説を既報ではいくつかの根拠をあげて述べた。そして、この断層崖の断面形態が複数回の断層運動（地震）によって形成されたものと考え、不整合が観察できたＢ層下部堆積期とＦ層上部の泥炭層堆積期、さらに縄文河道形成期の３回の断層運動が確認できそうだとした。さらに、Ｆ層上部の泥炭層堆積期に形成されていた段差の低地部分には泥炭層が厚く堆積して、かろうじてＤ層水田期にはほぼ、段差は解消されていた。ところが、これがＢ層下部堆積期の断層運動によって生じたＦ層群以上Ｂ層群下部までの撓曲現象によって再び段差となったと考えられる、前回は断層崖としての段差であり、今回は撓曲としての段差である。この撓曲としての段差が形成された機構を考えると、起因としては断層運動であるとしても、この断層運動によって惹起されたと考えられる、厚く堆積していた泥炭層（前回の断層崖下に堆積していた泥炭層）の脱水による圧縮現象（圧密）も重要な要因であると推定できる。既報では、「河川活動による崩落現象説」を「泥炭層の圧密沈下説」と同列に置いて、その問題点を述べている書き方をしていると誤解されがちな表現があったので、今回上記の様に、補説しておく。

また、この２区の断層崖の形態は、明瞭な正断層であり、北西部分が南東部分に対して下がっている。ところが、既報では、２区の断層崖の形態は当地域の「富士川層群に一般的にみられる北西から南東に向って衝上する例とは、くいちがいを見せている」としながらも、「断層線のねじれを考えれば、北西側が南東側にのしあがる、当層群に一般的な蝶番断層又は衝動断層の一種として考えてもよい」とし、蔵田延男他（1956）が予想した衝動断層（逆断層）の一部に該当するのではないかと考え、「大断層の成因として考えた断層運動（逆断層）」という表現をしている。しかし、大局としては、逆断層運動の一部とすれば、２区の大段差は、その「ねじれ」部分であって、主要部とは断層運動の形状が「くいちがいを見せている」と、既報ではこの段差の形状それ自体は、逆断層とは異なっていることを述べている。ところが、「大断層の成因として考えた断層運動（逆断層）」という表現をしているので、これが大局としての断層運動を述べているにもかかわらず、２区の大段差の形状について述べたものと誤解されるような表現であったので、上記の様に補説をしておく。

第２節　４区の土層の特色

４区では、弥生後期と考えられる河道（ＳＲ429）が埋積された後に、杭列を伴う水田畦畔が築かれている。また、南東部にある微高地と北側の水田域の境界を流れる古墳前期の遺物が多量に投棄されていた河道（ＳＲ440）は、幾度か氾濫して河道岸にある水田や微高地の掘立柱建物の立つ居住域を破壊して流れ、幾重にも護岸杭が構築されている。この区でも、泥炭層（ＤＩ層）が全域を被覆することによって、人間の活動が一旦、見られなくなるが、Ｂ層群上面から切り込まれた、鎌倉時代の遺物を包含する河道（ＳＲ401）と橋等が検出されており、全調査区の中では、同時代の唯一の遺構群を構成している。しかし、この河道の初現については、後述の第Ｖ章第１節でのべるように、古墳前期にまで遡る可能性も考えられるが、本報告書で指摘した馬埋葬遺構に関連する河道部分の堆積物には、鎌倉時代の遺物が卓越しており、同時代の流路と考えてさしつかえないと思われる。

なお、この河道は、断面観察では、岸部も河道内覆土部分もともに削平され、上層に堆積するA層群の粘土層とは、明瞭な不整合を形成している。この不整合面の高さよりも上位の高さに位置していたと考えられる橋脚部分の上端部は、削平によって破壊されたと考えられる。A層群の粘土層には、自然堆積の状況を示すラミナが全く観察できず、洪水堆積物があったとしても、よく淘汰されている。しかも、イネの細根とも考えられる縦根が観察でき、耕作の結果の可能性が高い。したがって、不整合の原因も耕作によるものと考えられる。A層群は、単にB層群の上面を被覆しているのではなく、それまでの地形の起伏を削平していることが明瞭に観察できたのも、この区の特色である。

第3節　5区の土層の特色

5区は、北東部分の低地と南西部分の微高地とに大別できる。低地での層序は、他の区と同様である。DⅡ－1層に根を張った立木が低地で検出されている。同様の事例は4区の東半部でもみられた。ただ、立木の場合、地上部分地下部分の境目が判然としないが、両区とも、水田作土層中に根が張り、畦畔や水路を突き刺しているので、水田耕作が廃絶した後の湿地期のものと考えられる。この低地からは、多くの錯綜する溝状遺構群が検出されている。これは4区の西半部と共通している。5区では、DⅠ層上面の等高線図を作成したところ、それらのいくつかはDⅡ－1層の小区画水田の畦畔盛土用に掘られた溝や用排水路と推定できた。その他は、さらに下位の水田に属するものと考えられる。しかし、このような、水田に付属する溝状遺構群が多く検出されるのは、3－2区、3－3区、4区西半部、5区東半部であり、その他の区では、多くは検出されていない。これらの区に共通する立地環境は、付近に比べてやや高いことや、大畦畔の護岸杭が比較的少ないことがあげられるが、それが多くの溝状遺構群とどう結びつくのかは、今後の検討課題である。

5区の南西部分の微高地でも低地の水田層位に対応する層位が検出されている。土色も極めて類似しており、ラミナも観察されない。しかし、黒色粘土上面に攪拌された痕跡は観察できず、DⅢ層・DⅡ層対応の土層もよく淘汰されているが、耕起の際にみられる粘土ブロックの混入や、水田雑草の縦根はほとんど見られず、自然堆積のようである。また水田域のDⅢ層・DⅡ層と比べると、それぞれ粒度組成が粗くシルト質である。しかも、プラント・オパール分析では、イネの数値は極めて低い。だが、4区東半部でも観察できたことであるが、黒色粘土層や縄文晩期の火山灰包含泥炭層のレベルは、水田域のそれらの層位のレベルよりも高くはないのである。むしろ、低くなっている。5区では、台状遺構の盛土の形状に対応するかのように、台状の高まり部分では、黒色粘土上面レベルは低く（10数m離れた水田域の同層との比高差は約40cm）、台状部の裾部では高くなっている。シルト質の自然堤防堆積物の下部の形状が凹型となっている問題については、これも後述の第Ⅴ章第1節でふれたい。

5区南西部分では、それ以外の部分に比べて黒色粘土層より上位のDⅢ層対応堆積物が、シルト質であり、水田作土としての耕起をうけていない自然堆積層であるだけでなく、DⅢ対応層の上面は整地・盛土（暗灰色粘土層の整地層）され、掘立柱建物群の設置地域となり、その後再び整地され、炭化物・焼土によって部分的に覆われる時期を経て、台状遺構の盛土（黄褐色・灰色粘土層）がなされている。これらはすべて人為的な堆積物である。この台状遺構の盛土の上面には、暗茶褐色の粘土層が厚さ10数

cmも覆っている。この堆積物にはラミナは観察されていない。さらに、土色は多量の腐植の含有を示している。その上、この層から出土した夥しい土器群の表面には、草の繊維の痕跡が残っているものが多かった。そこで、この層は、盛土層上面に草木が繁茂する状況の中で、多くの土器片の散布が行われつつ形成されたものと考えられる。この暗茶褐色粘土層の上面には、多くの凹があり、その内部に、C層群の灰色粘土が入いっていたので、容易に観察できた。それらは、高い部分に向って放射状に並び、形状・大きさは人間の足跡と類似していた。5区南西部分では、以上のような各種の性格の堆積物が積み重なっているが、それ以外の部分では、水田作土となったDⅢ層上面にDⅡ層が堆積し、それが水田作土となっている。これらの堆積物の上に、5区全域でDⅠ層の泥炭が層厚約数cmで堆積し、5区南西部分の微高地部分には、その裾部にのみ堆積している。低地での滞水と湿原の形成から、微高地部分の多くが免れたためと考えられる。このDⅠ層は、土色では、微高地上部に全域を覆っている暗茶褐色粘土層と類似しているが、水成植物の遺体と粘土層とのこまかな互層からなる点で、容易に判別が可能であった。

5区でも水田域・台状遺構共にC層群、さらにB層群によって被覆されている。それぞれラミナが明瞭である。各洪水堆積の状況を示し、微高地を被覆する際には、ラミナの間隔は薄くなり、低地・凹地を被覆する際には、ラミナの間隔は厚くなっている。また、A層群の堆積の際に、4区と同様に、不整合がみられ、平坦に削平されたものと考えられる。

第4節　6区の土層の特色

6区には、弥生中期後半以降、大規模な河川浸食が現代までくりかえされている。最初の河道SR601（古）は弥生中期後半のものであるが、この河道が埋積され、そこに厳重に護岸された大畦畔が築かれている。全調査区で最も厳重である。旧河道の河床を被覆する粘土層そのものが作土となったため、著しい湿田であり、軟弱地盤ゆえのものと推定できる。この水田は、杭打畦畔の分析から、複数の作り替えが推定されている。しかし、この弥生後期～古墳前期の水田は、古墳前期の侵食と氾濫を伴い河道SR601（新）が形成され、それによって破壊され、さらに泥炭層（DⅠ層）によって覆われる。また、これらの河道の岸部分には微高地が存在し、弥生後期～古墳前期の掘立柱建物群や土器集中箇所が検出されている。ただし、6区の微高地部分の土層についての、詳細な検討や他の調査区の土層との比較検討は今後の課題である。6区も、他の区と同様にC層群・B層群が堆積し、さらにA層群の再開発期となっている。ところが、A層群の中間から、大規模な砂礫堆積の河道SR601（新）が検出され、低地部分を主に流れ、下刻は約3mに及んでいる。この堆積砂礫を検討された静大名誉教授の加藤芳朗博士は、有度丘陵を浸食する草薙川系の礫とされている。また、このSR601（新）とは別の河道をもつ近代の改修以前の巴川が低地を浅く浸食して流れていたものと考えられる。当区の調査では、この旧巴川とSR601（新）の判別は検討課題の一つである。

第１表　基本層序一覧表

層群	年代観	土層番号	各土層と特色	標高(m)	層厚(cm)	遺構および遺物	¹⁴C Y.B.P
A層群	中世～近現代	30～32	・褐灰色粘土層（表土）・灰色粘土層　水田耕作土・管鉄発達	3.87	42	橋状遺構（４区）、土坑・列（３区）、馬埋葬遺構（４区）、陶器・瓦	
B層群上部	古代	33・34	・灰色砂層・灰褐色砂層（砂と粘土の互層）　河川氾濫堆積層・ラミナ発達	3.45	22	← ２区の南壁・北壁で不整合が観察できた。	
B層群下部	古代	35～38	・青灰色砂層（砂と粘土の互層）　河川氾濫堆積層・ラミナ発達	3.23	68		
C層群上部	古代	39	・青灰色粘土層（粘土と砂の互層）　河川氾濫堆積層	2.55	35	舟釘（５区）	
C層群下部	古墳時代中期	40	・灰青色粘土層（粘土とシルト・泥炭の互層）　ラミナ発達	2.20	15	土器集中箇所（１－２区）河道	
D層群	（泥炭層）	1	・ＤＩ層　暗茶褐色泥炭層　自然堆積層・ラミナ状	2.05	5	河道	← 泥炭（３－２区）1,700±90（NUTA－676）
	古墳時代前期	2	・ＤＩＩ－１層　灰褐色粘土層	2.00	23	← 水田面 溝・堰・台状遺構（５区）・Ｓ字甕	
	弥生時代後期	3	・ＤＩＩ－２層　明灰褐色粘土層　（粘土層）　水田耕作土	1.77	7	← 水田面 掘立柱建物群（５区）・弥生後期土器	
	弥生時代中期	4	・ＤＩＩＩ層　黒灰色粘土層	1.70	14	← 水田面 河道・堰・溝・弥生中期土器	
E層群	（泥炭層）	5	・黒色粘土層（泥炭層上面が分解し粘質化、黒泥）	1.56	13		
	（泥炭層）	6	・黒褐色泥炭層（大沢スコリアと類似した火山灰〔スコリア〕層を含む）　自然堆積層	1.43	7		
	縄文時代晩期（泥炭層）	7	・暗茶褐色泥炭層（2700年前の大沢スコリア〔Os〕と2900年前のカワゴ平軽石〔Kgp〕を含む）　自然堆積層	1.36	12		
				1.24			

4区南壁法面土層

①盛土
②暗茶色粘土層〔水田耕作土〕　A層群
③黄褐色粘土層〔溝覆土〕
④淡黄褐色粘土層
⑤褐色砂層　A層群とB層群の過渡期
⑥褐灰色砂層
⑦暗青灰色粘土層
⑧淡褐灰色粘土層
⑨褐灰色粘土層　B層群上部
⑩淡灰褐色粘土層
⑪青灰色または淡灰色粘土層
⑫青灰色または暗褐灰色砂層
⑬灰白色粘土層
⑭黒灰色砂層　B層群下部
⑮暗灰褐色砂層
⑯灰色砂層
⑰青灰色粘土層
⑱黒褐灰色砂層
⑲褐灰色砂層

4区南壁土層名

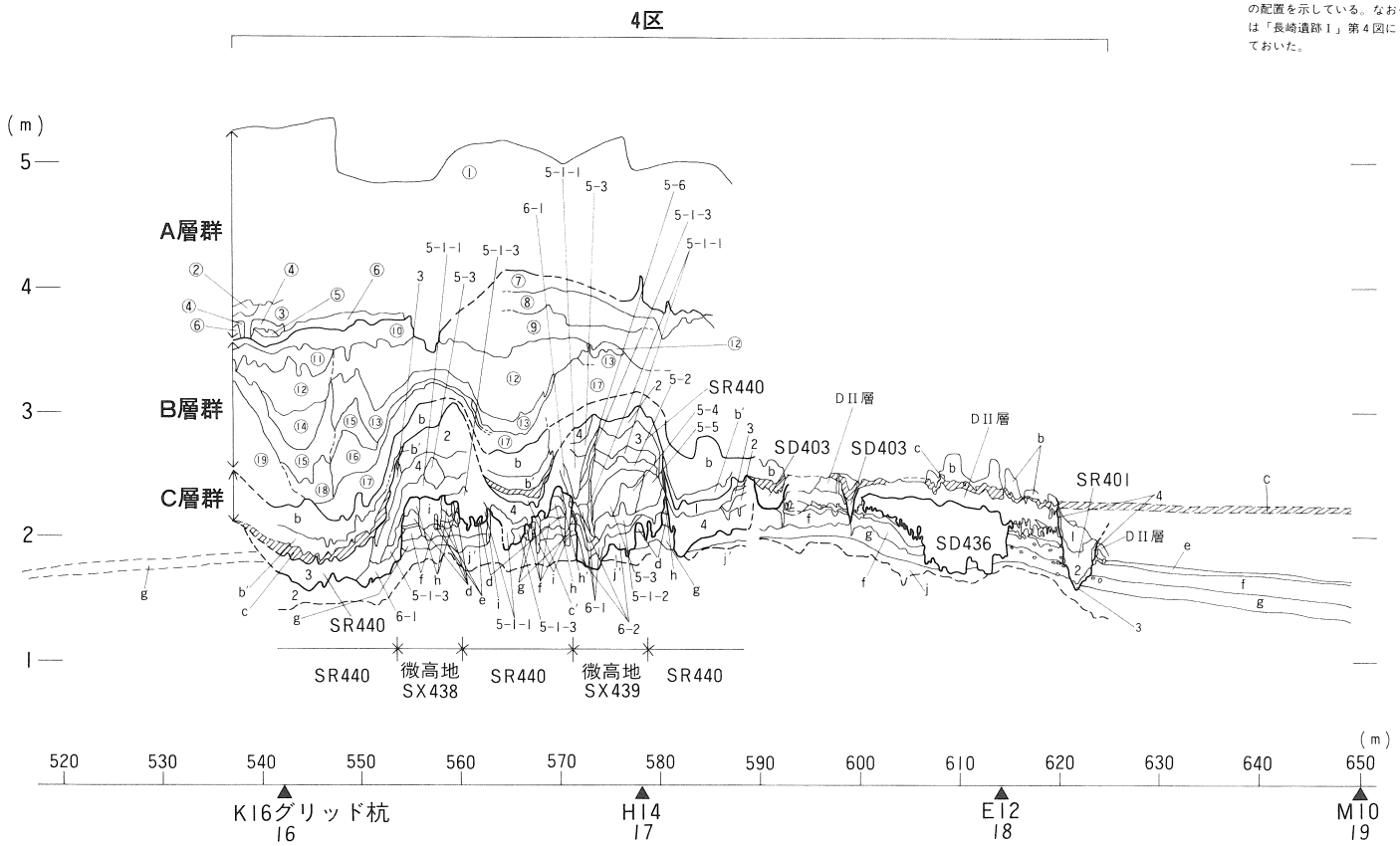
基本土層
- a　Ｂ層
- b　Ｃ層
- b′　Ｃ層下部
- c　ＤＩ層
- c′　ＤＩ層類似
- d　黒色粘土層
- e　緑白色粘土層
- f　黒褐色泥炭層（Os類似を含む）
- g　暗茶褐色泥炭層（Os, Kgpを含む）
- h　緑灰褐色粘土層〔微高地を形成〕
- h′　淡緑灰褐色粘土層
- i　灰色粘土層（黒・白色粘土粒子混じる）〔柱穴覆土〕
- j　暗茶灰色砂礫層
- j′　暗茶灰色粘土層（砂礫混じる）

SR440堆積土
- 1　暗茶色腐植土層
- 2　茶灰色粘土層（炭化物を含む）
- 3　茶灰褐色粘土層（腐植、黒・白色粘土ブロックを含む）
- 4　茶褐色粘土層（黒・白色粘土混じる）
- 5-1-1　淡緑灰褐色粘土層（黒・白色粘土多く混じる）
- 5-1-2　淡緑灰褐色粘土層（腐植を含む）
- 5-1-3　淡緑灰褐色粘土層（黒・白色粘土粒子混じる。5-1-1層より緑白色強い）
- 5-2　暗灰褐色粘土層（黒・白色粘土ブロックを多く含む）
- 5-3　灰褐色粘土層（黒・白色粘土粒子混じる）
- 5-4　灰色粘土層
- 5-5　淡明灰褐色粘土層（黒・白色粘土粒子混じる）
- 5-6　黒褐色砂層
- 6-1　暗茶褐色粘土層（腐植を多く含む）
- 6-2　暗灰色粘土層（黒色粘土粒子多く混じる）

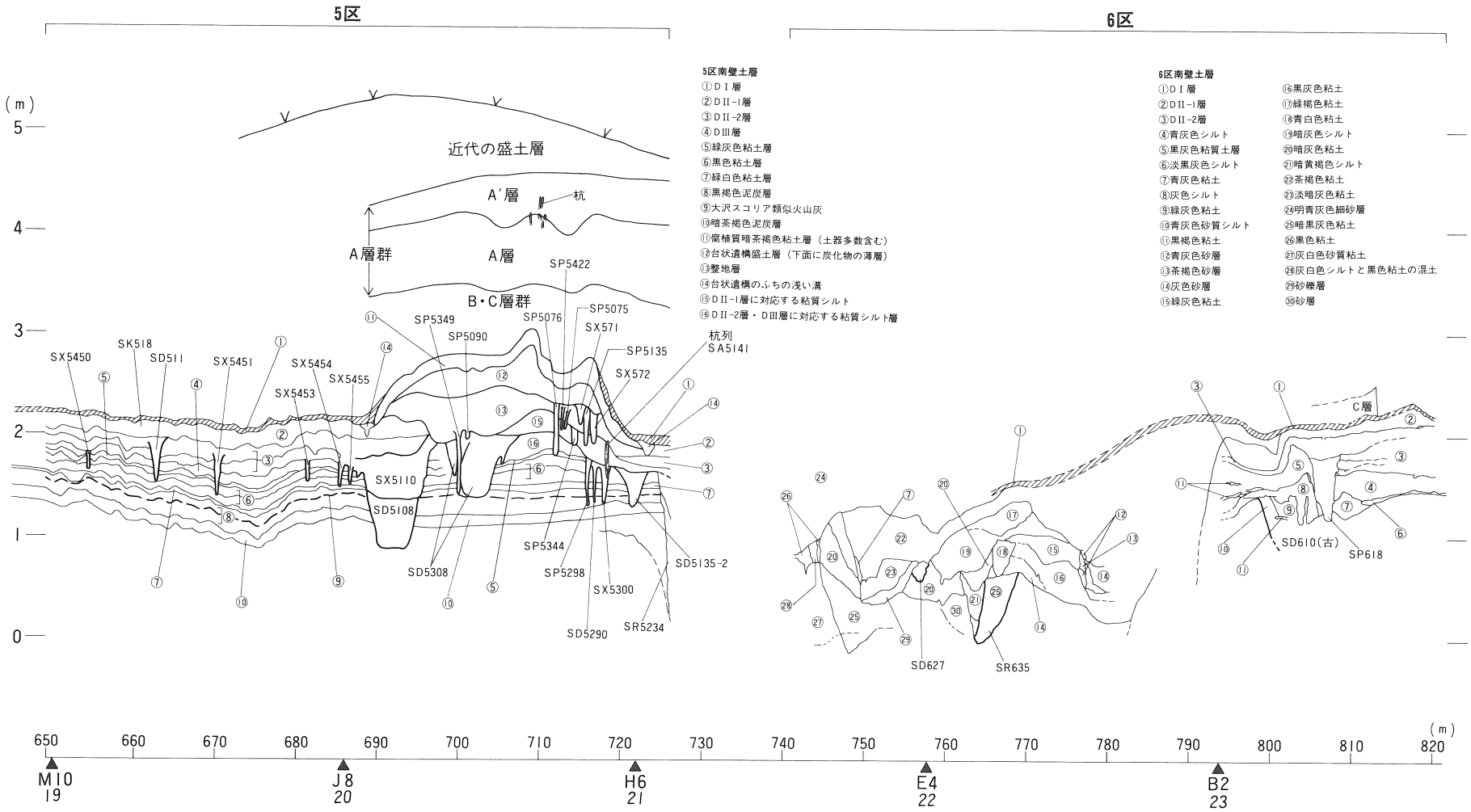
SR401覆土
- 1.青灰色粘土
- 2.暗青灰色シルト
- 3.暗青灰色シルト（木片、有機物等を多く含む）
- 4.暗青灰色粘土（白色粘土粒子がうず巻き状になっている）

SD436覆土
（暗灰色粘土、3－5cm大の黒色粘土ブロックを含む）

※第１・２図の斜字体の数字は調査区東端部付近から西端部にかけての標準用グリッド杭（K16グリッド杭等）の配置を示している。なおその位置は「長崎遺跡Ⅰ」第４図にも明示しておいた。



第１図　各区南壁土層図（１）４区



第2図　各区南壁土層図（2）5・6区

第II章　4区の遺構と遺物

第1節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構

4区の最下層の遺構は、全域にわたって数多く検出された溝状遺構やそれに伴うと考えられる杭列、北よりを蛇行するＳＲ429・469、唯一の畦畔ＳＫ494などで、それらは概ね黒色粘土層上面で検出され、弥生時代後期と推定される。次に若干時間が経過して、溝状遺構等が埋まってゆく過程でＳＸ410等の土器集中箇所遺構が形成される。それらは概ねＤⅡ層中で検出され、出土土器により弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。4区の遺構のうち、出土土器によって年代を決定できるのはそれらの遺構のみで、他の遺構はそれとの前後関係で年代を推定した。次に調査区中央部を南流し、途中から東流するＳＲ440が形成される。それは溝状遺構等を切り、また河床上より古式土師器が出土した土器集中箇所遺構ＳＸ4101が検出されたことにより、ＳＲ440の存続期間は弥生時代後期後半～古墳時代前期と推定される。それに付随する護岸杭列群も同時期と考えられ、また南岸の掘立柱建物跡もそれと相前後するものと考えられる。やがてＳＲ440の埋積が進み、盛土状遺構ＳＸ445が形成されたりするが、古墳時代前期になって全域がＤＩ層に覆われたと考えられる。

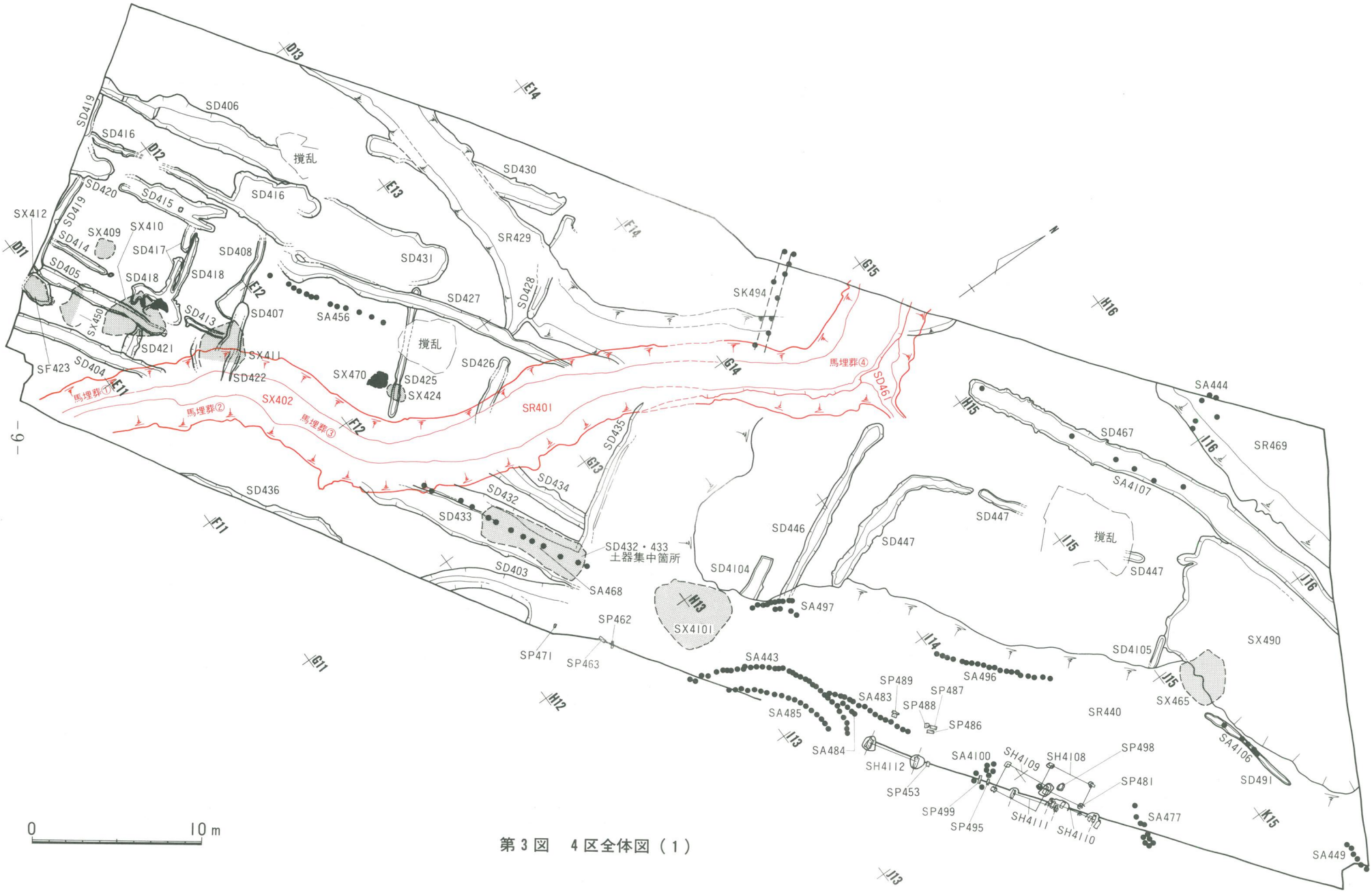
なお4区ではＤⅡ層をＤⅡ－1層とＤⅡ－2層に分層することが困難な箇所があり、そのためＤⅡ－1層・ＤⅡ－2層あるいは単にＤⅡ層というような表記を行った。また4－Ａ区（昭和63年度）・4－Ｂ区（平成元年度）というように年度を分けて調査を行ったために、遺物番号はそれぞれ独自に設定した。従って本文中などで遺物番号を表記する際は、Ａ・Ｂの区別を明記した。

1．土器集中箇所

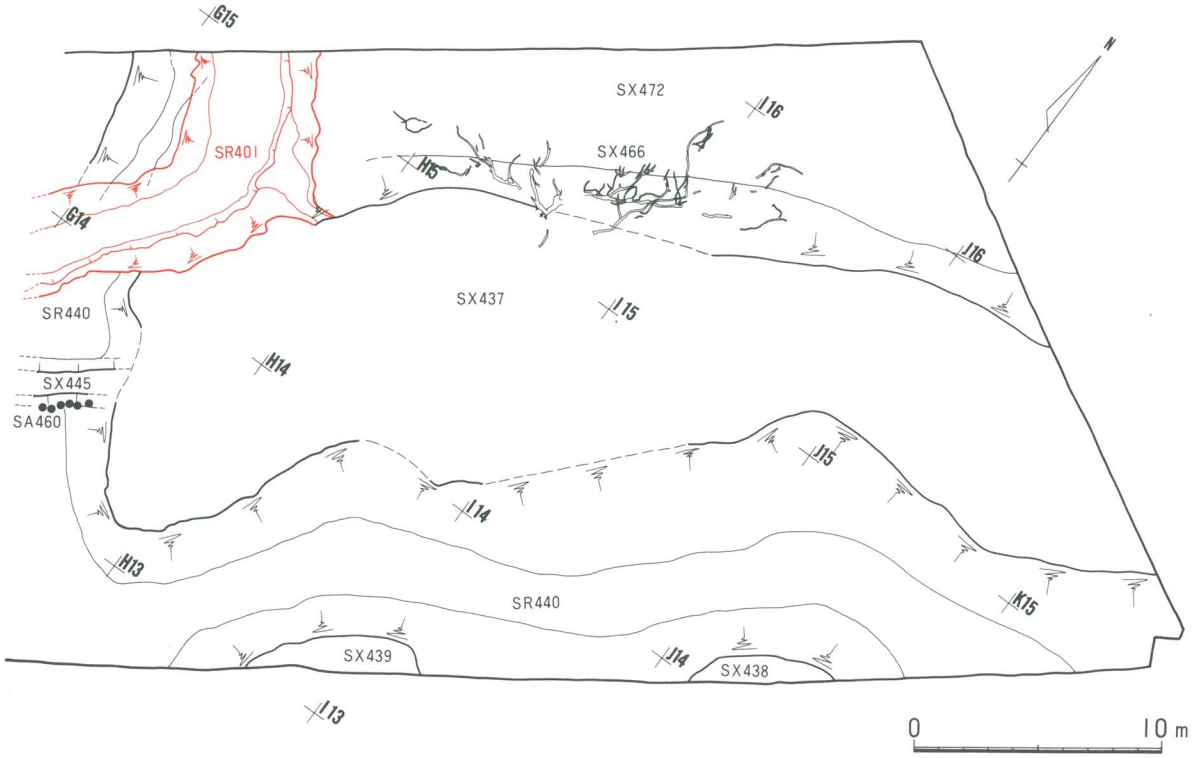
4区では土器片が廃棄された状態で出土する土器集中箇所が、8ヶ所で検出された。それらは①溝状遺構あるいは土坑が埋まってゆく過程で、土器が一時期に集中して廃棄されたもの（ＳＸ410、ＳＸ411、ＳＸ412、ＳＸ424、ＳＸ450）、②溝状遺構が埋まってゆく過程で、土器が比較的長い期間にわたって廃棄されたもの（ＳＤ432・ＳＤ433内土器集中箇所）、③ＳＲ440内に土器が一時期に集中して廃棄されたもの（ＳＸ465、ＳＸ4101）に分類することができる。またいずれの土器集中箇所においても、壺形土器の占める割合が大きく、甕形土器の占める割合が小さいのが特色である。これらの遺構の年代に関しては、後述する「長崎4期土器（第Ⅴ章第2節を参照）」が出土した①の各遺構とＳＸ465は、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期に成立したと考えられ、また②はその間の比較的長い期間にわたって存続していたと考えられる。そしてＳＸ4101は古墳時代前期の高坏（「長崎5期土器」に属する）の出土により、その時期を遺構の成立年代とした。

ＳＸ410

Ｄ11グリッド南東部のＤⅡ層中より、長径約3.6m、短径約3.1mの範囲で土器片が多数、廃棄された状態で出土し、土器集中箇所遺構ＳＸ410と呼称することとした。その下からはＳＤ405が検出されたが、ＳＸ410との密接な関連は認めにくく、おそらくＳＤ405が埋まって凹地となった所に土器が集中して廃棄されたと推定される。廃棄された土器は40個体前後と推定されるが、そのうち壺形土器が約90％と大


D13
E14
SD406
SD419
SD416
D12
撹乱
SD430
SD420
SD415
SD416
E13
F14
SX412
SD419
SX409
SX410
SD414
SD417
SD408
SD431
SR429
D11
SD405
SD418
SD418
E12
SD427
SD428
SK494
G15
H16
SX450
SD413
SD407
SA456
撹乱
SD421
SX411
SD426
SF423
SD404
SD422
SX470
SD425
SX424
E11
馬埋葬①
馬埋葬②
SX402
馬埋葬③
F12
SR401
G14
馬埋葬④
SD461
H15
SA444
SD467
I16
SR469
SA4107
SD435
G13
SD434
SD436
SD432
SD433
F11
SD432・433
土器集中箇所
SD446
SD447
SD447
撹乱
I15
SD447
J16
SD403
SD4104
SA468
H13
SX4101
SA497
SP462
SP471
SP463
G11
SA443
I14
SA496
SD4105
SX490
J15
SP489
SP487
SA483
SP488
SX465
H12
SA485
SP486
SR440
I13
SA484
SA4100
SH4109
SH4108
SP498
SA4106
SH4112
SP481
SD491
SP453
SP499
SP495
SH4111
SH4110
SA477
K15
SA449
J13
N
0
10 m

第３図　４区全体図（１）



第４図　４区全体図（２）

半を占め、甕形土器の占める割合は約10％と小さい。また接合できた土器の破片はＳＸ410の広い範囲に散らばっており、北東側に隣接する土器集中箇所遺構ＳＸ411出土の土器片と接合したものもあって、破損した土器をここへ運んできて廃棄したことが窺われる。また長径10cm前後、短径５cm前後の楕円形の河原石が約10点、土器に混じって散在していた。この遺構が形成された年代は出土土器によって、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。

ＳＸ411

Ｅ11グリッド北西部のＤⅡ層中より、多量の土器片が廃棄された状態で出土し、土器集中箇所遺構ＳＸ411とした。その範囲は長径約2.6ｍ、短径約2.4ｍに及ぶが、この遺構の南東部分はＳＲ401（中世）によって削りとられており、実際にはさらに南東側にも土器が廃棄されていたと考えられる。これらの土器はＳＸ410と同様に、下面の溝が埋まってゆく過程でまとまって廃棄されたと考えられるが、ここでは幅の広いＳＤ408がいったん埋まった後、細長いＳＤ407・ＳＤ422ができ、それらが埋まりかけた時期に土器が廃棄されたことが、Ａ－Ａ′断面の土層観察から解る。廃棄された土器の個体数は40前後であり、そのうち壺形土器が約90％を占め、甕形土器が約10％を占める。また前述したようにＳＸ410出土の土器片と接合し得たものがあり、破損した土器を運んできてＳＸ410と同様に、この場所に廃棄したことが窺われる。ＳＸ411ではこの他に長径約５～20cm、短径約５～10cmの楕円形の河原石約10点と軽石数点が、土器に混じって出土した。この遺構の年代は出土土器により、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。

なおこの遺構からは、ＳＲ401（中世）での馬埋葬に関わる卒塔婆４点と若干の土師質土器も出土した。これらはＳＲ401の氾濫の際、土器の間に入りこんだものと考えられる。

ＳＸ412

Ｄ11グリッド南部からＤ10グリッド北部にかけて、長径約2.0ｍ、短径約1.3ｍの範囲で、廃棄された状態の土器片がまとまって出土した。土器集中箇所遺構ＳＸ412と呼称することとした。その下からは木片が集中して出土し、楕円形を呈するＳＦ423が検出され、出土した土器片はＳＸ412内でのみ接合し、周辺の土器集中箇所出土の土器片とは接合しなかったことから、ＳＦ423が埋まって凹地となった時期に土器が廃棄されたと断定した。廃棄された土器は10個体前後と少量で、すべて壺形土器と推定される。また長径10㎝前後、短径５㎝前後の楕円形の河原石約５点と軽石数点が、土器に混じって出土した。この遺構の年代は出土土器により、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。

ＳＸ424

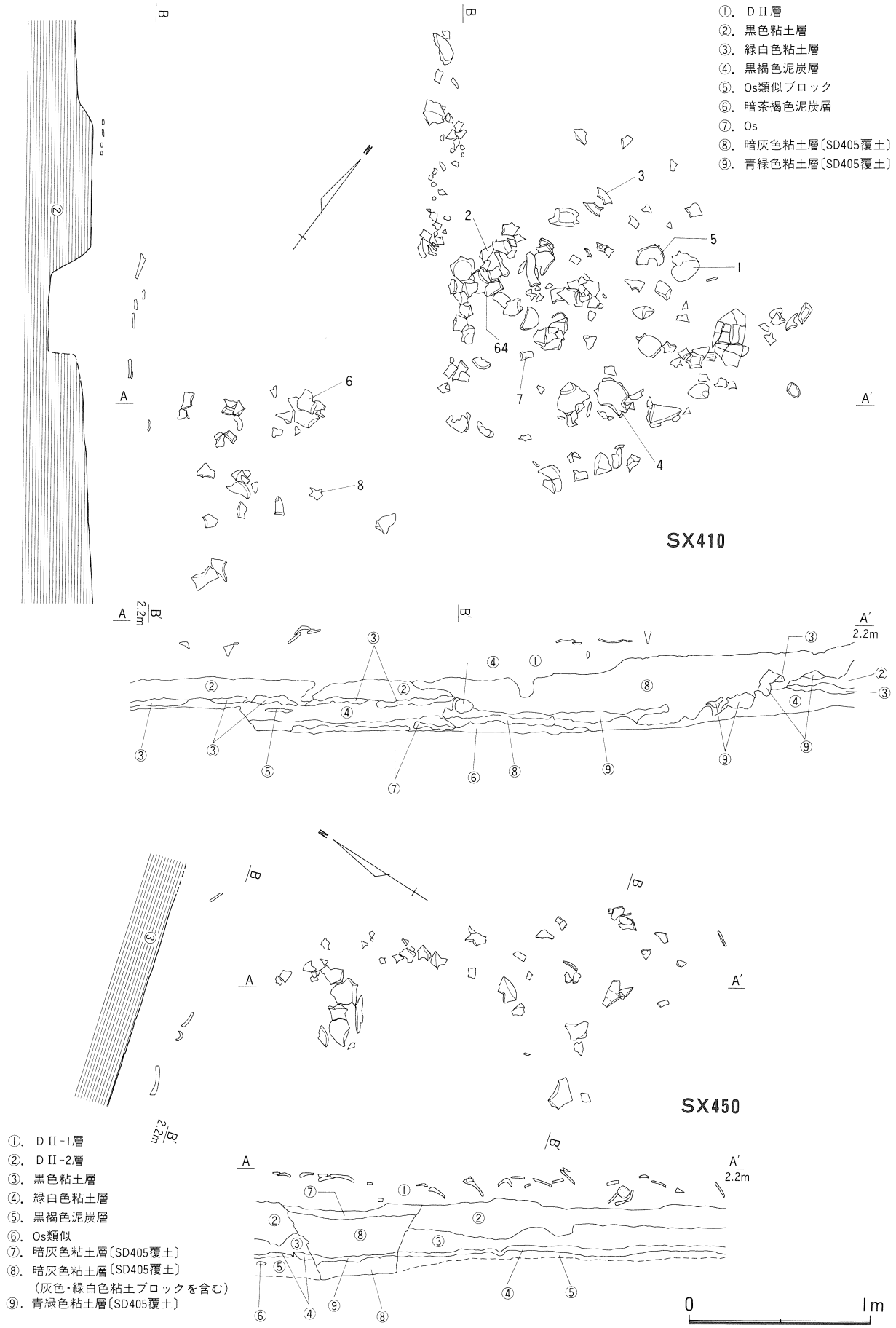
Ｅ12グリッド南東部からＦ12グリッド南西部にかけてのＤⅡ－１層中より、長径約0.7ｍ、短径約0.5ｍの範囲で土器片が廃棄された状態で出土した。その下からは南北方向のＳＤ425が検出されたが、ＳＸ424との関連は認めにくい。土器が出土したＤⅡ－１層とその下のＤⅡ－２層との間には、厚さ１～２㎝の炭化物が土器が出土したのとほぼ同じ範囲で検出された。それによって土器は塵芥を焼却した凹みにまとめて廃棄されたと思われる。廃棄された土器は20個体前後で、すべて壺形土器と推定される。この遺構の年代は出土土器により、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。

ＳＤ432・433内土器集中箇所

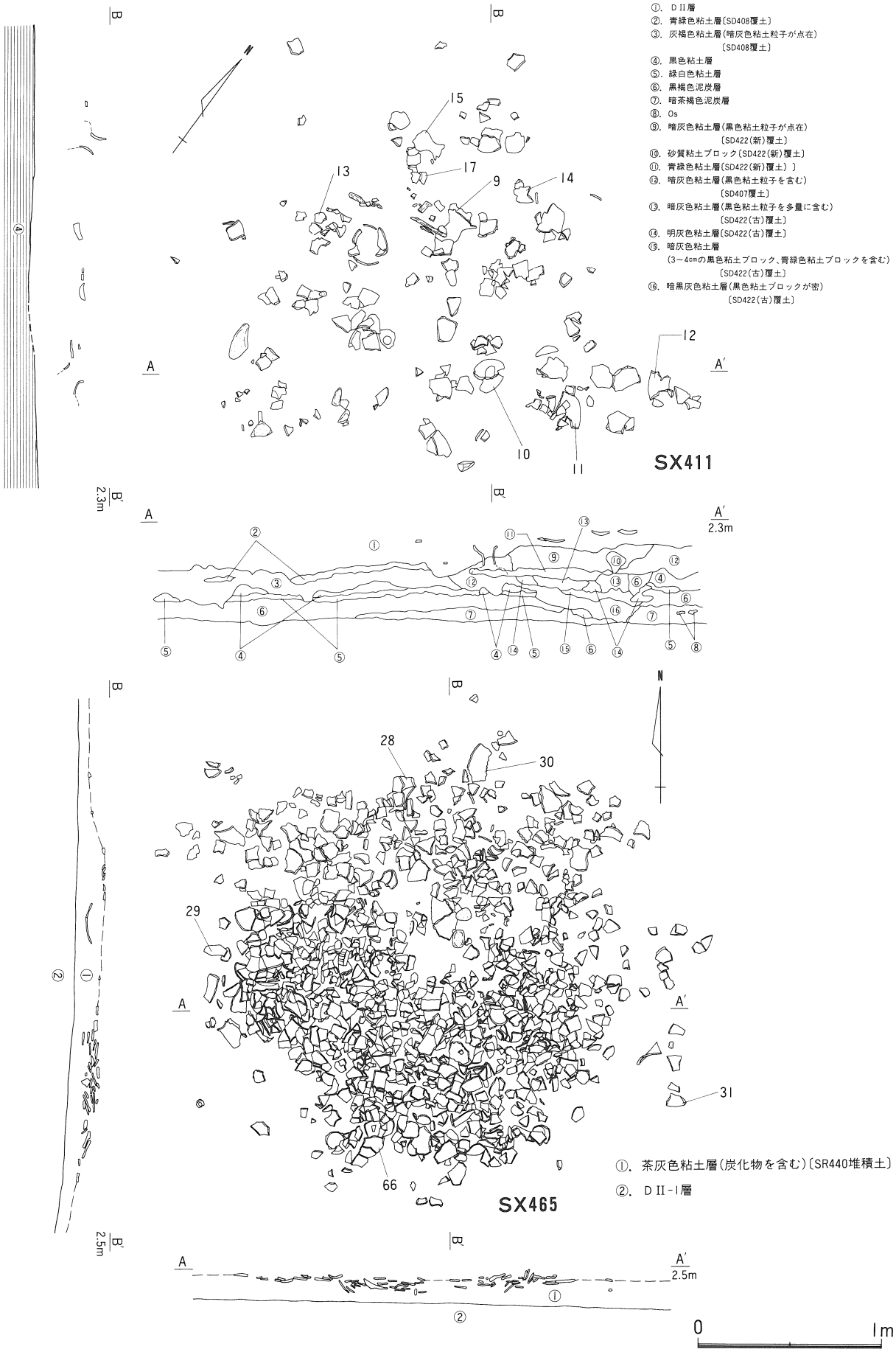
Ｆ12グリッドからＧ12グリッドにかけて、東西方向に並行する２本のＳＤ432・433が検出されたが、その中でも東寄りのＧ12グリッド内で、多量の土器片が廃棄された状態で出土した。その範囲は長さ約5.8ｍ、幅約2.8ｍに及ぶが、東端部はＳＲ440（弥生時代後期後半～古墳時代前期）の影響を受けており、実際にはさらに東側にも土器が廃棄されていたと考えられる。土器はＤⅡ－１層あるいは溝の覆土である暗灰色粘土層より出土しており、ＳＤ432・433が埋まってゆく過程で、比較的長い期間にわたって廃棄されたと推定される。廃棄された土器は35個体前後と推定され、その構成比率は壺形土器約75％、甕形土器約20％、その他の器種約５％でＳＸ410・411と比較して、甕形土器の占める割合が大きい。また長径約５～15㎝、短径約５～10㎝の楕円形の河原石約５点と木片数点が、土器に混じって散在していた。この遺構の年代は、前述のように、土器廃棄が比較的長い期間にわたると考えられることから、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の比較的長い期間にわたると考えられる。

ＳＸ450

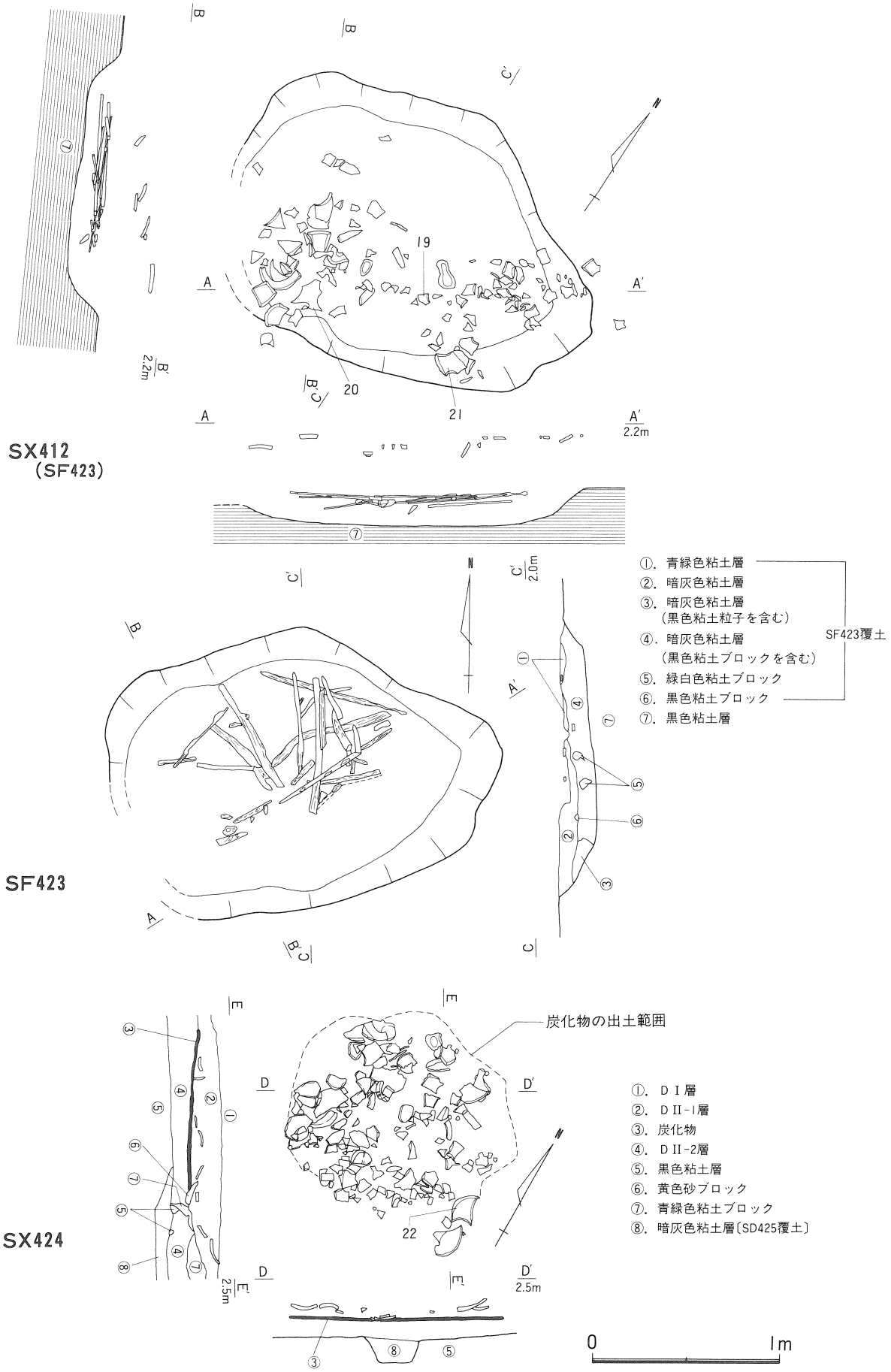
Ｄ11グリッド南部のＤⅡ－１層中より、土器片が廃棄された状態で出土し、土器集中箇所遺構ＳＸ450とした。その範囲は長径約2.5ｍ、短径約1.2ｍに及ぶが、この遺構の北東側は攪乱を受けており、実際にはさらに北東側にも土器が廃棄されていたと考えられる。ＳＸ450の下からはＳＸ410と同様に、東西方向の溝ＳＤ405が検出されたが、ＳＸ450との関連は認めにくい。廃棄された土器は10個体前後と少量で、すべて壺形土器と推定される。出土土器によって、ＳＸ450の年代は弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。



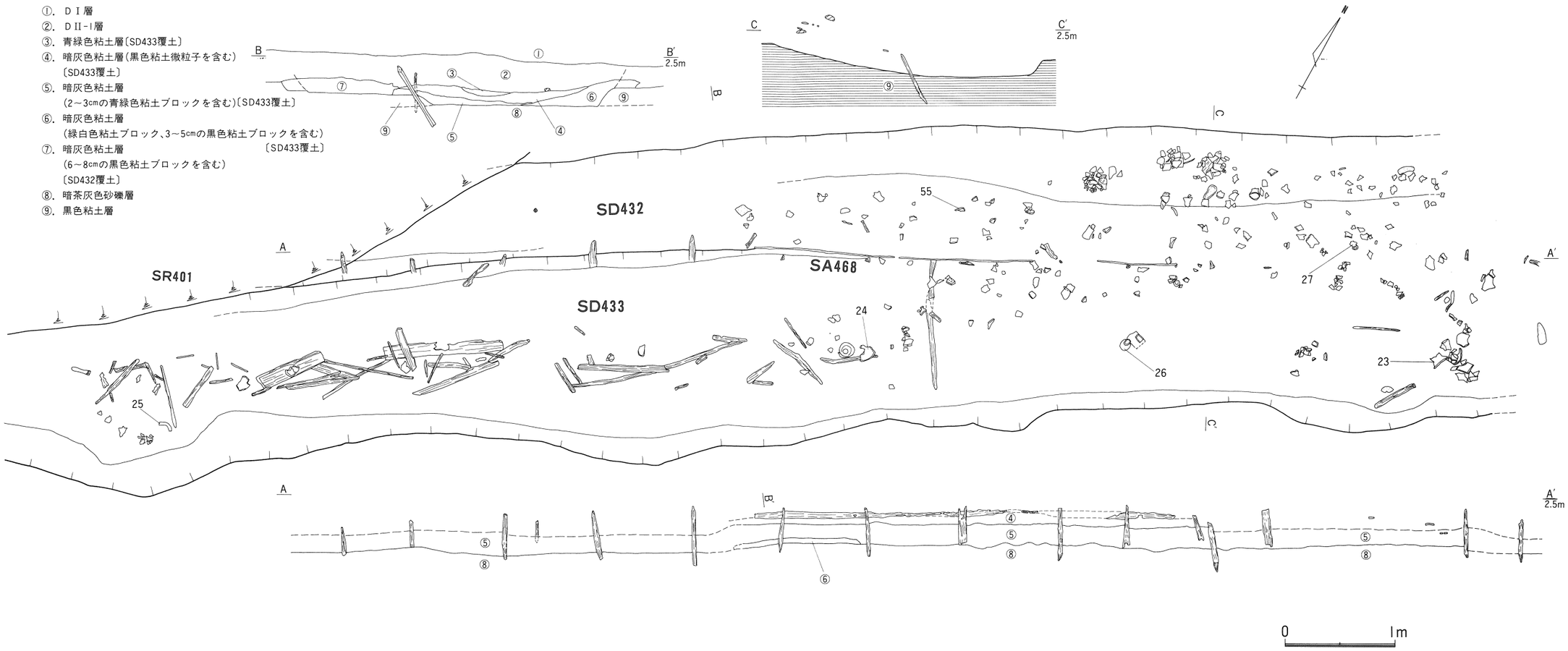
第5図　4区土器集中箇所実測図（1）SX410・SX450



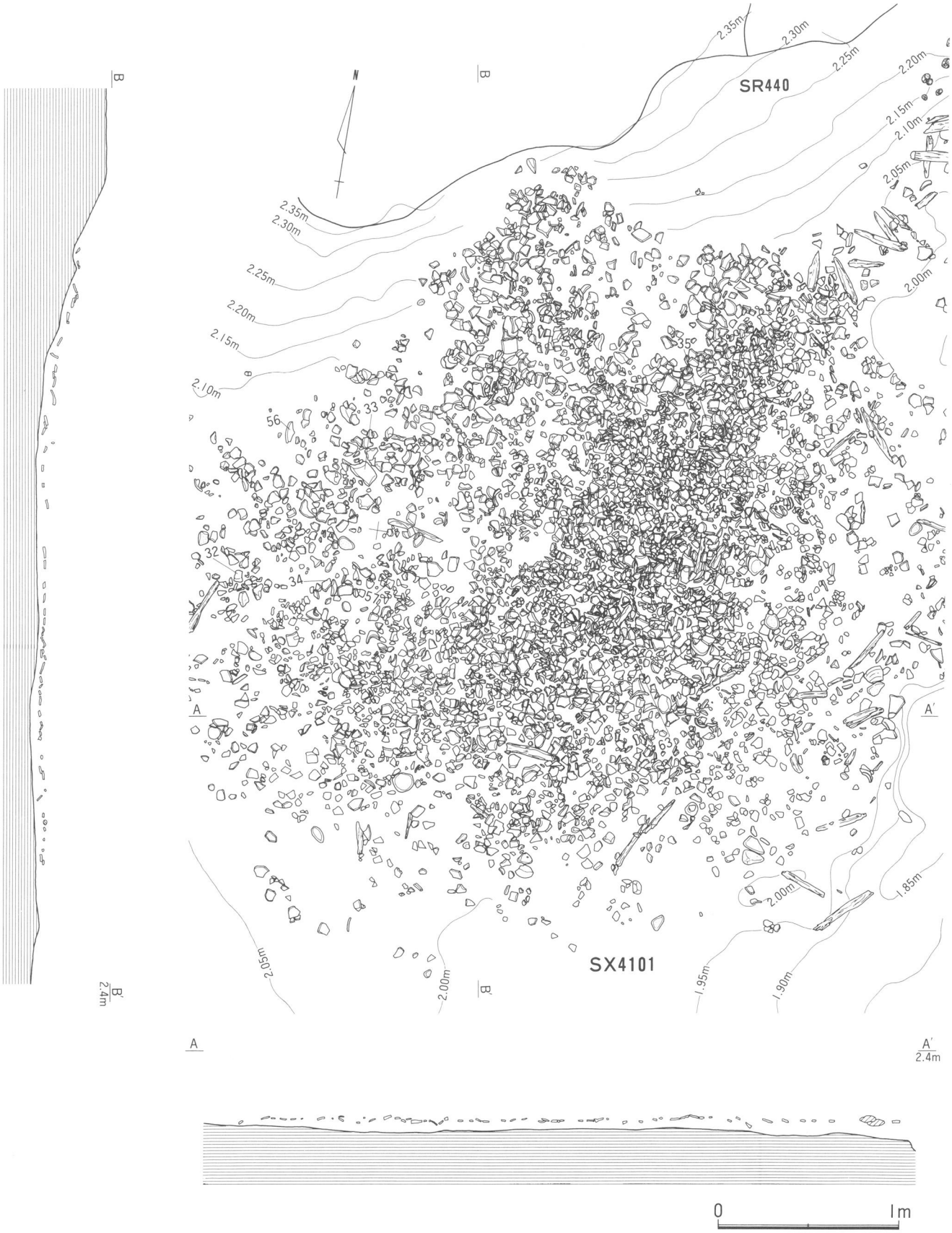
第６図　４区土器集中箇所実測図（２）ＳＸ411・ＳＸ465



第7図　4区土器集中箇所実測図（3）SX412・SF423・SX424



第８図　４区土器集中箇所実測図（４）ＳＤ432・ＳＤ433・ＳＡ468



第９図　４区土器集中箇所実測図（５）ＳＸ4101

ＳＸ465

Ｊ15グリッド南西部のＳＲ440北岸付近より、多量の土器片が密集して出土し、土器集中箇所遺構ＳＸ465とした。その範囲は長径約3.1m、短径約2.8mに及び、厚さ約10cmにわたって土器片が積み重なっていた。土器が出土したのはＳＲ440の堆積土である茶灰色粘土層で、土器片はＳＲ440北岸付近に短期間に集中して廃棄されたと推定される。その個体数は75前後で、そのうち壺形土器が約90％、甕形土器が約10％とＳＸ410・411と同傾向を示す。また長径10cm前後、短径５cm前後の楕円形の河原石が数点、土器に混じって出土した。この遺構の年代は出土土器により、弥生時代後期後半～古墳時代前期の間の一時期と考えられる。

ＳＸ4101

H12グリッド北西部からH13グリッド南西部にかけて、ＳＲ440北岸斜面から河床上の暗茶灰色粘土層より、夥しい量の土器片が廃棄された状態で、密集して出土した。土器集中箇所遺構ＳＸ4101と呼称することとした。その範囲は長径約4.3m、短径約3.5mに及ぶ。ここは南流するＳＲ440が北東方向に流れを変える箇所にあたり、土器はＳＲ440北岸より一時期に集中して廃棄された様子が窺われる。廃棄された土器の個体数は約350と厖大で、そのうち壺形土器の占める割合が約95％と非常に大きく、甕形土器の占める割合は約５％と小さい。また長径約５～15cm、短径約５～10cmの楕円形あるいは円形の河原石が約25点と木片約25点が、土器に混じって出土した。この遺構の年代は古墳時代前期の小型高坏の出土により、その時期と考えられる。

２．掘立柱建物群

４区では掘立柱建物跡が、Ｉ13グリッド北東部からＪ14グリッド南西部にかけての、ＳＲ440南岸付近で４棟（ＳＨ4108～4111）、Ｉ13グリッドのＳＲ440南岸付近で１棟（ＳＨ4112）検出された。それらを構成する柱穴はＳＲ440の浸食によって破壊されているものが多く、幾つかの柱穴がつながって土坑のようになって検出されたものや、礎板のみ見つかったものもあった。検出された柱穴の覆土はＳＲ440堆積土に類似する灰色粘土である。ここでは柱穴の検出が不明瞭であったが、礎板の出土状況は良好であり、鼠返しや板材を分割して礎板として使用したものが多数出土したほか、柱根も２点残存していた。

ＳＨ4108～4111の４棟は柱穴の重複から考えて、同時には２棟まで並存していたと考えられる（ＳＨ4108と4110、ＳＨ4108と4111、ＳＨ4109と4110）。それにＳＨ4112が並存していたと考えれば、ここでは同時に２～３棟が並んでいたことになる。おそらくＳＨ4108～4111の４棟はＳＲ440の河道の変化によって建て替えられたのであろう。掘立柱建物跡が検出された地域の南側は調査区外であり、ＳＨ4110～4112は建物の全貌を明らかにすることができなかった。ここではＳＨ4108・4109と同様に東西棟と考えたが、さらに南側に延びて２間×１間等の南北棟となる可能性もある。いずれにせよ、これらの掘立柱建物は小規模な倉庫で、老朽化した鼠返しや板材を新築する建物の礎板に利用して、建て替えが繰り返されていたと考えられる。年代については、検出面が不明瞭である点を考慮して、ＳＲ440の年代である弥生時代後期後半～古墳時代前期としておきたい。なお個々の掘立柱建物跡に関して述べるに際して、北西隅の柱穴をＰ１、北東をＰ２、南東をＰ３、南西をＰ４と表記することとし、また礎板・柱根は見出し番号で表記することとした（取上不能の礎板は遺物番号を表記）。

ＳＨ4108

ＳＨ4108はＪ14グリッド南西部に位置する１間×１間の東西棟で、桁行2.70ｍ、梁間1.44～1.47ｍ、平面積3.93㎡を測る。主軸方位はＮ62°Ｅである。検出された４つの柱穴のうち、北側のＰ１・Ｐ２はＳＲ440の浸食が著しいが、柱穴は長径32～33㎝、短径24～28㎝の楕円形を呈し、深さ19～32㎝を測る。その中に長さ27～30㎝、幅16～17㎝、厚さ３㎝の礎板を敷いている。そのうちＰ１の*w*17－１とＰ４の*w*17－２は、もとは同じ板材を縦方向に分割したものであり、またＰ２の*w*16－１とＰ３の*w*16－２も同じ鼠返しを分割したものである。それによってこれら４つの柱穴は同一の掘立柱建物を構成すると判断した。また検出された４つの礎板はすべて、長辺を東西方向にして敷かれているのが特色である。

ＳＨ4109

ＳＨ4109はＩ13グリッド北東部からＪ14グリッド南西部にかけて位置し、南東部分は調査区外のため柱穴を検出し得なかったが、１間×１間の東西棟と推定される。桁行2.82ｍ、梁間1.68ｍで平面積4.74㎡と推定され、主軸方位はＮ64°Ｅである。検出された柱穴・礎板はいずれもＳＲ440の浸食の影響が大きく、Ｐ１・Ｐ４はプランが確認できず、礎板のみ検出され、またＰ２は建替えのために柱穴がつながって、土坑のようになって検出された。Ｐ１の*w*15－１とＰ２の*w*15－２はともに同じ鼠返しを４分割したもののひとつであり、長辺32㎝、短辺27㎝の四角形で、厚さは３㎝程である。それによってこれらは同一の掘立柱建物の礎板であると判断した。またＰ４には*w*18と*w*19・20（同じ礎板が二次的に縦割れしたもの）が交差して敷かれている。*w*18は長さ35㎝、幅20㎝、*w*19・20は長さ29㎝、幅19㎝で厚さはともに３㎝である。このＰ４をＳＨ4109の南西隅の柱穴とすると、柱間距離、主軸方位ともにＳＨ4108と類似することとなり、それ故にＰ４をＳＨ4109の柱穴のひとつとした。なおＰ２からは長さ33㎝、幅29㎝、厚さ３㎝の礎板*w*21も検出されているが、どの掘立柱建物を構成するものであるかは判然としない。

ＳＨ4110

ＳＨ4110はＪ14グリッド南西部に位置する。ここでは北西隅のＰ１と北東隅のＰ２（ともに建替えのために柱穴がつながって、土坑のようになっている）が検出され、北側はＳＲ440であることから、建物を構成する南側の柱穴は調査区外に存在すると考えられる。ＳＨ4108等との類似性から、主軸方位Ｎ60°Ｅ、桁行2.76ｍの東西棟と推定した。検出された２つの柱穴もＳＲ440の浸食が著しく、柱穴プランは明らかではない。Ｐ１のW255（Ｂ）は摩滅が著しく取り上げることができなかったが、長さ34㎝、幅16㎝のホゾ穴のある板材が用いられている。またそれに隣接する*w*23は長さ45㎝、幅19㎝、厚さ４㎝の板材でホゾ穴が多い。またＰ２の*w*22も長さ45㎝、幅18㎝、厚さ４㎝の板材でホゾ穴が多い。以上のようにこれら３枚の礎板は大きさやホゾ穴が多いという類似点があり（W255（Ｂ）は摩滅しているので、長さは設置時にはもっと長かったと推定される）、それによってＰ１のW255（Ｂ）と*w*23のどちらかとＰ２の*w*22で、ひとつの掘立柱建物の一部を構成すると推定される。またＰ１には*w*27、Ｐ２には*w*24というともに柱根が残存する礎板があり、長さ41～46㎝、幅18～19㎝、厚さ４～５㎝の板材が用いられている。*w*27の柱根*w*28は底面11㎝×９㎝で、先端は腐食して15㎝程残存しており、また*w*24の柱根*w*25は底面12㎝×８㎝で、同様に26㎝程残存している。ともにほぼ直立した状態で出土した。柱間距離は約2.4ｍでＳＨ4108等よりやや短い。なおＰ２からは鼠返しを分割した*w*26も検出されている。上底26㎝、下底35㎝、高さ17㎝

の台形で厚さ２㎝程である。

ＳＨ4111

ＳＨ4111はＪ13グリッド北西部からＪ14グリッド南西部にかけて位置する。ＳＨ4110と同様に北西隅のＰ１と北東隅のＰ２（ＳＨ4110のＰ１と同じ土坑）が検出され、やはり建物を構成する南側の柱穴は調査区外に存在すると考えられる。そしてやはりＳＨ4110と同様に、ＳＨ4108等との類似性から、主軸方位Ｎ55°Ｅ、桁行2.77ｍの東西棟と推定した。Ｐ１・Ｐ２ともやはりＳＲ440の浸食の影響が大きく、Ｐ１が短径48㎝の楕円形を呈すると推定されること以外は、柱穴プランは明らかではない。

Ｐ１では上に*w*29・30、下に*w*31というように、礎板が二段重ねで検出された。*w*29・30は縦に割れて、少し離れて出土したが、設置時には同じ板材であったと推定され、合わせて長さ30～32㎝、幅14㎝、厚さ１～２㎝を測る。*w*31は長さ50㎝、幅19㎝、厚さ３㎝で焼け焦げている。またＰ２では上にW251（Ｂ）、中に*w*32、下に*w*33というように、礎板が三段重ねで検出された。W251（Ｂ）は摩滅が著しく取り上げることができなかったが、長さ41㎝、幅11㎝と推定され、*w*32は長さ27㎝、幅14㎝、*w*33は長さ38㎝、幅20㎝でともに焼け焦げたり、腐食していたりして、同じ板材が使用された可能性が高い。なお厚さはいずれも２㎝程である。以上のようにＰ１・Ｐ２では、ともに礎板を数段重ねにしていること、礎板が焼け焦げていること（焼け焦げた板材をそのまま礎板として使用したと考えられる）という共通点があり、それによってＰ１・Ｐ２はひとつの掘立柱建物の一部を構成すると推定した。

ＳＨ4112

ＳＨ4112は他の掘立柱建物跡とは少し離れて、Ｉ13グリッドに位置する。ここでは礎板のある柱穴が２つ検出され（Ｐ１・Ｐ２）、後述するような理由で同じ掘立柱建物の一部であると考えられる。検出された柱穴の北側はＳＲ440、南側は調査区外であるため、建物を構成する他の柱穴は判然としないが（北側のＳＲ440内のＰ２に対応する位置に礎板が３点検出されたが、Ｐ２との関連性は薄い）、このＳＨ4112も他の掘立柱建物跡と類似する主軸方位であろうと考え、ここでは主軸方位Ｎ56°Ｅ、桁行2.96ｍの東西棟と推定した。検出された２つの柱穴ともＳＲ440の浸食の影響が認められるが、Ｐ１は長径87㎝、Ｐ２は長径77㎝、短径73㎝の楕円形を呈し、深さはＰ１で47㎝を測る。

Ｐ１では礎板が四段重ねで５枚検出された（上から三段目は２枚並列）。上から*w*35、*w*34、*w*36・37、*w*38である。またＰ２では礎板*w*39が１枚のみ検出された。このうちＰ１の*w*34、*w*38とＰ２の*w*39は異なる柱穴から検出されたにもかかわらず、同一の板材を横方向に切断して礎板として使用した可能性が高い。いずれも長さ56～60㎝、幅20～22㎝、厚さ４～５㎝である。このことはＰ１とＰ２が同じ掘立柱建物の一部を構成することの有力な証左と考えられる。並列しているもののひとつである*w*36は他の礎板より幅が狭く、長さ61㎝、幅13㎝、厚さ３㎝を測る。もうひとつの*w*37は*w*34等に類似していて長さ58㎝、幅17㎝、厚さ５㎝である。Ｐ１の最上段の*w*35は長さ48㎝、幅21㎝、厚さ３㎝で表面中央部が特に摩滅しており、そこに柱を立てていた様子が窺われる。またＰ２の*w*39の表面のレベルはＰ１の最下段の*w*38の表面のレベルより約７㎝低く、従ってＰ２では*w*39の上にさらに、Ｐ１のように礎板を４・５枚積み重ねていたと考えられる。

４区ではこれまで述べてきたものの他に、いずれの掘立柱建物を構成するか分からない柱穴あるいは

礎板が数ヶ所で検出された。それらはいずれもＳＲ440の南岸付近や河道内で、柱穴プランが検出できなかったものが多く、礎板が河流の影響で移動したと思われるものもあった。柱穴・礎板の多くはＳＨ4108～4112の周辺で見つかったが、多少離れたＧ12グリッド南東部のＳＲ440内で、礎板が３点出土した（ＳＰ462・463・471)。ＳＰ462のW104（Ｂ）とＳＰ463のW105（Ｂ）はともに長さ42～３㎝、幅15～16㎝、厚さ３㎝でＳＲ440内でかなり移動した様子が窺われる。ＳＰ471のW191（Ａ）は長さ42㎝、幅26㎝、厚さ３㎝を測る。

Ｉ13グリッド北部のＳＨ4112周辺では、礎板が５ヶ所６点出土した（ＳＰ453・486～489)。ＳＰ453のW227（Ｂ）はＳＨ4112のＰ２の東側より検出され、長さ27㎝、幅20㎝、厚さ４㎝を測る。ＳＨ4112北側のＳＲ440内からは、Ｐ２に対応する位置に礎板が３点まとまって出土した（ＳＰ486～488)。ＳＰ486のW278（Ｂ）は長さ39㎝、幅15㎝、厚さ５㎝、ＳＰ487のW277（Ｂ）は長さ37㎝、幅17㎝、厚さ２㎝、ＳＰ488のW279（Ｂ）は長さ27㎝、幅26㎝、厚さ３㎝でいずれもＳＲ440の河流によって、かなり移動していると思われる。W277（Ｂ）はホゾ穴のある板材で、W278（Ｂ）とW279（Ｂ）は鼠返しを分割したものと考えられる。ＳＲ440内からはもう１ヶ所で礎板が２点出土した（ＳＰ489)。これらもかなり移動していると見られ、W280（Ｂ）は長さ40㎝、幅９㎝、厚さ６㎝の板材で、W281（Ｂ）は長さ25㎝、幅23㎝、厚さ３㎝を測る。

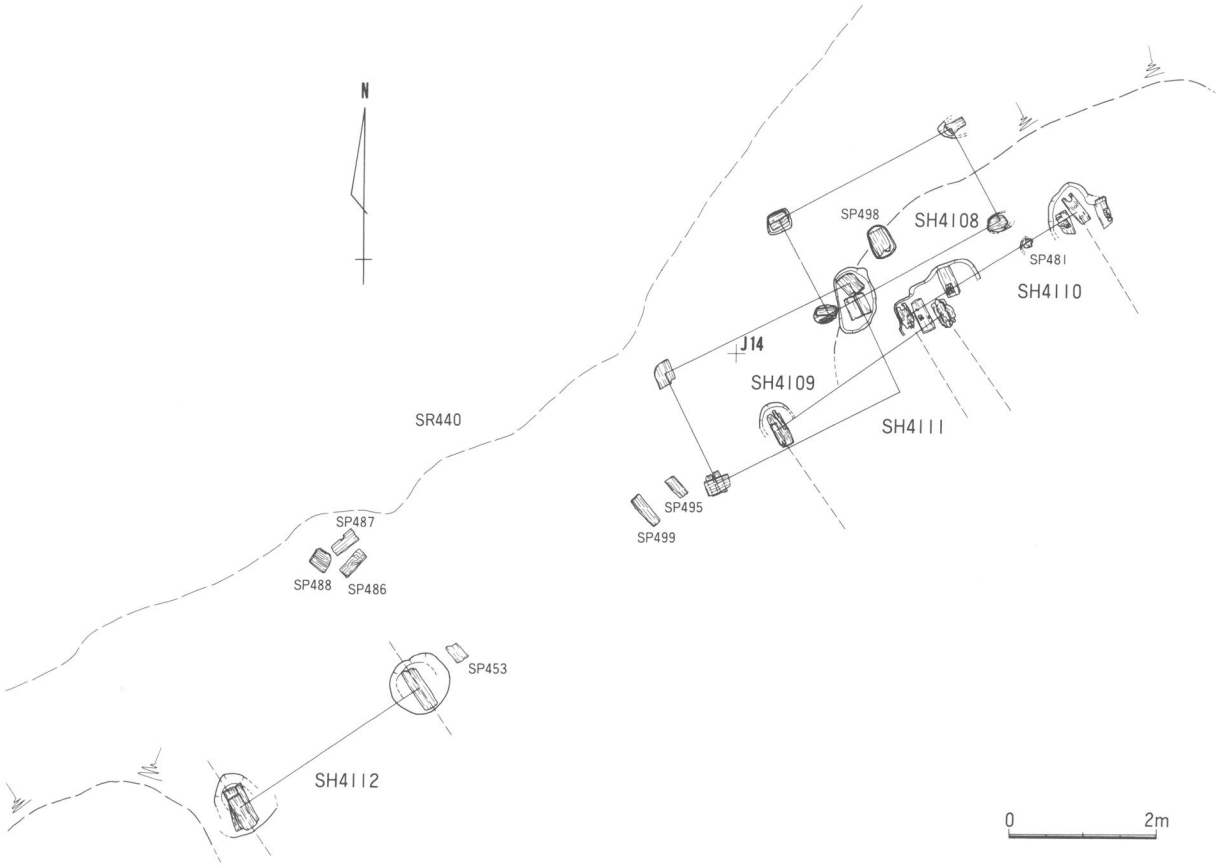
Ｉ13グリッド北東部のＳＨ4109のＰ２の西側からは、礎板が２点出土した（ＳＰ495・499)。ともにＳＨ4110～4112で出土した礎板と同様に、長辺を南北方向に向けた状態で出土したので、設置時からの移動は少ないと考えられる。ＳＰ495のW302（Ｂ）は長さ31㎝、幅16㎝、ＳＰ499のW303（Ｂ）は長さ45㎝、幅17㎝で厚さはともに５㎝である。Ｊ14グリッド南西部のＳＲ440南岸付近からは、柱穴が２ヶ所で検出された（ＳＰ481・498)。ＳＰ481はＳＨ4110のＰ１～Ｐ２上に位置し、柱穴プランがわずかに認められたが、ＳＲ440による破壊が著しく、現状では深さ７㎝を測るに過ぎない。礎板W247（Ｂ）も摩滅が著しく、大きさは不明瞭である。ＳＰ498はＳＨ4108のプラン内部で検出され、長径44㎝、短径30㎝の楕円形を呈し、深さ21㎝を測る。礎板W256（Ｂ）は長さ34㎝、幅22㎝、厚さ２㎝である。

３．ＳＲ440護岸杭列群

ＳＲ440では北岸付近で河岸に沿って断続的に４列（ＳＡ449・496・497・4106)、南岸付近の西側で微高地ＳＸ439を取り囲むように、あるいは直線的に４列（ＳＡ443・483～485)、東側で微高地ＳＸ438を取り囲むように２列（ＳＡ477・4100)、合計10列の護岸杭列が検出された。それらにはいずれも、廃棄された板材などを打ち割り、末端を尖らせて杭としたものが使用されており、打込面は明らかではないが、北岸の護岸杭列群では、杭は河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれていることが多いのに対し、南岸の護岸杭列群では、約半数の杭はＳＲ440堆積土の途中まで打ち込まれているに過ぎず、河床下まで達していない。いずれにしろ、これらの護岸杭列群はＳＲ440が存続していた弥生時代後期後半～古墳時代前期に築かれたり、打ち直されたりしたと考えられる。

ＳＲ440北岸護岸杭列群（ＳＡ449・496・497・4106）

ＳＲ440北岸付近で護岸杭列が４列、河岸に沿って断続的に検出された。西からＳＡ497・496・4106・449とした。いずれも河岸が河流の影響で浸食されるのを緩和するための施設と考えられ、打込面は出土



第10図　4区掘立柱建物群全体図

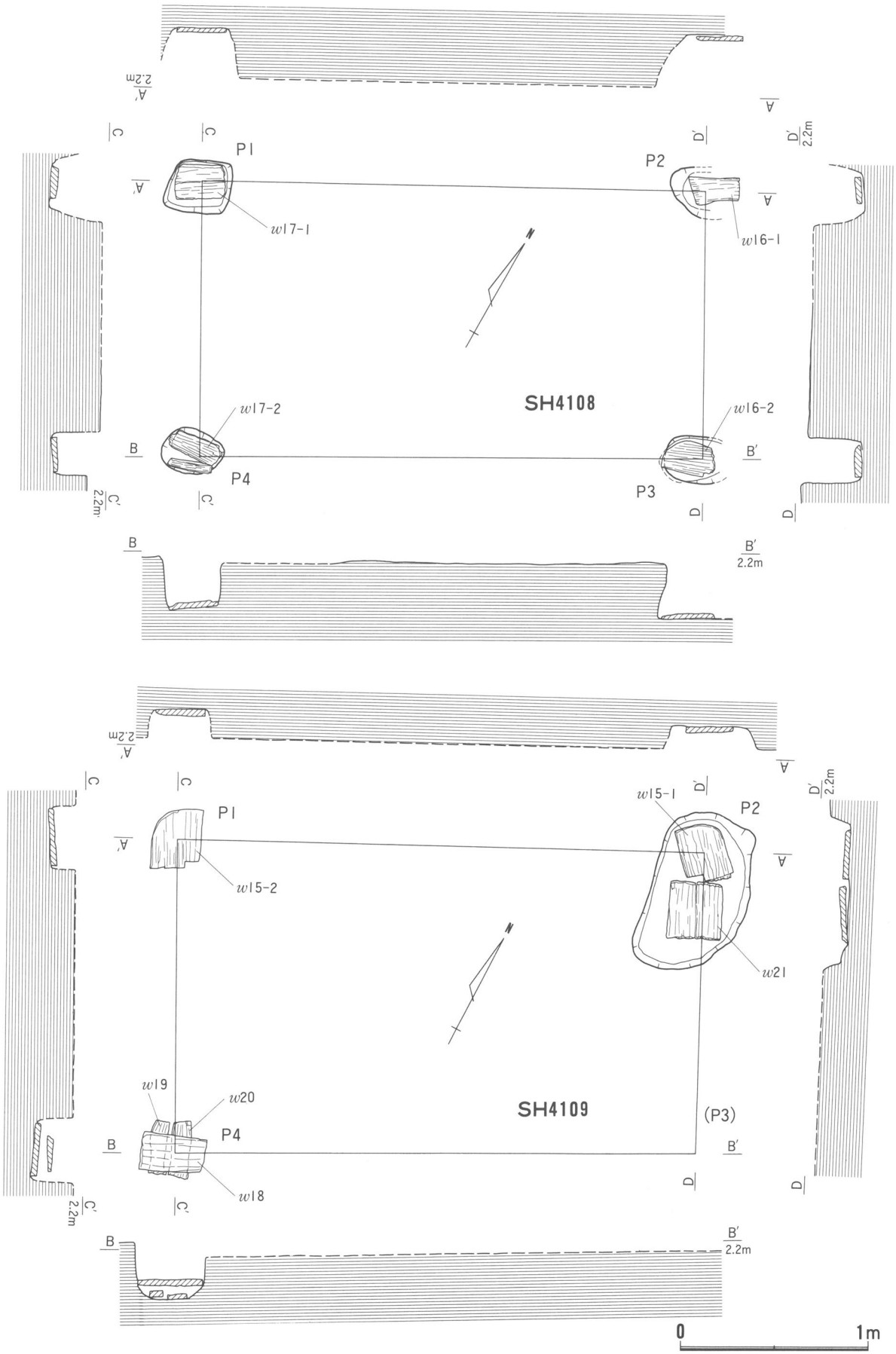
した杭の先端が腐食しているため明らかではないが、河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれている。また西寄りのＳＡ497・496では比較的小さな杭が多数打ち込まれているのに対し、東寄りのＳＡ4106・449では幅の広い杭が少数、河岸に沿って打ち込まれているのが特色である。これらの護岸杭列の年代はＳＲ440と軌を一にする弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

ＳＡ497はH13グリッド南西部に位置し、全長約2.5mを測る。その間に杭が35本前後、隙間なく、所によって二重三重に打たれている。またこの杭列の南東側には、打ち直したとみられる杭が４本確認された。その他に河流の影響で抜けたと思われる杭が10本前後、周辺に転がっており、以上によりＳＡ497の杭の総数は50本前後と考えられる。これらの杭は長さ10～40cm、幅３～５cmでその中でも長さ20～30cmの短いものが多く、末端を簡単に尖らせて、河床下の暗茶灰色砂礫層に15～30cm程打ち込まれている。なお杭の間からは土器片・木片・河原石などが出土した。

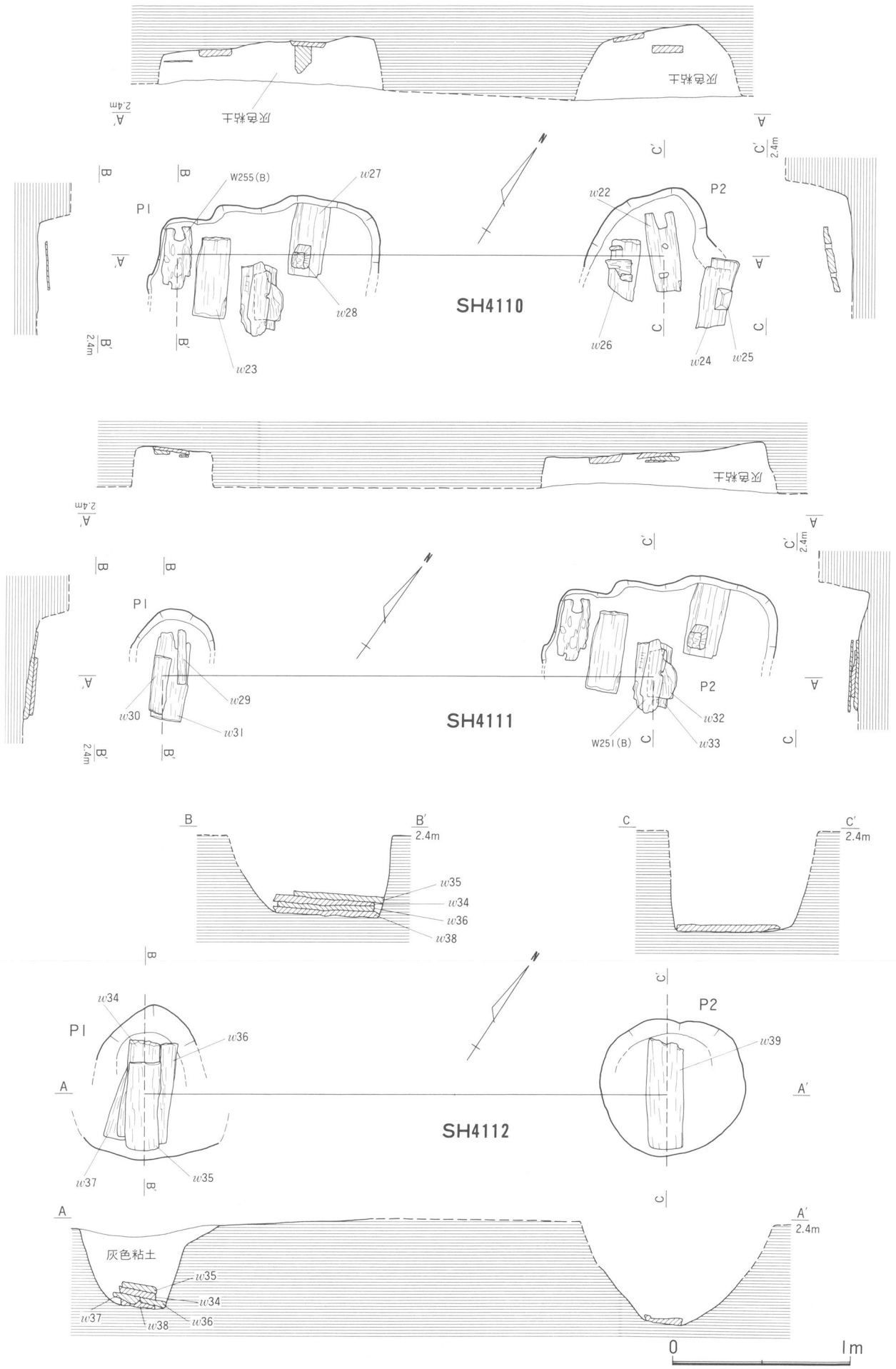
ＳＡ496はＩ14グリッド南部を南西から北東へ横切って、全長約6.8mを測る。杭列は概ね単独列で若干隙間があり、杭の総数45本前後を数える。杭は長さ15～50cm、幅３～６cmと様々で、河床下の暗茶灰色砂礫層に10～15cm程打ち込まれている。杭の間からは土器片が若干出土した。

ＳＡ4106はＪ15グリッド南部にあり、長さ約1.05mにわたって杭が７本、それから約1.35m離れて杭が１本、合計約2.4mにわたって杭が８本検出された。これらの杭は長さ10～40cm、幅４～12cmで比較的幅の広いものが多い。なおこのＳＡ4106はＳＤ491内で検出されたが、各々の前後関係は明らかではない。

ＳＡ449は調査区南東隅のK15グリッド南部に位置し、全長約1.3mを測る。検出された杭は８本で、



第11図　4区掘立柱建物跡実測図（1）ＳＨ4108・ＳＨ4109



第12図　4区掘立柱建物跡実測図（2）SH4110・SH4111・SH4112

ＳＡ4106と同様に長さ35～55cm、幅７～12cmの比較的幅の広いものが多い。

ＳＲ440南岸護岸杭列群・西側・（ＳＡ443・483～485）

H12グリッド北部からH13グリッド南部、Ｉ13グリッド南西部を経て、Ｉ13グリッド北西部に至る範囲のＳＲ440南岸付近で、護岸杭列が４列検出された。これらは微高地ＳＸ439に関連する護岸杭列群であり、東側の微高地ＳＸ438に関連する護岸杭列群とは区別して考えることとした。４列の護岸杭列のうち、ＳＡ443・485は微高地ＳＸ439を取り囲むように弧状に築かれており、ＳＡ483・484は直線的に並んでいる。出土した杭の多くは、ホゾ穴があるものが多少見られることから、廃棄された板材などを打ち割り、末端を尖らせたものと考えられるが、丸太状の自然木の末端を簡単に尖らせて杭としたものも若干あった。また杭の長さは先端が腐食しているとしても様々あり、幅もＳＡ483のものが比較的幅が広いということ以外はまちまちである。これらの護岸杭列の杭のうち約45％の杭は河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれているが、他はＳＲ440堆積土の途中まで打ち込まれているに過ぎず、河床下まで達していない。以上によりこれらの護岸杭列は、あまり頑丈に築かれたものではないと想像される。これらの護岸杭列の周辺からは、木片や流木に混じって、木製品や建築材が多量に出土した。それらはいずれも河床上かなり高いレベルから出土しており、ＳＲ440の河流が堆積作用を行なう途上で集積したものと推定される。

各々の護岸杭列の時期的な前後関係に関しては、南流するＳＲ440が北東方向に流れを変える際、滑走斜面である微高地ＳＸ439側に砂などが多く堆積し、そのため河岸が川側へ移動したと考えられ、従ってＳＡ443はＳＡ485より後に築かれたと推定される。またＳＡ443とＳＡ483は接しているが、時期的な前後関係は明らかではない。いずれにしても、これらの護岸杭列はＳＲ440が存続していた弥生時代後期後半～古墳時代前期に、河岸の移動に対応して、前後して築かれたと考えられる。

ＳＡ443はH12グリッド北部からH13グリッド南部を経て、Ｉ13グリッド南西部まで河岸に沿って弧状に検出され、両端は調査区外であるが、全長は現状で約11.35ｍを測る。杭の総数は120本前後で、河流の影響で抜けている箇所もあるが、ほぼ隙間なく所によって二重に打たれている。出土した杭は長さ15～90cm、幅２～14cmと様々であるが、その中でも長さ20～70cm、幅３～７cmのものが多く、およそ４割は河床下の暗茶灰色砂礫層に５～20cm程打ち込まれているが、他はそこまで達していない。また自然木の末端を尖らせて杭としたものも10本程見つかった。この護岸杭列の周辺からは壺・小型壺などの土器、木片や流木に混じって梯子などの木製品、有溝石錘が河床上15～35cmのレベルで出土している。

ＳＡ485はＳＡ443の同心円の内側1.0～1.5ｍの位置に同様に弧を描き、両端は調査区外であるが、全長は現状で約6.85ｍを測る。護岸杭列の西側部分は疎らであるが、他の部分は隙間なく杭が打たれており、その総数は50本前後を数える。それらは長さ15～90cm、幅２～８cmと様々で、その中では幅４～７cmのものが多く、およそ６割は河床下の暗茶灰色砂礫層に５～25cm程打ち込まれているが、他はそこまで達していない。この護岸杭列の周辺からは土器片や把手付槽・鉢などの木製品のほか、木片や流木に混じって、細長い柱材や板材などの建築材が多量に出土した。それらが出土したレベルは河床上25～50cm程で、ＳＲ440堆積土の淡緑灰褐色粘土（腐植を含む）上面と推定される。

ＳＡ483はH13グリッド南東部からＩ13グリッド北西部まで、対岸のＳＡ496・497に対応するように、

直線的に並んでおり、全長約5.25mを測る。杭の総数は40本前後で、ほぼ隙間なく所によって二重に打たれている。それらは長さ15～95cm、幅３～14cmと様々であるが、中でも幅６～８cmの比較的幅の広い杭が多く、およそ５割は河床下の暗茶灰色砂礫層に５～30cm程打ち込まれているが、他はそこまで達していない。この護岸杭列の周辺からは木片が若干、河床上15～35cmのレベルで出土している。

ＳＡ484はＩ13グリッド南西部、ＳＡ483とＳＡ443の東側部分との間にあり、全長約1.0mで直線的に８本の杭が並んでいる。これはＳＡ443の一部を打ち直したものである可能性と、他の護岸杭列の打ち直しではない独立したものである可能性がある。杭は長さ30～50cm、幅４～10cmで、その中でも幅４～５cmのものが多く、すべて河床下の暗茶灰色砂礫層まで達していない。

ＳＲ440南岸護岸杭列群・東側・（ＳＡ477・4100）

ＳＲ440南岸付近では西側の護岸杭列群に対してもう一ヶ所、東側の微高地ＳＸ438を取り囲むように、Ｉ13グリッド北東部でＳＡ4100、Ｊ14グリッド南東部でＳＡ477の２列の護岸杭列が検出された。これらは微高地ＳＸ438の一部を取り囲んでいるに過ぎず、おそらくＳＡ4100の北側、ＳＡ477の西側にはさらに、微高地ＳＸ439でのＳＡ443・485のように、護岸杭列が存在していたが、河流の影響で流失したと推定される。ＳＡ477ではＳＲ440護岸杭列群で唯一ヶ所、横板が組み込まれており、また杭のうち半数は河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれているが、残りの半数はＳＲ440堆積土の途中まで打ち込まれているに過ぎず、河床下まで達していないことは西側の護岸杭列群との類似性を示す。ＳＡ477・4100の年代は、これまで述べてきた護岸杭列群と同様に、弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

ＳＡ4100はＩ13グリッド北東部でやや弓状に、南端は調査区外であるが、現状で約1.4mにわたって複数列検出された。杭の総数は10本前後と少なく、間隔はやや開き気味であり、ＳＡ4100は南北方向ともにさらに延びる護岸杭列の一部と考えられる。おそらくその北側部分は杭が河流の影響で抜け、また検出された部分は数回にわたる杭の打ち直しが行なわれたと推定される。杭は長さ35～60cm、幅４～８cmと様々で、河床下の暗茶灰色砂礫層に10～25cm程打ち込まれており、杭の間からは木片が若干出土した。

ＳＡ477はＪ14グリッド南東部に位置し、東西方向にやや弓状に連なっており、東端は調査区外であるが、現状で約2.5mを測る。この護岸杭列は杭の間に板材を横に立てた横板が組み込まれているのが特色で、東半では２列の杭列の間に横板が設けられており、西半では単列の杭列の微高地ＳＸ438側に横板が組まれている。おそらくＳＡ477の西側にはさらに護岸杭列が延びていたと考えられ、それらやＳＡ477西半のＳＸ438側にあったであろう杭は、破壊されたり、流失したと推定される。出土した杭の総数は20本前後で、長さ20～60cm、幅１～11cmと様々であるが、幅１～４cmの比較的細いものと、幅６～11cmの矢板状のものに大別される。それらの半数は河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれているが、残りの半数はＳＲ440堆積土の淡緑灰褐色粘土層や暗茶褐色粘土層まで打ち込まれているに過ぎず、河床下まで達していない。横板は６枚出土し、長さ45～75cm、幅５～20cmで、廃棄された板材が使用されている。それらは河床上25～30cm程の淡緑灰褐色粘土層（黒・白色粘土多く混じる）から出土した。なおw7の横板は田下駄を転用したものである。この護岸杭列の周辺からは、壺形土器の比較的大きな破片が横板に引っ掛かるように出土したのをはじめ、台石、木片や流木がほぼ横板が出土したレベル、あるいはそれより５cm程下から出土した。

4．畦畔

ＳＫ494

ＳＫ494は４区で検出された唯一の畦畔と考えられるが、盛土は流出しており、南北方向に二列一対で疎らに並ぶ杭列と、その周辺の黒色粘土層に耕作による攪拌がみられることから、畦畔であると判断した。従って畦畔状の高まりは認められず、北壁の土層に耕作によると考えられる暗灰褐色粘土層や黒褐色粘土層がみられる。杭列はＦ14グリッド北東部からＧ14グリッド南西部にかけて、二列一対でＮ38°Ｗ方向にのびている。北側は調査区外で南側はＳＲ440、後にＳＲ401（中世）に切られており、検出長約5.8m、幅約0.5～0.6m、杭の間隔は約0.6～2.4mと疎らである。杭は10本前後検出され、長さ25～75cm、幅４～10cmと様々で、殆どが板材などの末端を尖らせたものである。それらは概ね黒褐色泥炭層まで打ち込まれている。年代はＳＲ440による浸食を受ける以前の弥生時代後期と考えられる。

5．杭列

４区ではＳＲ440護岸杭列の他に、４列の杭列が検出された（ＳＡ444・456・468・4107）。ＳＡ444はＳＲ469の護岸の役目を果たしていたと考えられ、ＳＡ456・468・4107はいずれも東西方向に走る溝の内部あるいは近辺で溝に並行して検出され、方位はＮ56°Ｅ～Ｎ63°Ｅで類似する。いずれの杭列でも廃棄された板材などを打ち割り、末端を尖らせたものが杭として用いられている。年代については、溝状遺構やＳＲ469と同じく、弥生時代後期と考えられる。

ＳＡ444

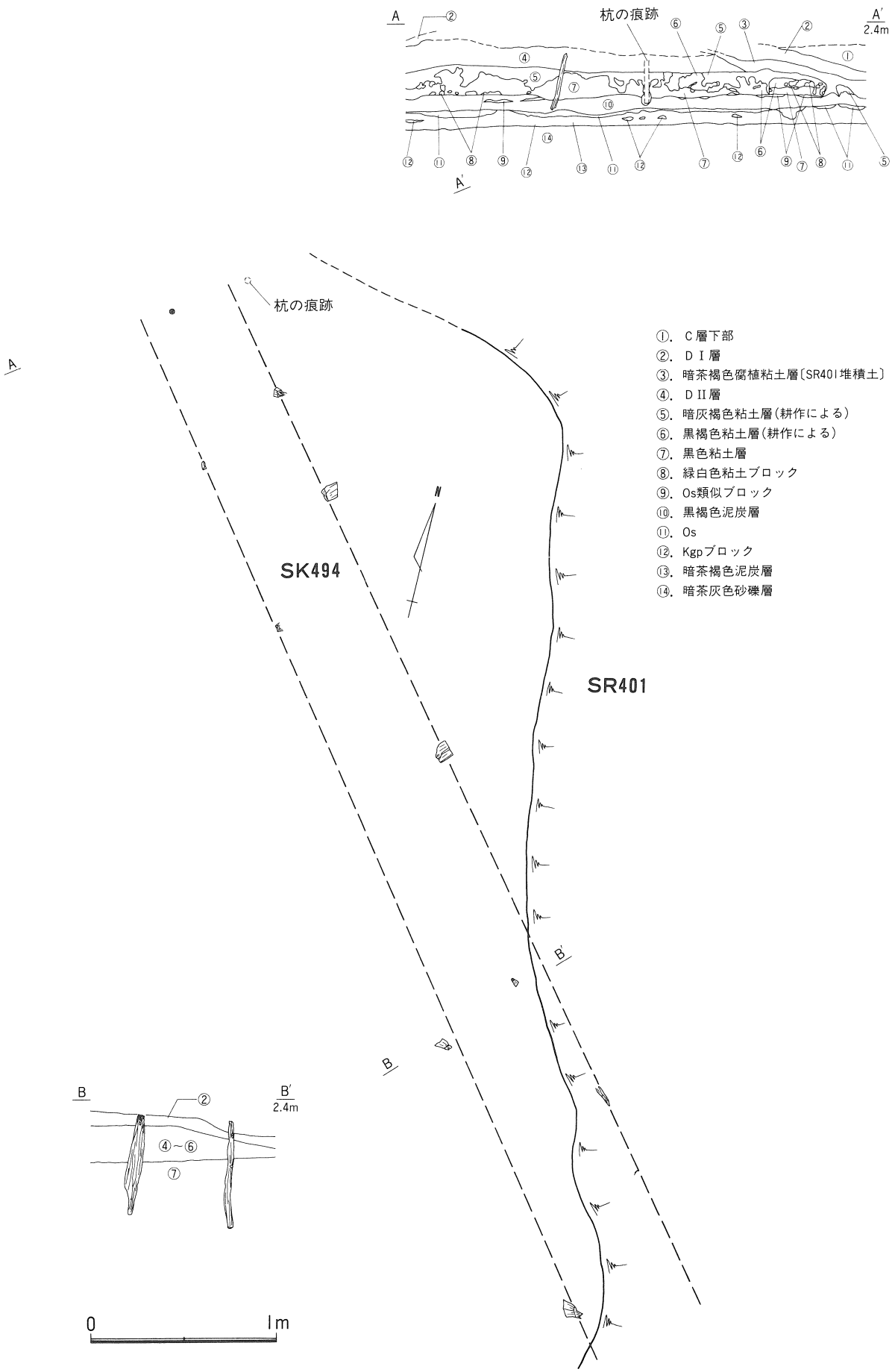
Ｈ16グリッド南東部で南北方向に、北側は調査区外のため、検出長約1.7mにわたって認められた。杭は間隔など一定せず、不規則に打たれており、横板を伴う。河岸に沿ってはいないが、ＳＲ469の護岸の役目を果たしていたと推定される。杭は全部で７本出土し、長さ25～75cm、幅４～７cmと様々で、ＳＲ469堆積土中に打ち込まれている。横板は長さ180cmと大型で、かつては建築材であったと考えられる加工がみられる。

ＳＡ456

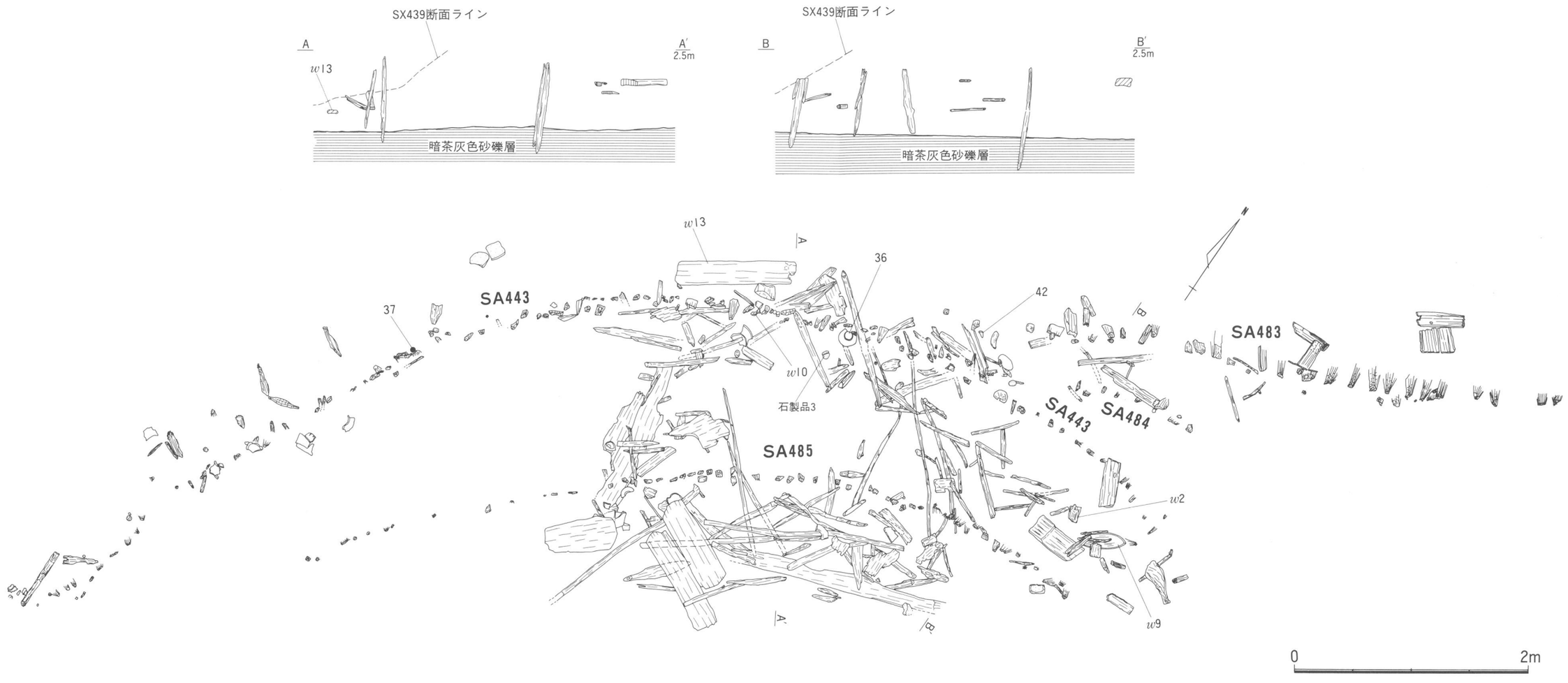
Ｄ12グリッド南東部からＥ12グリッド北東部にかけての、黒色粘土層上面で検出された。北側のＳＤ427に並行する単列、東西方向の杭列で、全長約8.4mを測る。杭の間隔は0.2～1.0m程で、途中でわずかに方向を変え、西半はＮ64°Ｅ方向、東半はＮ56°Ｅ方向にのびている。杭は15本前後出土し、長さ30～55cm、幅５～８cmで、比較的短く幅が広い。ホゾ穴のある杭が３本あり、建築材を杭に再利用していることが窺われる。これらの杭は概ね、暗茶褐色泥炭層まで打ち込まれており、南側にやや傾いている。

ＳＡ468

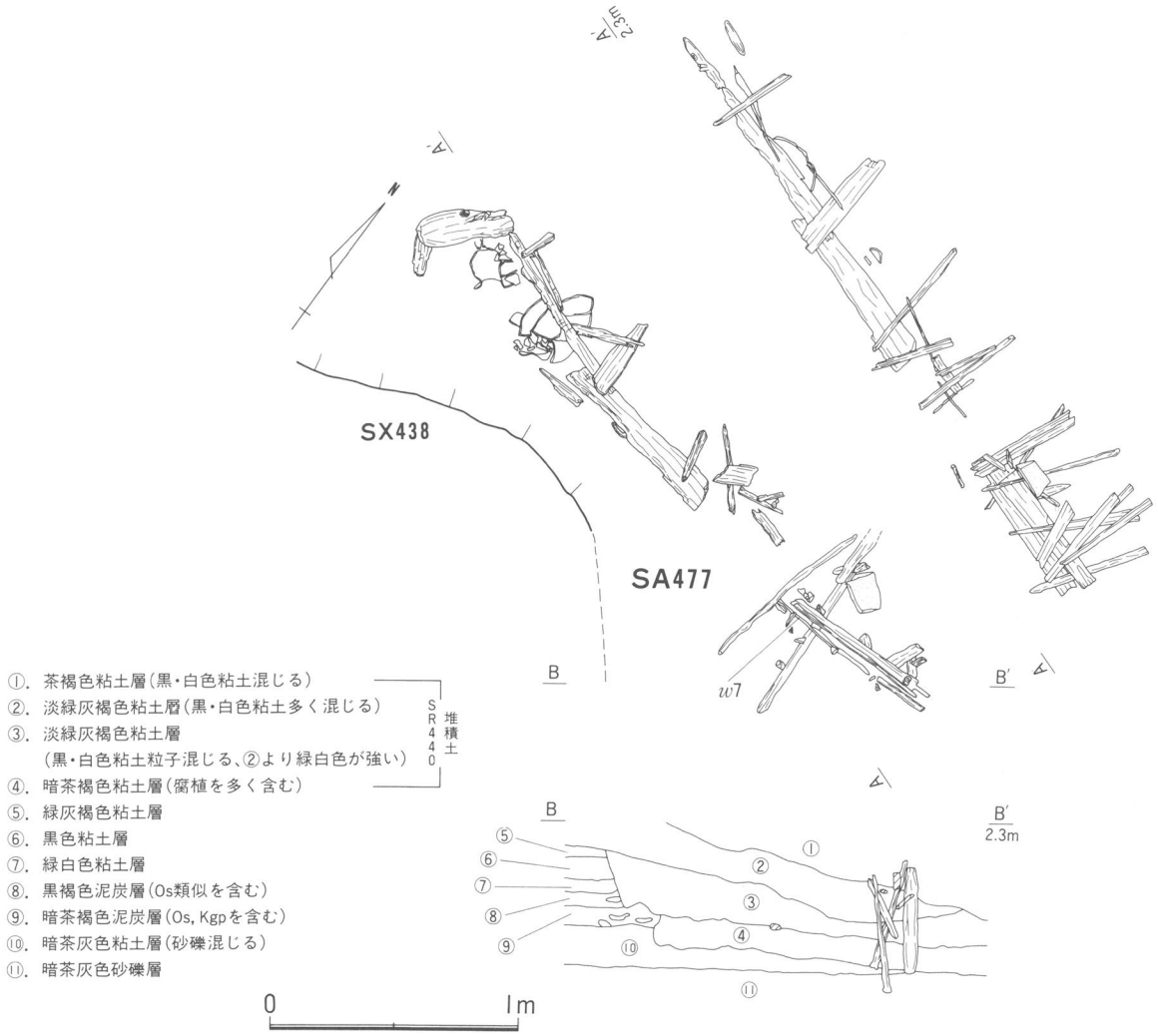
Ｆ12グリッド南東部からＧ12グリッド北西部にかけて、並行する２条のＳＤ432・433の間で検出された単列、東西方向の杭列である。西側はＳＲ401（中世）に切られており、検出長約10.7m、Ｎ63°Ｅ方向に延びている。杭列の中ほどでは、かなり損傷しているが、横板も出土した。杭は15本前後出土し、間隔は一定せず、長さ20～65cm、幅３～６cmと様々である。それらはＳＤ433の覆土である暗灰色粘土層、またはＳＲ440河床下の暗茶灰色砂礫層まで打ち込まれている。杭列の周辺からは、前述したように、土器片や木片がＤⅡ－１層または暗灰色粘土層より出土した。この杭列の用途やＳＤ432・433との前後関



第13図　4区畦畔ＳＫ494実測図



第14図　4区護岸杭列実測図（1）ＳＡ443・ＳＡ483・ＳＡ484・ＳＡ485



第15図　4区護岸杭列実測図（2）ＳＡ477

係については判然としないが、横板はＳＤ433覆土中より出土したことにより、当初はＳＤ432のみで、それが廃棄された後、少し南側にＳＤ433が掘られ、その北岸が崩れたのでこの杭列で岸を補強したと考えたい。

ＳＡ4107

H15グリッド南西部からＩ15グリッド北西部にかけてのＳＤ467内で検出された東西方向の杭列で、全長約13.0mを測り、N62°Ｅ方向に延びている。杭は全部で７本と少なく単列だが、間隔は一定しない。長さ45～65cm、幅３～５cmの同じような大きさの杭が多い。それらは概ね、暗茶褐色泥炭層まで打ち込まれている。

６．溝状遺構

４区では河道以外の調査区全域にわたって、計33条の溝状遺構が検出された。特にD11グリッド付近では、数多くの溝状遺構が認められた。それらは概ねＤⅡ－２層上面あるいは黒色粘土層上面で検出され、青緑色粘土・暗灰色粘土などを覆土とする。下端幅0.1～1.0mのものが多く、深さは５～35cmと様々で、逆台形またはレンズ状の断面を呈する。これらの溝状遺構には一定の方向性が認められ、東西方向

のものはN55°E～N68°E、南北方向のものはN27°W～N43°Wの間に入るものが多く、互いにほぼ直交していると考えられる。溝の切りあいに関しては様々であるが、前述した土器集中箇所遺構ＳＸ411での土層観察のように、ＳＤ408のような幅の広い溝はＳＤ407・422のような細長い溝に切られる傾向があると推定される。これらの溝状遺構はどのように機能していたか判然としないが、杭列あるいは護岸杭列が内部あるいは近辺を並行する溝がいくつか見られ（ＳＤ427・432・433・467・491）、杭列と溝との関連性が看取される。いくつかの溝状遺構の直上・覆土中・底からは、土器や木片などが出土しており、直上の土器集中箇所遺構ＳＸ410・411等の土器は弥生時代後期後半～古墳時代前期のものなので、これらの溝状遺構の年代はそれより若干遡り、切りあいによる時期幅を考慮して、弥生時代後期と考えたい。各々の溝状遺構の詳細については第２表に示し、ここでは特色のある溝状遺構について述べることとする。

ＳＤ403はＤＩ層除去後直ちに検出された溝で、年代は他の溝状遺構よりやや新しいと考えられる。東西方向の溝であるが、東側部分で屈曲して幅広くなっている。ＳＤ406は西よりの幅の狭まる箇所がさらに10cm前後、深掘りされている。木片が数点出土し、人工的に水を貯めた施設と考えられる。ＳＤ415は２条の東西溝がひとつになったと考えられ、そこでは下端幅0.8～1.0mを測る。ＳＤ416東半とＳＤ431は溝状低地と呼ぶべきもので、下端幅は際立って広い。ＳＤ418南半はいびつな楕円形の凹地で、南側の輪郭は不明瞭である。長径約3.4m、短径約1.3m、深さ５～10cmを測る。中央部に炭化物が底から10～15cm浮いた状態で約８mm堆積しており、それより低いレベルで木片が数点出土した。ＳＤ447はH14グリッド西部付近で約115°屈曲しており、方向は東西・南北ともに他の溝状遺構とは多少異なる。ＳＤ467は内部にＳＡ4107が溝に並行して存在し、下端幅は他の溝状遺構よりやや広い。方向も他の東西溝とは若干異なる。ＳＤ491も内部に護岸杭列ＳＡ4106が溝に並行して存在し、方向も他の東西溝とは多少異なる。

７．河道

ＳＲ429とＳＲ469は４区の北よりを蛇行しており、連続する河道と考えられる。ＳＲ429はＦ13グリッド北東部からG14グリッド北西部にかけて、ＳＲ440、後にＳＲ401（中世）に切られ、いったん調査区の北側へ出て、H16グリッド南東部で再びＳＲ469として検出された。ともに黒色粘土層を切り、ＤⅡ－２層に被覆されており、青緑色粘土、黒色粘土層に由来する暗灰色粘土を堆積土とする。ＳＲ429は上端幅2.6～3.7m、下端幅1.7～2.7m、河床の標高1.55～1.80m、川岸の標高1.78～2.14mで、黒色粘土層から深さ25～35cmを測る。断面は浅いレンズ状を呈し、覆土は緩やかに堆積したと考えられる。河床勾配は西に傾斜する傾向があり、この河道は東から西へ流れていたと推定される。堆積土中より木片が若干出土した。ＳＲ469は南岸のみ約14.8mにわたって検出され、河床最深部の標高1.49m、川岸の標高1.98～2.08mで、黒色粘土層から深さ50～60cmを測る。H16グリッド南東部で検出されたＳＡ444はこの河道の護岸の役目を果たしていたと推定される。これらの河道の年代は堆積土が前述の溝状遺構と同一であることから、弥生時代後期と考えられる。

ＳＲ440はＧグリッドを南流し、H13グリッド付近で東へ流れを変えて蛇行する河道で、G14グリッド付近でＳＲ429を切るほか、いくつかの溝状遺構を切り、G13グリッド北西部からG14グリッド北西部にかけてＳＲ401（中世）に切られている。土層としてはＤⅡ層を切り、ＤＩ層に被覆されていると考えら

れ、堆積土は第１図に示したようである。右岸は調査区外の箇所が多いが、上端幅5.9～10.0m、下端幅0.6～3.0m、河床の標高1.73～2.36m、川岸の標高2.25～2.81mで、ＤＩ層直下から深さ45～50cmを測る。川岸の形状は東流するH13グリッド以東では、右岸はかなりの急傾斜を示すが、左岸は比較的緩やかである。前述したように、河床上に廃棄されたＳＸ4101の土器片の出土状況や、護岸杭列ＳＡ443・485の前後関係から、以上のように流れの方向を判断した。すでに述べてきたようにH13グリッド以東では、両岸とも護岸杭列が設けられており、堆積土中・河床上を問わず、多量の土器、木製品・板材・木片等が出土している。この河道の年代は弥生時代後期の溝状遺構を切っており、またＳＸ4101より古墳時代前期の小型高坏が出土していることにより、弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

８．微高地と低地

ＳＸ490はＩ15グリッド東部からK15グリッド西部にかけての、黒色粘土層上面より検出され、東西方向の幅の広い溝状低地と考えられる。東側は調査区外であり、北側をＳＤ467、南側をＳＲ440にそれぞれ切られていて、検出長13.9m、下端幅6.7m以上を測る。この低地は黒色粘土層を５～25cm掘り込んでおり、ＤⅡ－２層が被覆している。Ｊ15グリッド北東部からK15グリッド西部にかけて、壺の比較的大きな破片や完形の小型壺、甕破片等が底面上から上35cmまで様々な出土レベルで散在している。また土器集中箇所遺構ＳＸ465はこの低地のＪ15グリッド南西部の上面に当たる。年代については、周辺の溝状遺構や河道との切り合いや出土土器から判断して、弥生時代後期と考えられる。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の４区全域がＤＩ層に覆われる直前の状況は、第４図－４区全体図（２）－に示すような様相を呈していたと考えられる。調査区のほぼ中央をＳＲ440が南流、後に南東部では東流し、その北側がＳＸ437、南側がＳＸ438・439の微高地である。ＳＸ437は北よりほど低く標高2.31～2.81m、ＳＸ438・439は南よりが高まってそれぞれ標高2.71～2.91m、2.64～3.14mを測る。いずれの微高地もＤⅡ層中に多量の土器片を包含している。低地ＳＸ472はＳＸ437の北側に広がっており、標高2.27～2.50mでＳＸ437北縁より約25～55cm低い。後述するように、ＳＸ437との境界上の斜面より立木根ＳＸ466が検出された。なおこの検出面は後世の攪乱が著しく、微細な遺構を検出することができなかった。

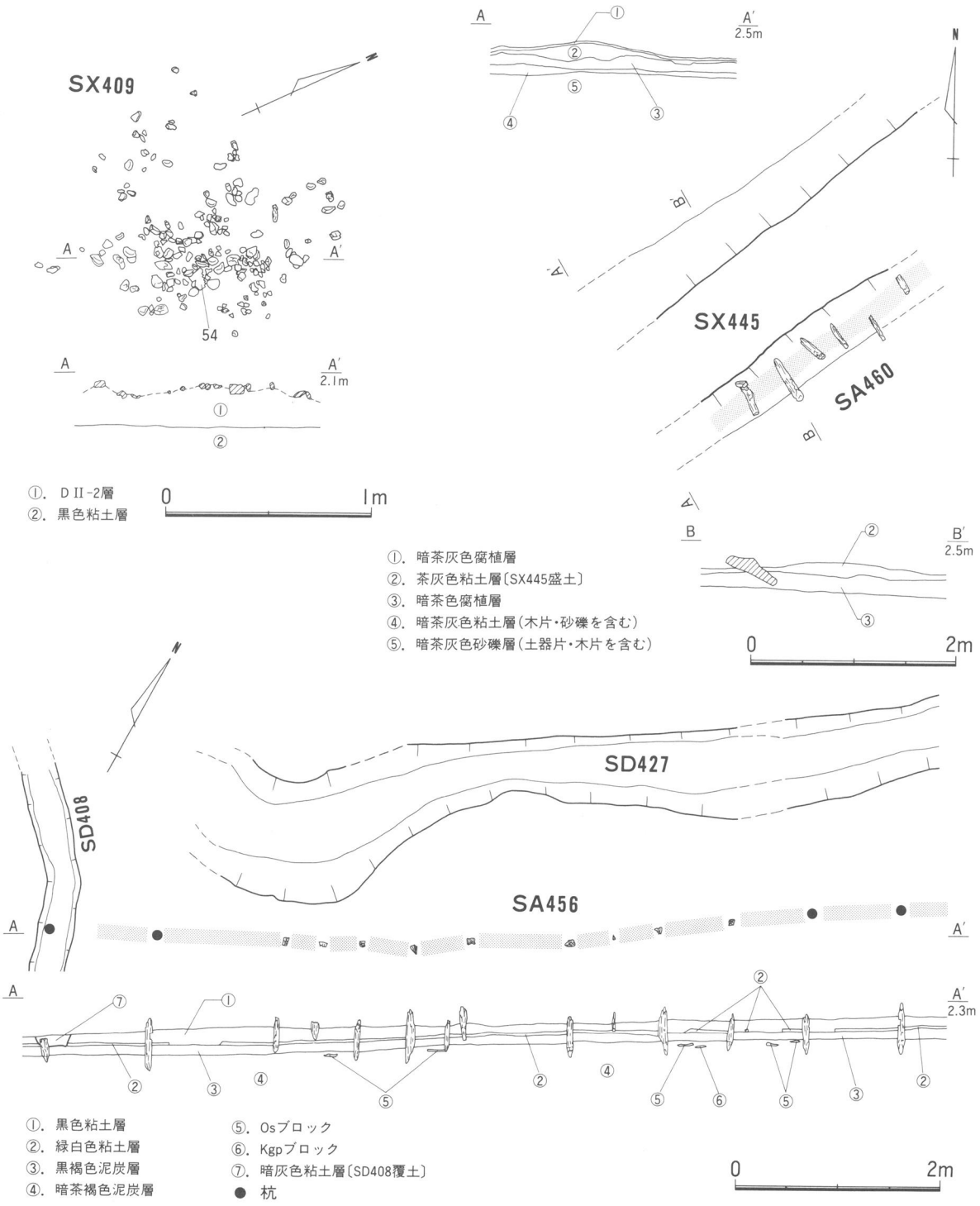
９．その他の遺構

ＳＸ409（礫群）

D11グリッド西部に位置し、ＤⅡ－２層中で検出された小礫を中心とする礫群で、径1.2mの中に２～９cm大の小礫が集中しており、土器片が若干出土している。年代は溝状遺構と同じく、弥生時代後期と考えられる。

ＳＦ423

D10グリッド北西部からD11グリッド南西部にかけて位置し、楕円形の土坑と考えられる。黒色粘土層上面より検出され、周辺の溝状遺構と同じく青緑色粘土・暗灰色粘土を覆土とする。長径約2.1m、短径約1.5m、深さ15～20cmを測り、壁は緩やかに立上がり、底面は平坦だが南へわずかに傾斜している。底面より10～15cmの高さで、長さ20～65cmの細長い木片が10本前後、集中して出土している。またさらに約15cm上には土器集中箇所遺構ＳＸ412がある。年代は溝状遺構と同じく、弥生時代後期と考えられる。



第16図　4区その他の遺構実測図　ＳＸ409礫群・ＳＡ456杭列・ＳＸ445・ＳＡ460

ＳＸ445（盛土状遺構）とＳＡ460

G13グリッド中央部で盛土状遺構（ＳＸ445）とそれに伴う杭列（ＳＡ460）が検出された。ＳＸ445はＳＲ440が埋まってゆく途上で、暗茶色腐植土層をいくらか掘り込んで、その上に茶灰色粘土を15cm程盛土したものと考えられる（茶灰色粘土層は通常厚さ５cm程である）。この遺構は東側がＳＲ440の浸食を受けており、わずか3.8m検出されたに過ぎず、上幅0.9～1.0m、下幅1.9～2.0m、高さ５～20cmを測る。

当時ＳＲ440は埋積が進んで、かなり浅くなっていたと考えられ、ＳＸ445はそれを渡るための道の役目を果たしていたと推定される。

ＳＸ445の南側斜面には自然木（樹木の枝と思われる）が６本、長さ2.0ｍにわたって斜めに差し込まれている（ＳＡ460）。それらは長さ25～60㎝、径４～７㎝で、特に杭としての加工は施されておらず、暗茶色腐植土層まで達している。ＳＸ445とＳＡ460の年代は、ＳＲ440の埋積が完了する直前の古墳時代前期と考えられる。

ＳＸ466（立木根）

Ｇ15グリッド南東部からＩ15グリッド北西部にかけての、微高地（ＳＸ437）と低地（ＳＸ472）との境界上の斜面より立木根（ＳＸ466）が検出された。それは長さ約16.3ｍ、幅約6.0ｍにわたり、ＤⅡ層中より出土した。立木根の中心はＨ15グリッド南東部付近で、主な根の太さは10㎝程である。年代はＳＸ472より若干遡るであろうが、弥生時代後期後半～古墳時代前期のうちに入ると考えられる。

ＳＸ470（炭化物）

Ｅ12グリッド南東部の土器集中箇所遺構ＳＸ424（やはり炭化物が検出された）の西隣に位置する。長径約1.3ｍ、短径約1.0ｍの楕円形状に炭化物が薄く検出され、土器片が10点前後出土した。年代はＳＸ424と同じく弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

第２表　４区溝状遺構一覧表

遺構番号	A	B	C(m)	D(m)	E(cm)	F	G	H
ＳＤ403	東西	N23°E～N50°E	9.5	0.3～0.6	10～25	レンズ状	－	－
ＳＤ404	東西	N57°E	9.9	0.5～0.7	10～20	逆台形	ＳＤ421を切る	－
ＳＤ405	東西	N63°E	8.2	0.3～0.5	10～25	逆台形	ＳＤ421を切る	土器[ＳＸ410](直上)
ＳＤ406	東西	N59°E	13.0	0.2～1.3	10～15	レンズ状	ＳＤ416に切られる ＳＤ419を切る	小型壺・土器片(直上)
(深掘部)			1.8	0.3～0.7	20～30	逆台形	－	木片(深掘部底)
ＳＤ407	南北	N40°W	7.6	0.6～1.0	5～10	逆台形	ＳＤ408・413を切る	土器[ＳＸ411](直上)
ＳＤ408	南北	N29°W～N43°W	9.0	0.2～2.5	5～15	レンズ状	ＳＤ407・422に切られる	土器[ＳＸ411](直上)
ＳＤ413	東西	N60°E	2.6	0.1～0.2	5	逆台形	ＳＤ407に切られる	－
ＳＤ414	東西	N68°E	4.2	0.1～0.3	5～10	逆台形	ＳＤ419に切られる	－
ＳＤ415	東西	N60°E	6.4	0.2～0.5	5～10	逆台形	－	土器片(直上)軽石(直上)
ＳＤ416	東西	N60°E	14.2	0.1～0.3	5～10	レンズ状	ＳＤ419に切られる	土器片(直上)
(溝状低地)			5.4	1.8～3.5	10～15		ＳＤ406を切る	－
ＳＤ417	南北	N33°W	4.4	0.2～0.4	5～15	逆台形	－	－
ＳＤ418北半	南北	N33°W	4.1	0.1～0.3	5～15	逆台形	－	－
ＳＤ419	南北	N20°W～N40°W	11.0	0.3	10～15	逆台形	ＳＤ406・420に切られる ＳＤ414・416を切る	－
ＳＤ420	東西	N67°E	2.4	0.8～1.0	5～10	レンズ状	ＳＤ419を切る	土器片(直上)木片(底)
ＳＤ421	南北	N30°W	1.9	0.2～0.4	5～15	逆台形	ＳＤ404・405に切られる	土器片(直上)
ＳＤ422	南北	N35°W	1.7	0.3～0.5	15～20	逆台形	ＳＤ408を切る	土器[ＳＸ411](直上)
ＳＤ425	南北	N43°W	7.7	0.1～0.3	5～20	逆台形	ＳＤ427に切られる	－
ＳＤ426	南北	N32°W	3.7	0.3～0.6	5～25	逆台形	－	－
ＳＤ427	東西	N58°E	18.0	0.1～0.7	5～30	逆台形	ＳＤ425・ＳＲ429を切る	－
ＳＤ428	南北	N32°W	6.4	0.2～0.3	5～20	逆台形	－	土器片(直上)木片・流木(直上・底)
ＳＤ430	東西	N55°E	12.1	0.5～1.0	10～15	レンズ状	ＳＲ429に切られる	木片(覆土中)
ＳＤ431	東西	N57°E～N66°E	8.9	2.0～3.6	5～10	レンズ状	－	－
ＳＤ432	東西	N60°E	10.3	0.5～0.8	15～30	逆台形	－	手捏土器・土器片(直上・覆土中)木片(直上)
ＳＤ433	東西	N60°E	13.7	0.9～1.5	10～25	逆台形	－	壺・甕・土器片(直上・覆土中・底)・板材・木片(覆土中)
ＳＤ434	東西	N66°E	6.4	0.3～0.7	5～15	逆台形	ＳＤ435に切られる	－
ＳＤ435	南北	N30°W	9.0	0.2～0.5	5～35	逆台形	ＳＤ434を切る	壺(直上)
ＳＤ436	東西	N61°E	10.7	不明	30	逆台形	－	－
ＳＤ446	南北	N27°W	11.5	0.2～0.7	10～30	逆台形	ＳＲ440に切られる	－
ＳＤ447	東西	N44°E～N58°E	13.9	0.2～0.7	5～35	逆台形	－	－
	南北	N16°W	7.8					
ＳＤ467	東西	N57°E～N80°E	26.8	0.7～1.4	15～35	逆台形	ＳＸ490を切る	土器片(覆土中・底)
ＳＤ491	東西	N72°E～N83°E	6.4	0.2～0.4	10～15	逆台形	ＳＲ440の浸食を受けている	－
ＳＤ4104	南北	N32°W	2.7	0.5～0.8	5～10	逆台形	ＳＲ440に切られる	－
ＳＤ4105	南北	N35°W	2.0	0.1～0.3	15	逆台形	ＳＲ440に切られる	－

A.溝の基本方向　D.下端幅　G.切りあい
B.方向　E.深さ　H.出土遺物(層位)[土器集中箇所]
C.検出長　F.断面形状

第２節　弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

１．土器

４区で出土した土器は土器集中箇所遺構、ＳＲ440、溝状低地ＳＸ490、その他の遺構の各々の出土の土器に大別した。それらは後述する「長崎４・５期土器」に属する。年代は弥生時代後期後半～古墳時代前期である。器種としては、大型壺、壺形土器、小型壺、小型高坏、甕形土器（台付甕脚台部を含む）、鉢、把手付土器、手捏土器があり、いずれの遺構でも大型壺、小型壺を含む壺形土器の占める割合が大きく、甕形土器の占める割合が小さい。大型壺は反転復元して口径25㎝以上のもので、複合口縁のもののみ出土した。またＳＲ440以東の４区の東半の遺構でのみ出土しており、西半では全く出土していない。胎土は他の壺形土器と比べてやや粗い。壺形土器は口径15～17㎝のものが多く、小型壺は器高13～16㎝のものが多いという点で、器高26～27㎝の壺形土器と区別される。

大型壺、小型壺を含む壺形土器の口縁部は、折返し口縁・単純口縁のものは外反するものが多いが、大きく外反するもの、外反の弱いものも見られ、複合口縁のものは外傾して立ち上がるもの、外傾あるいは直立気味に立ち上がるものがあり、直立して立ち上がるものも若干見られる。胴部はやや下の方で最大径を測り、稜をもつものと、稜をもたない球胴のものがある。折返しはやや厚いものと、薄いものがあるが面取りしたものが多く、丸く薄いものは少ない。そして比較的入念に作られているものもあるが、どちらかといえば粗雑な作りのものが多い。文様としては、どれも器表剝落が著しいせいか、縄紋や擬縄紋が認められるものはわずかで、肩部の円形浮文や折返し口縁・単純口縁のものは口唇部の小さな棒状浮文、複合口縁のものは口縁部の棒状浮文が貼付されているものが多い。

外来系の土器に関しては、35の小型高坏は伊勢湾地方からの搬入品と考えられ、52の小型壺は東遠地域の菊川様式の壺を模倣したものと考えられる。

（１）土器集中箇所遺構出土の土器

ＳＸ410出土の土器

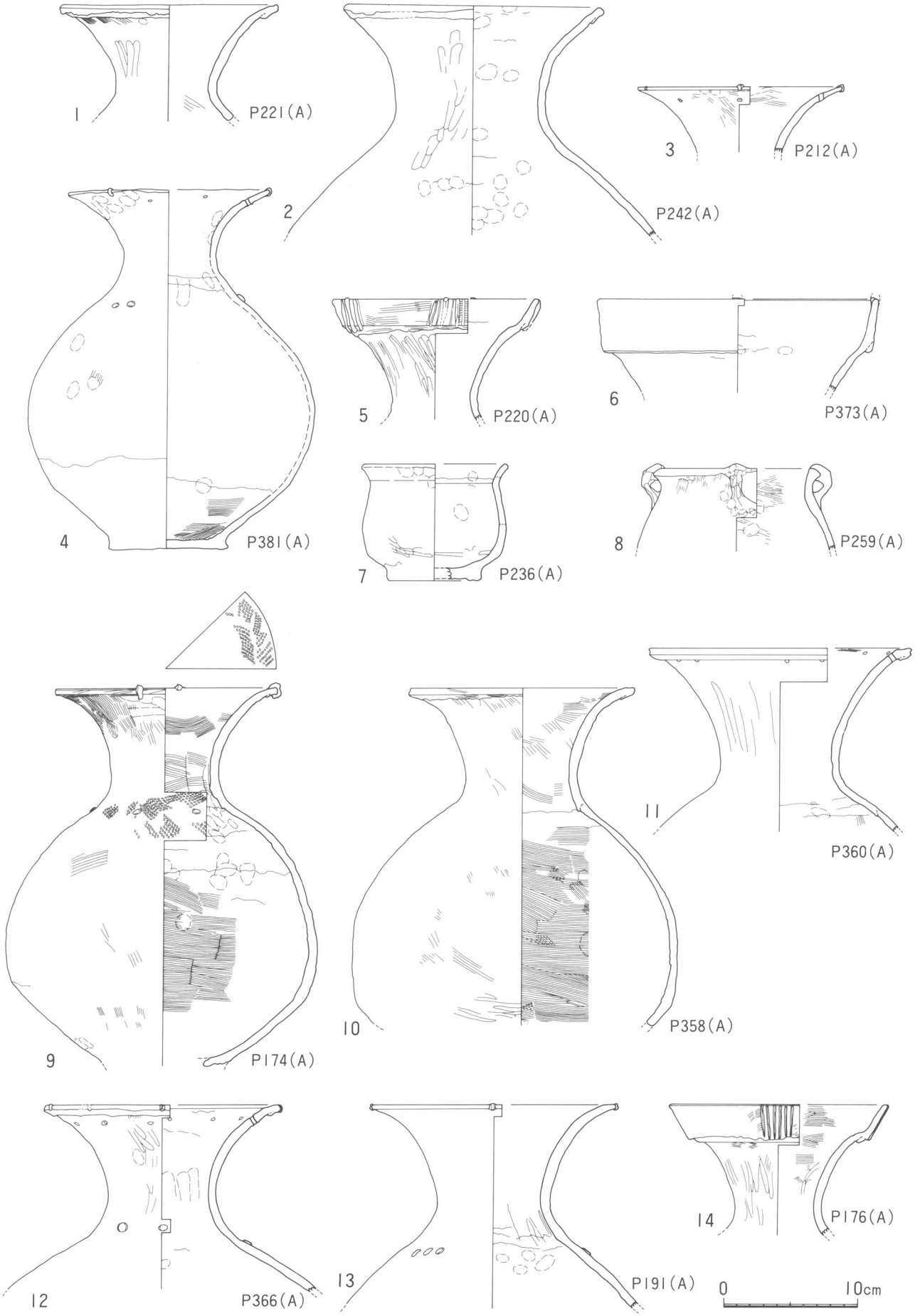
１～６・64は壺形土器、７は鉢、８は把手付土器である。１は折返し口縁で口径15.9㎝を測る。口縁部外面の折返しの下にナナメ方向のハケ目調整、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整が認められる。内面は器表剝落が著しく、調整は不明瞭である。折返しは比較的厚いが、作りはあまり入念ではなく、粘土のはみ出しを削り取っていない。２は折返し口縁で口径18.8㎝である。頸部外面の縦方向のヘラミガキ調整と胴部内面の指頭圧痕がわずかに認められる。折返しは薄く、簡単に面取りしている。３は単純口縁で口縁部は大きく外反する。口縁部内外面に横方向のハケ目調整がわずかに認められ、頸部外面は縦方向のハケ目調整の後、縦方向のヘラミガキ調整がなされたと考えられる。薄く仕上げられた口唇部には小さな棒状浮文が貼付されており、その少し下には小孔が４ヶ所内面から外面に向かって穿たれていて、そのうち２ヶ所は貫通していない。４は単純口縁で底部以外は多少欠損しているがほぼ完形である。口縁部は多少歪んでいるが、口径14.8㎝、底径8.0㎝、器高26.9㎝で、胴部のやや下の方で最大径21.3㎝を測る。口縁部は指頭押えで薄く整形されており、また底部内面に横方向のハケ目調整がわずかに認められる。また底面には木葉痕が見られる。そして口唇部に小さな棒状浮文が貼付されており、その少し

下には小孔が穿たれているという点は3に類似する。さらにこれには肩部に円形浮文が2個あるいは3個一組で貼付されている。5は複合口縁で口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部外面は横方向のハケ目調整、頸部外面は縦方向のヘラミガキ調整がなされている。口縁下端の整形は入念ではない。口縁部外面には3本一組の棒状浮文が貼付されている。6は幅広の折返し口縁で、口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部は面取りされており、小さな棒状浮文が貼付されていた痕跡がある。64は壺形土器の肩部で、勾玉や小玉を模した浮文が貼付されている。

7は鉢と考えられ、器高8.8㎝を測る。頸部のくびれは小さく、口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面は指頭押えで整形し、胴部外面は横方向のヘラミガキ調整を施していると考えられる。底には木葉痕がかすかに見られる。また胴部と底部の接合箇所内面には、丸棒の工具で強くなでた痕が認められる。そして口縁部には内外面ともに赤色塗彩が施されており、そこだけ鮮やかな橙褐色を呈している。8は把手付土器で緩やかに外反する口縁部に小さな把手を取り付けている。口縁部外面は縦方向のハケ目調整の後、ナデ調整を行っている。口縁部内面は横方向のハケ目調整が見られる。そして把手の周辺には取り付けの際の指頭圧痕が多く残っている。

ＳＸ411出土の土器

9～14は壺形土器、15・16は小型壺、17は台付甕脚台部、18は把手付土器である。9は折返し口縁で底部を除き完形である。口径16.3㎝、胴部のやや下の方で最大径23.2㎝を測る。口縁部から頸部上位にかけての外面には、縦方向のハケ目調整が、折返しには横方向のハケ目調整が見られる（各々の前後関係は一定しない)。また頸部内面や胴部内面には横方向のハケ目調整が、肩部から胴部にかけての内面には指頭圧痕がそれぞれ認められる。そして肩部外面にはＬＲ・ＲＬ縄紋が2段に、口縁部内面にはＲＬ・ＬＲ縄紋が2段にそれぞれ施されている。また口縁部端には小さな棒状浮文がほぼ等間隔に4個（1個は欠損している)、肩部には円形浮文が貼付されている。口唇部は簡単に面取りされており、折返しは非常に薄い。10は折返し口縁で口径16.7㎝を測る。口縁部から頸部にかけての外面は縦方向のハケ目調整で、内面は横方向のハケ目調整の後、ナデ調整をしている。胴部外面は器表剝落が著しいがハケ目調整の後、ヘラミガキ調整をしたと考えられ、内面は横方向、後にナナメ方向のハケ目調整が顕著である。折返しは薄いうえにかなり磨耗している。11は折返し口縁で、口縁部は横方向のハケ目調整の後、ナデ調整をしている。全体に器表剝落が著しいが、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整がかすかに認められる。折返しの下には2個一組の小孔が穿かれている（全周で5ヶ所と推定される)。折返しは比較的入念に作られており、口唇部を摘み上げて尖らせている。12は折返し口縁で全体に器表剝落が著しく、口縁部にナデ調整が認められる他は調整は不明瞭である。口唇部は面取りされており、小さな棒状浮文が貼付されている。またその下には小孔が穿たれていて、さらに肩部には円形浮文が貼付されている。13は単純口縁でこれも全体に器表剝落が著しく、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整が認められる以外は調整は不明瞭である。口唇部には小さな棒状浮文が貼付されており（全周で4ヶ所と推定される)、肩部には円形浮文が貼付されている。14は複合口縁で口縁部は外傾して立ち上がる。頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整、口縁部内面に横方向のハケ目調整がわずかに認められる。口縁部下端の整形はあまり入念ではない。複合口縁の外面に縦方向、6本一組の沈線が施されている。



第17図　4区出土土器実測図（1）弥生式土器・古式土師器

15は小型壺でほぼ完形、器高15.9㎝、胴部下位で最大径12.5㎝を測る。頸部から胴部にかけての外面にヘラミガキ調整がわずかに見られ、口縁部から頸部にかけての内面に横方向のハケ目調整が認められる。口縁部は折返しで、口唇部にキザミ目を施している。16は小型壺でほぼ完形、底径6.9㎝、器高15.3㎝、口縁部は複合口縁で直立して立ち上がり、胴部のやや下の方で最大径12.0㎝を測る。全体に器表剝落が著しく、頸部から胴部にかけての外面のヘラミガキ調整と、頸部内面の横方向のヘラミガキ調整がわずかに認められる。また底には木葉痕がかすかに残る。口縁部外面には３本一組と考えられる棒状浮文が、また胴部上位には円形浮文が貼付されている。17は台付甕脚台部と考えられ、底径6.0㎝と小さく、脚部は直線的に広がる。外面は縦方向あるいはナナメ方向のハケ目調整で、内面は指頭押え、ナデ調整が施されている。内外面の一部に煤が付着している。18は把手付土器で、直立して立ち上がる口縁部に把手を取り付けている。把手は指頭押えで整形していると見られ、取り付ける際の指頭圧痕も多く残っている。

ＳＸ412出土の土器

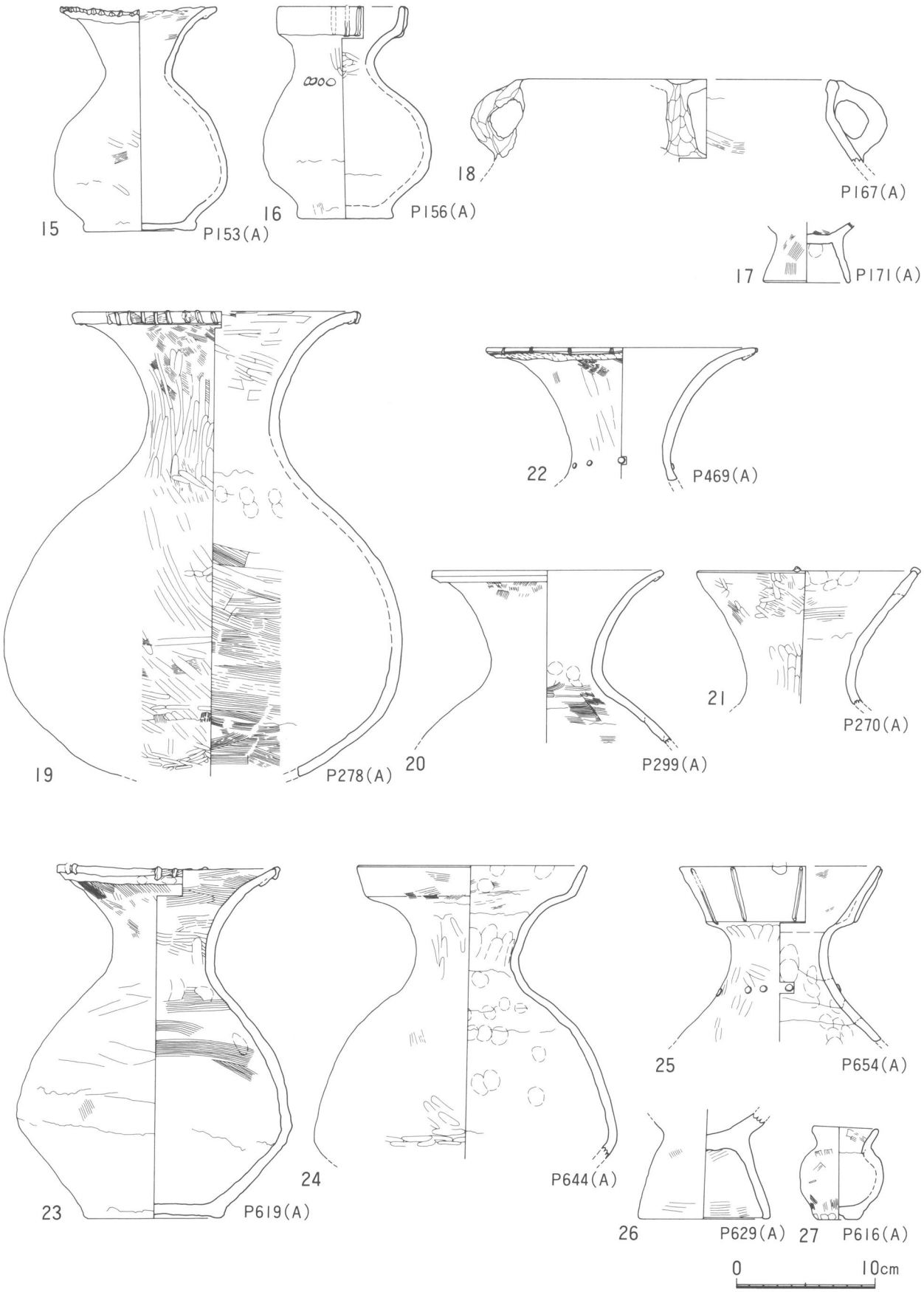
19～21は壺形土器である。19は折返し口縁で底部と口縁部・胴部の一部を欠損している。口径20.4㎝、胴部のやや下の方で最大径28.6㎝を測り、胴部下位で稜をもたず球胴を呈する。口縁部外面はナナメ方向の、内面は横方向のハケ目調整が施されており、頸部外面は縦方向の、内面は横方向のヘラミガキ調整がなされている。また胴部外面はヘラミガキ調整、内面は横方向のハケ目調整と見られる。折返しは薄く、あまり入念に作られていない。そして横方向のハケ目調整の後、直ちに小さな棒状浮文が貼付されたと考えられる。それは口唇部を全周するものではなく、一部に貼付されたようである。20は折返し口縁で、口径16.4㎝を測る。口縁部外面に縦方向の、肩部内面に横方向のハケ目調整、頸部内面に指頭圧痕が見られる。口縁部の折返しは薄いが、面取りされ、比較的入念に作られている。21は単純口縁で口縁部は外傾して広がり、口径15.5㎝を測る。全体に器表剝落が著しいが、口縁部外面にハケ目調整、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整がわずかに認められる。また口縁部内面に横方向のハケ目調整が見られる。口唇部に小さな棒状浮文が貼付されている。

ＳＸ424出土の土器

22は壺形土器で折返し口縁、口径19.3㎝で口縁部は大きく外反する。口縁部外面はナナメ方向のハケ目調整、頸部外面は縦方向のヘラミガキ調整がなされており、内面は器表剝落が著しく、調整は不明瞭である。口唇部に非常に小さな棒状浮文、頸部下位に円形浮文が貼付されている。折返しは粘土帯を口縁部外面に貼り付けて、指頭で押え付けているのみの粗雑な作りをしている。内面には煤が薄く付着している。

ＳＤ432・433内土器集中箇所出土の土器

23～25・55・59は壺形土器、26は台付甕脚台部、27は手捏土器である。23は折返し口縁で、口縁部と底部の一部を除きほぼ完形、口径15.6㎝、器高25.5㎝、胴部のやや下の方で明確な稜をもち、最大径19.8㎝を測る。口縁部は外面は縦あるいはナナメ方向、内面は横方向のハケ目調整の後、口唇部や口縁部内面はナデ調整を施している。頸部は外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキ調整と見られる。胴部は外面は器表剝落が著しく、内面の横方向のハケ目調整のみ認められる。また底には木葉痕がかすかに残る。



第18図　4区出土土器実測図（2）弥生式土器・古式土師器

折返しは指頭で簡単に整形しただけで、口唇部には2本一組の小さな棒状浮文が貼付されている。24は複合口縁で、口縁部はやや外傾して立ち上がり、口径16.5㎝を測る。全体に器表剝落が著しく、口縁部外面の横方向のハケ目調整と頸部外面の縦方向のヘラミガキ調整、口縁部内面の横方向のハケ目調整と指頭圧痕がわずかに認められる。口縁部に棒状浮文等が全く貼付されていない点が珍しい。25は複合口縁で、口縁部は外傾して立ち上がり、口径に比して丈が高い。頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整、内面に指頭圧痕が見られる。口縁部には棒状浮文がほぼ等間隔に貼付されており、口唇部には小さな棒状浮文が見られる。また頸部には円形浮文が貼付されている。55は折返し口縁の口縁部で、折返しの直下に小孔が内面から外面に向かって穿たれており（貫通していない)、櫛描き波状文が2段にわたって施されている。59は肩部で、やはり櫛描き波状文が2段にわたって施されており、その間に円形浮文が貼付されている。

26は台付甕脚台部で底径9.6㎝、脚部は直線的に広がる。全体に器表剝落が著しく、内面の横方向のハケ目調整以外は不明瞭である。胎土は非常に粗く、径3㎜以下の礫を多く含む。27は手捏土器で、口縁部は緩やかに外反し、ほぼ完形で口径4.5㎝、底径2.8㎝、器高6.6㎝を測る。口縁部は指頭で整形したと考えられ、底には工具によると思われる凹みがある。また胴部下位外面から底にかけて煤が付着している。

ＳＸ465出土の土器

28は壺形土器、29～31・66は大型壺である。28は単純口縁で口径15.2㎝を測る。全体に器表剝落が著しく、口縁部外面の縦方向、内面の横方向のハケ目調整、頸部外面の縦方向のヘラミガキ調整、内面の指頭圧痕と横方向のハケ目調整がわずかに認められる。口唇部に小さな棒状浮文が貼付されている。29は複合口縁で、口縁部は外傾して立ち上がる。全体に器表剝落が著しく、口縁部外面の横方向のハケ目調整のみ認められる。また口縁部端は指頭押えで整形したと考えられる。口縁部には8本一組の棒状浮文が貼付されている。胎土はやや粗い。30は複合口縁で、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部外面は数回にわたるナナメ方向のハケ目調整の後、下端に櫛状工具によるキザミ目を付けている。また上位に箆状工具によって撫でた痕が、下位にも撫でた痕がそれぞれ見られる。口唇部と口縁部端内面は指頭押えで整形したと考えられ、内面は少し突出している。また頸部上位外面にはナナメ方向の、口縁部内面には横方向のハケ目調整が見られる。胎土はやや粗い。31は複合口縁で、口縁部は有段気味に屈曲し、外傾して立ち上がる。口縁部外面には縦方向のハケ目調整が見られ、また下端は指頭によって整形している。頸部上位外面は縦方向のハケ目調整、下位外面はナナメ方向のハケ目調整の後、縦方向のヘラミガキ調整をしたと考えられ、頸部内面には横方向のハケ目調整が見られる。胎土はやや粗い。66は大型壺の肩部と考えられ、ナナメ方向のハケ目調整の後、円形浮文を貼付している。

ＳＸ4101出土の土器

32～34・56・57・60・63は壺形土器、35は小型高坏である。32は折返し口縁で、全体に器表剝落が著しく、調整は不明瞭である。折返しは丸く薄い。肩部外面と口縁部端内面に櫛状工具の刺突による擬縄紋が施されているとともに、円形浮文が貼付されている。口縁部端内面のそれは2個一組である。33は折返し口縁で、全体に器表剝落が著しく、口縁部内面の横方向のハケ目調整のみ認められる。折返しは

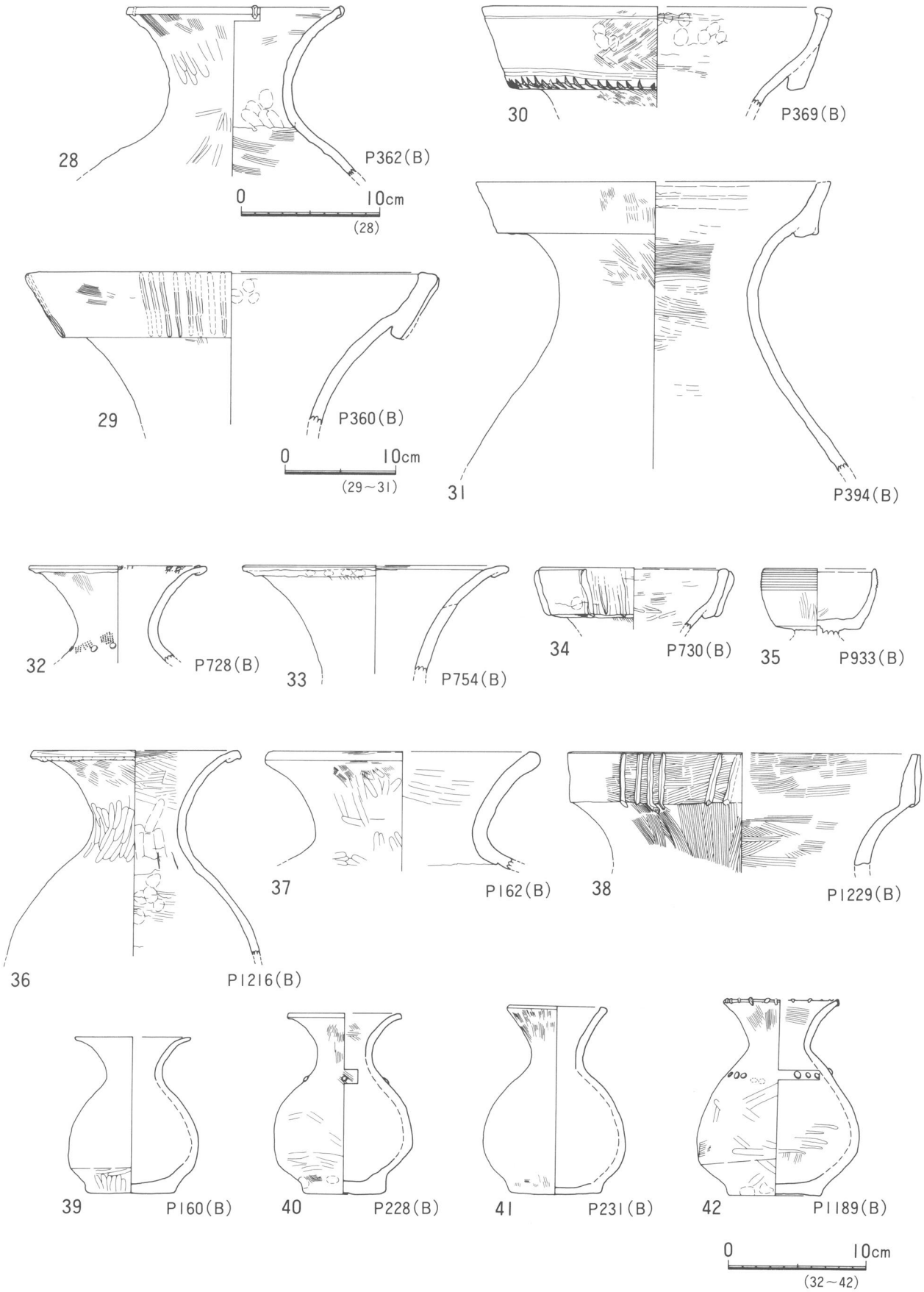
丸く薄く、指で摘んで整形したと考えられる。34は複合口縁で、口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁部下端外面と口縁部内面に、横方向のハケ目調整が見られる。口縁部に３本一組の棒状浮文が貼付されている。56・57は折返し口縁の口縁部で、56は内面にＲＬ縄紋が施されており、口縁部端に円形浮文が貼付されている。57は外面に縦方向、後にナナメ方向の、折返しに横方向のハケ目調整がなされており、口唇部にキザミ目、その直下に２個一組の小孔が施されている。60・63は肩部で、60は櫛描き波状文が、63はＬＲ縄紋と円形浮文が施されている。

35は小型高坏で、坏部の約２／３と接合部が若干残存しており、反転復元して口径8.0㎝と推定される。坏部は明確な段をもち、口縁部は垂直気味に内彎しながら立ち上がる。底部外面は指頭押えで整形し、内面中央部には脚部との接合の際の指頭圧痕が見られる。また全体にヘラミガキ調整がなされている。口縁部外面には８本一組の沈線が施されている。この小型高坏は形態、胎土が他の４区出土の土器とは異なり、伊勢湾地方からの搬入品と考えられる。尾張の廻間期に位置し、長崎遺跡では後述する「長崎５期土器」に属する。丸ヶ谷戸遺跡竪穴住居跡02（静岡県富士宮市）や小田部墳丘墓墳丘部（千葉県市原市）の出土例に類例がある。

（２）ＳＲ440出土の土器

36・37は壺形土器、38は大型壺、39～42は小型壺である。36は折返し口縁で、口縁部外面はナナメ方向、内面は横またはナナメ方向のハケ目調整、頸部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施されている。また肩部内面には横方向のハケ目調整と指頭圧痕が見られる。口唇部は横方向のハケ目調整の後、面取りし、折返しを指頭押えで整形している。37は単純口縁、短頸で口縁部は外反し、丸く厚い。口唇部に横方向、口縁部外面に縦方向のハケ目調整がわずかに認められる。38は複合口縁の大型壺で、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部に横方向のハケ目調整、頸部上位外面に縦方向、内面に横またはナナメ方向のハケ目調整がなされている。また口縁部に４本一組の棒状浮文が貼付されている。39～42は小型壺で、39は口縁部から頸部にかけての一部が欠損しており、底径6.4㎝、器高11.4㎝、胴部最大径9.3㎝を測る。口縁部外面に縦方向のハケ目調整、底部外面に縦方向のヘラミガキ調整が見られる。胴部から底にかけての一部に煤が付着している。40は口縁部が殆ど欠損しており、底径5.9㎝、器高13.2㎝、胴部最大径10.0㎝を測る。口縁部外面に縦方向のハケ目調整、底部外面と頸部内面にナデ調整が見られる。肩部に円形浮文が４ヶ所、等間隔に貼付されている。頸部から肩部にかけてと底の一部に、煤が付着している。41は完形で口縁部はわずかに外反している。口径6.6㎝、底径6.6㎝、器高13.7㎝、胴部最大径10.3㎝を測る。口縁部から頸部にかけてと、胴部下位から底部にかけての外面に、縦方向のハケ目調整が見られる。胴部下位の一部に煤が付着している。42は底部以外は一部欠損しており、底径6.5㎝、器高14.2㎝、胴部下位に稜をもち、そこで最大径11.8㎝を測る。口縁部外面に縦方向、胴部下位外面に横方向のハケ目調整、底部外面にナデ調整、胴部内面に横方向の板ナデ調整が見られる。底に木葉痕がわずかに残っている。口唇部には小さな棒状浮文が数本一組で貼付されている。また肩部には大きさの不揃いな円形浮文が貼付されており、一周していたと考えられる。胴部から底にかけての一部に、煤が付着している。

（３）溝状低地ＳＸ490出土の土器



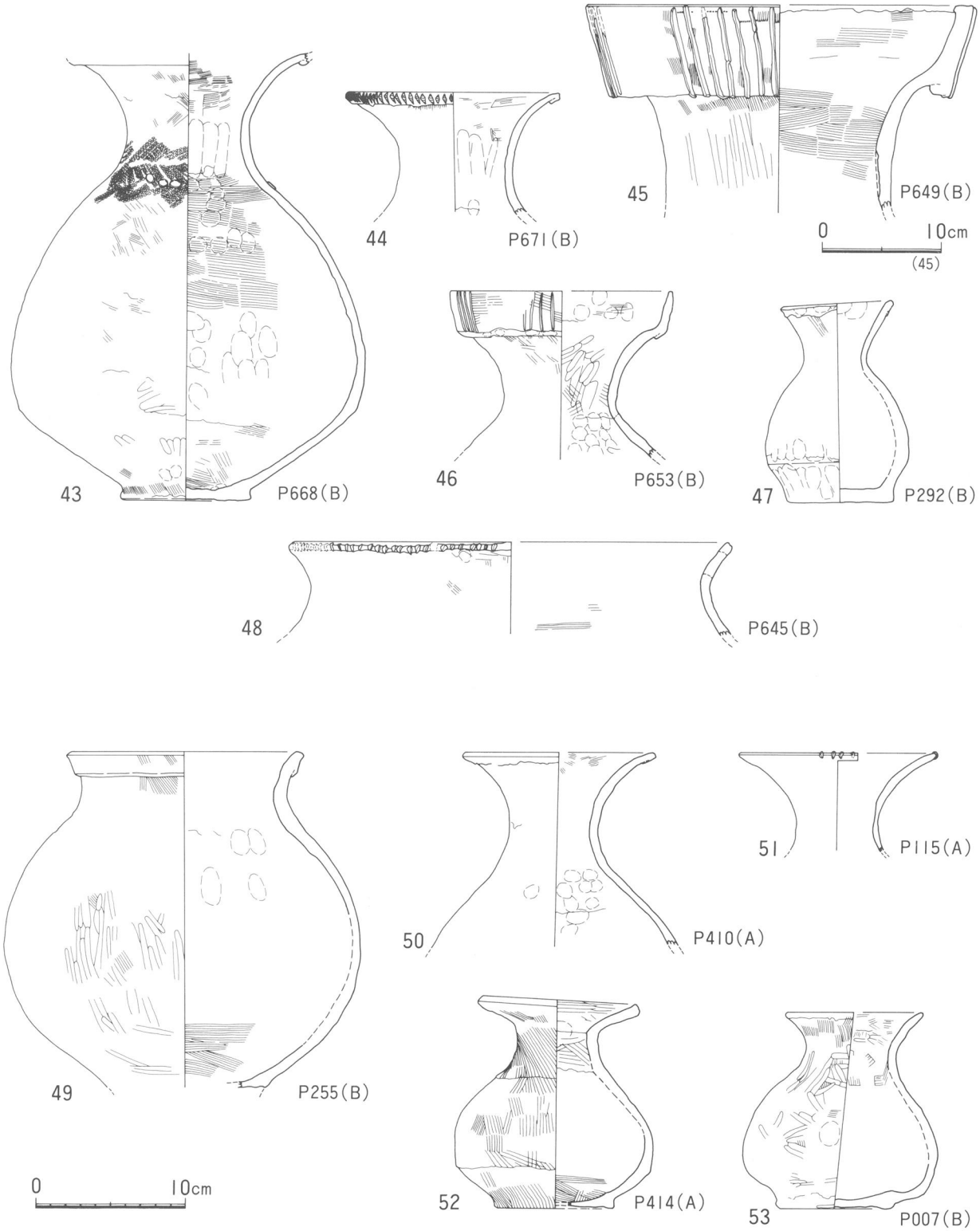
第19図　4区出土土器実測図（3）弥生式土器・古式土師器

43・44・46・65は壺形土器、45は大型壺、47は小型壺、48は甕形土器である。43は折返し口縁で、口縁部の殆どと頸部から胴部にかけての一部を欠損しており、底径8.6㎝、胴部のやや下の方で最大径を測る。口縁部から頸部上位、胴部上位、底部の外面にはナナメ方向のハケ目調整が見られ、口縁部内面には横方向のハケ目調整、頸部内面にはナデ調整、肩部から胴部にかけての内面には横方向のハケ目調整、底部内面にはナナメ方向のハケ目調整と指頭圧痕が認められる。また肩部外面にはＬＲ・ＲＬ・ＬＲ縄紋が３段にわたって施されており、その上に円形浮文が３個以上一組で貼付されている。44は折返し口縁で、口径13.9㎝を測る。口縁部から頸部にかけての外面にはヘラミガキ調整が見られ、口縁部端内面には横方向のハケ目調整、口縁部内面には横方向のヘラミガキ調整、頸部内面にはナデ調整が認められる。口唇部には櫛状工具によるキザミ目が、全周にわたって隙間なく施されている。折返しは面取りしている箇所とそうでない箇所があり、粗雑な作りをしている。45は複合口縁の大型壺で、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部と頸部上位外面に縦方向のハケ目調整、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整が見られる。また口縁部端内面は横方向のハケ目調整の後、ナデ調整がなされており、頸部内面には横方向のハケ目調整が認められる。口唇部はナデ調整がなされており、粘土が内側に少しはみ出している。口縁部には６～７本一組の棒状浮文が貼付されている。胎土はやや粗い。46は複合口縁で、口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁部には内外面とも、横方向のハケ目調整がわずかに見られ、内面と下端外面を指頭押えで整形している。また４本一組の縦の沈線が施されている。肩部内面には指頭圧痕が認められる。65は壺形土器の肩部で、くの字形の浮文が貼付されている。

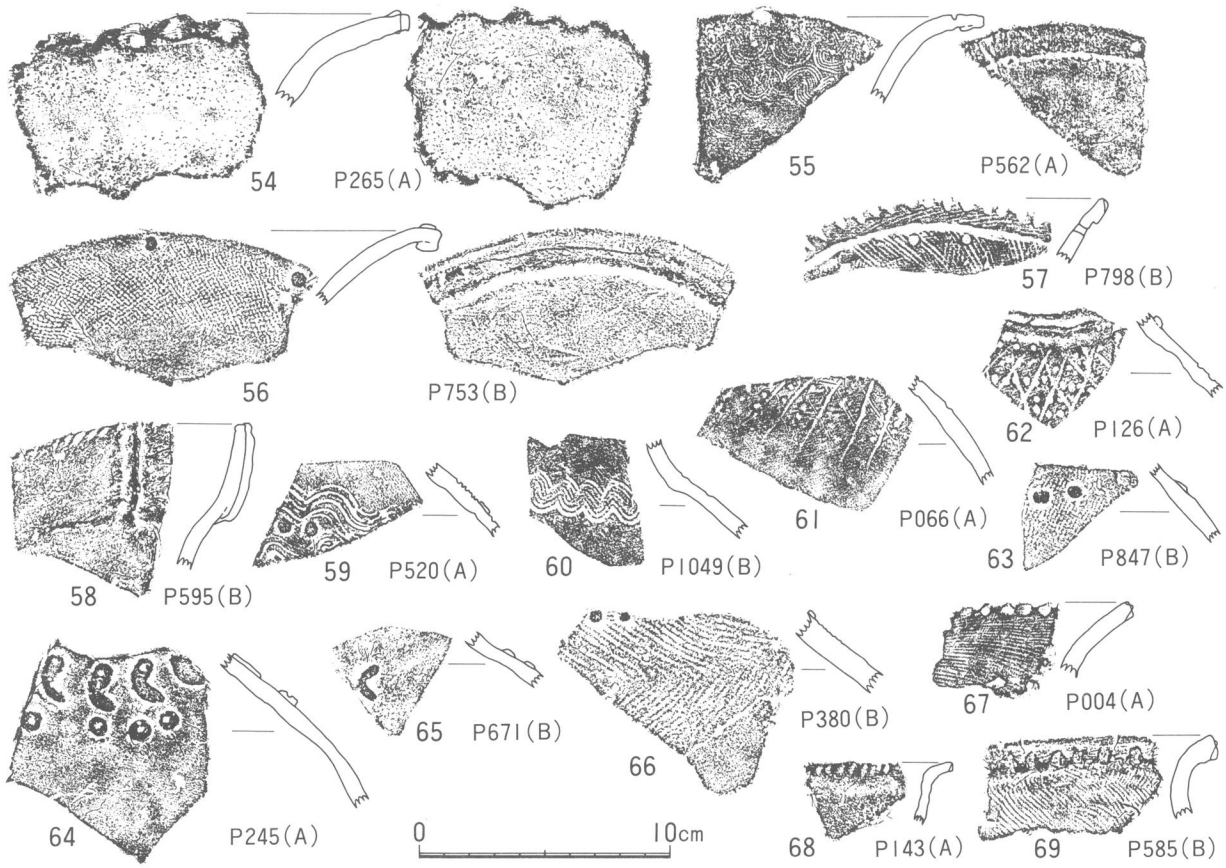
47はほぼ完形の小型壺で、口縁部はわずかに外反する。口径7.2㎝、底径7.1㎝、器高13.5㎝、胴部最大径9.5㎝を測る。口縁部は指頭押えで整形したと考えられ、折返しは非常に薄く、かつ摩耗している。底部外面と頸部内面にナデ調整、底に木葉痕が見られる。胴部から底にかけての一部に、煤が付着している。48は甕形土器で全体に器表剝落が著しく、調整は不明瞭である。口唇部に櫛状工具によるキザミ目が施されている。内外面とも一部に煤が付着している。胎土はやや粗い。

（４）その他の遺構出土の土器

49～51・54・58・61・62は壺形土器、52・53は小型壺、67～69は甕形土器である。49は微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。底部以外はほぼ完形であり、口径15.3㎝、胴部最大径24.0㎝を測る。折返し口縁で、短頸、頸部の屈曲は弱く、球胴を呈する。口縁部外面に横方向、頸部外面に縦方向のハケ目調整、口縁部から頸部にかけての内面に横方向のヘラミガキ調整、胴部下位内面に横方向のハケ目調整が見られる。折返しは面取りしてあり、比較的入念に作られている。50はＳＤ406直上のＤⅡ層中より出土した。折返し口縁だが、薄いうえにかなり摩耗している。頸部内面にナデ調整、肩部内面に指頭圧痕がわずかに認められる。51はＳＤ435直上のＤⅡ層中より出土した。単純口縁で全体に器表剝落が著しく、調整は不明瞭である。口唇部に４本一組の棒状浮文が貼付されている。54は壺形土器の口縁部と考えられ、礫群ＳＸ409で小礫に混じって出土した。口縁部は波状を呈する。58は複合口縁で、微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。口縁部端外面に櫛状工具によるキザミ目が施されており、口縁部に棒状浮文が貼付されている。61・62はともに肩部で、ＤⅡ層や土器集中箇所ＳＸ411を切るＳＲ401（中世）の堆積土中より出土した。61は格子目状の沈線と列状の連続刺突が施されており（沈線は一方は１条、もう



第20図　4区出土土器実測図（4）弥生式土器・古式土師器



第21図　4区出土土器実測図（5）弥生式土器・古式土師器（拓影）

一方は2条で前者は後者より後で引かれている)、62はそれらが施されているうえに、横位の突帯が貼付されている。

52はＳＤ406直上のＤⅡ層中より出土した。口縁部から胴部にかけての一部を欠損しており、口径10.1cm、底径7.7cm、器高14.2cm、胴部のやや下の方で稜をもち、そこで最大径13.1cmを測る。全体に多少歪んでおり、口縁部は大きく外反する。また底は剝離して薄くなっている。口縁部外面には縦またはナナメ方向、頸部外面にはナナメ方向、胴部外面から底部外面にかけては縦方向のハケ目調整が見られ、また口縁部内面には横方向、頸部内面には横またはナナメ方向、底部内面には横方向のハケ目調整が認められる。口唇部は少し摘んで肥厚化させ、面取りしている。この小型壺は胎土は在地のものなので、東遠地域の菊川様式の壺を模倣したものと考えられる。53は低地ＳＸ472のＤⅡ層中より出土した。口縁部を一部欠損しているが、ほぼ完形で、底径7.3cm、器高13.2cm、胴部下位で最大径13.0cmを測る。全体に形が非常に歪んでいる。口縁部外面に縦方向のハケ目調整、頸部外面に縦方向のヘラミガキ調整が見られ、また口縁部から頸部にかけての内面に、横方向のハケ目調整、頸部内面にナデ調整、底部内面に横方向のハケ目調整が認められる。底に木葉痕が残っている。67～69はすべて口縁部で、櫛状工具によるキザミ目が施されている。67は攪乱中、68はＤⅡ層中、69は微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。67は横方向のハケ目調整がなされ、面取りされた口唇部に大きなキザミ目が施されている。また煤が付着している。68は口唇部は薄く、細かいキザミ目が施されている。69は口唇部は横方向、口縁部はナナメ方向のハケ目調整がなされており、口唇部は面取りされて厚く、大きなキザミ目が施されている。

２．石器

４区では磨製石斧・礫器（刃物）・有溝石錘・台石・磨石・敲打器・置砥石などの石器や穴・溝のある加工軽石がかなりの量出土した。

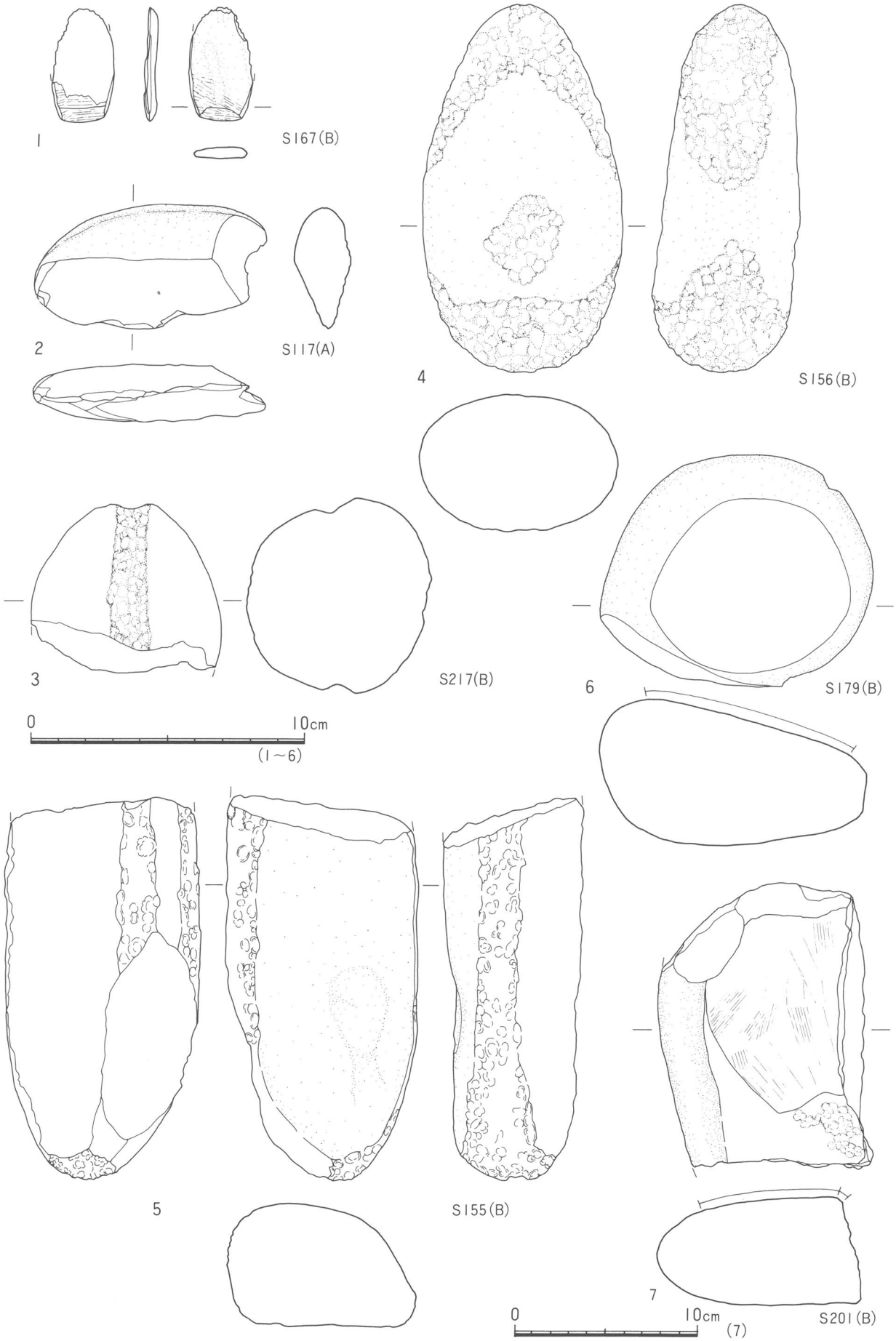
１は磨製石斧で、微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。刃部以外は半分程剝離していて、また基部・胴部が若干欠損している。磨製石斧としては小型で、長さ4.1㎝、幅2.2㎝、厚さは0.4㎝と薄い。かなり使用したと見られ、刃角は鈍い。石材は黒色粘板岩と考えられる。２は礫器（刃物）で、ＳＤ432内の土器集中箇所で出土した。円礫の長軸に平行して刃部を設けた、あるいは折損した円礫を利用して刃部としたものと考えられ、使用による剝離が認められる。長さ4.4㎝、幅8.5㎝、厚さ2.0㎝を測る。３は有溝石錘で、ＳＲ440の護岸杭列ＳＡ443の杭の間から出土した。半欠品で側面に敲打による溝が抉り込まれている。残存長6.0㎝、幅7.4㎝、厚さ7.0㎝を測る。石材は異剝面カンラン岩である。４・５は敲打器で、ともに微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。４は長さ13.4㎝、幅7.2㎝、厚さ5.1㎝を測り、上下端に明瞭な敲打痕が認められる。形状から石錘の未製品の可能性もある。５は上半や右側面の一部を欠損しているが、柱状を呈すると考えられ、残存長13.8㎝、幅6.9㎝、厚さ4.4㎝を測る。叩きによって側面の稜を潰している。６は磨石で、微高地ＳＸ437のＤⅡ層中より出土した。一部欠損で、残存長8.4㎝、残存幅9.7㎝、厚さ4.9㎝を測る。円礫の上面のみを研磨している。７は置砥石で欠損しており、残存長15.2㎝、残存幅10.1㎝、厚さ6.1㎝を測る。上面と右側角に砥面が認められる。

これらの石器の年代は伴出土器や遺構から、弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

３．木製品（礎板を含む）

４区では農具・容器類・建築材ほかの木製品（1～14）と板材や鼠返しを再利用した礎板・柱根（15～39）が出土した。前者は概ねＳＲ440河床上やその護岸杭列付近から出土している。後者に関しては、「掘立柱建物跡」の項で法量や特徴について述べているので、ここでは前者と、後者の中でも鼠返しと考えられるもの（15－１・15－２、16－１・16－２、26）とホゾ穴等の加工が多く施されている板材（22、23）ついて詳述することとする。なおこれらの木製品の年代は、ＳＲ440や掘立柱建物跡と同じく、弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる。

農具では鍬（鋤）、掘り棒、竪杵、田下駄、把手付槽がある。１は４本歯の組合せ鍬または鋤で、ＳＲ440河床上より出土した。身部の残存長45.8㎝、幅17.3㎝で、刃部の長さは32.5㎝と長い。着柄部は欠損しており、先端は使用のため摩滅していると思われる。刃部から着柄部まで平滑につくられている。樹種はアカガシ属の一種である。２は把手付槽の把手付近で、護岸杭列ＳＡ443とＳＡ485の間から出土した。両側に２本づつ把手のある田舟の一部と考えられる。把手の先端は欠損している。３・４は竪杵で、ともにＳＲ440河床上より出土した。３は握部で折れている半欠品で、また縦方向に半分程割れている。握部は縦削りで細く造り出されており、搗部は長さ42.0㎝を測る。搗部端はあまり突出していない。４も半欠品で、搗部端は丸味をもって突出しており、使用痕が認められる。樹種はアカガシ属の一種である。５は掘り棒で、ＳＲ440河床上より出土した。全体に欠損は少なく、残存長50.6㎝、幅は身の部分で6.6㎝、柄の部分で2.6㎝、厚さ1.7㎝で、柄の部分は身の部分に比べて短い。断面は楕円形を呈し、頭頂部には突起のあった痕跡がある。雌鹿塚遺跡（静岡県沼津市）の出土例に類例がある。この堀り棒はそ

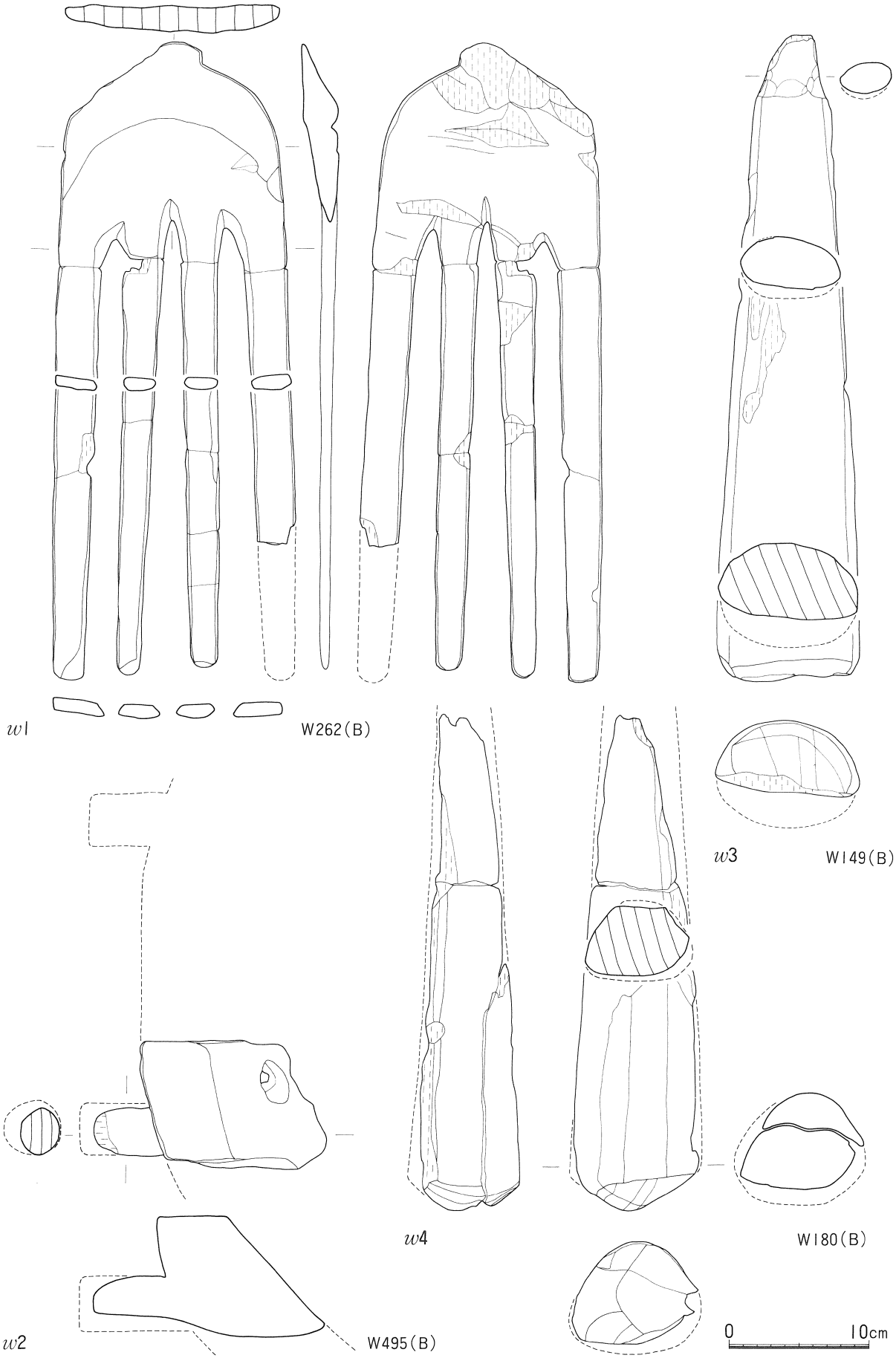


第22図　4区出土石器実測図

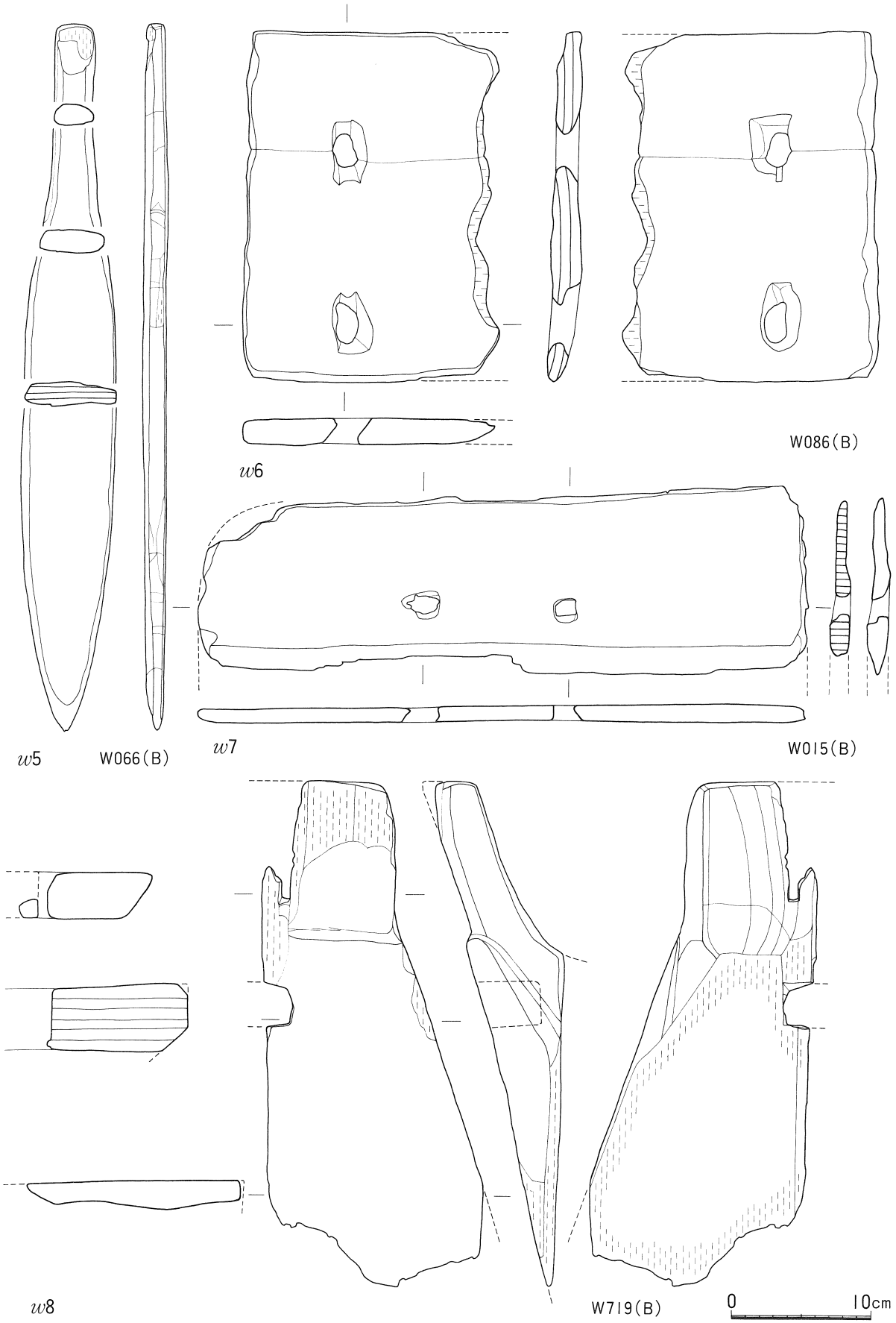
れに比べて柄の部分がかなり短い。鋤と同じような使われ方をしたと考えられる。樹種はスギである。6・7は田下駄で、6はＳＲ440河床上より出土し、7は護岸杭列ＳＡ477の横板に使用されていた。6は右側半分を欠損しているが、4穴がある横長型と考えられる。長さ24.9㎝、厚さ2.1㎝で、表面は木目の凹凸が残り、断面もやや彎曲している。緒穴の形は不整形である。7も4穴がある横長型だが、足板の面積は6よりも大きいようである。後方半分が欠損しており、全体に摩滅が著しい。厚さ1.4㎝、2孔間距離約10㎝を測る。足板の中央に低い足台が造り出されているようで、緒穴の形は方形である。

容器類では鉢と高杯がある。9は楕円形の鉢で大型、平底である。護岸杭列ＳＡ443とＳＡ485の間から出土した。長軸方向に切断した半分程が残存しており、長さ38.8㎝、幅24.1㎝、器高9.3㎝と想定される。立ち上がりは長辺の一方は内彎気味に立ち上がるが、もう一方は緩やかに外反気味に立ち上がる。また短辺は直線的に立ち上がる。底部外面は平坦で、器壁の厚さはほぼ一定している。外面には鱗状の調整痕、内面の口縁部付近には浅く細かな調整痕が見られる。内面のみ黒く塗られている（黒漆か？）。14は組み合せ式の高杯脚台部及び、裾部と脚部を結合するためのホゾで、ＳＲ440河床上より出土した。脚台部は欠損が著しいが、円形を呈すると考えられ、器高6.7㎝で、底径は33.6㎝と想定される。裾に向かって緩やかに外反し、底は平坦で、中央は丸く刳り抜かれている。中心部には5×3㎝の長方形の孔が穿たれており、そこにホゾが残存していた。また孔はホゾより大きいため、楔状の木片を挟み補強している。

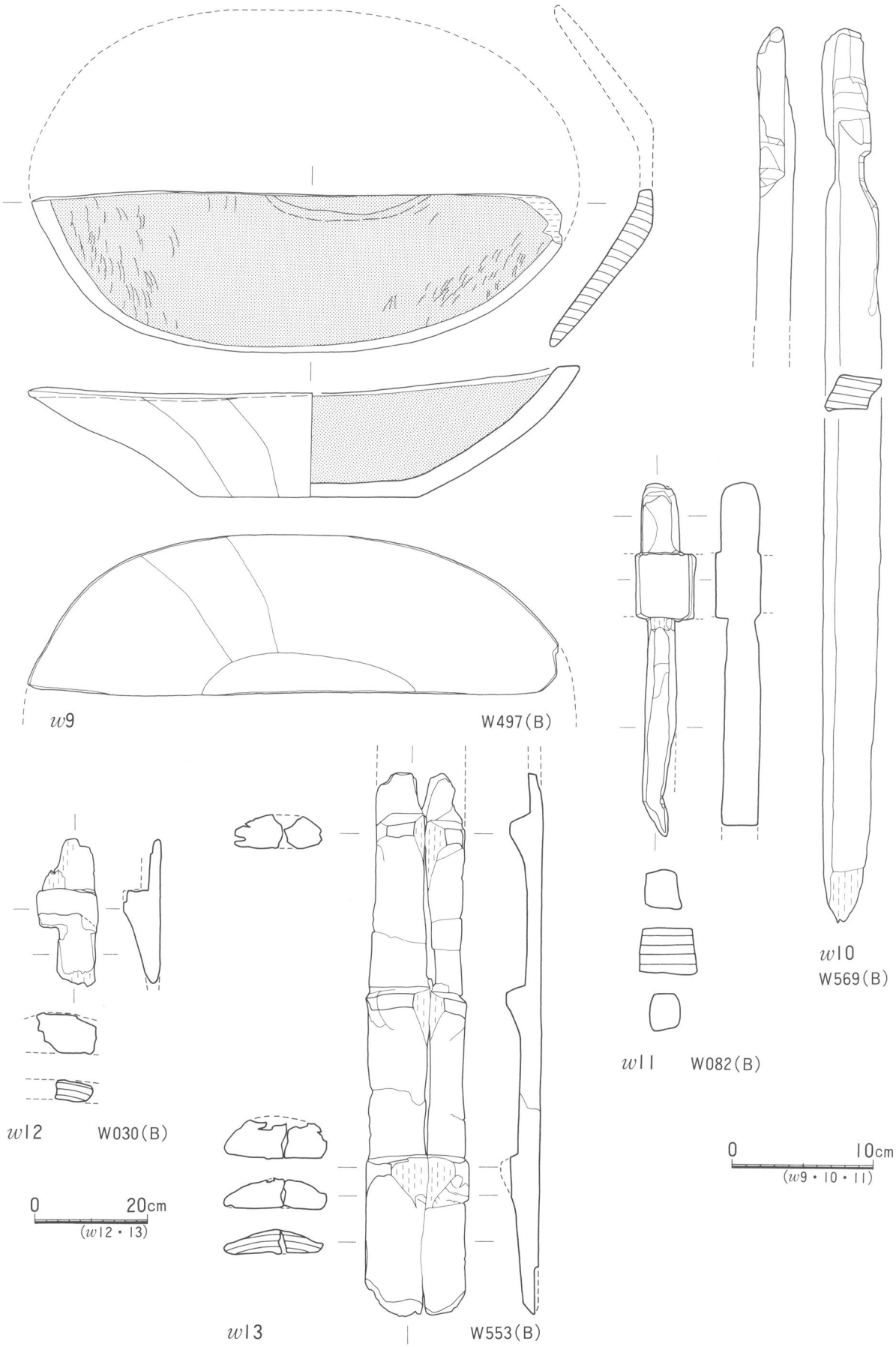
建築材ほかでは梯子・板材・ホゾ材・鼠返し・杭・不明木製品がある。12・13は梯子で、12はＳＲ440河床上より出土し、13は護岸杭列ＳＡ443付近で出土した。12は踏台部の破片で、全体に欠損・摩滅が著しいが上面はほぼ平坦で、踏み面をほぼ垂直に残し、以下を抉って内彎させていると考えられる。13はいくつかに割れた状態で出土したが、上部を欠損し、3段の踏台部が残存していると考えられる。幅18.0㎝、段と段との間隔約30㎝、踏み面の奥行き3.5㎝程である。やはり踏台部の上面は平坦で、以下を抉って内彎させている。横断面はカマボコ形を呈する。全体に欠損が多いが、下段の踏台部の一部に加工痕が認められる。22・23は板材で、おそらく高床式倉庫の部材のひとつと考えられ、ホゾ穴等の加工が多く施されている。22は上端が切断されており、残存長44.5㎝、幅17.7㎝、厚さ3.9㎝で、上端右側が抉られている。上部に3.9×6.7㎝の大きな横長のホゾ穴、その下に3.0×2.0㎝、2.0×1.0㎝の小さな縦長のホゾ穴が両側縁に沿って2ヶ所、また中央に2.4×3.0㎝の小さな横長のホゾ穴がそれぞれ穿たれている。また下端には深さ8.3㎝のホゾ受けの切込みが設けられている。23は下端が切断されていて、残存長44.8㎝、幅18.6㎝、厚さ4.0㎝を測る。中央部に4.5×6.0㎝の大きな横長のホゾ穴を中心にして、その上に2.3×1.3㎝、2.5×2.0㎝の小さな縦長のホゾ穴が2ヶ所、下には1.5×2.0㎝の小さな横長のホゾ穴が見られる。また上部に1.8㎝四方の小さなホゾ穴、右側縁に2.8×1.3㎝の小さな縦長のホゾ穴が穿たれている。左側縁下部に浅い欠き込みが施されている。11はホゾ材と考えられ、ＳＲ440河床より出土した。長さ4.5㎝、幅4.3㎝、厚さ3.2㎝の方形の部分を造りだし、その下を若干くびれるように加工している。15－1・15－2は隅丸方形の鼠返しで、長軸方向に切断した半分程が残存しており、長辺63.9㎝である。中央部に方形の穴が穿孔されており、その周りは礎板に転用するために削り取った痕跡がある。16－1・16－2は鼠返しとしては小型で、中央部の穿孔もはっきり認められないが、加工方法から隅丸方形の鼠返しと考



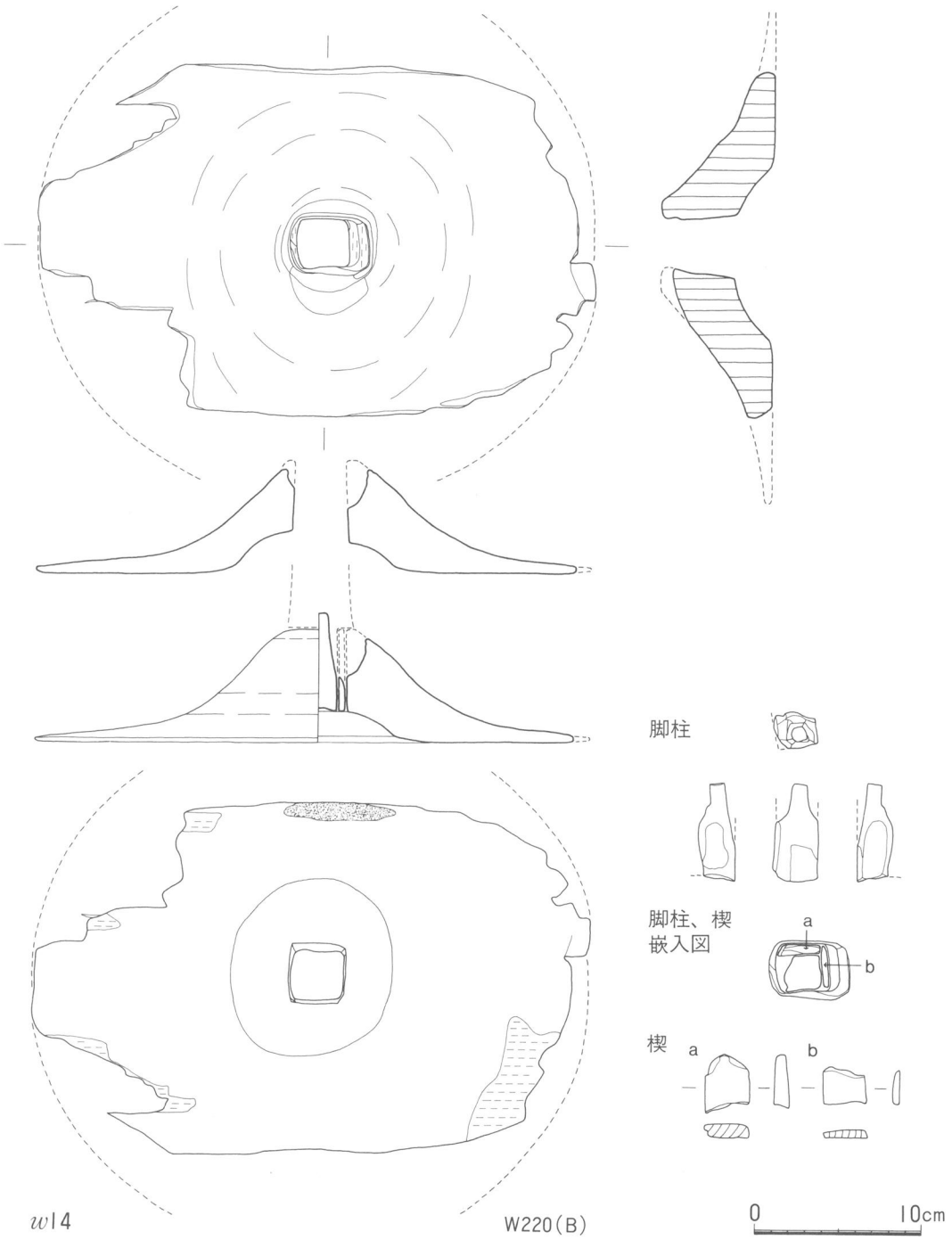
第23図　4区出土木製品実測図（1）



第24図　4区出土木製品実測図（2）



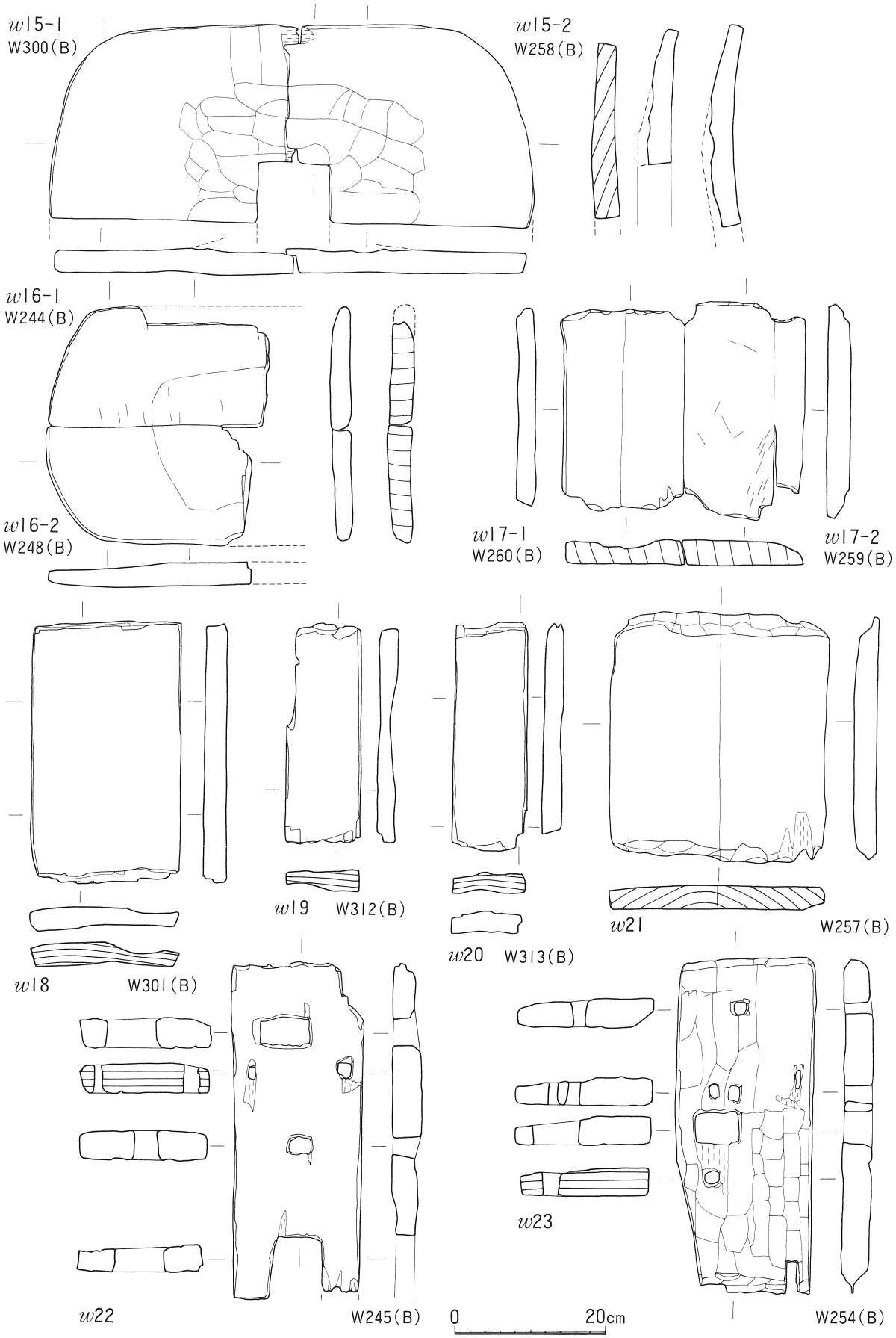
第25図　4区出土木製品実測図（3）



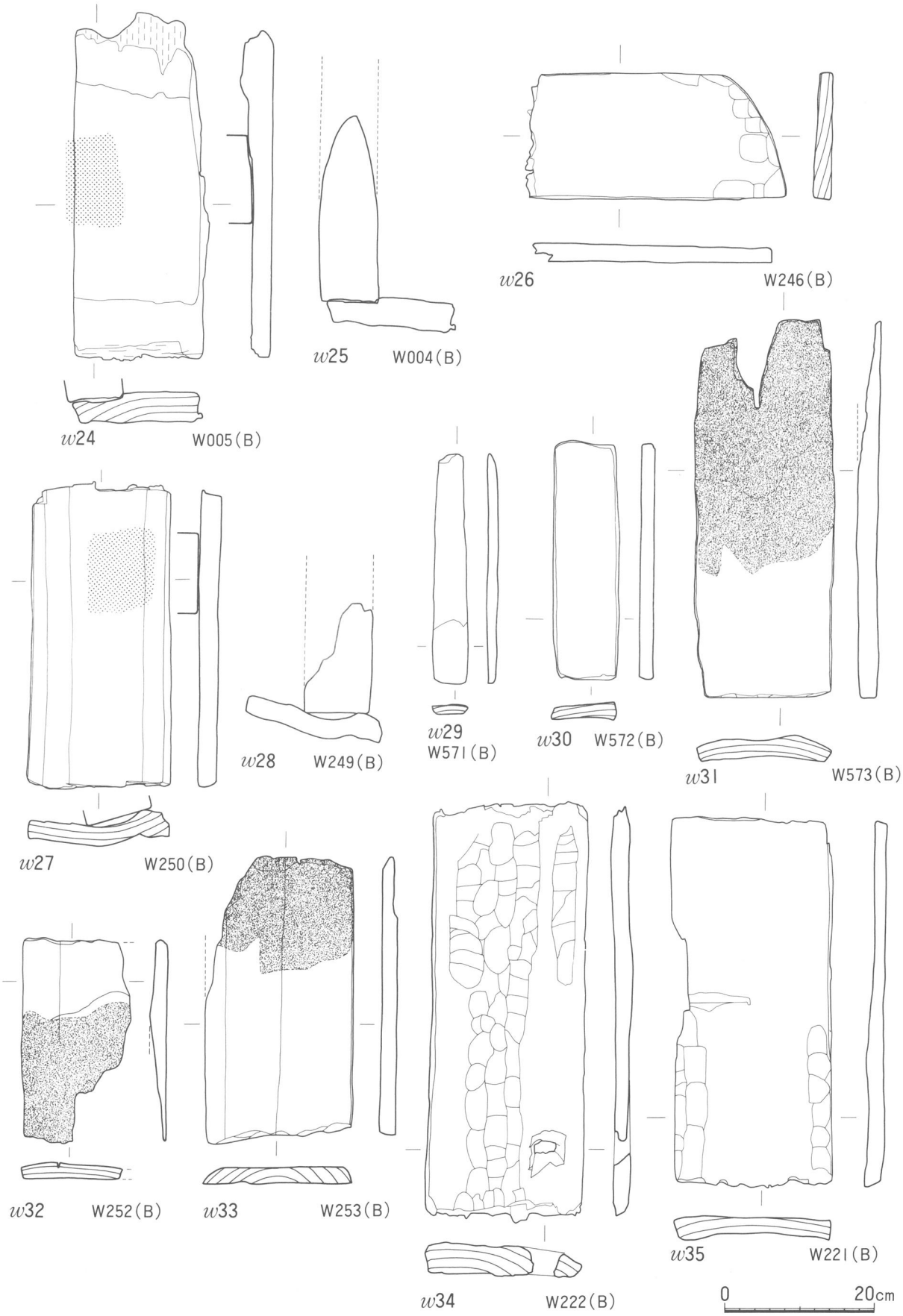
第26図　4区出土木製品実測図（4）

えたい。短軸方向に切断した半分程が残存しており、短辺30.7cmを測る。26も加工方法から、隅丸方形の鼠返しを長軸方向、短軸方向に切断したものと考えられる。10は護岸杭列ＳＡ443の杭の一例で、残存長63.6cmを測る。頭部に抉りが見られる。

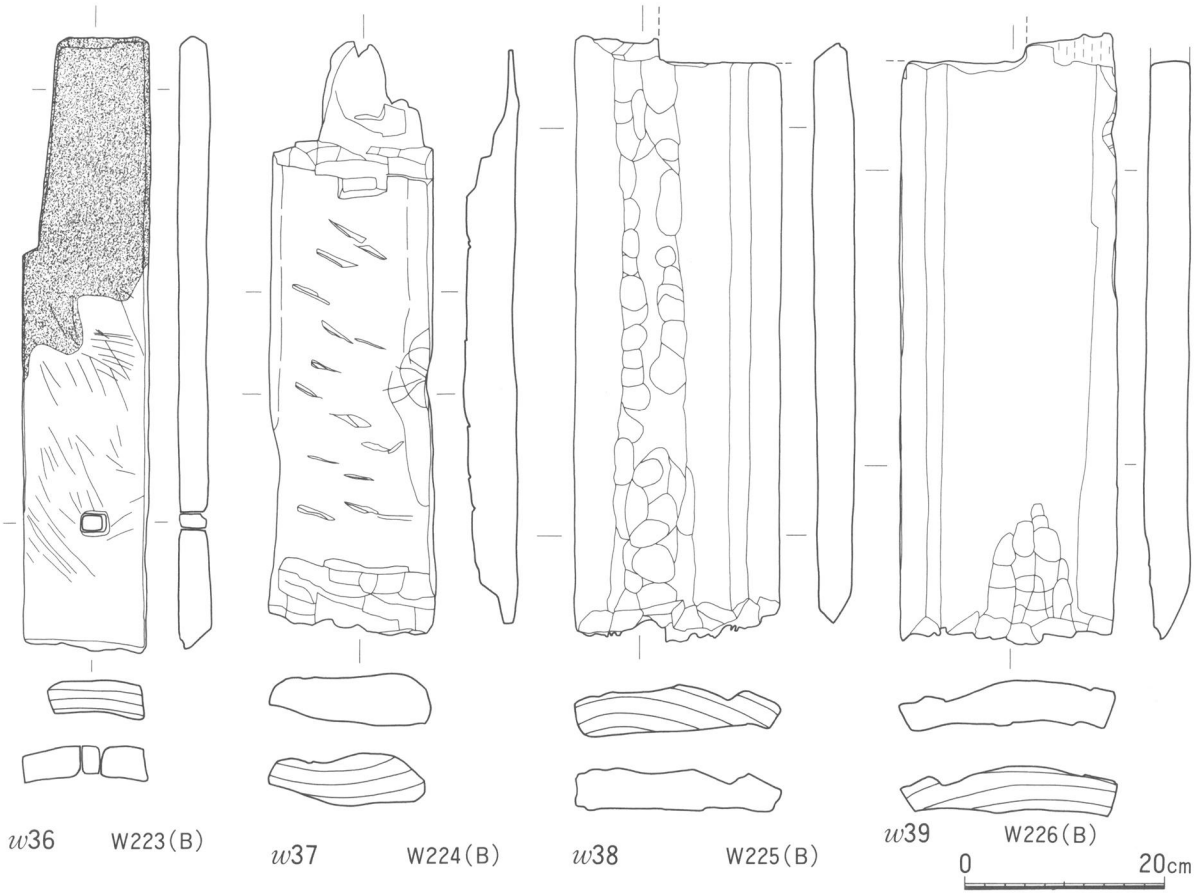
8は護岸杭列ＳＡ443の杭の間より出土した不明木製品で、波よけなどの船の部材の一部かもしれない。上部は把手のように造り出されていて、下部は徐々に広がる形で、左半分と下端は欠損している。中央部にホゾ穴がある。



第27図　4区出土木製品実測図（5）礎板



第28図　4区出土木製品実測図（6）礎板



第29図　4区出土木製品実測図（7）礎板

第３節　中世の遺構

中世の河道ＳＲ401は調査区の南西からほぼ中央部北側に検出されたが、工程上、２ヶ年にわたって調査された。この河道はＣ層を切っているが、河道の底面から出土した上限の土器は平安時代中期の灰釉陶器であることや河道出土遺物が灰釉陶器から13世紀の山茶椀の時期まで連続しており、灰釉陶器が混入とはいいがたいなどの点から、Ｃ層の堆積はそれより以前に終了していた可能性が高い。なおＳＲ401は下層遺構を浸食しているため、弥生から古墳前期と考えられる土器片を混入しているが、いずれも砕片であり、二次的な在り方を示していた。この河道からは馬の埋葬４箇所と橋状遺構が検出された。

１．馬埋葬

馬埋葬１

調査区南側で検出され、歯や下顎骨が認められた。川岸に沿っており、レベルは安定している。胴部以下の骨が認められず、当初より頭部のみ埋葬したのか、それとも胴部以下が河川の流れによって流失したのかの判断材料はなかった。

馬埋葬２

頭骨と頸椎、肋骨などが認められた。部位が乱れているが、河川の流れの影響で流失したものかあるいは当初より上肢部分がみられなかったのかの判断はできなかった。カワラケ小皿が出土している。

馬埋葬３

橋状遺構に最も近接して検出された。当初、頭骨から寛骨、大腿骨など肢骨まで認められたため１体が横転した状態で死に絶えたものと判断したが、下顎骨が２体分存在することが、金子先生の御指摘で判明した。橋脚の下とこの埋葬の周辺に遺物が多く、笹塔婆もこの埋葬にともなっている。

馬埋葬４

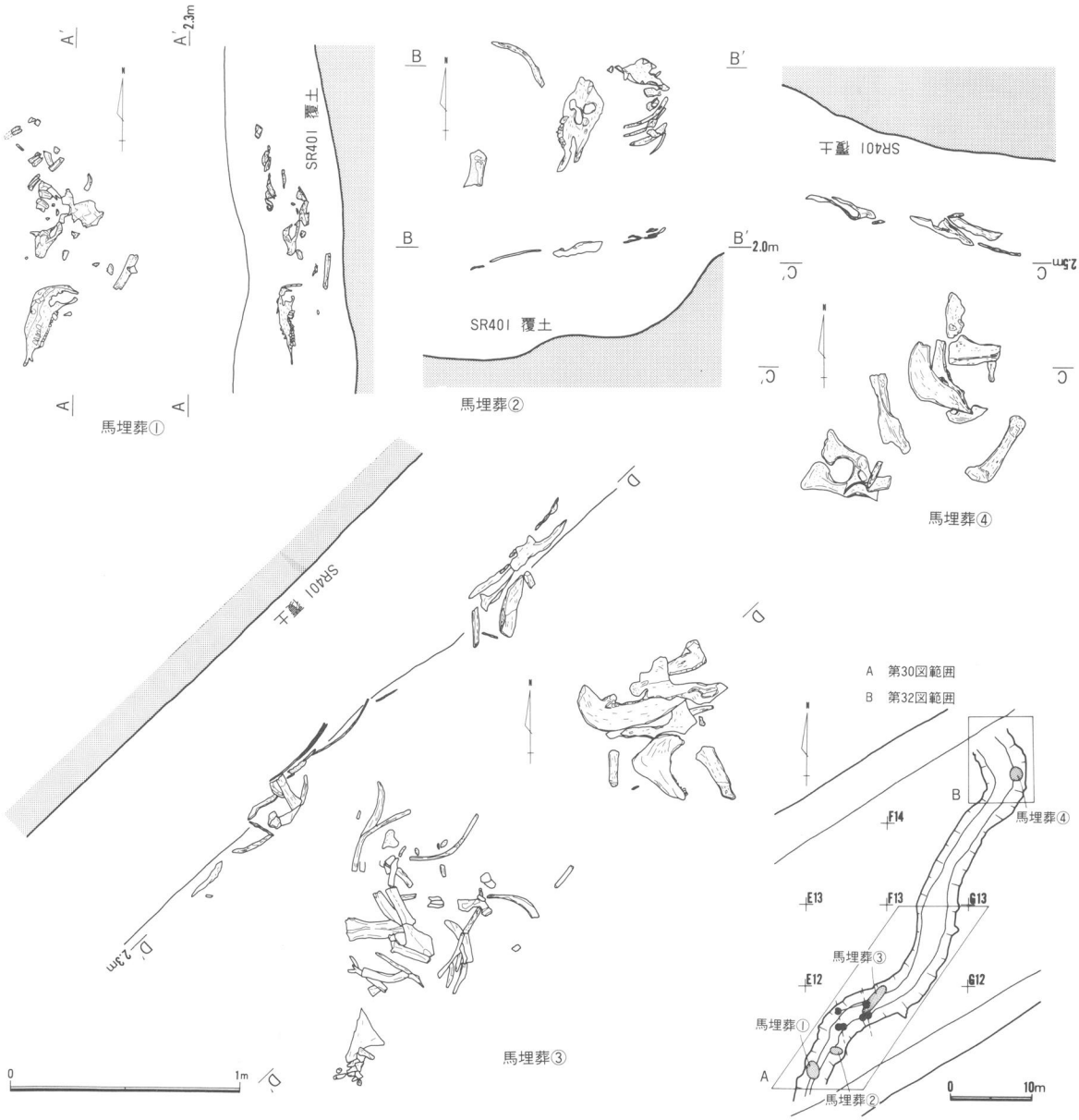
この埋葬は馬埋葬１から３までと距離をおいて存在し、Ｇ13グリッドから寛骨や下顎骨を中心に散在していた。検出された位置が河川の攻撃斜面にあたることから個体の位置も移動し、なおかつ小さい骨は移動、流失したものと判断された。

２．橋状遺構ＳＸ402

ＳＲ401に架設されたもので、橋脚部分が残っていた。橋脚は川の両岸に直径15cmほどの杭を４本打ったもので、本来、上部に板や丸太を並べてあったものと考えられる。また川幅の中間地点には、途中で支える杭は認められなかったため、川幅が狭いか、水量の少ない河川にかけられたものと推定される。また南側では同じ大きさの杭が２本みられるので、架け直しがあったことをを想定している。杭の範囲からすれば橋は幅2.7m長さ５m前後ではないだろうか。

橋脚の下部分、流心では長さ15から10cmの円礫が分布していた。また川岸に沿った部分で木枝を並べたソダが両側から認められた。これは直径５cm前後の杭を10本ほど並べ、それが横木を渡し、ソダと重なっている状況が認められた。杭は南では横だおしとなっており、本来、小形の杭列はソダとともに岸側に立っていた護岸施設であると考えている。なおソダと杭は水平に倒れており、河道が埋まる頃に倒壊したと推定された。

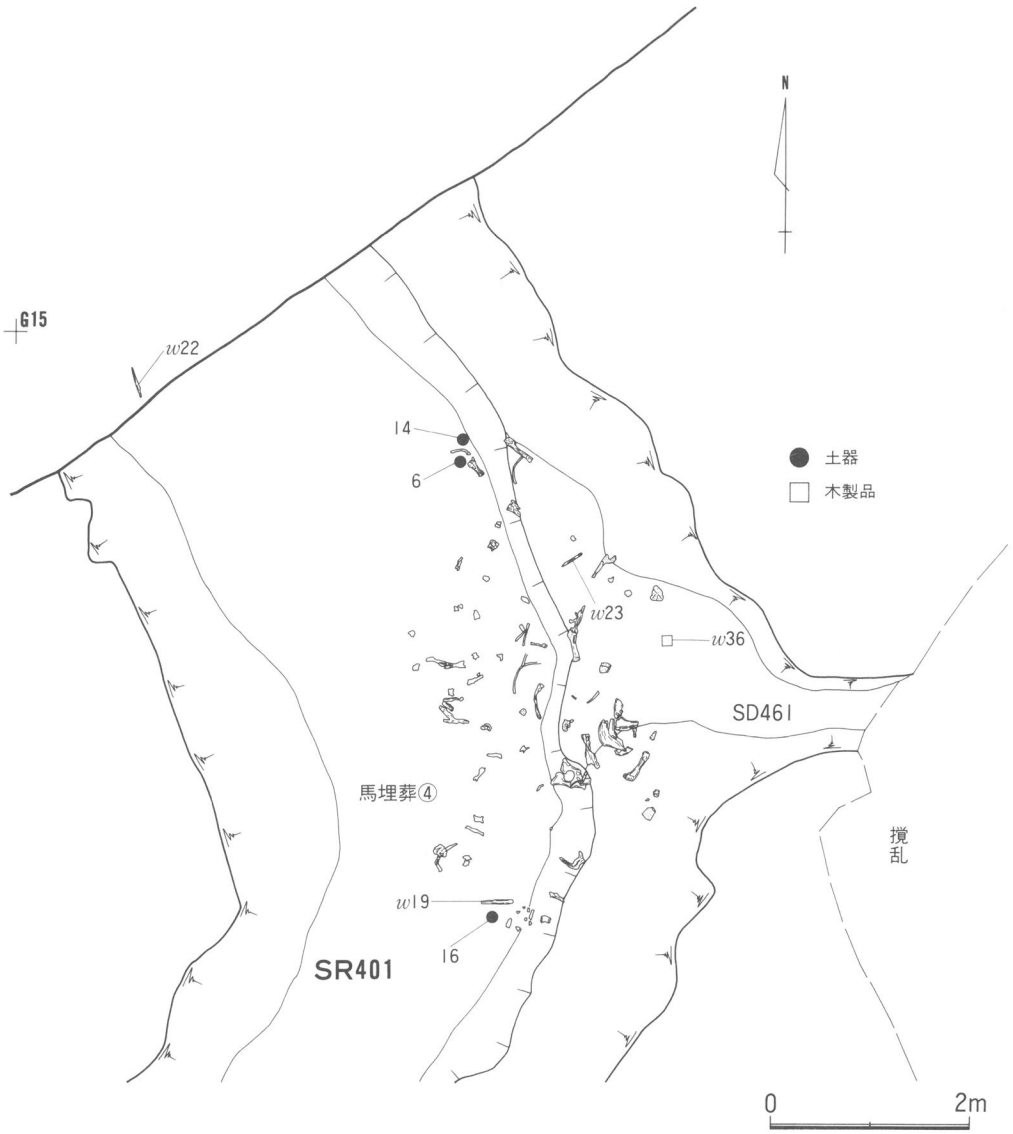
第30図　4区河道SR401実測図



第31図　4区馬埋葬集成図（1）

3．河道ＳＲ401

ＳＲ401はＥ11からＧ15グリッド、南から北へ貫流したと考えられる。一部、古墳時代の前期の河道ＳＲ440を切っていた。この河道からは、塔婆、金剛草履、漆椀ほか木製品と陶磁器を含め広義、土器が出土した。この河道は弥生、古墳前期の遺構を浸食していたので、これらの時期の土器砕片が出土したが、いずれも二次的な在り方をしめしていたので、馬埋葬には関係しないと考えられる。木製品は橋状遺構から北側にほとんどが検出され、馬埋葬から距離をおいて検出されているので、河道の流心部から出土したものは移動したものと理解できる。また馬埋葬３の対岸にあたる位置では墨書のある塔婆、七本塔婆が認められ、出土状態や遺存状態からさほど移動していないと考えられる。馬埋葬４は他の埋葬と距離をおいて検出されており、この埋葬にともなった塔婆類や土器類が単純に理解できる。



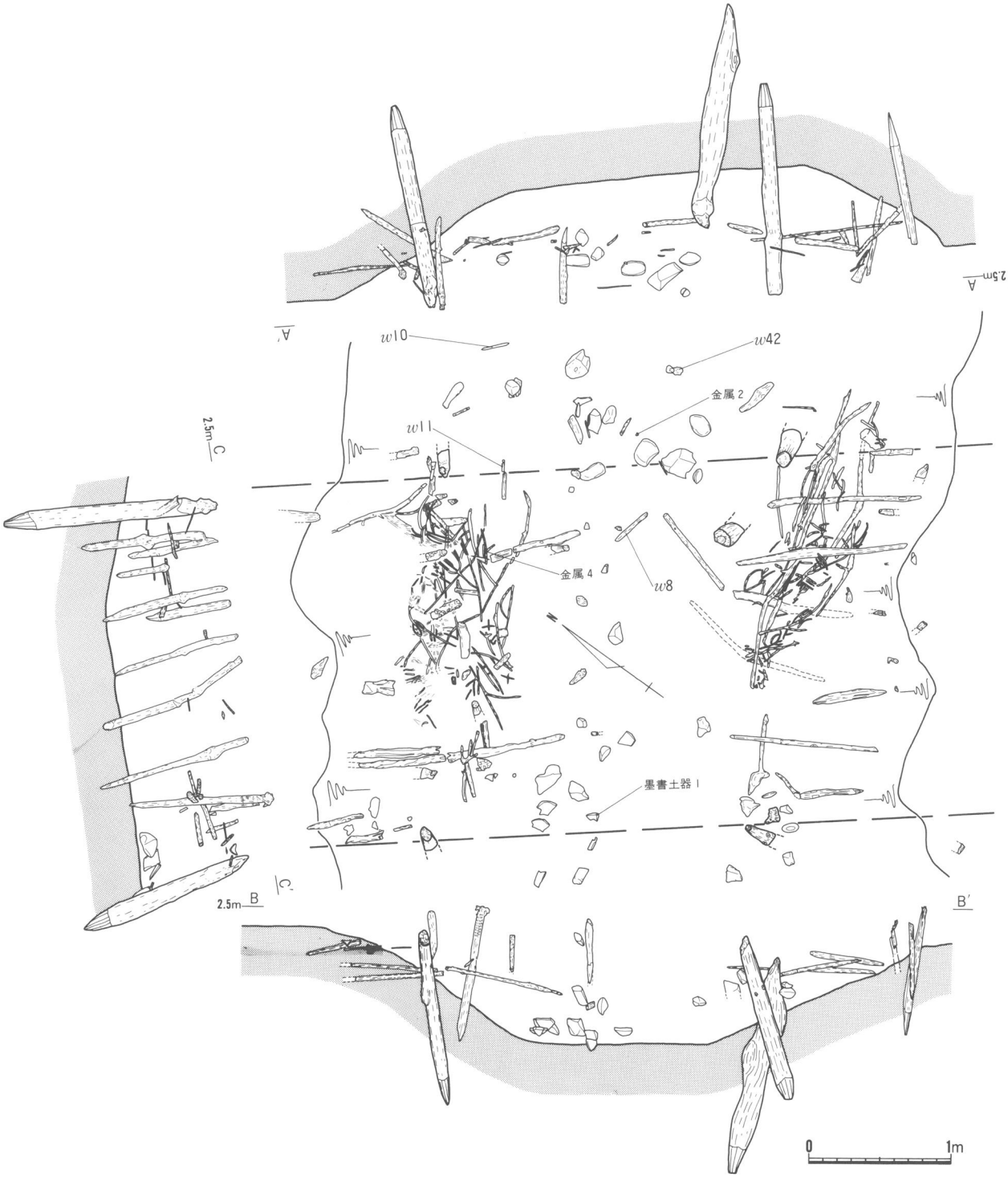
第32図　4区馬埋葬集成図（2）

第4節　中世の遺物

ＳＲ401からは広義、土器の灰釉陶器碗、皿、山茶椀、小皿、壺、甕などの瓷器、瓷器系陶器とカワラケ、貿易陶磁と塔婆、金剛草履などの木製品と佐波理鋺、鍔、カスガイなどの金属製品が出土した。

1．陶磁器

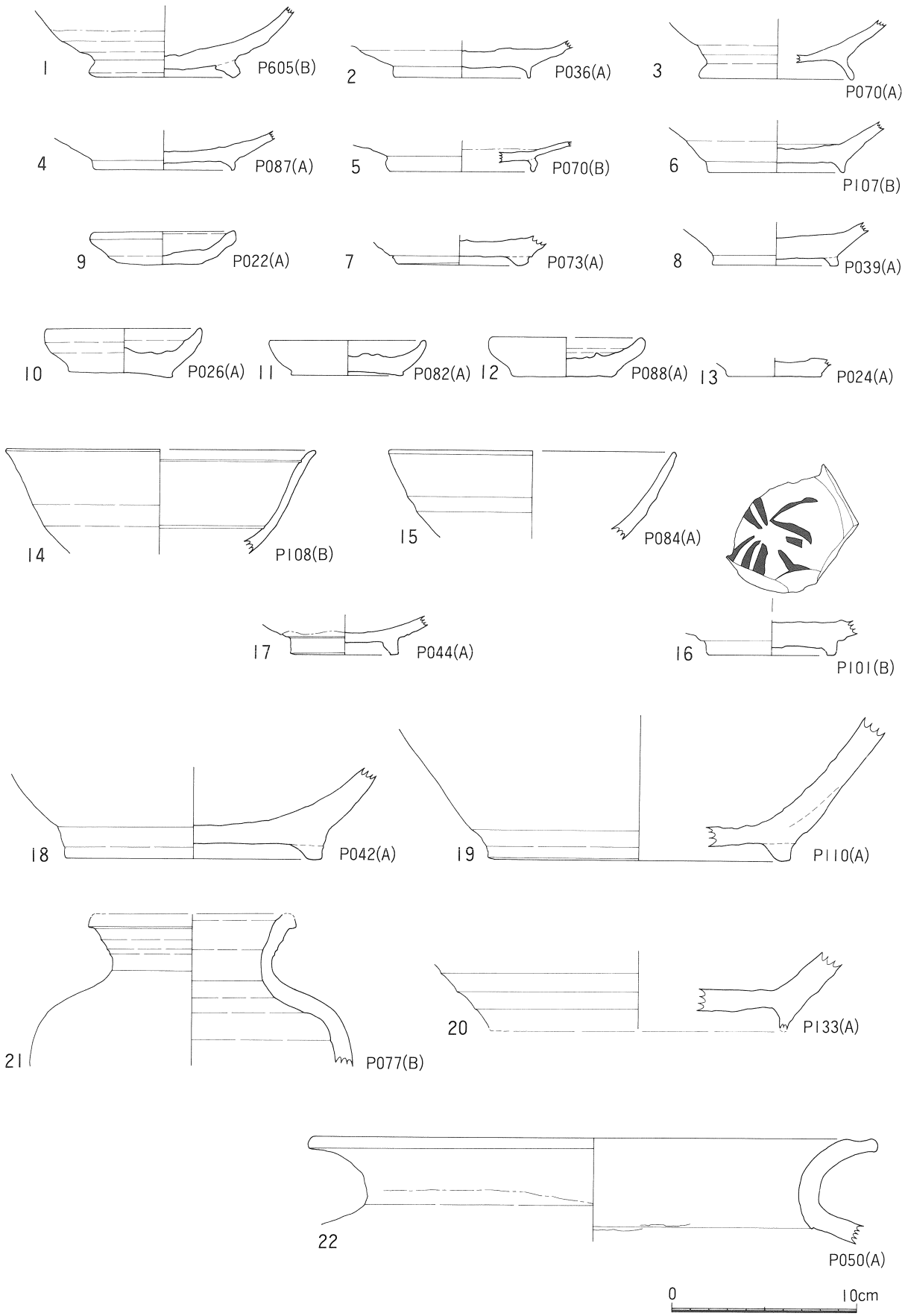
1の碗は体部外面にハケ塗りの灰釉がかけられ、内面は自然釉がかかっている。身こみは使用のため摩耗している。高台は厚く外側に開き、底部は糸切り痕が残っている。清ケ谷、皿山、旗指窯など西駿河から東遠江系の瓷器（駿遠系瓷器と略記）であろう。2の椀は高台が薄く作られ、直立気味である。底部は糸切り痕が残る。駿遠系瓷器であろう。3の椀は高台の高い形態で深椀であろう。高台は外側に開き、底部は糸切り痕が残る。駿遠系瓷器であろう。4、6の椀は、断面直角三角形の高台作りで薄い。底部には糸切り痕が残る。東遠系山茶椀である。5の皿は爪形の高台で糸切り痕を残す。駿遠系瓷器で



第33図　4区橋状遺構ＳＸ402実測図

あろう。9の小皿は口縁端部を面取りしている。産地は東遠諸窯であろう。10から13のカワラケは回転台成形で底部に糸切り痕を残す。体部内面の横ナデ調整痕は凹凸が著しく、器壁が厚いなど、遅い回転台の使用と技術の稚拙がうかがわれる。

14の青磁碗は内外面とも無紋で、内面2箇所に圏線がめぐる。外面は釉の下にロクロ使用のハケ目がみられる。釉は茶色がかった緑色で光沢がある。15の青磁碗は内外面とも無紋でクリーム色の釉がかかっ



第34図　４区ＳＲ401出土土器実測図

ている。いづれも龍泉窯系碗のⅠ－1類であろうが、14についても龍泉窯系碗であろう。15の青磁碗は片切り彫りの草花紋を身こみにつける。龍泉窯系碗のⅠ－2類である。ほかに青磁碗では龍泉窯系碗1－4類、1－5類が出土した。17の白磁碗は削り出しの高台部のみで高台脇が無釉である。

18から22の大平鉢は高台脇から胴部が直線的に続くタイプで、18が渥美・湖西系、19・20が東遠系の製品である。21の壺は口縁端部を丸くおさめた渥美系の中形壺で、22は渥美の大形壺である。

2．墨書土器

湖西産の山茶椀の底部に3文字が書かれているが、半分が欠けているため釈読できない。運筆からすれば、第1字目と第2字目は図の上から書き、第3字目は下から書き始めている。第3字は「沙」とも読める。いずれにせよ筆の運びはかなり手慣れている。山茶椀は高台部を外側に開く低い形態で、端部を横ナデ調整している。

3．金属製品

佐波理小鋺は、直径3.9cm、高台径2.5cm、高さ1.1cmを測る。響銅製でロクロ引き痕が明瞭に残る。外面に1条、内面に2条の圏線がめぐっている。仏餉器のような仏具であろうが、密教法具にはない形態と大きさである。鎹は頭部分がわずかに欠損しているほか、ほとんど原形をとどめている。長さ9.2cm幅0.4cmで、断面方形を呈する。

鉄製の鍔は端の部分7.3cmが残っていた。丸窓を2箇所につけており、そのほか装飾はみられない。

4．木製品

1～7は7枚を木釘で止めた七本塔婆である。形態は先端を剣先状に切り、末端を二等辺三角形に尖らせている。長さは24.64cm～25.42cm、幅1.5cm～2.48cm、厚さ0.2cm～0.3cmで細かい点では規格に差がある。記載内容は南□、南無□、南無五大力菩薩と釈読することができた（釈文については静岡大学湯ノ上隆助教授の御教示による）。

8は長さ30cmと大形で、先端を剣先形とし切り込みをいれて2本の圏線を描き、その下位に金剛界と胎蔵界の大日如来の種字を書いている。

9は先端を剣先状に作り切れ込みをいれるが、他の塔婆に比べ丸みをもっている。全体は幅広の形態で下端も膨らみをもっている。記載内容は南無大日と釈読できた。

10は先端部を欠いているが、切れ込みをいれる形態である。記載内容は南無□□と釈読できた。

11は薄板に仮名を書いているが、読めない部分が多く、文意不明である。仮名使用と配字から歌とも考えられる。他の塔婆類と異なり、先端は剣先状につくっていない。

12～21までは墨書の認められなかった塔婆類である。形態とスケールは七本塔婆に近似したグループと塔婆8と近似したグループに区別できる。後者は完形の塔婆19のみであるが、ほかにはない真言の種字が書かれている。このようなことから出土した塔婆には、教義や供養の目的と用途によって、形状による使い分けがなされたかとも思われる。

板状木製品

25～30の板状木製品は板状で大形の破片である。全体の形状が不明のため用途等は不明確であるが、薄く加工されており、塔婆の可能性がある。その場合、19のような塔婆の可能性が指摘できる。

棒状木製品

31～35の棒状木製品は両面を丁寧に加工してあり、名称、用途、性格は不明である。生活用具とも思われず、あえて可能性を指摘すれば、ケツのような結界を示す仏具の役割も考えられる。小形の36は小形で細く、箸状木製品と分けておきたい。

木製容器

41・42は曲物や漆器椀の破片である。42は黒漆を内外面に塗っている。

その他の木製品

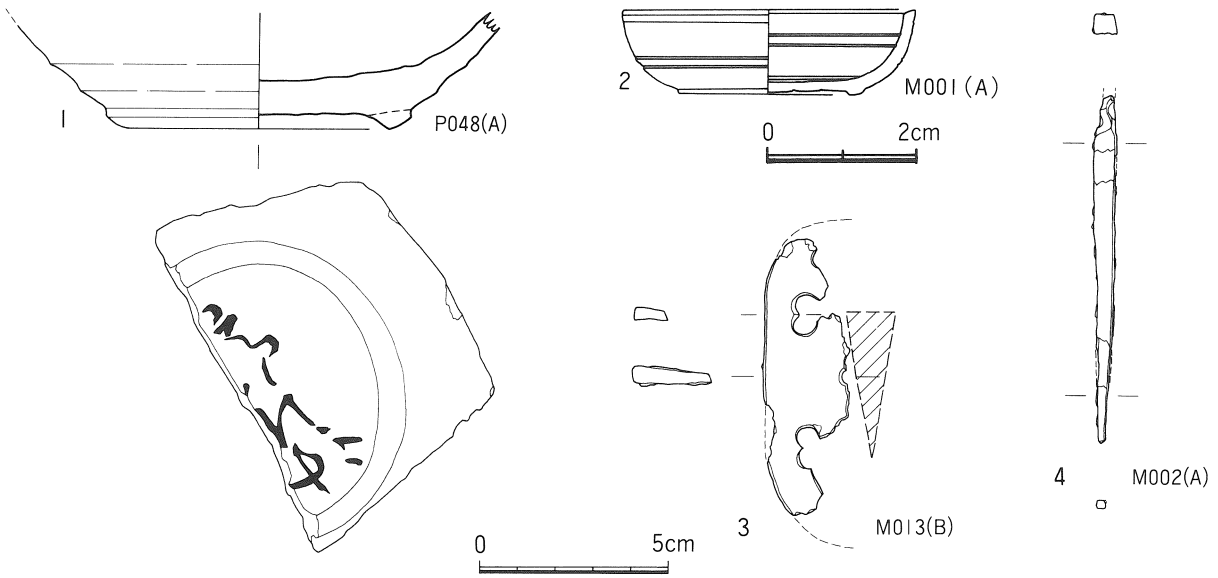
37～40はなんらかの部材であろう。とくに37は釘を打っているが、断片になっており、再利用されたかも知れない。また薄く加工されているものは塔婆の可能性もあって挿図では容器類の前に配置した。

金剛草履

完形の例はないが、薄板２枚の片側が残存するものがあったりするので、全長がある程度、類推できる。43から49の大人用と考えられるサイズと50のように小形のサイズがある。側面の切り欠き部が残る４例については上下を想定できたが、他の例は鼻緒の位置も不明瞭であった。したがって板芯を緊縛する植物繊維の条痕などみながら、上下を想定したが、あまり根拠のあるものではない。平面形態は側縁部が直線的になるものと48のようにわずかに縁を隅切りして丸みを呈するものがみられる。板芯は杉材の板目取りである。

５．小結

馬埋葬には塔婆や佐波理鋺のように、特別に供養のためにしつらえたと考えられる遺物がある。ところで馬埋葬２にはカワラケ１点が供献されていた。カワラケ４点のうち３点が完形もしくはほぼ完形であり、原位置からさして移動していないと考えられる。さらに出土したカワラケの点数は４点であり、馬埋葬１から３までの３ブロック４体に分かれていたことと関係するかも知れない。したがってカワラ



第35図　４区出土金属製品・墨書土器実測図

ケは供養のための遺物と考えておきたい。ほかの土器の出土状態をみると、東遠系小皿が完形であるほか、他の陶器片は破片である。このほか常滑産甕もしくは壺１点は胴部破片が多く、破片点数が少なく接合して図化できないほどであった。このほか青磁、白磁類についても接合できる資料は少なく、別の場所で破砕され運ばれたのではないかと推定される。

では陶磁器類はこの馬埋葬にどのように関係するのであろうか。すでに述べたように遺存状態や出土状態からカワラケや小皿は供献品と考えられる。また灰釉陶器については川底で出土しており、河川の上限をしめしているが、直接、馬埋葬に関係しないと考えられる。青磁類さらに大平鉢、壺甕類は小皿のしめす年代と一致しており、供献品かはたまた別に投棄されたものかの判断は微妙である。ただし土器のうち青磁、白磁類の占める比率が異常に高いことは指摘できる。また河川内から出土した土器が塔婆の出土した範囲を大きく逸脱していない点も生活遺物の廃棄という解釈と合い入れない。供養の一部にカワラケや小皿をのぞいた陶磁器を破砕して投棄するという習俗があったとすれば、理解が可能な出土状態である。

以上の馬埋葬は河川の堆積が進行中に行われ、粘土や砂の移動や堆積が認められることからこの河川はそれほど速い流水とは考えられない。また塔婆をはじめとして軽い木製遺物は北側に認められ、流水によって移動したと考えられる。砂の巻き込み方向やこれら遺物の移動状況から河川の流れは南側から北側に流れていたと判断される。また、それぞれの馬埋葬に特別な土坑を掘削した様子も認められなかった。

河川内の堆積状況をみると、馬埋葬は、ある一定期間内の幅で同時期であることは首肯できよう。さて馬埋葬の年代であるが、青磁や山茶椀、小皿の年代から12世紀末～13世紀初頭と考えている。白磁、灰釉陶器は古い時期を示すが、これは河川の年代幅を示すと考えている。

また馬埋葬１では頭部のみを埋葬した可能性もあるが、他の埋葬では胴部以下の体部の骨も認められることから、遺体腐敗後、元の各部位からズレ、小さな骨は移動、流失したとも考えられる。またこの場所で死に絶えたか、あるいは別の場所から遺体を運びここに埋葬したかであるが、現状では両者の考え方が成立する。

ではこの馬埋葬はどのような理解ができるだろうか。１つの考え方として馬捨て場であるが、後にのべるように笹塔婆、佐波理小鋺、カワラケ、陶磁器をともなっており、さらに極めて手厚い仏式供養をおこなっており、たんなる死体遺棄である馬捨て場とは理解しがたい。

これら１から４の馬埋葬では、１の埋葬を除いて、なんらかの供養の遺物が認められた。馬埋葬１についても、河川の流れによって移動したと理解すれば、なんらかの供養品が供えられていたとも考えられるが、明確ではない。それにしても笹塔婆の枚数やカワラケの点数から、それぞれの馬に供養がなされたと解釈して大過ないであろう。

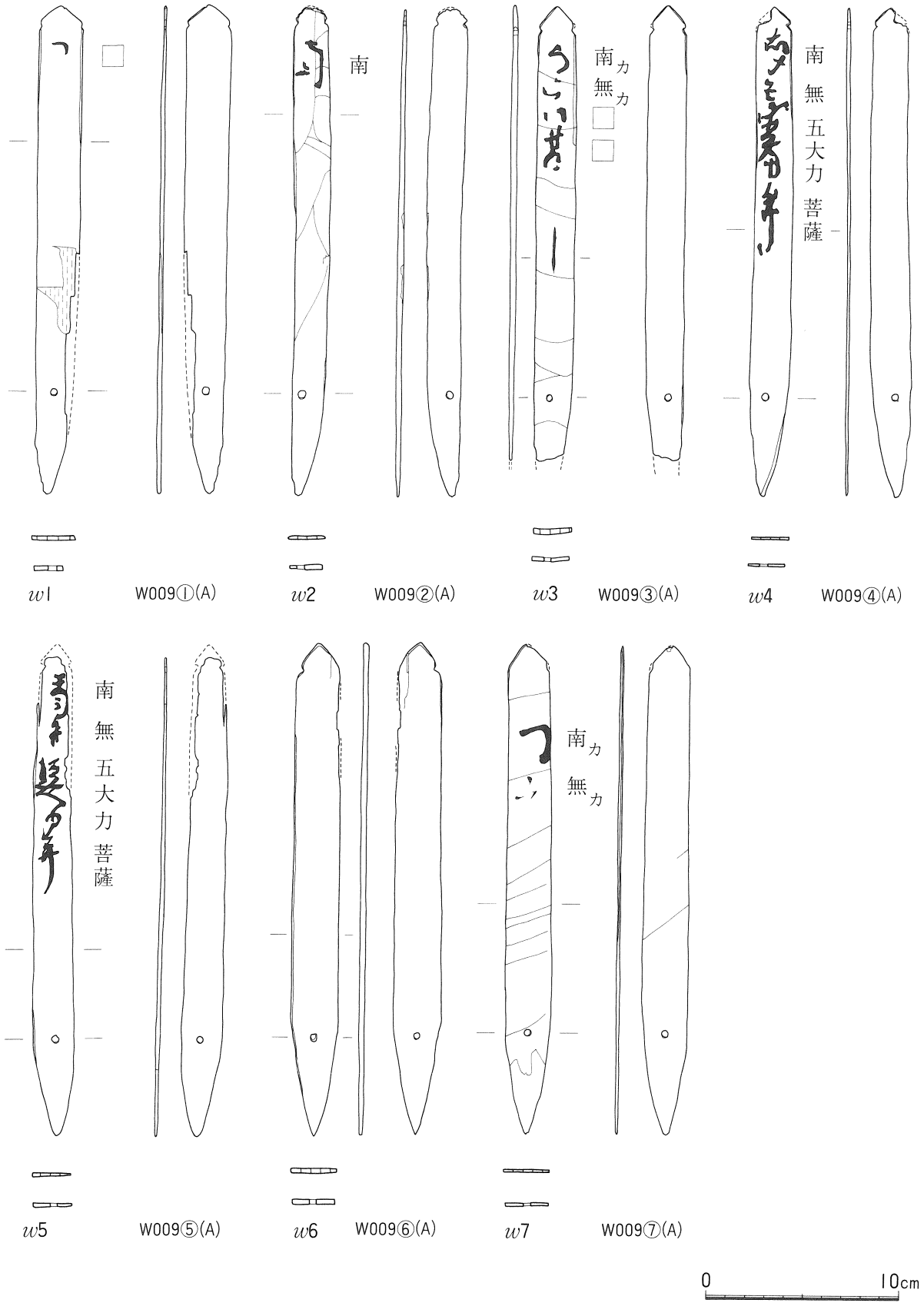
ところでこの馬が自然死であるかの点であるが、七本塔婆の存在から四九日までの追善供養がなされたこととともに、それが１組であることから馬埋葬１から４までが同じ命日と考えられていたことが判断される。それとともに、疫病などで同じ日に病死したと理解するよりも、むしろなんらかの理由で強制的に殺傷されたと解釈したほうが、より妥当ではないかと理解している。また病死であるならば、こ

のような場所になかば死体遺棄の形で埋葬するよりも、厩から運び出し、土坑を掘って手厚く埋葬するであろう。だとすれば、さきに遺体は別の場所で死に絶え、この場所に遺棄されたか、はたまたこの場所で死んだものかを考えたが、馬の遺体処理の仕方と矛盾する供養の丁重さからすれば、どうやらこの場所で死んで、そのまま供養されたとの考えに到達できる。それとともに、馬そのものの供養という側面より馬が殺傷されたこの場所、あるいは乗馬した人物または殺傷したその行為そのものの供養と理解できよう。

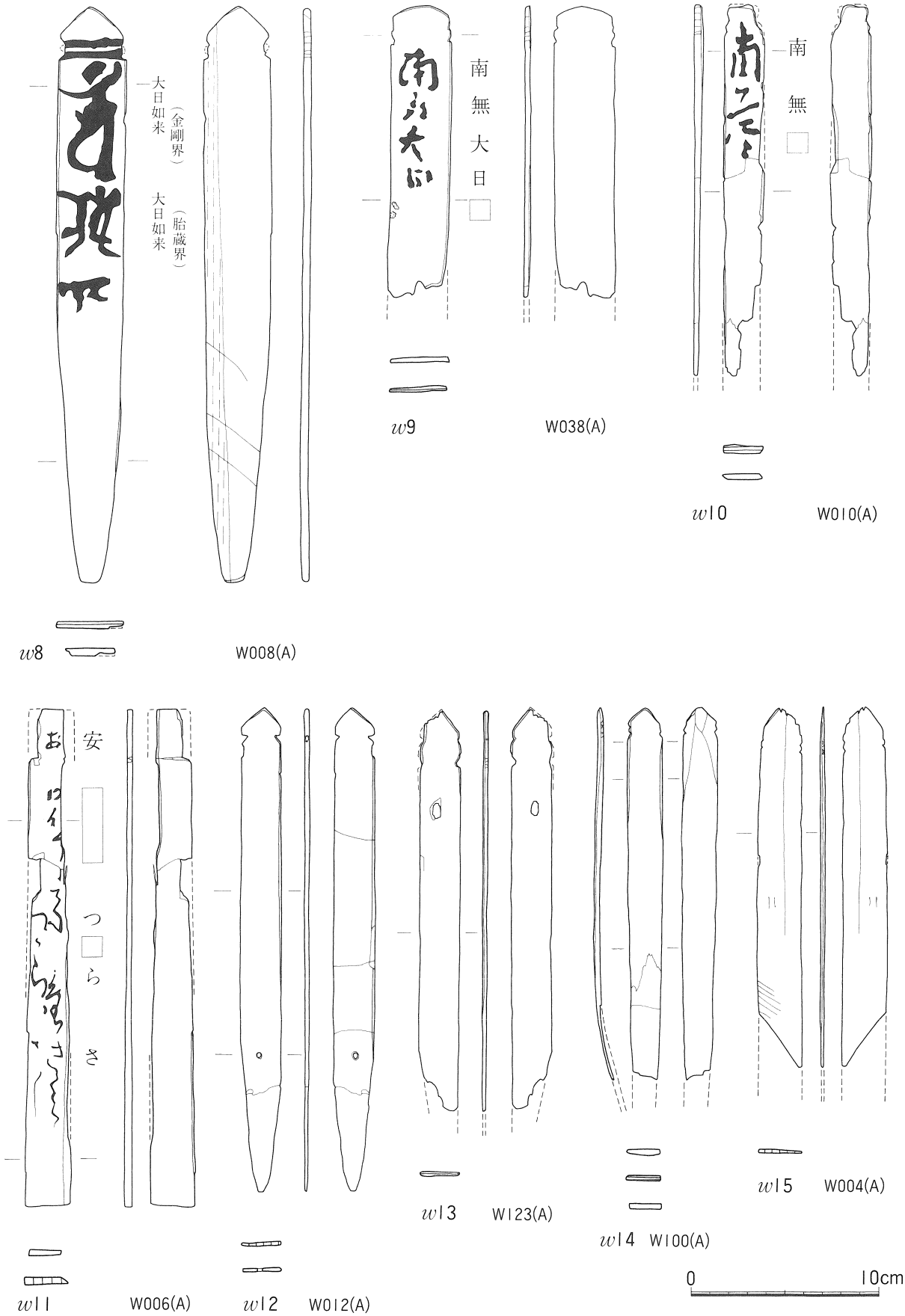
また塔婆の五大力菩薩、大日如来の文言から真言密教の関与と鎮護国家の供養目的を知ることができる。この馬埋葬と供養については全国的にも特異な例であり、一般化できる事例ではない。したがって、12世紀末～13世紀初頭の長崎遺跡周辺に展開された中世のある特異な歴史現象を反映しているものと考えられる。刀の鍔片が馬埋葬4付近で出土している。またこの土地が梶原山の前面で橋の架かっていた場所であることから、交通の要衝であった。この辺を関連させて、さらに想像をたくましくすれば、馬の殺傷を目的としたものではなく、騎乗の人物の殺傷を目的としたもので、それは梶原合戦に深く関わっていると考えている。そのため鎮護国家の丁寧な追善供養されたとすれば、理解しやすいのではないかと考えている。

第3表　4区塔婆計測一覧表　　（　）は残存値

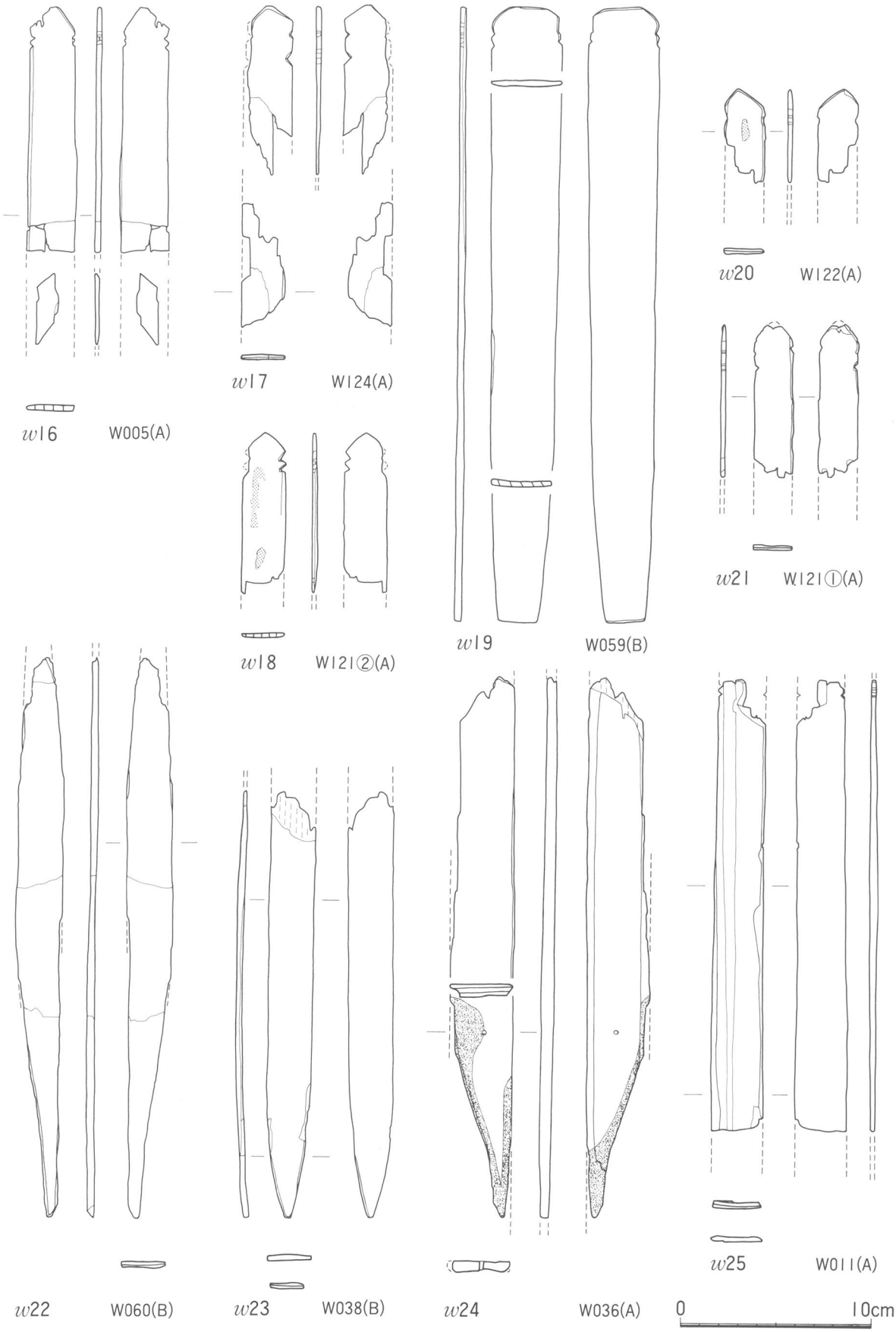
No.	遺物番号	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔直径(cm)	その他	釈　文
1	W－009①	25.26	2.29	0.22	0.47	7本塔婆	
2	W－009②	25.23	1.50	0.30	0.40	〃	南
3	W－009③	(23.50)	1.90	0.30	0.33	〃	南無□□力□□
4	W－009④	25.24	2.15	0.20	0.41	〃	南無五大力菩薩
5	W－009⑤	(24.79)	2.13	0.21	0.38	〃	南無□大力菩薩
6	W－009⑥	25.42	2.48	0.30	0.32	〃	
7	W－009⑦	24.64	2.39	0.20	0.36	〃	南無
8	W－008	30.68	3.57	0.40			バン・ケン
9	W－038	(15.52)	3.10	0.30			南無大日
10	W－010	(19.78)	2.18	0.45			南無□
11	W－006	(26.49)	2.39	0.40			安□□□□ふつつら□ちさくら
12	W－012	25.76	2.18	0.25	0.25		
13	W－123	(21.26)	2.14	0.25			
14	W－100	(19.80)	1.82	0.30			
15	W－004	(19.18)	2.35	0.20			
16	W－005	(12.90)	2.54	0.29			
17	W－121②	(8.39)	2.30	0.20			
18	W－124	(8.81)	2.35	0.20			
19	W－059	32.35	3.70	0.30			
20	W－122	(4.91)	2.10	0.24			
21	W－121①	(10.02)	2.08	0.24			
22	W－060	(29.46)	2.40	0.40			
23	W－038	(23.18)	2.38	0.30		馬埋葬4	
24	W－036	(28.41)	3.28	0.65	0.20	〃	
25	W－011	23.72	2.70	0.37			



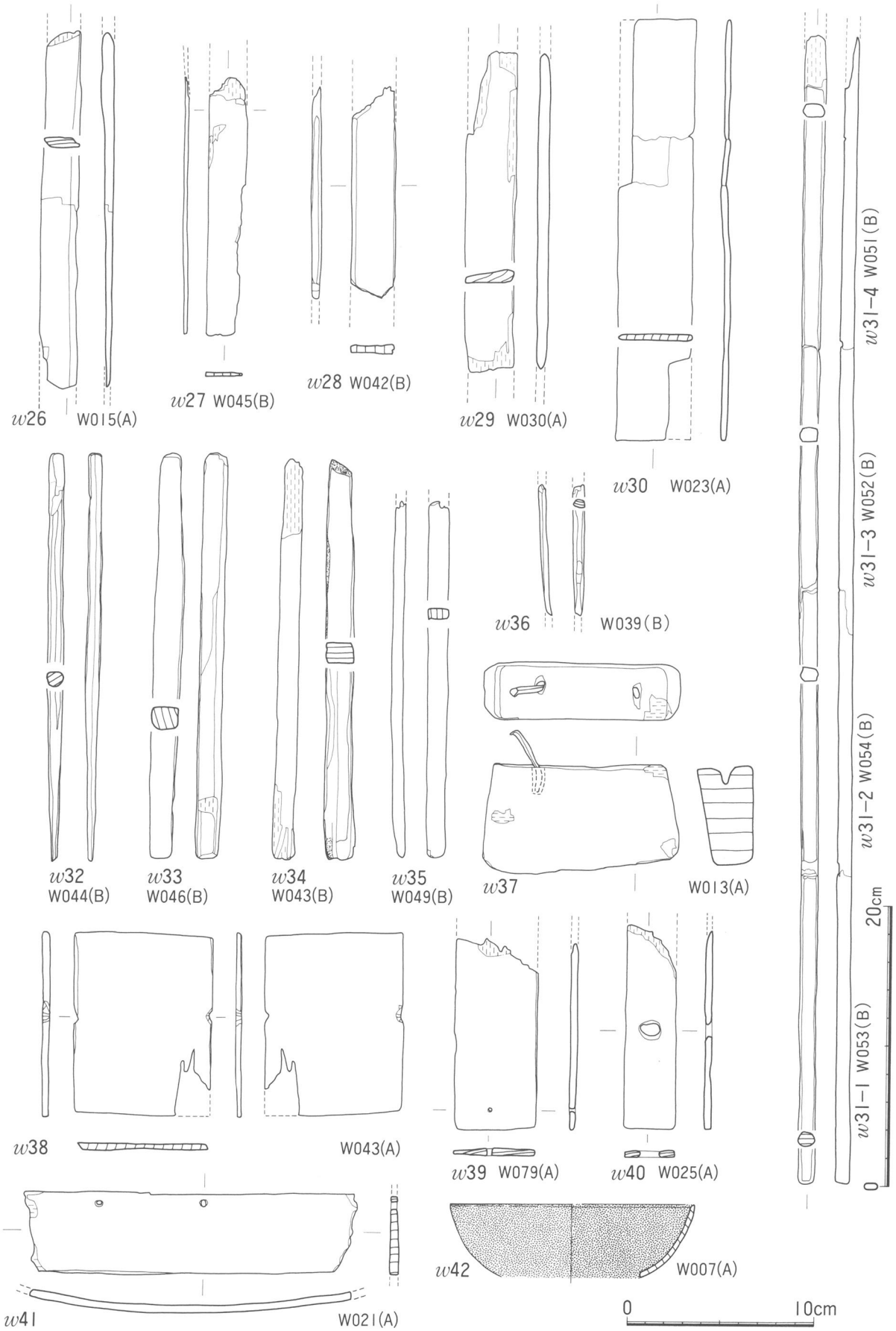
第36図　4区木製塔婆実測図（1）



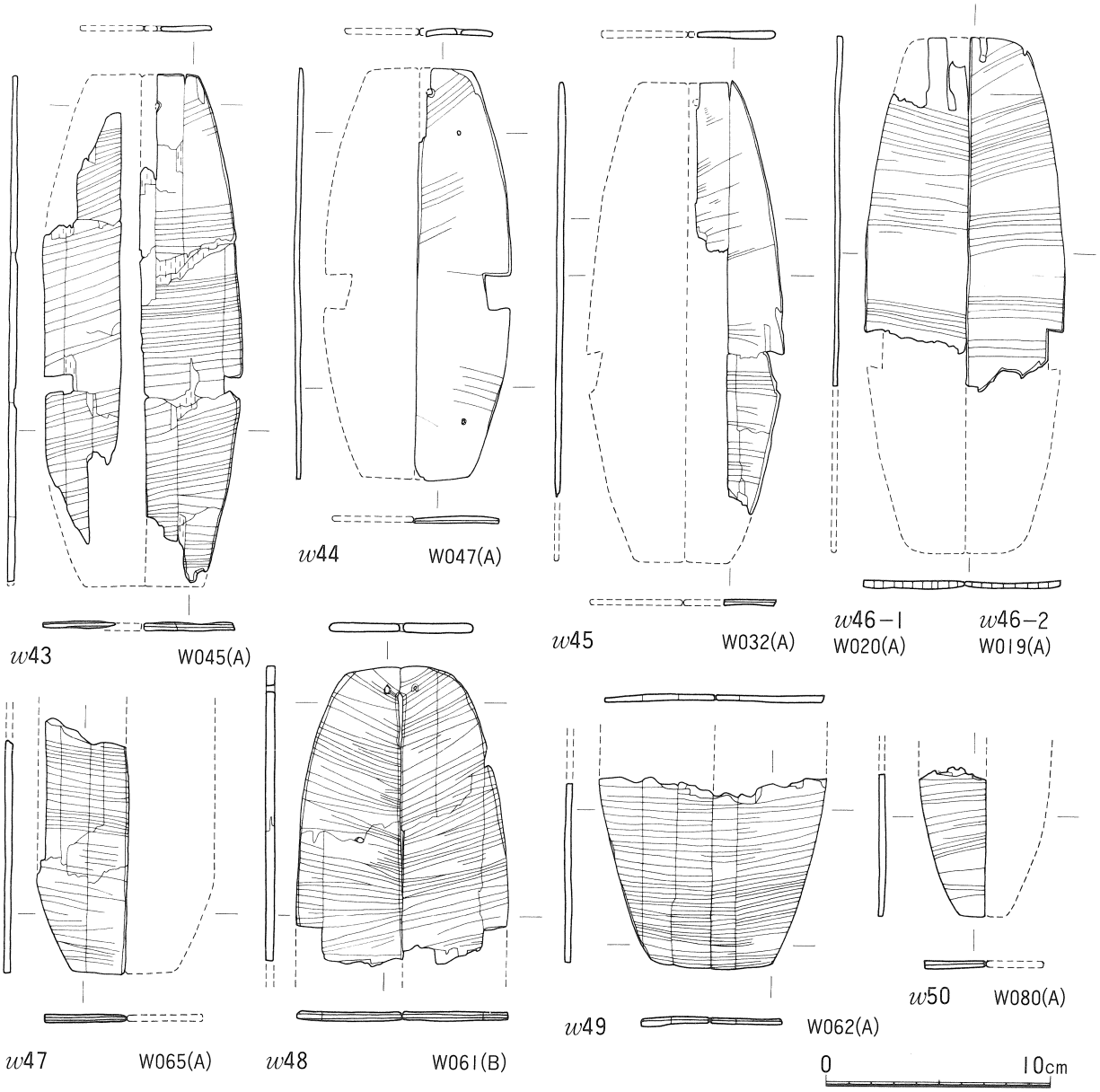
第37図　4区木製塔婆実測図（2）



第38図　4区木製塔婆実測図（3）



第39図　4区板状木製品他実測図



第40図　4区金剛草履実測図

第4表　4区金剛草履計測値一覧表　　（　）は残存値

No.	遺物番号	全長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	47	W−065	(11.39)	3.98（片）	0.3
43	W−045	(22.51)	(7.41)	0.3	48	W−061	(13.32)	9.34	0.4
44	W−047	18.28	4.1（片）	0.3	49	W−062	(8.50)	10.19	0.31
45	W−032	(19.21)	3.47（片）	0.3	50	W−080	(6.66)	2.98（片）	0.3
46	W−019 W−020	(15.76)	8.85	0.3					

第Ⅲ章　5区の遺構と遺物

第1節　遺構

5区は、北東部に低地部分が、南西部に微高地部分が検出できた。第Ⅰ章で述べたように、この微高地部分が形成されたのは、水田土壌が供給されたのと同時期と考えられる。黒色粘土層上面の調査区南西部にシルト質粘土が、その北東側には粘土がもたらされた。前者の部分には自然堤防ができ、ここは居住域として選地され、後者の部分には湿地ではあるが、粘土層が堆積し、初期の水田耕作の場となったのである。それぞれの開始時期は、微高地部分では、自然堤防状堆積物の灰色シルト質粘土に掘り込まれた溝状遺構群または、微高地と低地の境界に刻まれた溝状遺構ＳＤ5108から出土する土器から弥生後期（長崎3期～4期）と考えられる。また、水田では、3－3区で弥生中期の土器と共伴する堰・水路遺構が検出された水田の作土であるＤⅢ層は、5区でも、攪拌層として、観察できたが、ＤⅢ層水田に固有な遺構としては、5区東半部の北部から検出された一連の溝状遺構群のみが検出でき、水利施設や水田区画の検出にはいたらなかった。比較的明瞭な水利施設や水田区画の検出ができたのは、ＤⅡ層水田の時期である。このＤⅡ層水田の時期の遺構は、畦畔や溝群の付け替えを伴いつつも、基本的な大畦畔は継承され、古墳前期まで継続して使用されている。5区のＤⅢ・ＤⅡ層の各水田からは、土器片はほとんど検出されなかったが、土層の連続する調査区から出土した土器から、ＤⅢ層遺構は、弥生中期～後期の可能性が考えられ、ＤⅡ層水田遺構は、弥生後期に属すると考えられる。微高地部分では、基本的には3時期の変遷が確認できた。第1期は、溝状遺構群の時期（長崎3期～4期・弥生後期）。第2期は、掘立柱建物群の時期（長崎4期～5期・弥生後期～古墳前期）。第3期は、台状遺構の時期（長崎6期・古墳前期）である。以上の、水田関連遺構と微高地部分の遺構との変遷過程をまとめると、以下のようになる。なお、丸数字は、遺構変遷の順序を示すとともに遺構変遷図（第41～44図）の番号でもある。

低地部分	微高地部分	
＊黒色粘土層の堆積（自然堆積）	＊黒色粘土層の堆積（イネのプラント・オパール4,200個／ｇ検出）（自然堆積層に対して水田耕作が行われていた可能性もある）	
＊灰色粘土の堆積（自然堆積）	＊灰色シルト質粘土の堆積（自然堆積）（自然堤防の形成）	
①ＤⅢ層水田期の水田関連遺構の形成（黒色粘土上部と灰色粘土の耕作による攪拌＝ＤⅢ層水田作土層となる）（北東部での溝状遺構と畑状？遺構ＳＸ530等	①溝状遺構群の形成（水田域と非水田域［微高地］を区画する溝ＳＤ5108の形成）（土器の溝への廃棄）	第1期遺構群

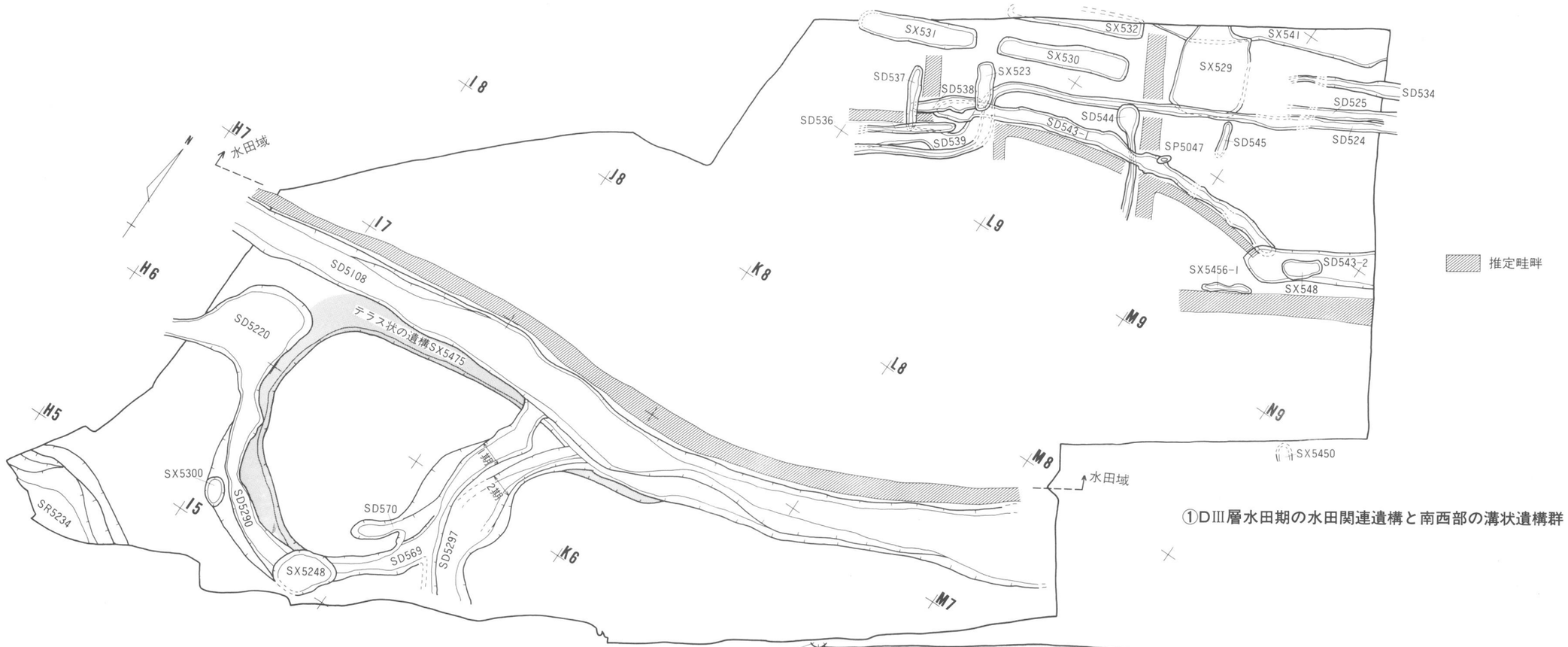
の検出） （多くは盛土畦畔か？）	②溝状遺構群の湿地化 （湿地化による、溝の水利施設への転化と堰・導水路の設置；ＳＤ5108→湿地ＳＸ5110に堰状杭列ＳＡ5445等・導水路ＳＤ5436等の設置）	
＊明灰褐色粘土の堆積（自然堆積）	＊湿地化の後、水田域付近の溝に堆積した明灰褐色粘土への水田耕作が開始される＝ＤⅡ－２層水田の拡張	
②ＤⅡ－２層水田期の水田関連遺構の形成 （明灰褐色粘土とＤⅢ層水田作土の耕作よる攪拌＝ＤⅡ－２層水田作土となる） （低地全域での溝状遺構；ＳＤ514等のの検出） （多くは盛土畦畔か？） （北東部と南西部の低地での深耕；ＳＸ512・5471） （南西部での河道ＳＲ5243の湿地化と堰状遺構ＳＸ5114の設置） （南西部での畑状？遺構ＳＤ5221の検出）		
＊灰褐色粘土の堆積（自然堆積）	＊灰褐色粘土の堆積は微高地裾部で進行（自然堆積）	
③ＤⅡ－１層［下部］水田期の水田関連遺構の形成（微高地部分への水田域の拡張） （灰褐色粘土の耕作＝ＤⅡ－１層［下部］水田作土となる） （溝状遺構群の湿地化による埋積の後、微高地裾部では、粘土層が堆積し、その部分の水田化が進行する。その際、これらの湿地化地域での杭列大畦畔；ＳＫ5140等の卓越化が進む）		
＊灰褐色粘土がさらに堆積し、耕作で作土に混入される	＊整地層の造成が行われる	
④ＤⅡ－１層［下部］水田期の水田関連遺構の継続	④掘立柱建物群の建設 （当初は北側の畦畔ＳＫ5140の南側に整地層が造成されたが、さらに次の段階では、この畦畔部分にも整地層の造成が拡張される；掘立柱建物は微高地部分の全域につくられているが、多くは微高地の中央部付近につくられている）	第2期遺構群

＊灰褐色粘土がさらに堆積し、耕作で作土に混入される	＊多くの掘立柱建物の柱が抜かれ、整地される	
⑤ＤⅡ－１層［上部］水田期の水田関連遺構 （ＤⅡ－１層［下部］水田の杭列畦畔の一部は、盛土畦畔として近隣に付替わる）	⑤炭化物・焼土面の形成 （土器を多量に含んだ土坑ＳＸ571等と単純な炭化物や焼土の面がある）	第3期遺構群
⑥ＤⅡ－１層［上部］水田期の水田関連遺構が継承される	⑥台状遺構群の形成 （20～30cmの盛土によって台状の整地層が２つ造成される）	
⑦ＤⅡ－１層［上部］水田期の水田関連遺構が継承される	⑦台状遺構上面に、大量の土器が散布される （土器包含層の厚さは10～20cmもある）	
＊遺跡付近一帯が湿地となる		
⑧ＤＩ層（泥炭層）の形成（自然堆積）	⑧ＤＩ層が微高地の裾部に形成・堆積（自然堆積）	
＊Ｃ層群（洪水堆積粘土）が遺跡全域で堆積し、低地・微高地の区別なく完全に被覆（自然堆積）		

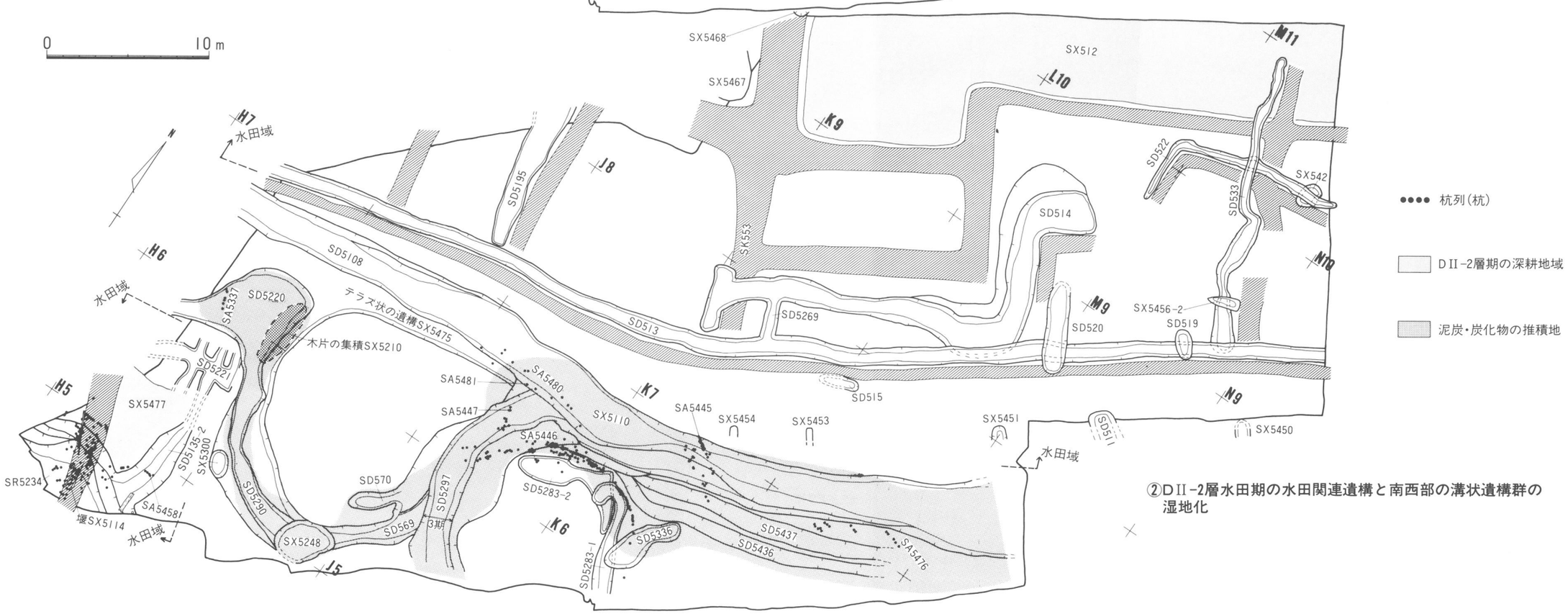
以上のような変遷過程が推定できるが、以下の遺構に関する叙述の順序として、１・溝状遺構群として微高地部分の溝状遺構（微高地の①②）、２・掘立柱建物群（微高地の④）、３・炭化物・焼土面の遺構群（微高地の⑤）、４・台状遺構群（微高地の⑤）、５・台状遺構群上面土器群（微高地の⑥）、６・水田遺構として、微高地・低地の全ての水田関連遺構（微高地・低地の①～⑧）の順に述べたい。

なお、本章での叙述は①～⑧の順に下層から上層に、検出遺構面が変遷する順序に行うが、これらの変遷は、微高地部分では、前述のように溝状遺構群の形成と湿地化の時期（①・②）、掘立柱建物群建設の時期（④）、台状遺構の時期（⑤・⑥・⑦）の３時期のまとまりをもっている。これらのまとまりは、溝の掘削と埋積、建物の建設と撤収、台状の盛土の築成と盛土上での祭祀に関連する土器廃棄、というようにそれぞれが一連の目的をもった行為のまとまりを構成している。しかし、これらの３時期の間には微高地部分では、文化層の間の断絶として把握できるが、これらの文化層の不整合面ともいうような部分について、堆積層序の検討からは、第１期遺構群の時期と第２期遺構群の時期との間には、湿地化と粘土層の自然堆積（河川の溢流堆積）が微高地部分と低地部分で、ともに行われている。なかでも、湿地化した微高地の溝状遺構群では、泥炭層の数cm以上の堆積を蒙っているので、数十年間以上のタイムラグが存在していたと指摘することができよう。ところが、第２期遺構群の時期と第３期遺構群の時期の間隔については、泥炭層の堆積を確認できないのみならず、後述のように削平をともなう整地の後に、台状遺構の築造がなされたとすれば、堆積層序の検討からは時期の間隔について検討する材料を提供することは難しいといえる。

そこで、土器編年による相対年代の検討が不可欠である。微高地部分からの出土数は膨大であり、現



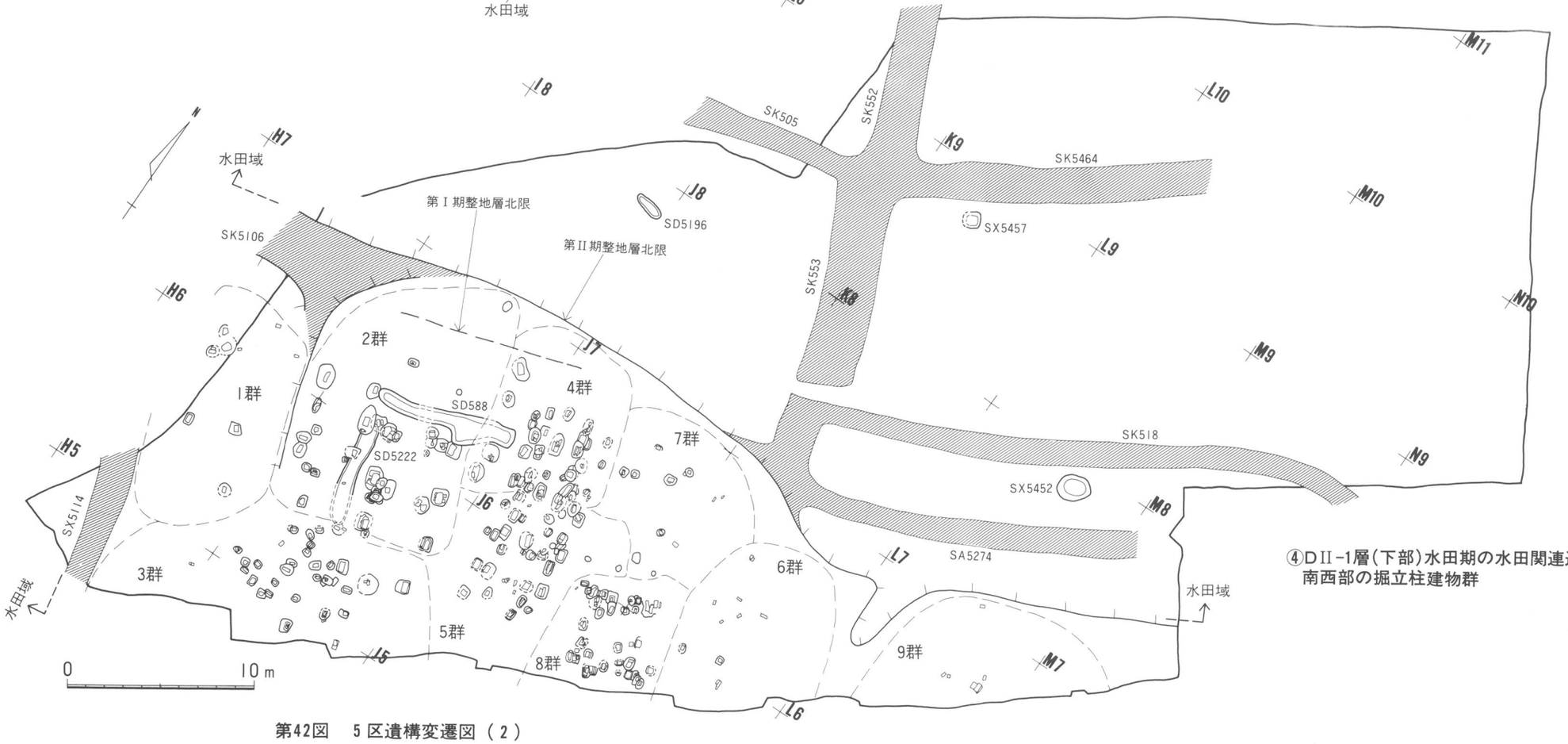
①DⅢ層水田期の水田関連遺構と南西部の溝状遺構群



②DⅡ-2層水田期の水田関連遺構と南西部の溝状遺構群の湿地化

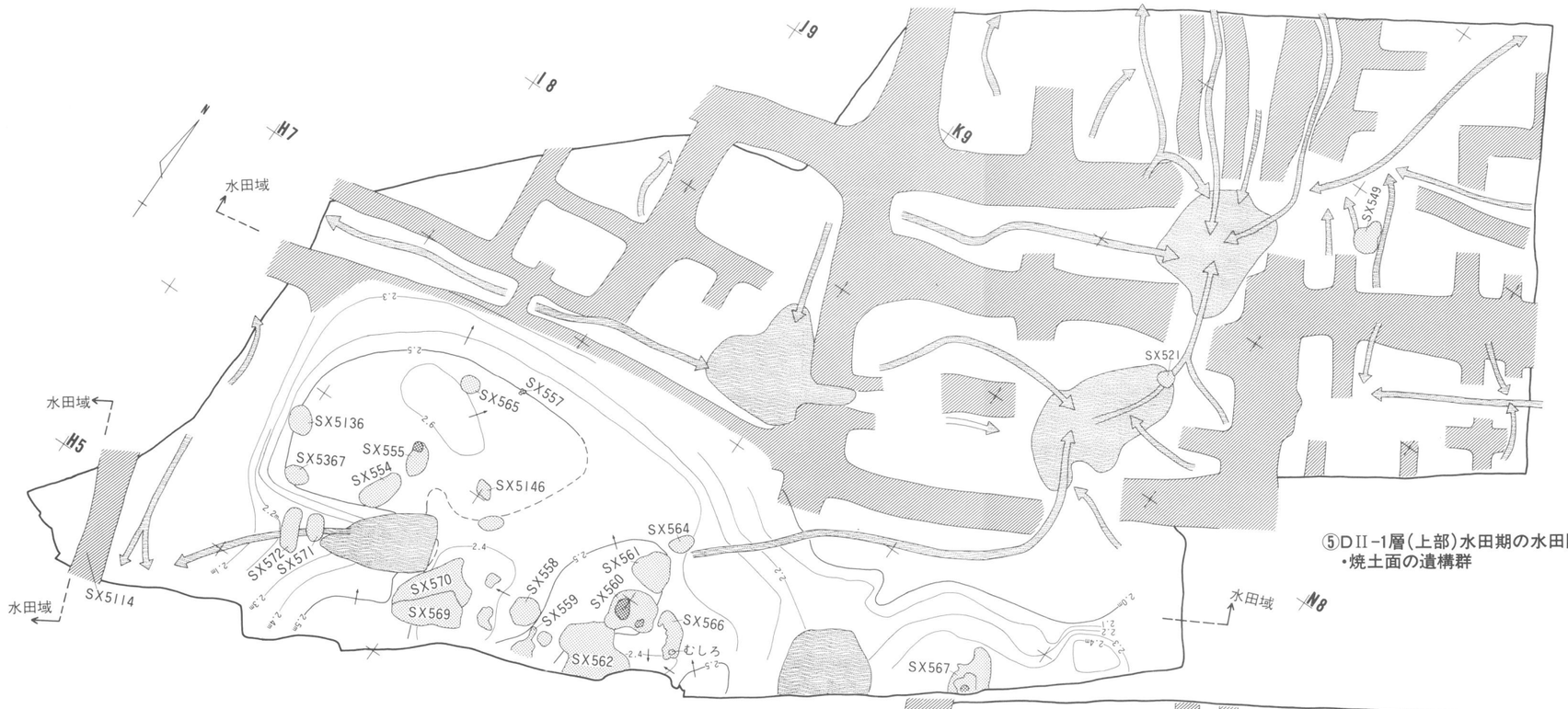
第41図　5区遺構変遷図（1）

③DⅡ-1層(下部)水田期の水田関連遺構



④DⅡ-1層(下部)水田期の水田関連遺構と南西部の掘立柱建物群

第42図　5区遺構変遷図（2）



※⑤・⑥図の水田関連遺構のうち推定畦畔と推定水系は⑦図の等高線図から推定したものである。

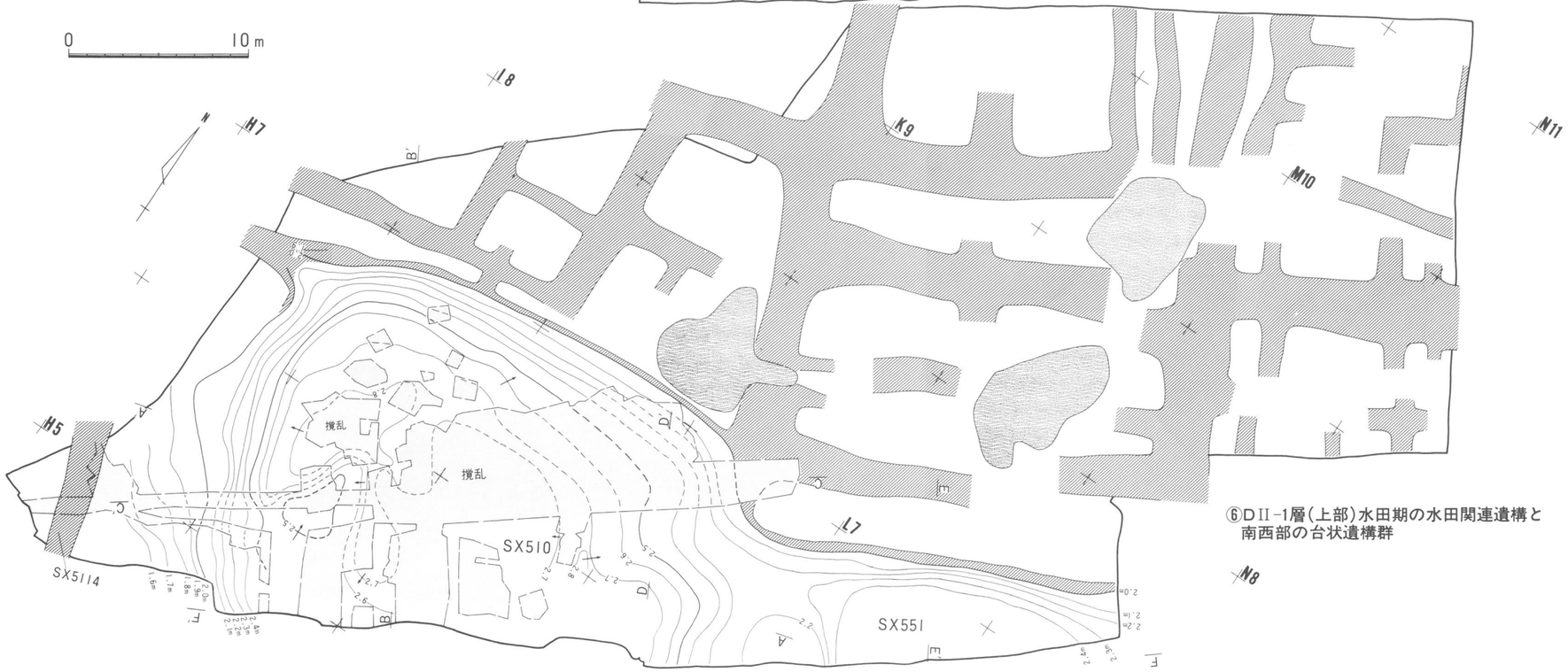
推定畦畔

推定水系

炭化物集積遺構

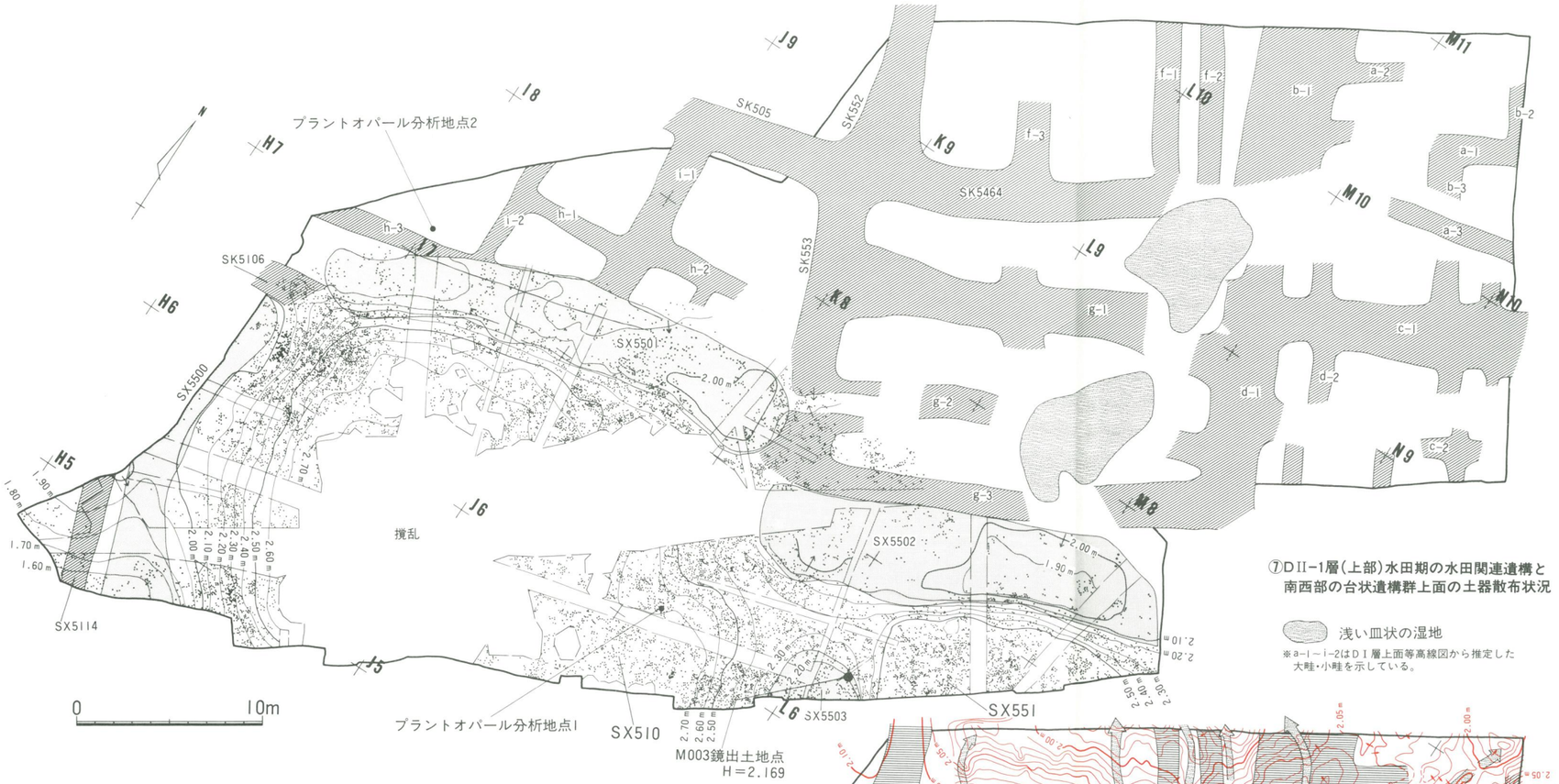
焼土遺構

⑤DⅡ-1層(上部)水田期の水田関連遺構と南西部の炭化物・焼土面の遺構群



⑥DⅡ-1層(上部)水田期の水田関連遺構と南西部の台状遺構群

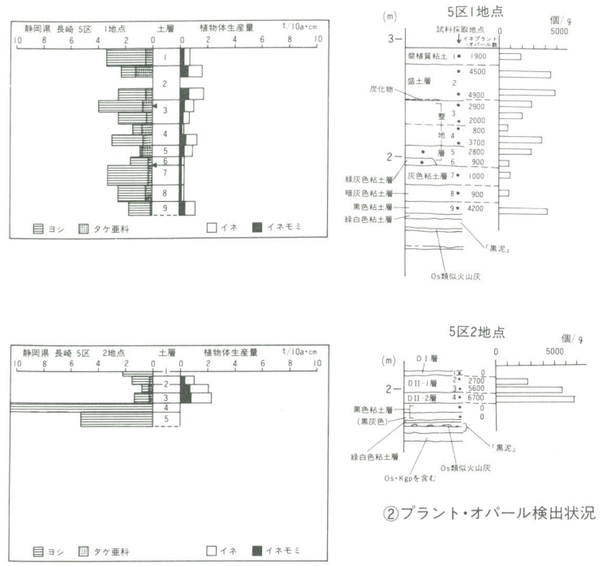
第43図　5区遺構変遷図（3）



⑦DⅡ-1層(上部)水田期の水田関連遺構と南西部の台状遺構群上面の土器散布状況

浅い皿状の湿地

※a-1-i-2はDⅠ層上面等高線図から推定した大畦・小畦を示している。

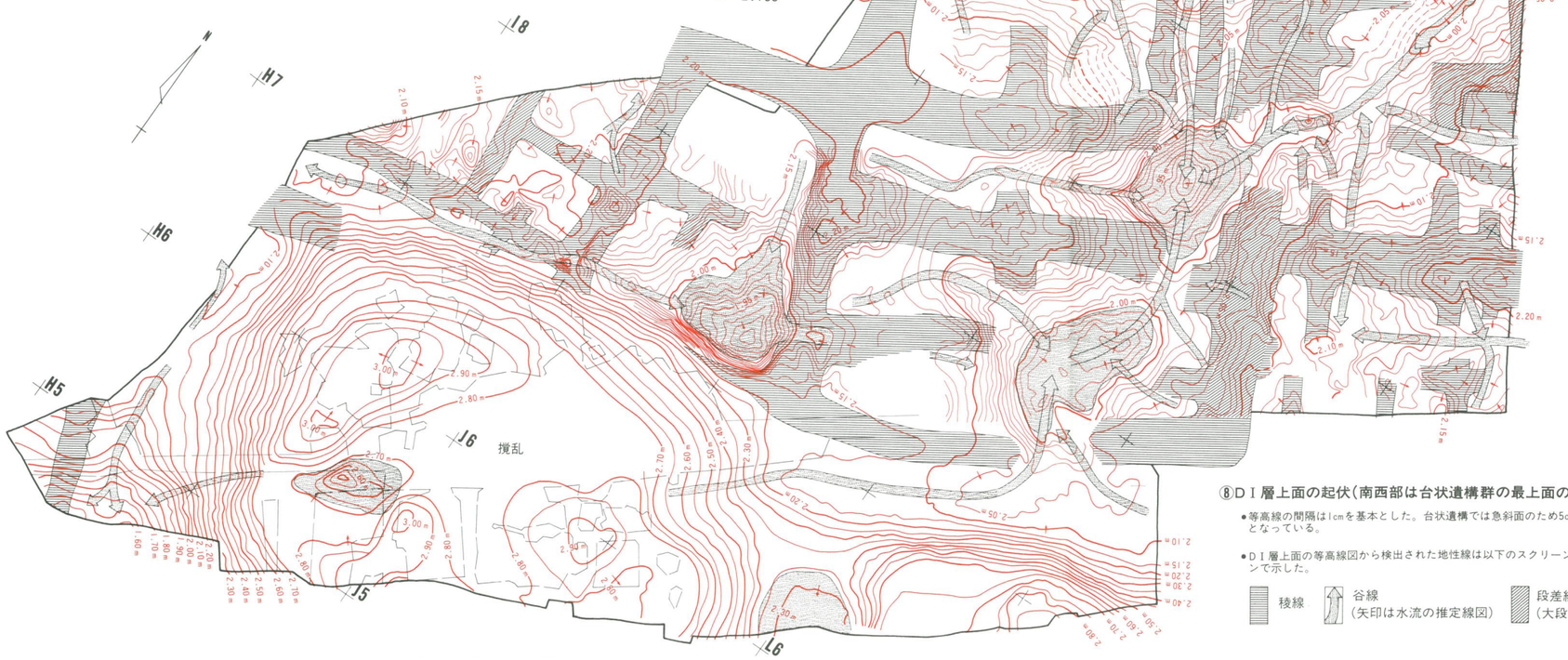


①おもな植物の推定生産量と変遷

◀印は50cmのスケール

②プラント・オパール検出状況

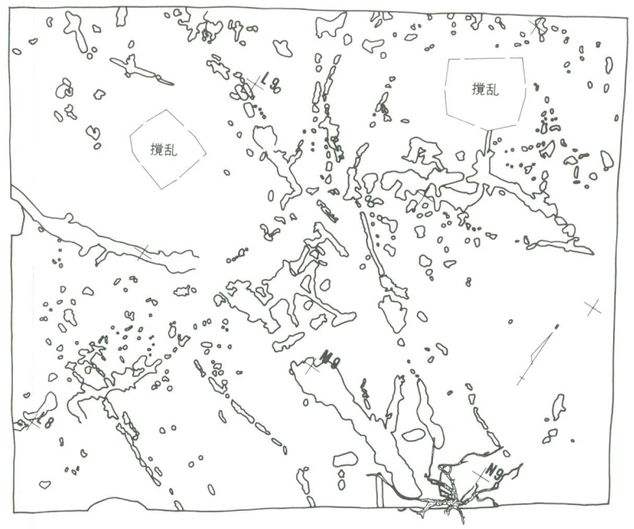
5区プラント・オパール分析グラフ



⑧DⅠ層上面の起伏(南西部は台状遺構群の最上面の状況)

- 等高線の間隔は1cmを基本とした。台状遺構では急斜面のため5cm間隔となっている。
- DⅠ層上面の等高線図から検出された地性線は以下のスクリーントーンで示した。

稜線　谷線(矢印は水流の推定線図)　段差線(大段差線はのぞいた)



⑨DⅠ層上面(東半部)に刻まれた不定形の溝群と立木

第44図　5区遺構変遷図(4)

在整理中であるが、本報告書で提示されている長崎編年によれば、第１期遺構群の時期は、長崎３期～４期であり、第２期遺構群の時期は、長崎４期～５期、第３期遺構群の時期は、長崎６期に該当するようである。

さらに、５区の微高地部分の３期の遺構群の変遷が、低地で部分を主とした水田遺構の消長とかみあって提示することができたので、洪水堆積以外に休止することはあまりなく、かつ少ない遺物のため年代観がはっきりしなかった水田遺構の各作土の年代について、微高地部分の各遺構群の低地部分への進出と後退をとおして、若干の資料提供をすることができた。

最後に、隣接する調査区の遺構群との接続関係について現在のところいだいている見解を報告したい。

５区を東西に自由縦貫している水路ＳＤ513は、４区Ｂの東西方向の溝ＳＤ404と連続する可能性がある。根拠としては、それぞれ直接的に掘削されている溝で、規模・断面形ともに類似しており、平面位置で、一直線上に位置し、断面でも低部の標高値がほぼ同じであるためである。ただし、両遺構ともに遺物の出土は極めて乏しかったため、相対年代での一致は確認できなかった。なお、土層断面での遺構掘削面の層位の比較については今後の検討課題である。

５区の南西部を東西（東北東～西南西）方向に掠める河道ＳＲ5243は、６区の第３面で検出された河道ＳＤ601（古）に連続する可能性がある。根拠としては、それぞれの河道の北岸の傾斜角度・岸線の方向・岸の標高値がほぼ一致し、河道内の堆積物も類似していたためである。５区側では、ＳＲ5243覆土の上半部のみが一部検出されただけであるが、６区では、601（古）の河床からは弥生中期の土器（長崎１期）が、まとまって出土していることを考えると、さらに詳細な検討が必要であるが、ＳＲ5243の年代も弥生中期としてよいと思われる。

１．溝状遺構群

５区では、溝状遺構群は低地の水田域でも、微高地付近の下位でも検出されている。ここでは、微高地付近の下位で検出された溝状遺構群（遺構変遷図①②参照）について述べたい。

微高地に関連した溝状遺構群は、二つの種類に分類できる。一つは微高地部分と水田部分の境界部分に位置する溝。もう一つは微高地の内部に掘り込まれた溝群である。

ＳＤ5108

微高地部分の北側を取り巻き、幅約2.5～3.5ｍ、深さ約１ｍを測る逆台形の断面形をもち、ＤⅢ層中あるいはＤⅢ層対応の灰色シルト質粘土層から掘削されている溝である。ただし、溝の肩部分の多くは、上位のＤⅡ－２層の耕作によって削平され、同時に、溝の北側のＤⅢ層の大半が攪拌されているため、溝の北側では黒色粘土層上面から掘削されているように見えるところも多かった。底面のレベルが、西端部が東端部よりも16㎝高いので、水流の方向は、西から東へと考えられる。この溝の深さ、幅等の規模は、長崎遺跡の全調査区の中でも最も大規模なものであり、南西側の自然堤防部分の集落域と北東側の水田域を区画する性格も考えられる。覆土の大半は粘土を中心とする堆積物からなり、土器片・木製遺物が若干見られる。この溝の中央部付近で、南側にＳＤ5297が、直交するように連続している。深さはＳＤ5297の方は、約74㎝を測り、ＳＤ5108の方が深い。ＳＤ5297は、微高地北中部に造られた円環状の溝状遺構群の北東部分であり、したがってＳＤ5108と溝状遺構群との有機的な関連が推定できる。底

面の勾配から水は西から東に流れたと考えられるが、堆積物には、流水の痕跡を示す顕著な渦状の模様は、見られない。かといって、腐植の発達した状況は観察できず、著しい停滞水ではなかったようである。これらから、単に集落の縁の水路ではなく、流水が存在する用排水路の機能も考えられる。なお、この溝はＫ６グリッド付近で底部の南側（断面図Ｅ－Ｅ′）と北側（断面図Ｆ－Ｆ′）で深い浸食があり、溝内部での蛇行流の痕跡が観察できた。この部分でのみ顕著であり、その成因としてこの部分の上流部からの落差の存在によって流れの浸食力が増進した結果とも考えられる。

ＳＸ5475（テラス状遺構）

ＳＤ5108の南側（Ｉ６・Ｊ６グリッド）とＳＤ5220の東側に造られたテラス状遺構である。テラスの幅は１～２ｍ。長さは22ｍほどが確認できた。なお、この遺構は、微高地を形成した自然堤防堆積物である灰色シルト質粘土の北側と西側の斜面部分を25～30cmほどほぼ垂直に掘削し造成されている。ＳＤ5108・ＳＤ5220の微高地側の肩部と連続した造成のようである（断面図Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′、第66図のＡ－Ａ′）。機能は不明であるが、微高地から溝に人間が移動する際の安全確保のための施設の可能性も考えられる。この遺構は、掘立柱建物群造成に関連する整地層の造成によって被覆された。

ＳＤ5290・ＳＤ569・ＳＤ570・ＳＸ5248・ＳＤ5290・ＳＤ5220・ＳＸ5300

Ｊ６・Ｊ５・Ｉ５・Ｈ５グリッドを中心として、微高地北部の、円環状に連続した溝状遺構群である。ＳＤ5108の南側には不定形の溝状遺構群が検出された。深さは約１～0.5ｍ、幅は約３～0.5ｍと変化に富み、しかも断面形は逆台形が多いが、ＳＸ5248のようにＶ字型に掘り込まれた部分もある。いずれも、堆積物には多くの泥炭・腐植が発達している。また、土器が集中して廃棄されている状況も観察できた。これらの溝状遺構は、ＳＸ5300のような凹みもあり、底面の起伏を伴いながら円環状に連続し、ＳＤ5108と連続している。この溝の機能としては、単なる土器廃棄場所ではないと思われ、出土遺物の詳細な検討が今後の課題である。次に、溝状遺構群と掘立柱建物群の共存の問題があるが、これらの溝状遺構群の底よりも深いレベルで礎板が検出されたものもあるが、建物配置の状況が、これらの溝状遺構群のすべてが埋まった状態でのものであり、さらに深い位置で出現した礎板も柱穴の掘削は、埋積した溝状遺構を掘って行われている。そこで、これらの溝状遺構群は掘立柱建物群に先行するものと考えられる。さらに、これらの溝状遺構には泥炭・腐植の発達状況から、ほとんど流水をみない滞水が考えられる。また、泥炭層・腐植層がラミナをなしており、粘土層の混入は少ない。また、炭化物の層状の堆積もみられる。土器廃棄溝の湿地植物の生成枯死による埋積と、枯死した植物が焼けることによる炭化物の埋積が繰返し行われたと考えられる。なお、ＳＤ5297とＳＤ5220は、それぞれ調査区の南側と西側に延長できることが確認されている。また、ＳＤ5297の断面からは、流心と溝幅の変化を読み取ることができる（第46図）。埋積し、湿地化した溝に対して、やや場所を移動させながら浚渫・掘削を行っているが、ただし、当初の溝幅の範囲内での移動である。

また、後述のようにＳＤ5108が湿地化し、ＳＸ5110を形成する段階になると、この円環状の溝群も湿地化し、西端部のＳＤ5220の西部では南北方向の杭列ＳＡ5337が溝内に打込まれ、流水の制御に使用されたものと考えられる。さらに円環状の溝群の西半部の内側にあったテラス状遺構ＳＸ5475の一部も湿地化し、特にＳＤ5220の東岸部には南北方向の多量の木片が集積していた（ＳＸ5210）。

ＳＤ5283－１・ＳＤ5283－２

微高地東部の溝状遺構群は、ＳＤ5283とＳＤ5336である。ＳＤ5283は、Ｊ６・Ｋ６・Ｋ５グリッドにあり、Ｌ字型に掘削され、深さは約1.2m、幅は約1.5mである。この溝には、ほぼ重複するものの、新旧の切り合いが見られ、旧溝（ＳＤ5283－２）よりも、新溝（ＳＤ5283－１）の方が屈曲が大きい。いずれも断面は逆台形で、粘土によって埋積されている。覆土からの遺物の出土は殆どなかったが、旧溝の覆土上部から、完形の壺が出土している。旧溝は南側と西側の端部が収束しているが、新溝は西側は収束しているものの、南側は調査区外にまで延長している。しかし、旧溝の南東部の肩は新溝によって破壊されているため、旧溝も南側に延長していたことは充分考えられる。新溝の北側には、新溝の曲り方に応じた杭列ＳＡ5446がある。ただし、この杭列は一部でＳＤ5283の北側の肩の内側に打込まれており、この溝に付属するものと単純に考えることができない。この溝の埋没過程での護岸施設、または北側の湿地ＳＸ5110との分離施設とも考えられる。その根拠として、この杭列の北側では湿地が厚く発達しているにもかかわらず、南側のＳＤ5283では、湿地の発達は薄いことがあげられる。この溝の機能は、杭列によって植物遺体や木片の侵入を防ぎながら、浅くなった溝状低地ＳＸ5110の上を緩やかに流れる水を受け止め、南側に通水することも考えられる。ＳＤ5283は、前述の円環状溝群よりも比較的新しい時期のものと考えられる。円環状溝群の東北部にもＳＡ5446が打込まれているものの、ＳＸ5110と連続して植物遺体や木片が多く侵入している。この点がＳＤ5283とは大きく異なっている。したがって、ＳＤ5283は遺構変遷図②の段階の遺構とした。しかし、微高地東部の掘立柱建物群（８群）の方位と一致しているので、これらの掘立柱建物群の北東部をＬ字型に区画する溝とも当初は考えたが、第47図の断面図でもわかるように新溝の上面が整地層造成によって削平されずに、そのまま整地層として盛土されていることや、溝の覆土中から礎板が検出されたことなどから、掘立柱建物群が形成された時期とこの溝の時期は重ならないと考えた。

ＳＤ5336

Ｋ６グリッドにあり、ＳＤ5283の東側に位置する。深さ1.3m、幅1.1mで、断面は逆台形で、粘土によって埋積されている。ＳＤ5283を切っているので、それよりも新しいといえる。覆土からは、木製品が数点検出された。機能は不明である。

ＳＲ5243

調査区南西部にあるＧ５グリッドに位置し、６区のＳＲ601（古）に連続すると推定できる。黒色粘土層を浸食して形成されて、覆土は灰色シルト質粘土に連続するため、５区の微高地部分の基盤を構成する自然堤防堆積物の主体の一部は、この河道の溢流堆積物であることも考えられる。さらにより粘質な溢流物質がより遠方に堆積し、ＤⅢ層水田の作土層となったとも考えられる。この河道は、ほぼ中位まで埋積した段階で堰状遺構ＳＸ5114が設置される（後述の水田遺構についての記載部分参照）。

ＳＸ5110と関連遺構

ＳＸ5110は、ＳＤ5108の中央から東側にある、深さ約50cmの溝状低地である。基本的にはＳＤ5108が、Ｊ６、Ｋ６、Ｌ６・７グリッドで岸が南側に拡張され、幅6.2mとなった部分にあたる。拡張部分の深さは、約50cmと浅くなっている。この拡張部分の南岸と北側に杭列がみられる。さらに、この溝状低地を

横断または縦断していくつかの杭列が存在している。これらは、いずれも杭の深さが溝ＳＤ5108の中位までである。そこでＳＤ5108が中位まで埋積された後にできた溝状低地ＳＸ5110の覆土中位以下に杭が打込まれたとみなしてよいと思われる。ただし、これらの杭列の内、ＳＸ5110に斜めに打込まれたＳＡ5445・5476・5480・5481・5446はいずれも右岸側に斜めに設置されており、水流を右岸側に導水する機能が推定できる。ＳＸ5110の右岸側に、これと連続する溝状遺構として、ＳＤ5436・5437がＳＸ5110の流れの方向に並行して検出されている。また、これらは取水口をＫ６グリッドの、流れの幅が狭隘部から、広い部分に転換する移行部分に設けており、水量の調節には適していたと思われる。また、前述のようにＳＤ5293もＳＡ5446によって水のみを選別して導水していたものと考えられる。

ＳＤ5108は中位まで埋積され、水流も停滞し、黒褐色の腐植がよく発達した、泥炭層または暗色粘土層によって被覆されだしたころ、水利施設として付属する導水路と流水を誘導・制御する杭列群を設置したと考えられる。その際、ＳＤ5108の南側を掘削し拡幅してＳＸ5110が形成されたものと考えられる。しかし、、これらの施設の内、杭列群は、流水をさらに停滞させ、泥炭・腐植の堆積を進行させ、また、出水期の流木片をかえって堆積させることになり、腐植・泥炭・流木片の堆積したＳＸ5110は拡張されることになった。これによって導水路群は埋積され、水利施設の機能は終焉を迎えたと考えられる。なお、この腐植・泥炭・流木片の堆積の中に、多くの土器片や木製品が含まれていた。

このＳＸ5110が、多くの腐植・泥炭・流木片で埋積される時期には、連続するＳＤ5297・ＳＸ5248・ＳＤ5220等の円環状の溝群も、さらに調査区南西端のＳＲ5234も、同様な埋積が進み、それぞれ堰状の遺構が検出されている。ここで疑問点として、これらの湿地化がどの高さまで進行したかという問題があげられる。ＳＸ5110の岸の標高が、第48図の断面図Ｇ－Ｇ′をみると、右岸の肩で2.27ｍで、左岸の肩が1.98ｍであり、30㎝近くの差がある。左岸部では、この上位にＤⅡ－２層・ＤⅡ－１層が堆積しており、耕作による岸部の削平が考えられる。なお、右岸部でも、岸部にまで斜めに堆積した腐植のラミナをほぼ水平に削平しているので、右岸部の最高標高は、さらに上位に位置していたと考えられる。他の断面でも、右岸部が掘立柱建物設置に関連する整地層の造成工事によって、腐植のラミナを切って削平されていることがわかる。左岸部では、いずれも水田拡幅工事によって、耕作・削平している。

なお、ＳＸ5110に打込まれた杭列の内、南北方向のＳＡ5447・5271・5443、埋没したＳＤ5108の左岸に東西方向に打たれたＳＡ5274、右岸に東西方向にほぼ並列して打たれたＳＡ5275・5307・5449（これらの杭列はＳＤ5436・5437の埋積された後に打たれている）、また、ＳＤ5108とＳＸ5110を斜めに縦断するＳＫ5140、さらにＳＤ5220に打たれた南北方向の杭列ＳＡ5141、調査区南西部のＳＡ5447・5478、堰状遺構であったＳＸ5144、以上の杭列・畦畔群は、微高地状上に展開されたこれらの溝状遺構群が湿地化して泥炭・腐植質粘土・木片群によってほぼ埋積された後、微高地裾部に主に堆積した明灰色粘土層による完全な埋積を経た後に、微高地裾部が水田化される段階での水田関連遺構と考えられる。

年代観は、ＳＤ5108はじめ、溝状遺構群が形成された段階、さらにそれらが湿地化によって埋積され、水利施設が建設された段階、のそれぞれの遺構から出土した土器から弥生後期（長崎３期～４期）に属するものと考えられる。

ここでは溝状遺構群の覆土と水田作土との切り合い関係を明らかにすることによって、それらの相対

第５表　５区南西部溝状遺構・杭列一覧表

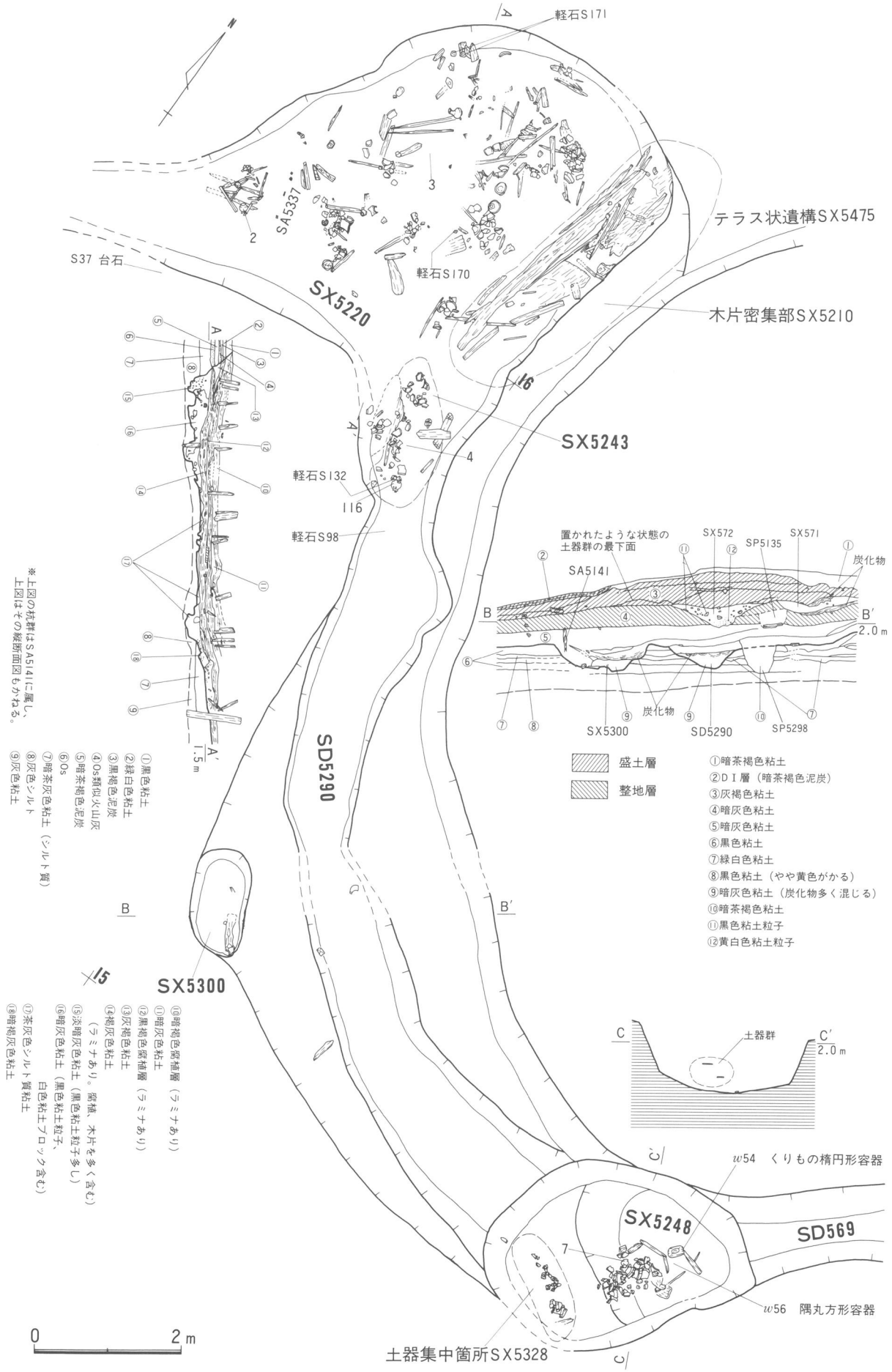
溝状遺構

時期は該当する遺構変遷図（第41～44図）の番号を示している。

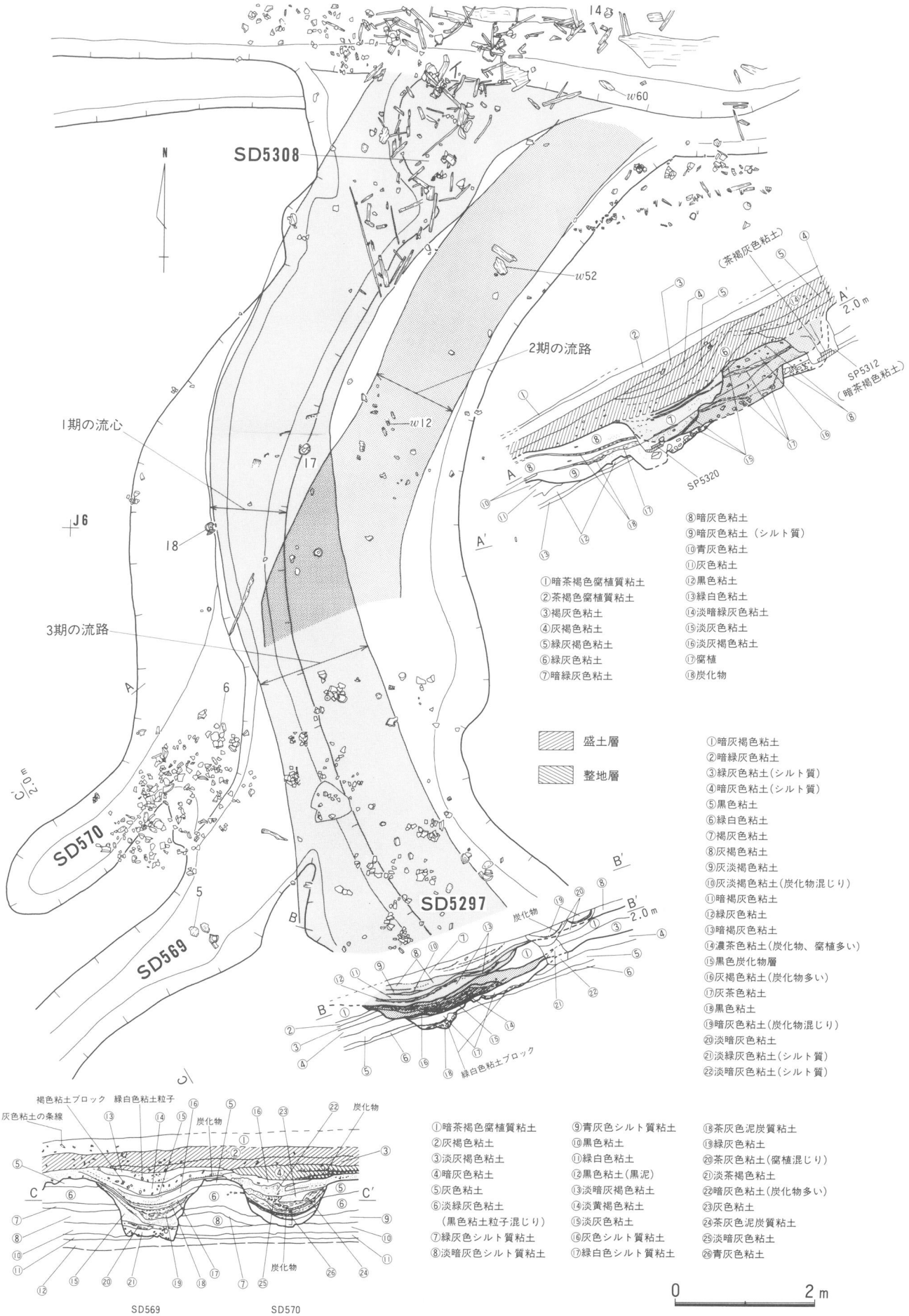
遺構番号	基本方向	方向	検出長（m）	下端幅（m）	掘削面	掘削深さ（cm）	履土	断面形状	機能	切り合等	時期	断面図
ＳＲ5234	東西	Ｅ15°Ｎ→ Ｅ33°Ｓ	6.91	－	黒色粘土層上面	120	暗緑灰色粘土 暗灰色粘土 灰色シルト	－	河道	ＳＸ5114が覆土上位に設けられている。	①	70図 ＡＢＣ
ＳＤ569 （ＳＸ569）	南北	Ｎ50°Ｅ→ Ｎ31°Ｅ	5.50	1.20 ～0.33				摺鉢形	水路	円環状の水路の一部。 ⑤の時期まで湿地残る。	①～⑤	46図Ｃ
ＳＤ570 （ＳＸ570）	南北	Ｎ54°Ｅ→ Ｎ29°Ｅ	4.97	1.10 ～0.34			暗緑灰色粘土	摺鉢形	不明	円環状の水路につながる。 ⑤の時期まで湿地残る。	①～⑤	46図Ｃ
ＳＸ5248	東西	Ｅ24°Ｎ	3.58	2.22	ＤⅢ層対応の灰色シルト質粘土層上面	104～70	濃茶色粘土（炭化物・腐植多い）	摺鉢形	不明	円環状の水路の一部。 凹地の機能は不明。	① ②	45図Ｃ
ＳＤ5290	南北	Ｎ62°Ｗ Ｎ22°Ｗ	11.89	0.94				逆台形	水路	円環状の水路の一部	① ②	45図Ｂ
ＳＤ5297	南北	Ｎ32°Ｗ→ Ｎ23°Ｗ→ Ｎ25°Ｅ	12.69	1.50 ～1.10			（青）灰色粘土	逆台形	水路	円環状の水路の一部。 調査区外の南へのびる。	① ②	46図ＡＢ
ＳＸ5300	南北	Ｎ35°Ｗ	1.61	0.82				逆台形	不明	円環状の水路の一部。 凹地の機能は不明。	① ②	45図Ｂ
ＳＤ5108	東西	Ｅ8°Ｎ→ Ｅ5°Ｓ→ Ｅ25°Ｎ	39.38	3.50 ～2.50	ＤⅢ層中・ＤⅢ層対応の灰色シルト質粘土層上面	116～48	緑灰色粘土 茶灰色粘土 暗灰色粘土	逆台形	区画溝 水路	ＳＫ5140に切られる。 ＳＡ5271に切られる。	① ②	48図ＡＢＣＤ ＥＦＧ
ＳＤ5220	東西	Ｅ28°Ｎ	5.81	4.70	ＤⅢ層対応の灰色シルト質粘土層上面	31	褐灰色粘土 淡暗褐灰色粘土 暗褐灰色粘土	逆台形	不明	円環状の水路の一部。	① ②	45図Ａ 73図Ｃ
ＳＸ5110	東西	Ｅ7°Ｎ→ Ｅ26°Ｎ	32.20	4.50	ＳＤ5108が中位まで埋積され湿地化した状況	－	黒褐色腐植・暗色粘土	摺鉢形	湿地	ＳＸ5110からの導水路	②	48図ＥＦＧ
ＳＤ5135-2	南北	Ｎ23°Ｅ→ Ｎ0°	6.16	0.60	ＤⅡ-2層上面	32	灰色粘土	逆台形	水路	ＳＸ5114に付属する水路か？	②	70図Ｄ
ＳＤ5221	東西 南北 南北	Ｅ5°Ｎ→ Ｎ10°Ｗ→ Ｎ9°Ｗ	4.09 3.25 3.37	0.80 0.38 0.56	ＤⅡ-2層上面	27	暗褐灰色粘土	逆台形	畑状？	ＳＸ5477の耕作によって南半部が削平されている。	②	66図Ａ
ＳＤ5283-1	南北	Ｎ26°Ｗ→ Ｎ11°Ｗ→ Ｎ63°Ｗ	7.78	0.70 ～0.47		62	暗茶褐色粘土	逆台形	水路？	ＳＤ5283-2を切る。 ＳＤ5336に切られる。	②	47図ＡＢＣ
ＳＤ5283-2	東西	Ｅ22°Ｎ→ Ｅ48°Ｓ	8.25	1.42 ～0.43	ＤⅢ層対応の灰色シルト質粘土層上面	51	暗灰色粘土	逆台形	水路？	ＳＤ5283-1に切られる。	②	47図ＡＢＣ
ＳＤ5336	南北	Ｎ23°Ｅ→ Ｎ40°Ｅ	5.10	1.25 ～0.75		66	暗緑灰褐色粘土	逆台形	不明	ＳＤ5283-1を切る。	②	47図Ｃ
ＳＤ5436	東西	Ｅ15°Ｎ→ Ｅ24°Ｎ	16.82	0.86	ＳＤ5108南岸の灰色シルト質粘土層を黒色粘土層まで削平された面	40～15	暗灰色粘土	逆台形	水路	ＳＸ5110からの導水路	②	48図Ｇ
ＳＤ5437	東西	Ｅ14°Ｎ→ Ｅ22°Ｎ	16.65	0.66		20	暗茶褐色粘土	逆台形	水路	ＳＸ5110からの導水路	②	48図Ｇ

杭列

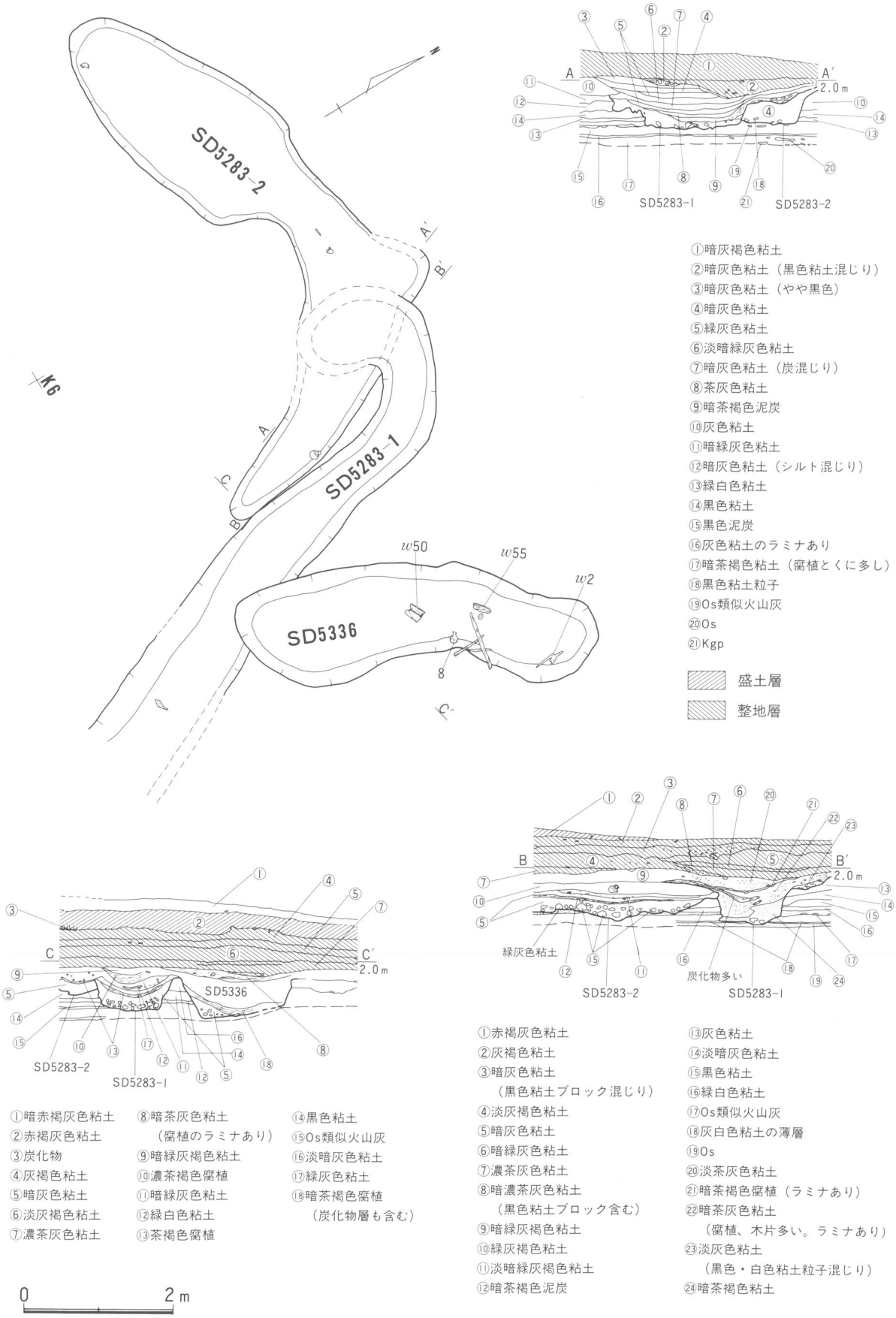
遺構番号	基本方向	方向	検出長（m）	杭列上面の高さ（m）	杭列内出土杭数	杭列１ｍ当の出土杭数	切り合等	時期	平・断面図
ＳＡ5337	南北	Ｎ22°Ｗ	1.10	1.752	5	4.5	ＳＤ5220が湿地化した段階での堰か？	②	45図
ＳＡ5445	東西	Ｅ34°Ｓ	2.80	1.919	17	6.1	ＳＸ5110からの導水用の堰か？	②	48図
ＳＡ5476	東西	Ｅ8°Ｓ	1～1.5のものが３組	1.777	12	3.8	ＳＸ5110からの導水用の堰か？ ＳＤ5437に導水か。	②	48図
ＳＡ5480	東西	Ｅ7°Ｎ→Ｅ20°Ｓ	9.50	2.042	10	1.1	ＳＸ5110での湿地の柵列、導水用か？	②	48図
ＳＡ5481	東西	Ｅ8°Ｎ	3.30	1.908	4	1.2	ＳＸ5110での導水用か？	②	48図
ＳＸ5114	南北	Ｎ15°Ｗ	6.68	1.618	97	14.5	②では堰、④では畦畔。	②③④	70図
ＳＡ5446	東西	Ｅ37°Ｎ→ Ｅ33°Ｓ	12.20	1.942	98	8.0	ＳＸ5110からの導水用か？	②③	48図
ＳＡ5447	南北	Ｎ20°Ｗ	6.30	1.950	11	1.7	ＳＸ5110の西側の区画→畦畔へ。	②③	48図
ＳＡ5458	東西	Ｅ5°Ｓ	0.6	1.572	5	8.3	②ではＳＤ5135-2にかかる堰？	②③	70図
ＳＡ5141	南北	Ｎ17°Ｗ	16.20	1.897	90	5.6	ＳＤ5220を切る。	③	45図ＡＢ
ＳＡ5271	南北	Ｎ27°Ｗ	7.95	1.971	58	7.3	水田区画か？	③	48図
ＳＡ5274	東西	Ｅ23°Ｎ→Ｅ33°Ｎ	17.80	1.820	63	3.5	ＳＸ5110の水量制御用→畦畔の護岸	③	48図
ＳＡ5275	東西	Ｅ33°Ｎ→Ｅ16°Ｎ	18.65	1.923	107	5.7	ＳＸ5110の水量制御用（ＳＡ5275とした）→畦畔の護岸	③	48図
ＳＡ5307	東西	Ｅ37°Ｎ→ Ｅ26°Ｎ→Ｅ10°Ｓ	7.75	1.857	49	6.3	ＳＡ5275とあわせて畦畔の護岸か？	③	48図
ＳＡ5443	南北	Ｎ14°Ｗ	4.65	1.910	18	3.9	水田区画か？	③	48図
ＳＡ5448	東西	Ｅ8°Ｎ	5.70	1.929	8	1.4		③	－
ＳＡ5449	東西	Ｅ39°Ｎ	4.70	1.762	24	5.1	畦畔の護岸	③	48図
ＳＡ5478	南北	Ｎ28°Ｗ	6.70	1.969	4	0.6	ＳＸ5248を切る。	③	－
ＳＡ5504	東西	Ｅ21°Ｓ	0.50のもの２組	1.905	6	6	ＳＤ5221を切る。	③	－



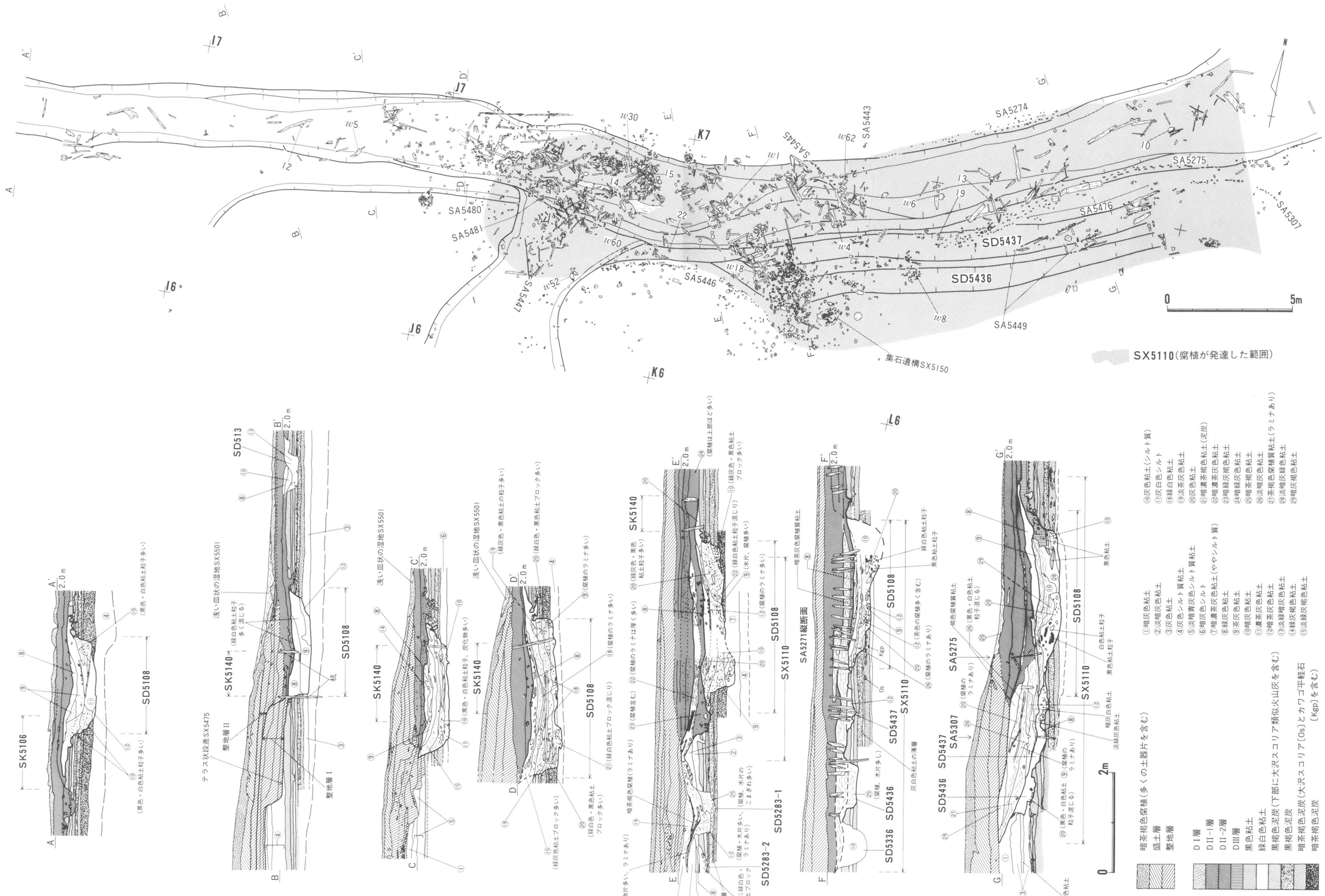
第45図　5区溝状低地遺物分布図（1）



第46図　5区溝状低地遺物分布図（2）



第47図　5区溝状低地遺物分布図（3）



第48図　5区溝状遺構遺物分布図（4）

的な前後関係を提示した。①で示した遺構群は長崎３期～４期に属すると考えているが、前述のようにＳＲ5234が、６区のＳＲ601（古）と連続するとすれば、これのみはいくぶん古手の遺構としてよいと思われる。

２．掘立柱建物群

掘立柱建物群は６区中央部・北東部から５区の南端にかけて流れる河道５区南西端部のＳＲ5234（６区ＳＲ601（古）と連続する？）に並行して、５区南西部にできた東西方向の自然堤防（Ｉ列付近から東）に立地している。埋積された下層の溝状遺構ＳＤ5108の南側の縁部分には、盛土を伴った、整地層が造成され、さらに南側の全ての溝状遺構群も埋積が完了した段階で、盛土・整地されており、第１節で取り上げた溝状遺構群の時期との共存は確認できなかった。

この掘立柱建物群の建設基盤となった整地層の造成は、特に北側のＳＤ5108埋積後に設置された東西方向の杭列大畦畔ＳＫ5140との切り合い関係をみると、２つの工期に分けて行われたことがわかる（第66図Ｂ－Ｂ′断面参照）。最初の工期の整地層Ｉは、ＳＫ5140の盛土の手前までを盛土して整地している。次の工期の整地層Ⅱは、ＳＫ5140の盛土をほぼ覆い尽くすように盛土がされ、整地されている。したがって、掘立柱建物群が微高地に建てられたころの、北側の低地の水田はＤⅡ－１層水田であるが、整地層Ⅱの時期は整地層の北側の縁の段差が、そのまま水田の南側の畦畔の代用を果たしていたと推定できる。ただし、水田遺構について後述を参照されたいが、もうひとつ北側に東西方向の盛土大畦畔が設置され、整地層Ⅱの北縁とこの盛土大畦畔との間には水路が設けられ、畎畝となっていたようである。

整地層の西側の縁についても、北縁とほぼ同様なことが、断面図から明らかである（第66図Ａ－Ａ′断面参照）。整地層Ｉは、微高地西部端を南北に通る溝状遺構ＳＤ5220が埋積された後、その東部に南北方向に設置された杭列ＳＡ5141付近まで造成されている。この段階では、ＳＡ5141の西側には水田または畑の耕作域が広がっていたと考えられる。なお、ＳＫ5140とＳＡ5141の杭頭レベルは、ほぼ同じであり、また、整地層Ｉの上面もそのレベルで接地している。そこで、杭列ＳＡ5141も、畦畔ＳＫ5140のように、杭頭を当時の地表面の直下に埋めるようにして設置されていた可能性が考えられる。機能としては、微高地の掘立柱建物地域と低地の耕作域とを区画すること、さらに盛土した整地層の土留めを推定できる。

ところが、整地層ⅡはＳＡ5141とその西側の耕作域に跨がって盛土されている。ただし、この整地層Ⅱの西端部は柱穴の検出状況からみて、微高地から低地に移行するにもかかわらず調査区外にまで拡がっている可能性が大きい。なお微高地の東部と南部は調査区外に連続し、整地層も同様に連続することが考えられる。

ただし、整地層Ⅱは、整地層Ｉよりも拡がっているにもかかわらず、第42図でもわかるように西側の拡張部分には建物群１群と３群の西部、北側の拡張部分には建物群２群と４群の北部に位置しているが、いずれも掘立柱建物の密度は中央部分よりもきわめて低い。

掘立柱建物群の柱穴検出作業は、台状遺構の盛土下面の焼土・炭化物散布層を水平にスライスして、土色・土性の違いを観察することによって行った。柱穴の掘り方内部は周りに比べると、粘性が強く、さらに、柱の抜き取り穴が検出された場合は、掘り方の内側に、ほぼ正方形の痕跡が、より粘質の強い土質として識別できた。しかし、これらの識別は、土層全体が強グライ化されており、困難な場合が多

く、礎板の検出面近くのレベル、もしくは検出面までスライスしてはじめてできることがしばしば見られた。このような検出状況なので、礎板の検出レベルからみると、標高2.2mから1.1mまで約１mの幅で、何回かの建て替えを窺わせるような位置的にも近接した検出状況を呈していた。柱穴検出総数は、ピットとして検出されたもの、礎板状の木製品のみが検出されピットが検出されなかったものを合わせると239を数える。その内、礎板の検出されなかったピットは12のみで、95％は礎板を持つ柱穴と考えられる。

これらの柱穴群の分布は、整地された微高地の中央部分に多く、微高地の裾部分ではまばらである。現地で一つの建物として認定できたのは６棟のみ（ＳＨ5361・5362・5363・5364・5365・5366）であった。それらの認定基準は、礎板上面の検出高がほぼ同一・覆土が類似・礎板の向きが類似・礎板の組合せ方が類似・各柱穴の切り合い関係に整合性がある、ということをあげた。そして、第42図のように９群に建物群のまとまりを分割した。ところが、８群のように、１間×１間の南北方向の掘立柱建物がありそうだが、四隅のそれぞれの位置には、柱穴が数個以上重なり合って検出されており、前記の掘立柱建物の認定基準として現地で設定した諸条件の全てが満たされていたが、それでも、各掘立柱建物の四隅の柱穴としての組合せ方はいく通りもでてきてしまい、これらの複数の柱穴としての組合せ方の内、あるものを示せば、それは任意の組合せとなってしまい、事実の開析からはほど遠いものと考えた。

ところが、礎板の実測作業中にＳＨ5363の異なる柱穴の礎板が、互いに隣接（接合）し、礎板に転用される以前には一個体の元材であったものが、分割されて礎板となったことが判明した（第85図のW38とした材は２個の柱穴の所属する礎板として分割されている）。そこで、まず、このＳＨ5363の各柱穴から出土した全ての礎板18枚を取り出して接合関係を調べたところ、６種類の元材の存在が確認できた（第６表参照）。しかも、それらの中には、そのままの形では発見されにくい扉などの大型の木製建築部材を分割して礎板に転用しているものもあった。そこで、礎板の検出された217個の柱穴からでた全ての礎板を並べてそれぞれの接合関係を調べ、これをもとに個別の掘立柱建物の１棟に所属する柱穴を認定することを考えた。作業仮説として、［①異なる柱穴に属する礎板のうち、接合関係が認められるものがあれば、それらの礎板の元材が分割されたのは、１個の建物を建てようとしている時に、行われた可能性が高い。②そこで、接合関係が認められる礎板がある複数の柱穴があるときには、それらが同一建物に属する柱穴と認めうる。③もしも、かなり離れた距離にある礎板が接合した場合は、これらの礎板は、同一の建物を構成することはないが、ほぼ同一時期の建設である可能性が高い。］という考えをもって、礎板の接合関係の調査を行うことになった。

ここでいう接合関係とは、完全に接合しているレベル、すこし離れて接合しているレベル（ただし、間に別の片材が介在していない）、やや離れて、間に別の片材が介在しているレベル、等の諸段階での接合関係であり、前者の方が、後者の方に比べて、より接合関係の認定の信頼性が高いと考えた。さらに、以上のような接合関係は認められないが、年輪の特徴から同一材からの木取りであることがわかるもの、さらに同一樹種であること、また加工痕跡の特徴が共通しているもの、切断面の形状から同一使用利器と認められるもの、同一の利器ではないが、同種の利器の使用が認められるもの、切断方法の共通しているもの、腐植の進行状況の特徴が類似しているもの等の、各種の観点から礎板の接合関係の総合的な

※①・②の両図では、各掘立柱建物を構成する柱穴には、●印を記入した。ただし、このポイントは柱痕のポイントを示さない。（柱痕のポイントは各建物の図を参照）

※各柱穴の遺構番号は、各建物群別の詳細図に示した。ただし、詳細図にのらなかったものは、本図①に遺構番号を記した。

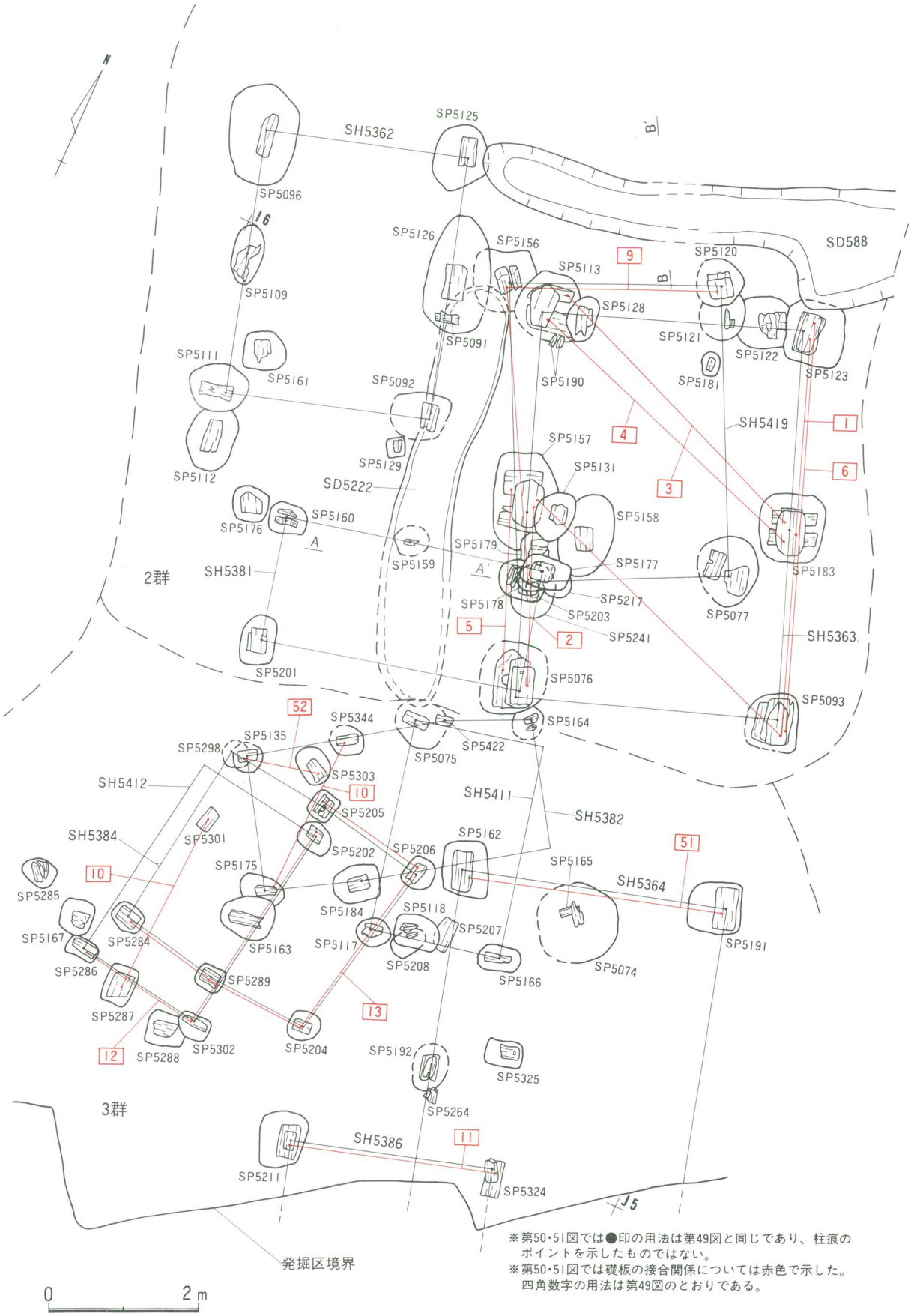
①掘立柱建物群全体図

0　5 m

※左図での四角数字は接合関係を示す礎板登録番号。また建物番号(SH)があるものは、それらの接合礎板を手がかりのひとつとして認定した建物を示す。

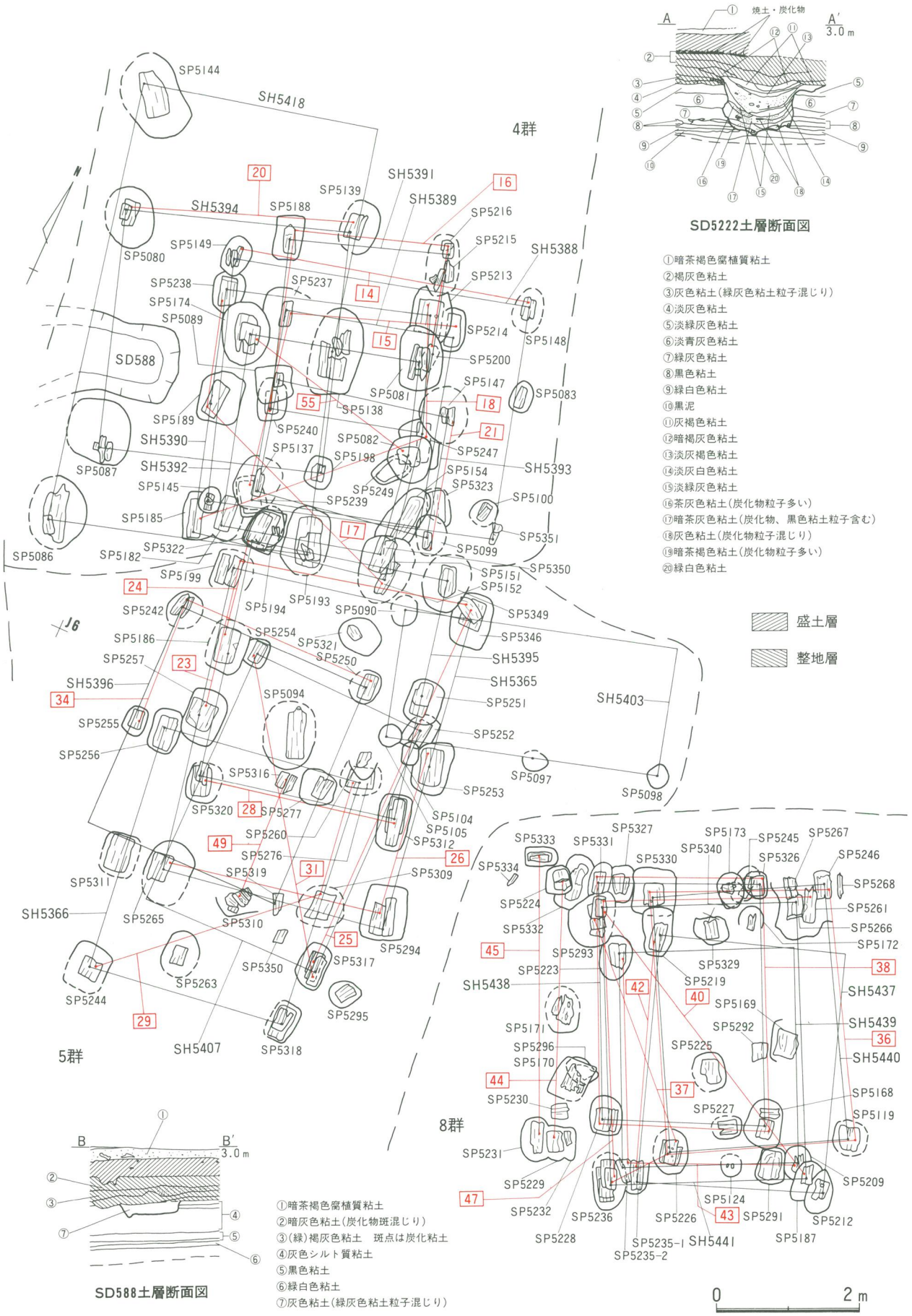
②礎板接合関係全体図

第49図　5区掘立柱建物群全体図



※第50・51図では●印の用法は第49図と同じであり、柱痕のポイントを示したものではない。
※第50・51図では礎板の接合関係については赤色で示した。四角数字の用法は第49図のとおりである。

第50図　5区掘立柱建物詳細図（1）



第51図　5区掘立柱建物詳細図（2）

調査をすすめつつある。

このような、調査は現在も進行中であるが、いままでのところ、異なる柱穴間で、前記の①～③の接合関係にあるものは、41組検出できた。それらのうち、５組は建物の位置・規模を確定するまでには至らなかったが、その他の36組はいずれも建物の位置・規模を確定することができたものである。この36組の内、ＳＨ5363のように同一建物の中で、６種類の元材が検出できたところもあり、異なる柱穴間の礎板の接合関係が認められた建物は26棟である。異なる柱穴間の礎板の接合関係は認められないが、当初掲げた諸条件に合致するものとして、６棟を示した（第６表参照）。今回、５区の掘立柱建物として提示した32棟の内の、約80％は礎板の接合関係を主要な要素として認定したものである（第49・50・51図参照）。これらの作業は、当初掲げた作業仮説に概ね合致する結果を示し、前述の建物群８群でも、いくつかの柱穴の組合せが判明し、複雑に重なり合う柱穴群の実態の解明にいくらかの前進をみることができた。

また、数個から最高７個にまで及ぶ柱穴の重なり合い（切り合い）の順序と、今回試みた礎板の接合関係を照合させると、今回提示した26棟は、いずれも矛盾無く整合している。これら26棟と、礎板の接合関係以外で認定した６棟を合わせて、第７表に示した。この表からは、各建物群単位での建物の建設順序を読み取ることができる。しかし、複数の建物群に跨がって礎板の接合関係を認定することは、今のところできていないため、５区全域での掘立柱建物の建設順序を推定することはできなかった。

ただし、礎板の出土レベルは1.9m前後と、1.5m前後の２つのピークにわかれており、建設時期は大きく２時期に区分することが可能である。これは、前述の整地層の拡張期の前と後とも関連すると考えられる。このように、礎板の接合関係の認定を主要な用件として掘立柱建物の柱穴の組合せを推定したが、前述の作業仮説とは異なるいくつかの興味深い接合関係を発見することができた。

第１は、接合関係９とした２群のＳＨ5419のように、１間×１間の柱穴の内の３穴から検出された礎板が接合されるだけでなく、柱穴番号３の北東約１ｍに隣接するＳＰ5158から検出された礎板とも接合関係があるというように、同一の棟の柱穴以外にも隣接して接合する礎板が検出される例があるようである。この他に、接合関係52とした３群のＳＨ5382も同様な事例である。また、接合関係36とした８群の事例では、ほぼ同規模・同一方向の建物であるＳＨ5440と、おおむねそれに重なりつつも約１ｍ西に位置するＳＨ5441の、それぞれの柱穴番号３から検出された礎板が接合した。柱穴の切り合い関係からは、前者の建物の方が後者よりも古であることがわかる。そこで、前者が建てられた時に、同一の元材から取られた礎板の一部が、後者を建てた時にも使われたことが想定できる。

第２は、前述のことがらと類似しているが、一つの柱穴から検出された複数の礎板が、それぞれ別の建物の柱穴の礎板と接合することである。事例としては５群のＳＨ5365の柱穴番号１から検出された礎板のW1164は、接合関係２３が示すようにＳＨ5365の柱穴５・６と接合している。ところが、このW1164の直上から検出された礎板のW1165は、ＳＨ5407の柱穴番号３のW1616と接合し、元材は、鼠返しであったことが判明した（接合関係25）。ここでも柱穴の切り合い関係から、ＳＨ5365の方が、ＳＨ5407よりも新であり、後者で使われた礎板の片割れが前者で使われたことが推定できる。

第３は、掘立柱建物と水田遺構の共伴関係を示す事例である。５群のＳＨ5366の柱穴番号３から検出

された礎板が、南南西に22.5m離れた畦畔ＳＸ5114から出土した畦畔補強材の板片W1379と接合関係27を示している。この事例は、一度使用された元材が分割されて再利用される時に、礎板としても、畦畔の補強材としても使われることを示しており、今後、杭列畦畔出土の分割材を丹念に観察すれば、掘立柱建物の礎板との共伴関係ばかりではなく、錯綜する杭列群をいくつかのグループに大別するこができる可能性を示唆していると考えられる。

これらの掘立柱建物の方位は、概ねN17°Wであり、バラツキは少ない。また、建て替えは各群とも行われているが、とりわけ微高地中央部分の４・５・８の各群では、数回以上も行われ、しかもほぼ同一場所に建設されている。したがって、各群とも同一時期での建物の数は１～２棟であり、５区微高地全体でも10棟前後が同一時期に建っていたことが推定できる。なお、数回以上の建て替えといっても、年代的に近い（数十年か？）間隔で次々に建て替えられたことが推定できる。

建物は、南北棟が26、東西棟が６であり、南北棟が80％強と卓越している。規模は１間×１間が19棟（60％）、２間×１間が12棟（37％）、３間×１間が１棟（３％）であり、桁・梁の長さの平均値は、１間×１間では約3.3m×約2.5m、２間×１間では約3.3m×2.7m、３×１間では約4.0m×約1.9mであり、比較的小規模な建物であることがわかる。ところが２群のＳＨ5363で検出された接合関係２・４の礎板から復原された扉材は高さ約２m以上の大規模なものであり、この５区の微高地部分の掘立柱建物の廃材の再利用されたものか、それとも他の周辺地域から持ち込まれたものであるか不明である。

また、このＳＨ5363は、５区の微高地部分の掘立柱建物群のなかで最も堅固な礎板の組合せを行っている建物であり、さらにその北側と西側に溝状遺構が検出されている。西側の溝ＳＤ5222は整地層Ｉ上面から深さ約50cm掘り込まれ、幅約75cm、長さ約５m70cmである。北側の溝ＳＤ588は整地層Ｉの下面から検出された、幅約75～150cm、長さ約７m70cmである。深さは検出長で約20cmである。上面はは整地層Ｉによって覆われている。埋積の状況から、両者の共存は、あまり考えられないが、ＳＨ5363が建設された区域付近を区切るような機能が想定できる。

掘立柱建物群の存立時期については、柱穴から出土した土器は、摩滅した破片が若干あるのみであるが、掘立柱建物群建設時の整地層上面に置かれた土器が土圧で押しつぶされたようにして検出できた例がいくつかあり、これらの土器の年代は弥生後期後葉から古墳前期（長崎４期～５期）と考えられる。

なお、個々の掘立柱建物の状況については、一覧表と実測図を参照されたい。ただし、各棟の実測図で、柱穴間を結ぶ直線は、各柱穴検出の礎板上面に観察できた柱圧痕の位置を結んだものであるので、若干いびつになっているものもある。また、柱の抜取り痕跡が観察できたものに３群のＳＨ5411の柱穴番号３、５群のＳＨ5395の柱穴番号３がある。いずれも柱の抜取り痕跡が斜めに断面観察できた。柱を斜めに抜いた痕跡と考えられる。柱の抜取り痕跡が平面で観察できた事例もある。４群のＳＨ5393の柱穴番号１である（図版63）。この柱穴は２重の正方形が平面で観察できた。内側の１辺７cmの正方形は抜取りの際にできたものであり、その外側に約３cmの間隔で観察できた正方形は柱を据えた時の掘方とも考えられる。ここで注目できるのは柱の断面が正方形であることである。この掘立柱建物の柱は角柱であった可能性が考えられる。柱の圧力で凹んだ痕跡も正方形のもの、または隅丸方形のものが多い。例えば、２群の柱穴ＳＰ5161・5178（図版59）、４群のＳＰ5138・5193（図版63）、５群のＳＰ5276（図版

65）等である。ただし、柱の根部のみが残存していた、３群のＳＰ5211（図版60）や４群のＳＰ5145（図版61）をみると、ともに方形とは観察できるが、腐植が激しいので原型が判明しにくくなっていた。また、ある建物の柱穴の礎板が柱の圧力で割れたので、その割れた礎板の真上に土を入れ、さらにその上に新たな礎板を敷いた例もある。その事例としては、４群のＳＨ5392の柱穴番号１にみられらる。

この長崎遺跡では、若干の自然堤防状の高まり部分に整地層を盛土して掘立柱建物の柱を立てるのだが、穴を掘ると、下位から溝状遺構の泥炭堆積が露出する場合も多く、そこで、礎板の使用は必須となったものと考えられる。ただし、５群北東部のＳＨ5365はすべての柱穴が素掘りとなっている。また、一度検出された礎板でも、非常に薄いため翌日には腐植が進み、取り上げができなくなることもあった。

なお、前述の溝状遺構群の一部であるＳＤ569・570は、後述のように炭化物焼土面の段階で湿地化している。そこで当然ながら、この掘立柱建物群の段階でも湿地状態を呈していたと考えてよいであろうか。

しかし、ＳＸ570（湿地化段階でＳＤをＳＸとした）から２ヶ所の柱穴が検出されているので、この湿地が存在していたとすれば、湿地の中に穴を掘って柱を立てたことになる。

そこで、報告者は、一旦溝は埋められ、盛土整地された後に、掘立柱建物群が建てられたが、台状遺構構築の際に、その盛土部分の一部を削平して整地したため、その一度埋まったＳＤ569・570の覆土が再び姿をあらわしたと考えている。

第6表　5区掘立柱建物跡柱穴一覧表

注　礎板の接合関係は第49図②参照

掘立柱建物跡遺構番号 地域番号	間取 棟向 主軸方位 面積(㎡) 位置 (グリッド)	梁間(m) 平均値 各列の柱間の計測値	桁行(m) 平均値 各列の柱間の計測値	柱穴の状況 柱穴番号(P)	柱穴遺構番号(SP)	長径×短径・深さ(cm) (　)は推定値	礎板枚数	礎板遺物番号W上から	礎板の接合関係	礎板上面高(m)(無礎板は底高)	平面形状	備考
SH5361	1×1	2.62	3.33	1	5139	65×66・8	1	346		1.85	方形	
	南北	P3-1	P1-2	2	5132	75×69・6	1	348		1.83	楕円	
西(1-1)	N23°10′W	2.62	3.33	3	5134	63.5×48・5	1	347		1.85	方形	
	8.72											
	H5											
SH5362	1×2	2.76	3.58	1	5125	86.5×(73)・8	1	272		2.12	楕円	
西北(2-1)	南北	P6-1	P1-2-3	2	5126	159×86・6	1	268		2.12	楕円	
	N17°05′W	2.76	1.75　1.82	3	5092	(78)×(67)・5	1	270		2.11	方形	
	9.88	P5-2	3.57	4	5111	82×63・9	1	290		2.08	楕円	
	I6・I5	2.77	P6-5-4	5	5109	81×40・6	1	301		2.17	楕円	
		P4-3	1.76　1.82	6	5096	135×93・4	1	267		2.12	楕円	
		2.76	3.58									
SH5363	1×2	3.58	5.20	1	5123	(87)×(84)・38	2	287	6	1.89	方形	
西北(2-2)	南北	P6-1	P1-2-3					288	1			扉材
	N20°10′W	3.62	2.71　2.56	2	5183	(87)×(87.5)・51	4	731	4	1.84	方形	
	18.5	P5-2	5.27					732	3			
	I5・I6	3.61	P4-5-6					733	1			
		P4-3	2.44　2.69					734	1			
		3.54	5.13	3	5093	(81)×(69)・45	3	999	6	1.87	方形	
								1000	1			
								1001				
				4	5076	(109)×(93)・43.5	3	275	5	1.91	楕円	
								276	2			
								277	2			扉材
				5	5157	(139)×84・40	3	724	2	1.90	方形	
								725	5			
								726	1			
				6	5113	(102)×(89)・38	3	302	4	1.92	方形	
								303	3			
								304	3			
SH5381	1×2	1.76	3.51	1	5160	48×38・6	2	877		2.06	方形	柱圧痕あり
西北(2-5)	東西	P1-4	P1-2-3					879				
	N16°55′W	1.76	1.73　1.78	2	5159	(45)×(39)・14	1	876		2.04	楕円	
	6.17			3	5177	(73)×(44)・11	1	871		2.05	方形	
	I5			4	5201	68×47・7	1	1007		1.84	方形	
SH5419	1×1	2.92	3.96	1	5120	70×61・25	2	282		1.99	楕円	9との接合関係はSP5158のW727とも成立している
西北(2-10)	南北	P1-4	P1-2					283	9			
	N25°05′W	2.91	3.97	2	5077	(90)×(90)・24	1	247		1.96	楕円	
	11.56	P2-3	P4-3	3	5203	(60)×(51)・27	2	729	9	1.97	方形	
	I5・I6	2.93	3.95					730				
				4	5156	(95)×(78)・21	1	873	9	2.01	方形	
SH5364	(1×2?)	3.59	—	1	5191	73×70・13.5	1	987	51	1.98	方形	南への延長が推定される
西南(3-1)	南北	P3-1		2	5192	(69)×47・26	2	989		1.91	楕円	
	N15°29′W	3.59						990				
	—			3	5162	(75)×(62)・13.5	1	986	51	2.3	方形	
	J5											
SH5382	1×3	1.90	3.95	1	5135	(40)×(38)・12	1	310	52	2.10	楕円	SP5303 W1447と接合
西南(3-2)	東西	P1-6	P1-2-3									
	N31°55′W	1.89	1.39　1.46	2	5344	47×(38)・(16)	1	312	10	1.94	楕円	
	7.51	P2-5	P3-4	3	5422	(49)×(40)・—	1	流出		1.92	楕円	
	I5	1.91	1.10	4	5164	(42)×(41)・8	1	998		2.12	楕円	
			P5-6	5	5184	53×50・7	1	1012		1.91	方形	田下駄
			1.32	6	5175	60×40・14	1	1010	10	1.88	楕円	
SH5384	1×2	2.68	2.82	1	5298	(50)×(38)・45	0	—		1.32	楕円	
西南(3-4)	東西	P3-4	P1-2-3	2	5205	(39)×(38)・18	1	1006	13	1.68	方形	
	E10°00′S	2.58	1.39　1.43	3	5206	49×46・35	1	997	13	1.66	楕円	
	7.56	P2-5	2.82	4	5204	(46)×(42)・12	1	988	13	1.70	楕円	
	I5	2.74	P6-5-4	5	5289	50×40・—	1	1440	13	1.63	方形	
		P1-6	1.39　1.42	6	5284	58×49・—	1	1438	13	1.62	方形	
		2.74	2.81									
SH5386	(1×2?)	2.76	—	1	5324	(80)×(55)・(38)	2	1647		1.74	方形	
西南(3-5)	南北	P1-2						1648	11			
	N17°00′W	2.76		2	5211	(77)×60・27	3	976		1.84	方形	柱根
	—							977				南への延長が推定される
	I4・I5							978	11			
								979				

掘立柱建物跡遺構番号 地域番号	間取 棟向 主軸方位 面積(㎡) 位置 (グリッド)	梁間(m) 平均値 各列の柱間の計測値	桁行(m) 平均値 各列の柱間の計測値	柱穴の状況 柱穴番号(P)	柱穴遺構番号(SP)	長径×短径・深さ(cm) ( )は推定値	礎板枚数	礎板遺物番号W上から	礎板の接合関係	礎板上面高(m)(無礎板は底高)	平面形状	備考
SH5411 西南(3-7)	1×1 南北 N12°45′W 5.20 I5	1.75 P2-1 1.75	2.97 P3-2 2.97	1 2 3	5166 5117 5075	57×(35)・47 49×39・－ 65×52・36	1 1 1	991 342 274		2.03 2.10 1.99	楕円 楕円 楕円	
SH5412 西南(3-8)	1×1 南北 N9°30′E 5.47 I4	1.81 P3-2 1.81	3.02 P1-2 3.02	1 2 3	5202 5302 5286	(50)×(34)・19 46×37・－ (53)×(36)・－	2 1 1	1004 1005 1449 1437	12 12 12	1.59 1.55 1.55	方形 方形 方形	
SH5388 中北(4-1)	1×1 東西 N16°35′W 13.96 J6	3.38 P2-3 3.37 P1-4 3.38	4.14 P1-2 4.17 P4-3 4.10	1 2 3 4	5149 5148 5351 5145	57×42・－ (60)×(40)・2 (64)×(42)・－ 42×30・5	4 3 1 1	375 373 372 374 369 370 371 66 361 362	14 14 14	2.00 1.81 2.30 2.06	楕円 楕円 楕円 楕円	柱根
SH5389 中北(4-2)	1×1 南北 N11°15′W 6.17 J6	2.25 P4-1 2.25 P3-2 2.24	2.73 P1-2 2.74 P4-3 2.71	1 2 3 4	5214 5154 5239 5237	62×(35)・16 (122)×54・35 (70)×(50)・－ 72×60・6	1 1 1 1	902 591 1181 836	15 15 15	1.65 1.63 1.66 1.71	方形 楕円 方形 方形	鼠返し
SH5390 中北(4-3)	1×2 南北 N15°50′W 9.61 J6	2.81 P6-1 2.83 P1-P4 2.78	3.42 P6-5-4 1.69 1.63 3.32 P1-2-3 1.80 1.72 3.52	1 2 3 4 5 6	5213 5247 5151 5185 5189 5238	73×57・6 78×60・44 102×80・35 70×55・23 72×(49)・24 53×45・8	1 1 3 1 1 1	901 1183 590 589 588 889 887 835	18 18 17 18 17 17	1.78 1.55 1.67 1.70 1.79 1.80	方形 方形 方形 方形 方形	
SH5391 中北(4-4)	1×2 南北 N16°05′W 5.18 J6	2.25 P4-1 2.25	2.30 P1-2 1.42 P3-4 2.30	1 2 3 4	5216 5200 5240 5188	(87)×(50)・(32) (60)×50・35 62×41・39 63×38・29	3 1 1 1	904 905 906 903 1180 900	16 16 16 16 16	1.61 1.52 1.46 1.65	方形 方形 方形 方形	
SH5392 中北(4-5)	1×2 南北 6.75 N14°25′W J6	2.51 P5-1 2.53 P4-3 2.47	2.70 P1-2-3 1.35 1.35 2.70 P5-4 2.71	1 2 3 4 5	5081 5082 5350 5182 5174	87×60・20 63×60・5 (77)×(55)・(7) (79)×(51)・(7) 86.5×65・8	2 1 1 1 2	264 265 252 70 888 885 886	55 55	2.03 2.00 1.99 1.96 2.00	方形 楕円 方形 方形 楕円	
SH5393 中北(4-6)	1×1 東西 N14°30′W 4.12 J6の北部	1.69 P2-3 1.78 P1-4 1.59	2.44 P2-1 2.35 P3-4 2.52	1 2 3 4	5089 5147 5099 5137	50×49・18 (85)×(76)・28 (53)×(38)・10 (79)×71・9	1 3 2 1	251 365 366 367 368 253 254 328	21 19 19 21	1.96 1.95 1.90 2.01	方形 楕円 楕円 楕円	柱根
SH5394 中北(4-7)	1×1 南北 N17°20′W 10.76 I6・J6	3.15 P4-1 3.18 P3-2 3.11	3.42 P1-2 3.43 P3-4 3.42	1 2 3 4	5139 5198 5087 5080	(78)×(54)・10 45×35・15 90×(82)・9 85×(65)・10	1 1 1 3	330 890 ? 248 249 250	20 20 20	2.01 1.95 2.10 2.12	楕円 方形 楕円 楕円	
SH5418 中北(4-8)	1×2 南北 N14°15′W 22.56 J6	3.64 P3-2 3.64	6.20 P1-2 2.93 P3-4 6.20	1 2 3 4	5138 5193 5086 5144	122×(70)・14 98×(64)・18 (106)×(66)・10 (108)×(88)・15	1 4 2 1	329 891 892 893 894 256 257 363		2.01 1.91 2.03 2.0	楕円 楕円 楕円 楕円	

掘立柱建物跡遺構番号 地域番号	間取 棟向 主軸方位 面積(㎡) 位置 (グリッド)	梁間(m) 平均値 各列の柱間の計測値	桁行(m) 平均値 各列の柱間の計測値	柱穴の状況 柱穴番号(P)	柱穴遺構番号(SP)	長径×短径・深さ(cm) ( )は推定値	礎板枚数	礎板遺物番号W上から	礎板の接合関係	礎板上面高(m)(無礎板は底高)	平面形状	備考
SH5365 中南(5-1)	1×2 南北 N8°30′W 14.57 J6・J5	3.26 P1-6 3.26 P2-5 3.32 P3-4 3.22	4.47 P1-2-3 2.20 2.30 4.50 P4-5-6 2.29 2.14 4.43	1 2 3 4 5 6	5346 5253 5294 5265 5257 5199	75×(55)・22 75×60・55 78×57・(28) (88)×(65)・25 (80)×54・32 77×55・45	2 1 2 1 1 2	1163 1164 855 1612 1613 1116 852 578 579	25 23 26 26 26 23 23 23	1.09 1.60 1.63 1.62 1.48 1.60	方形 方形 方形 方形 方形 方形	鼠返し 扉材
SH5366 中南(5-2)	1×2 南北 N6°30′W 10.03 J5の北部	2.84 P6-1 2.90 P4-3 2.78	3.53 P1-2-3 1.88 1.68 3.56 P4-5-6 1.80 1.70 3.50	1 2 3 4 5 6	5276 5309 5318 5244 5311 5256	55×53・15 (60)×(55)・25 (53)×(38)・12 (59)×(57)・15 (60)×(54)・18 65×43・17	1 1 2 1 1 2	1100 1628 1618 1619 975 1633 849 850	29 29 27 27 29 	1.54 1.58 1.64 1.71 1.60 1.58	方形 方形 方形 方形 方形 方形	堰SX 5114のW 1379とつ く
SH5395 中南(5-3)	1×2 南北 N11°25′W 10.01 J5・J6	2.79 P6-1 2.72 P5-2 2.87 P4-3 2.78	3.59 P1-2-3 1.67 1.84 3.51 P6-5-4 1.84 1.83 3.67	1 2 3 4 5 6	5349 5251 5312 5320 5186 5322	(87.5)×(67)・50 (61)×48・79 (85)×45・55 (72)×45・55 (72)×(61.5)・55 (63)×(48)・58	2 2 2 3 1 2	1161 1162 858 857 1658 1659 1664 1665 1666 580 1654 1655①	 28 28 24 24	1.48 1.35 1.56 1.52 1.51 1.52	楕円 方形 方形 方形 方形 方形	
SH5396 中南(5-4)	1×2 南北 N0°30′W 9.13 J5・J6	2.81 P5-1 2.83 P4-2 2.78	3.25 P1-2-3 1.56 1.69 3.25 P5-4 1.67	1 2 3 4 5	5250 5277 5319 5255 5242	45×40・14 50×49・33 (47)×(24)・4 40×31.5・35 (56)×(43)・13	1 1 1 1 2	846 1101 1623 848 843 844	34 34 34 34	1.41 1.54 1.88 1.47 1.50	方形 方形 楕円 方形 楕円	
SH5403 中南(5-6)	1×2 東西 N17°00′W 6.74 J6	1.77 P1-4 1.77	3.81 P2-3-4 1.78 2.03 3.81	1 2 3 4	5090 5098 5097 5105	(37)×(34)・15 35×28・37 38×28・24 32×30・24	0 0 0 0	− − − −		1.98 1.90 2.00 1.98	楕円 楕円 楕円 方形	
SH5407 中南(5-8)	1×1 南北 N0°05W 9.61 J5・J6	2.54 P3-1 2.54	3.78 P1-2 3.78	1 2 3	5252 5317 5254	(52)×45・21 (60)×(40)・(30) (45)×37・8	1 3 1	856 1615 1616 1617 845	 25 31 31	1.15 1.59 1.60	方形 方形 方形	鼠返し 鼠返し？ 鼠返し？
SH5435 東北(7-6)	1×1 南北 N24°40′W 7.18 J6	2.51 P3-1 2.51	2.86 P1-2 2.86	1 2 3	5101 5343 5084	70×62・10 (63)×(45)・10 56×50・8	2 2 2	261 262 343 344 258 259	 35 35 35 35	1.93 1.89 1.95	楕円 方形 楕円	
SH5437 東南(8-21)	1×1 南北 N19°20′W 8.76 J5	2.60 P2-1 2.60	3.37 P3-2 3.37	1 2 3	5212 5235-1 5219	63×(38)・30 60×40・(7) 72×41・31	1 1 1	809 818 805	 42 42	1.92 1.91 1.96	楕円 方形 方形	
SH5438 東南8-22	1×1 南北 N26°00′W 7.67 J5	2.25 P4-1 2.24 P3-2 2.26	3.41 P1-2 3.49 P3-4 3.32	1 2 3 4	5326 5168 5228 5331	(40)×(30)・25 67×54・10 54×45・12 (50)×(39)・32	3 2 1 1	1763 1764 1765 802 803 824 1748	38 38 38 38	1.89 1.94 1.83 1.88	方形 楕円 方形 方形	
SH5439 東南(8-23)	1×1 南北 N26°15′W 7.61 J5	2.44 P1-2 2.44	3.12 P3-2 3.12	1 2 3	5209 5235-2 5223	(45)×40・28 (58)×41・(13) (59)×42・12	1 1 1	811 819 806	43 43 43	1.90 1.89 1.94	− − 楕円	

掘立柱建物跡遺構番号 地域番号	間取 棟向 主軸方位 面積(㎡) 位置 (グリッド)	梁間(m) 平均値 各列の柱間の計測値	桁行(m) 平均値 各列の柱間の計測値	柱穴の状況 柱穴番号(P)	柱穴遺構番号(SP)	長径×短径・深さ(cm) ( )は推定値	礎板枚数	礎板遺物番号W上から	礎板の接合関係	礎板上面高(m)(無礎板は底高)	平面形状	備考
SH5440 東南(8-24)	1×1 南北 N29°35′W 9.06 K5	2.51 P4-1 2.45 P3-2 2.57	3.61 P1-2 3.55 P3-4 3.66	1	5246	(90)×(65)・14	2	1048		1.98	方形	
								1049	36			
				2	5119	(50)×(47)・13	1	801	36	1.91	楕円	
				3	5226	62×(48)・27	4	814		1.95	楕円	
								815				
								816	37			
								817	36			
				4	5330	(70)×60・20	2	1744		1.99	方形	
								1745	36			
SH5441 東南(8-25)	1×1 南北 N26°05′W 10.95 J5	2.74 P4-1 2.74 P2-3 2.74	4.00 P1-2 4.00 P3-4 4.00	1	5266	(102)×(38)・(20)	4	1044		1.99	−	
								1044-2				
								1045				
								1046	47	1.91	−	
				2	5187	(60)×(35)・(27)	1	810	40	1.90	−	
				3	5236	(85)×50・15	4	820				
								821				
								822	47			
								823	36			
				4	5293	(75)×(68)・45	6	1749	40	1.88	楕円	
								1750	40			
								1751	47			
								1752	47			
								1753	37			
								1754	37			
SH5400 東(6-1)	(1×2?) 南北 N14°20′W − K5	2.18 P1-2 2.18	−	1	5218	41×34・15	2	833	32	1.89	方形	
								834				
				2	5313	(53)×(34)・19	1	1768	32	1.85	方形	

第７表　５区掘立柱建物群の各群の柱穴の切り合い関係一覧表

・方位の表示は、各群の中での相対的位置関係を示す。
・‖の記号は、上下の柱穴の切り合い関係を示し、上位がより新、下位がより古を示す。
・各柱穴の表示は、上から建物番号・柱穴番号・標高値（m）によって行う。
・各柱穴の切り合いによる各建物の新古関係については右覧に示す。（新が上位、古が下位）

［２群］

北西	北東	中西(南西)	中東(南南西)	２群での新古関係
			(南南西)	
		(ＳＰ5131) 2.0	(ＳＰ5163) 1.9	
		(ＳＰ5158) 1.9		
(ＳＰ5128) 2.0				
		ＳＨ5363 (ＳＰ5157) 1.8 ‖ ＳＨ5381 (ＳＰ5177) 2.0 ‖ (南西) ＳＨ5363 (ＳＰ5076) 1.8		ＳＨ5362・ＳＨ5363 ＳＨ5381
ＳＨ5362 (ＳＰ5126) 2.1 ‖ ＳＨ5363 (ＳＰ5113) 1.9 ‖ (ＳＰ5190) 1.7	ＳＨ5363 (ＳＰ5123) 1.8 ‖	(ＳＰ5178) 1.9		
		ＳＨ5419 (ＳＰ5203) 1.9 ‖ (ＳＰ5976) 1.8	(ＳＰ5175) 1.8	ＳＨ5419
ＳＨ5419 (ＳＰ5156) 2.0	ＳＨ5419 (ＳＰ5120) 1.9 ‖ (ＳＰ5121) 1.9 ‖ (ＳＰ5122) 1.9	(ＳＰ5217) 1.9 ‖ (ＳＰ5179) 1.8	(ＳＰ5077-1) 1.9 ‖ (ＳＰ5077-2) 1.9	

［３群］

北西	北中	北東	中西	中中	中東	南中	３群での新古関係
	ＳＨ5411 (ＳＰ5075) 1.9			ＳＨ5411 (ＳＰ5117) 2.0		ＳＨ5364 (ＳＰ5192) 1.9	ＳＨ5411・ＳＨ5364
		ＳＨ5363 (ＳＰ5076) 1.8	(ＳＰ5163) 1.9		(ＳＰ5074) 2.2		
	‖	‖	‖		‖	‖	ＳＨ5363
ＳＨ5382 (ＳＰ5135) 1.9	ＳＨ5382 (ＳＰ5422) 1.9	ＳＨ5382 (ＳＰ5164) 2.0	ＳＨ5382 (ＳＰ5175) 1.8		(ＳＰ5165) 2.0	(ＳＰ5264) 1.8	ＳＨ5382
‖				(ＳＰ5118) 2.0 ‖ ‖ ＳＨ5412 (ＳＰ5207) 1.8			
ＳＨ5384 (ＳＰ5298) 1.3				(ＳＰ5208) 1.8			ＳＨ5384・ＳＨ5412

［4群］

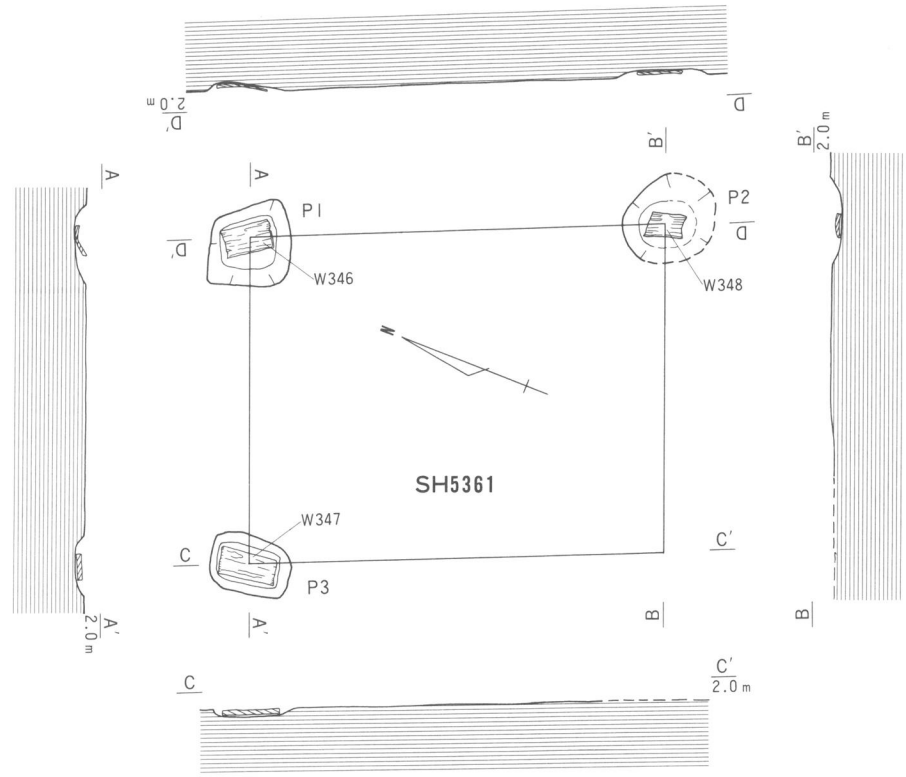
北西	北東	中西	中東	南西	南東	4群での新古関係
S H5388 (S P5149) 1.9				S H5388 (S P5145) 1.9		S H5388
S H5392 (S P5174) 1.9	S H5392 (S P581) 2.0	S H5393 (S P589) 1.9	S H5392 (S P582) 1.9 S H5393 (S P5147) 1.8	S H5392 (S P5182) 1.9 S H5393 (S P5137) 2.0	S H5392 (S P5350) 1.9	S H5392・S H5393
	S H5391 (S P5215) 1.5 S H5391 (S P5200) 1.5		S H5391 (S P5249) 1.6			S H5391
S H5389 (S P5237) 1.6	S H5389 (S P5214) 1.6	S H5389 (S P5240) 1.4	S H5389 (S P5248) 1.4	S H5389 (S P5239) 1.6	S H5389 (S P5154) 1.5	S H5389
S H5390 (S P5238) 1.7	S H5390 (S P5213) 1.7			S H5390 (S P5185) 1.6 S H5395 (S P5322) 1.5	S H5390 (S P5152) 1.6	S H5390・S H5395 (5群)

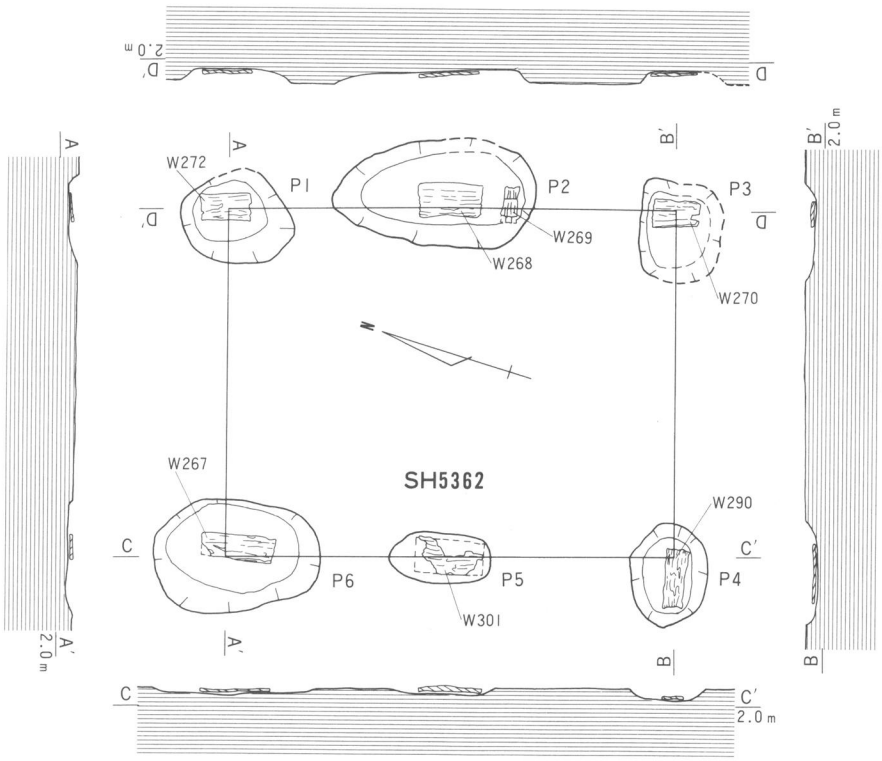
［5群］

北西	北東	中西	中東	南東	5群での新古関係
			S H5403 (S P5105) 1.9 (S P5104) 2.0		S H5403
			S H5365 (S P5253) 1.2		S H5365・S H5366
S H5365 (S P5199) 1.5	S H5365 (S P5346) 1.4			S H5366 (S P5276) 1.5	
S H5395 (S P5322) 1.5	S H5395 (S P5349) 1.4	S H5395 (S P5186) 1.5	S H5395 (S P5251) 1.2	(S P5260) 1.6	S H5395
		S H5407 (S P5254) 1.5	S H5407 (S P5252) 1.1		S H5407

［6群］

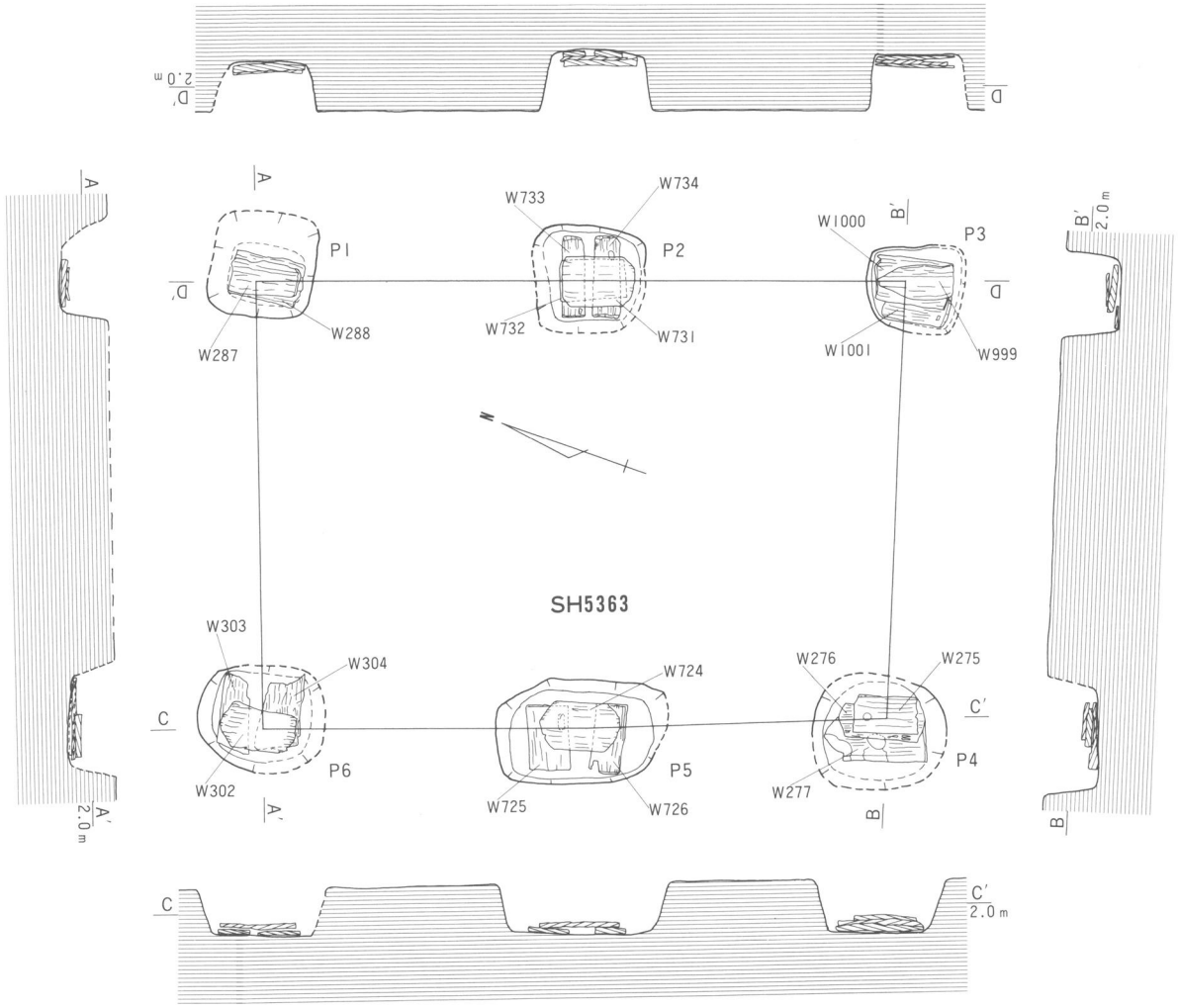
北西	北東	南西	南東	8群での新古関係
S H5437 (S P5219) 1.9		S H5437 (S P5235-1) 1.9	S H5437 (S P5212) 1.8	S H5437
S H5441 (S P5293) 1.8 (S P5224) 1.8		S H5441 (S P5236) 1.8	S H5441 (S P5187) 1.8	S H5441
S H5438 (S P5331) 1.8 S H5439 (S P5223) 1.9	S H5441 (S P5267) 1.9	S H5439 (S P5235-2) 1.9	S H5439 (S P5209) 1.9	S H5439・S H5438
	(S P5261) 1.9			
S H5440 (S P5330) 1.9	S H5440 (S P5246) 1.9			S H5440
(S P5332) 1.9 (S P5327) 2.0				

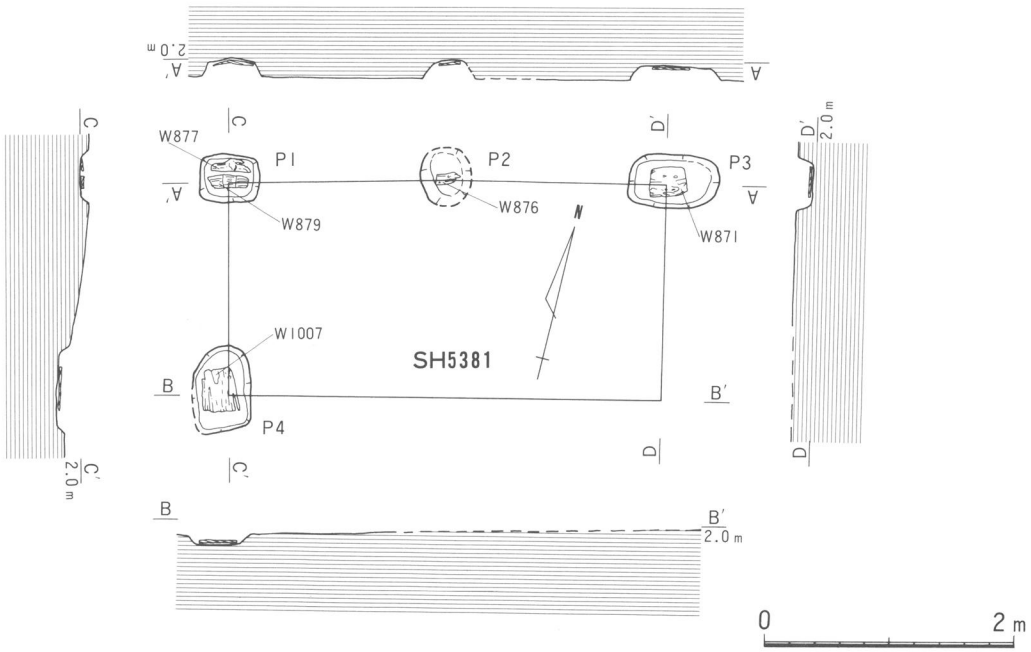




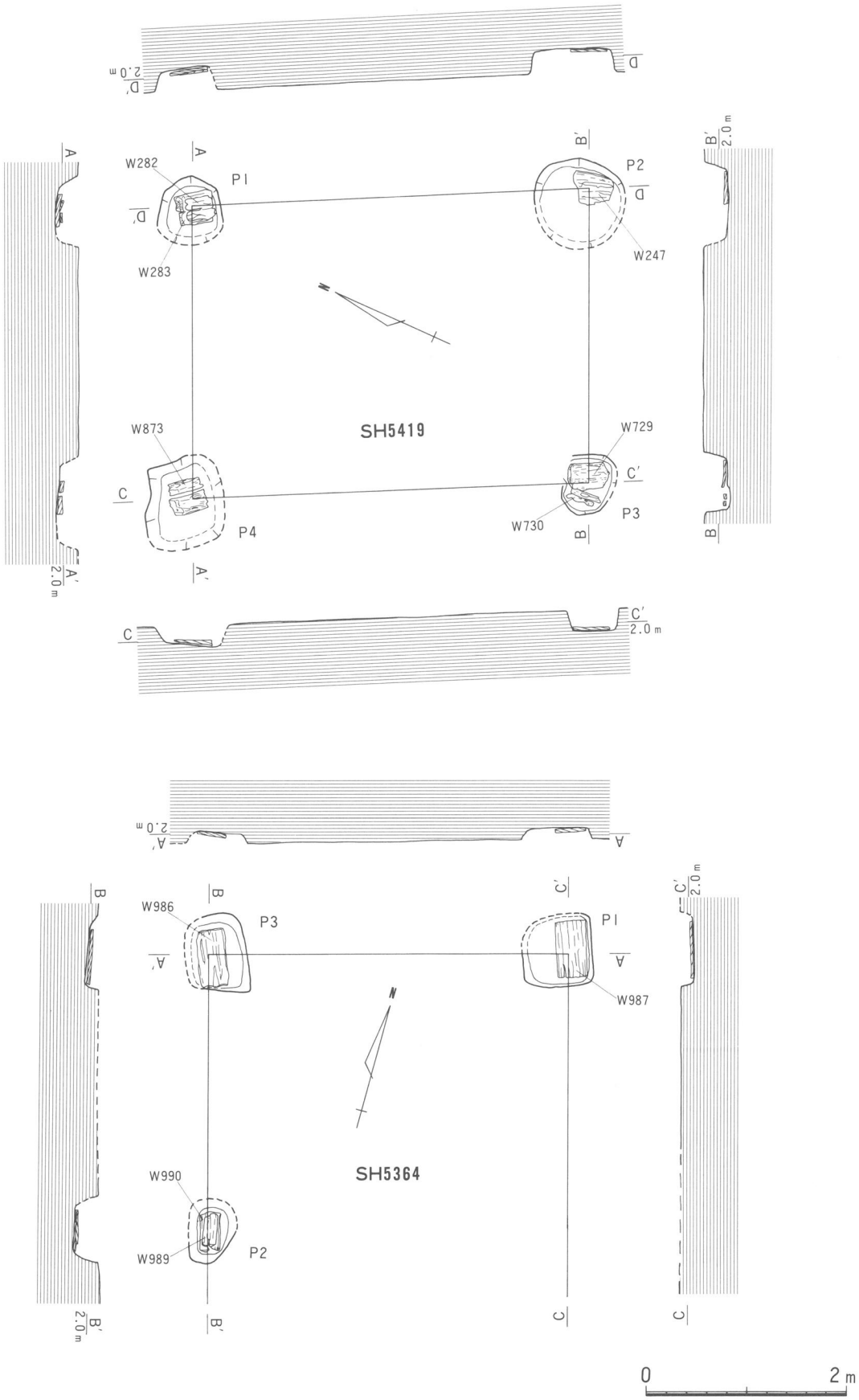
0 2m

第52図　5区掘立柱建物実測図（1）

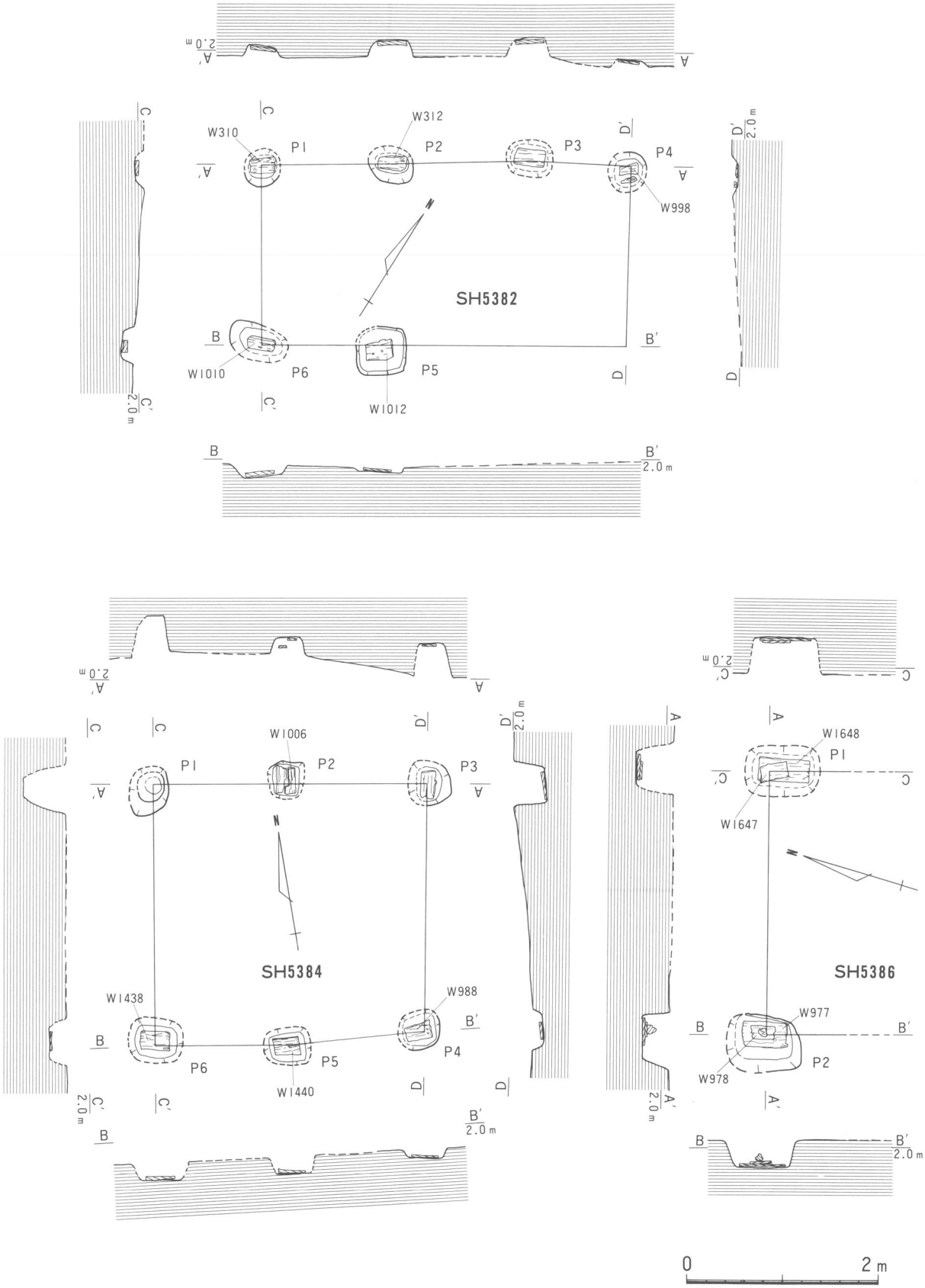




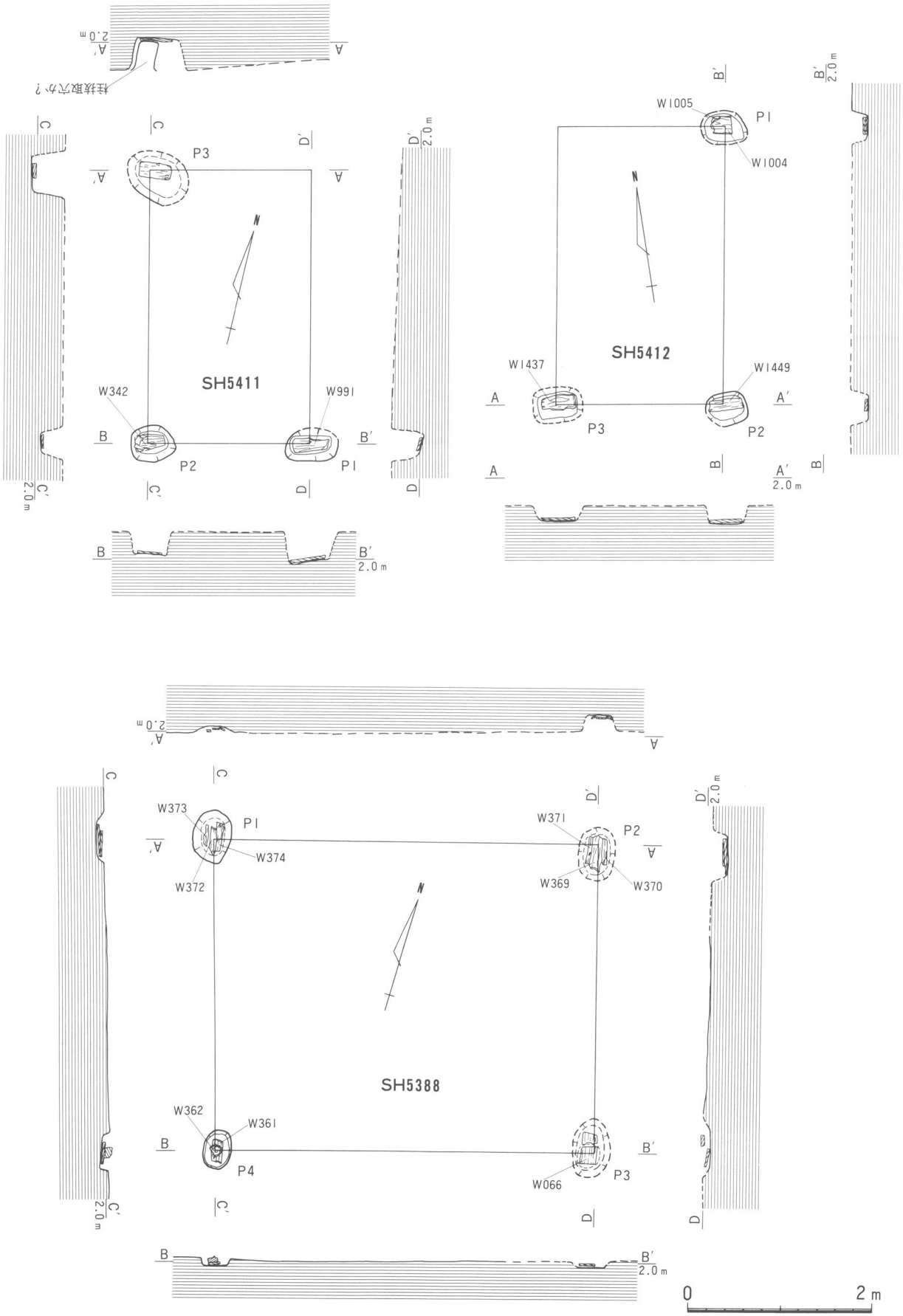
第53図　5区掘立柱建物実測図（2）



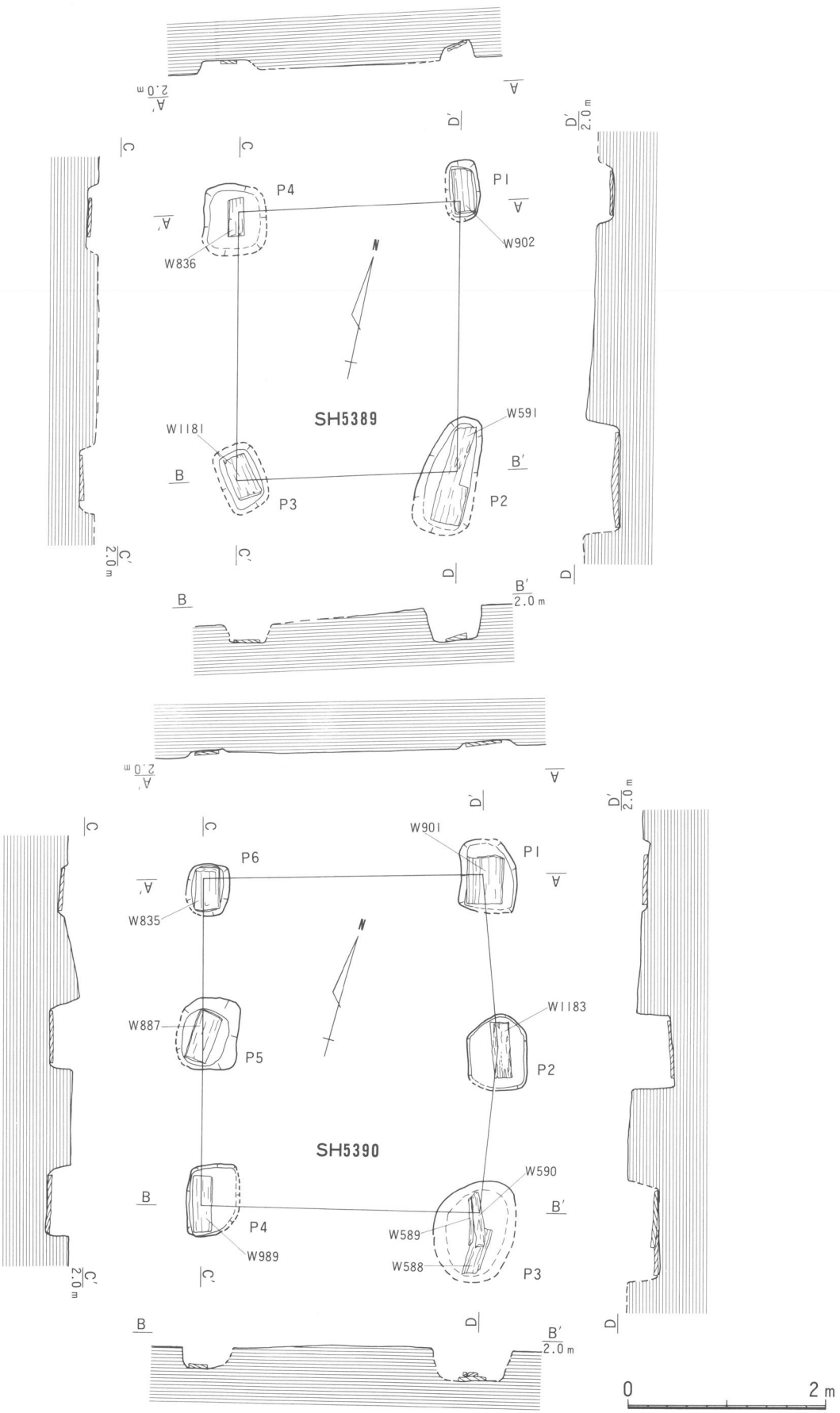
第54図　5区掘立柱建物実測図（3）



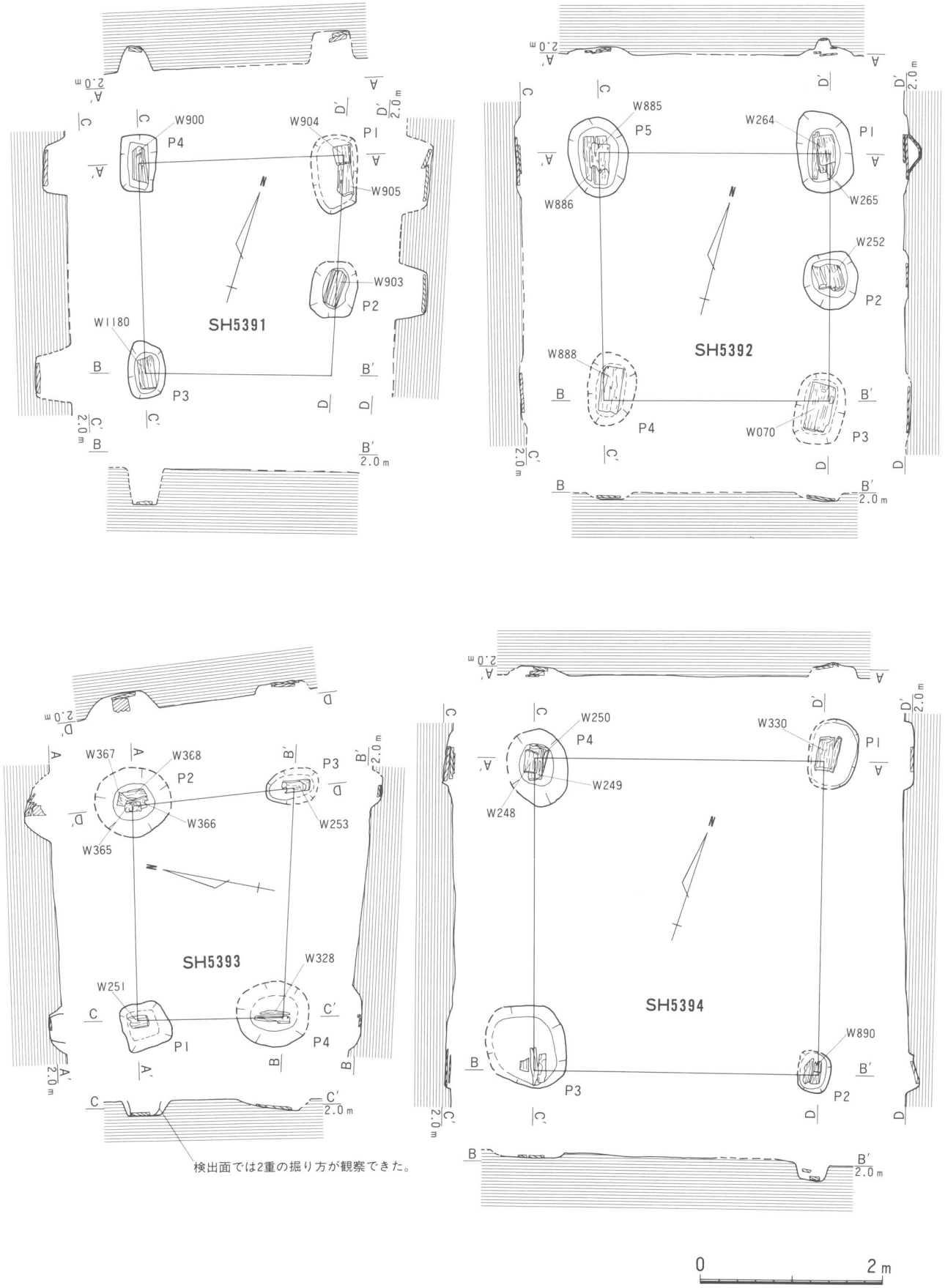
第55図　5区掘立柱建物実測図（4）



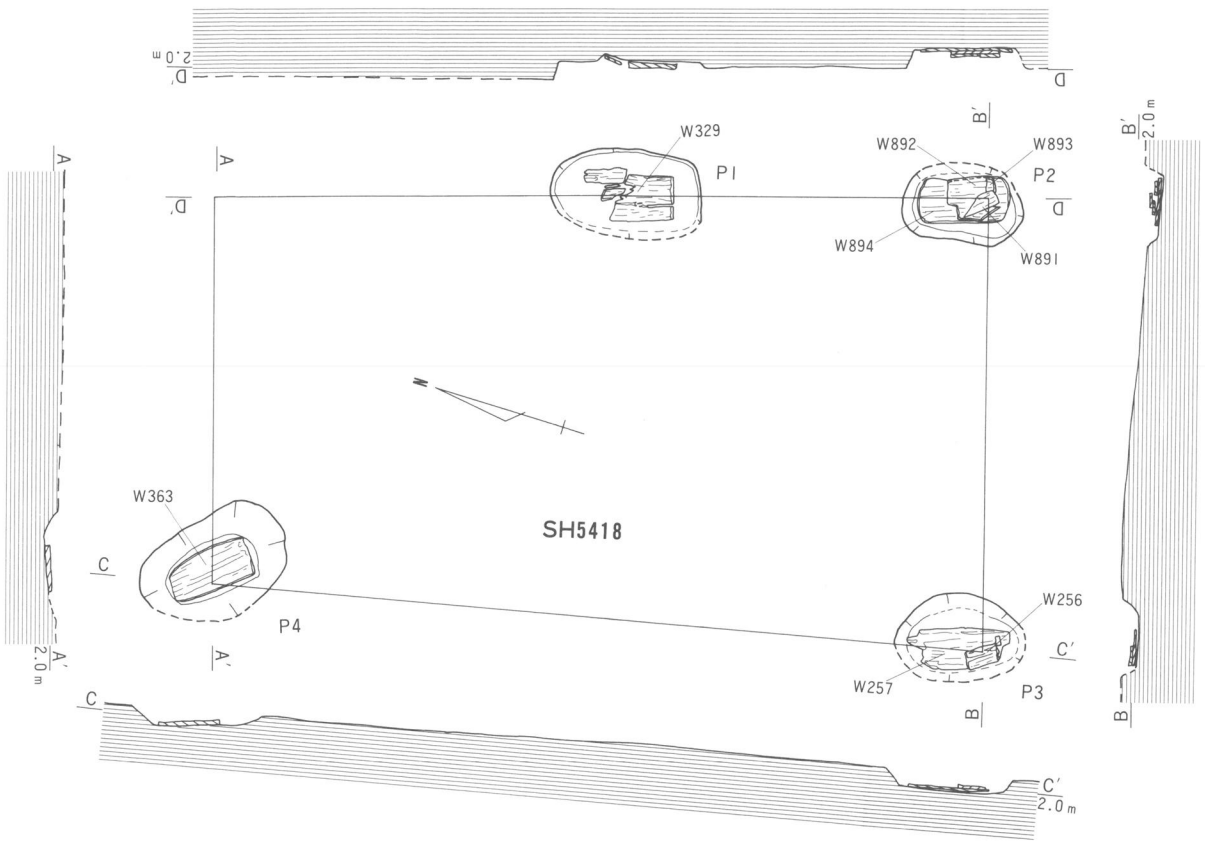
第56図　5区掘立柱建物実測図（5）

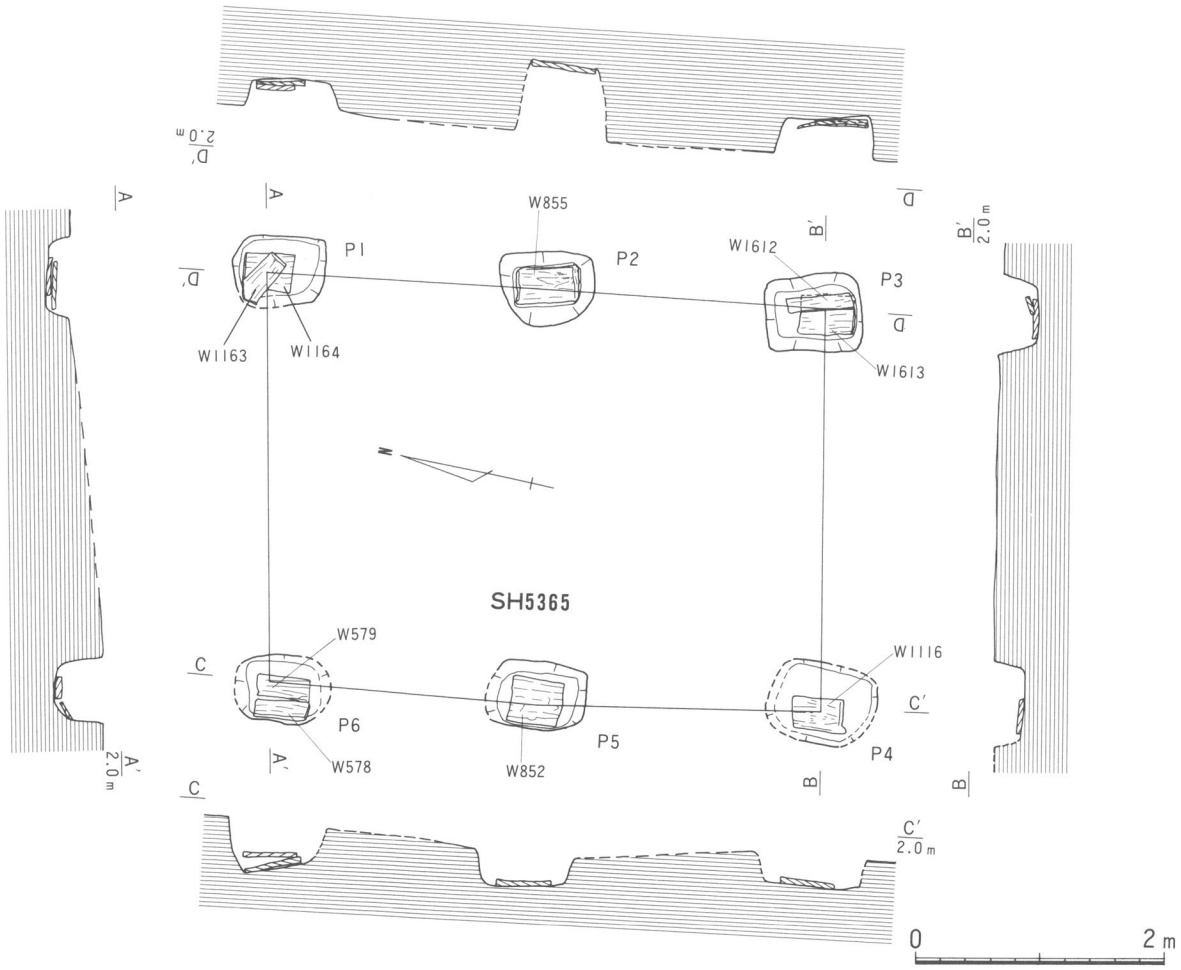


第57図　5区掘立柱建物実測図（6）

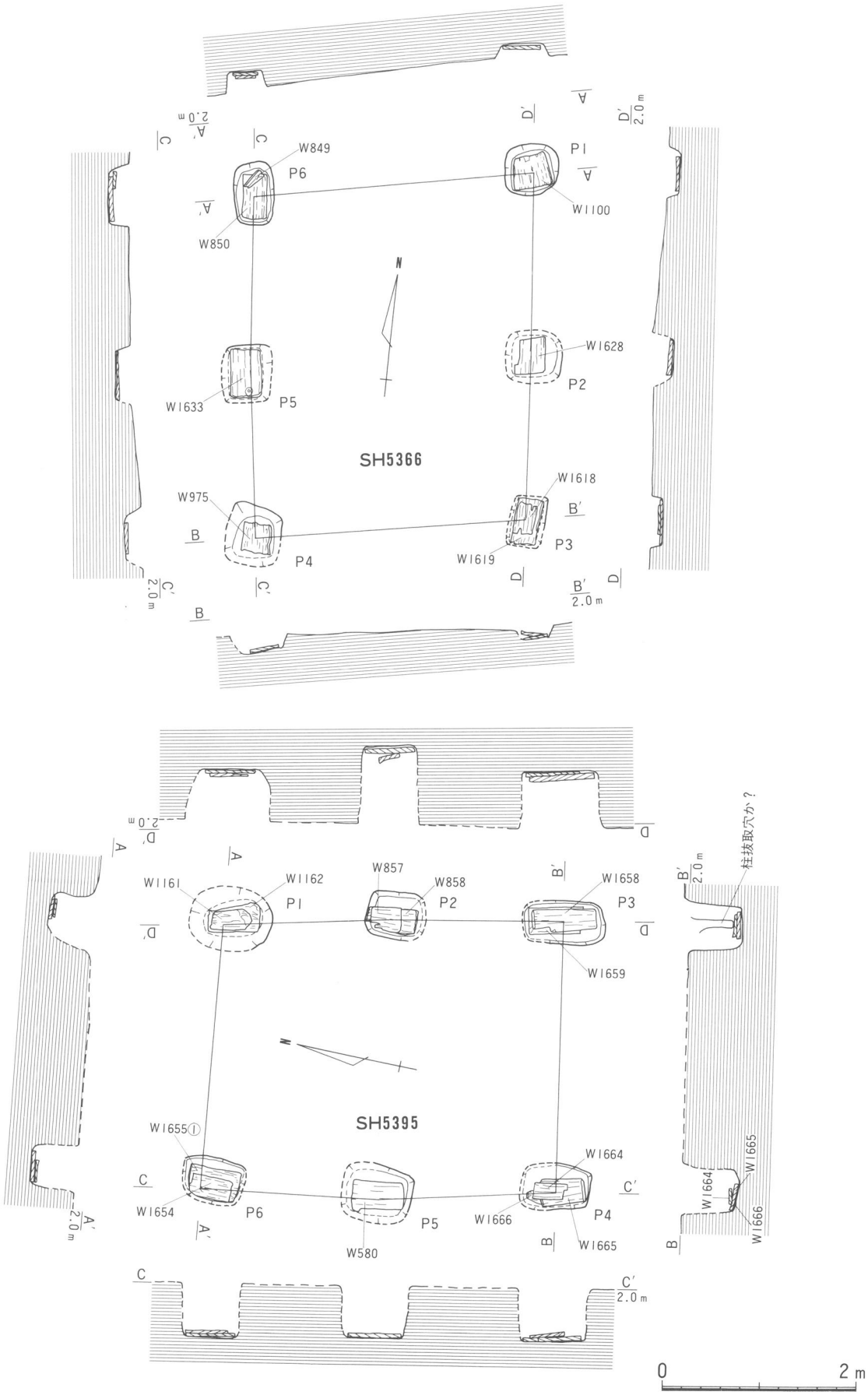


第58図　5区掘立柱建物実測図（7）

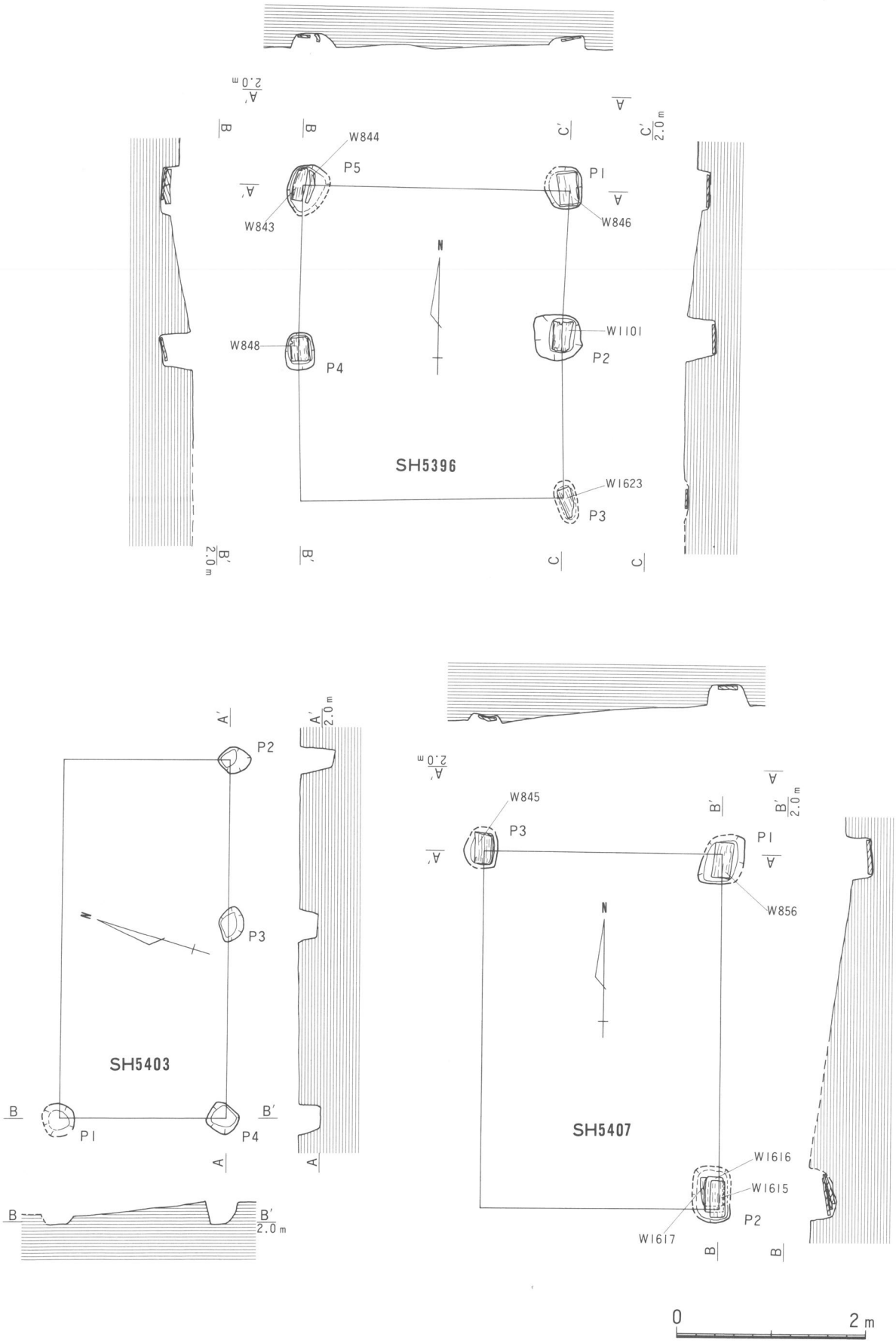




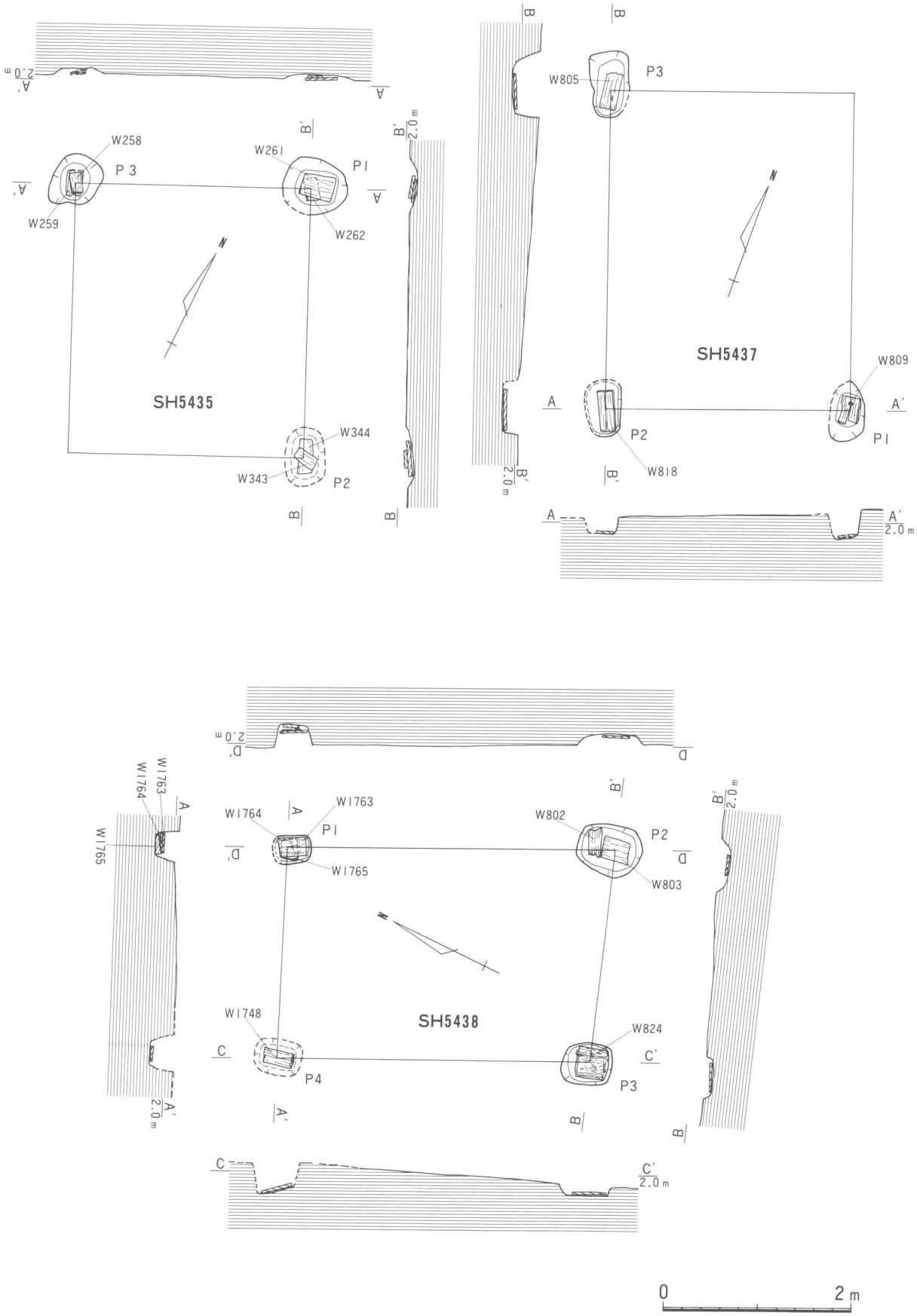
第59図　5区掘立柱建物実測図（8）



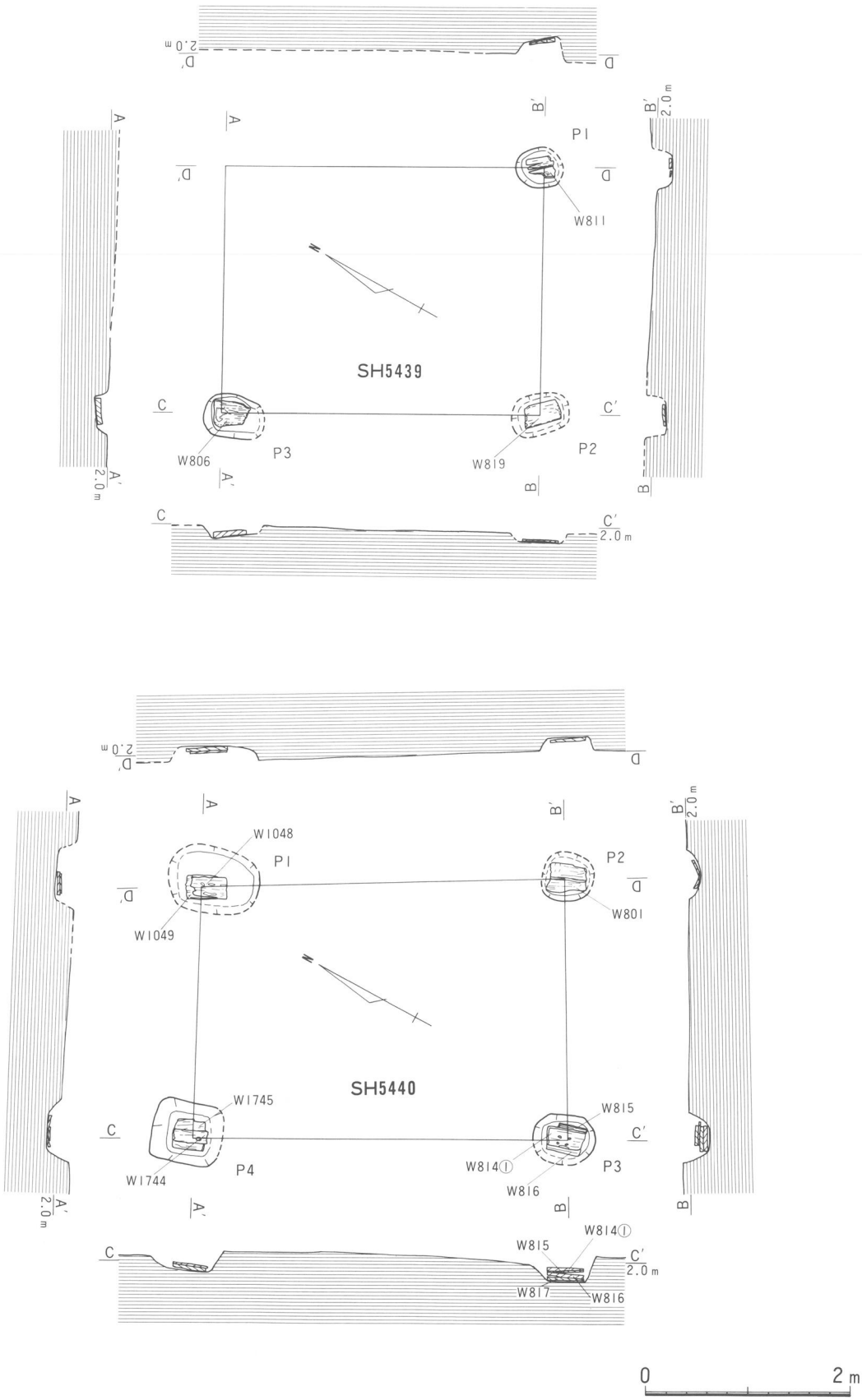
第60図　5区掘立柱建物実測図（9）



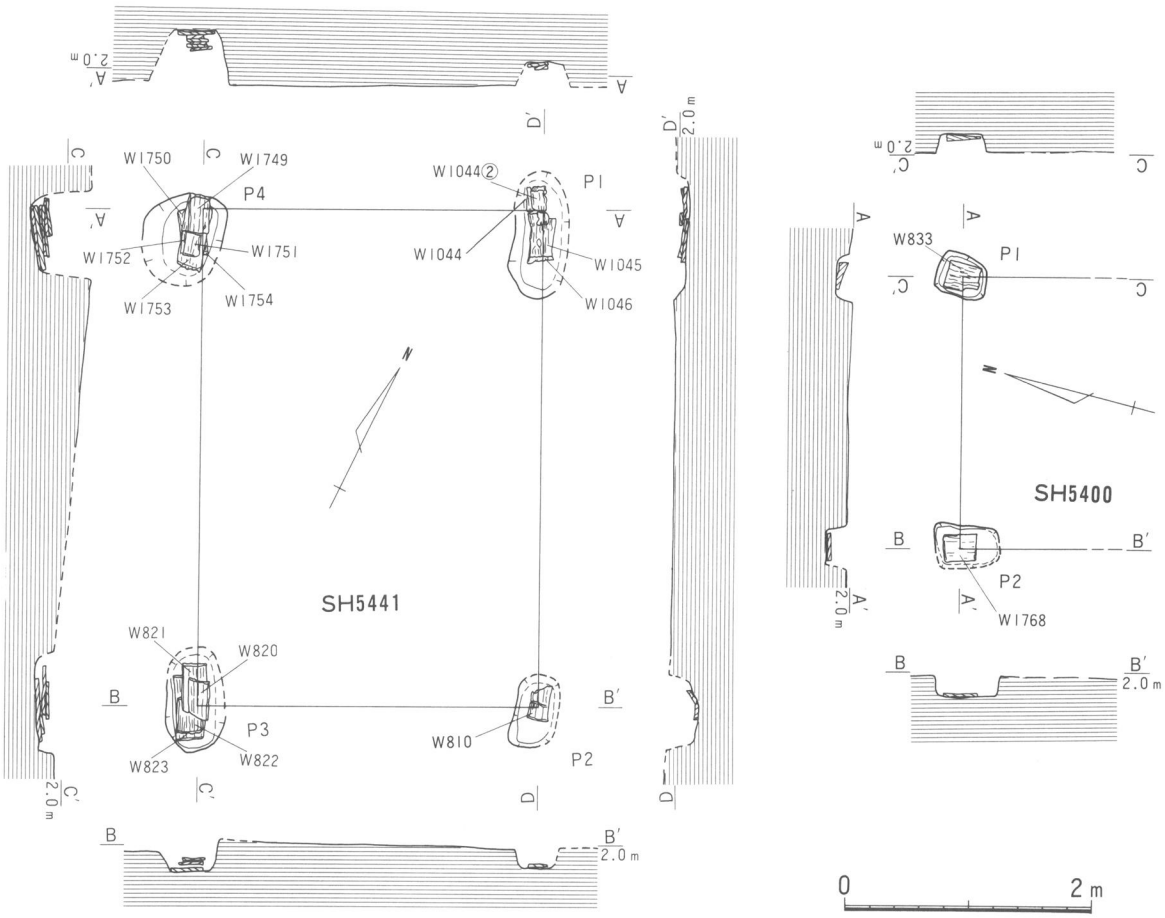
第61図　5区掘立柱建物実測図（10）



第62図　5区掘立柱建物実測図（11）



第63図　5区掘立柱建物実測図（12）



第64図　5区掘立柱建物実測図（13）

3．炭化物・焼土面の遺構

掘立柱建物群が建設された微高地部分で、これらの掘立柱建物の柱が抜かれ、全域が整地され、標高2.4～2.6mの平坦面が、Ｊ６グリッドを中心とした部分とＭ７グリッドを中心とした部分に形成され、さらに、これらの平坦面の上に何ヶ所かの焼土面が確認され、また炭化物はほぼ全域で確認できるものの、濃密な部分は僅かな数～10数cmの深さの凹地部分で数箇所検出できた。これらの炭化物・焼土面の上に、さらに台状遺構の盛土がなされる段階で、薄い炭化物層は粘土層と混じり単層としての性格を失ったものと考えられる。また、これらの炭化物層を注意深く観察すると、一部で蓆状に編まれた植物遺体の炭化したものが観察できた。多くは焼土面となった地点で焚火をしたり、付近の雑草を野焼きした結果とも考えられる。これらの炭化物・焼土面の遺構は、低地付近や微高地の斜面付近には検出できず、その直上に台状遺構の盛土がなされていることからすれば、台状遺構築造のための直前の行為の遺構と考えられる。炭化物が多く含まれていた土坑ＳＸ571・572には、多くの土器片が出土したが、それ以外の炭化物の多い土坑や焼土面からは、土器などの遺物はほとんど出土しなかった。炭化物が比較的厚く検出された土坑から出土した壺は古墳前期の遺物である。

ＳＸ571

微高地西部のＩ５グリッドに位置し、南北方向にやや長い長円形の平面をもつ土坑である。深さ36㎝、長さ推定約１ｍ、幅87㎝を測る。土器片を多く含み、底部と覆土上面に、それぞれ数㎝の炭化物の層がある。

ＳＸ572

微高地西部のＩ５グリッドに位置し、南北方向に長い長円形の平面をもつ土坑である。深さ41㎝、長さ2.3ｍ、幅96㎝を測る。土器片を多く含み、覆土中に多くの炭化物粒子を含んでいる。断面観察から、土坑ＳＸ571の覆土を一部覆うようにして、ＳＸ572の覆土が確認できた。そこで、ＳＸ571が埋積されて後に、ＳＸ572が埋積されたことがわかる。しかし、これらの遺構の掘削順序が埋積順序と同じとは限らない。これらの土坑は、いずれも土器片を多く含む点、さらに、並列して、35㎝ほどの近接地点から検出されている点、また、ほぼ同一レベルから掘削されている点などから、掘削時期はほぼ同時期または、ややＳＸ571の方が早いと考えられる。出土土器からも同時期の土器であり、台状遺構築造の前段階として、短期間に掘削・埋積されたものと考えられる。

ＳＸ5136

微高地北西部のＨ６グリッドに位置し、ほぼ円形の平面をもつごく浅い皿状の遺構である。深さ６㎝、長さ1.7ｍ、幅1.2ｍを測る。土器片は含まれず、覆土中に多くの炭化物と若干の炭化した木片を観察できた。

ＳＸ5367

微高地西部のＩ５グリッドに位置し、ほぼ垂直に掘込まれた土坑である。深さ13㎝を測る。遺構は南側の部分が検出されたのみであり、全体の形状は不明である。底に炭化物が２㎝ほど堆積し、覆土中からは多くの炭化物粒子が検出できた。土器片は検出されなかった。

ＳＸ565

微高地北部のＩ６グリッドに位置し、ほぼ円形の平面をもつ、極めて浅い皿状の遺構である。深さ２㎝、長さ1.2ｍ、幅0.9ｍを測る。土器片は含まれず、覆土中に多くの炭化物を観察できた。

ＳＸ5146

微高地中央部のＪ６グリッドに位置し、隅丸の菱形状の平面をもつ浅い皿状の遺構である。深さ９㎝、長さ1.3ｍ、幅0.7ｍを測る。土器片は含まれず、覆土中に多くの炭化物と若干の炭化した木片を観察できた。炭化物は北西・南東方向の筋状となって検出されたものが多く、枯草が置かれた状態を示していると考えられる。

ＳＸ557

微高地北中部のＩ６グリッドに位置し、ほぼ円形の平面をもつ焼土遺構である。焼土の厚さは６㎝、直径は68㎝を測る。土器片は含まれず、周囲に若干の炭化物粒子と炭化した木片を観察できた。

ＳＸ562・560・561・564・566

微高地東部のＫ６グリッドを中心に南北方向に存在する炭化物層分布域である。遺構番号を付けた各遺構は近接して存在し、炭化物の分布が集中する部分は、それぞれ独立して存在するように平面観察できたが、薄い層として、あるいは炭化物粒子の分布は連続して堆積していた。また、ＳＸ560・566の遺

構断面図をみてもわかるように、これらの炭化物層分布域は、ほぼ平坦で、皿状遺構は観察できず、数cmの微妙な起伏が連続していた。そこで、一括して報告したい。検出長は南北約11m、東西約4.7m、炭化物層の厚さは起伏の深いところで約6cm、浅いところで約1cmである。底面の若干の凹みを埋めるようにして炭化物が堆積しているので、炭化物層の上面は、底面よりは平坦になっている。これらの分布域の中央部のＳＸ560から焼土遺構が2箇所、東西に近接して検出された。西側のものは、ほぼ円形で直径約78cmである。東側のものは、長円形で長径約67cm、短径約26cmである。それぞれの厚さは約6cmである。これらの焼土層の数cm下位から、炭化物の薄い層（約5mm）が検出され、また焼土層の上面またはその層位にもう1層の炭化物の層（約1cm）が検出できた。また焼土層に近接して炭化した木片（枝）が比較的多く検出された。このことから、最初に枯草を焼き払い、次に枯れ木の枝などで焚火を行い、焼土面が形成され、同時に、その周囲の草がさらに焼かれ炭化したものと推定できる。なおＳＸ566の南東部からは、炭化した蓆状の遺物が検出され、単に枯草を焼くだけでなく、蓆状の敷物をも焼いたことが推定できる。また、ＳＸ566からは、土圧でつぶされたような土器片が出土している。

ＳＸ554

微高地中央部のＩ５グリッドに位置し、炭化物・焼土を覆土とする土坑である。深さ11cmで、壁面はほぼ45度の角度で掘込まれ、南北方向に長軸をもつ。長径は2.1m、短径は0.85mである。底面は平坦で、底から土器細片が1点検出された。底と壁から焼土が検出され、覆土中からは炭化物粒子が多く検出され、さらに覆土上部の土坑の中央部からは焼土が検出された。

ＳＸ555

微高地中央部のＩ５・Ｉ６グリッドに位置し、炭化物・焼土を覆土とする土坑である。深さ11cmで、壁面はほぼ垂直に掘込まれている。遺構は部分的にしか検出できなかったため、全体の形状は不明である。底と壁から厚さ2～3cmの焼土と炭化物の混合物が検出され、覆土中からは炭化物粒子が多く検出された。土器片の検出は無かった。ＳＸ554・555は、いずれも底面・壁面に焼土が検出されていることから、これらの土坑で焚火が行われたことが推定できる。

ＳＸ558

微高地南中部のＪ５グリッドに位置し、炭化物を覆土とする平面が円形の浅い土坑である。深さ6cmでなだらかに凹んでいる。直径は1.2mである。炭化物が底に厚さ3～5cmで検出され、最も凹んでいる部分に厚く堆積している。木片は見られず、枯草の炭化したものと考えられる。この炭化物層の上に、土器片が数点検出されたが、いずれも煤の付着は認められず、炭化物の堆積の後にこの土坑に入れられたものと考えられる。炭化物層の上には、炭化物粒子が多く含まれた粘土層が検出された。

ＳＸ559

微高地南中部のＪ５グリッドに位置し、炭化物を覆土とする浅い土坑である。南側が未調査のため、全体の形状は不明である。検出された部分では、深さ13cmでなだらかに凹んでいる。炭化物が底に厚さ3～5cmで検出され、最も凹んでいる部分に厚く堆積している。木片が若干みられたが、多くは枯草の炭化したものと考えられる。この炭化物層の上に、土器片が数点検出されたが、いずれも煤の付着は認められず、炭化物の堆積の後にこの土坑に入れられたものと考えられる。炭化物層の上には、炭化物粒

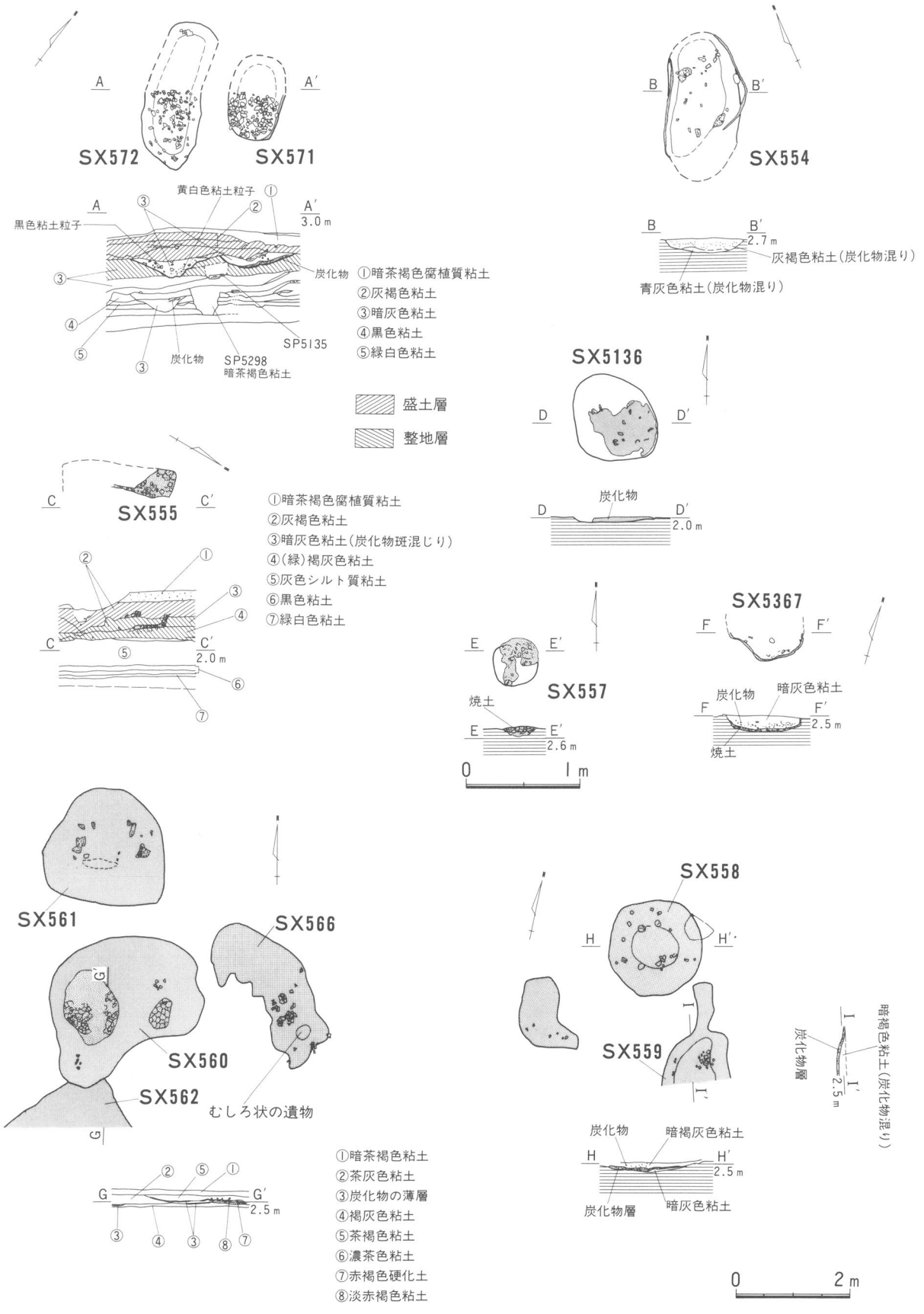
子が多く含まれた粘土層が検出された。ＳＸ557・558は堆積状況が類似している。

ＳＸ567

東部の微高地の中央部に位置する炭化物面である。厚さは約５㎜であり、土器の出土はなかった。

これらの炭化物・焼土面の諸遺構は、炭化物検出遺構は、土坑状・皿状の凹地を掘込んだものと平坦面をなすものに分類でき、また焼土面も、土坑中で検出されるものと、平坦面で検出されるものに分類できる。炭化物は微高地部分のほぼ全面で検出されるのに対して、焼土面は散在している。土器は完形のものはほとんど出土しなかったが、年代観としては、古墳前期（長崎６期）と考えられる。

なお、炭化物面は所によっては２～３層確認でき、台状遺構築造直前の行為としても複数回に分けられて行われたものと考えられる。



第65図　5区炭化物焼土面遺構実測図

４．台状遺構

前述の炭化物・焼土面は、微高地の上面を平坦に整地した上に形成されていた。この上面にはさらに暗褐色粘土の盛土がなされている。ただし、この盛土の厚さは微高地の中央部の平坦面では、約30㎝であるが、微高地の斜面から裾部にかけては、しだいに薄くなっていき、裾の末端部では盛土は見られなくなる。逆に、微高地の西部の平坦面には、約50㎝の盛土が行われ、これまでの盛土・整地が、すべて平坦面の形成に重きを置いていたのとは異なる形態が築かれている。この５区南西部の微高地は、掘立柱建物建設のための整地が行われたころから、Ｌライン付近に徐々に凹が形成されつつあったが、今回の盛土造成の際には、さらにその規模を拡大する方向となっている。そこで、この盛土層は東と西に分断されたように検出されたので、西側のより大きな盛土層の形状をＳＸ510、東側のより小さな盛土層の形状をＳＸ551とし、これらをまとめて台状遺構と命名した。そして、ＳＸ510は微高地西部が高く、中央部から東部にかけては、東側に緩やかな傾斜で高度を下げている。さらにＳＸ551では、盛土上面が平坦に整地されており、ＳＸ510とは異なる仕上げが行われている。ただし、上面の高さはほぼ同じである。

これらの盛土層の内部には土器片はほとんど検出されていないが、この台状遺構の上部を数㎝から10㎝の厚さで覆っている腐植質粘土層には、夥しい数の土器片が含まれていた。これらの土器群の出土状況については項を改めて述べたい。

この台状遺構の機能は何であったのか。明確な結論は出せないが、ＳＸ510についていえば、外形から緩やかな起伏をもつ、平面が凸型の墳丘墓ではないかという可能性について検討してみたい。中央部が近現代の瓦粘土採掘によって大きく攪乱されているため、等高線図は第43図に示したように推定部分が多くなっているが、方形の墳丘に方形の造出しを設けた形であり、長軸はほぼ東西に設定されており、約35ｍを測り、短軸は約25ｍを測る形状が推定できそうである。

ところが、この「方形の墳丘」とも考えた西部の状況は、それらの中央部分が高まっているのではなく、逆に若干低くなっており、高いのは、西北部である。この形状は、炭化物・焼土面の検出状況でもうかがえるものである。さらに、台状遺構全体を覆っている暗茶褐色腐植混じり粘土層の上面の実測でも、Ｉ５グリッド付近は標高約3.0ｍ数値の部分が３箇所確認され、台状遺構上部のうち、西北部の頂上部分の縁付近が最も高く、頂上部分の平坦部は逆にやや凹んでいた（標高2.8ｍ）。この頂上部分の緩やかな凹みの原因は、台状遺構から自然堤防までの粗粒質の堆積物の自重とさらに上層の堆積物による土圧とも考えられる。自然堤防直下にある黒色粘土層の下の泥炭層が、墳丘墓の起伏と対照的に摺り鉢状に圧密沈下し、さらに台状遺構裾部ではこれとは逆に、やや隆起する現象が起ったため、台状遺構頂上部分の平坦部は逆にやや凹むことになったとも推定できる。

台状遺構の裾部には、その周りに深さ数㎝、幅約３～４ｍの緩やかな凹地が取り巻いているが、北西と北東のコーナーは北側に広がる水田の畦畔部分に連続する脹らみによって、これらの凹は分断されている。これは、「墳丘墓」の「周溝」と考えられるものかどうか検討したい。あまりにも浅いため、盛土を採取するために凹んだ痕跡とは考えにくい。さらに、問題なのは、より凹地らしくなるのは、土器片を多く含んだ暗茶褐色腐植混じり粘土層が台状遺構に堆積した段階で裾部が湿地化し、泥炭が堆積してくる段階である。この段階で、はじめて凹地の深さは約10㎝になる。もしこれらの凹地が「墳丘墓」の

「周溝」とすれば、各「周溝」は、陸橋状の脹らみによって切られ、逆に、東側の台状遺構ＳＸ551とも陸橋状の脹らみによって連続し、「周溝」部も共有しているとも考えられる。これらの凹地からは若干の土器片と鏡１点が検出された。凹地の覆土は凹地の滞水に起因する泥炭混じり粘土層に暗茶褐色腐植まじり粘土層の粘土が崩れてきた部分が混じり合った状態のものであり、それらはＤＩ層（泥炭層）によってパックされていた。

台状遺構の高さは、ほぼ一定して平坦に整形されてはいるものの、基盤となる自然堤防の起伏に規定され、西端の台状遺構裾部の凹地の底の標高は約1.8ｍなのに対して、東端の台状遺構裾部の凹地の底部の標高は約2.0ｍであり、20㎝の比高差がある。そこで、平均値としての台状遺構の高さは約85㎝といえよう。

台状遺構ＳＸ510の平面形態が凸型となった要因については、西部の方形区画自体は、基盤となる自然堤防の方向に並行直交してつくられた水田畦畔の方形区画を利用して、居住域を区画する第１期の整地層が造成され、さらにそれを拡張した第２期の整地層の上に盛土したものと考えている。したがって、しいてこの段階に至って意図的に作ったものとは考えにくい。しかし、その東側の造出し部分については下層遺構の形状に規定されたものではない。したがって、全体とすれば、主要部については既存の下層の遺構の形状を利用しつつも、凸型プランを意図して造成したものと考えてもよいと思われる。

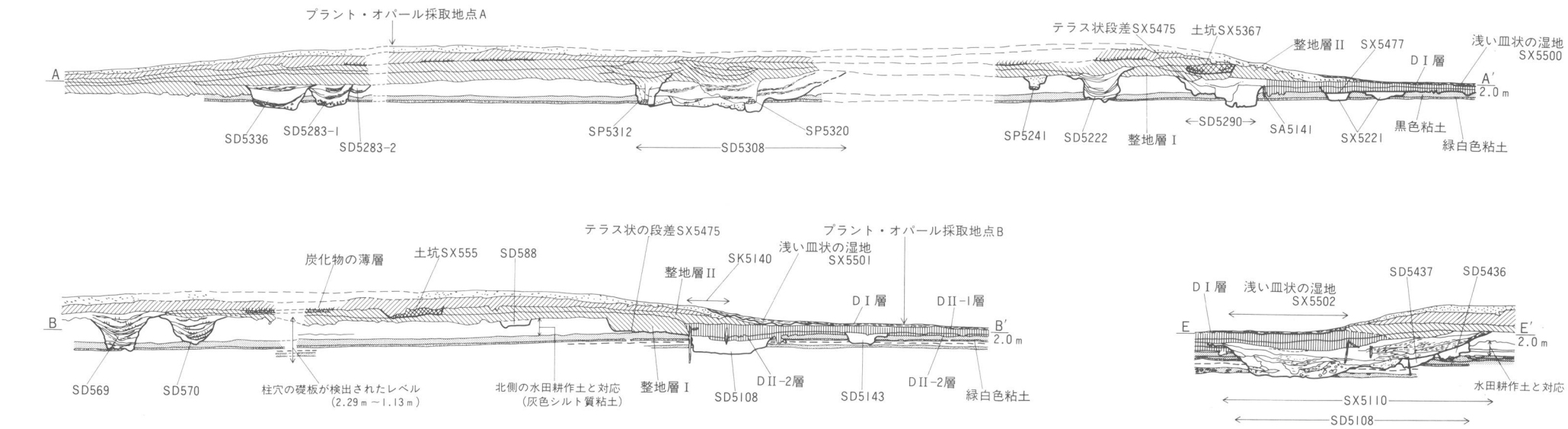
台状遺構の盛土は、ややシルト質の粘土である。また炭化物粒子が混入し、粒径の揃っていない粘土粒子・ブロックが散見され、全体として淘汰されていない堆積物である。また、細かな土器片が多数混入されていた。盛土の各単位は観察できなかったが、人為的な盛土層の性格を反映していると考えられる。

このように、多くの問題を孕みつつも、外観・形状は、「墳丘墓」的な様相を呈しているともいえよう。しかも、「周溝」とも考えられる部分で、鏡が出土している。しかし、最大の問題は、「主体部」の検出問題である。「主体部」を検出するため、盛土層を徐々にスライスしていったが、ＳＸ510・ＳＸ551のいずれからも検出はできなかった。ＳＸ510については、台状遺構中央部が大きく攪乱されていること。また、ＳＸ551については「墳丘」の中央部からかなり外れていることによると思われる。

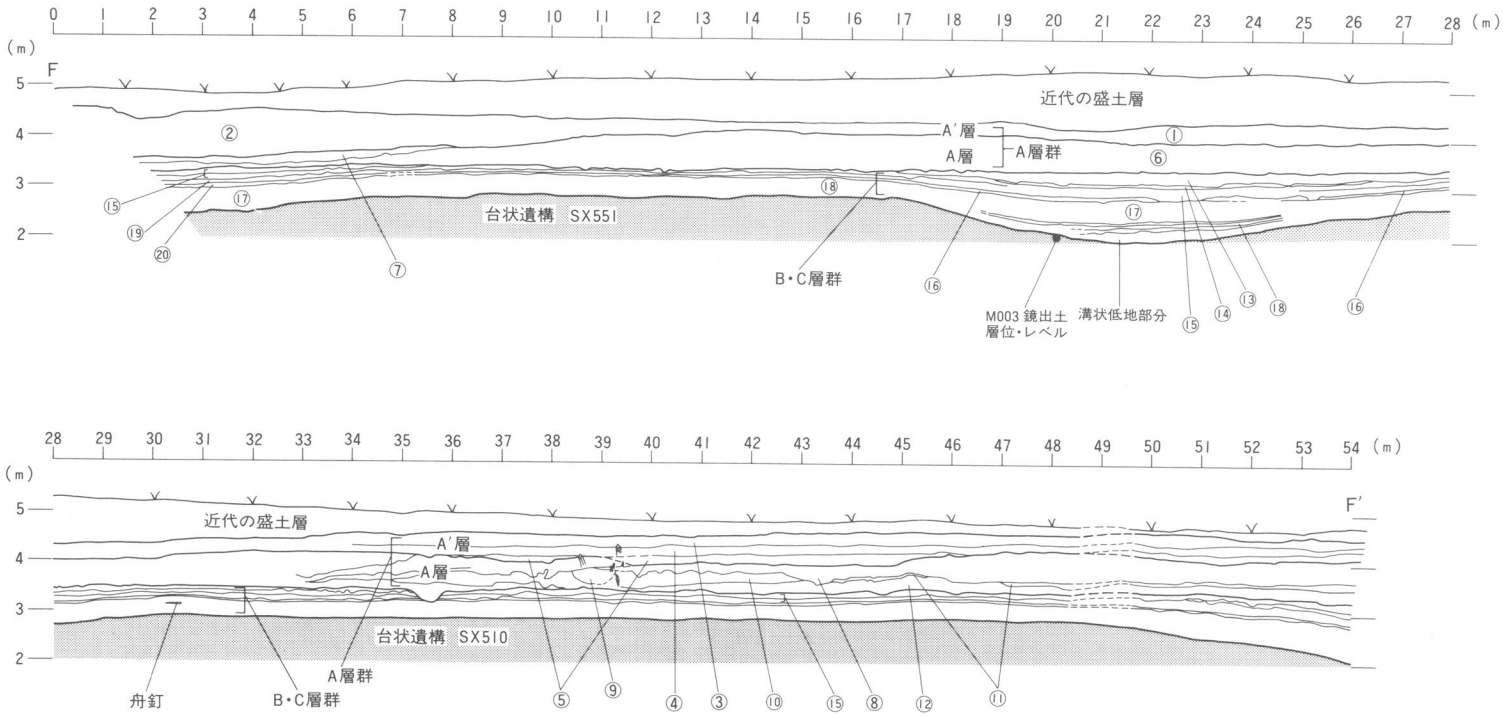
「造出し部」東側の「周溝」底から小型仿製鏡１点が検出された。鏡は鏡面を上にして検出された。直径7.1～7.2㎝、厚さ0.35㎝、鈕径1.0㎝を測り、保存は良好である。鏡背の文様は、幅1.2㎝の素縁の内側に櫛歯文様がめぐり、さらに二条の圏線をめぐらしており、重圏文を構成し、鈕座は省略されている。鏡背の一部に朱が付着している。外区、内区の二区に櫛歯文を重ねる例は類例に乏しいが、小型仿製鏡で、重圏文鏡までを含めると、４世紀代の前方後方墳や集落などで出土している。県内では焼津市小深田西遺跡第１号墳第１主体部出土鏡がある。

台状遺構の年代観については、盛土直下の浅い炭化物土坑からの出土土器や台状遺構直上に置かれていた供献土器がいずれも４世紀代であることから、４世紀代と推定される。

なお、前述のように、「主体部」の検出ができなかったので、現段階では、これらの台状遺構群を積極的に「墳丘墓」とは認定しがたいと考えている。むしろ、後述するような台状遺構上面から検出された、夥しい土器群との関連で考えたほうが良いかもしれない。



第66図　5区台状遺構群関連土層図（1）台状遺構断面図



①暗茶褐色粘土
②明褐灰色シルト質粘土
③灰褐色粘土
④淡灰褐色粘土
⑤灰茶褐色粘土
⑥褐灰色粘土
⑦暗灰色砂（ラミナあり）
⑧茶褐色粘土
⑨緑灰色粘土
⑩緑灰褐色粘土
⑪乳灰色粘土
⑫乳灰褐色粘土
⑬明褐灰色粘土
⑭褐色粘土
⑮灰褐色粘土（ラミナあり）
⑯暗灰褐色シルト質粘土（ラミナあり）
⑰青灰褐色粘土（ラミナあり）
⑱暗青褐色シルト質粘土
⑲灰色粘土（ラミナあり）
⑳暗灰褐色粘土（ラミナあり）

A′層　A層　A層群　B・C層群

第67図　5区台状遺構群関連土層図（2）台状遺構廃絶後の土層堆積状況

第68図　5区台状遺構上面土器群（西斜面）出土状況

台状遺構群盛土層上面土器分布図

台状遺構群盛土層での高坏・器台・手捏土器分布図

△ 高坏
□ 器台
○ 手捏土器

※両図の等高線は台状遺構群上面検出時の空中写真測量によるものである。

第69図　5区台状遺構群出土土器分布図

5．台状遺構上面の土器群

台状遺構の上面を覆う腐植質粘土層の全域から、壺・甕等の夥しい土器（破片まで含めると約３万4000点）が検出された。これらの多くの壺・甕等の破片は、数ｍはなれたものが接合できたことから、廃棄された段階で落ちて割れて散布したのか、あるいは、割れたものを散布したのかもしれない。しかし、これらの土器は、置かれたような状態で出土したもの、または完形に近いものが多数あり、台状遺構の西側斜面に特に多く、次いで東側斜面に多く出土している。また、そこからは、手捏土器・坩・高坏・器台等の祭祀的な行為に関連すると考えられる土器が多数出土した。現在なお、土器の接合復原作業中であるが、現在のところ確認できた手捏土器・器台・高坏の分布を示す（第69図）と、手捏土器は西側斜面の直径数ｍの範囲に根を張った樹木の根跡付近に特に多く分布している。器台は、ＳＸ510北西部の陸橋付近の斜面と、南西部斜面に多い。高坏は、斜面全体に比較的多く分布しているが、器台と同様な分布をしている。手捏土器は、器台・高坏が多数分布している部分に挟まれるようにして分布しており、しかも樹木の根方であるので、何らかの意図がこめられていた可能性が考えられる。

台状遺構が墳丘墓であったとするならば、聖域としての祭祀の対象地であったのかもしれない。また、墳丘墓でなかったとすれば、このような土器を伴う祭祀を行うために台状遺構が構築され、台状遺構上、もしくは周辺で祭祀が行われ、それらに使われた土器が置かれたり、散布されたりしたものとも考えられる。

また、これらの土器を含んだ暗茶褐色の腐植質粘土層の一部が、青灰色になっている部分があった。この部分は、その直上に近現代の粘土採掘の攪乱穴があり、そこに大量の水がたまっていたため、その付近の暗茶褐色の腐植質粘土層の酸化鉄が還元されて変色したものと考えられる。なお、暗色が示す腐植含量の多さは、手捏土器の内面に草の繊維がこびりついていたものが多く発見されたことからもわかるように、旺盛な植物の繁茂の状況を示唆するものと考えられる。

６．水田遺構

５区の水田遺構については、前述の遺構の概観を述べた所で、概略と変遷過程を紹介しているので、ここでは、各期の遺構の主要な問題点について述べたい。なお、溝状遺構・畦畔等の計測値・観察記録は第８表を参照。

１．長崎遺跡の水田耕作の初現は、黒色粘土層上面に被覆した粘土層が攪拌してできたＤⅢ層であるというのが、われわれ調査者の共通理解であった。ところが、５区の南西部の微高地部分（１地点；第44図）でのプラント・オパール分析の結果では、この黒色粘土層が4200個／ｇのイネのプラント・オパールを検出しているのである。その上位の暗灰色年粘土層や灰色粘土層からの検出は小量である。これらの層は、若干シルト質で自然堤防堆積物であり、水田耕作は考えられない。これとは対照的なのは、この微高地部分の北側の低地（２地点；第44図）でのプラント・オパール分析の結果である。ここでの結果は、他の調査区の低地での検出結果と同様に、黒色粘土層では、イネのプラント・オパールは、０個／ｇであるのに対して、その上位のＤⅡ層では6700～2700個／ｇという数値を示しており、微高地部分とは好対照である（２地点では、ＤⅢ層は、上位のＤⅡ－２層の耕作によって攪拌されてしまっている）。

以上の事から、わかることは、どうも微高地直下の黒色粘土層では、水田耕作が行われていた可能性があるということである。これは、黒色粘土層が、自然堤防堆積物の直下で下位に湾曲している問題とも関連してくる。自然堤防さらにその上に堆積した粘土層の相対比重が周辺よりも大きいので、軟弱な黒色粘土層以下の部分が、圧密沈下しただけではなく、自然堤防堆積物が到来する以前に、この部分は低地であった可能性が考えられる。低地であったればこそ、自然堤防堆積物をより多く誘導できたのかもしれない。また、黒色粘土層の上面には、多くの乱れが観察できた。これらから、やはり低地では、黒色粘土層それ自体が水田土壌であった可能性も捨てきれないのである。しかし、この層に固有の水田遺構は検出できなかった。

２．次に、通る溝と行き止まりの溝の問題である。『長崎遺跡Ⅰ』でも指摘したように、連続している溝と断続している短い溝は、前者が水路であり、後者が畦畔の脇にある畦畔の盛土採掘痕跡である可能性が高い。ただし、両者を兼ねている場合もある。この後者の溝群が、ＤⅠ層上面の等高線図から推定した畦畔状遺構の痕跡と照合する場合がある（第44図）。

３．堰状遺構ＳＸ5114の問題性（第70図）；河道ＳＲ5234にかかっている遺構である。この河道が埋積され、湿地化した段階で、これを横断するように杭列・側板・矢板で護岸した堰状遺構ＳＸ5114が構築されている。側板は遺構上面から約１ｍ下位に打ち込まれており、水流が緩やかになった段階で、湿地化が進み、ここに構築されたものと考えられる。水流は、西から東に流れるので、ここで堰止められ、下流域での水位の上昇を遅延させたり、減少させたりする働きをしていたと考えられる。問題となるのは、この東側にある溝ＳＤ5135-2である。この溝は、北側の畑状遺構ＳＤ5221に連続している可能性があり、またＳＤ5135-2に横断して設置された杭列ＳＡ5458も、この溝の水量制御用の施設である可能性が高い。なお、ＳＤ5221が畑状遺構というのは交差する溝状遺構に対して、その間の高まり部分に高畝栽培を試みた可能性を考えているからである。これらの堰状遺構が機能する時期は、前述のように５区の微高地部分に刻まれた溝群がいずれも湿地化し、水量が調節可能となった段階での水利施設の構築が

盛んになる段階である。しかし、粘土層がさらに堆積し、多くの溝・堰を埋め尽くすことになり、この堰状遺構ＳＸ5114も護岸畦畔としての機能を果たすようになる。

４．深耕遺構の問題（第41図）；５区北東部のＳＸ512と南西部のＳＸ5477は、いずれもＤⅡ－２層上面からの耕作である。ＳＸ512の場合は、断面図（第72図参照）でもわかるように、深耕地は、ＤⅢ層段階では、南側と比べて約30cmの比高差がある若干の微高地である。ところが、ＤⅡ－２層段階の堆積によってこれらの南北の比高差を克服する分量の堆積が行われた。そこで、北側の若干の微高地については、耕作が、下位の遺構を破壊しながらの耕作となったものと考えられる。ＳＸ5477の場合は高畝栽培をしていたＳＤ5221関連の栽培施設を全て埋積するＤⅡ－２層段階の堆積によって深耕が行われ、下位の遺構を若干破壊することになったと思われる。

第8表　5区水田関連溝状遺構・畦畔状遺構一覧表

溝状遺構

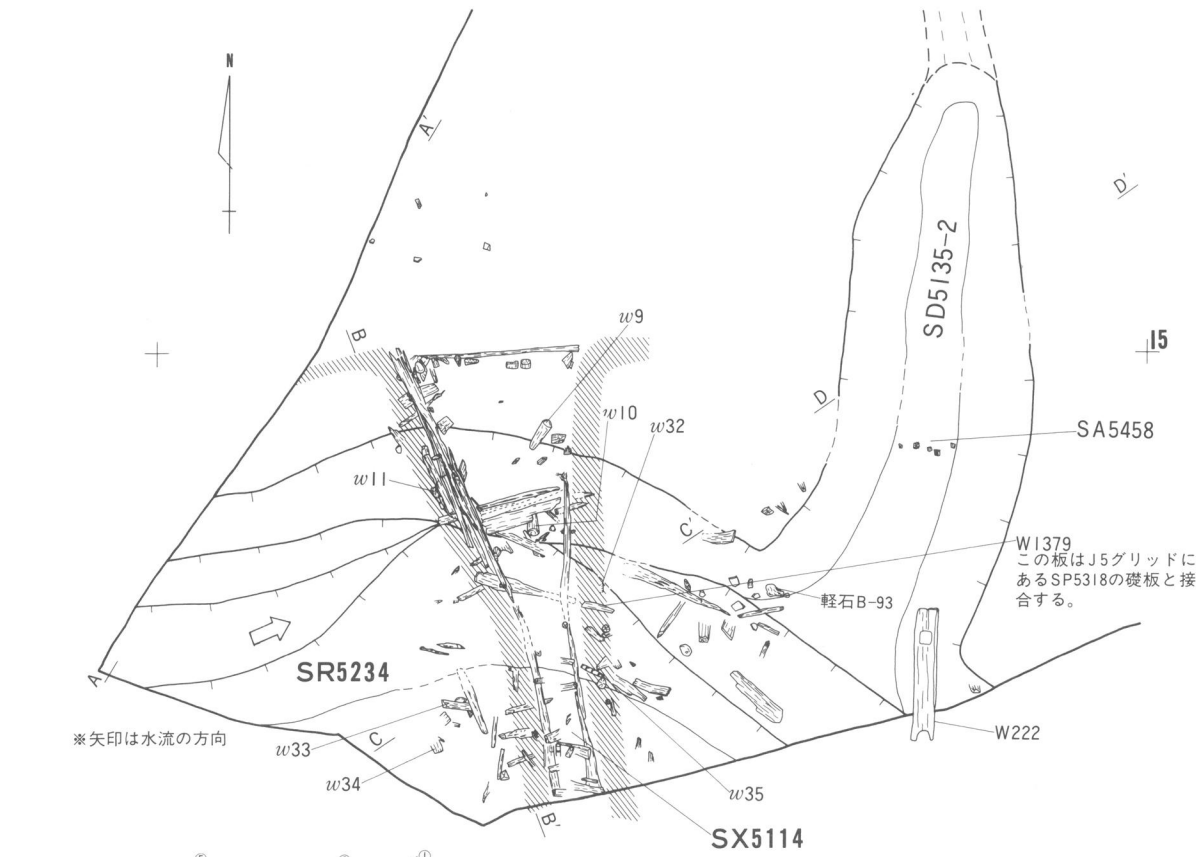
・時期は該当する遺構変遷図（第41～44図）の番号を示している。
・断面図の記号で図番を示さないものは、71・72・73図のものである。

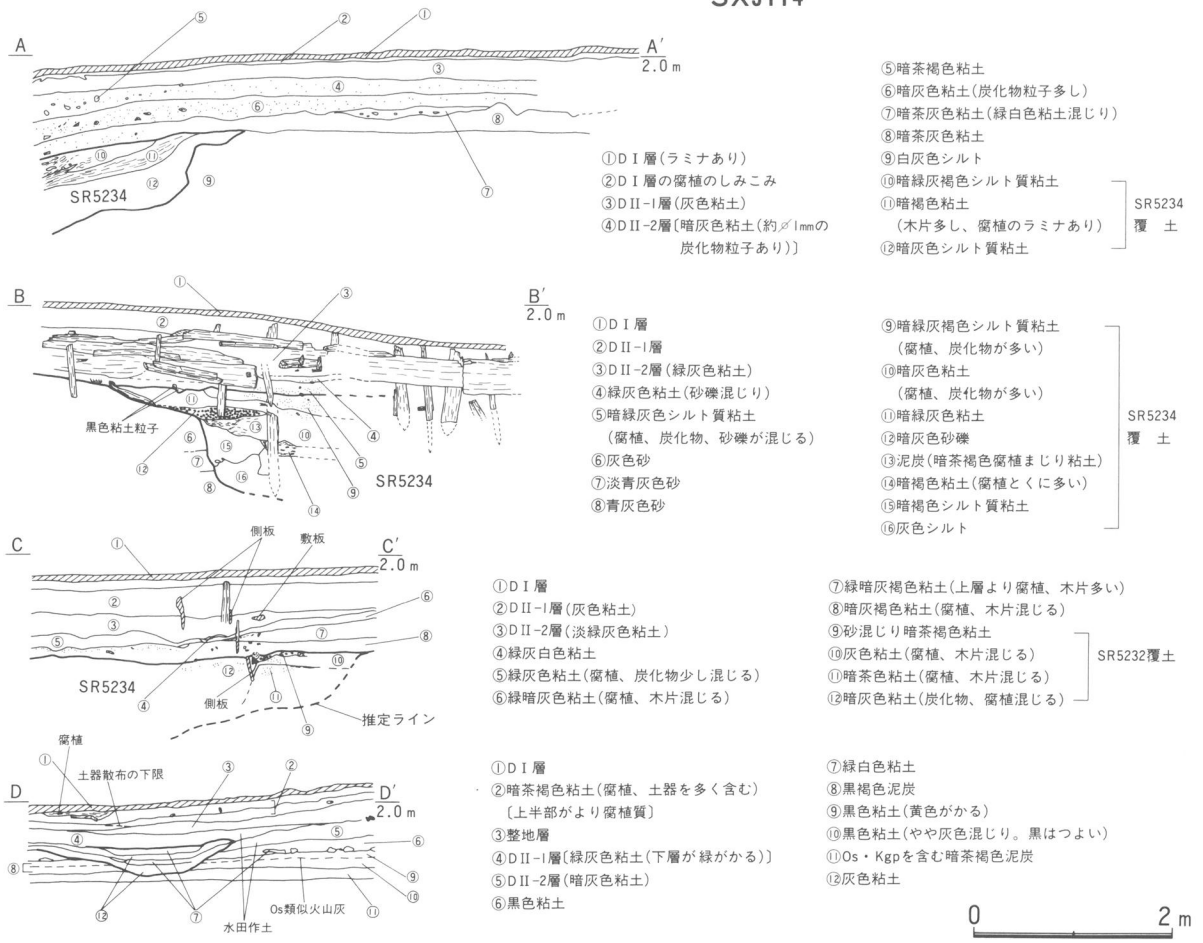
遺構番号	基本方向	方向	検出長（m）	下端幅（m）	掘削面	掘削深さ（cm）	覆土	断面形状	機能	切り合等	時期	断面図
SX523	南北	N23°W	2.90	1.10	[DⅢ層上面]	[12]	灰褐色粘土	逆台形	土掘溝？	SD524・543・538を切る。中央部分から土器片が出土	①	－
SD524	東西	E32°N→N64°E→E28°N	33.32	1.82	[DⅢ層上面]	[3]	緑黒灰色粘土	逆台形	水路？	SD525・533に切られる。SX512の深耕を受ける。	①	A M N
SD525	東西	E30°N	5.89	0.7	[DⅢ層上面]	[13]	緑黒灰色粘土	逆台形	水路	SD524を切る。SX512の深耕を受ける。	①	A
SX529	南北	N23°W	4.99	4.19	[DⅢ層上面]	[12]	暗灰黒色粘土	皿状	畑か？	SX512の深耕を受ける。SX541を切る。	①	B
SX530	東西	E23°N	7.69	1.45	[DⅢ層上面]	[7]	灰黒色粘土	皿状	畑か？	SX512の深耕を受ける。	①	M
SX531	東西	E24°N	7.22	1.10	[DⅢ層上面]	[7]	灰黒色粘土	皿状	畑か？	SX512の深耕を受ける。	①	－
SX532	東西	E23°N	7.93	1.49	[DⅢ層上面]	[6]	灰黒色粘土	皿状	畑か？	SX512の深耕を受ける。	①	－
SD534	東西	E26°N	6.11	0.18	[DⅢ層上面]	[21]	灰黒色粘土	逆台形	水路	SD533に切られるSX512の深耕を受ける。	①	A
SD536	東西	E36°N	6.16	0.39	[DⅢ層上面]	[10]	緑黒灰色粘土	皿状	土掘溝	SX512の深耕を受ける。SD539・537を切る。	①	N
SD537	南北	N28°W	3.89	0.39	[DⅢ層上面]	[9]	淡暗灰色粘土	皿状	土掘溝	SX512の深耕を受ける。SD538を切る。SD536に切られる。	①	－
SD538	東西	E36°N	4.40	0.48	[DⅢ層上面]	[10]	灰色粘土	皿状	土掘溝？	SX512の深耕を受ける。SD543を切る。SD537・SX523に切られる。	①	－
SD539	東西	E34°N→E14°N→N4°W	8.99	1.19	[DⅢ層上面]	[17]	暗灰色粘土	皿状	水路？	SX512の深耕をうける。SD536・524に切られる。SD524の旧水路か？	①	N
SX541	東西	E26°N	12.70	1.65	[DⅢ層上面]	[5]	淡緑灰色粘土	皿状	畑か？	SX512の深耕を受ける。	①	A
SD543	東西	E20°N→E6°S	22.55	0.70	DⅢ層上面	[16]	(暗)灰色粘土	逆台形	畦盛土用	SD544を切る。SD543-2切られる。	①	M J
SD543-2	東西	E31°N	7.68	1.48	DⅢ層上面		緑灰黒色粘土	逆台形	畦盛土用	SDSD543-1を切る。	①	L
SD544	南北	N24°W→N38°W	6.98	0.15	DⅢ層上面	平均9	(淡)黒灰色粘土	半円形	畦盛土用	SD524を切る。SD543に切られる。DⅡ-2層がパック	①	C D
SD545	南北	N16°W	2.21	0.25	DⅢ層上面	20	灰黒色腐植まじり粘土	逆台形	土掘溝	SX522に切られる。DⅡ2層がパック	①	E
SP547	東西	E47°N	0.84	0.42	DⅢ層上面	13	暗灰色粘土	逆台形	不明	SD543-1を切る。	①	－
SX5456-1	東西	E29°N	2.95	0.25	DⅢ層上面	6	灰色粘土	皿状	土掘溝？	－	①	K
SX548	東西	E37°N	2.34	1.13	[DⅢ層上面]	18	暗灰色粘土	逆台形	土掘溝？	SD543に切られる。	①②	J
SD511	南北	N47°W	1.85	0.95	DⅡ－2層上面	27	灰褐色粘土	逆台形	不明	－	②	g
SX512	東西	E28°N	31.24	－	DⅡ－2層上面	13	淡灰色粘土	段差のある低地	深耕地か？	①期の溝群を切っている。	②	A B M
SD515	東西	E18°N	0.97	0.40	DⅡ－1層下部	37	灰褐色粘土	逆台形	土掘溝？	SK518に切られる。	②	O
SD519	南北	N44°W	1.90	0.50	DⅡ－2層上面	30	淡緑灰色粘土	逆台形	畦盛土用	SD513を切る。	②	I
SD520	南北	N28°W	5.60	0.80	DⅡ－2層上面	42	淡緑灰色粘土 緑白色粘土 灰色粘土	逆台形	畦盛土用	SD513を切る。	②	H
SD522	東西	N4°W→E18°N→E2°N→E25°N	15.69	0.33	DⅡ－2層中	平均29	灰緑黒色腐植まじり粘土	半円形	畦盛土用	SD533で切られる DⅡ-2層がパック。 SX542を切る。	②	F G
SD533	南北	N35°W→N2°W→N23°W	19.31	0.70	DⅡ－2層上面	22	明灰色粘土 明緑灰黒色粘土	逆台形	畦盛土用	SD513に切られる SD522・SD543を切る。	②	L
SD5195	南北	N13°W	8.42	1.02	DⅡ－2層上面	23	淡緑灰色粘土 灰色粘土	逆台形	畦盛土用	－	②	b
SX5450	南北	N37°W	1.10	0.60	DⅢ層上面	26	明灰褐色粘土 (DⅡ・2層)	方形	不明	－	②	f
SX5451	南北	N34°W	0.80	0.40	DⅡ－2層中	36	灰褐色粘土 暗灰褐色粘土 暗灰色粘土	逆台形	不明	－	②	h
SD5453	－	－	－	0.36	DⅡ－2層中	18	灰褐色粘土	方形	不明	－	②	i
SD5454	－	－	－	0.15	DⅡ－2層中	39	灰褐色粘土	逆台形	不明	－	②	j
SX5456-2	東西	E22°N	2.10	0.30	DⅡ－2層上面	23	明緑灰色粘土	逆台形	土掘溝？	SD533を切る。	②	－
SX5467	南北	N13°W	－	3.75	DⅡ－2層上面	25	淡緑灰色粘土 淡緑暗灰色粘土	皿状	不明	－	②	c
SX5468	東西	E32°N	1.5	0.65	DⅡ－2層上面	14	暗緑灰色粘土	逆台形	不明	－	②	－
SX5477	－	－	東西 8.0	南北 8.2	DⅡ－2層上面	32	淡暗青灰色粘土	段差のある低地	深耕地か？	②期の溝群を切っている。	②	d e
SD513	東西	E14°N→E8°N→E30°N→E36°N→E33°N	66.45	0.76	DⅡ－1層下部	34	(淡緑灰色粘土) 緑灰色粘土 淡緑暗灰色粘土 暗灰色粘土	逆台形	水路	SD533・514を切る SD519・520に切られる。 SK5419・553に切られる。	②③	O Q T U V
SD514	南北	N18°W (西端部)		0.60			(淡緑灰色粘土) 緑灰色粘土			SK553の杭列はSD514の埋積されたあと打たれている。		M O P
	東西	E27°N	30.50	1.00	DⅡ－1層下部	44	淡緑暗灰色粘土	逆台形	畦盛土用 水路	SD513に一部切られるがSD5269で連絡している。	②③	Q R S
	南北	N23°W		1.10			暗灰色粘土					

遺構番号	基本方向	方向	検出長（m）	下端幅（m）	掘削面	掘削深さ（cm）	履土	断面形状	機能	切り合等	時期	断面図
	東西	E38°N（北東端部）		2.20								
SD5269	南北	N20°W	2.70	0.45	DⅡ－1層下部	44	緑灰色粘土 暗灰色粘土	逆台形	水路	SD514とSD513を連絡している。	②③	－
SX5469	－	－	0.63	0.45	DⅡ－2層上面	28	灰緑色粘土	逆台形	畦盛土用	SK5106の盛土用か	②③	48図A
SX521	－	－	0.92		DⅡ 2層上面	－	（炭化物散布域）	平坦面	不明	－	③	－
SX549	南北	N5°E	1.63		DⅡ 2層上面	－	（炭化物散布域）	平坦面	不明	－	③	－
SD5196	東西	E15°S	1.81	0.42	DⅡ 1層中	26	淡褐灰色粘土	逆台形	不明	－	③	－
SX5452	東西	E11°N	1.85	0.90	DⅡ 1層中	38	灰褐色粘土	半円形	不明	－	③	－

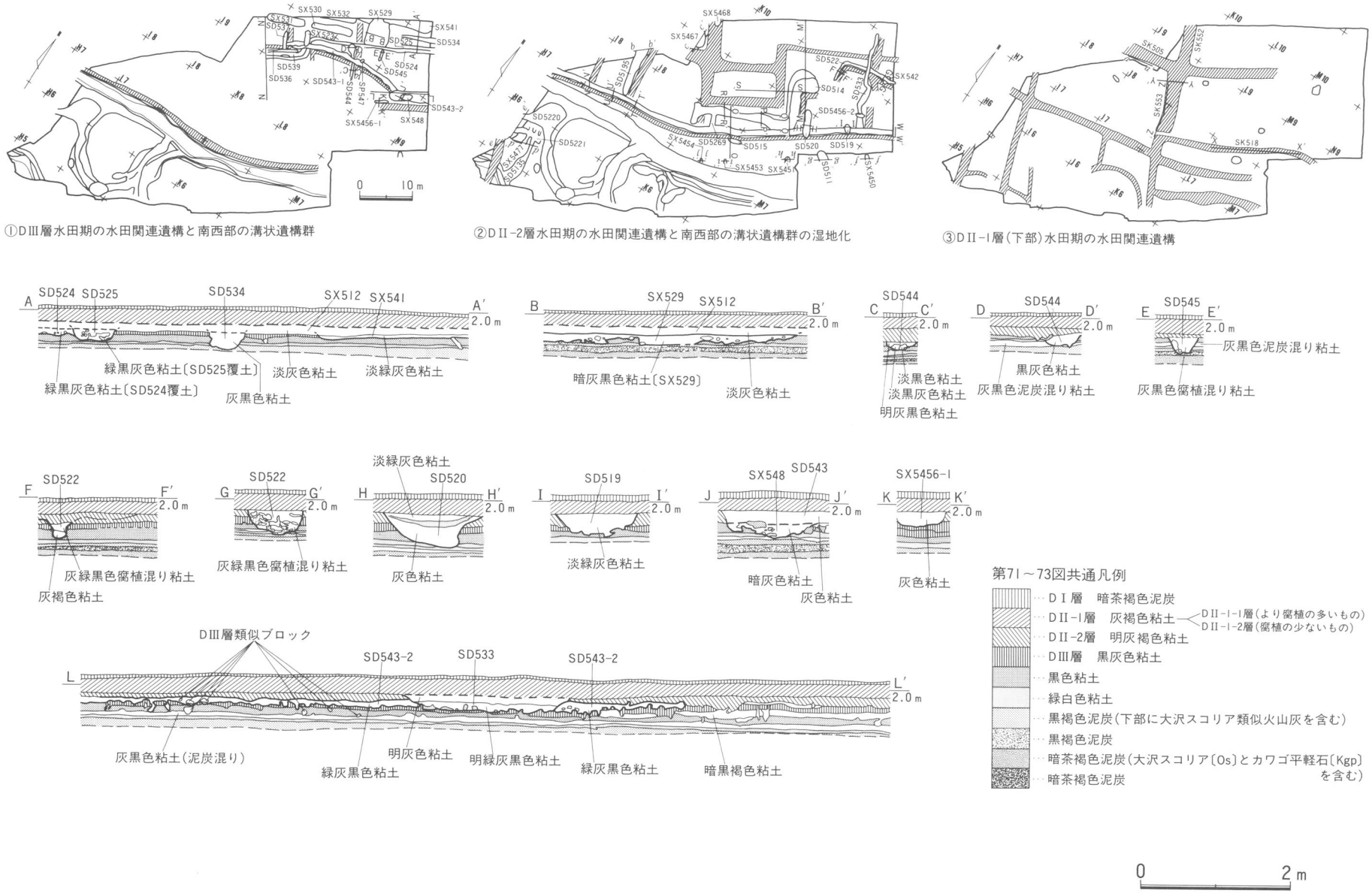
畦畔状遺構

遺構番号	基本方向	方向	検出長（m）	下端幅（m）	上端幅（m）	畦畔上面の高さ（m）	田面との比高差（cm）	畦畔内出土木製品数	畦畔1m当の出土数	切り合等	時期	断面図
SK505	東西	E13°N	10.50	2.65	－	2.18	12	18	1.7	－	②③④	a
SK552	南北	N19°W	8.50	2.00	0.72	2.12	12	2	0.2	SX5468を切る。	②③④	－
SK553	南北	N18°W	16.80	2.70	1.63	2.20	10	58	3.5	SD514・513を切る。	②③④	Y Z
SK5106	東西	E10°N	2.25	1.40	1.25	2.10	10	6	2.7	SD5108を切る。起伏はDⅡ 2層よりあり。 ②の時期から継承されているか。	②～③④	48図A
SK5464	東西	E33°N	18.90	2.00	－	2.19	8	3	0.1	－	②③④	N
SK518	東西	E29N→E3°N	30.50	1.15	－	2.04	7	31	1.0	SD515を切る。③の中でも下位の遺構である。	③④（DⅡ 12）	O X
SK5140	東西	E14°N→E9°N	25.30	1.40	－	2.14	6	209	8.3	SD5108とSX5110を切る。畦畔の上面の多くが整地により削られている。	③	48図E
SK5479	南北	N20°W	4.70	1.10	－	2.04	4	5	1.1	SD513・5108を切る。	③	－





第70図　5区堰状遺構ＳＸ5114実測図

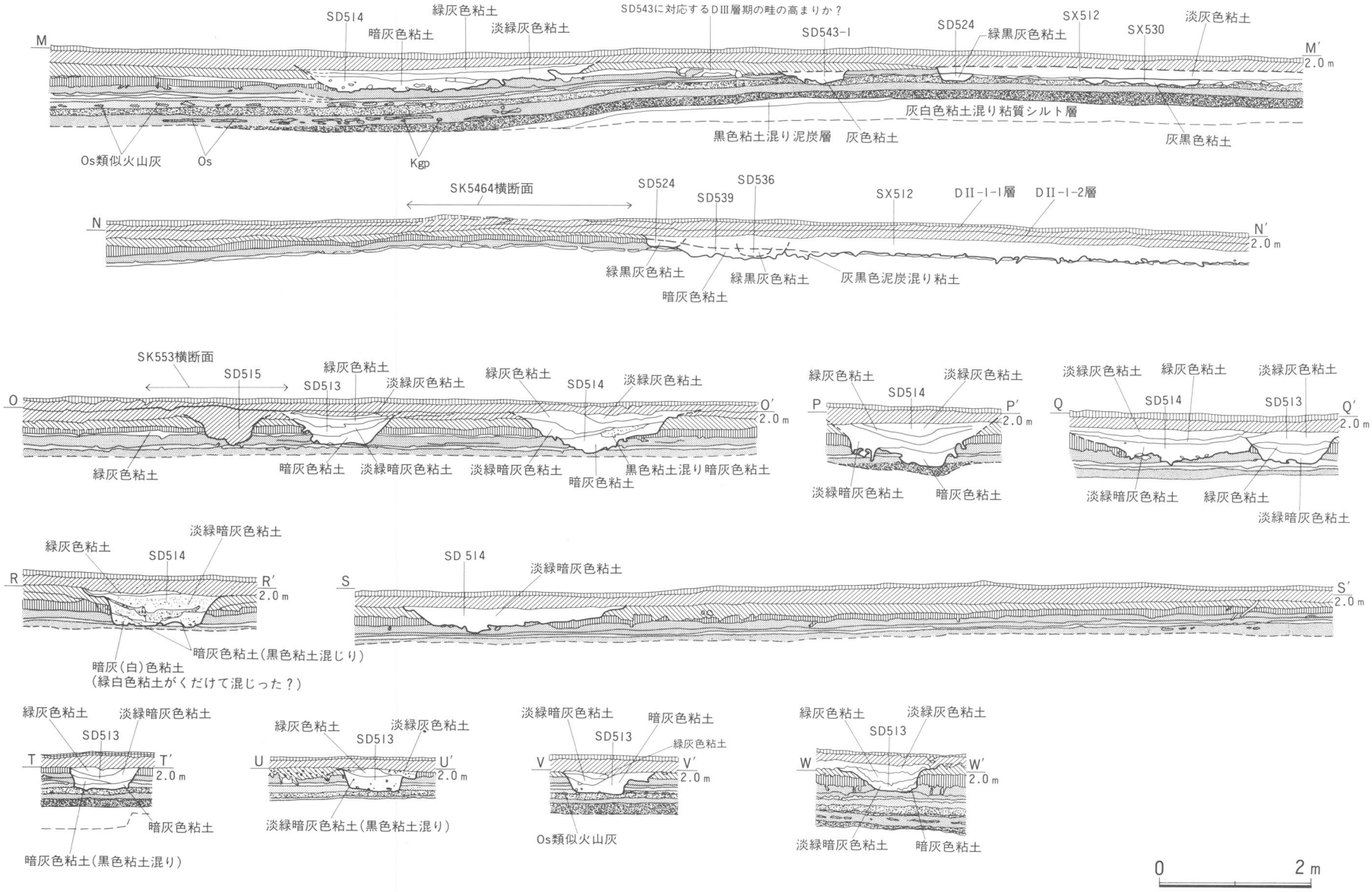


①DIII層水田期の水田関連遺構と南西部の溝状遺構群

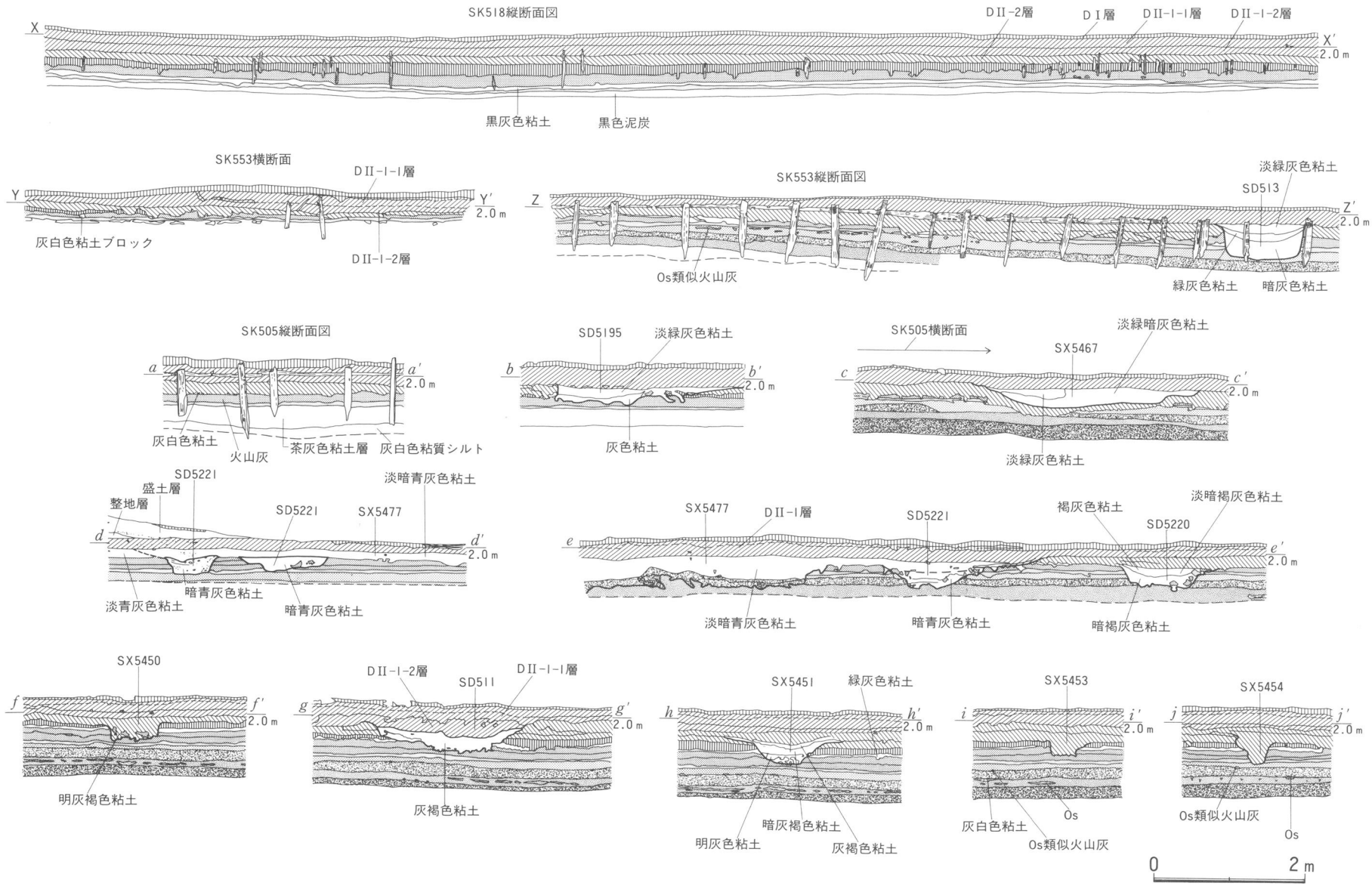
②DII-2層水田期の水田関連遺構と南西部の溝状遺構群の湿地化

③DII-1層(下部)水田期の水田関連遺構

第71図　5区水田遺構断面図（1）



第72図　5区水田遺構断面図（2）



第73図　5区水田遺構断面図（3）

第２節　遺物

１．土器

１区～４区については、各遺構に伴う遺物は全て紹介することを原則としてきたが、５区・６区については、その量が非常に膨大となり、現在も整理を継続中である。改めて遺物編で取り扱うこととし、ここでは、各遺構の時期・性格を考えるために必要と思われるものを紹介しておきたい。なお、各土器の時期については、足立による編年案（第Ⅴ章第２節）を参照されたい。

溝状遺構群出土の土器

１・２・３は、ＳＤ5220から出土した壺である。１は肩部に棒状１・円形２の浮文の組み合せが４ヶ所にほどこされている。さらにその下段に２段の円形浮文がめぐらされている。全体にハケ目調整されたうえで、胴部下半はていねいにヘラミガキされている。外面には丹塗りの痕跡が所々に残る。口縁部は端部を欠失しているが大きく開くもので２ヶ所１組の円孔がうがたれている。２は粗製の壺でハケ目調整ののち、ヘラミガキされている。３は、小型壺で、ハケ目調整ののち、ヘラミガキされているが、接合痕が随所にのこる。

４は、ＳＸ5243から出土した壺である。磨耗のため詳細な観察は不能であるが、ハケのちヘラミガキの調整が部分的に観察される。胴部下位に最大径があり11.0cmを測る。

５は、ＳＤ569から出土した壺である。口縁部を大きく欠くが頸部に６条の沈線と３段の波状紋をめぐらし、その下段に円形浮文がめぐらされている。全面に丹塗りされていたと推定される。長崎２期にあてられるものである。

６は、ＳＤ570から出土した甕である。口縁部は大きく外反し、口径18.4cmを測る。口縁部にキザミ目はない。胎土はやや粗く、整形も随所に指頭痕が残る。

７は、ＳＸ5248から出土した壺である。口縁部を欠失しているが、大きく開くタイプのものである。ハケのちヘラミガキ調整されている。特に頸部から、口縁部にかけては縦方向のヘラミガキでていねいに調整されている。

８は、ＳＤ5336から出土した壺で、胴部上位に１段の円形浮文を施されている。口縁部を欠失しているが、大きく開くものである。

９は、堰状遺構ＳＸ5114の覆土から出土した壺である。胴部上位に１段の円形浮文を施し、口唇部にはキザミ目がある。ハケ目調整で胴部下半はヘラミガキされている。

10～13は、ＳＤ5108から出土した壺である。10は、高さ27cm、胴部最大径20.8cmを測る。頸部から肩部にかけて縄文地の上に４個１組の円形浮文が３ヶ所施されている。胴部下半はていねいにヘラミガキされている。口唇部に折り返しがみられる。

14・15・16・19・22は、溝状低地ＳＸ5110から出土した壺である。14は、胴部上位に１段の円形浮文を施されている。外面の一部口縁内部に丹塗りの痕跡が認められる。16は、口唇部にキザミ目があり、頸部に縄文帯をめぐらし下段に円形浮文が施されている。17・18はＳＤ5308から出土した壺である。これらは、胴部上位に１段の円形浮文を施されており、17は複合口縁の壺である。

掘立柱建物群整地層出土の土器

20・21・23・24・25・34・89は掘立柱建物群整地層出土の土器である。ただし、20・21・24・25は、北東部のＪ６グリッドで、23・34は南西部のＩ５グリッドで出土している。20・21は壺である。20は、口唇部にキザミ目がある。23・24・34は甕である。23は台付甕で口縁部は「く」の字状に大きく屈曲し外方に開く。高さ29㎝、口径15.7㎝、胴部最大径21.6㎝を測る。25は高さ12.2㎝、胴部最大径14.1㎝を測り、ずんぐりした印象を受ける。内外面ともハケ目調整で頸部に丹塗りのあとをわずかに留める。34は口縁部が「く」の字に屈曲している。薄手のつくりである。89は複合口縁の壺である。

炭化物・焼土面遺構出土の土器

27は、炭化物が覆土に多く含まれている土坑ＳＸ562から出土した浅鉢である。口径13.3㎝、高さ6.3㎝を測る。長崎６期に属する。

台状遺構群上面の土器群

26・28～33・35～115が台状遺構群上面の土器群である。ここでは、広範囲に拡がっている土器群を地域別に説明したい。

26・28～88は、台状遺構ＳＸ510の西斜面から出土した土器群である。最下位からは26の高坏が出土している。高さ12.1㎝、口径17.2㎝を測る、長崎６期に属すると考えられる。28～33は壺である。30・31は複合口縁壺である。

35～43は甕である。42・43はＳ字口縁甕であり、43はｃ類に属すると考えられる搬入品である。44は鉢である。45・46・48～51は小型壺である。47は手捏の壺である。胴部上端に円形浮紋が施されている。比較的最下位からの出土である。52～67は浅鉢と坩である。68は器台である。以上の52～68は、長崎６期に属すると考えられる。69～88はいずれも手捏の壺である。

90～101は、台状遺構ＳＸ510の北斜面から出土した土器群である。90・91は甕である。92は有孔浅鉢である。93・94は浅鉢であり、長崎６期に属すると考えられる。95は手捏の小型壺である。96～101は手捏の壺である。

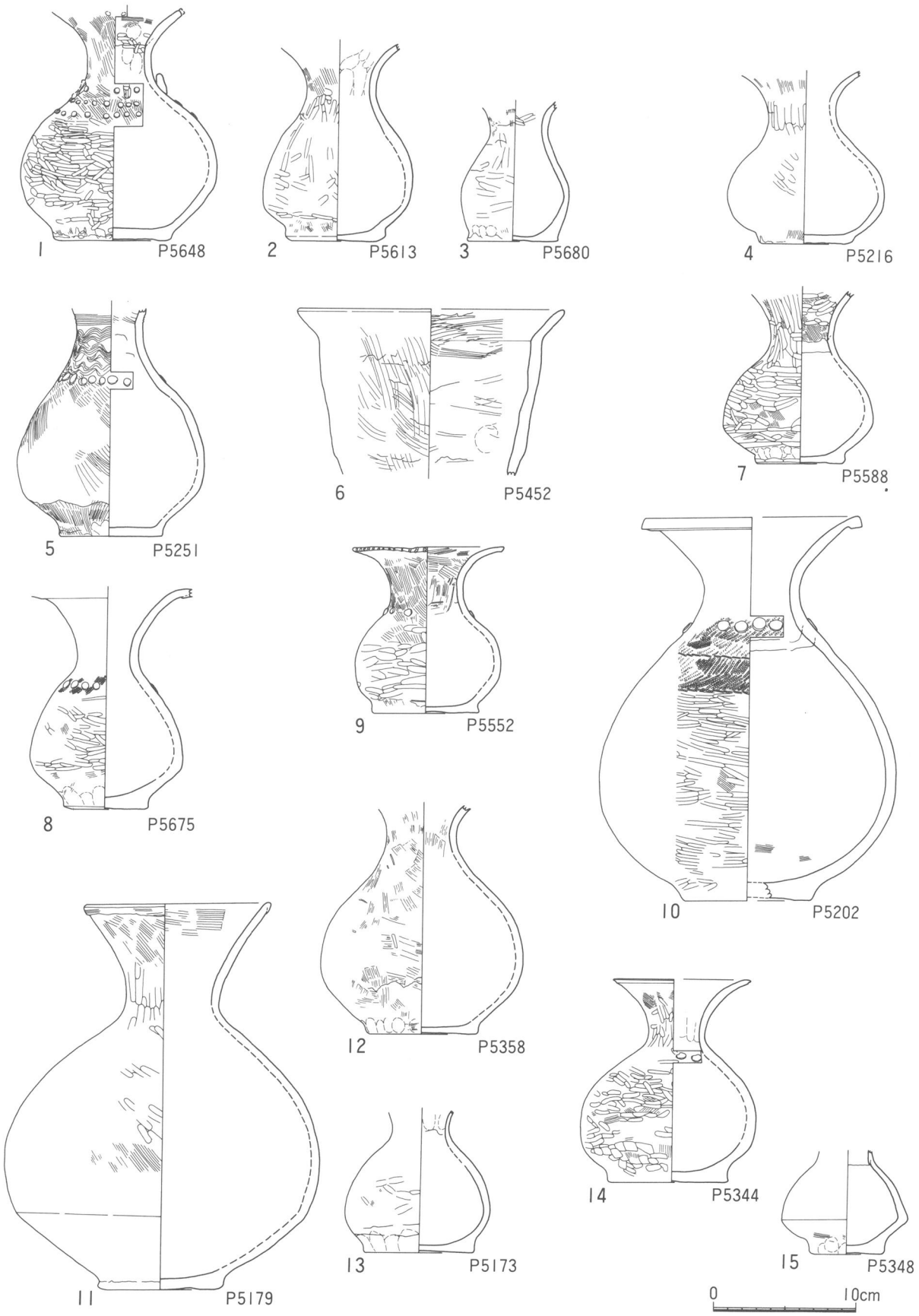
102～109は、台状遺構ＳＸ510の東斜面から出土した土器群である。102は、Ｓ字口縁甕である。103・104は浅鉢である。105～108は手捏の壺である。109は器台である。いずれも長崎６期に属すると考えられる。

110・111は、台状遺構ＳＸ510の中央部から出土した土器である。110は壺、111は浅鉢である。

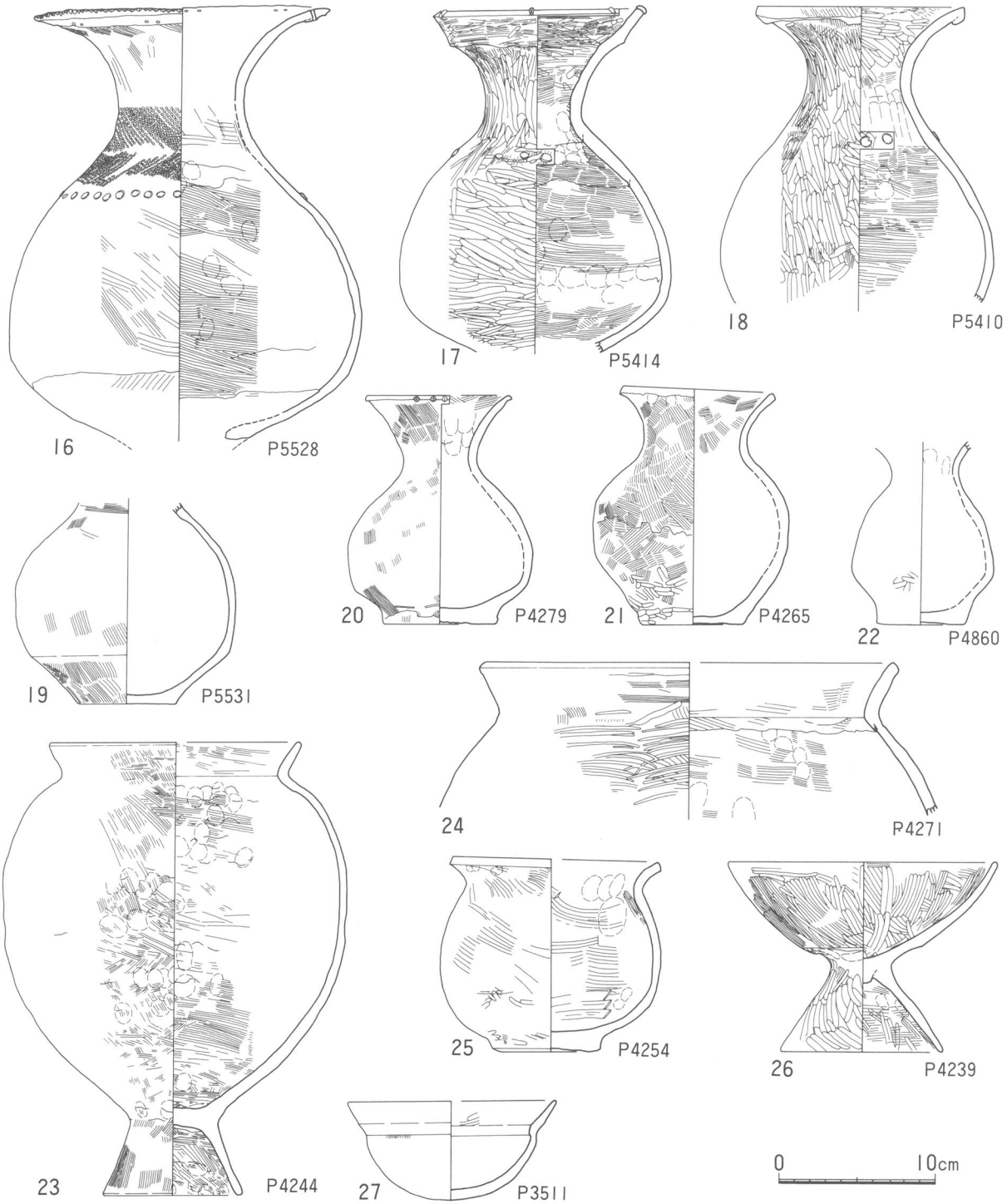
112・113は、台状遺構ＳＸ551の上面から出土した土器である。112は、坏部の底に明瞭な綾線がある。113は手捏の壺である。

水田域出土の土器

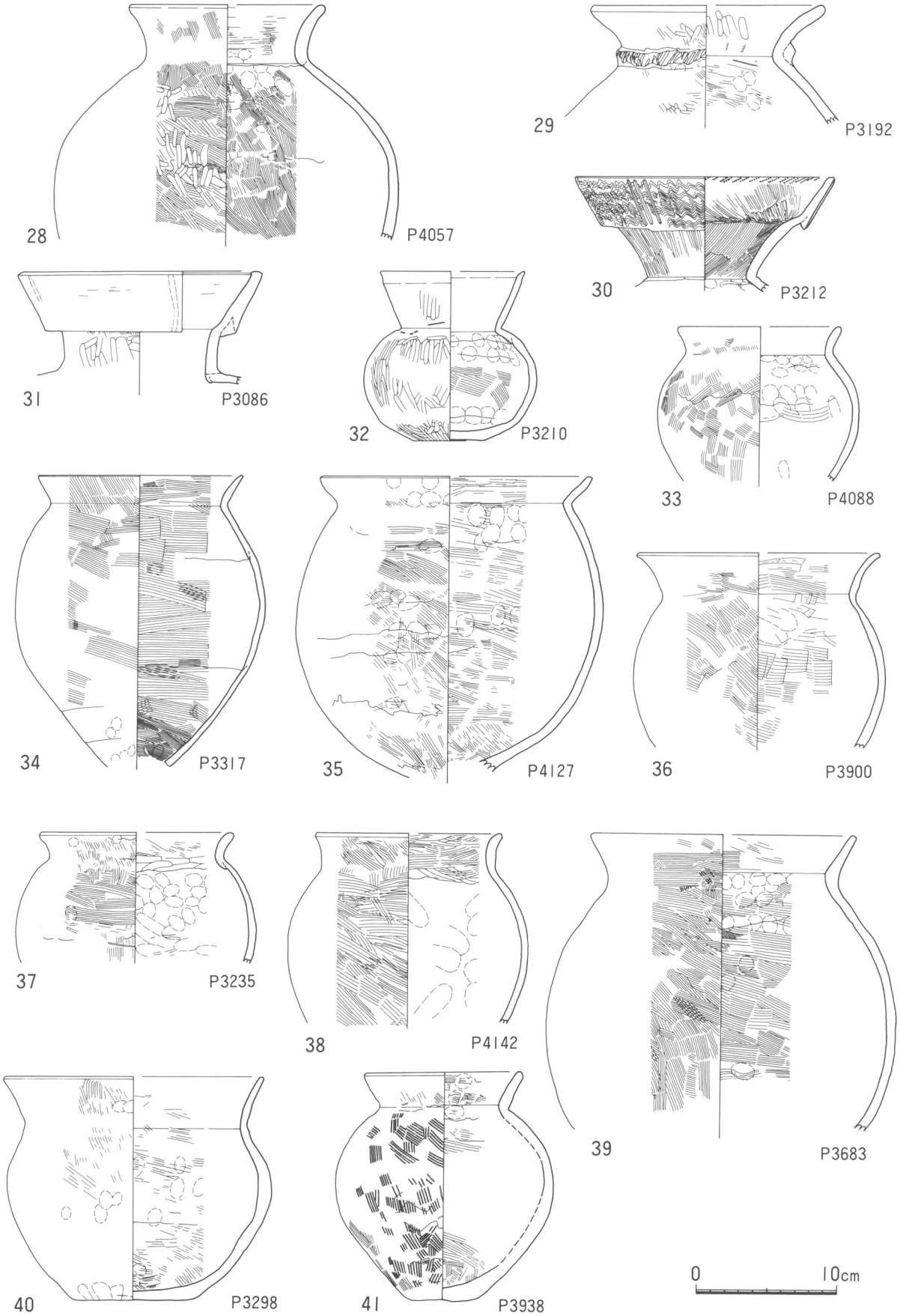
114は、ＳＤ514覆土中から出土した壺である。115は東半部のＤⅡ層水田作土中から出土した甕である。116・117は西半分のＤⅡ層水田作土中から出土した壺である。



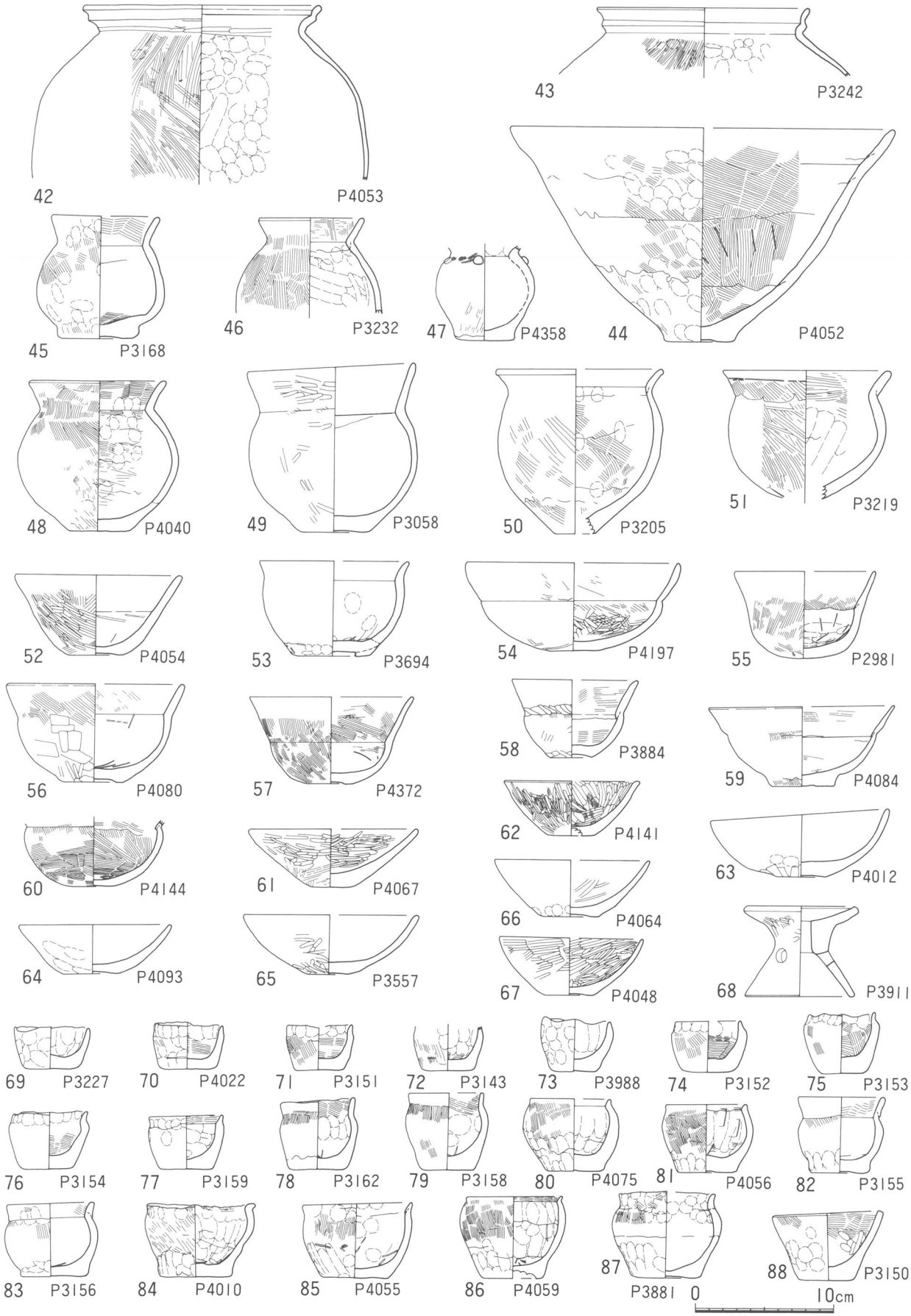
第74図　5区出土土器実測図（1）



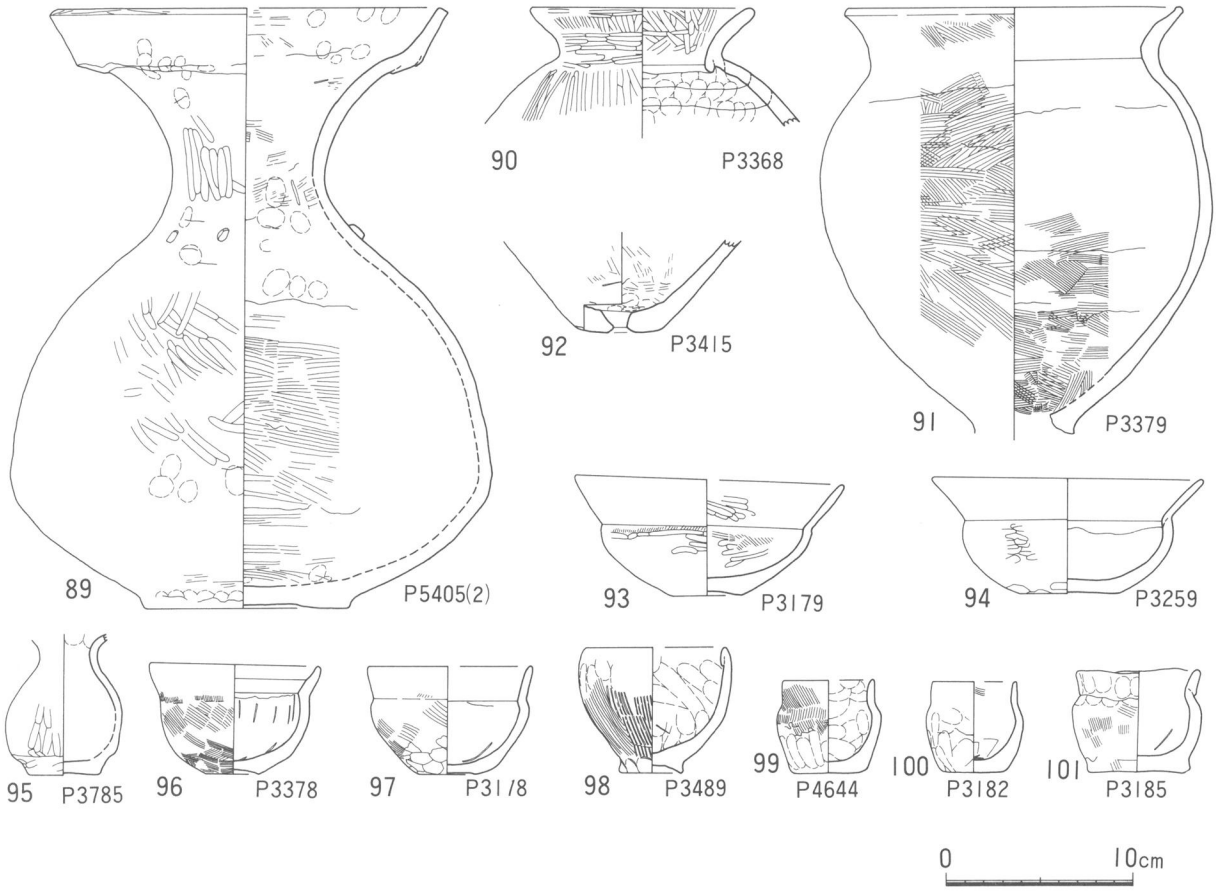
第75図　5区出土土器実測図（2）



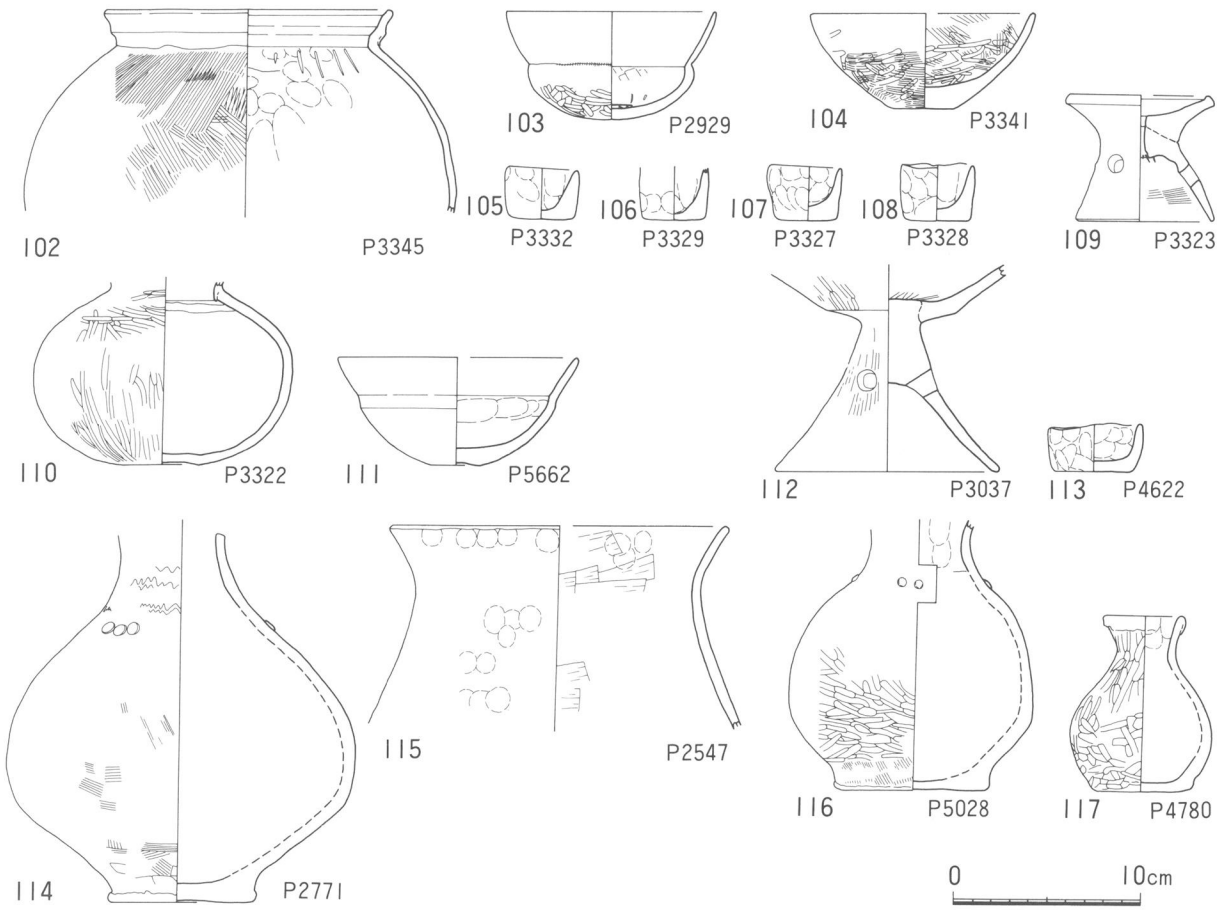
第76図　5区出土土器実測図（3）



第77図　5区出土土器実測図（4）



第78図　5区出土土器実測図（5）



第79図　5区出土土器実測図（6）

2．木製品

5区出土木製品について、農具・建築材・その他の部材・器類を、この順に取り上げ、それぞれ、原則として下層遺構から順に述べる。

農具

1・2・3は、四本刃の又鍬の身部である。いずれも膝柄が装着されるタイプである。溝状遺構群の内、2・3が覆土中位からの、1が覆土上位からの出土である。

1は、ＳＸ5110からの出土である。ＳＸ5110は、ＳＤ5108の覆土上部にさらに拡張掘削された部分である。1の、身部と刃部の残存長は、それぞれ51.1cmと31.1cmである。刃部・軸部はともに端部が欠損している。幅は、残存部分から、約18.3cmと推定できる。4本の刃は付根から約20cm付近までは広がりぎみになっているが、それより先はほぼ並行になっている。前面（使用者からみて）は全体として平滑であるが、内側の4本の刃部の部分の付根の部分には、緩やかな匙状の浅い抉りがみられ、抉り部分の縁には湾曲する稜線がみられる。ただし、全体に湾曲がみられるのは、作成後の乾燥によるものと考えられる。軸部は断面が隅丸の台形（前面側が広く、後面側が狭い）である。軸部の後面には、刃部と軸部と境界線付近に段差があり、軸部の方が5mmほど削平されている。さらに、この段差線から約4cm軸先寄りの部分から軸先に向って、斜めの削平が施されている。この斜めの削平部の先に3に残存しているような隆起部が存在していたと考えられる。これらの段差・削平部分は、膝柄を装着する際の紐による緊縛のためのものと考えられ、段差付近には緊縛の痕跡もみられた。一部残存する2本の刃をみると、刃部は付根から6cm付近まで次第に薄くなり、それより先は、ほぼ同じ厚さである。また、内側の刃は、外側の刃と比べて、やや厚く、付根から15cm付近での断面では、内側が約9mm、外側が約5mmである。使用による磨耗が、外側の刃の方が著しいため、あるいは製作時に外側の方が薄くつくられたのかもしれない。さらに、刃部の付根にあるＶ字型の切り込みは、両面に施されて、指の間のように刃先に向って次第に薄くなっているが、前面の方が後面よりも深い切り込みとなっている。刃部の肩はなで肩であるが、肩先の部分には稜が観察できた。

2は、ＳＤ5336からの出土である。形態は1とよく似ている。身部と刃部の残存長は、それぞれ45.1cmと27.8cmである。刃部・軸部はともに端部が欠損している。幅は、残存部分から、約15.5cmと推定できる。前面は全体として平滑であるが、内側の4本の刃部の部分の付根の部分には、緩やかな匙状の浅い抉りがみられ、抉り部分の縁には湾曲する稜線がみられる。ただし、全体に湾曲がみられるのは、作成後の乾燥によるものと考えられる。軸部は後面が山なりに脹らんでおり、軸部と刃部の境界付近にＶ字型の刻みが施されている。この刻みは、膝柄を装着する際の紐による緊縛のための部分と考えられ、緊縛の痕跡もみられた。刃部は付根から9cm付近まで次第に薄くなり、それより先は、ほぼ同じ厚さである。刃部の付根にあるＶ字型の切り込みは、両面にあり、1とは逆に後面の方が深い切り込みとなっている。肩はなで肩であるが、1と同様に、肩先の部分には稜が観察できた。なお、刃先は裏面側に若干反っているが、これは後世の乾燥による可能性が高い。

3は、ＳＤ5108からの出土である。形態は1とよく似ている。身部と刃部の残存長は、それぞれ35.1cmと13.6cmである。刃部は中程で欠損しているが、軸部はほぼ完形である。幅は、残存が悪いため大まか

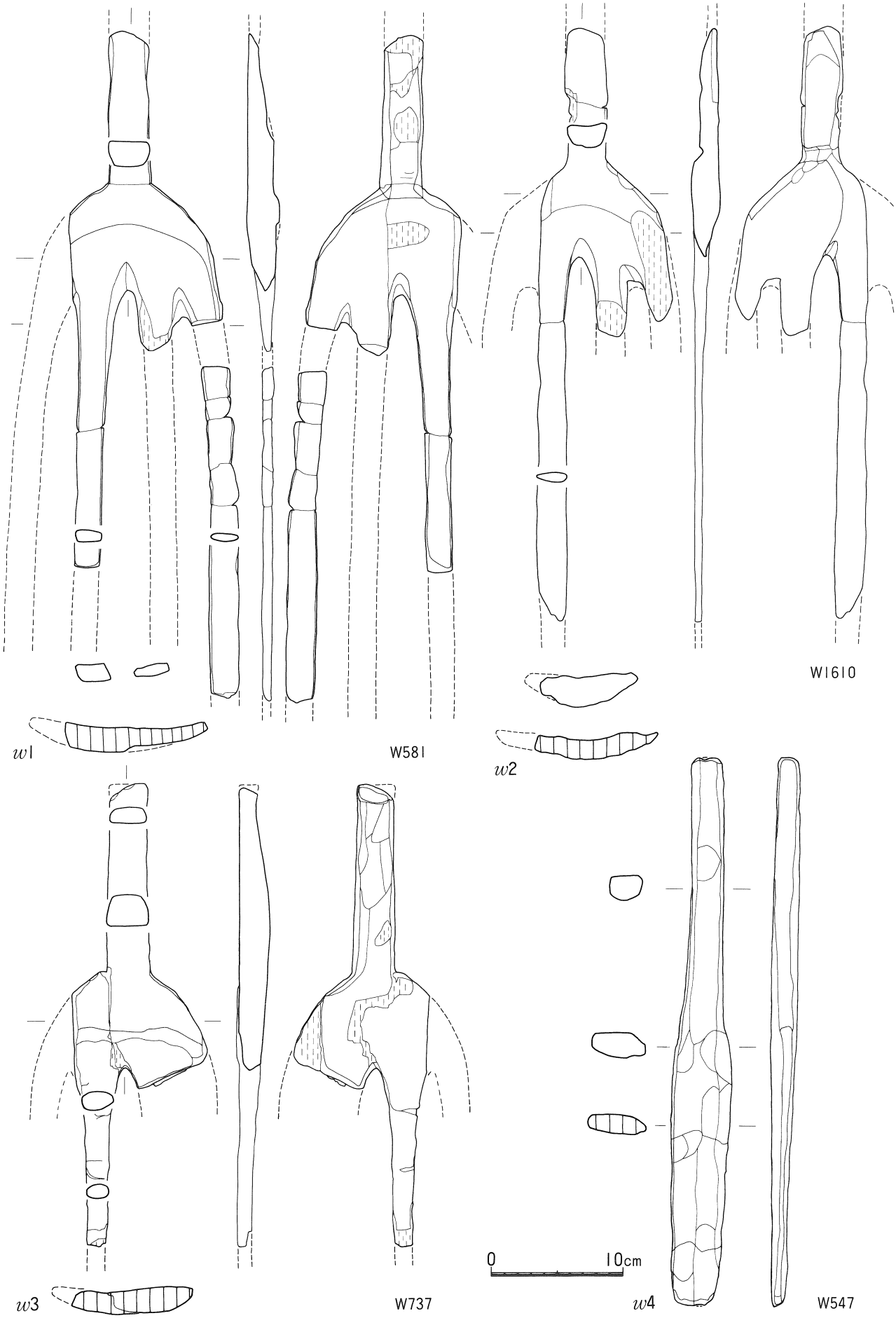
な推定しかできないが、約14.3cmである。１・２で観察できた刃部の裏面の抉りは、残存状態が悪かったので確認できなかった。しかし、内側の刃の厚みは１と同様に厚く、刃の付根から刃先に向って約12cmいったところでの厚さが約１cmであった。刃部・軸部ともに前面は平滑である。軸部の長さは14.2cmである。軸部の断面は台形（前面側が広く、後面側が狭い）である。刃部と軸部との境界付近に刻みや段差は観察できなかった。しかし、１と同様に刃部と軸部との境界線から4.5cm付近から軸先に向って斜めの削込みが施され、軸端部には隆起部がある。これらの斜めの削り込みや軸端部の隆起は、膝柄を緊縛するためのものと考えられる。１・２・３はいずれも柾目材である。樹種は共にアカガシ属一種（１・２・３）。

４は、ＳＸ5110から出土した掘り棒または小型の鋤である。完形であり、全長41.8cm。刃部と軸部はほぼ等分されている。刃部の幅は付根付近がやや広く約4.5cm、刃先付近が3.2cmと次第に細くなっている。刃部の断面は、角が丸くなった扁平な六角形である。両面にそれぞれ２本のぼんやりした稜線が確認できる。刃先は鈍く尖っている。刃部から軸部にかけては、極めてなだらかに細くなり、軸部はやや扁平な隅丸方形である。軸幅は約2.5cmである。軸の中央部がやや細くなっているのは使用によって摺り減ったためと考えられる。柾目材である。

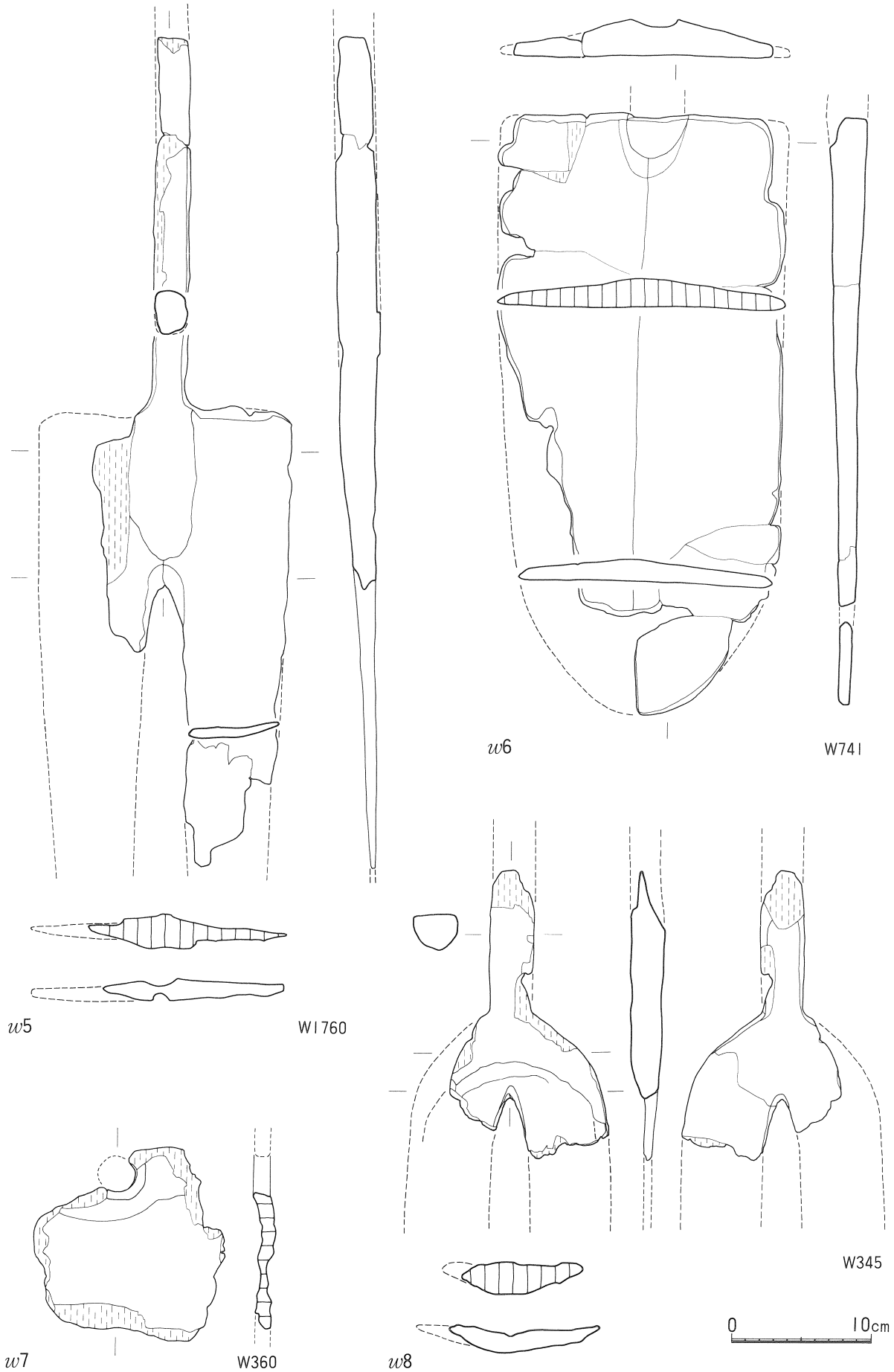
５・６はともに溝状遺構ＳＤ5108からの出土の鋤である。５は、二股の刃部を持ち、身部の残存長は52.2cm・幅は14.1cmあり、刃部の残存長は20.0cmである。先端部は欠損している。身部の肩は直角につくられており、鋤を踏み込む際の足掛けの役割をしていたものと考えられる。身部の前面はほとんど扁平であり、軸部にもこの扁平が及んでいる。軸部は、面取りを施した角柱である。この軸部の残存長が27.0cmあり末端は欠損しており、膝柄を装着するにはやや長すぎることもあって、膝柄鍬ではなく、鋤であると考えた。樹種はアカガシ属一種である。６は、身部の長さ43cm、幅20.2cmのほぼ完形の身部をもつ鋤である。肩部は柄に対して直角に造られている。柄は全く失われているため、一本鋤か組合せ鋤か判別できない。ただし、柄の付根付近は若干の緩やかな隆起がみられる。身部の前面は、扁平であるが、後面には１cmほど隆起した稜線が柄から刃先に向って直線的に伸びている。刃の厚さは刃先部分が最も薄く0.8cm、次いで稜線の両側部分が約１cmである。刃の平面形はやや先が尖ったＵ字型である。直角に張った肩部からは、足を掛けて踏む動作が考えられる。また、この鋤の刃部の先端付近は、かろうじて、残存しているが、当初から丸味をもっていたのか、それともより角ばっていたものが、使用によって角が摩滅したものか、不明である。樹種はアカガシ属一種である。

７は、杭列畦畔ＳＫ5140の覆土内から出土した鍬の身部である。柄穴に柄が装着された状況で検出された。ただし、身部の先と末・左右の端はいずれも欠損しており、全体像を復元できなかった。しかし、柄の装着方向から推定すれば、柾目材の年輪方向が鍬の振り降ろす方向に直交する横方向のようである。

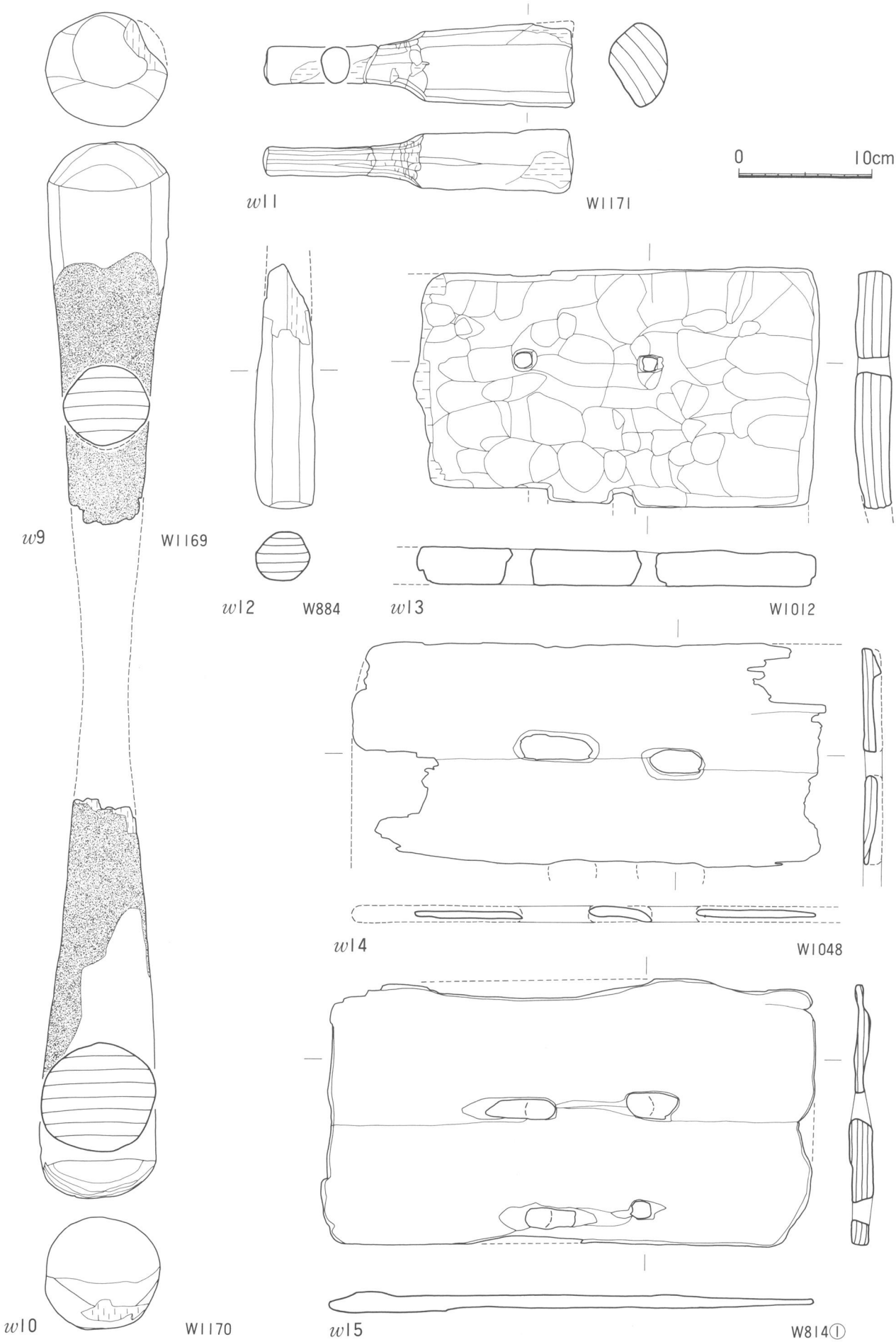
８は、杭列ＳＡ5275の約60cm南から検出された膝柄二股鍬の身部である。身部の幅は、14.2cmで、上面は刃部・軸部はともに端部が欠損している。刃部の後面は全体として平滑であるが、前面の刃部の付根の部分には、緩やかな匙状の浅い抉りがみられ、抉り部分の縁には湾曲する稜線がみられる。この部分の湾曲は、２と同様に、作製後の乾燥による可能性がある。軸部は後面が山なりに脹らんでおり、軸部と刃部の境界付近がややへこんでおり、緊縛の痕跡は観察できなかったものの、膝柄の装着に関連す



第80図　5区出土木製品実測図（1）



第81図　5区出土木製品実測図（2）



第82図　5区出土木製品実測図（3）

るものと考えられる。刃部の肩はなで肩である。刃部は欠損が激しい。７・８ともにアカガシ属一種で、柾目材である。

９・10・11は堰状遺構ＳＸ5114から出土した。９・10は竪杵である。近接して出土し、握り部分が欠損しているが、木目や加工痕の形状、さらに火を受けて焦げている状況から、同一個体の縦杵として認定した。敲打部の径は９㎝で、断面は円形である。敲打面にはやや凹んだで部分がある。樹種はアカガシ属一種で、柾目材である。

11は、全長23.35㎝の横槌である。敲打部の径は6.2㎝で、扁平な敲打面を持つ。握り部は、径２㎝で断面は、ほぼ円形である。

12は、杭列ＳＡ5446から検出された杭材に転用されていた竪杵状の木製品。敲打部の径は約４㎝で、断面はほぼ円形である。

13・14・15・16・17は柱穴から検出された礎板であるが、いずれも４穴が穿たれた平板式の横長の田下駄からの転用である。13は、ＳＰ5184から出土し、厚さ2.8㎝、爪先側の２孔間距離約9.7㎝、踵側の２孔間距離約6.6㎝を測る。14は、ＳＰ5246から出土し、厚さ0.8㎝、爪先側の２孔間距離約9.3㎝、踵側の２孔間距離約7.2㎝を測る。15は、ＳＰ5226から出土し、全長37.1㎝、幅20.1㎝、厚さ1.6㎝、爪先側の２孔間距離約9.8㎝、踵側の２孔間距離約6.8㎝を測る。16は、ＳＰ5177から出土し、推定全長35.2㎝、推定幅20.1㎝、厚さ2.1㎝、爪先側の２孔間距離約9.6㎝、踵側の２孔間距離約7.6㎝を測る。17は、ＳＰ5226から出土し、全長35.0㎝、幅20.2㎝、厚さ1.5㎝、爪先側の２孔間距離約9.8㎝、踵側の２孔間距離約7.5㎝を測る。以上の田下駄についての測定は芯芯距離である。14・15・16・17の樹種はスギである。これらの計測結果からは、爪先側と踵側のそれぞれの数値の類似性が読み取れる。また、これらの横長型の田下駄の全長・幅はともに測定値が類似している。

18・19・20は槽である。18・19は、溝状低地ＳＸ5110から出土した把手付槽である。20は、ＳＤ5283から出土した。いずれも欠損部分がほとんどで、実際の長さの復元はできなかった。わずかに片側の把手のみが、それぞれ欠損をまぬかれている。18・19の把手の長さは、前者が7.8㎝、後者が9.8㎝である。双方とも、把手の付根部分には筋状の凹みが観察でき、緊縛痕跡と考えられる。

建築材

21・22・23・24・25・26・27・28は、どれも礎板として別々の柱穴から出土した鼠返しである。礎板の接合関係についての検討作業の途中の段階での提示であるので、今後の作業によって復元の段階が進展する可能性は大きいが、中間報告として紹介したい。

21はＳＰ5095から、22はＳＰ5348から、23はＳＰ5317から、24はＳＰ5317から、25はＳＰ5345からそれぞれ出土している。ただし、23と25は接合関係25として隣接して接合することがわかり、推定全長47㎝ほどの鼠返しで、板目材である。26はＳＰ5301から左側・ＳＰ5287から右側が出土し、接合関係７として隣接して接合することがわかり、推定全長70㎝ほどの鼠返しで、板目材である。27は、ＳＰ5278から出土した３枚の礎板である。これらが、接合関係41として隣接して接合することがわかり、推定全長73㎝ほど、推定幅52㎝ほどの鼠返しで、板目材である。この鼠返しは、左右の縁の内側約２㎝から、深さ約１㎝弱のごく浅い盆状の加工が丁寧にほどこされている。さらに、台状部が削り取られている。この削

り取りの痕跡は、礎板として分割される前に行われていることが観察できた。盆状の加工痕跡とは異なり、台状部の削り取り部分の痕跡はやや大まかであり、前者は鼠返しそれ自体に属する加工であると考えられる。このような台状部の削り取りは、今回紹介した、礎板に転用された鼠返しのうち、28を除いて全てに観察できる。そこで、礎板に転用する際に、台状部を削り取ることがここでは一般的に行われていた可能性がある。28は、ＳＰ5154から出土した礎板である。鼠返しとしては長崎遺跡で出土したものとしては最大である。全長95.6㎝、推定幅約51㎝である。台状部の高さは3.5㎝、差し込まれたものが柱であるとすれば、柱のホゾは正方形の断面形に加工されていたと推定され、その１辺は13.4㎝ほどである。またホゾに連なる下位の柱の断面形状は、特定できなかったが、台上面の１辺が23㎝ほどであるので、それよりは小さいとすれば、径は20㎝前後と推定できる。板目材である。全面に、手斧による丁寧な加工痕跡が鮮明に残っている。また、台状部の隆起の造り出しが明瞭である。この鼠返しは、比較的大型にもかかわらず、礎板に転用される際に、細かく分割されていない点、また台状部の隆起を削平していない点で、前掲の礎板転用鼠返しとは異なっている。

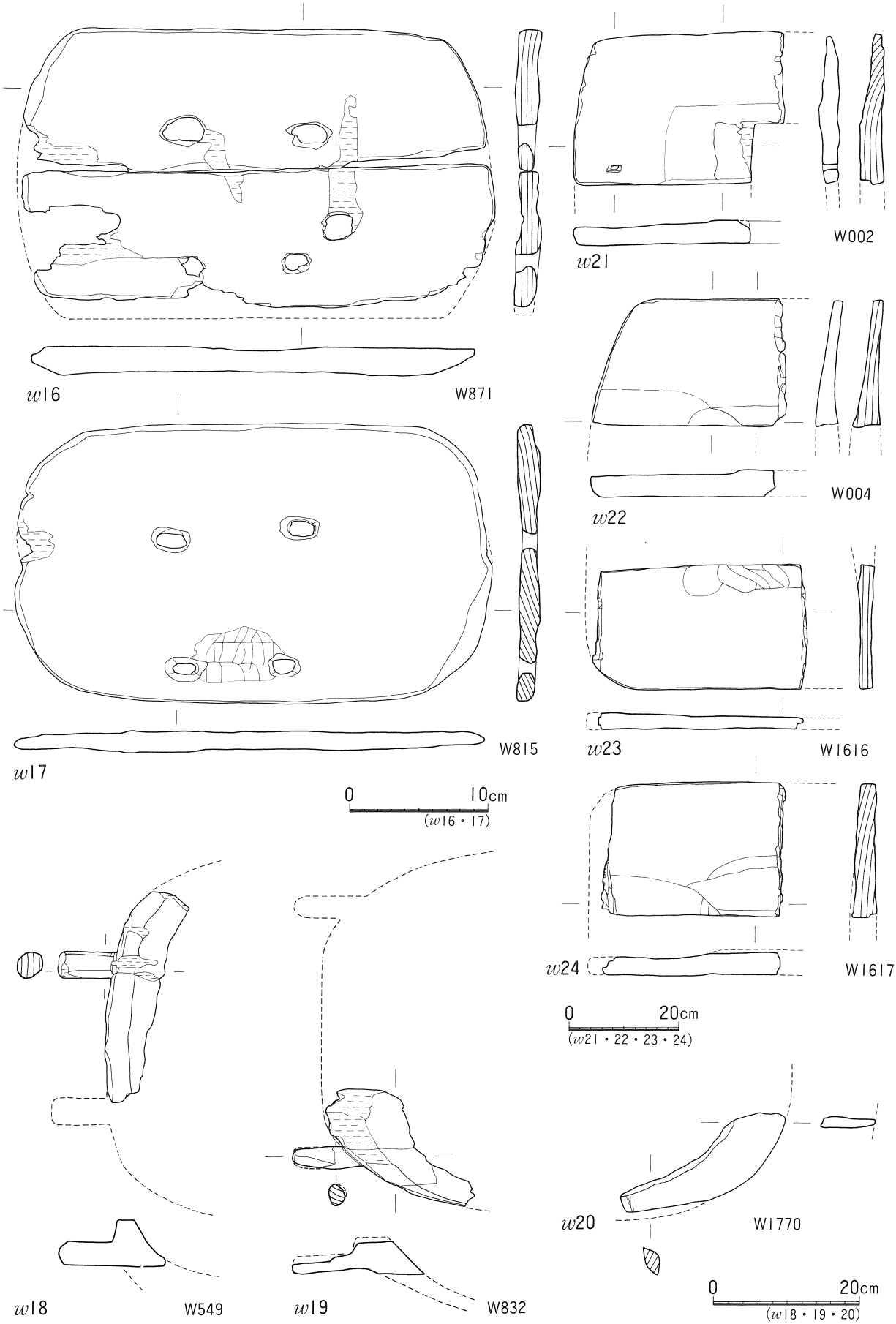
29・30・31・32・33・34・35は梯子である。29は柱穴ＳＰ5163から出土したもので、礎板に転用されていた。梯子の下端部分と推定でき、下端は二股に加工され、地面に杭を打込んでこれを二股の下端で挟み、梯子を固定したことも推定できる。幅は17.4㎝で細身である。足掛け部分の高さは3.8㎝である。柾目材である。30・31はＳＤ5108から出土した。ともに残片であり、足掛け部分の高さは３㎝ほどである。幅は、30は23.1㎝、31は8.6㎝である。ともに左右の端が欠損している。特に31は、杭に加工されたようであり、梯子材を長軸方向に割り裂き、下端部を左右から細身に加工し、打込みやすいように尖らせている。32・33・34・35はみな堰状遺構・畦畔状遺構ＳＸ5114補強材の一部と考えられる。32は幅17.8㎝、残存長116.2㎝である。足掛け部の高さは６～７㎝、それらの間隔は約30.5㎝である。下端はやや丸味を帯びて尖った形状を示している。広葉樹の芯持ち材であり、杭材に転用された後の圧密変形を受けている。33・34は近接して杭材として出土した。残存幅は、ともに８～９㎝であり、杭材として転用する際に割り裂かれたものである。また両者とも、足掛け部の段は削平されている。足掛け部の間隔は前者が約37㎝、後者が35.5㎝である。ともに板目材である。35は、これまで紹介した梯子とは形状は類似しているが、段の間隔が著しく狭く、約８～９㎝である。さらに段の高さも２～2.5㎝であり、実用の梯子とは考えにくい。さらに上端部には、鼠返しに差し込むホゾ部分もない。杭材として転用された際に、縦方向に割り裂かれている。板目材である。用途は不明であるが、祭祀に用いられた梯子の模型か、梯子とは別の用途に使われた部材かもしれない。

36・37・38・39は扉材である。いずれも柱穴の礎板として転用されたものである。現在接合関係を検討中であり、中間報告としたい。図では、36と38は別に示してあるが、接合関係の検討結果、写真図版123に示したように近接して接合する１枚の扉材である（接合関係１）。さらに38として示した材の上位にＳＰ5123のW288も接合し、高さ約243㎝、幅約74㎝の一枚板の扉材に復元できそうである。これらの分割された断片は36のW1000がＳＰ5093、38のW734・733がＳＰ5183、W726がＳＰ5157であり、写真図版123でのみ示されているW288も含めて、全て掘立柱建物群２群のＳＨ5363の柱穴からの出土である。写真図版123で説明すると、まず、上下の端部は扉として使用された当時の状態に近いと考えられる。さ

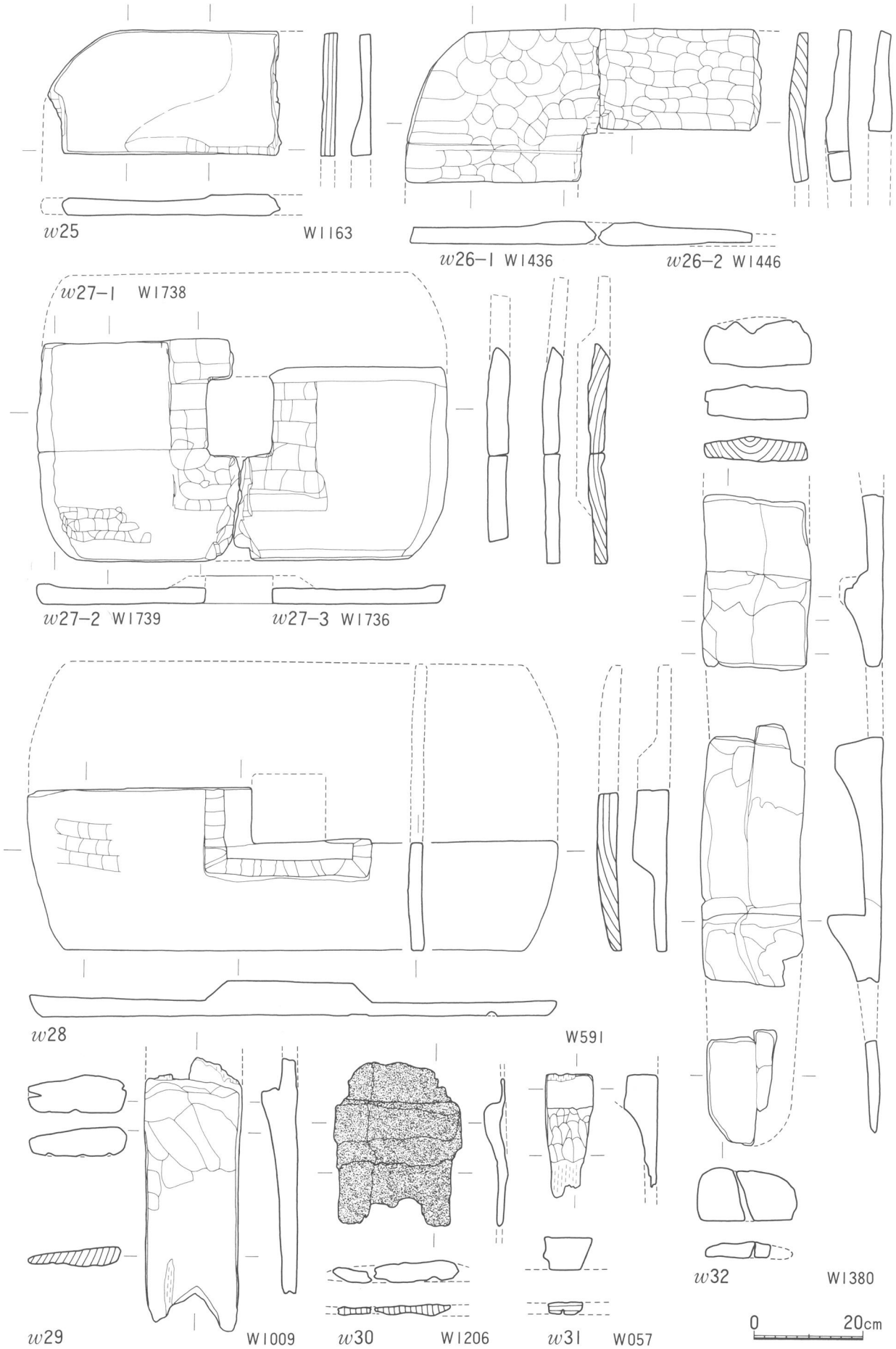
らに上端左隅には、径2.5cmの円形断面で高さ２cmの扉の回転軸が削りだされている。この回転軸は扉の大きさから考えると、やや小振りであり、扉板の厚さが約４～５cmであるので、鉄輪のような補強材がはめこまれていた可能性も考えられる。また、この回転軸の付根の右側に幅６cm、深さ２～2.5cmの切り込みが設けられている。これは、扉を設置する際に、上部の軸受けに嵌め込むときの遊びの部分と考えられる。また、扉の軸と反対側（開き口側）中央付近に、縦方向に縦７～８cm、横４～５cmの方形の穴が穿たれている。これらの間隔は約93cmである。そして、これらの２穴の中間やや下位に3.3cm×2.5cmの方形で深さ0.5cmの凹がある。これらの２穴は、いずれも扉の開き口側が穴の内側外側ともに磨耗して、断面が円形に近くなっている。そこで、これらの穴には紐が通されて、扉を固定する部材とともに、なんらかの緊縛が施され、開き口側が磨耗したのか、それとも開閉の際の手ずれによる磨耗かもしれない。なお前述の凹の機能は不明である。

39も、W276・277ともにＳＨ5363の柱穴ＳＰ5076の礎板である。これも写真図版123のように、W277の上に隣接してＳＰ5157の礎板であるW724が接合することがわかった（接合関係２）。いずれもＳＨ5363に属する柱穴の礎板である。軸が発見されなかったので、扉とは断言できない。しかし、W276の左下の穴は下の部分が欠損しているが、前述の38の扉の開き口側の穴と類似している。この穴の長さは約12cm、幅は約５cmである。また、開き口側が磨耗し、特に凹んでいる部分がありこれは、緊縛によるものかもしれない。さらに厚さが４～５cmあり、幅が約69cmある点も、38と類似した大きさを想定させうる。ここでは問題となるいくつかの点を述べたい。第１に、焦げた痕跡が接合した３断片に共通してあり、しかもこれが連続した一つの絵柄のように見えるので、この扉がまだ一枚板であった時期のものと考えてよいと思われる。しかし、なぜ火を受けたのかは不明であるが、W277の中心部に浅い半球形の凹があり、ここも焦げ痕があり、ここから左側に焦げ痕が広がっている点で、ここに火を付けて焦がしはじめた可能性がある。第２に、これらの３点の断片のいずれもが、方形に切断されたままの形ではなく、それぞれの４隅が、弧を描いて切断されている。これらは、礎板として転用される際に４隅切断されたものかどうかが問題となる。柱穴の形状に合わせて４隅切断されたかどうか検討したところ（第53図参照）、４隅切断型の礎板の形状よりもはるかに大きな柱穴の掘り方であることがわかり、かならずしも柱穴の形状との整合性はないようである。そこで、これらは礎板に転用される以前に、４隅切断型の板材としてなんらかの用途に使用された可能性が考えられる。第３に、W277の縦に割れた材を接合させるのにチキリという技法を使っていることである。ただし、この縦割れは、扉として存在していた段階でのものではないことは、その上に隣接するW724に縦割れが入っていないことからもわかる。そこで、この縦割れは、切断した段階以降にでき、したがってチキリもそれ以降に作られたことがわかる。

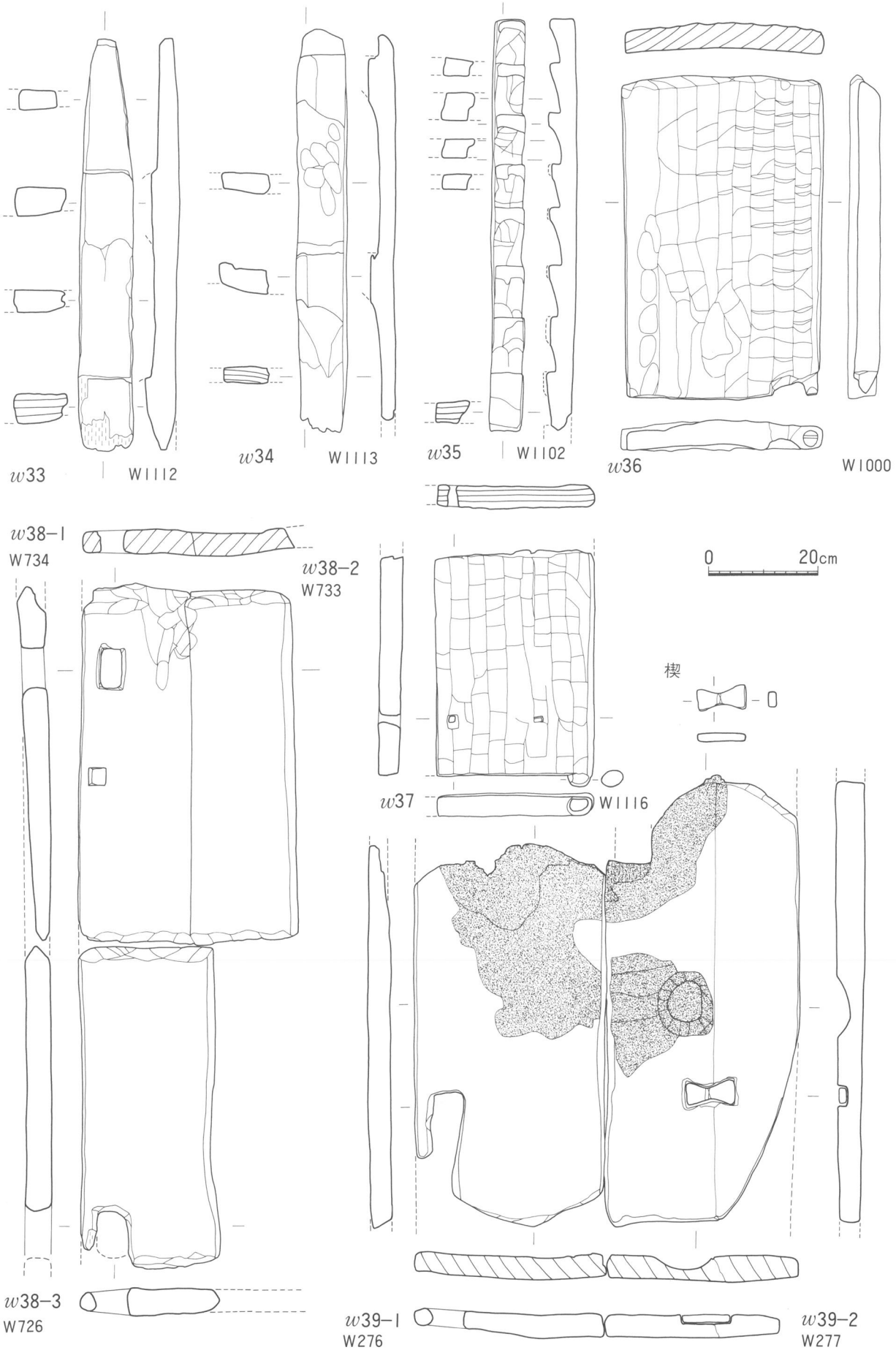
37は、ＳＰ5265に属する礎板W1116である。その後の検討により、写真図版123のように、ＳＰ5253のW855やＳＰ5294のW1613とも接合関係26で接合することがわかった。厚さは約４cmである。ここで、着目すべき点は、第１に、回転軸の径は約3.6cm、高さ約2.3cmであり、36と類似した大きさであることがわかるが、回転軸付近に36のような抉り部分はない。そこで、扉の下端部分である可能性が考えられる。第２に、回転軸のあるW855は、横に隣接するW1613と、長さ約2.4cm、幅約2.1cmの小穴に対応する位置に穿たれた小穴が、植物繊維によって緊縛され、縦に割れた扉材の接合をこれによって行ったことがわ



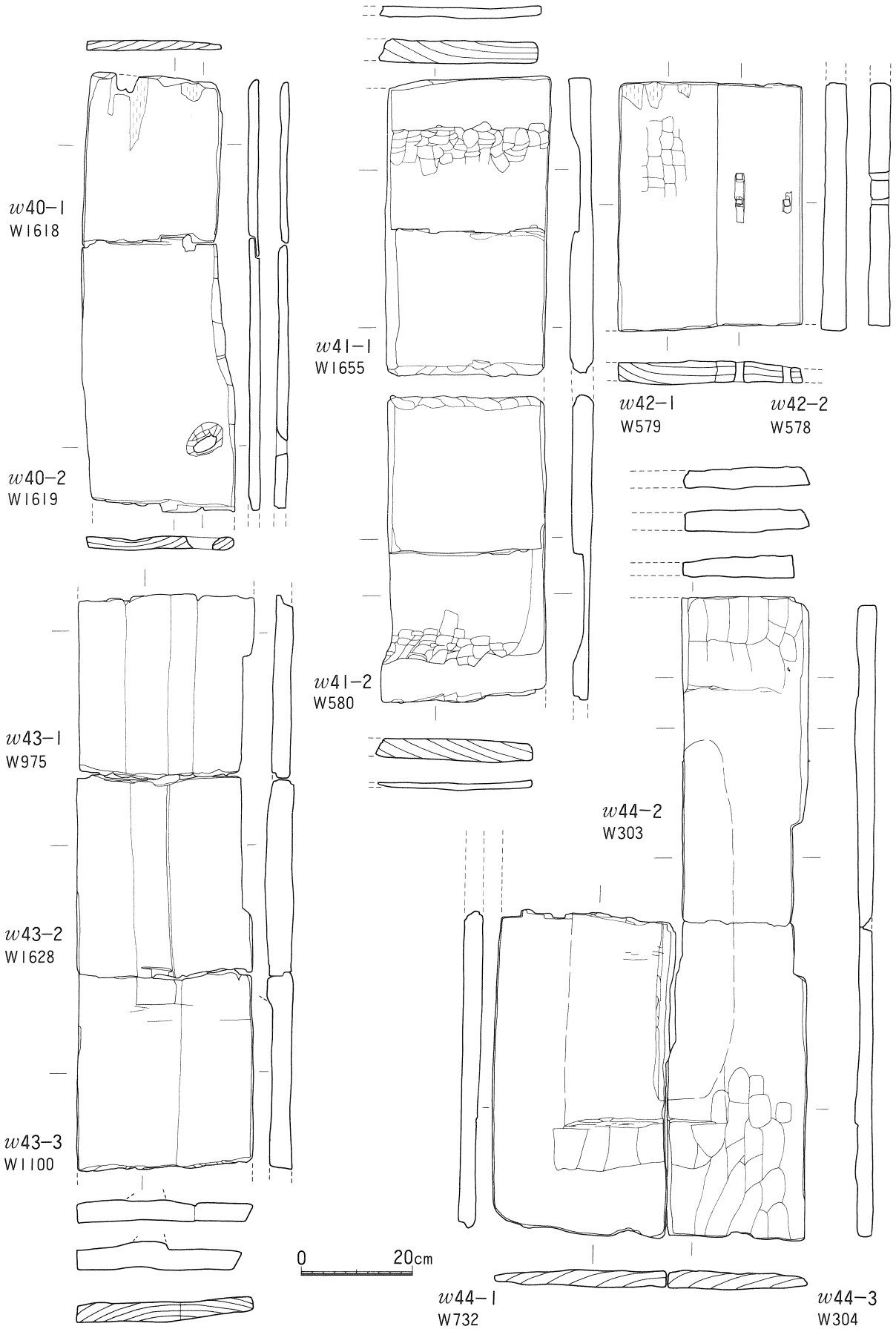
第83図　5区出土木製品実測図（4）



第84図　5区出土木製品実測図（5）



第85図　5区出土木製品実測図（6）



第86図　5区出土木製品実測図（7）

かる。このような小穴は、W1116でも２個所、検出され、これらの３穴の間隔はほぼ均等である。

以上のような礎板の接合関係は、以下の40～44に、さらに写真図版の右下の事例でも観察できた。40は、接合関係27で、図の上からW1619・1618がＳＰ5318から出土し、さらにその下に堰状遺構ＳＸ5114から検出されたW1379が接合することがわかっている。43は、接合関係29で、図の上からW975がＳＰ5244、W1628がＳＰ5309、W1100がＳＰ5276からの出土である。W1628に特徴的にうかがえる隆起から、掘立柱建物の入り口の扉の振れ止めと考えられる。41は、接合関係24で、図の上からW1655がＳＰ5322、W580がＳＰ5186からの出土である。42は、接合関係23で、図の左からW579・578で、ともにＳＰ5199の出土である。これもこの上にＳＰ5152のW1161と接合する。44は接合関係３で、図の右のW303・304がＳＰ5113から、左のW732がＳＰ5183からの出土である。写真図版123の右下の事例は、接合関係18で、下からW901がＳＰ5213、上右のW889がＳＰ5185、上左のW1183がＳＰ5247からの出土である。以上のように礎板の接合関係ついて、途中経過を報告したが、現在なお作業途上にあり、今回報告したものは、それらの一部にすぎない。現在、接合関係を検討する際に、樹種・木取り・年輪幅・年輪の形状・接合面の形状（切断痕・割れ・割れや切断の後での整形や劣化や腐食）・形状・サイズ（幅・厚さ・長さ）・表面調整痕（加工痕）・残存状態（劣化度）等の各項目によって行っている。用途は不明のものが多いが、今回特筆できるのは、36～39で示した大型の扉材の発見である。弥生後期の段階での掘立柱建物に付属すると考えられる扉材としては規模の大きさに目をみはるものがあり、今後の同時代の掘立柱建物についての新たな知見をもたらしたものと考えられる。

その他の部材・容器類

45・46・47は杭材であるが、いずれも木栓の差し込みやホゾ穴が観察できる部材を転用したものである。45は、杭列ＳＡ5448から、46は、杭列畦畔ＳＫ553から出土した。45は、１辺約1.5㎝の方形の断面で長さ約7.5㎝の木栓、46は、径約1.4㎝の円形の断面で長さ約５㎝の木栓が穴に嵌め込まていた。47は、ＳＫ5106から出土した。幅約2.5㎝長さ約6.5㎝の方形の断面のホゾ穴が穿たれているが、ここで注目できるのはこの長軸方向に直交して、ほぼ同じ断面形・サイズのホゾ材の受け部が深さ約1.2㎝で彫り込まれていることである。この細工の機能としては、ホゾにさらに穴を設け、この穴に差し込まれた部材が前述のホゾ受けに嵌まり込めば、ホゾ材の固定に役立つと考えられる。

48は溝状低地ＳＸ5110から出土した用途不明の棒状の遺物である。棒は、およそ６角形に面取りされ、下端部から９㎝いったところで、半径約４㎝の半円形で厚みが約1.3㎝ほどの作り出し部分がついている。49は、Ｉ５グリッドから出土した漆の残片がある加工木片である。標高1.88ｍの掘立柱建物柱穴検出面を含む整地層からの出土である。50は、ＳＤ5336から出土した用途不明の板材である。割れた部分の近くに小穴が対照して穿たれている。おそらく紐を通して緊縛したものと考えられる。ただし、この割れを対称軸にすれば、左右の上片の切り込みが重なり、これがなんらかの用途と関連していると思われる。51は、ＳＸ5110から出土した椅子である。幅約33㎝、奥行21.5㎝で中央部分が緩やかに凹み、高さ約12.6㎝を測る。脚の一方は欠損している。

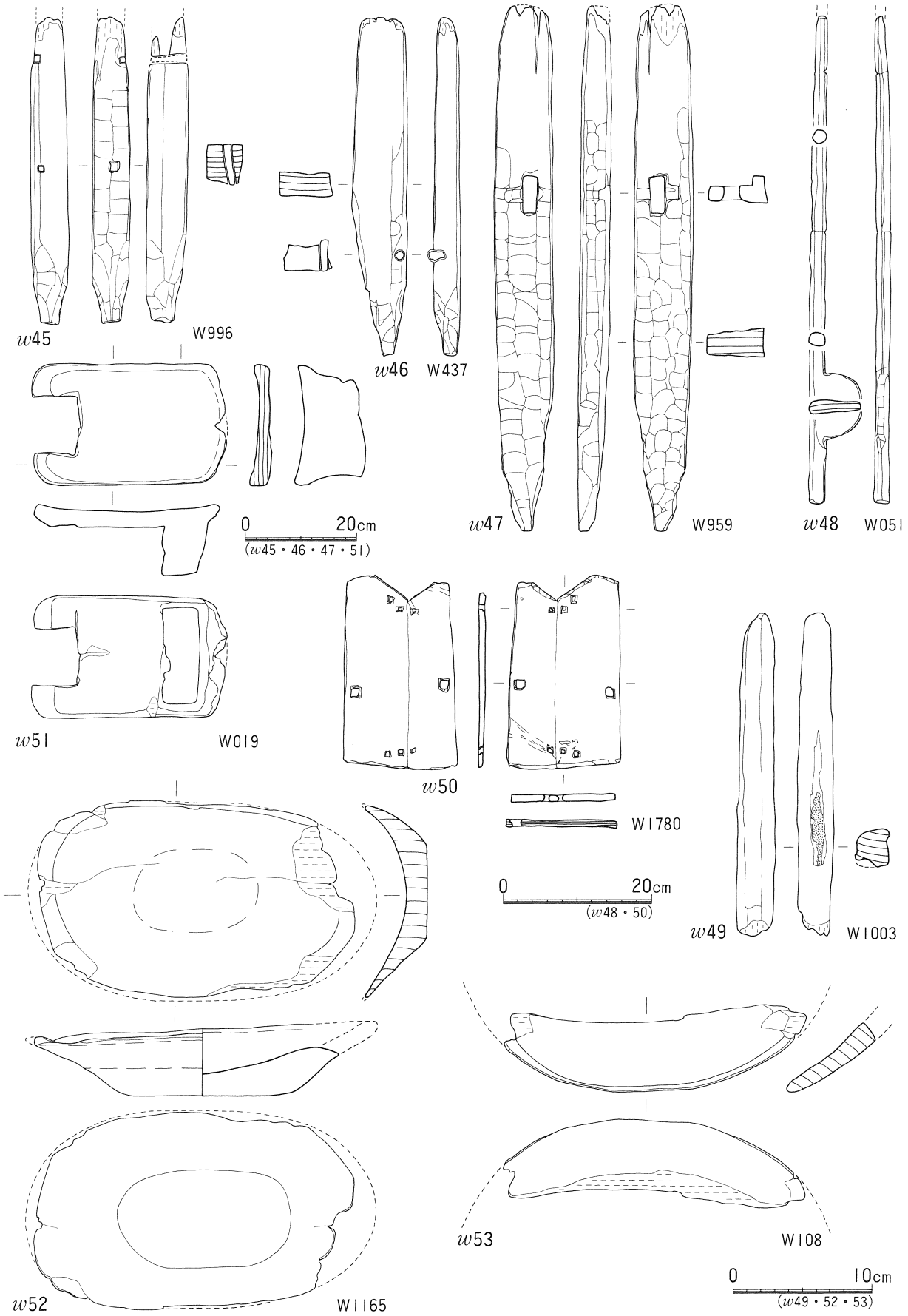
52～56、60～62は容器である。52・53・60・61・62はいずれもＳＸ5110からの出土である。54・56はＳＸ5248から、55はＳＤ5336の出土である。52は推定長径24.8㎝、推定短径14.1㎝、推定深さ4.5㎝。54

は推定長径24.1cm、短径11.8cm、深さ5.1cm。55は推定長径27.1cm、推定短径16.2cm、推定深さ5.7cm。これらは、みな楕円形の容器であり、類似した形態である。ただし、62のみは、長径約23cm、推定短径約20.4cm、高さ5.5cmのほぼ方形の容器である。

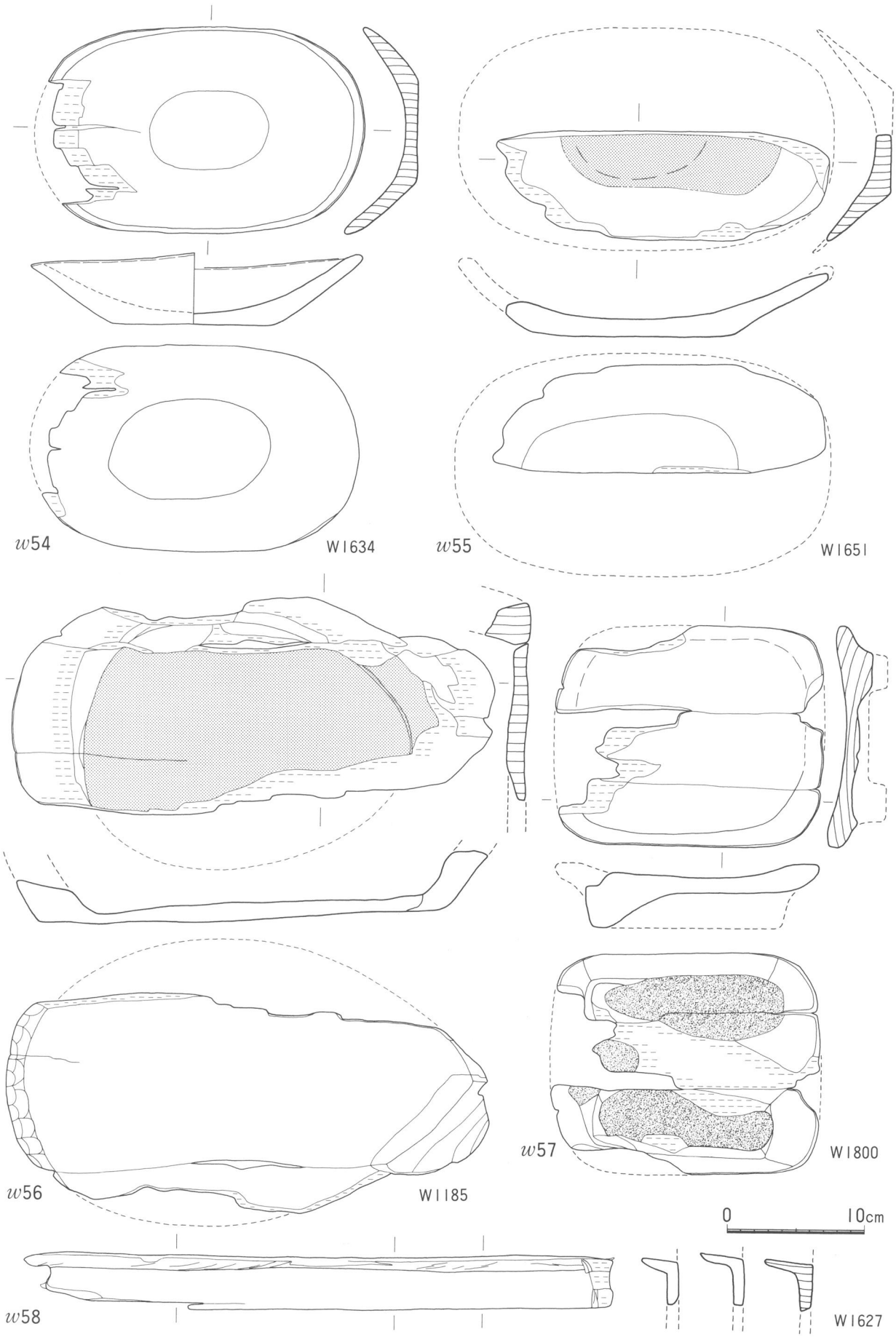
57は、出土地点は不明であるが、浅い皿状の台の下に脚が２本作り出されている。台の長径20cm、短径16.1cm、深さ1.1cmで、全体の高さは4.7cmである。

58は、用途不明の部材である。方形の器の一部の可能性もある。

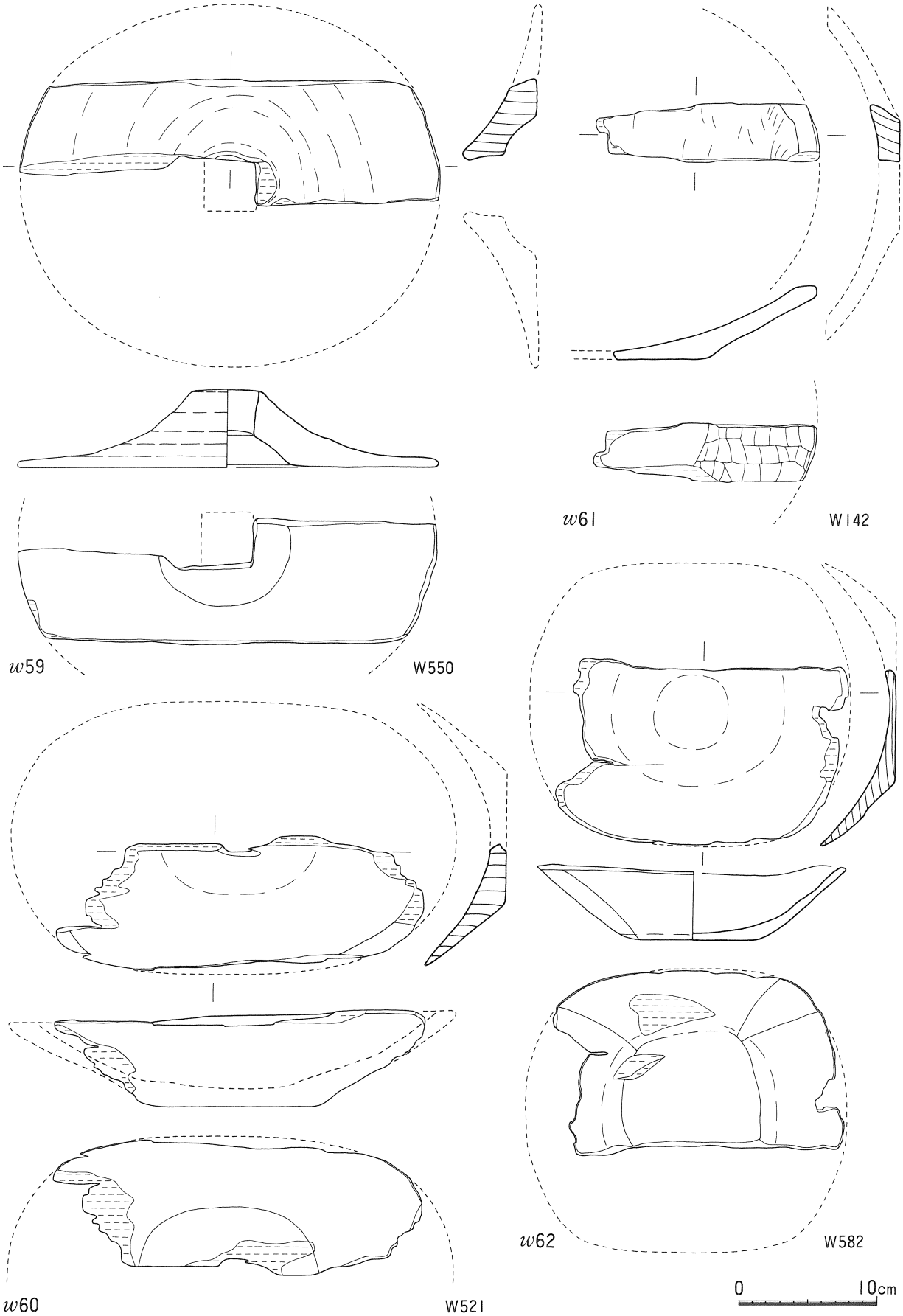
59は、ＳＸ5110から出土した高杯脚部である。脚部の高さは5.6cmである。裾部の径は約30cmである。



第87図　5区出土木製品実測図（8）



第88図　5区出土木製品実測図（9）



第89図　5区出土木製品実測図（10）

第Ⅳ章　6区の遺構と遺物

第1節　遺構

6区は近世以降近代（大正元年に改修）まで、巴川が調査区全体を貫流していた。また、この旧巴川の下部には、平均で海抜4mから1.5mのレベルで、有度山系の砂礫層の押し出しによって、埋没した河川が認められた。

この有度山系の堆積物は、草薙川系と考えられ、巴川を北側に押しだしたものと推定される。

調査は、これらの河川堆積物である粘土、砂礫層を除去した段階から開始した。

この堆積物を除去した段階においても調査区西側と北東において、河川の両岸が検出された。一方調査区の2／3以上が、弥生から古墳時代の河川活動によって凹地となっており、その凹地が除々に陸化（湿地化）する過程に水田が営まれていた。

いずれにせよ、6区は活発な河川活動とそれに関する人々の営みが認められた調査区であった。

6区の調査によって検出された微地形は、1～5区と大きく異なっている。これを説明するため土層について述べることとする。土層については1～5区に連続する部分は、北東隅にみられた。この土層はほぼ海抜0.5mで灰色シルト層が認められ、5区西側で海抜1.3m～1.2mで同じ灰色シルト層（『長崎遺跡Ⅰ』でG層群と呼称）が認められたことにより、5区から6区にかけて大きく傾斜をみせており、それより上位に『長崎遺跡Ⅰ』でE層群と呼称した層の堆積が認められた。この泥炭層のうち、暗茶褐色泥炭層からは大沢スコリア・カワゴ平軽石が厚さ1～2㎝で層状に連続して認められ、地形の傾斜にそって堆積したプライマリーな状態と判断された。また、このE層群とG層群の間に『長崎遺跡Ⅰ』でF層群と呼称した層に対応する泥炭や粘土層が堆積しているが、5区との間に微地形や分解過程の違いによって、色調等に違いをみせている。これはまた、陸地化の違いとも考えられる。6区南西隅では灰色シルト（砂質分が多い）が共通するほか、それより調査区の大半を占めるこれ以外の西側では1～5区まで共通して認められたDⅠ層・DⅡ層が部分的に残り、それ以外河川堆積物である土層が認められた。

調査は－0.5mまで掘り下げたが、0m以下で下部砂礫層と呼称した河川堆積層の上に細砂層やシルト層が堆積していく過程において、SR635の河道が貫流していた。この河道の上部には略完形の土器が検出されていること、またこれらの河川を埋めた堆積土中から土器、木製品が検出されている。埋まっていく過程の低地と化した河道内にも何らかの生活行為が営まれたと推定される。この河道上部に安定した粘土層が形成されると、護岸杭列の畦畔をもった水田が営まれている。この水田も畦畔の作り替えが行われているが、一部が洪水堆積層によって破壊されており、結局のところ河川によって廃棄されたと推定されよう。

一方、微高地部分に南北にいれた第6トレンチの断面によれば、SR601と呼称した河道が新しくなるにつれ北側へ流路移動し、それより南側の微高地上に掘立柱建物などが建てられていたことになる。また、SR601からは微高地上出土の土器と接合できる土器が河道内から認められ、微高地上に生活が営ま

れた同じ時期にＳＲ601が貫流しており、むしろ河岸と呼べる位置にあったと考えられる。また、この微高地を海抜0.6ｍまで掘りさげたが、微高地の南側には徐々に砂層、砂と粘土の互層、砂混じり粘土層、砂質シルト層、粘土層が堆積している。これらの層の堆積によって自然堤防が形成され微高地と化したものと判断される。

他方、河道部分は河川活動によって浸食を受け、さらに低地部分の拡大が進行し微高地との高低差が顕著になった。いいかえれば、６区西側の地形は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、同じ河川活動によって、河道の縁辺部では堆積作用のためますます微高地化が進行し、河道部分では浸食作用によって低地化された、といえよう。最後に全体として、何回かの河川堆積によって河道も微高地も同時に埋没したと考えられる。

１．弥生中期の遺構

ＳＲ601（河道）

河道ＳＲ601は調査区の中央部幅60～55ｍ、長さ45～30ｍを測り、河床海抜－0.5ｍまで調査した。

ＳＲ601は海抜－0.5ｍ以下が無遺物層であったため、それより下部まで調査を行なわなかったが、堆積土の観察や西南の微高地の形成の在り方、河床に形成された凹地地形から考え、一時期の河道とは考えられない。

弥生中期遺物集中箇所

ＳＲ601中、Ｃ３グリッドを中心とする地点で弥生中期の遺物が検出された。検出されたレベルは、海抜０ｍから－0.3ｍを測り、下部礫層と呼んだ有度山系の押しだしと考えられる土層より検出された。礫層のレベルをみると、わずかに北東から南西にむかって下がっており、こうした下部礫層の凹地から検出されたことになる。また、遺物を覆っている土層も下部砂礫層であるが、それより上部では、巴川系の堆積物と考えられる粘土と砂の互層が続いていた。

壺・台付甕・大形甕のほか、高杯・鋤等の木製品が出土した。土器については完形品が多く、正位置で置かれたものが横転した状況のものと考えられる、ただし大形甕と木製品など破損したものがあって、なんらかの意図で置いたか、あるいは廃棄したかの判断はできなかった。

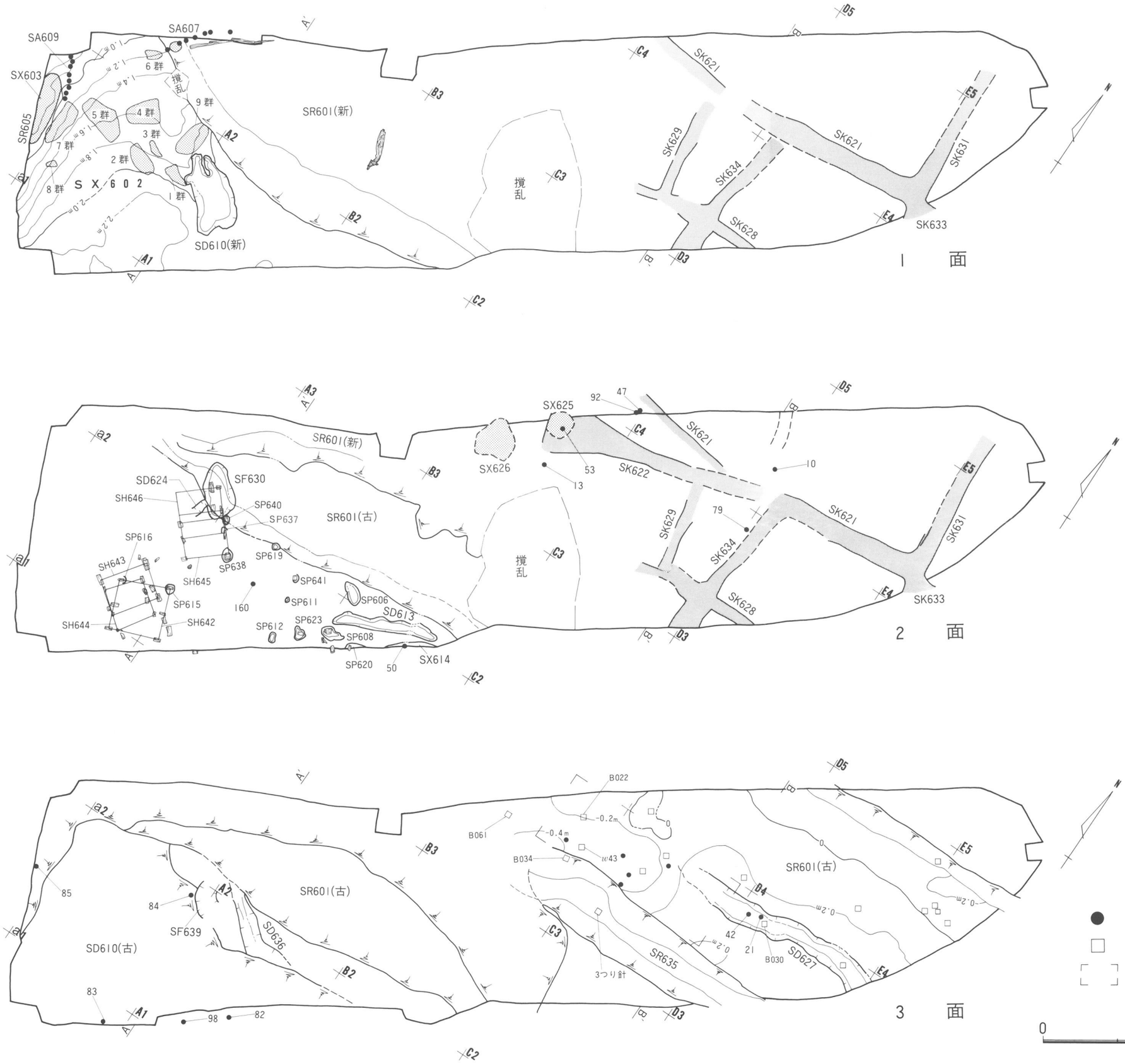
２．弥生後期の遺構

ＳＲ635（河道）

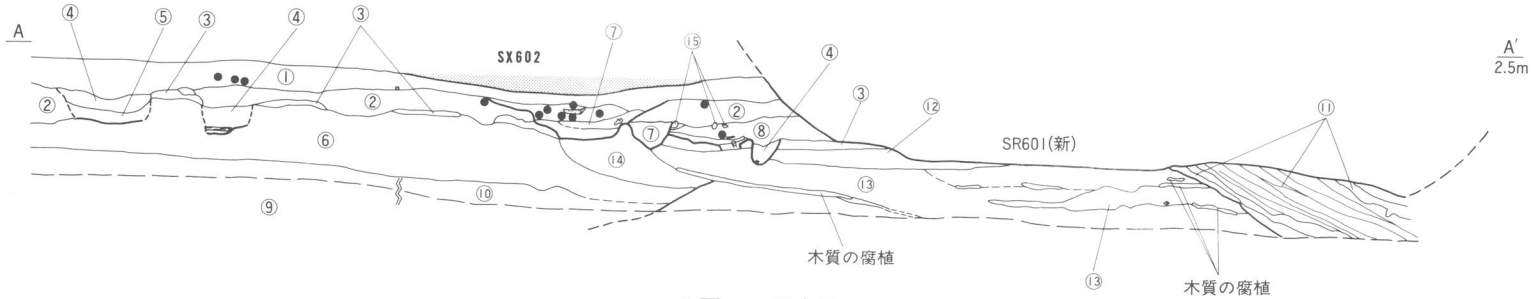
Ｃ３・Ｄ３グリッドに位置し、長さ10ｍ、幅４ｍ、深さ0.6ｍを測る。この河道は、もともと、ＳＲ601（古）と呼称した弥生中期後半以前の大きな河道内にあって、凹地となった微地形が除々に粘土・砂礫等によって埋没していく過程で貫流していたことになろう。このＳＲ601（古）ほど大きな河道ではないが、ＳＲ635か、それ以下の規模の河道が貫流しやすい状況にあったわけである。ＳＲ635と一括した河道も、土層断面をみると少なくとも３回にわたって流路が変更されたと判断される。もっとも下層の河道は河床の標高０ｍであり、暗黒灰色粘土を覆土としており、旧巴川系の河川堆積物と考えられる。

河道の肩部から弥生後期前半の土器が出土している。また、ＳＲ635の新しい河道は幅３ｍ、深さ0.5～0.4ｍを測る。覆土は下層で砂礫が堆積し、その後、粘土層が堆積し、河道としての役割を終えている。

また、ＳＲ635の形状や覆土の堆積状況からすれば、河道（支流）として、人工的に何らかの機能をもっ

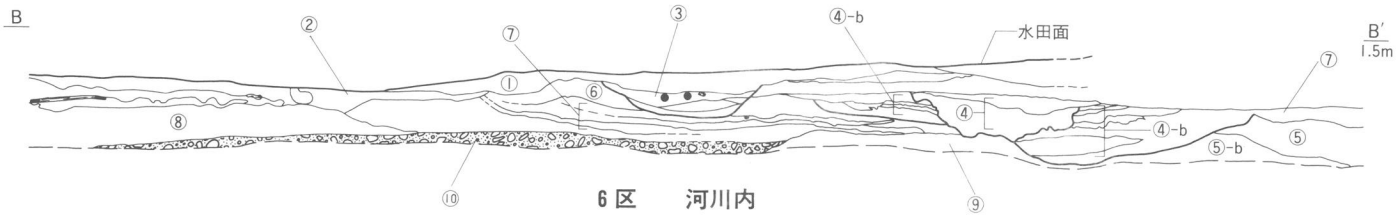

SA609
SA607
SX603
SR605
SX602
1群
2群
3群
4群
5群
6群
7群
8群
9群
撹乱
SR601(新)
SD610(新)
SK621
SK629
SK634
SK628
SK631
SK633
1 面
SX625
SX626
SK622
SR601(古)
SD624
SF630
SH646
SP640
SP637
SP616
SH643
SP638
SP619
SH645
SP641
SP615
SP611
SP606
SD613
SH644
SH642
SP612
SP623
SP608
SP620
SX614
2 面
SD610(古)
SF639
SD636
SR635
SD627
B022
B061
B034
B030
3つり針
3 面
土器
その他(木・骨・石・金属)
弥生中期遺物出土箇所
0
10m

第90図　6区全体図



6区　微高地

①DⅡa層(白色粒子と炭化物を含む)
②DⅡb層
③青緑色粘土層
④柱穴埋土(淡青褐色粘土)
⑤柱穴埋土(淡青灰色粘土)
⑥SD610(古)・緑青灰色粘土層
⑦SD610(新)覆土
⑧SF639覆土(暗茶褐色泥層)
⑨淡黒灰色粘土層
⑩暗青灰色粘土層
⑪SR601(新)覆土(青灰色砂と茶灰色粘土の互層)
⑫SR601(古)覆土(暗青灰色粘土層)
⑬SR601(古)覆土(暗青灰色砂質粘土層)
⑭淡黒褐色粘土層
⑮青緑色粘土ブロック



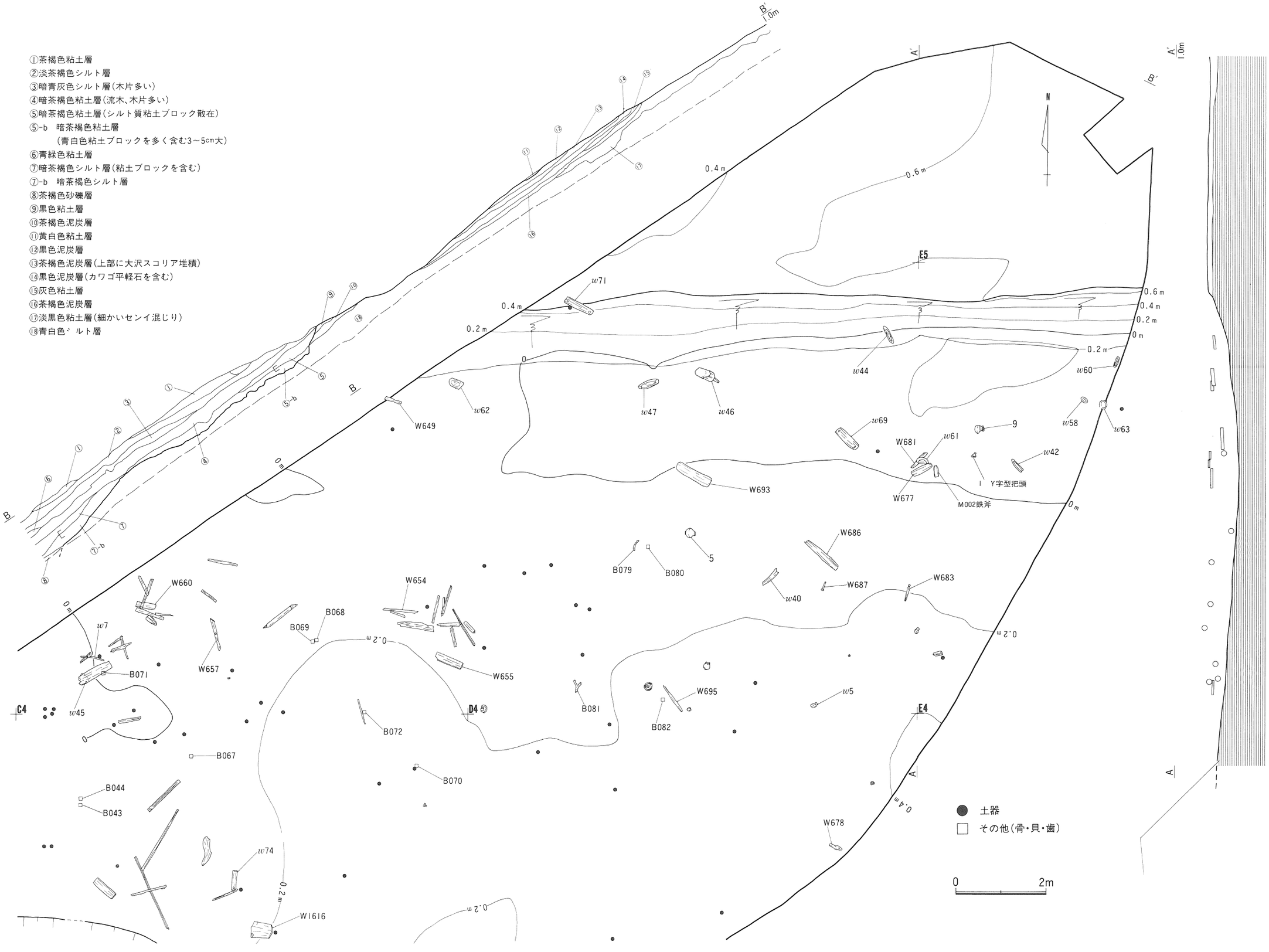
6区　河川内

①DⅡ層　水田耕作土
②DⅡb層
③SD627覆土
④SR635覆土
④-b　SR635覆土
⑤暗青灰色細砂層
⑤-b　暗青灰色細砂層(上層より砂の粒径大)
⑥暗茶褐色粘土層
⑦青灰色砂礫層
⑧青緑色粘土層
⑨暗灰色シルト層
⑩下部茶褐色砂礫層

0　2m

第91図　6区土層図

第92図　6区弥生中期遺物集中箇所実測図



第93図　6区河道ＳＲ601（古）実測図

第94図　6区溝状遺構ＳＤ627実測図

た溝状遺構とは区別できるのではないかと考えられる。

溝状遺構

ＳＤ627（溝状遺構）

Ｃ３・Ｃ４グリッドにおいて、長さ14m、幅1.5～1.3m、深さは最も良好な部分で0.2～0.1mを測る。西側の壁面は浅くなっており、端部はつかめなかったが、遺物の出土状態によって、西端についても溝状遺構の範囲を推定できた。西端部は浅くなって終っている。東南部は調査区外に延びている。

土層は６区水田面と考えた茶褐色粘土で覆われており、河川堆積物と考える青灰色細砂礫層を覆土としている。また、ＳＲ635よりは新しい遺構と考えられる。

遺物は壺形土器を中心とする破損した土器が多いがそのほか、加工木片、獣骨、モモの核が出土した。獣骨のうち、猪の肩胛骨を加工した卜骨１点があるが、そのほか加工された骨製品はみられず、カツオのエラ・マダイの前頭骨、イノシシ・シカ等の骨格の一部であった。おそらく、解体し食され、部分的に加工されたものの一部であり、土器を廃棄した際、混入したと考えられる。

一方、土器の廃棄の在り方は、ＳＤ627の中央部に密集しており、概して周辺部では粗いという違いがみられた。しかしながら、接合関係では西端部の土器片と中央部の密集部分の土器片の接合が認められたので、同時期の一括廃棄と考えられよう。

おそらく、ＳＤ627は一般的な用・排水の機能を考えるよりも、何等かの祭祀行為によって別の場所で食されたものを容器とともに廃棄したあるいは容器を廃棄し埋めたものと考えたい遺構である。

ＳＦ639

Ａ２グリッドから検出され、両端部を柱穴と溝状遺構によって切られている。土層断面からこのＳＦ639の覆土をＳＨ645、ＳＨ646の柱穴が掘削しており、掘立柱建物以前と考えられる。中央部から壺、甕等の破片がある程度まとまって出土した。

３．弥生後期から古墳前期の遺構

掘立柱建物跡

６区から検出された掘立柱建物跡は、ＳＲ601の西岸に位置し、ＤⅡ層中から検出された。掘立柱建物跡はおもに３箇所に集中していたが、南側については未調査区に入っており、建物全体が判明する部分は、ａ１グリッド、Ａ１とａ１グリッドの境界付近の２ヶ所であった。しかしながら土層断面の観察によっても柱穴が観察できないものも多く、残念ながら礎板が調査中に露出し発見されるケースが多かった。その要因としては、掘立柱建物跡が営まれた微高地が、ＳＲ601の洪水堆積物である土壌から成立し、土層全体が強グライ化されていたこと、さらに調査区の調査員が実測作業に廻っており、柱穴検出作業に常時立ち会うことができず、礎板検出面まで掘り下げたところで、それが礎板であると確認されたため、柱穴が不明確となり、礎板のみが検出された。そのため５区や４Ｂ区ではこの教訓を生かし、柱穴の精査には十分配慮することとなった。

上層に古墳時代の土器集中箇所が認められたが、微高地南北土層断面で図示したように無遺物層が続き、それ以下で掘立柱建物跡が認められたことにより、時期的にそれより以前という大きな目安が認められた。

ＳＨ642

ａ１とＡ１グリッドの境界で検出された。北東ではＳＰ615は長径0.65ｍ短径0.6ｍ深さ0.15ｍを測る円形の柱穴である。底面に長さ40㎝幅22㎝の割材の礎板が埋められていた。ＤⅡ層から検出されたが、覆土はグライ化の進んだＤⅡ層とよく似た土で、識別が困難であった。礎板の上面は1.49ｍを測る。北西ではＳＰ616と呼称した柱穴が試掘坑の底面から検出され、柱穴の痕跡が残っていた。ピットの規模は不明であったが、礎板は長さ30㎝幅15㎝で、上面のレベルは1.52ｍを測った。このほか礎板のみ検出されたものは長さ40㎝前後幅20㎝前後、礎板上面のレベルも1.5ｍ前後とほぼ一致する。また想定される建物に対し、礎板の長辺を東西に揃えるなど共通していた。なお建物の方位がＮ22°Ｗで、東西3.4ｍ南北3.5ｍ１間×２間の掘立柱建物跡と推定される。

ＳＨ643

ａ１グリッドから検出され、柱穴は明確ではなかった。礎板はいずれも長さ80㎝～50㎝幅30㎝～25㎝大の大形の割材と長さ55㎝～25㎝幅30㎝から20㎝大のやや小形の割材を２枚組み合わせているが、さらに隙間を埋め、安定のため細かい割材を根固めのため挟みこんでいるものもあった。また南西隅の礎板は実測作業終了後の掘り下げ作業中、検出されたもので、推定位置を示した。礎板面のレベルは1.29ｍから1.16ｍであった。礎板から建物の方位はＮ55°Ｗで、東西2.4ｍ南北3.3ｍの１間×１間の掘立柱建物跡と推定される。

ＳＨ644

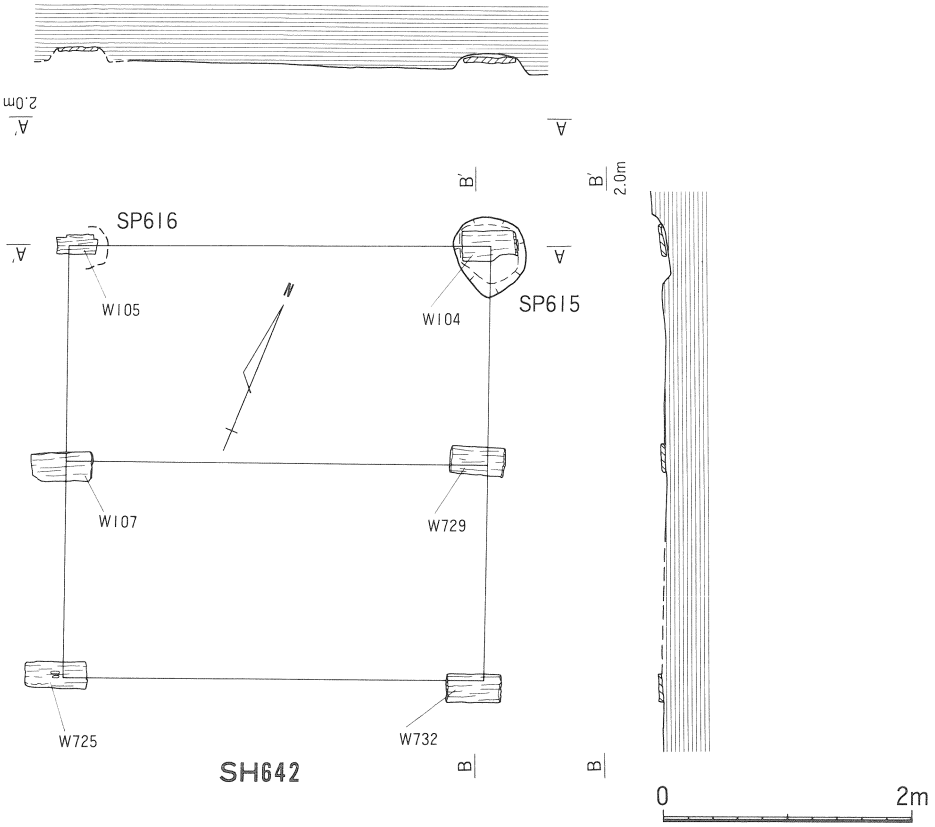
ａ１グリッドから検出されたが、柱穴は明確ではなかった。建物推定範囲はＳＨ643と重複しており、主軸方位も一致しており、建て直されたものと推定された。礎板は長さ42㎝～25㎝幅20㎝～12㎝の割材１枚を使用していた。礎板面のレベルは1.53ｍ～1.44ｍであった。礎板から推定される掘立柱建物跡の方位はＮ48°Ｗで、東西2.8ｍ南北2.8ｍの１間×１間掘立柱建物跡と推定される。この建物付近が河川の氾濫を受けやすく、旧表土の堆積が時間的経過を示すとすれば、ＳＨ632が最も新しく、ＳＨ643がＳＨ644より古い時期のものともいえよう。これらＳＨ632、ＳＨ643、ＳＨ644の範囲にはそれ以外の礎板が認められるが、つぎつぎと建て直されたこと以外、建物規模と組み合わせの判明するものではなかった。

ＳＨ645

Ａ１とａ１グリッドの境界付近から検出された。北東では長径0.6ｍ短径0.55ｍを測る柱穴に長さ50㎝幅27㎝の礎板を据え、南東では長径0.9ｍ短径0.68ｍの柱穴に長さ45㎝幅27㎝の礎板を据えていた。西側では柱穴は検出できず、北西では長さ43㎝幅30ｍ、南西では長さ40㎝幅25㎝の礎板が検出された。礎板検出面のレベルは1.3ｍから1.2ｍであった。掘立柱建物跡の方位はＮ41°Ｗで、南北2.5ｍ東西3ｍを測る１間×１間の構造と推定される。

ＳＨ646

Ａ１とａ１グリッドの境界付近から検出された。北東では長さ1.9ｍ幅0.95ｍを測るＳＦ630が検出されたが、底面より礎板４枚が検出され、いくつかの柱穴の重複と考えられた。両者の建物跡は短期間に建て替えられたと思われ、覆土に違いは認められず、ＳＦ630内の礎板のレベルにも変化は少なく、前後関係は不明であった。礎板は25㎝大の正方形を呈するものであった。南東の柱穴は第６トレンチで南端



第95図　6区掘立柱建物ＳＨ642実測図

を破壊したが、断面にも柱穴が確認できた。それによるとＳＨ645より新しく建て替えられたと判断される。礎板は長さ55cm幅18cmを測る。北東の礎板は実測作業後発見されたもので、鼠返しを転用したものであった。南西の礎板は長さ42cm幅28cmを測った。礎板の検出レベルは1m前後であった。掘立柱建物跡の方位はN42°Wで、東西2.8m南北3.2mの１間×２間と推定される。ＳＨ645、ＳＨ646周辺には組み合わせと規模の不明な礎板があって、つぎつぎに建て替えられたと推定される。

ピット群他

ＳＰ608

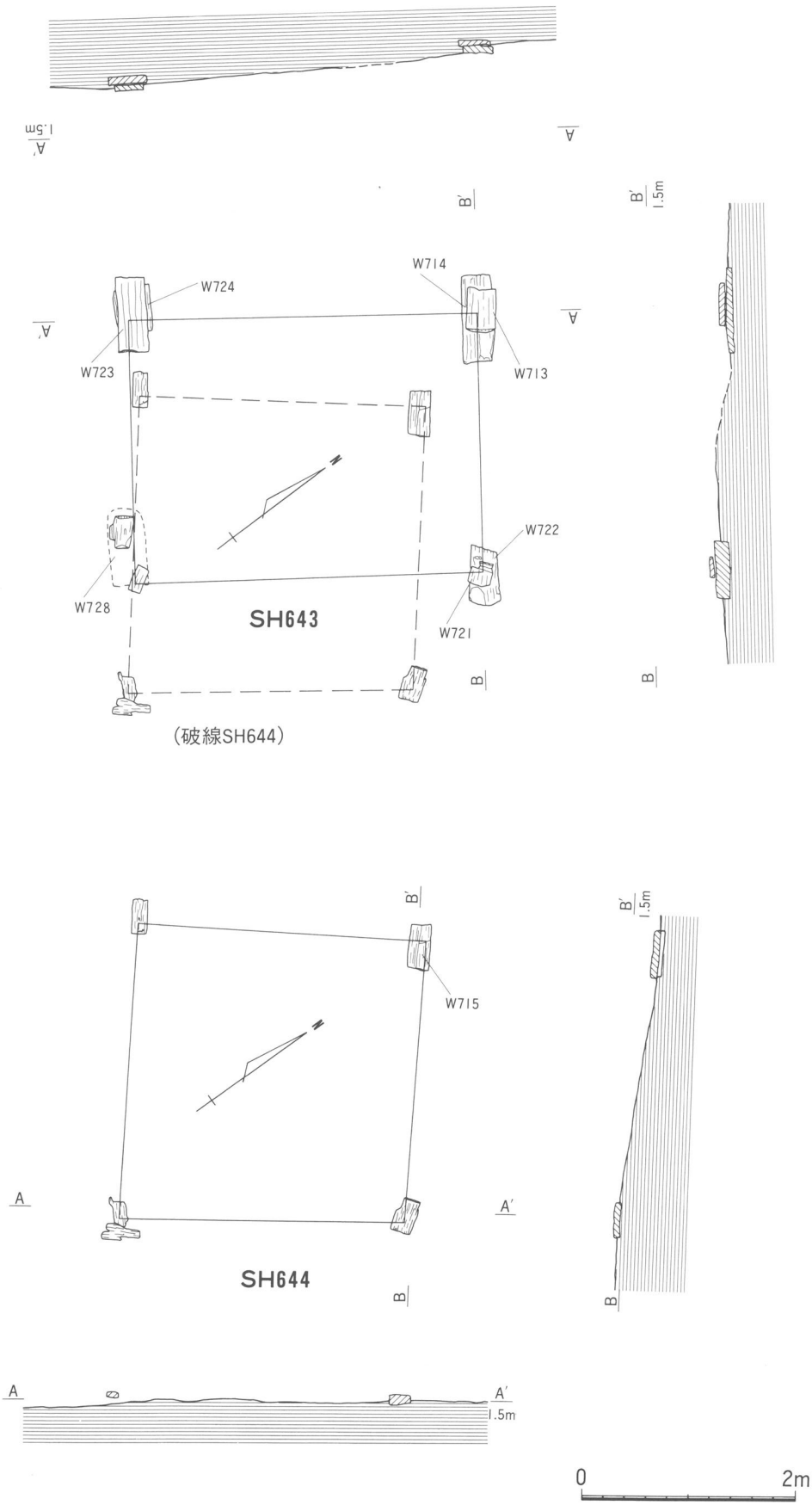
このほか柱穴に礎板を伴いながら、柱穴の組み合わせが不明瞭で建物の規模や方位の判断できない例がある。ＳＰ608もその例である。ＤⅡ層より検出され長径1.5m短径0.9m深さ0.2mを測る不定形のピットである。覆土はグライ化の進んだＤⅡ層とよく似た土で、不定形の形状から東側から柱抜き取りのため、抜き取り穴を掘削したことが推定できるが、覆土からは判断できなかった。礎板は２枚重ねで、礎板上面のレベルは1.2mであった。

ＳＸ614

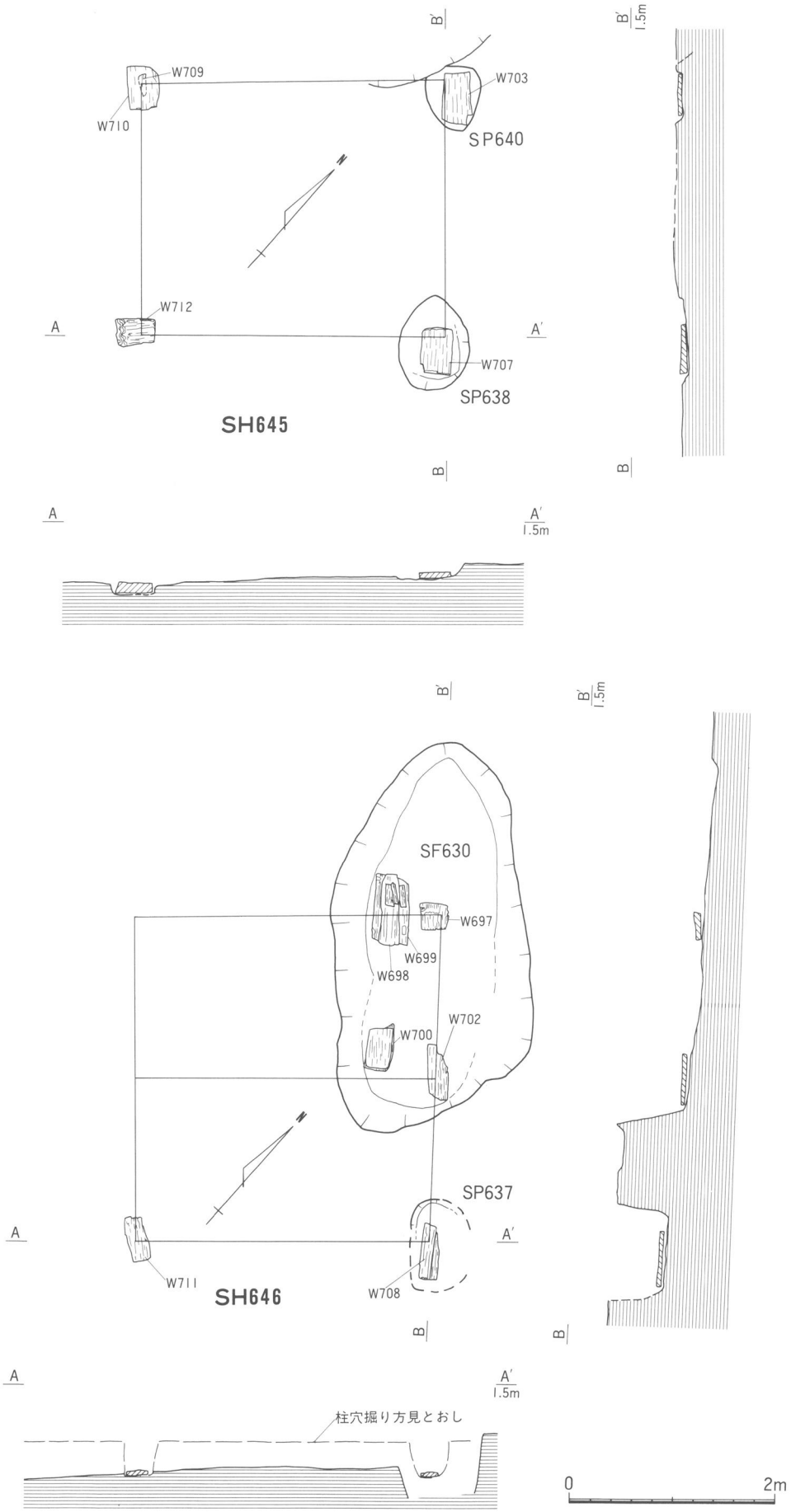
この他、南側の第２トレンチに礎板を伴ったＳＸ614が検出されている。大きさからすれば、柱穴の重複か、柱穴と別の遺構の重複と考えられる。

ＳＰ620

Ｂ１グリッドで検出された。遺構の大半は未調査区にのびており、円形のピットの中から長さ45cm幅



第96図　6区掘立柱建物ＳＨ643・644実測図



第97図　6区掘立柱建物ＳＨ645・646実測図

15㎝の礎板が検出された。礎板の上面でのレベルは1.3ｍを測る。礎板が遺構の端から出土であり、大形の遺構であることから柱穴と別の遺構とが重複していると判断される。

ＳＰ623

Ａ１グリッドで検出された。長径0.93ｍ短径0.72ｍ深さ0.3ｍ～0.2ｍを測る。底面に長さ42㎝幅20㎝の礎板が検出された。柱穴の形状から抜き取りが行われたと考えられる。

ＳＰ641

Ａ１グリッドから検出された。サブトレンチによって柱穴の輪郭は破壊してしまったが、深さ0.12ｍを測る。礎板は長さ30㎝幅12㎝である。このほか調査区南側の第２トレンチでは礎板が出土したが、建物の規模、方位、礎板の組み合わせも不明確であった。掘立柱建物跡は南側の未調査区へ続くと考えられる。

ＳＰ611

Ａ１グリッド、ＤⅡ層から検出された。長径0.3ｍ短径0.2ｍ深さ0.11ｍを測る。覆土中から弥生後期後半の土器片が出土した。

ＳＰ612

Ａ１グリッド、ＤⅡ層から検出された。長径0.7ｍ短径0.35ｍ深さ0.25ｍを測る。覆土中から壺、台付甕などの土器片が出土した。

ＳＰ619

Ａ２グリッド、ＤⅡ層から検出された。直径0.45ｍ深さ0.2ｍを測り、礎板や土器などの遺物は認められなかった。

ＳＰ606

Ａ２グリッド、ＤⅡ層中から検出された。長径1.65ｍ短径0.65ｍ深さ0.4ｍを測る。覆土下部に炭化粒子や中位に薄い炭化物の層が認められた。出土した土器片も同一個体のものがあって、炭化物などとともに廃棄したものと考えられる。

ＳＤ613

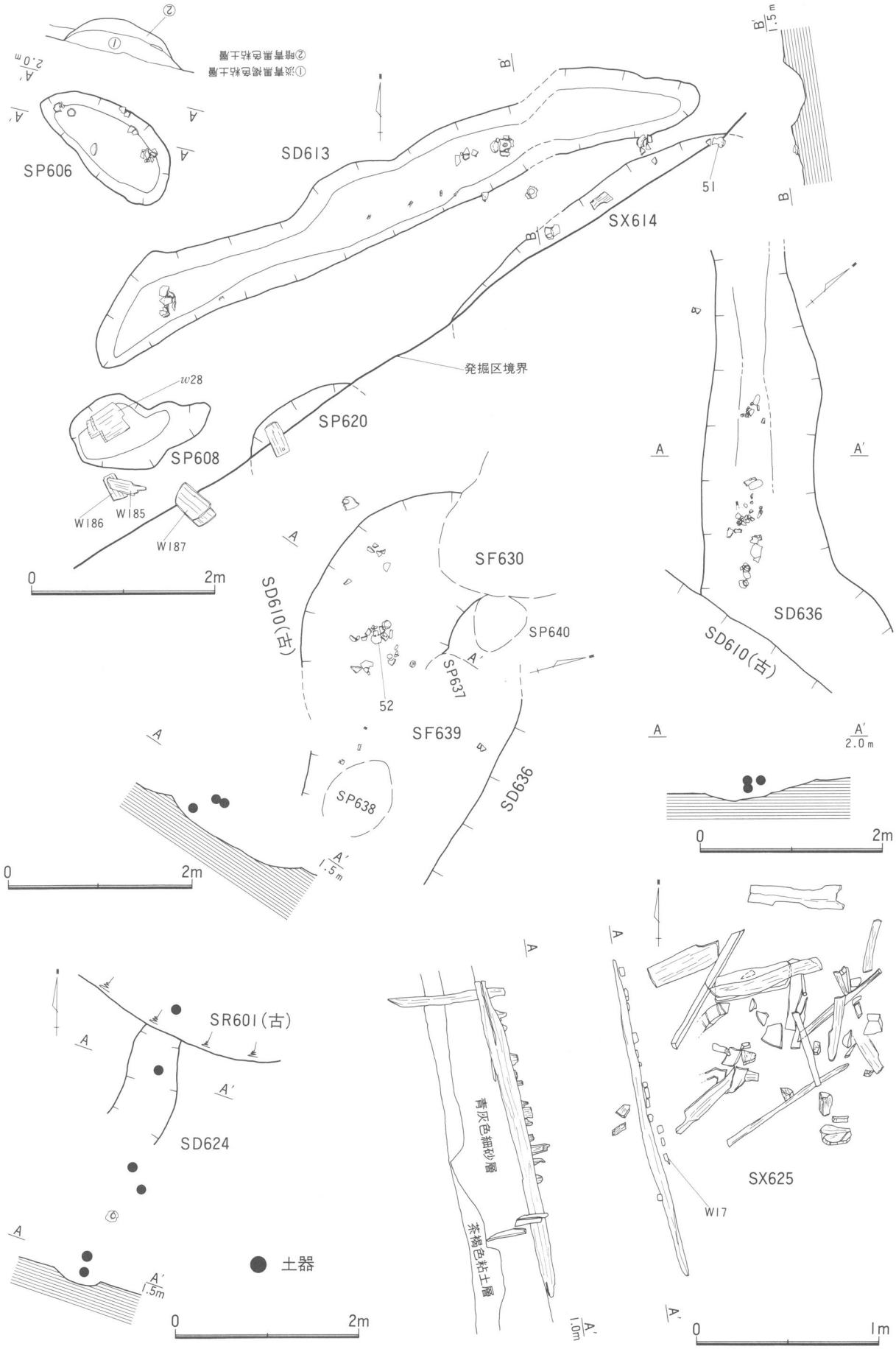
Ｂ１グリッド、ＤⅡ層中から検出された。長さ7.2ｍ幅0.9ｍ深さ0.4ｍを測る。覆土はＤⅡ層に類似する。検出層位は弥生後期後半と考えられるが、出土した土器片ははそれより古い傾向が認められた。

ＳＤ624

ａ１、ａ２グリッドの境界、ＤⅡ層中から検出された。長さ1.1ｍ幅0.5ｍ深さ0.1ｍを測る。覆土からは壺形土器片が出土したが、胴部破片で細かい年代は検討できないが、ＳＸ602より新しいことは、上部の堆積土層とレベルから考えられる。

ＤⅡ層水田

表土除去によってＳＲ601（新）の河川堆積層を除去した結果、海抜1.3ｍ～0.65ｍの高さで畦畔状の連続した高まりが認められた。この高まりは１区から３区までに検出された杭による護岸大畦畔と推定されるものであったが、他の調査区と異なり、後世の河川によって水田面までの堆積層が削り取られていたため、水田面の調査はこの高まりから開始した。なおプラント・オパールの分析結果によると、暗



第98図　6区溝状遺構ＳＤ613他実測図

灰色シルト層で「稲作の可能性は認められるが上層や他所からの混入の危険性も考えられる」のデータを示し、ほかの調査区に比較して１ｇあたりのプラント・オパールは少ない。それに比べ調査区側で水田耕作土と考えた上層の茶褐色粘土では、ヨシ属、タケ亜科が多く、むしろ水田廃棄の様相を呈していた。このデータに基づけば、水田下層土にプラント・オパールは残り、水田が廃棄されたのち、乾燥した状況の中でタケなどが繁茂していた、と解釈できるのであろうか。

ＳＫ621

東西方向17ｍにわたって検出された。方位はＮ102°Ｅである。ＳＫ631と交差する部分では畦畔内に直径30㎝ほどの樹木の根部分をいれ、根固めとしていた。横木と横木の幅は1.5ｍほどであった。北側には長さ3.5ｍの横木をわたし、杭で打って止めている部分もみられた。横木のレベルは海抜上位で1.1ｍであった。南側には杭を30～40㎝ほどの間隔に打っており、土どめを念入りに行っていた。西北の調査区端では杭が8.5ｍにわたって片側のみ密集して打たれていた。この杭は長さ1ｍから0.8ｍで、頭部のレベルは海抜0.8ｍを測る。直径15㎝ほどで建築材の転用材もみられた。畦畔の上部と考えられる位置から古墳時代前期の土器が出土した。

ＳＫ622

西側ＳＸ626と重なる部分では当初、連続した高まりがみられた。ＳＫ622の畦畔はその部分までおよぶと考えていたが、掘り下げた結果、この部分は砂の河川堆積からなっていたので、畦畔はＳＸ625付近まで7.5ｍほどが残っていたと判断された。この遺構は幅0.25～0.1ｍほどわずかに高まっており、方位はＮ83°Ｅを示す。またＳＫ629と交差する付近からは確認できず、ＳＫ621と重なってしまう。同じ東西方向であるので作り替えを想定できるが、ＳＫ622の杭が高い位置から検出できたこと、ＳＫ622の畦畔内に認められた青灰色砂礫層がＳＫ621で途切れることから、すなわち新たにＳＫ621をつくる際、下位の連続した青灰色砂礫層まで除去されたと推定される。以上の点からＳＫ622を旧とし、ＳＫ621を新とする作り替えを想定したい。

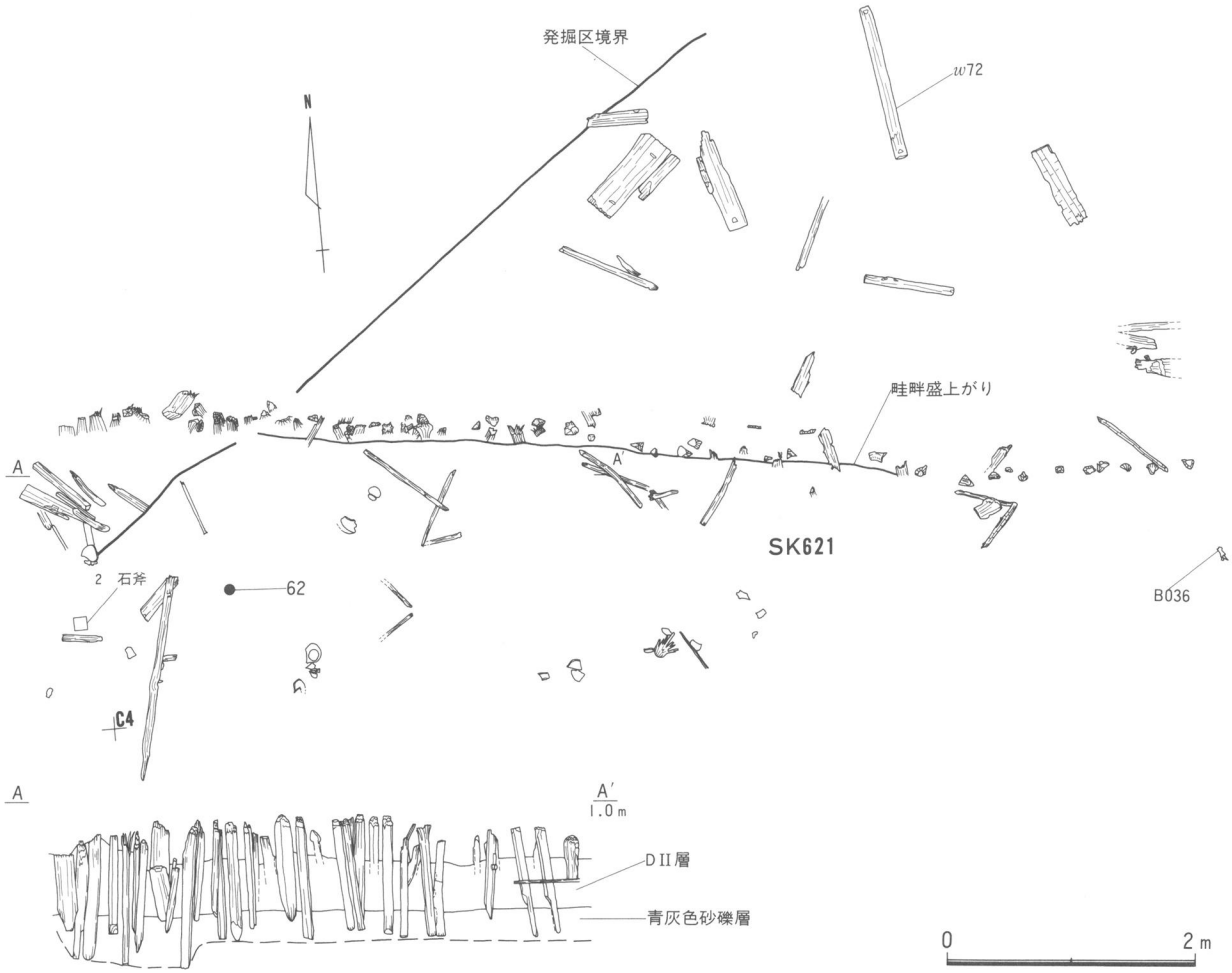
護岸の杭列はまばらで基本的には土盛り畦畔と考えている。なおＳＫ622には卜骨や完形、大破片の壺を中心とする土器が埋められており、畦畔をつくる際、なんらかの祭祀がおこなわれ、畦畔内に廃棄されたと推定された。この土器集中の幅は２～1.5ｍほどであった。

ＳＫ628

東西方向に4.5ｍにわたって認められた。方位はＮ85°Ｅ～Ｎ90°Ｅで、ＳＫ621に対応すると考えられるが、屈曲する部分もあってＳＫ622に対応する畦畔を作り替えたとも推定される。東側は杭で両端を護岸しているが、西側では片側のみに認められた。杭列から推定できた畦畔の幅は0.65ｍであった。

ＳＫ629

畦畔の高まりは明瞭ではなく、杭列などが南北方向に３ｍにわたって認められた。北側のＳＫ622と交差する部分では棒材、板材を敷き詰め、方位もＮ15°ＥとＳＫ622とほぼ直交するように対応しており、連続した畦畔と考えられる。南側では横木を杭で止めた部分が認められた。なお土層観察によれば下部のＳＲ635が埋まってから畦畔は造られていた。おそらく杭列の認められた部分はＳＲ635流路の上であり、安定しない土質であったため杭による補強が考えられたと推定される。横木の海抜高は1.0ｍを測る。



第99図　6区畦畔ＳＫ621実測図

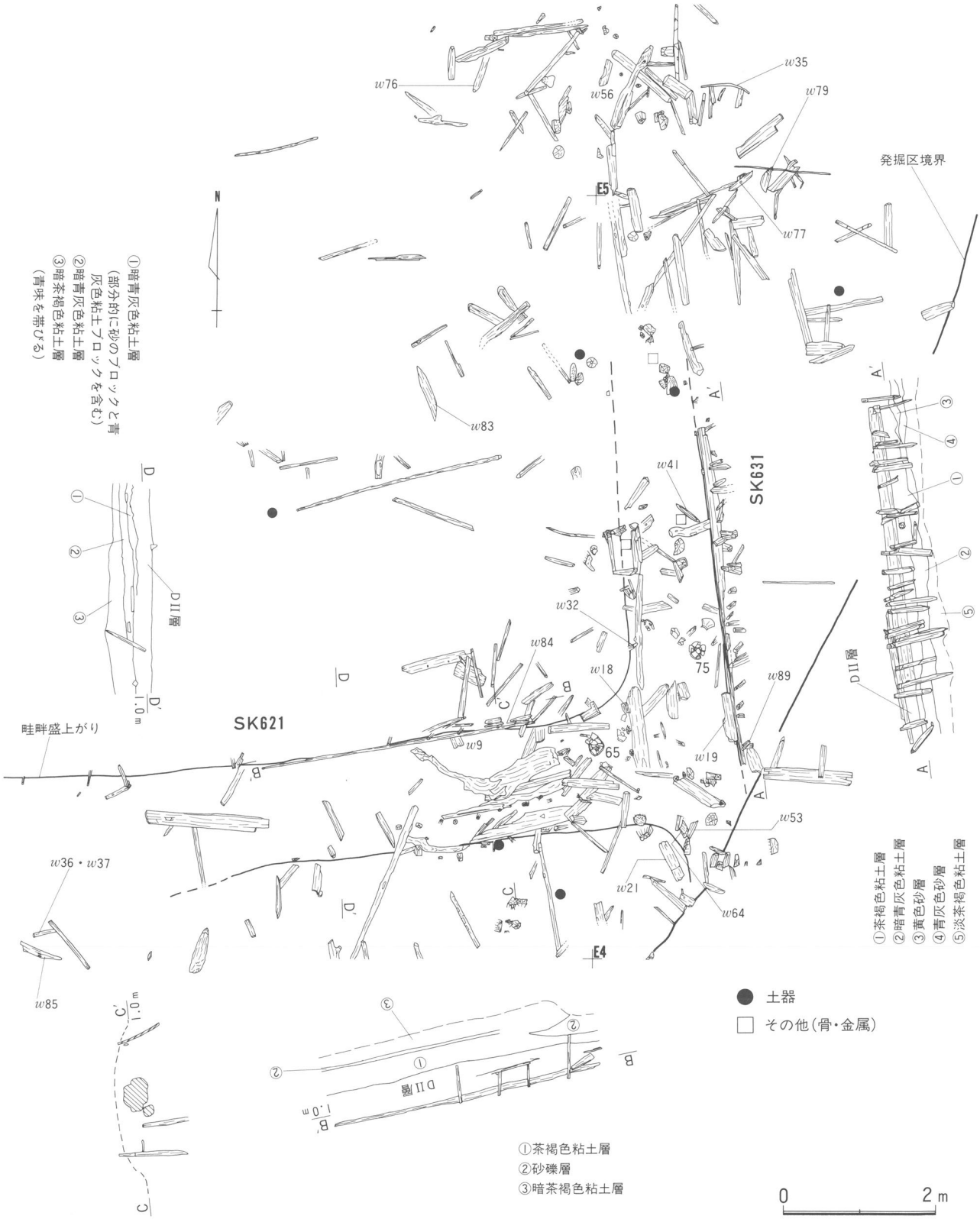
ＳＫ634

南北方向に６ｍにわたって認められた。杭列、横木も上層の河川堆積土を除去した段階でみられ、わずかな高まりが幅1.2ｍほど認められた。とくにＳＫ628と交差する部分では直径20㎝の樹芯の腐敗崩落した自然木をいれ、さらに杭を打って止めていた。またこれより南では板に穴をあけハの字状に打っているなど、畦畔の基礎とすれば極めてていねいな造作を行っていた。横木の海抜高は1.4～1.3ｍを測る。方位はＮ７°ＥとＳＫ621にほぼ直交する。

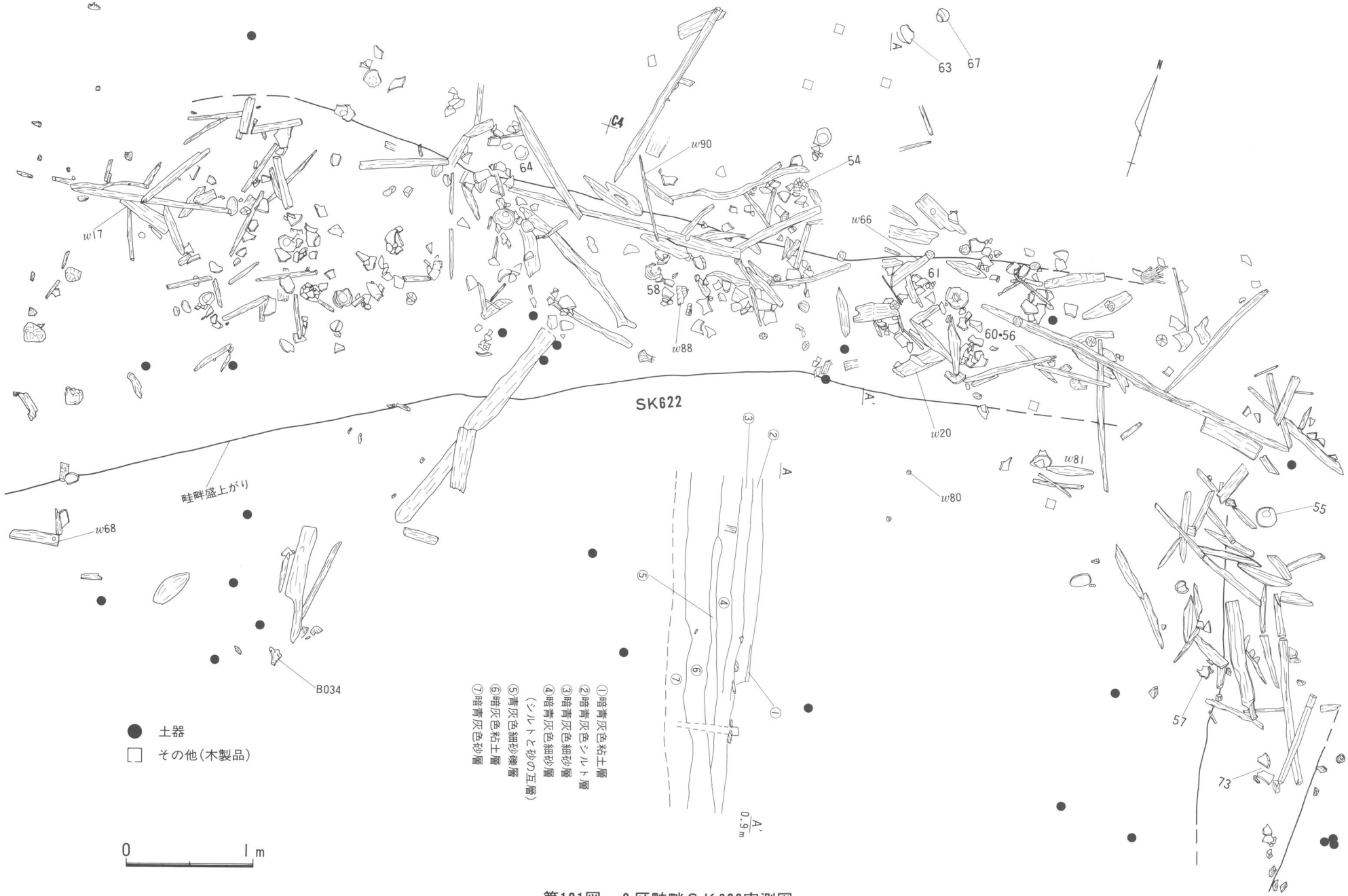
ＳＫ631

南北方向に7.5ｍにわたって認められた。横木をわたした部分での幅は1.3ｍほどであった。なおＳＫ621と交差する部分の北側では東側で長さ4.5ｍ、西側で長さ３ｍにわたって横木をわたし、杭で止めていた。とくに東側については念入りに補強していた。横木の海抜高は1.3～1.2ｍを測る。方位はＮ７°Ｅである。またＥ５グリッドの北側では東西方向に２ｍほど杭列が認められた箇所があり、あるいは東西畦畔が想定できるかもしれない。

ＳＫ633



第100図　6区畦畔ＳＫ631・621実測図



第101図　6区畦畔ＳＫ622実測図

調査区南端で南北方向に梯子を転用した横木を杭で止めた箇所が認められた。南側では杭列があり、南北の畦畔と認定した。杭列から推定される畦畔の幅は1.3mほどであった。横木の海抜高は1.2～1.0mを測る。方位はN96°Eであった。なおＳＫ621とは直交せず、ずれて交差部分と接合する。

６区の水田遺構は、ＳＫ621とＳＫ622の関係でみたように、畦畔の方位が東西方向で約20°ほど違うが、古い畦畔の一部が途切れてしまっている。このことは新しい畦畔を造る際、一部、古い畦畔を利用したものと考えられる。とくにＳＫ621の東側部分は杭と横木によって護岸されており、新旧、両時期に使用されたものとも考えられる。ＳＫ628とＳＫ629、ＳＫ634についても横木の検出レベルをみると、海抜1m前後のものと海抜1.3m前後のものとがあって、さらに方位のズレがあって、畦畔の作り替えが想定できる。ただし水田面での重複は認定できず層位の新旧関係は不明瞭であったが、おそらくＳＫ622とＳＫ629を古とし、ＳＫ621とＳＫ634を新とする水田と考えられる。ただしこの作り替えは部分的なものであり、出土土器から古墳時代前期に行われたと判断される。なお畦畔内や畦畔上から出土した土器は弥生後期のものが圧倒的に多く、水田にともなう祭祀は前者の時期のほうがより活発であったといえよう。

なお畦畔以外の水田耕作土についてはえぐられて流失した箇所も多く、畦畔も連続しない箇所もあって、水田が河川によって廃棄されたことを物語っていた。

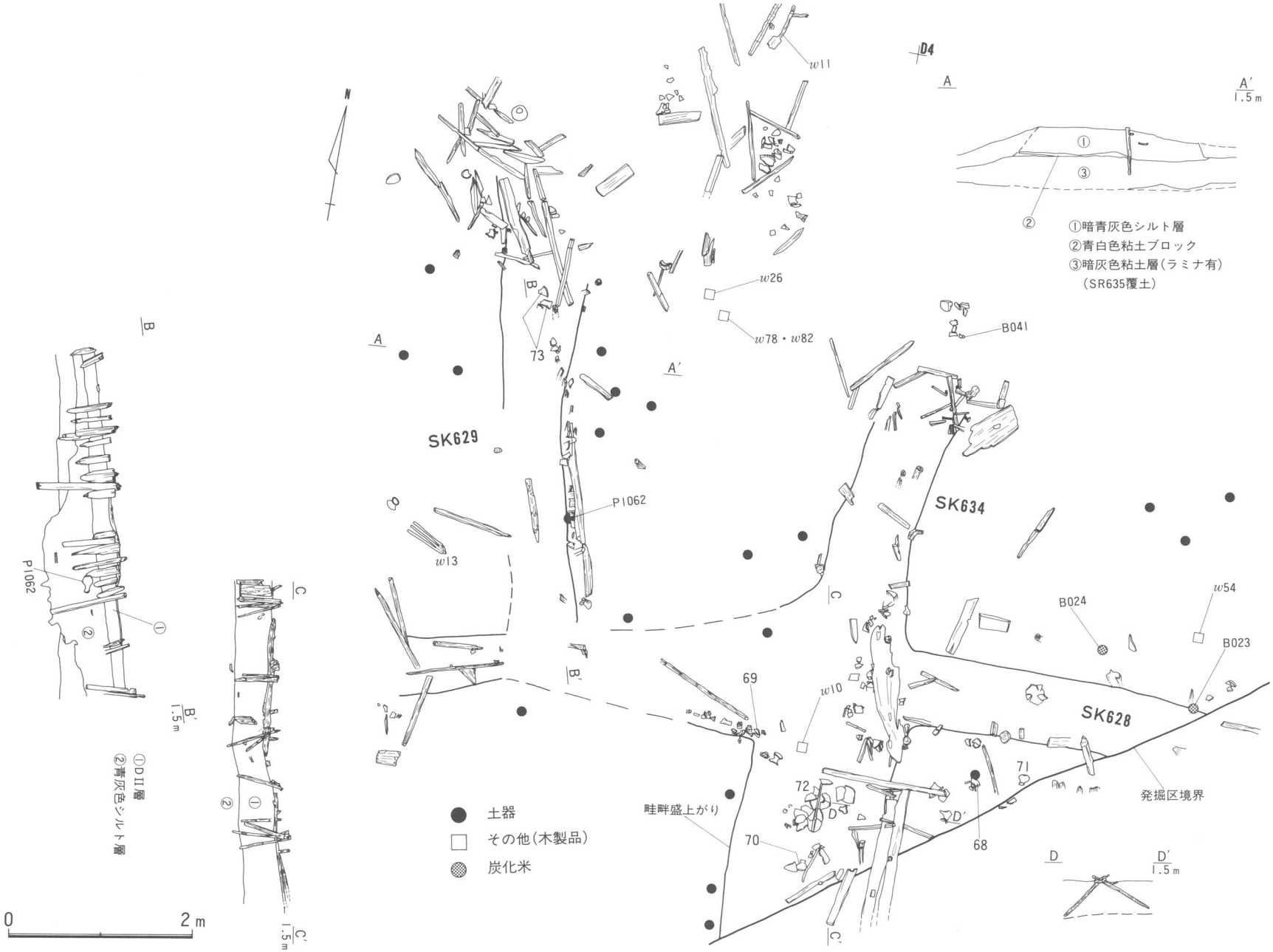
ＳＤ610（新）

Ａ１、ａ１グリッドの境界で検出された。微高地南北方向に設定した第６トレンチの観察結果によれば、ＳＸ602との間に30～20cmのほとんど遺物を含まない土層を挟んでおり、ＳＸ602より古い時期に営まれた遺構であって、ＤⅡ層を掘り込んでおり、掘立柱建物跡群より新しいことが判断できる。調査当初、ＳＸ602の南側に溝状の窪地がみられた。この現象はＳＤ610（新）の覆土が埋まりきらず窪地として残り、つぎの堆積もレンズ状を呈して形成され、上層のＳＸ602の時期の微地形にも影響を与えていたと考えられる。

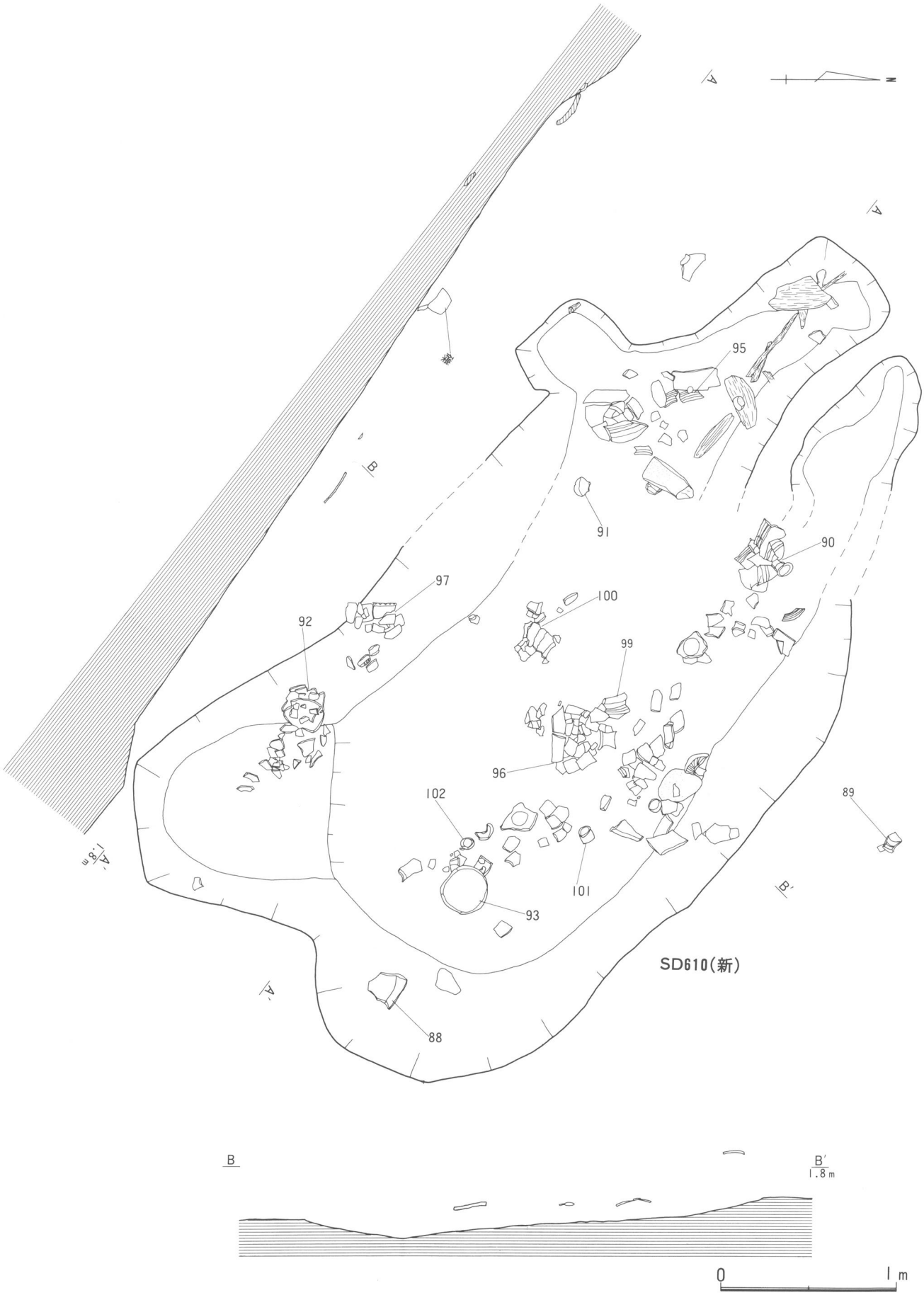
また本来、この遺構は２条の溝の重複であって、南側の溝が新しく掘削している。遺構の両端については把握できたが、重複する壁面については不明瞭であって、境界の認識はできなかった。南側の溝状遺構は長さ5.2m幅0.6m深さ0.35mを測り、北側については長さ5m幅0.6m深さ0.35mを測る。両者とも覆土下層で準完形品、大破片の土器がまとまって出土した。土器の出土状態は、南側溝で両端でまとまっており、北側溝では中央部で溝の長軸にそってまとまって出土した。南側の溝では壺、台付甕が認められ、口縁部や底部の欠損したものが多く廃棄されたと判断された。北側の溝では台付甕が略完形であるほか壺では底部のみを正位置においており、何らかの意図を持っていると判断された。台付甕の口縁部はキザミをもたないタイプで南北とも共通していた。なお北側では小形の高坏が伴っている。古墳時代前期の遺構と考えられる。

ＳＸ625

河道ＳＲ601（新）の中、Ｂ３グリッドから検出された。当初、高まりが認められ、東側から続く畦畔と考えていたが、ＳＲ601の貫流によって周辺部、とくに西側から南側がえぐられ、ＳＸ625が相対的に高まりとして認識されたことによる。遺構は河川堆積物である厚い砂層上に長さ1.7mにわたって、太い棒状に枝を払った木材を南北方向に並べ、さらに杭を打って東側を打支えるように止めているが、西側



第102図　6区畦畔ＳＫ629・634実測図



第103図　6区溝状遺構ＳＤ610（新）実測図

も３本の杭によって支えており、護岸の役割を推定させるものであった。なお横木と杭列の東側には幅1.3mにわたって板材が並べてあったが、矢板の転用と考えられるものもある。また東側に２ｍほど離れた位置から卜骨が出土したが、関連は不明である。なお板材の間から複合口縁の壺片が出土している。

ＳＸ626

河道ＳＲ601（新）の中、Ｂ３グリッドから検出された。河川堆積物である砂層上に直径10cm前後、長さ２ｍ前後の棒材を東西2.5m南北３ｍにわたって敷きつめていた。南東隅から複合口縁の壺が倒れた状態で出土したが、底部以下は認められなかった。ＳＸ625では杭を打ち込んで支えていたが、本例では棒状に加工した木材を並べたのみであり、機能や性格の違いが考えられるが、特定できない。

ＳＲ605

調査区北西隅のＢ１、Ｂ２グリッドから検出された。調査区西側に広がる微高地の緩斜面に相当する。東側はＳＲ601（新）が大きく蛇行する部分に接しており、本来、同じ河道である可能性もあるが、判断材料がとぼしいので別の遺構として取り扱った。調査区の西側が主体と考えられる。

下部には河川堆積物である砂礫層をベースとし、つぎに泥炭質粘土層や微高地からの流れ込みと判断されるＤⅡ層が堆積しており、河道に接した緩斜面が埋没していく過程をしめしていた。さらにその上部にＤⅠ層が南北方向で水平に堆積しており、ＤⅠ層の上部にはＣ層がみられる。ＳＲ605付近ではＣ層を堆積させた河川活動までのある段階まで、河川活動の影響はほとんど見られず、ＳＸ602、ＳＸ603と呼称した土器供献が良好な残り方をしめしたものと考えられる。土層の堆積状況では他の調査区との比較ができる数少ない部分であるといえよう。

ＳＡ609

ＳＲ605内のＢ１グリッドから南北方向に3.2mにわたって杭列１列が検出された。微高地との境界で緩斜面にあたるため護岸の機能をもつものと考えたい。ＳＲ605とともに年代幅のある遺構であるが、その一点はＳＸ603の示す時期の遺構であろう。

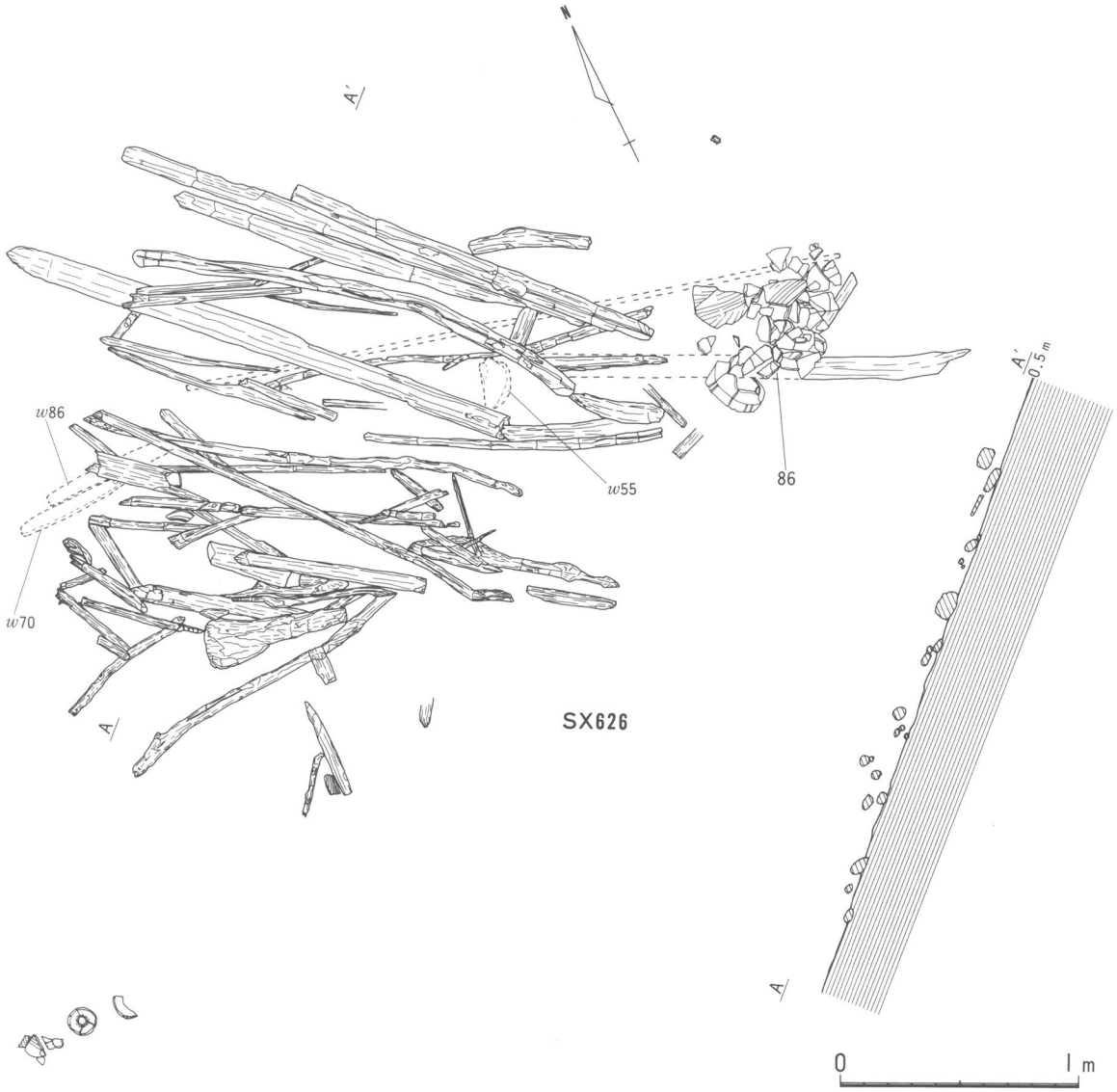
ＳＡ607

調査区北側、河道ＳＲ601（新）内のＡ２グリッドから検出された。長さ６ｍにわたって割り板材を４枚組み合わせ両側を杭を打つことによって支えていた遺構である。畦畔の一部とも考えられたが、厚い河川堆積物の砂礫層に造られており、横木を両側から支えていることから畦畔の横木のあり方と異なり、護岸や堰のような河川に関係する遺構と考えられた。

４．古墳時代の遺構

ＳＸ602

調査区の西側微高地海抜２ｍ～１ｍに９群にわかれて土器供献が検出された。各群での整理作業の過程で個体の判別ができた器種の構成は、第１群では壺４点、器台２点、Ｓ字状口縁甕１点などがであった。第２群は壺７点、高坏１点、器台１点などがあったが、胴部以上を欠くものが多い。第３群は高坏２点、小型Ｓ字状口縁甕１点、台付甕１点などであった。第４群は壺８点、小型鉢１点、甕２点、高坏１点であり、第５群は壺２点、鉢１点、高坏１点、甕７点が認められた。第６群は川岸に位置したためか破片のみであった。第７群はＳＸ603との境界が連続することと、第１群から第５群とことなり斜面に



第104図　6区ＳＸ626実測図

あたるため土器が重なっており、いくつかの時期にまたがっているものと考えられる。また完形品を置いたというよりも同一個体が離れて接合するため、川岸から斜面に投棄されたか、移動したと考えられる。第９群は甕１点、高坏１点が認められた。

ＳＸ603

調査区西端の斜面とＳＲ605の覆土から検出された。調査区外が本体と考えられ、土器片の重なりも多く時期的にも重複があるものと考えられる。第７群との接合関係がみられる。ＳＸ602と異なり、川岸から投棄したか流れ込んだ状況であった。

なお微高地部分の花粉分析結果に基づけば、弥生後期から古墳時代前期にはスギ、アカガシ属の卓越する植生であったと推定され、ＳＸ602・ＳＸ603の土器供献が川辺とはいえ、周囲にこうした樹木を背景としていたと言えよう。

第105図　6区ＳＸ602・ＳＸ603土器集中箇所実測図

第２節　出土遺物

１．土器

６区では出土した土器の点数が多く、整理・図化作業が進んでおらず、現在も土器の接合が半ばであるという状況であって、未整理の部分が多い。また本書が遺構編という性格もあって、遺構の年代を提示するという意味をもたせ、遺構外出土土器や一括性のとぼしい土器ははひとまず対象からはずすこととし、遺構出土の土器を最優先して作業を進めた。そのため土器の接合関係から得られる情報など様々な検討事項が未消化の状態なので今後の課題としたい。

弥生中期遺物集中箇所出土土器

壺、甕、高坏が発見された。出土状態からある一定の幅で同時期と考えている。

壺１は、器高42.2㎝、口径13.9㎝を測る。下ぶくれの胴部をもち、やや細頸で大きく開く口縁部をもつ。胴部上位にヘラ描きによる複合鋸歯紋を巡らしている。なお、胴部下半と口頸部に浅いハケ目調整が認められる。壺２は、器高27.4㎝、口径8.25㎝を測る。胴部のやや中央に最大径をもち、短めの口頸部がやや外に開く形態である。胴部上位に、クシ描きによる波状紋と横線を描く。胴部上位にヘラミガキ調整が認められ、底部には、木葉痕が残っている。

深鉢（もしくは甕）３は胴部下位に最大径をもち、上位で屈して大きく広がる形態である。口縁部を面取りし、刻み目をつける。口縁部内側は、３本１列の凹みを連続してつけ、一周する。胴部上半には、やや深めのヘラにより綾杉紋を施している。

高坏（台付鉢）４は、低く断面台形を呈する太い台部と大きく広がる鉢部をもつ形態で、器高14㎝、口径16.7㎝、底径6.4㎝を測る。口縁部は面取りして、わずかにナデている。内外面ともハケ目調整を施す。１～４は中期後半（有東期）の範疇に属すると考えられ、出土状況より一括性の高い土器群と考えている。このほかＳＲ601（古）の最下層、海抜０ｍ前後のレベルで壺５が出土したが、やはり有東期と考えている。

ＳＲ601（古）出土土器

壺６、７は海抜0.2～0.3ｍの砂礫層上から出土した。壺８は弥生中期遺物集中箇所の上部で出土した。壺６～１０はいずれも丹塗りであり、８～10は頸部に櫛描波状紋を描く。壺13はＳＲ601中から出土したものであるがグリッドが異なり、新旧の別は不明瞭だが、頸部に櫛描波状紋を描くタイプであるのでここに掲げた。

ＳＲ635出土土器

壺11と12はＳＲ635覆土上層から出土した。11は単純口縁で外面をヘラミガキ調整を施している。なお破片の一部がＳＤ627のものと接合しており、同時期と考えられる。12は出土状態からＳＫ629がつくられる以前である。ＳＲ635が貫流していた時期はこの土器以前といえよう。

ＳＤ627出土土器

この遺構からはかなりの量の土器廃棄が認められた。これらの土器は通常の土器構成とことなり、壺が圧倒的に多く甕がわずかにともなうが、小型土器もわずかに認められた。壺形土器は口縁部の形態に

よって単純口縁、折り返し口縁、複合口縁のタイプに分けた。壺14は単純口縁で、口頸部が短く外面をハケ目調整を施している。ただし出土層位からすればＳＲ601（古）にふくむべきかもしれない。壺15～18は折り返し口縁で棒状添付紋をつけており、口頸部を大きく開き、口頸部に紋様帯をもつタイプである。18は羽状縄紋、ほかは櫛描波状紋である。壺19～21は口縁部を欠くが、口頸部から胴部上位に紋様帯をもつ。19は縦方向に櫛描波状紋を描きさらにピッチの長い棒状添付紋を施している類例の少ないものである。20は口頸部に波状紋を描き下位に円形添付紋を施す。21は羽状縄紋を施すが、18と同様に胴部上位に紋様帯をつくっている。壺22は口頸部に櫛描波状紋を描く。壺23～28は口縁を折り返し口頸部が大きく外反する器形で、口端部に添付紋を施す。外面はヘラミガキ調整とハケ目調整の両者がある。壺29～33は口端部にキザミを施すが、口頸部が大きく外反する点で壺23～28までと同様である。壺34は口端部にヘラによる刻み目をもつ。壺35～36は単純口縁で口端部に何等の装飾を施していない。壺37は折り返し口縁であるが、口端部に何等の装飾を施していない。壺38は小型壺で口頸部の短い器形で、紋様帯はみられない。壺39～44は複合口縁で口縁部に棒状の添付紋を施す。壺45は複合口縁で添付紋はみられない。口縁部をハケ目調整、口頸部にヘラミガキ調整を施す。壺46は口縁部が欠損しているので、口縁による細分は不能であるが、胴部上位に円形の添付紋をつける。

甕47は口端部に刻み目をもつ。胴部から口端部へはゆるやかに外反する。甕48は小形製品で、端部を面取りしているほか刻み目はみられない。小形製品であり、通常の甕を細部までどの程度写しているかは判断できない。

高坏49は坏部を欠損している。脚部外面にこまかいヘラミガキ調整が施される。脚裾部脚柱部の境界に３孔をうがつ。出土状態は他の遺物と一括としか判断できないので他地域からの搬入品であろうか。

ＳＸ614出土土器

礎板を伴う大形の土坑から出土した。微高地上の掘立柱建物の年代の一点を示すと考えられる。壺50は単純口縁で口端部と頸部下位に添付紋を施す。外面にはハケ目調整が施されるほか装飾帯は認められないが、丹塗りである。壺51は小形壺で口頸部にはハケ目調整、胴部にはヘラミガキ調整が施される。

ＳＦ639出土土器

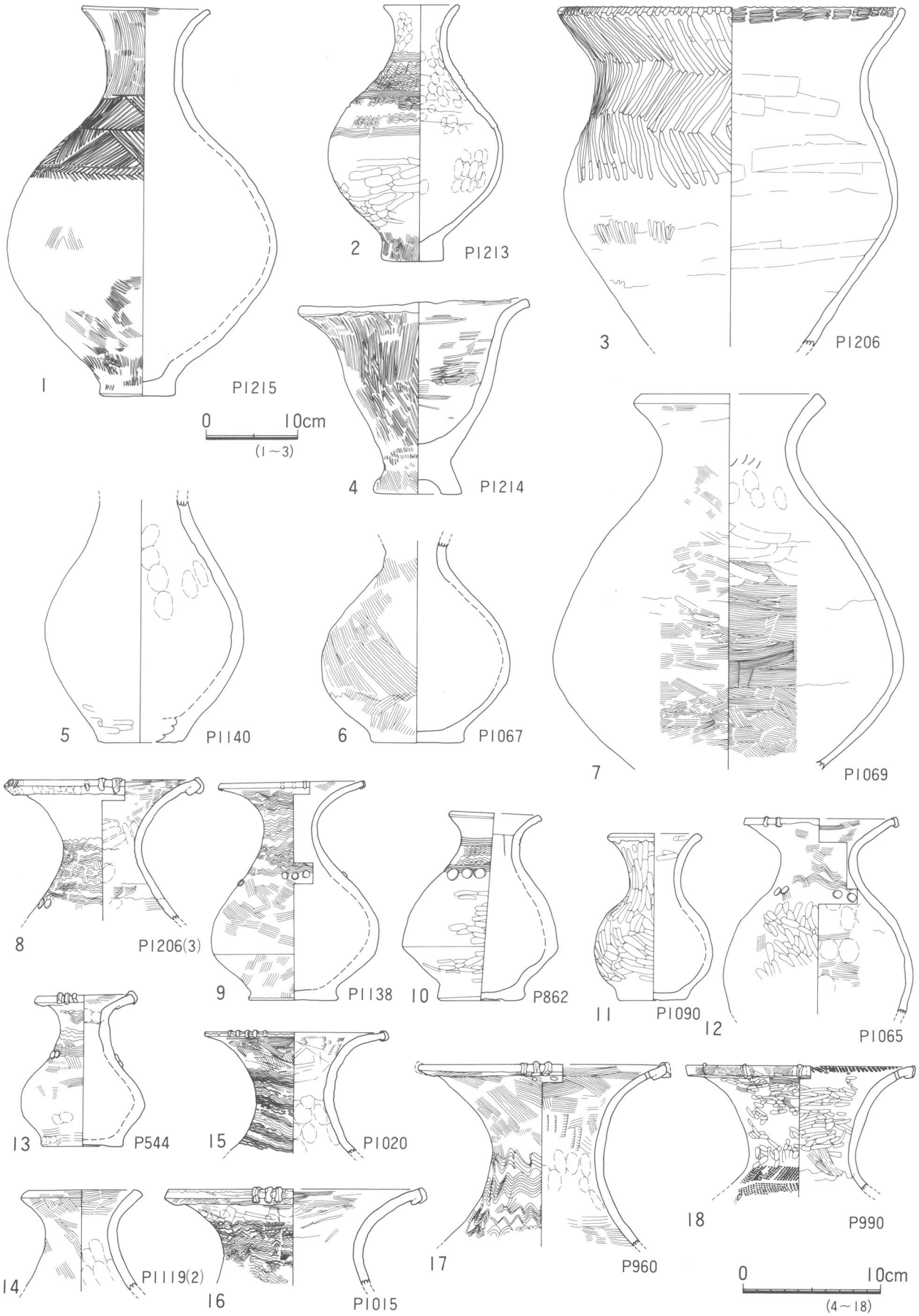
検出層位から掘立柱建物以前の遺構からの出土土器である。壺52は下胴部に最大径をもち、胴部上位に円形の添付紋を施す。口頸部は細い形態である。

ＳＫ622出土土器

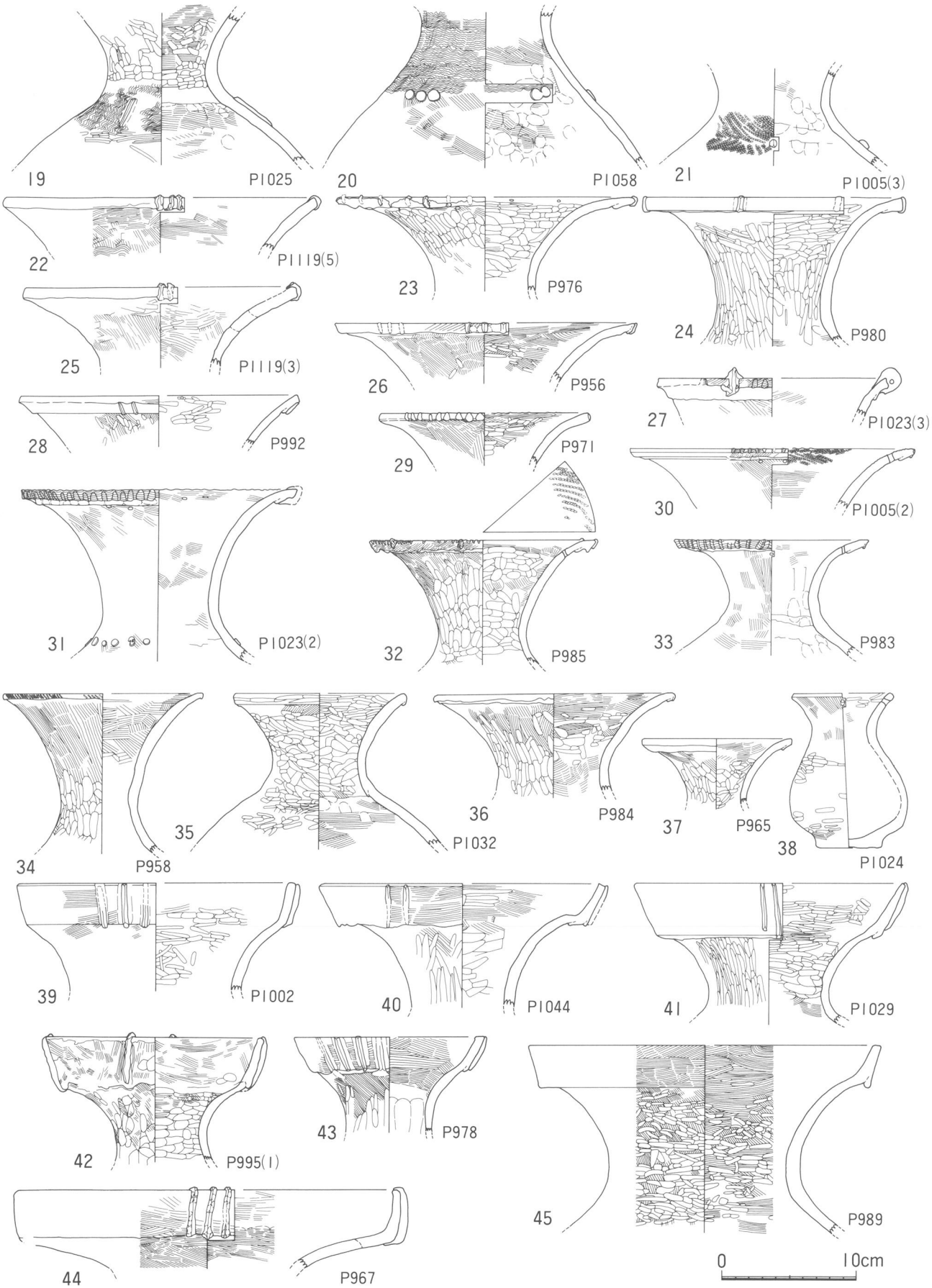
壺53は口頸部に櫛描波状紋を描く。破片も小さく下部からの混入と考えられる。壺50から64までは水田畦畔に埋め込まれた土器である。折り返し口縁で口頸部を縦方向のヘラミガキ調整を施すものとハケ目調整を施すものとがある。壺63は複合口縁で口縁部に棒状添付紋を施す。壺64は小形壺でヘラミガキ調整を施し、装飾はみられない。

ＳＫ621出土土器

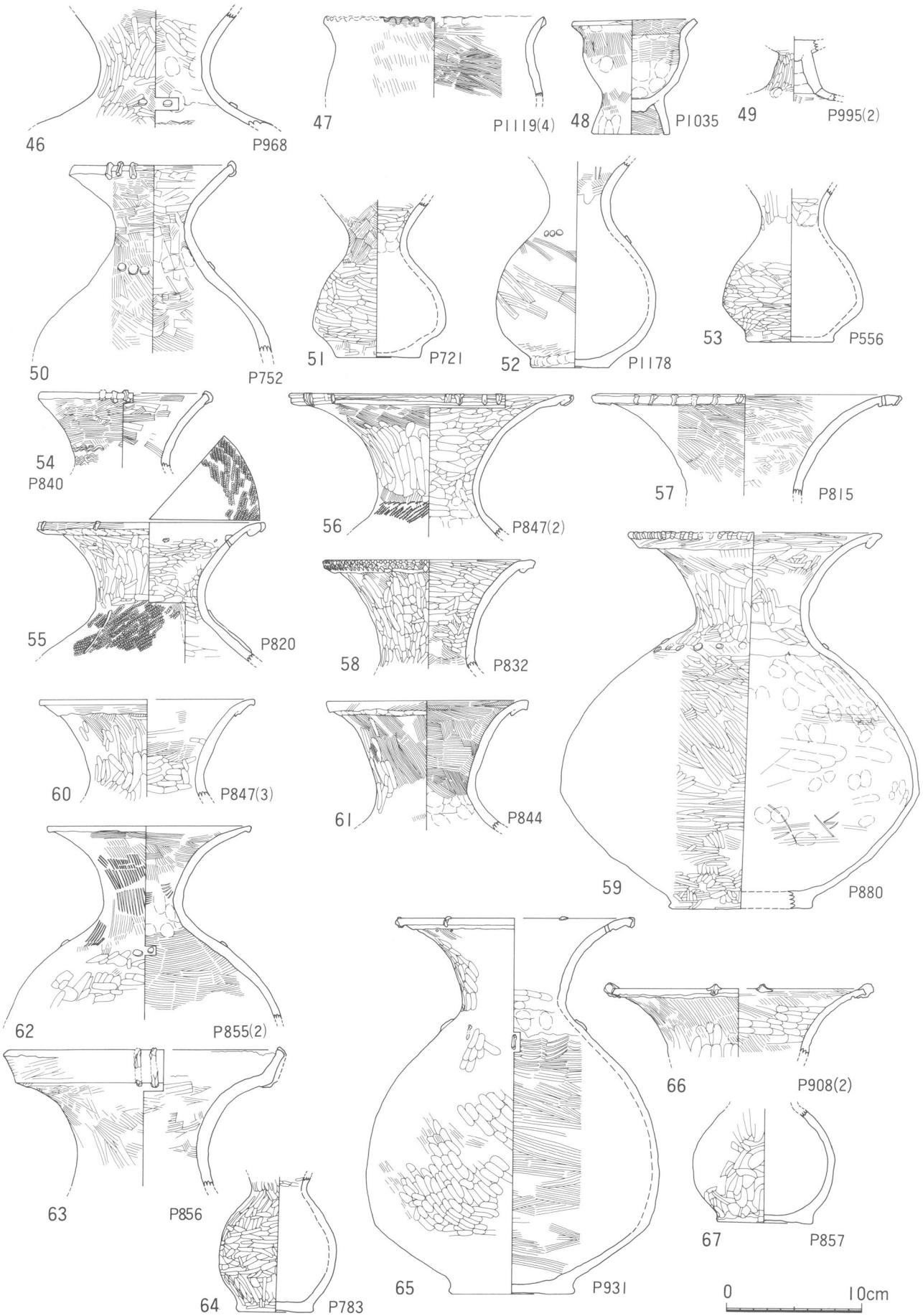
壺65は口頸部と胴部の境界に円形浮紋がみられるほか、ほとんど無紋でありヘラミガキ調整を施す。壺66は折り返し口縁で口端部に添付紋を施す。壺67は下胴部に最大径をもつ器形でヘラミガキ調整を施しており、装飾はみられない。



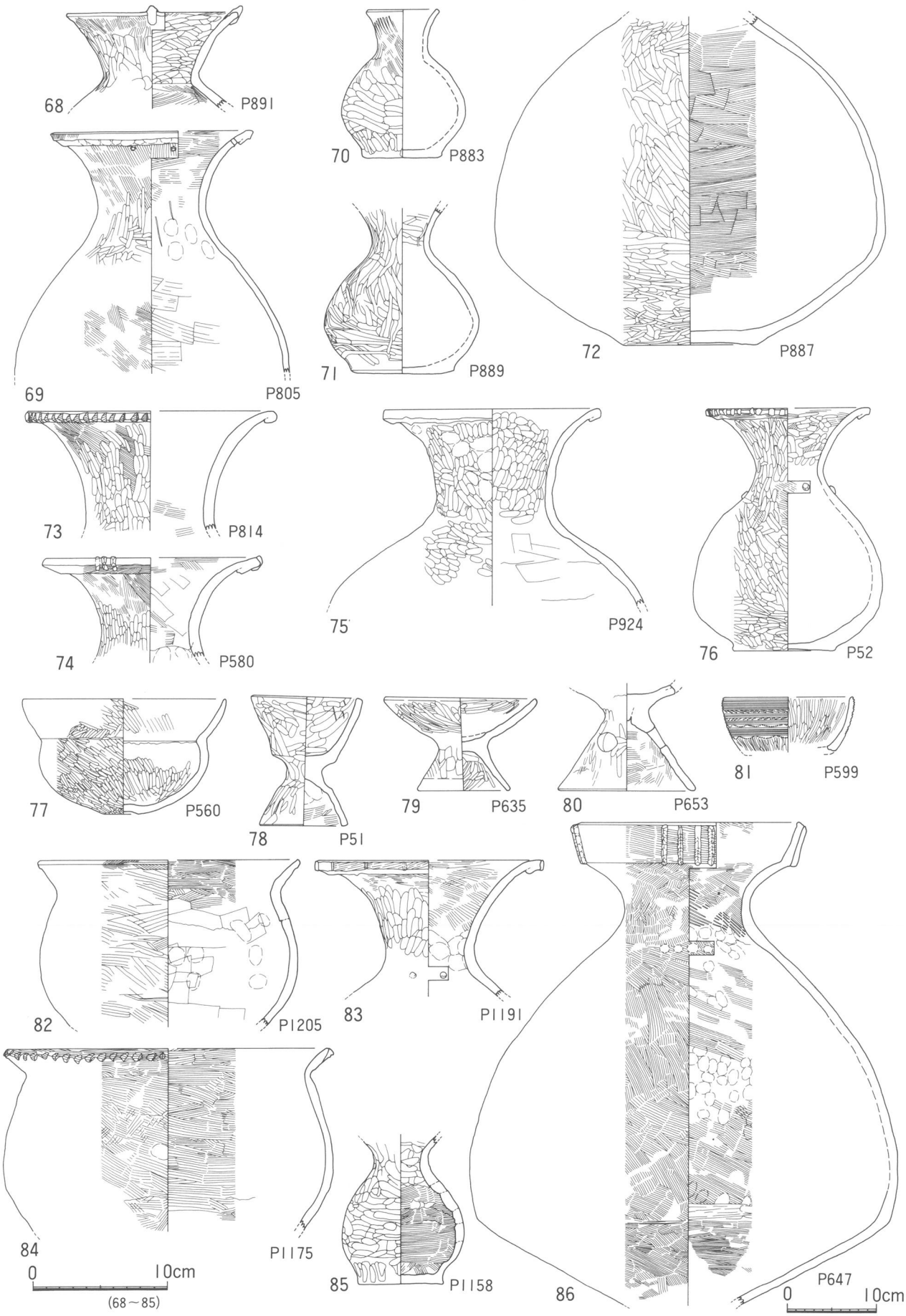
第106図　6区出土土器実測図（1）



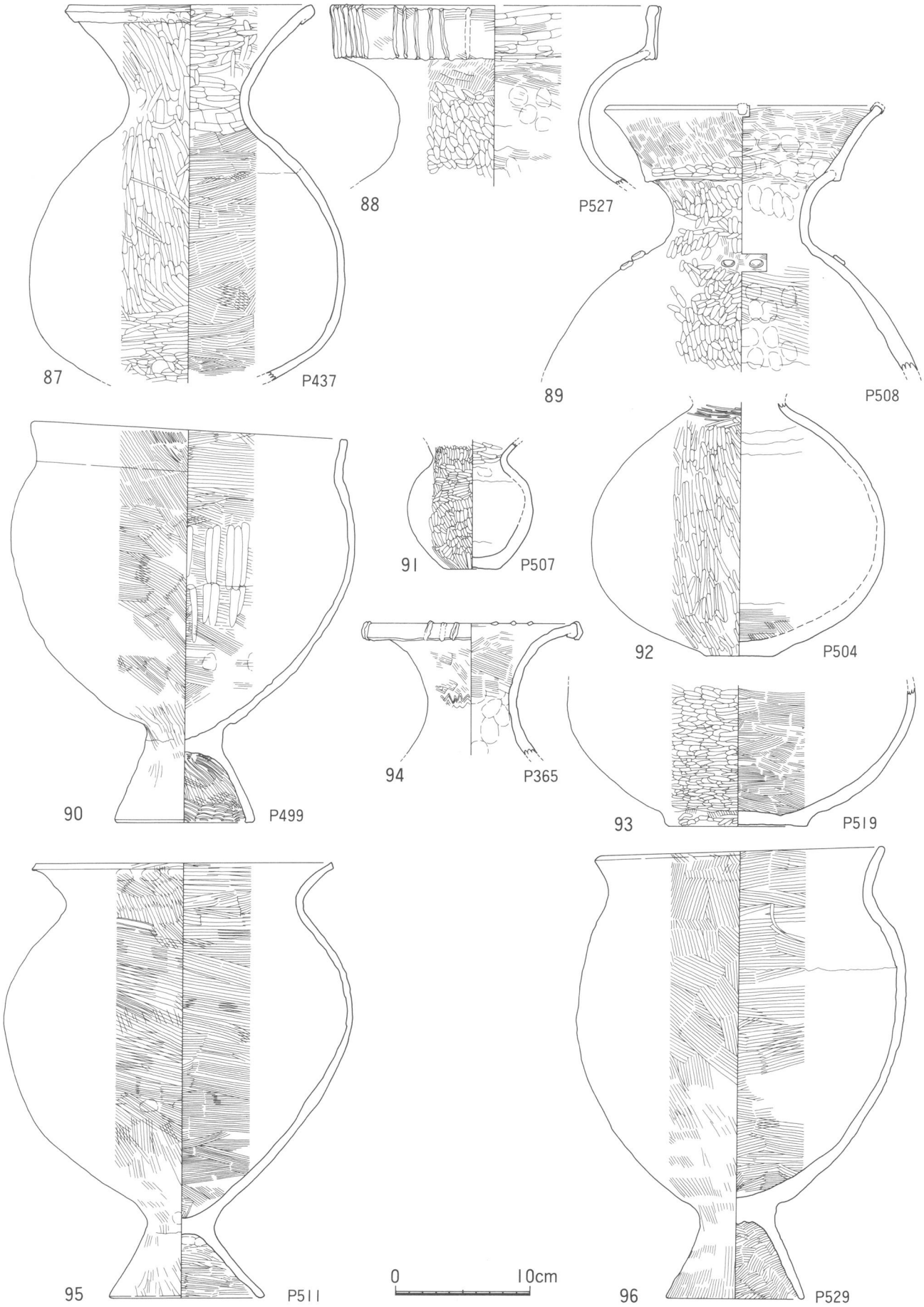
第107図　6区出土土器実測図（2）



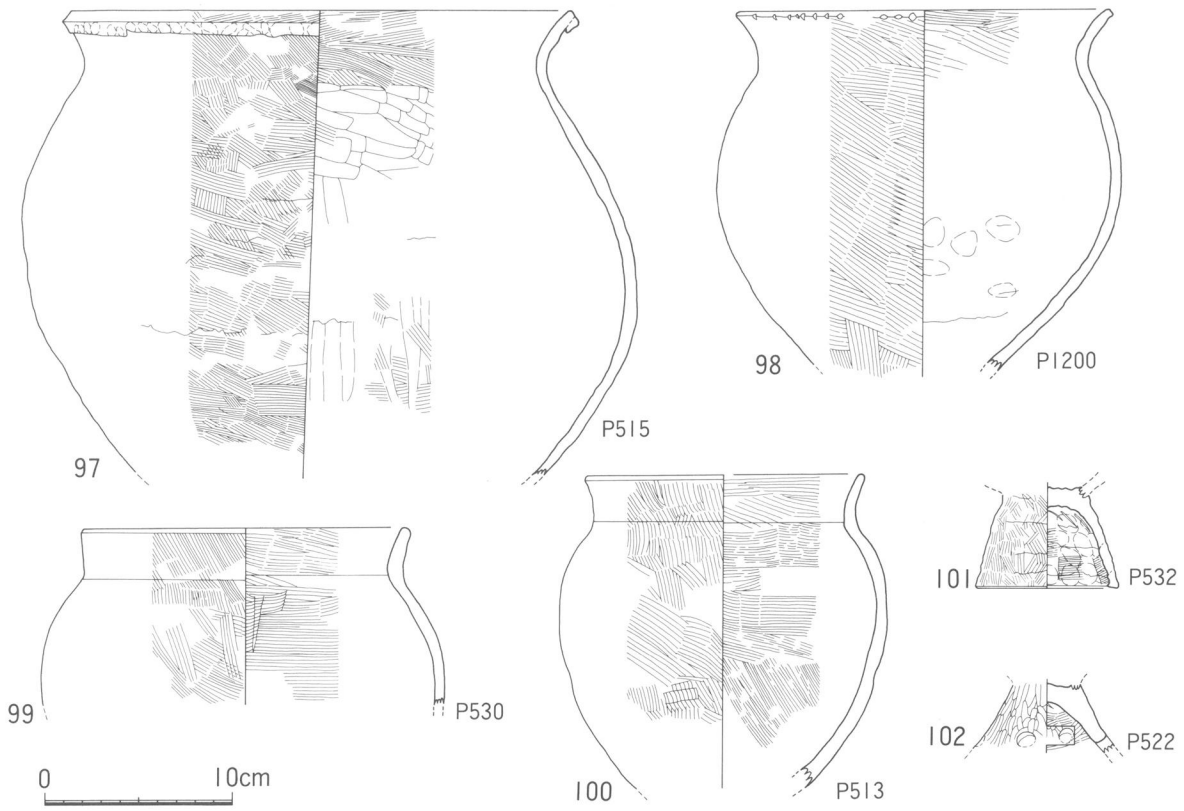
第108図　6区出土土器実測図（3）



第109図　6区出土土器実測図（4）



第110図　6区出土土器実測図（5）



第111図　6区出土土器実測図（6）

紋様はわずかにクシ歯による刺突紋・羽状紋・縄紋のみられるものもある。折り返し口縁部には棒状浮紋、刺突紋が認められる。これらの特徴から、これらの土器は、従来の概念では広義、飯田式段階にあたるが、飯田式があまり良好な資料がなく型式設定されていただけに、今後の検討課題となろう。

ＳＫ628出土土器

壺68は単純口縁で口端部に２箇所の添付紋をつけ、口頸部はヘラミガキ調整を施す。壺69は胴部と口頸部の境界をヘラミガキ調整を施すほか、ハケ目調整を施す折り返し口縁の壺である。小形壺70は横方向のヘラミガキ調整を、口頸部をハケ目調整を施す。小形壺71は全体をヘラミガキ調整を施す。壺72は口頸部を欠くが、胴部をヘラミガキ調整を施す。

ＳＫ629出土土器

壺73は折り返し口縁で刻み目をもつ。口頸部はヘラミガキ調整を施す。壺80はＳＫ628と629の境界で出土した。折り返し口縁で添付紋をつける。

ＳＫ631出土土器

壺75は折り返し口縁で口頸部から胴部をヘラミガキ調整を施す。

畦畔上部出土土器

壺76～高坏81は畦畔上から出土した土器で多くは畦畔を露出した段階で出土した。畦畔上部はＳＲ601の新しい河川が貫流したため本来、畦畔に埋め込まれていたかの判断はできないが、保存状態がよいものは畦畔内に埋め込まれていた可能性が高い。

水田の最終時期を示す土器であるが、ＳＫ622内の大量廃棄とことなり、量は少ない。高坏78は伊勢湾地方の形態を模した例で、高坏81は胎土、焼成から伊勢湾地方からの搬入品と考えられる。

ＳＤ610（古）出土土器

ＳＤ610（古）と呼称した遺構は本来、ＳＤ610（新）とは別の遺構と考えているが、調査当時、サブトレンチによって遺構の存在を確認し、遺構同士の新旧関係に従って遺物の取り上げを行ったため、そのまま遺構名称を生かした。甕82は口端部を面取りし、ハケ目調整を施す。甕84は口端部に刻み目をもつ。甕83、84は最大径が胴部下半にくる形態である。内外面ともハケ目調整である。壺83は折り返し口縁で胴部上位に円形の添付紋が付く。壺85は全体をヘラミガキ調整を施す小形壺である。

ＳＸ626出土土器

壺86は大形壺で、最大径は下胴部にくるため下膨れの形態である。口縁部は複合口縁に棒状添付紋（浮紋）をつけるが、他の添付紋に比べていねいなつくりで指を摘むようにして頂部を作り出している。口頸部、胴部ともにハケ目調整である。

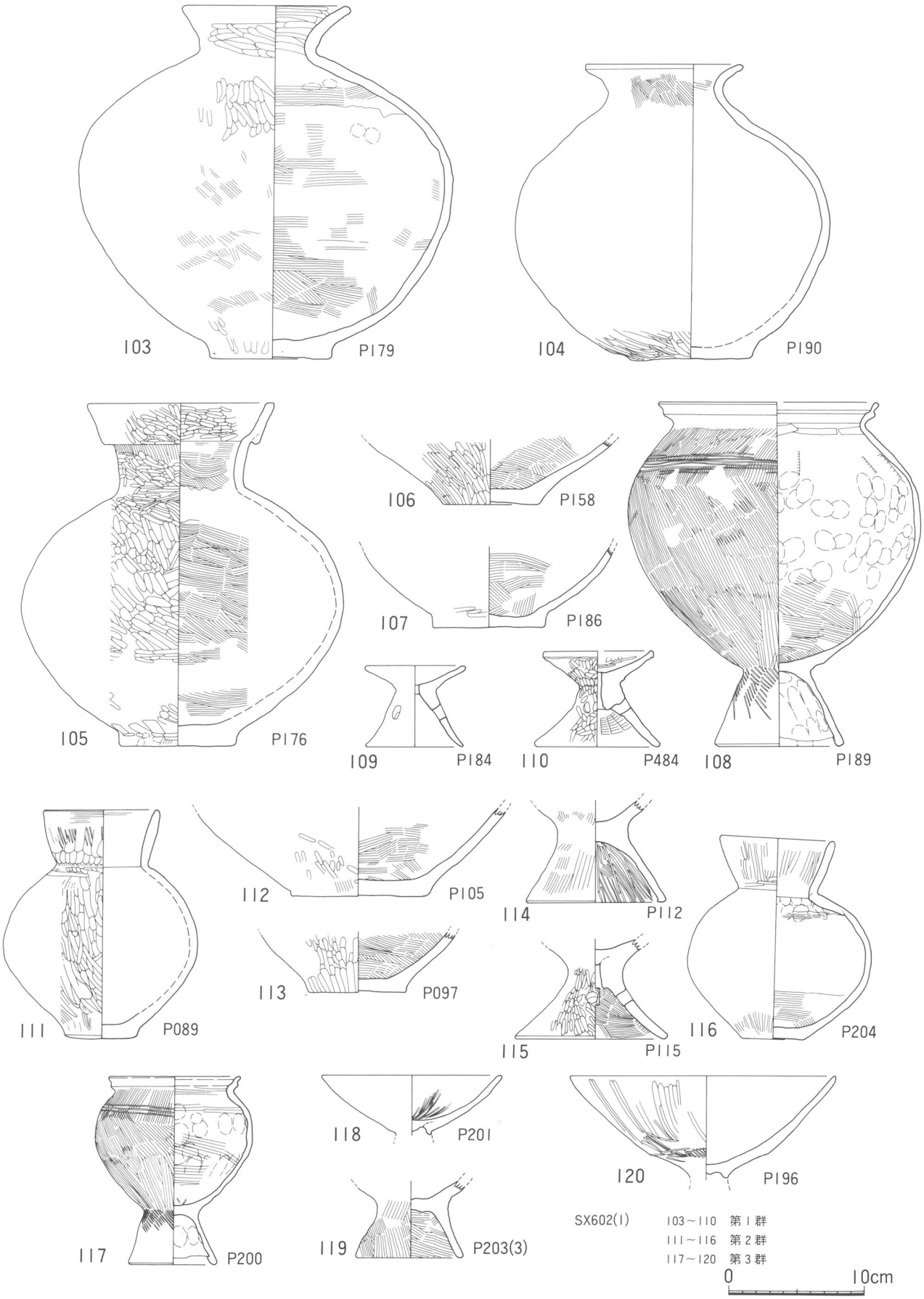
ＳＤ610（新）出土土器

壺87は折り返し口縁で球形を呈する胴部をもつ形態で、口頸部から胴部をヘラミガキ調整を施す。壺88は複合口縁で、棒状添付紋をつける。壺89は大きく外反する複合口縁で胴部上位に円形添付紋をつける。壺91は小形壺で外面をヘラミガキ調整を施している。壺92・93は球形の胴部をもつ。壺94は覆土上部から出土したが、混入品と考えられる。台付甕90・95・100はくの字状口縁で内外面ともハケ目地調整を施す。甕97は口端部下位に折り返して指で抑えている。ほかの甕は口端部は面取りするほか刻み目はみられない。小形高坏102は脚部に２孔１対の円孔を３箇所うがっている。内外面とも丹塗りである。

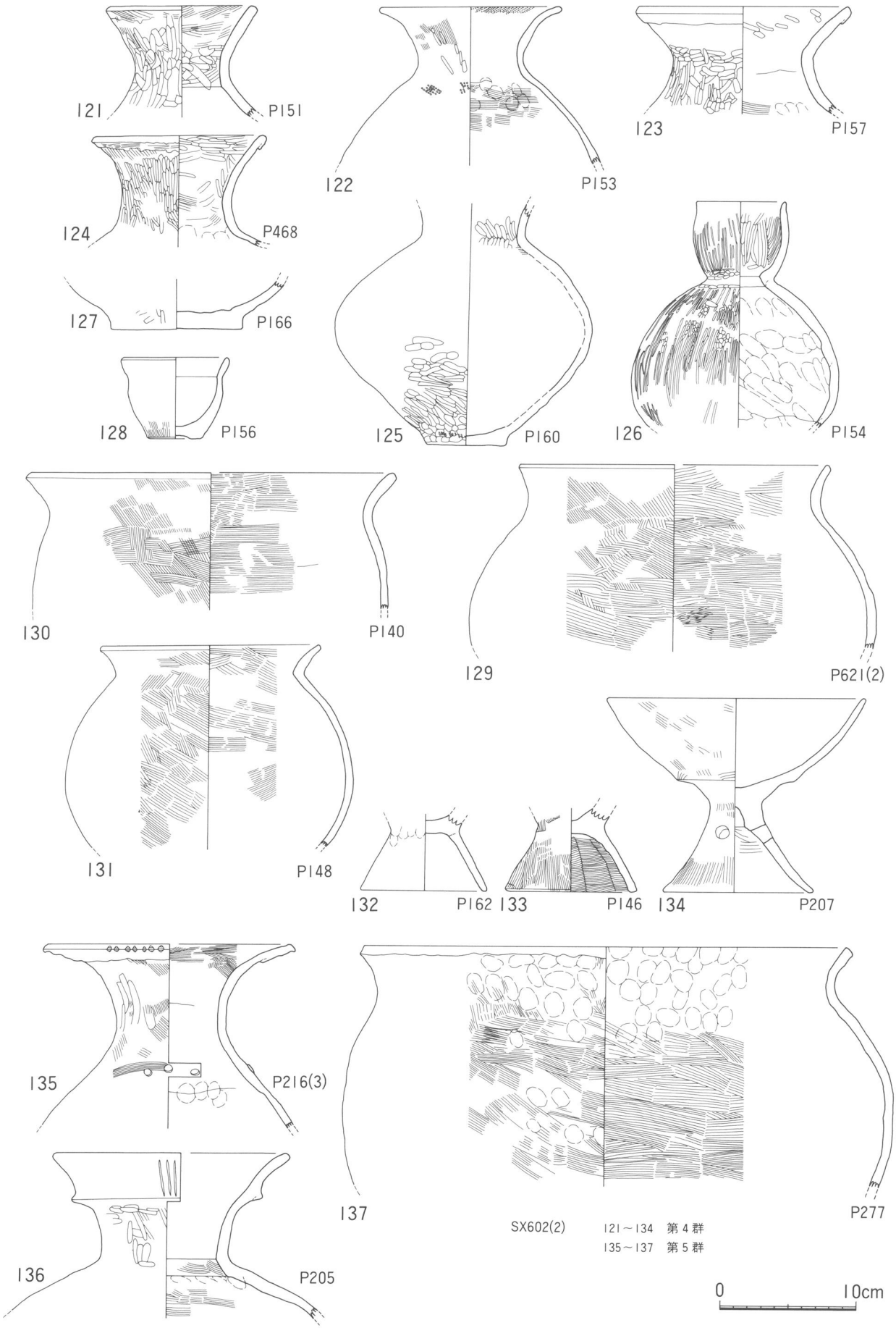
ＳＸ602出土土器

ＳＸ602は微高地上に供献された土器群である。現地調査の段階ではブロック間の時期差は把握できなかったが、今回、挿図の配置にあたっては器種別とせず、ひとつひとつのブロックを重視して配置しブロック間での機種構成の違いも意識して記述したい。

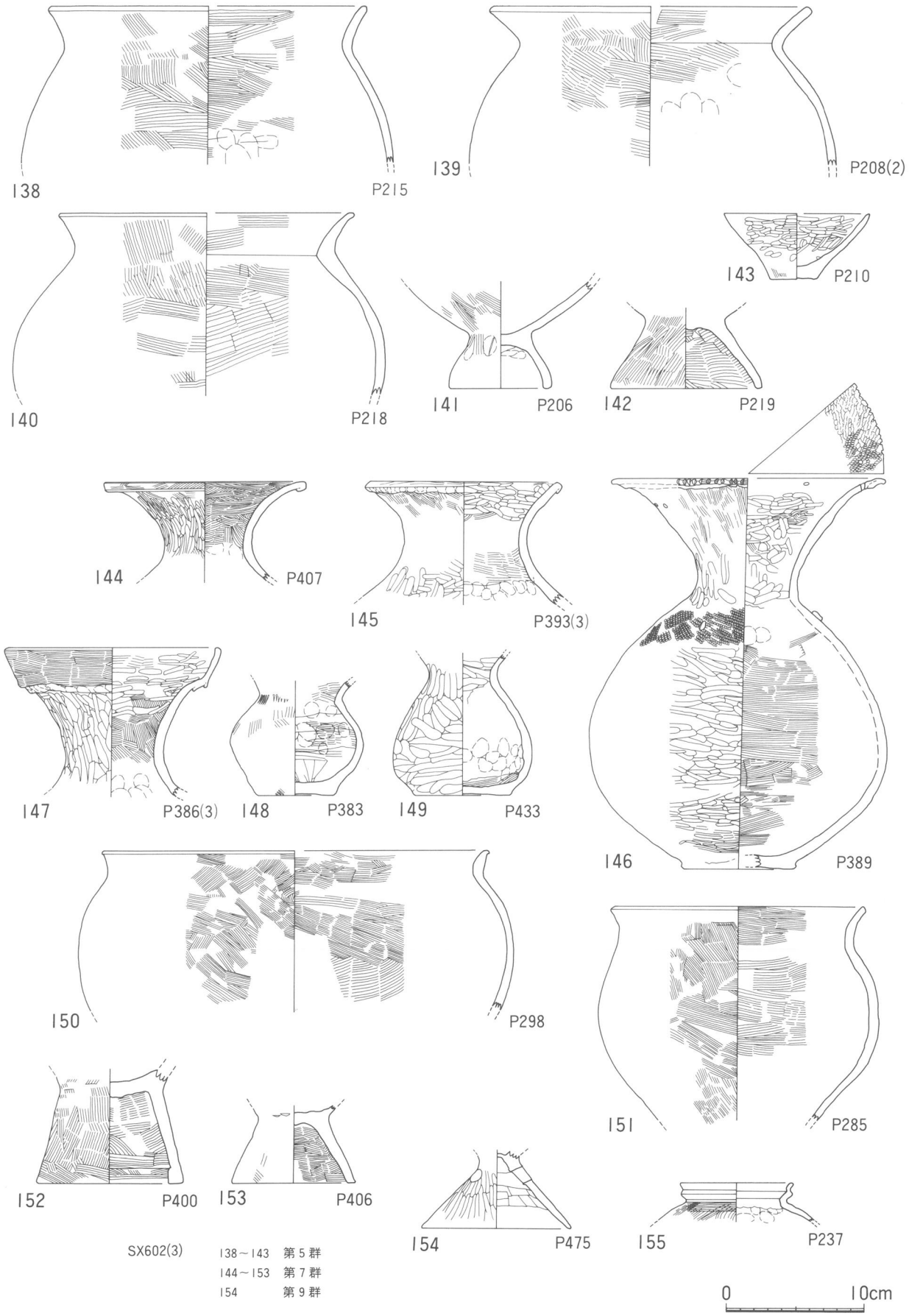
第１群土器は壺、器台、Ｓ字状口縁甕を主体としていた。素縁の103、104の壺と複合口縁の壺105が認められるが、いずれもハケ目調整、ヘラミガキ調整がみられるのみで無紋である。Ｓ字状口縁甕108は、胴部上位に横線を描くタイプで、赤塚次郎氏分類Ｃ類と判断される。器台は口縁端部が素縁で台部が小皿状を呈する器台109と口端部を面取りして、ヘラミガキ調整の110の器台がみられた。第２群土器は、直口壺、壺、台付甕などから構成される。直口壺111は胴部ヘラミガキ調整で、焼成良好である。搬入品である可能性が高い。壺108、114は下胴部をヘラミガキ調整を施すタイプである。高坏115は、裾部のあまり開かないタイプで、ヘラミガキ調整が施される。第３群土器は、小型のＳ字状口縁甕117や坏部の大きく広がる高坏118、120が認められた。119は小形台付甕である。第４群土器は、素縁の壺121、122と折り返し口縁123、124のタイプが認められる。ヒサゴ形を呈する壺125は、細かいヘラミガキ調整がみられ、焼成、色調ともに他の壺類と異なり、搬入品と考えられる。小形鉢128は凹み底で胴部上位で外反するタイプである。甕129から131は、くの字状口縁で内外面ともハケ目調整である。高坏139は坏部の深いタイプで３孔である。第５群土器は折り返し口縁で刻みをもつタイプの壺135と複合口縁で口縁部にヘラによ



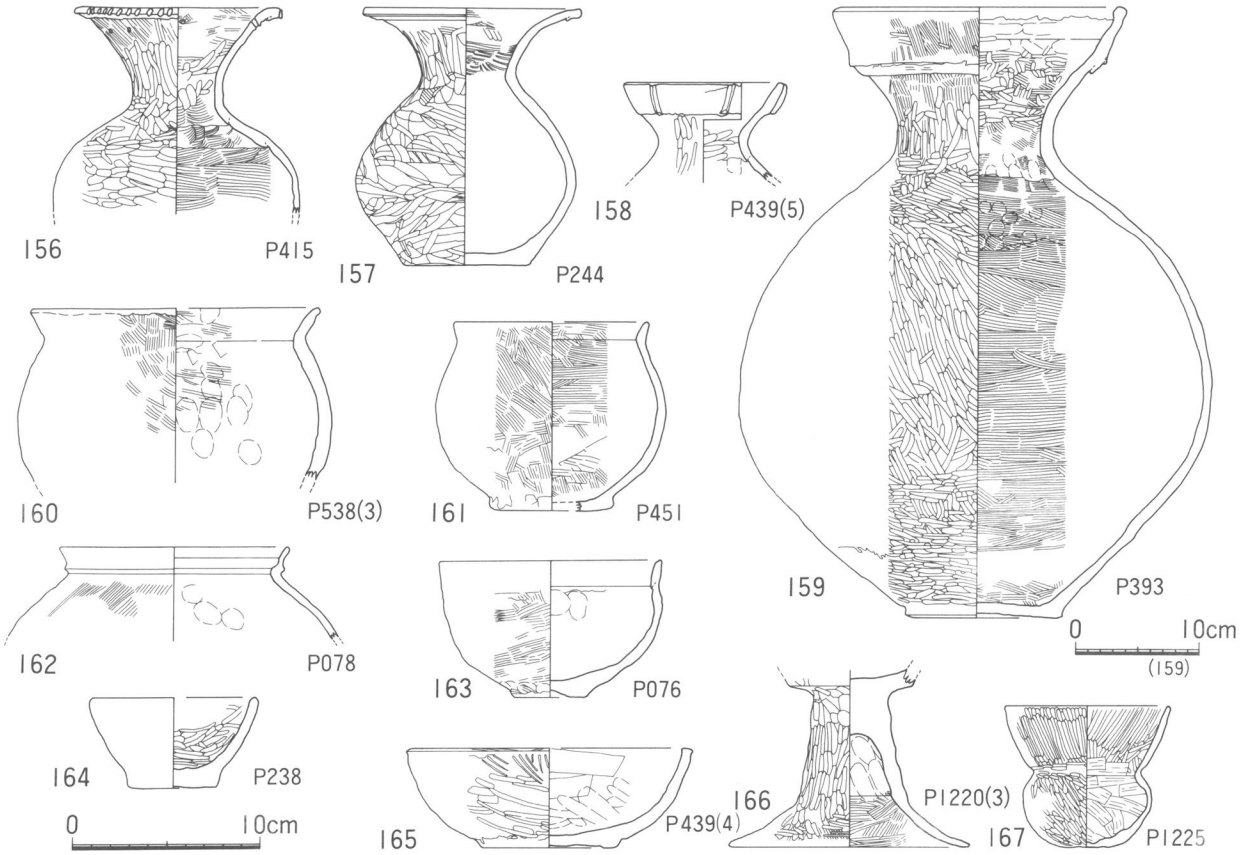
第112図　6区出土土器実測図（7）



第113図　6区出土土器実測図（8）



第114図　6区出土土器実測図（9）



第115図　6区出土土器実測図（10）

る縦方向の装飾をいれた壺131がみられる。甕137から140はくの字状口縁で内外面ともハケ目調整を施す。小形鉢143は内外面とヘラミガキ調整を施す。

第7群土器は供献の最小単位の把握につとめたが、斜面からの出土であって二次的な在り方を示しており、接合関係をみるとＳＸ603と密接に関連している。したがってある一定の年代幅をもつものと理解している点で、ＳＸ602の他の土器群と異なっていた。

壺144、145は折り返し口縁で口頸部ヘラミガキ調整で大きく外反する器形と口頸部の太く短い器形がある。壺146は折り返し口縁で球形胴の器形で、口縁部内面と胴部上位に単斜縄文をもつ。壺147は複合口縁で添付紋は付かず、ハケ目調整である。小形壺148は全面にわたってヘラミガキ調整を施している。小形壺149は胴部をハケ目調整を施す。甕150は内外面ともにハケ目調整を施す。甕151は球形胴を呈し、甕胴部上位に最大径がくる器形である。第9群土器では小形高坏154がある。第1群から第9群土器の土器供献から離れた箇所においても同じ層位から小形Ｓ字状口縁甕155が検出されており、未調査区にも土器供献の存在が想定される。

ＳＸ603

ＳＸ603出土土器は微高地斜面から河道の出土で土器片が厚く重なっており、微高地からの流入もあって、単一時期とは考えられる訳ではなかった。壺156、157は折り返し口縁で外面ヘラミガキ調整で装飾はみられない。壺158は複合口縁で棒状添付紋がつくが、複合口縁壺としては小形である。壺159は口縁

部に添付紋はつかずハケ目調整を施す大形壺である。甕160はくの字口縁で内外面ともハケ目調整を施す。平底甕161は胴部中位に最大径がくる器形でハケ目調整を施す。なお、遺構外の出土土器の甕162はＳ字状口縁甕で赤塚氏分類Ｃ類である。鉢163から165は外面をヘラミガキ調整を施す。ほかに高坏166と坩167がみられた。

２．木製品

木器・木製品としては、蓋、高杯、フォーク状木製品、木槌、鍬未製品、ハシゴ、櫂状木製品、えぶり未製品、ヘラ状木製品、くり物など比較的、バラエティーに富んだ遺物が認められた。

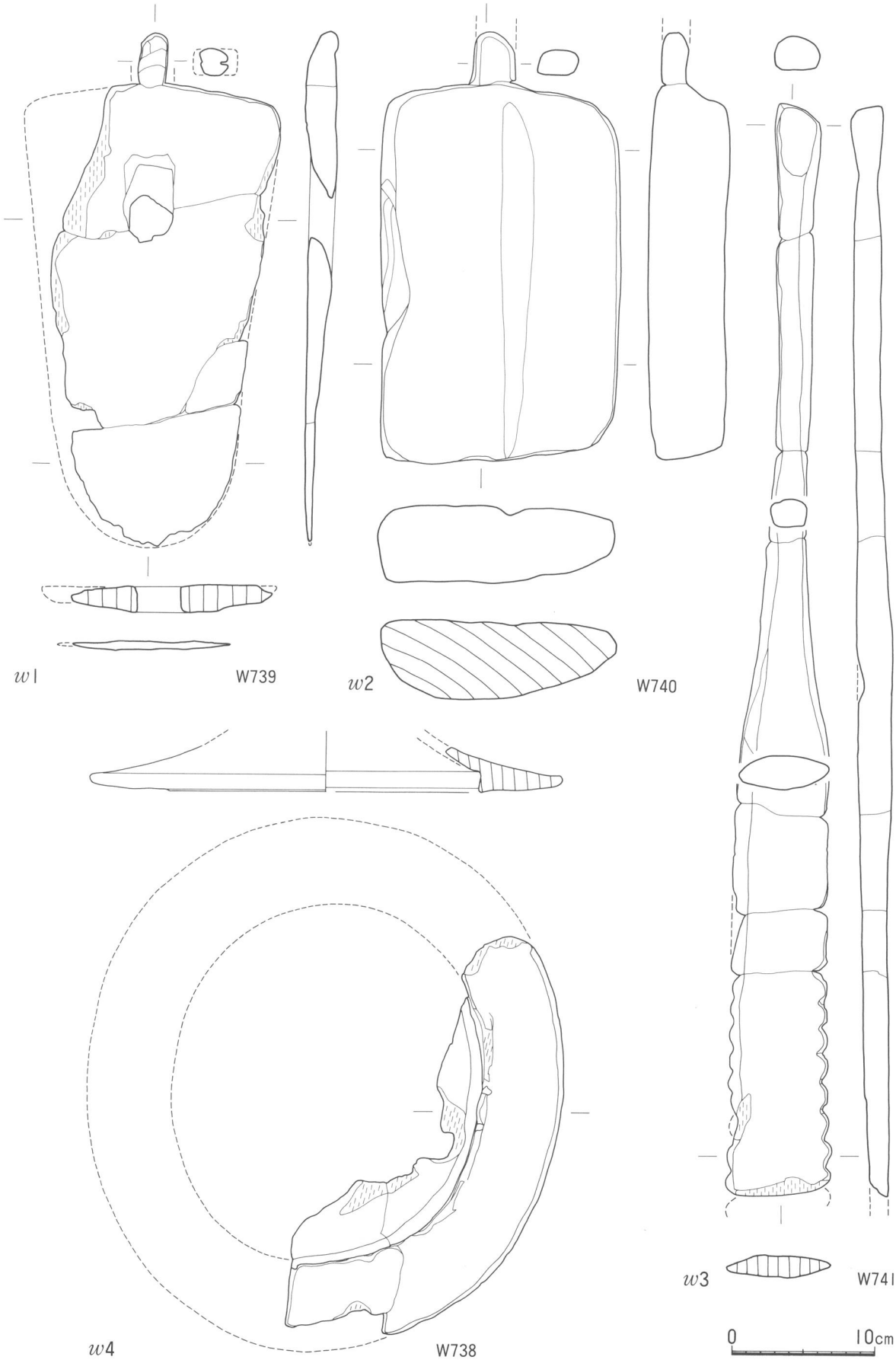
弥生中期遺物集中箇所出土木製品

弥生中期の土器とともに出土した１は鋤である。組み合わせ鋤であろうか。中央部に縦長の孔がうがたれている。刃先端が薄くなっており、長期間使用されたものであろうか。２は長方形の厚い板で先端に突起がみられる。未製品であろうか。３は舟の櫂に似た形態であるが柄の部分の断面が丸く身部断面が偏平な菱形であり、鋸状の歯をつけている。柾目取り。４の高杯については、横木取りで、脚部か杯部か不明であるが、脚として掲げた。平坦面に小さな孔がうがたれている。

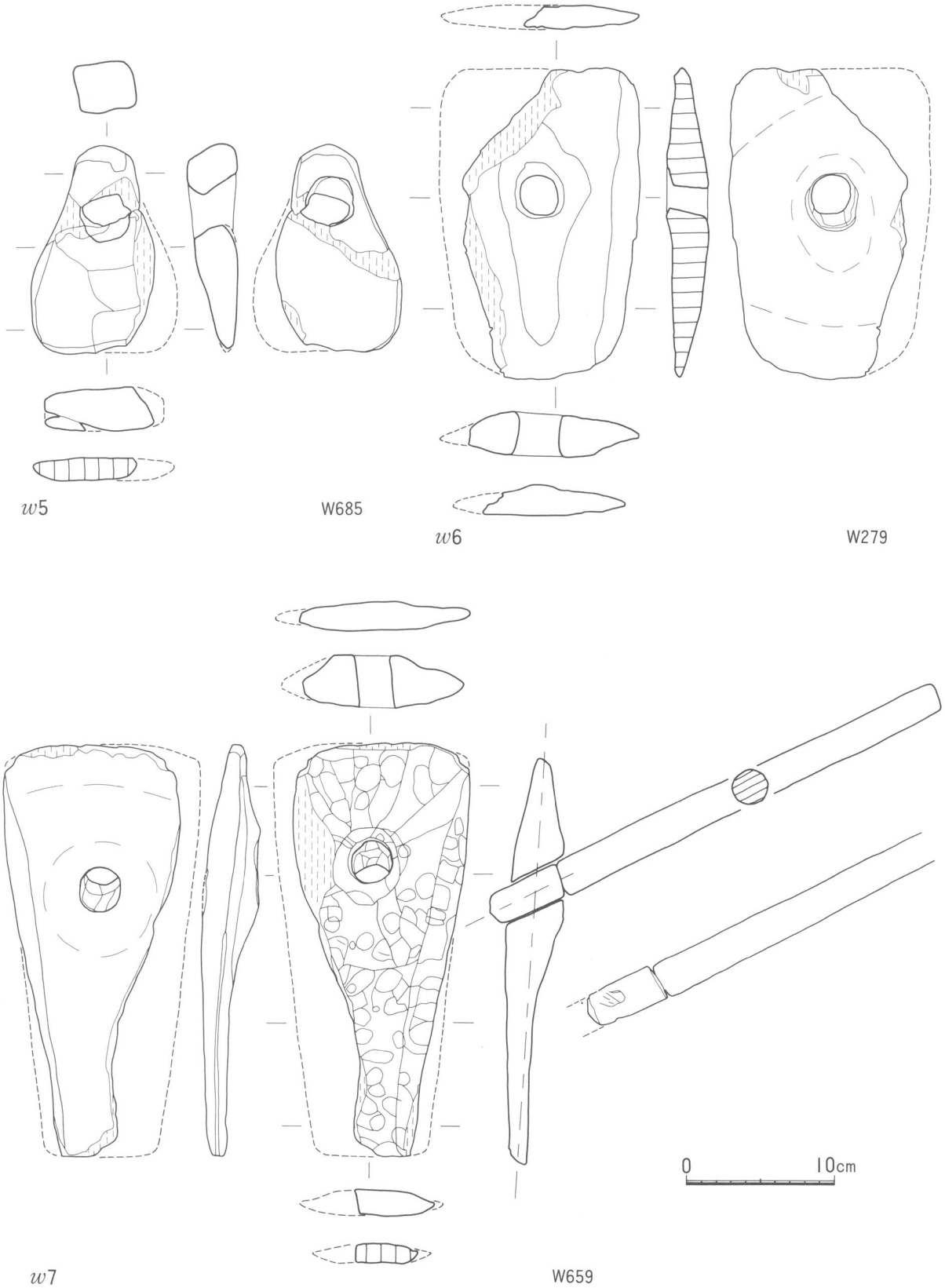
水田形成以前の低地や畦畔に転用された木製品は、弥生後期前半から後半と判断されるが、畦畔の作り替えもあって、時期については単に弥生後期～古墳前期と考えられるので、以下の記述では形態別に区別してすすめたい。

農具

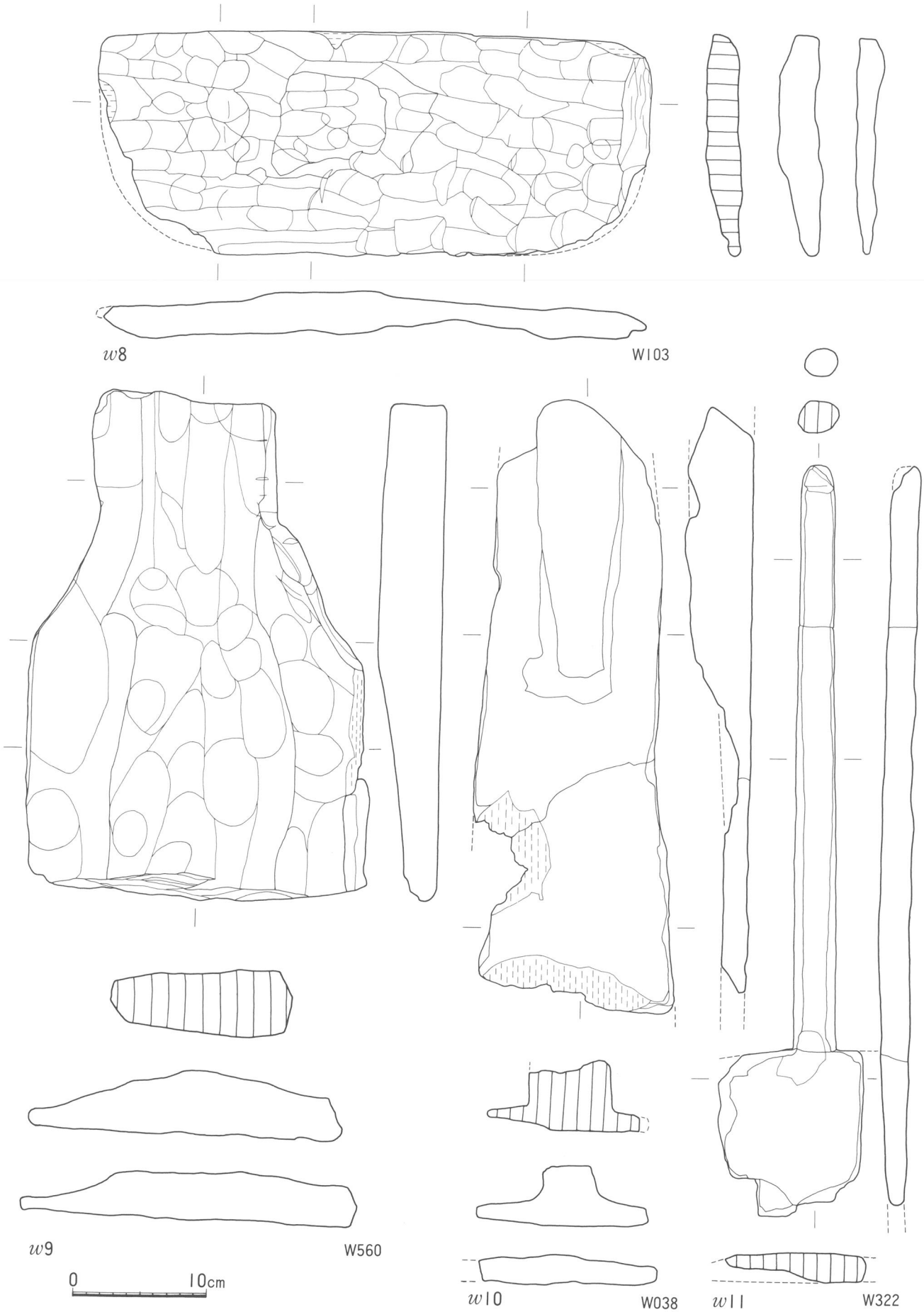
７は小形の鋤であるが、検出時に柄が装着されていた。柄壺は隆起部を作り出している。５は刃部が幅広く、頭部の小さく丸い形態である。柄壺の大きさから本来、もっと大きいものと考えられる。刃部先端は厚くなっており、使い込まれていくうちにこのような形状になったのではないかと想定される。ＳＲ601（古）の出土で弥生後期前半の可能性が高い。６は鍬であるが礎板に転用されたと判断される。大形の土坑ＳＸ614からの出土で、この遺構は礎板が出土しており、柱穴と別の遺構の重複が考えられるので、時期は単に弥生後期としておく。８は形状から横鍬の未製品と考えた。ＳＲ605からの出土で古墳時代前期の可能性が高く９は広鍬の未製品と考えている。ＳＫ621からの出土である。未製品も畦畔の補強の中に埋め込んだのであろうか。10は鍬の未製品であろう。柄壺の突起部を作り出している。畦畔の間であり、水田内からの出土と考えたが、水田耕作土が流失していたので、河道ＳＲ601の新しい段階と考えておく。11は鋤であろう。柄と身は一木づくりである。畦畔の間からの出土であるが、水田耕作土より深い位置であり、弥生後期前半に遡る可能性が高い。12は孔をあけた田下駄である。13は欠損しているが、歯は４本ではないかと想定される。水田と考えられる位置から出土した。16は横槌であるが、柄と身部の境界の加工がていねいである。河道ＳＲ601からの出土であり、弥生後期後半か古墳前期であろう。14は先端を二又とし、頂部に長方形のクリップをつくりだしている。先端部の一部を欠いているが、ほぼ全様を知ることが出来る。長さ73.5㎝、幅8.2㎝～5.2㎝を測る。材質はアカガシと考えられる。きわめてていねいな作りで、把手部をつくり出しており、単なる農具でないと思われるが、今後の類例を待ちたい。畦畔ＳＫ621内の出土で弥生後期後半から古墳前期と考えられる。15は舟の櫂に類似した形



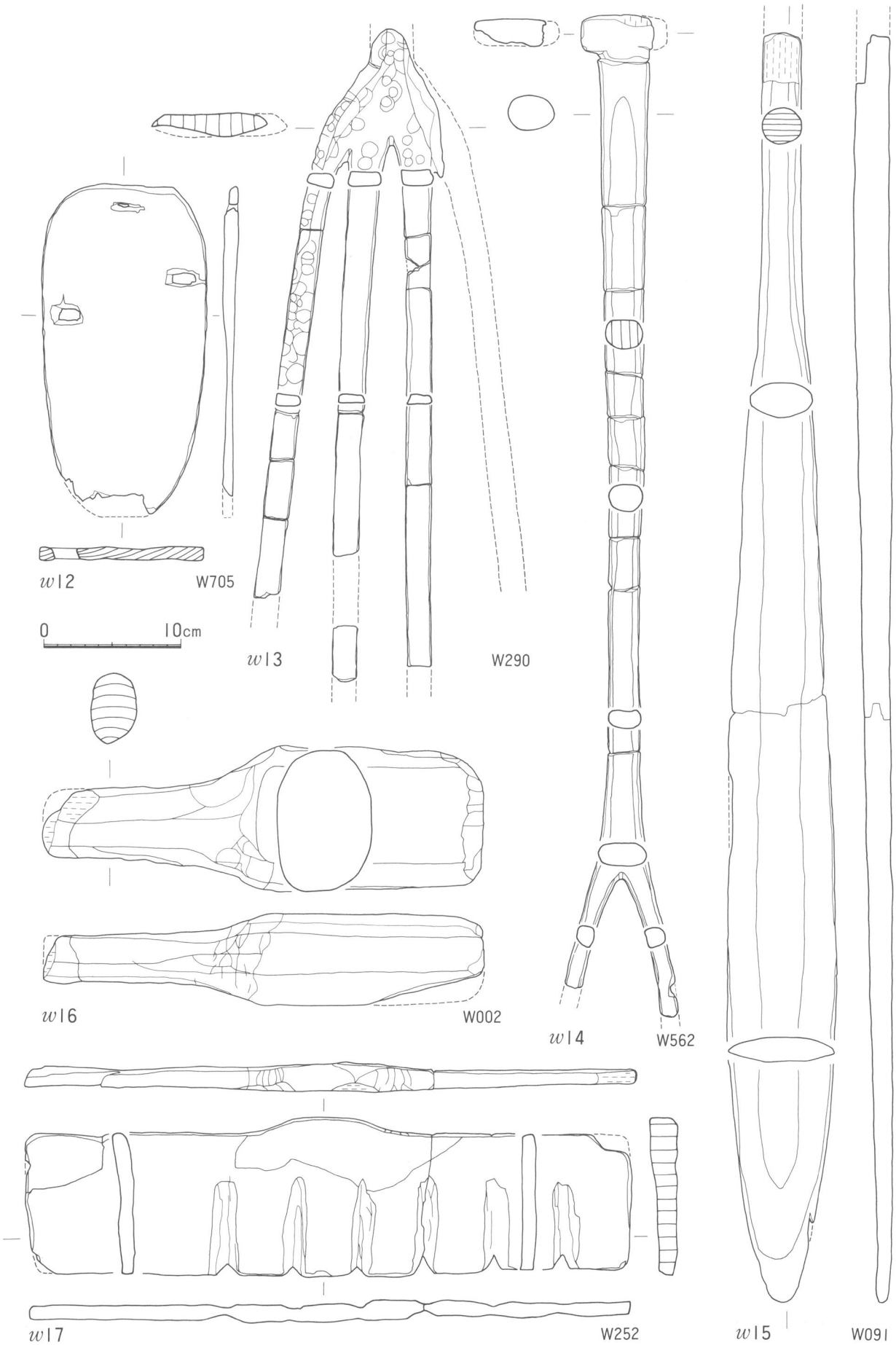
第116図　6区出土木製品実測図（1）



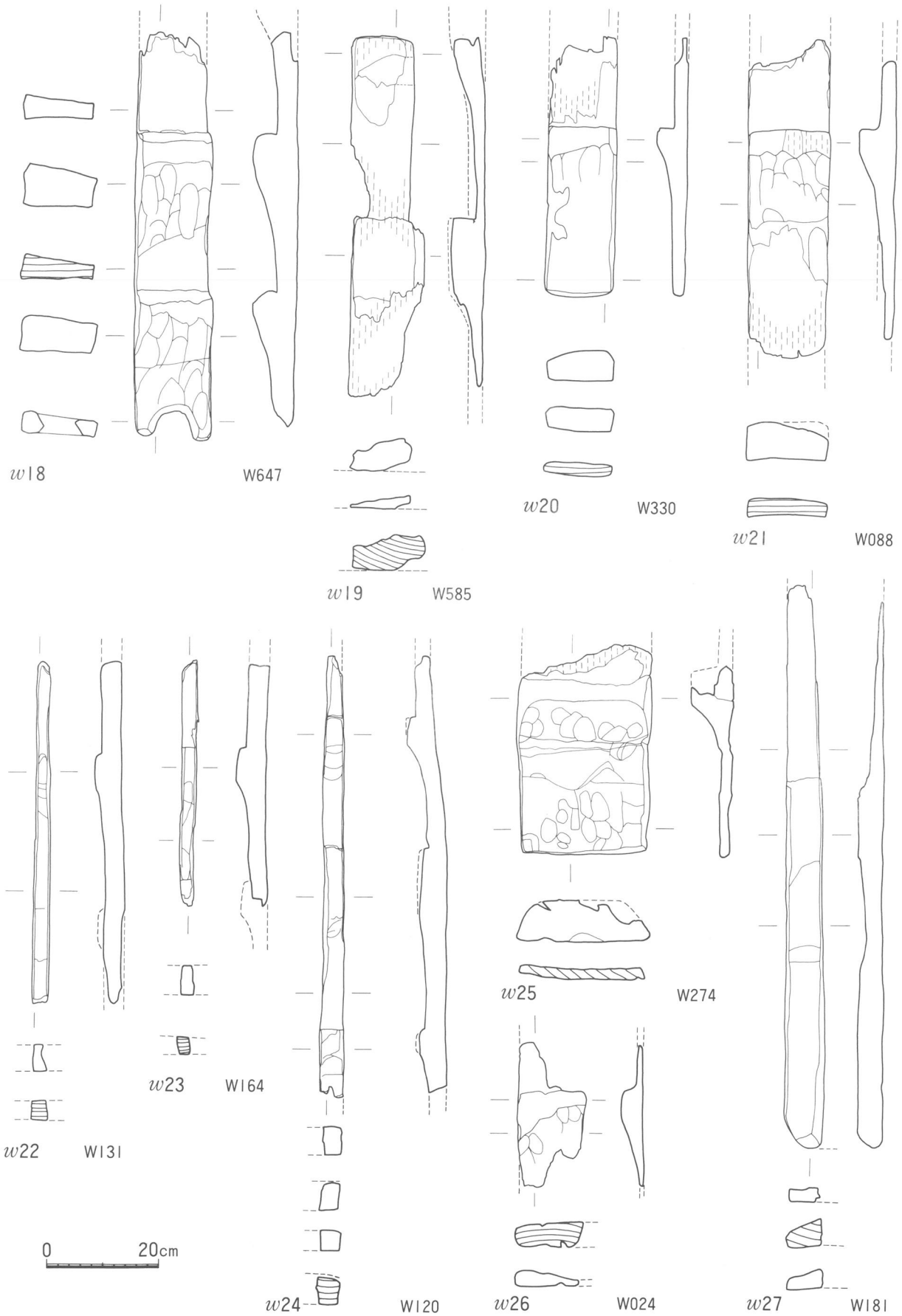
第117図　6区出土木製品実測図（2）



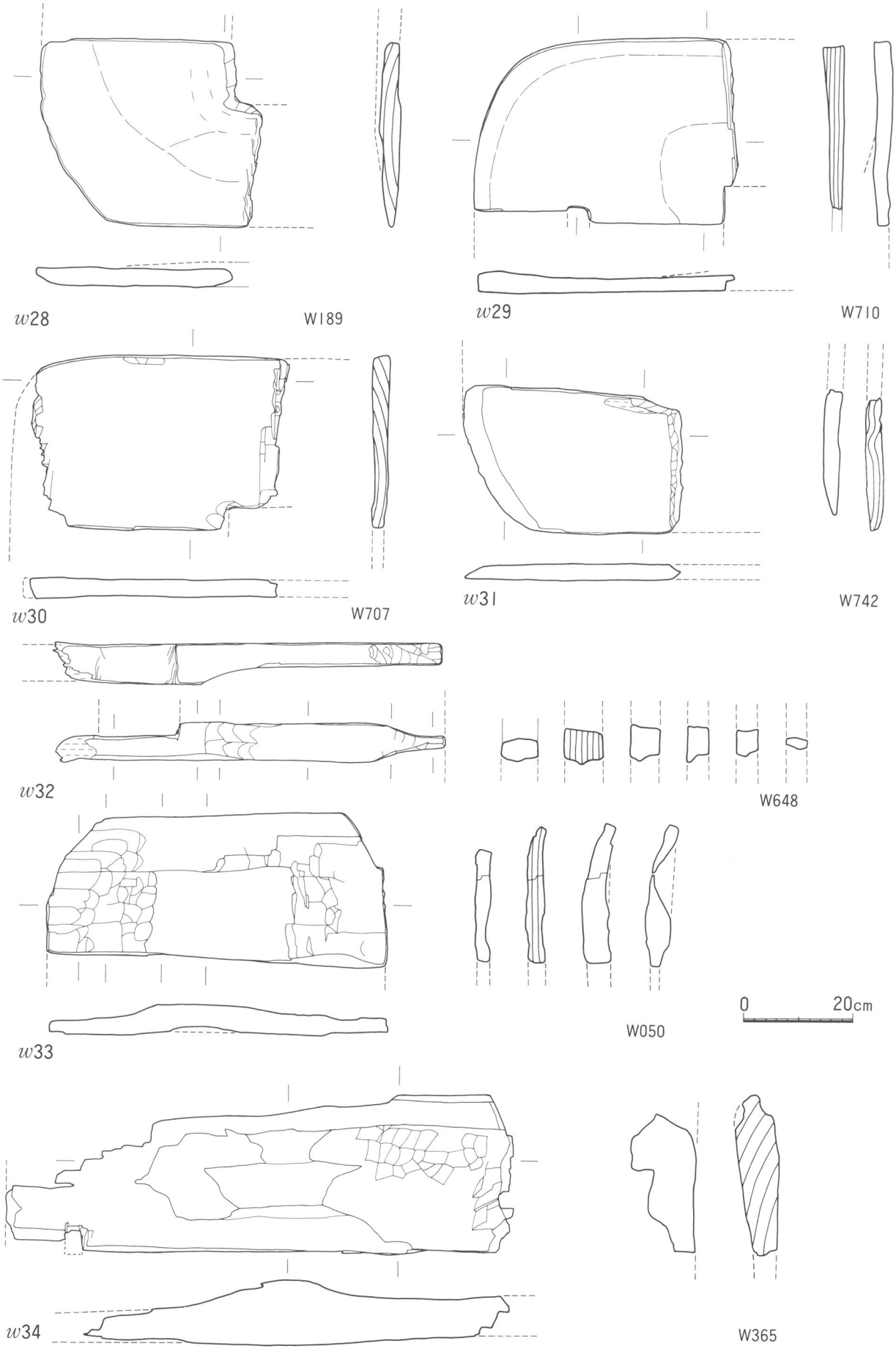
第118図　6区出土木製品実測図（3）



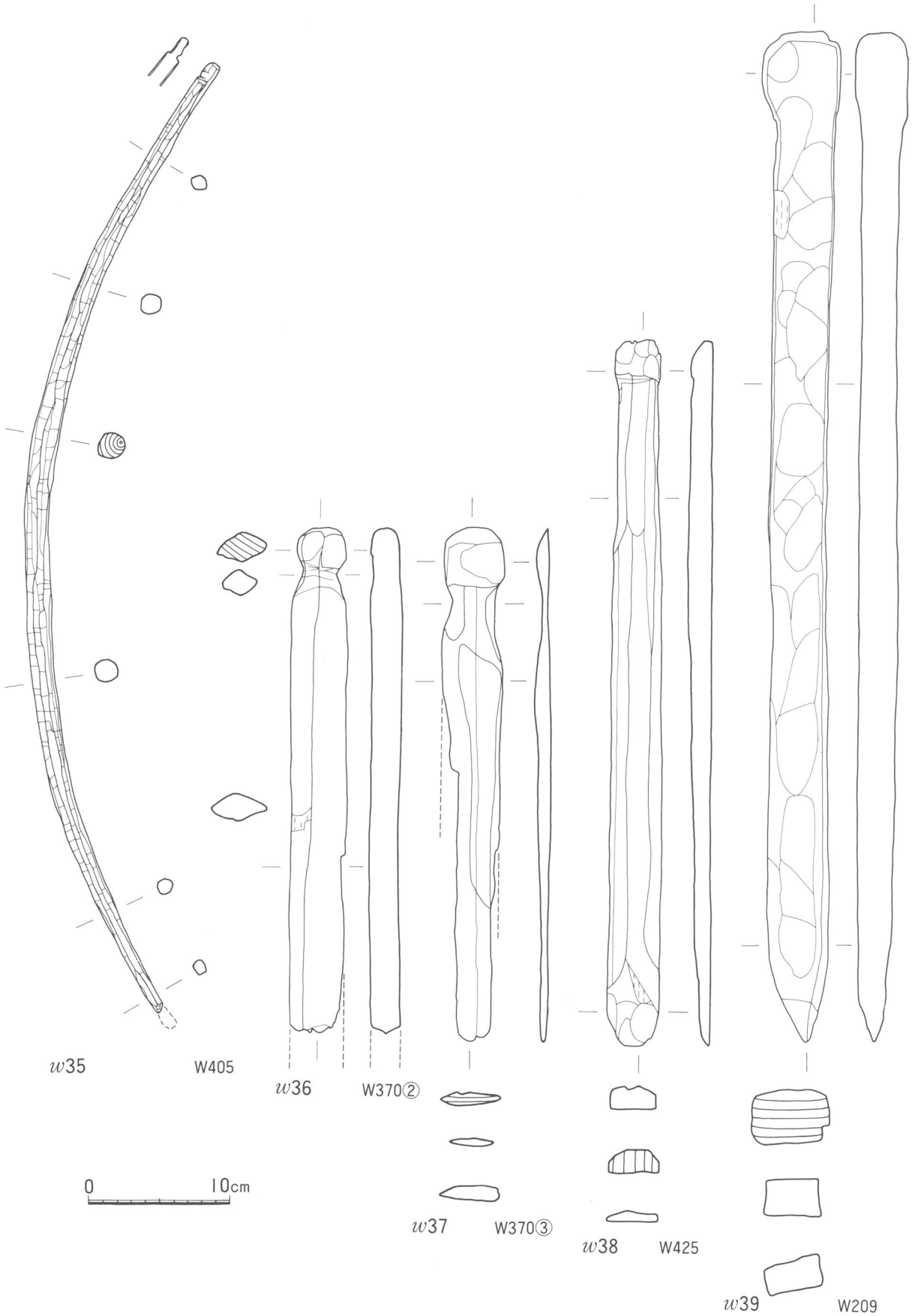
第119図　6区出土木製品実測図（4）



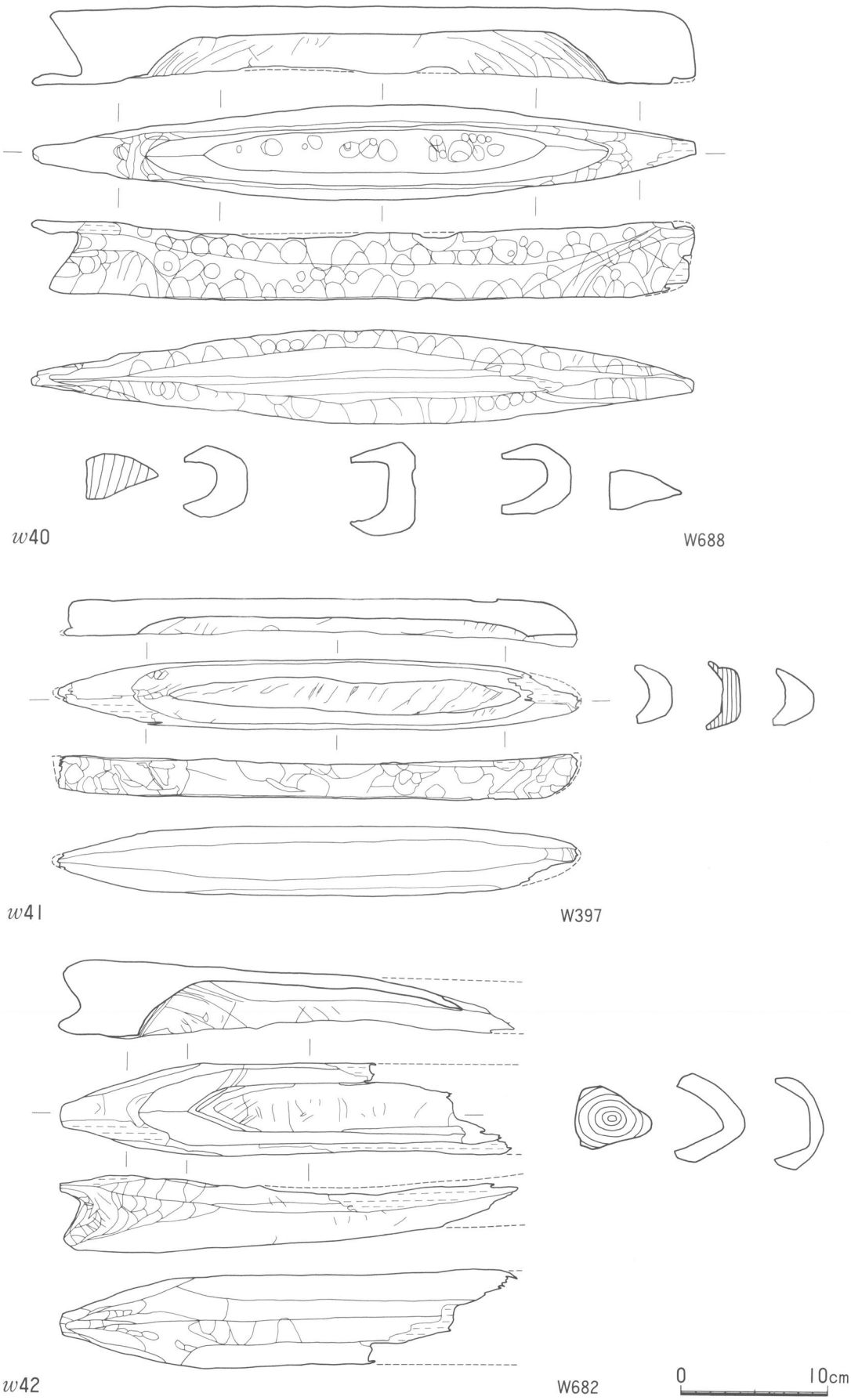
第120図　6区出土木製品実測図（5）



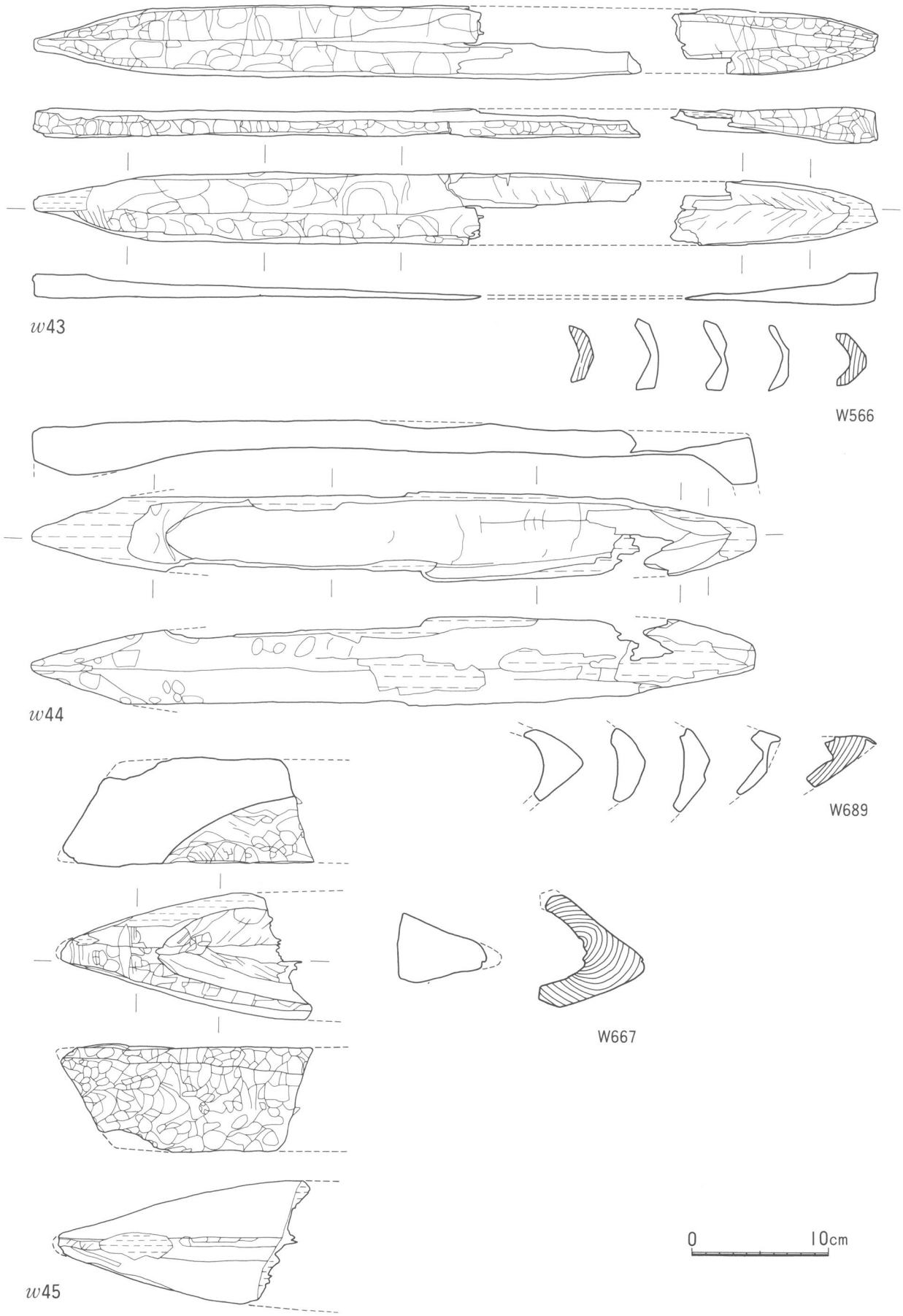
第121図　6区出土木製品実測図（6）



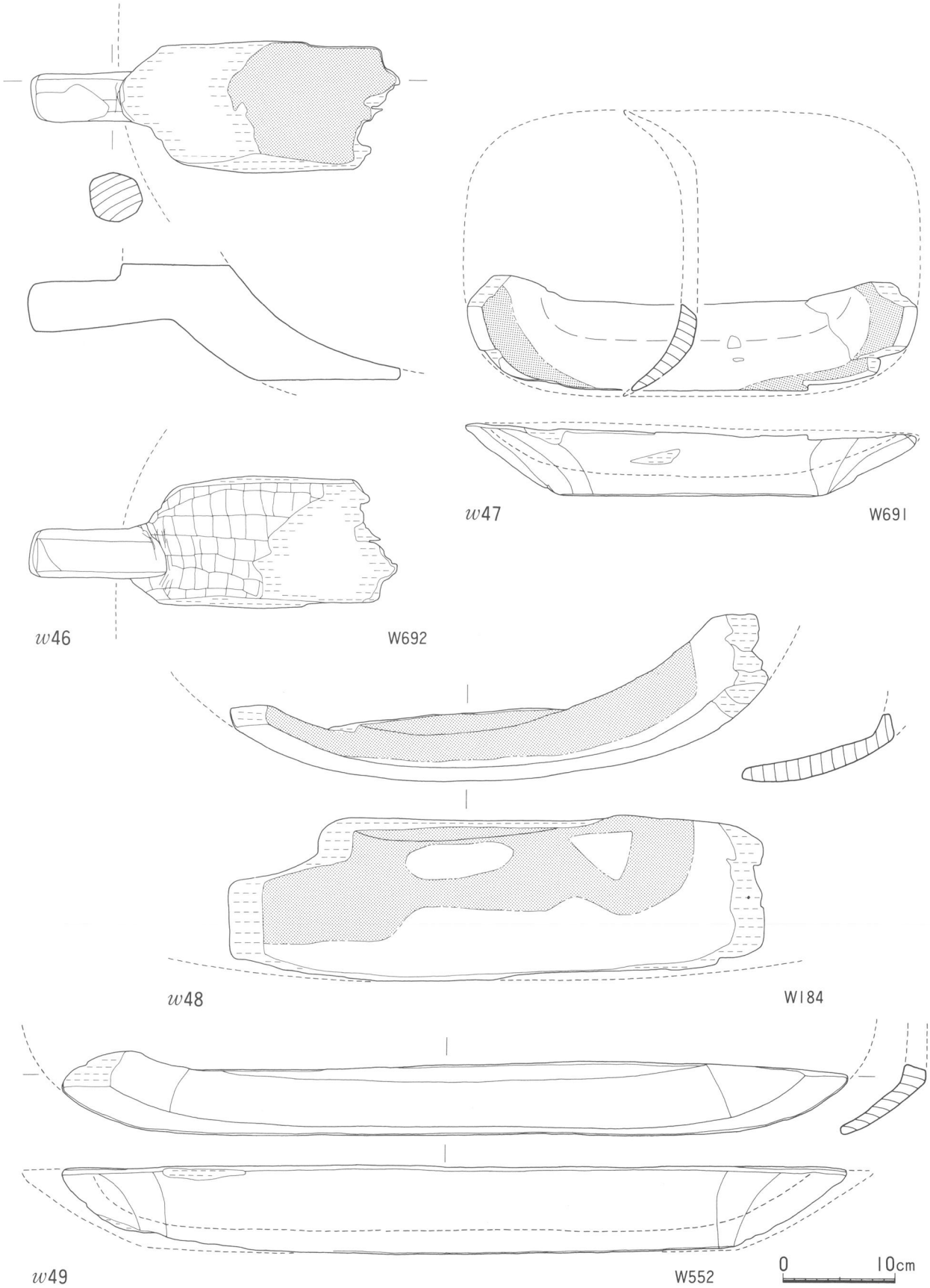
第122図　6区出土木製品実測図（7）



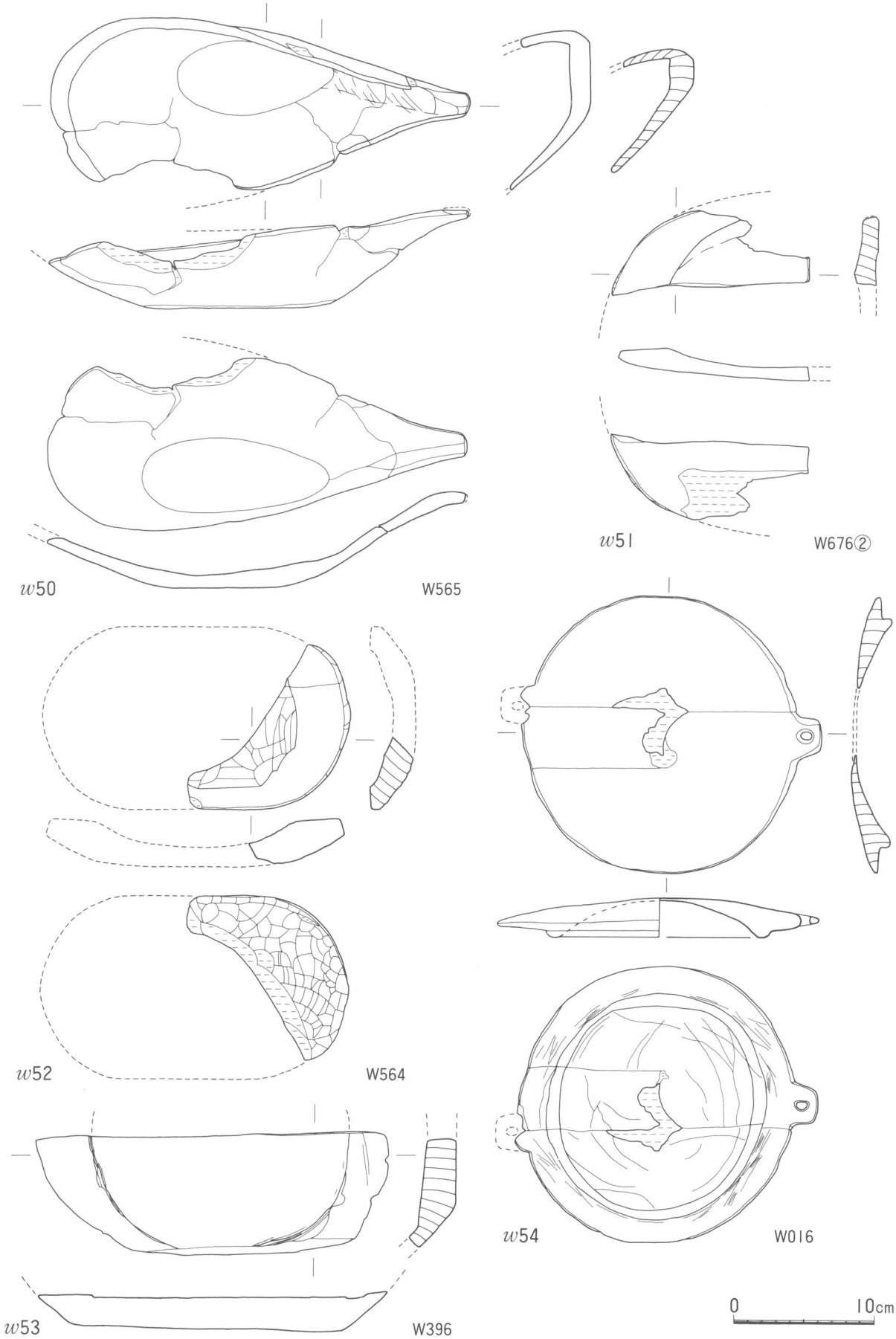
第123図　6区出土木製品実測図（8）



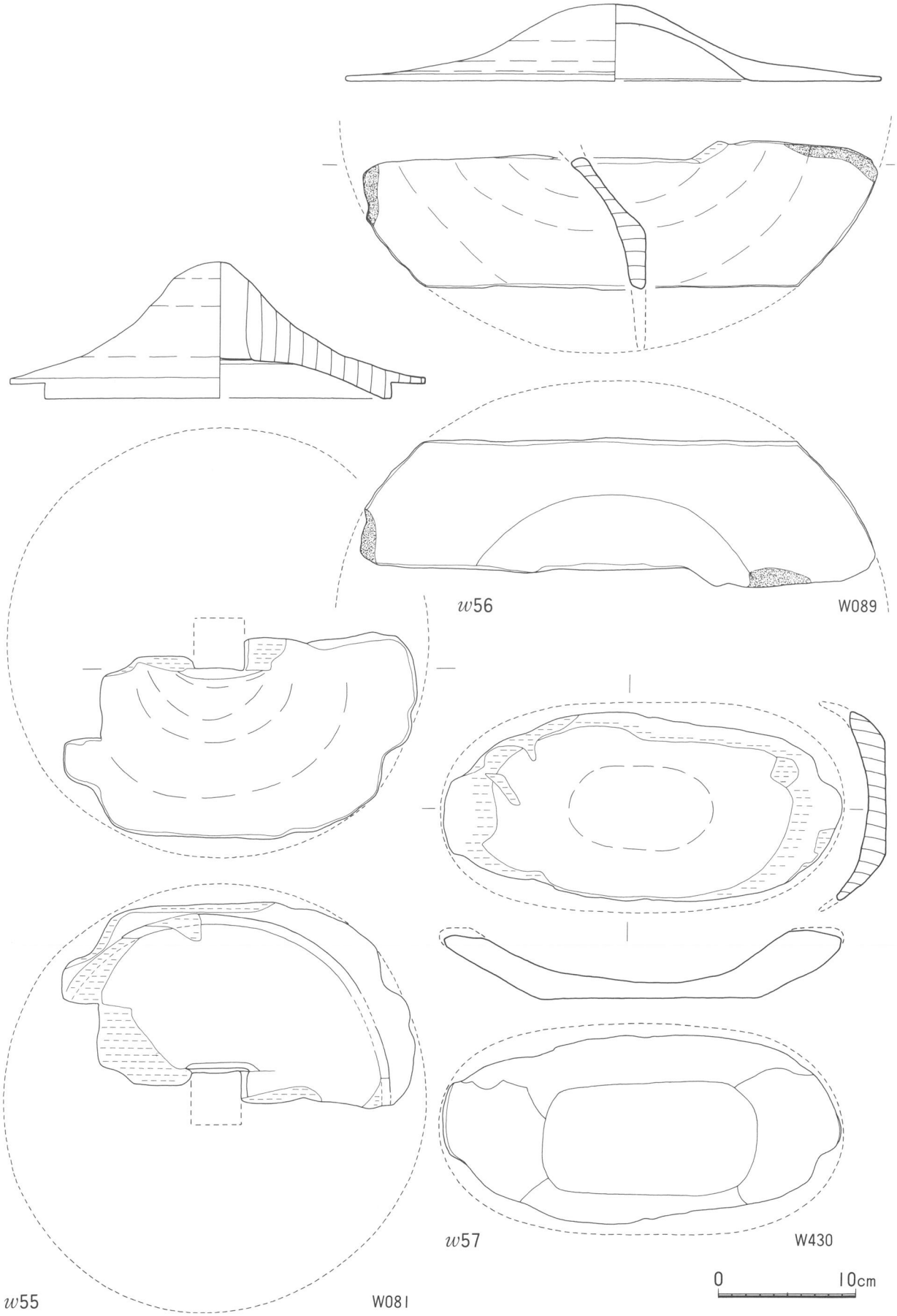
第124図　6区出土木製品実測図（9）



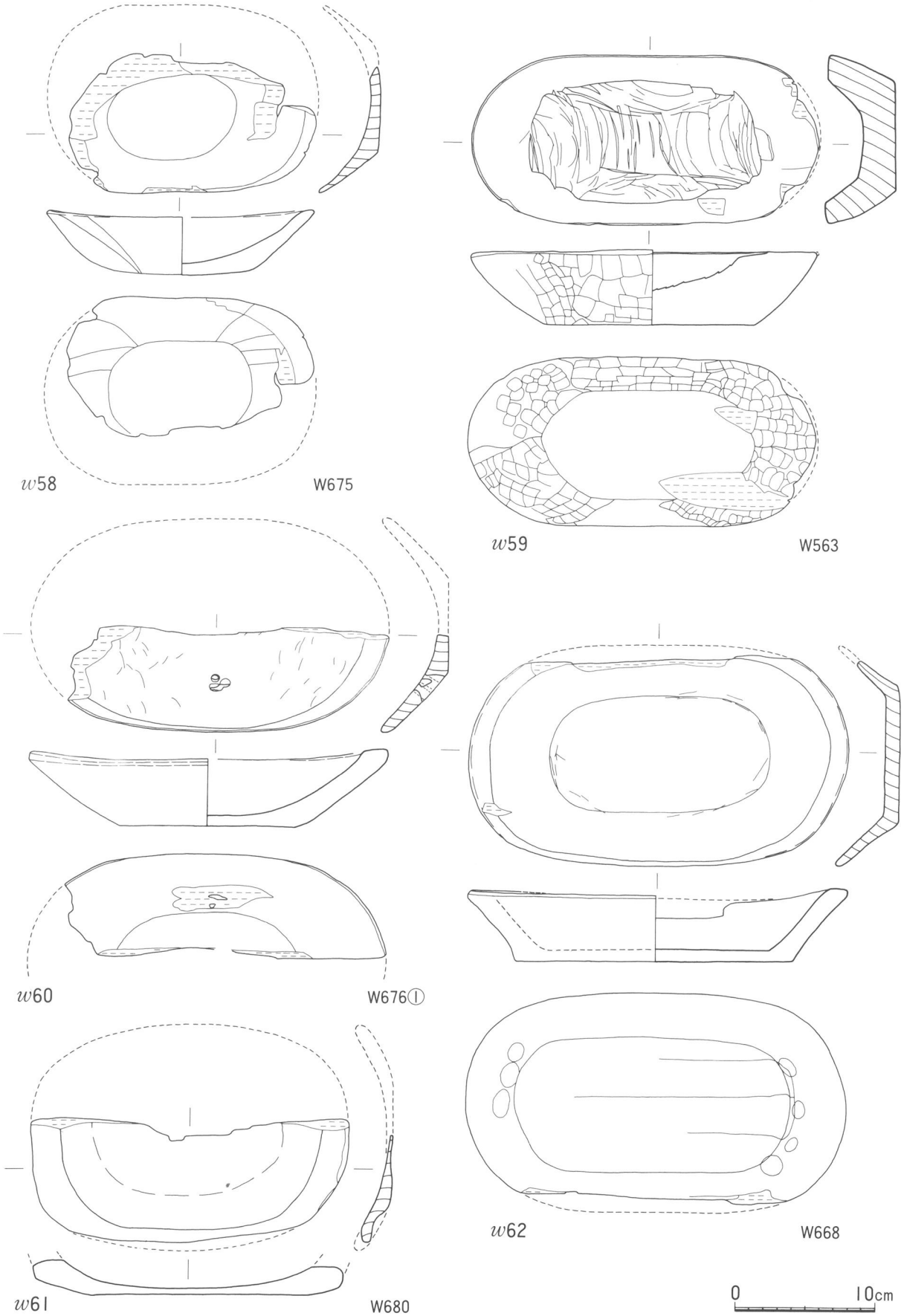
第125図　6区出土木製品実測図（10）



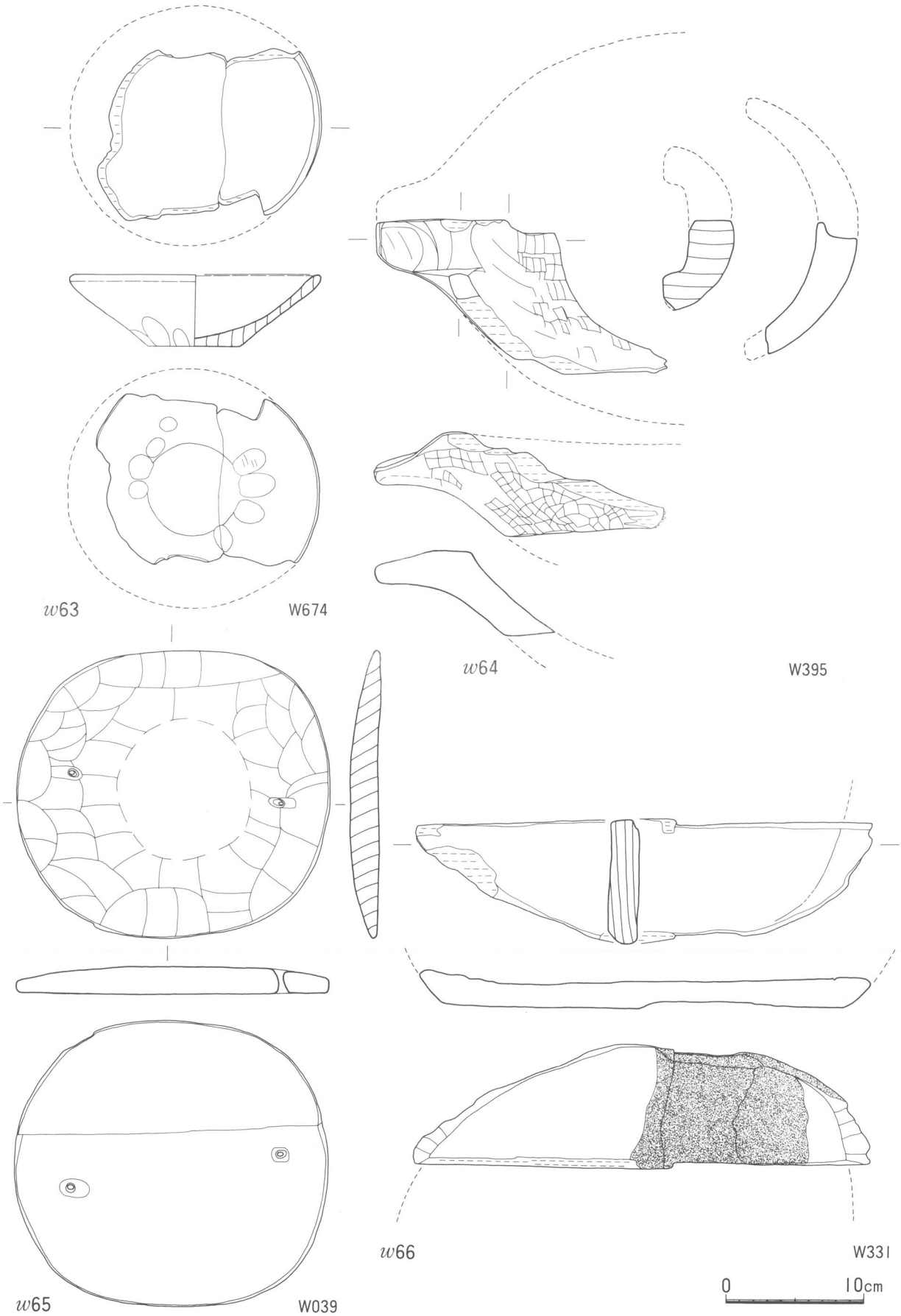
第126図　6区出土木製品実測図（11）



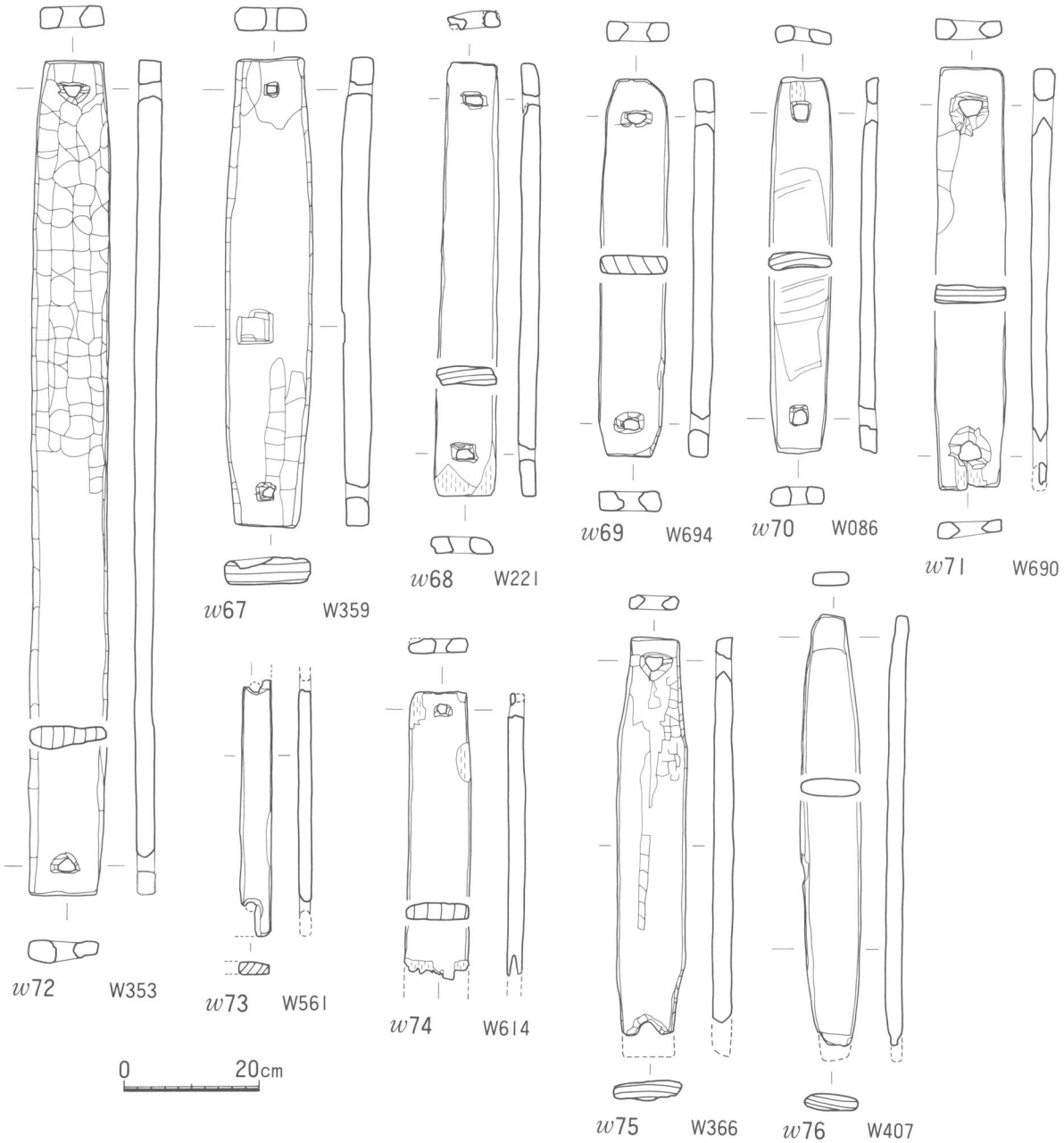
第127図　6区出土木製品実測図（12）



第128図　6区出土木製品実測図（13）



第129図　6区出土木製品実測図（14）

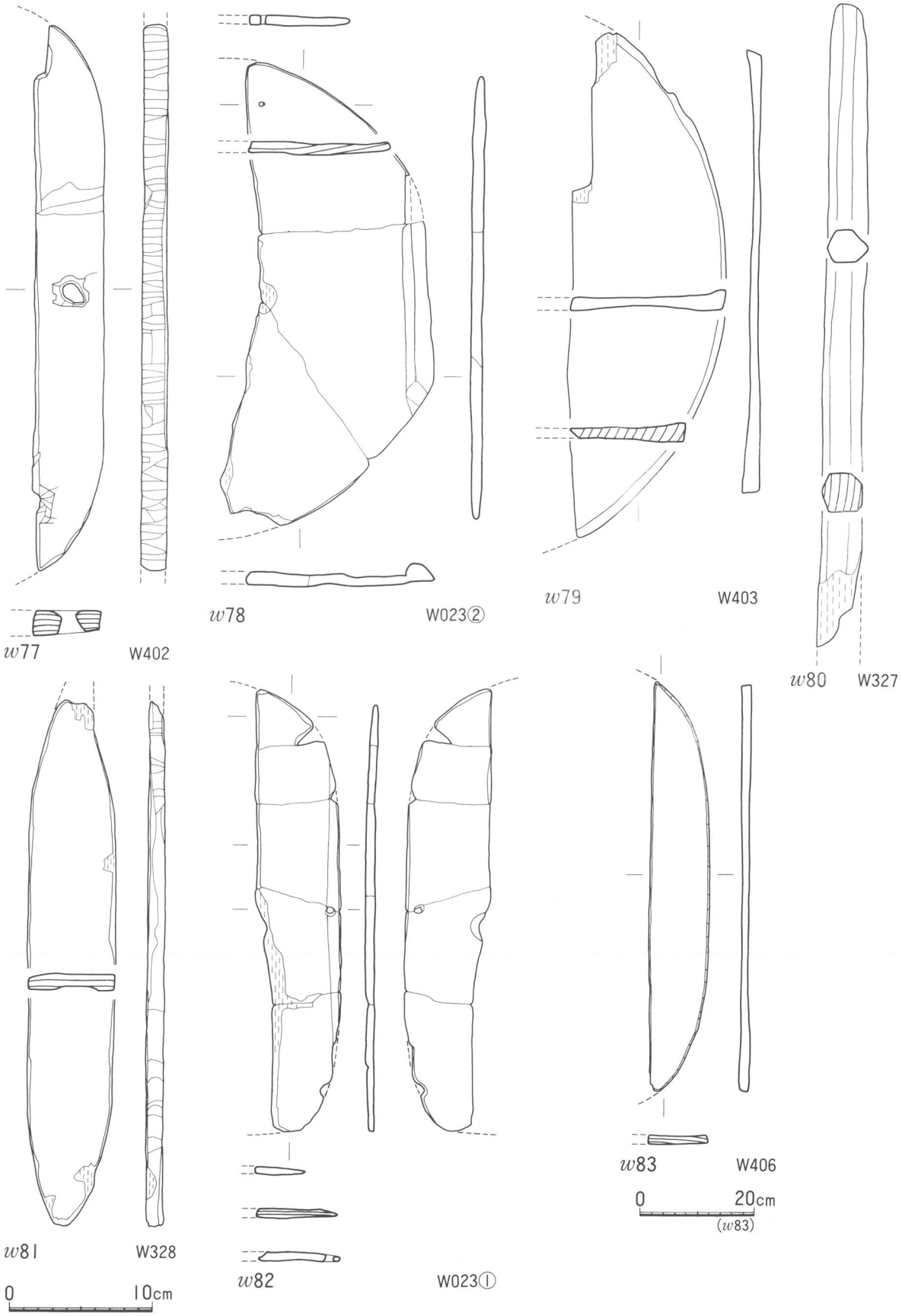


第130図　6区出土木製品実測図（15）

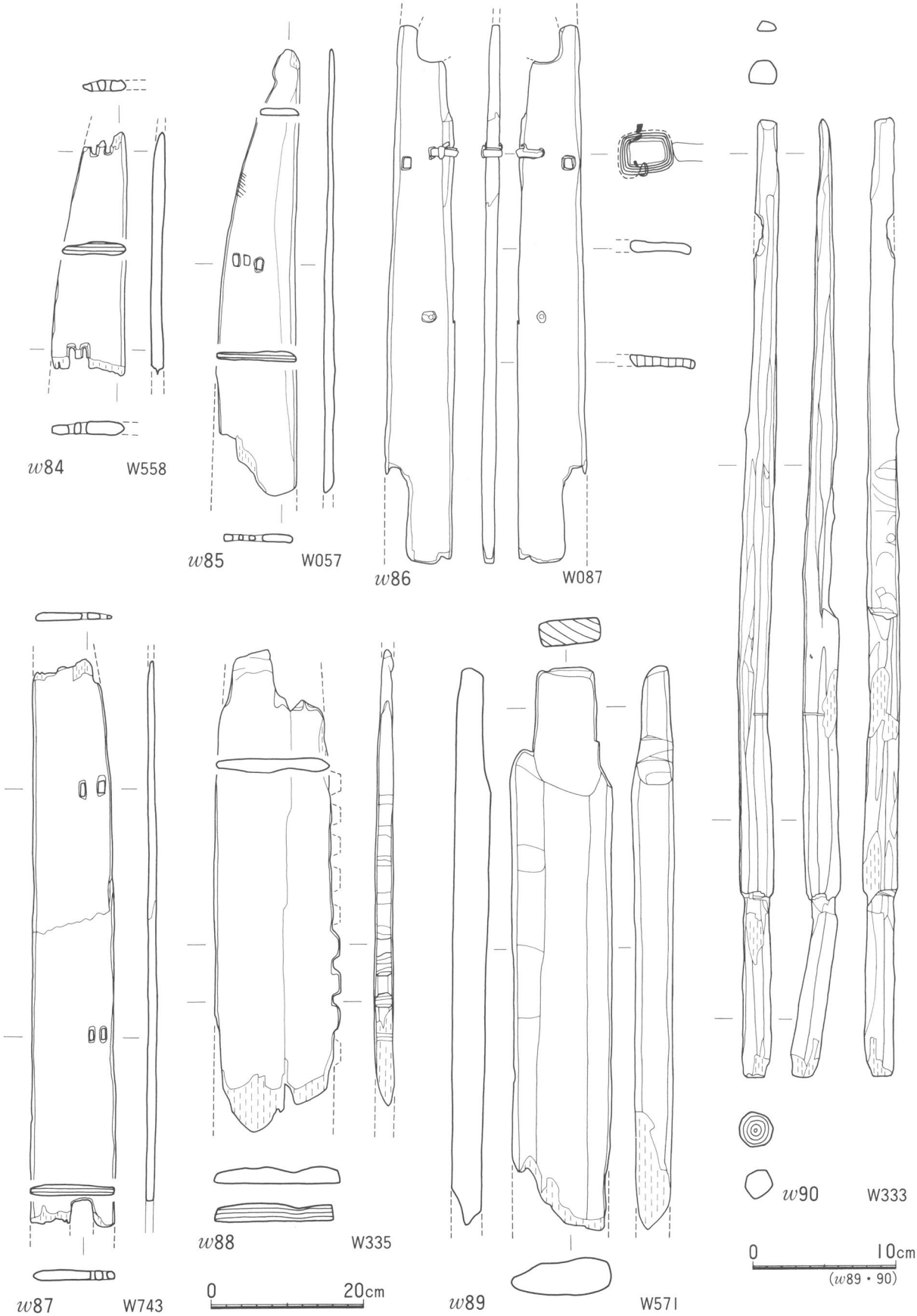
態であるが、掘り棒の可能性もありここに掲げた。水田内の出土で弥生後期後半から古墳前期と考えられる。16は木槌で排水溝をかねたトレンチから出土した。表面は流水によって摩耗しており、河川によって流失したものと思われ、河道ＳＲ601の新しい段階と考えておく。17は幅広の身に歯をつけており、えぶりと理解できる。畦畔ＳＫ621の土器集中箇所からの出土であり、一括廃棄と考えられ弥生後期後半であろう。

梯子・ネズミ返し

18～34は梯子であるが、32については建築材をさしこむホゾ穴があって、もともとネズミ返しとして



第131図　6区出土木製品実測図（16）



第132図　6区出土木製品実測図（17）

使われ、接地面を削りだしており、梯子として転用されたと考えた。23・24はＳＡ607の杭として転用されている。29～32はネズミ返しであるが、微高地上の掘立柱建物の礎板として転用されていた。なお、25は材が圧密化を受けて変形している。ハシゴの破損したものついては杭や畦畔の補強に埋め込んでいるなど転用している。この用途は長崎遺跡の各調査区でみられたあり方とほぼ共通している。なお、27の梯子、30、31のネズミ返しについては、転用されているため、旧の形状の認定には別の意見もある。

弓

35は丸木弓で内面を細かく削っている。残存長73㎝、幅1.85㎝、厚さ1.8㎝を測る。弓筈は一方が残っている。出土状態は水田内からであるが流木とともに出土しており、流入の可能性が高い。

有頭棒

性格不明の木製品である。39は杭に使用され、38はＳＤ627から出土した。卜骨の存在や土器廃棄の在り方からなんらかの祭器の可能性も否定できない。36・37の出土状態は水田内からであるが、流木とともに出土しており流入の可能性が高い。

舟形木製品

特筆できる資料としてミニチュアの木製舟が出土した。この資料は水田形成以前の層位から出土したもので弥生後期前半～後半の時期といえる。出土遺構は河道ＳＲ601（古）が低地として残ったところといえる。

いずれも形態は立体舟形で内部を刳り抜くタイプである。全長の推定できるもので30～50㎝、幅６㎝～５㎝、高さ２㎝前後と考えておきたい。杉材が多いと判断された。特に保存状況の良いものを見ると、舟首部分に相当する部分にも欠き込みの加工を施しているものもあるが、この舟形木製品がどの程度忠実に独木舟を模したかも判断できないため、あえて船首、船尾の区別をせず、記述をすすめたい。40は舟首部分に相当する部分にも欠き込みの加工を施している。中央部の断面形が舟底部分の隅を切っているが、船首、船尾部分は三角形を呈している。舟底部分にもていねいな加工を施している。41は断面形では両端からそれぞれ５㎝と4.2㎝と平坦面を残し、内部を浅く削っており、あるいは舳と艫の区別を意識しているかも知れない。42は舟首部分に相当する部分にも欠き込みの加工を施している。欠き込み部分の加工はていねいである。舟体中央部は三角形を呈する。43は細身の形態で内部を浅く削っている。舟底の加工もていねいである。44は43と同様に船尾、船首に相当する部分のみ細く内部は浅く削っている。45は部分のみではあるが、６区出土舟形木製品ではもっとも大形品である。側面の加工も丁寧である。

なおこれら舟形木製品の形態の違いと年代であるが、検出層位からは水田形成以前と考えられるが、検出された水田が最終時期の水田であり、この水田以前の初期の水田を大きく改編していたのであったならば、あるいはこの時期に伴う可能性も否定できない。この舟形木製品の使用した祭祀行為に関わって付記しておく。

木製容器

46～49は中央部をくりぬいた大形容器で、鉢あるいは槽であろう。46は把手を作り出している。47、49は皿形を呈する。54は二箇所に有孔の突起部が付く。脚部はつくと想定されないため蓋と考えた。55

は方形のホゾ穴をうがっており、高杯と考えられる。ＳＲ601の新しい段階から出土した。55・56は方形のホゾ穴と推定される穴をうがっており、高杯であろう。畦畔内から出土した。破損し畦畔の中に補強材の一部として転用されたと判断される。

57～62は鉢形の刳物で57はＳＤ627からの出土である。この遺構からは卜骨が出土し、また土器廃棄の在り方からなんらかの祭器の廃棄と考えられるので、57の用途も祭器の可能性も否定できない。58～61は水田形成以前の層と遺構から出土したので、弥生後期前半～後半の時期と推定される。出土遺構は河道ＳＲ601（古）が低地として残ったところといえる。

有孔板

67～76は両端に孔をうがった偏平な板で、かって原始機の腰あてとも考えられた。ところが、原始機の他の部材が出土しておらず、今のところ用途不明木製品とせざるを得ない。出土遺構は畦畔内から補強用としてもあるいはＳＲ601（古）からも出土しており、なんらかの部材であったものが、転用されていた。したがって遺構の在り方から機能を考える手だてはなかった。

76は両端が尖っており、原始機のヒに類似した形状を呈する。出土状態は水田内であるが、河川の影響で流木とともに流れ込んだ可能性もあって、用途は不明である。弥生時代後期後半～古墳前期であろう。

用途不明木製品

77～90は形態からも一定の秩序をもっておらず、用途不明木製品として一括した。77～78、80～82、90は断面が薄く隅を丸く取っている。80は断面六角形を呈する棒である。84～87は有孔の板材で86は孔を緊縛した部材が残っていた。89は先端をとがらせ剣に類似した形態で関に相当する部分もつくつている。88はえぐり部をもつ棒材で側面もていねいに加工している。ＳＫ622からの出土で畦畔の補強用に埋め込まれたとも考えられるが、畦畔内のこの遺構からは卜骨が出土し、また土器廃棄の在り方からなんらかの祭祀に伴う廃棄と考えられるので、形態から90の用途も実用品ではなく、祭器の可能性も否定できない。

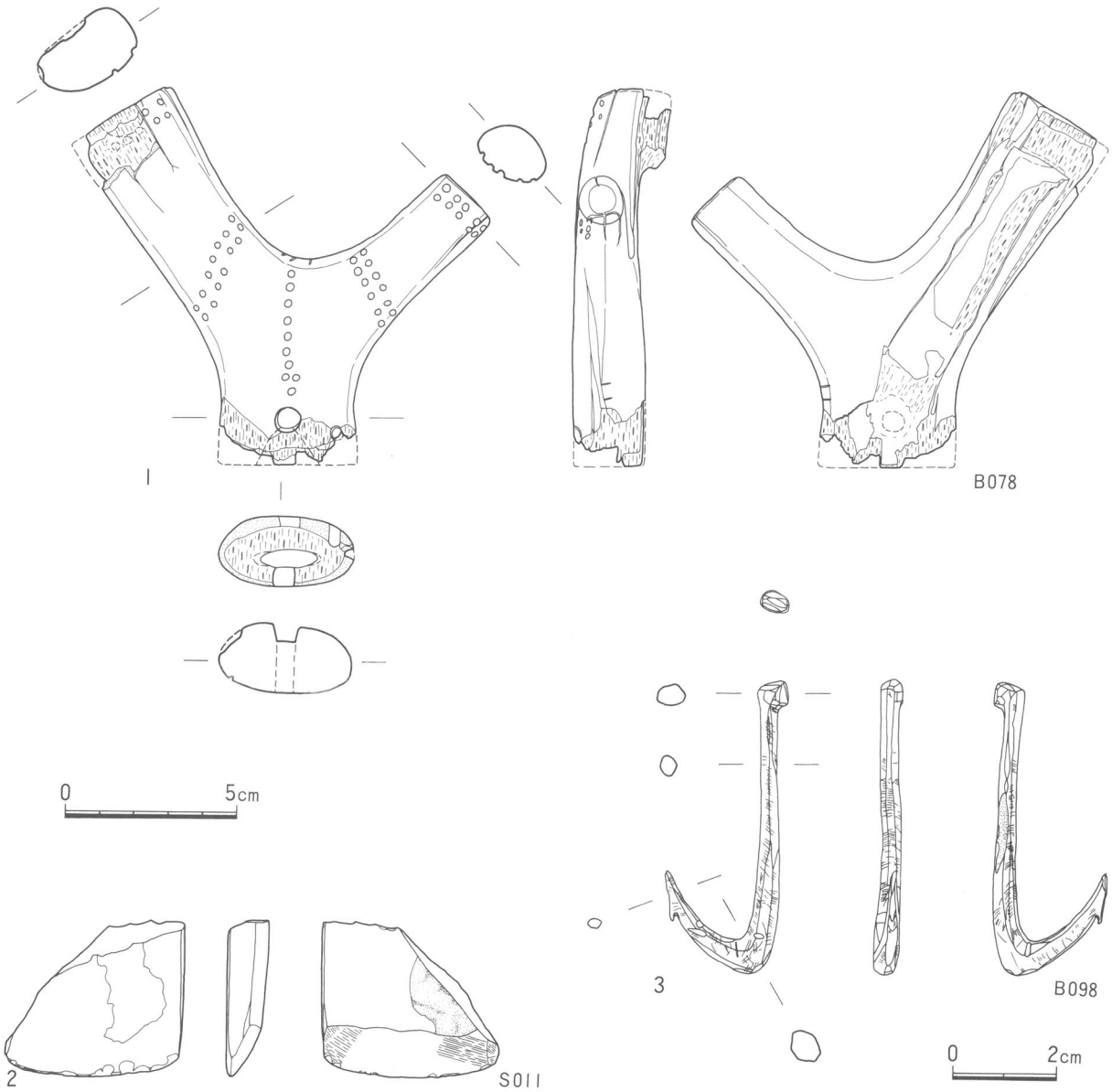
３．石器

石器では、磨製石斧が出土している。材質は輝緑凝灰岩である。この石斧は扁平片刃石斧で、頭部が欠損しており、廃棄されたものと考えられる。出土した状況から弥生後期に属すると判断されよう。

４．骨製品

骨製品については、単式つりばりが一点出土している。長さ5.4㎝を測る物で、逆鈎を持つ。形態上と長さからすれば、近代まで使われた外洋性の漁具と類似しているが、当該期の資料が少ない現在、河川性漁具の可能性もあり、判断は留保しておきたい。

この他、Ｙ字形把頭と呼称される鹿角製品が出土した。長さ11.4㎝で表面を平滑にし、６～８個の円形連続紋を５条巡らす。登呂遺跡で類例が出土しており、本調査区の出土例は伴出した土器から、弥生時代後期に属すると判断された。



第133図　6区出土骨製品・石斧実測図

第Ⅴ章　考　察

第１節　長崎遺跡の遺構立地の２・３の問題

遺構立地に関する概要は、第１章で述べているので、ここでは、その中から問題となる事項を簡略に述べたい。

１．長崎自然堤防の形成初現と自然堤防直下の凹んだ黒色粘土層

５区の微高地部分の骨格をなす自然堤防が形成された時期は、黒色粘土層の堆積が完了した時期である。それを推定した根拠としては、第１に、自然堤防堆積物の粒度組成が粗いものから、より細粒なものへの移行部分が、微高地部分の裾部にみられ、微高地部分では２倍以上も厚く堆積している（低地部分の堆積が約20cm［後のＤⅢ層水田作土の母材］であるのに対して、微高地部分の堆積は約40～50cm）こと、さらに第２は、これらの粗粒堆積物であるシルト質粘土の堆積ベースとなっている黒色粘土層は、長崎自然堤防の下の部分でも、低地の部分でも、均質となっていることである。

もうひとつの問題は、第134図で、示したように、この自然堤防の直下の黒色粘土層が、凹んでいることである。凹の形状も、その上層に堆積した自然堤防堆積物の最も脹らんでいる部分の下位で、最も凹んでいる。ここで、この凹のできた時期として二つのことがらが考えられる。第１に、黒色粘土層の下位の黒褐色泥炭層の堆積時期から凹んでいるという考え方、第２は、自然堤防堆積物が乗り、さらに盛土層が何層か乗った時期という考え方、である。第１の説の根拠として、凹地に堆積した泥炭層堆積物の厚さの問題がある。５区の東北部にも、自然堤防堆積物が乗る以前の段階で、自然堤防直下にある凹地よりもさらに深い凹地が形成されている。この５区の東北部の凹地では、黒褐色泥炭層やその下位の泥炭層の層厚が、凹地の中央部ほど厚くなっている（第72図Ｍ－Ｍ′断面参照）。泥炭の形成要因として、滞水した湿地での湿地植物の繁茂・枯死・未分解堆積を考えると、この泥炭は凹地での堆積であることが推定できる。しかも、これらの泥炭の下位には灰白色の粘質シルトが凹地形を構成している。すると、この粘質シルトの凹地形が、その後の凹地の原因として考えられる。しかし、５区自然堤防堆積物の直下の凹地形については、黒色粘土層やその直下の緑白色粘土層の直下の泥炭層の層厚の変化についての調査を、大沢スコリア・カワゴ平軽石検出黒褐色泥炭層部分まで行った。これらの黒色粘土層や緑白色粘土層の層厚は凹地部分でもそれ以外の部分でもほとんど変わり無かった。ところが、その下位の黒褐色泥炭の層厚は、凹地部分でもはそれ以外の部分よりも若干、厚くなっていた（緑白色粘土層から、大沢スコリア類似火山灰検出地点までの層厚は、凹地最深部では約15cmであるのに対して、凹地外周付近では約10cmである）。このような観察結果からは、５区の東北部の凹地のような状況が考えられ、第１の説が成立する可能性が高い。また、自然堤防堆積物が乗る微高地といえども、凹地形は完全には克服できなかったので、当初の遺構は溝状遺構群が多く、さらに泥炭質の湿地状況がそれに続いたとも考えられる。

ところが、自然堤防堆積物の上面さらに、掘立柱建物建設期の整地層の上面（炭化物・焼土面）、台状遺構の盛土層の上面、さらに、それを被覆する暗茶褐色腐植質粘土層上面のいずれもが、緩やかに凹ん

でいる（第66図；Ｂ－Ｂ′参照）。さらに、このＢ－Ｂ′断面をみると、自然堤防の縁の部分の黒褐色泥炭層～ＤＩ層までの堆積層がすべて、やや脹らんで上に盛上がっている。これらが、第２説の根拠である。これらの粗粒な自然堤防堆積物をはじめ、粘土層が積み上げられれば、たとえ数10cmといえども、下位の地層が泥炭層であれば、上位の堆積物の載荷重によって泥炭層が圧密沈下し、さらにその上位の堆積物も中央部分が凹んで、逆に堆積物の縁付近が、盛上がる可能性があり、このような現象は、土質工学分野では一般的な現象として、各地で観察されている。前述の断面では、掘立柱建物建設期の整地層の上面でも、中央部分が凹んでおり、もしも平坦に整地するとすれば、やはり、圧密沈下が起ったとも考えられる。さらに、台状遺構の上面も中央部分が凹んでいる。もしも、墳丘墓であったとすれば、当初はより平坦なものであったとも考えられる。

では、どちらの説が妥当かという問題であるが、たとえ最初から凹地があるとしても、その上位に堆積・盛土がなされ、平坦な地形がつくられても、下位の地層が凹地であるがゆえに、より泥炭が厚く堆積し、それらが、その周囲よりも軟弱であるため、その上に堆積・盛土のされた平坦地形も下位の泥炭層の圧密沈下により、不等沈下を惹起し、下位の凹地の中央部分が凹んでくることになったと考えられる。そこで、これらの２説のいずれかが妥当か、というよりは、それらが合成されて５区の現象が起ったと考えられる。

そこで、掘立柱建物建設期の整地層の上面の形状や、台状遺構の上面の形状もいずれも原状を止めていないことが考えられ、埋没地形の状況やそれの埋積泥炭層の圧密状況を勘案して、原状の復原が図られる必要がある。泥炭層に立地する自然堤防や微高地が埋没した状態で発掘されることが、これからもあると予測されるが、その際に注意すべきことがらと考えられる。遺構をおおっている土を取りのぞけば、原状を忠実に復原できるとは限らない可能性があると思われる。

２．４区「鎌倉時代河道」の内部堆積の問題とＣ・Ｂ層群の堆積状況

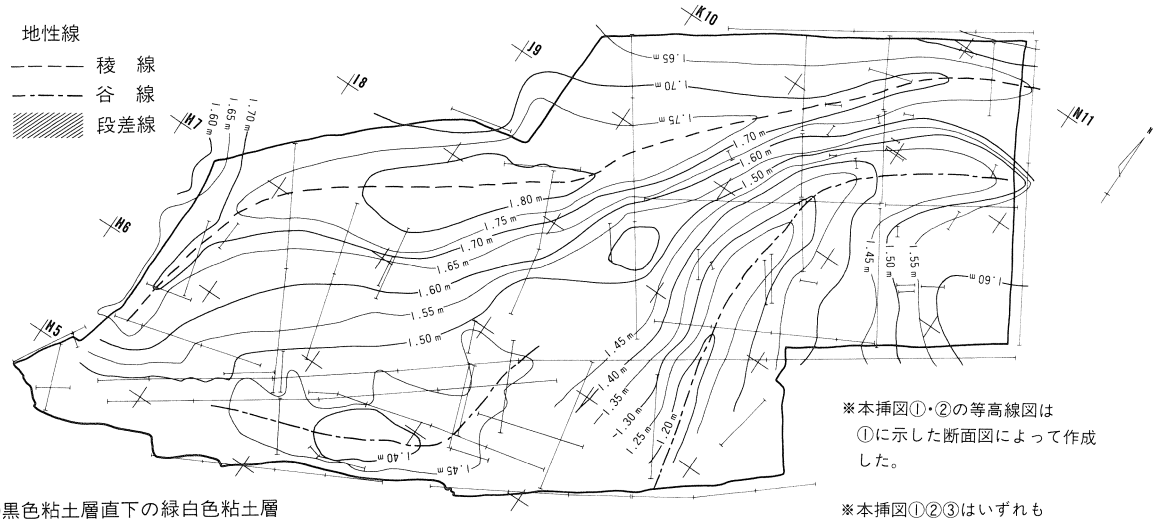
鎌倉時代の遺物を包含する河道（ＳＲ401）は、果たして鎌倉時代固有の河道といえるだろうか。しかし、この河道の土層断面を検討すれば、この河道の両岸のＣ層群のラミナは、いずれも河道中心の河床付近に向って、斜め下に傾斜、または収斂していることがわかる。そこで、この河道の初現は、Ｃ層出現期前後であろうと推測できる。ＤＩ層の被覆した旧河道・水路部分を破壊してＣ層群によって被覆（粘土層のラミナが流心に向って傾斜・収斂している）された河道が出現することは、１区、２区でも観察できた。しかし、このＳＲ401では、ＤＩ層被覆以前の段階の旧河道・水路部分の残存を観察できなかったので、河道形成の時期は最も遡ってもＣ層被覆時であると考えられる。この段階には、ほんの小規模な凹地であっても、次に生じた砂礫（Ｂ層群）の堆積時には、このＣ層群の凹地を抉るようにして侵食・埋積している。さらに、このＢ層群の堆積する凹地を侵食して、再度河道が形成されている。

このＳＲ401の内部堆積も肉眼で観察できる泥炭（ラミナを形成）が集中する層が３枚あり、それぞれ１・２・３期の粘土層の覆土の上面を被覆している。３期の泥炭層の上に流れる４期の堆積物には滑走斜面部分では砂礫の堆積がなされている部分がある。この４期の堆積物に、鎌倉時代の陶器、青磁片が含まれ、さらに数ヶ所で集中的に出土した馬骨群が存在している。

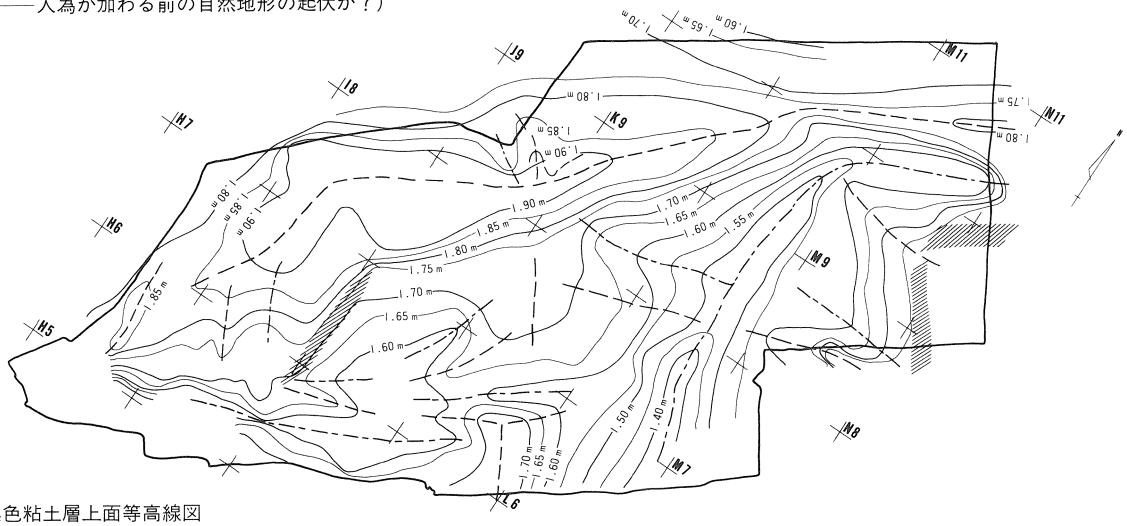
３．ＤＩ層とＣ・Ｂ層群の堆積の意義と検討課題－古墳前期の湿地化と古墳中期の旺盛な河川氾濫堆積－

長崎遺跡では、弥生中期後葉から古墳前期まで継続していた水田耕作が、４世紀代の湿地化（ＤＩ層の堆積）によって廃絶を余儀なくされ、その後５世紀代の厚い粘土・シルト・砂の河川氾濫堆積（Ｃ・Ｂ層群の堆積）を蒙り、この地の再開発は平安時代までまたなければならない。このような現象は、長崎遺跡のような三角州中流部だけでなく、三角州帯上流部の静岡市川合遺跡・瀬名遺跡でも確認されている。さらに安倍川扇状地の扇中央に位置する静岡市駿府城内遺跡群（静岡市調査）でも観察されている。ただし、５世紀代の堆積物はこれらの遺跡では砂礫を主体としている。これらの５世紀代の堆積物は、扇状地やその末端部分では、新たな起伏のある地形をつくり、さらにこれらの起伏を埋めるような砂・シルトの堆積物によって起伏が平坦化された上に、条里型水田の広域での展開が行なわれている。

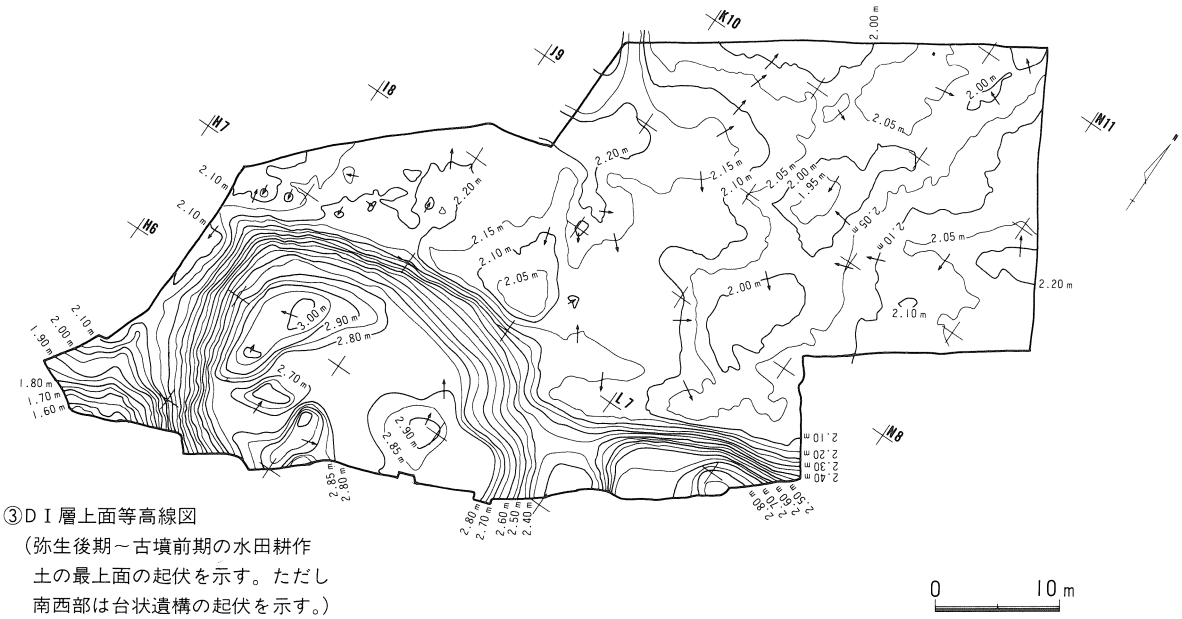
このような湿地化（泥炭層形成）➡砂礫堆積のパターンは、静岡平野では安倍川扇状地の扇端部から延びた自然堤防とその周辺の池ヶ谷遺跡でも確認されている。ただし、ここでは、古墳前中期と平安前期の２サイクルが観察できている。この遺跡環境の変遷パターンは、どのような地域で、どの時代に生起しているかを類例を調べていくことが、今後の課題である。しかし、安易に湿地化または洪水による水田域の減少をその地域全域に広げて考えると問題であるが、生活環境を激変させ、集落の存立基盤を揺るがす気候事件・自然災害であることにちがいない。そこで遺物があまりでてこない自然堆積層なので、考古学的研究にとっては積極的な研究対象ではないと考えるのは誤りであろう。



①黒色粘土層直下の緑白色粘土層
下面等高線図
（溢流氾濫推積物の鍵層
――人為が加わる前の自然地形の起伏か？）

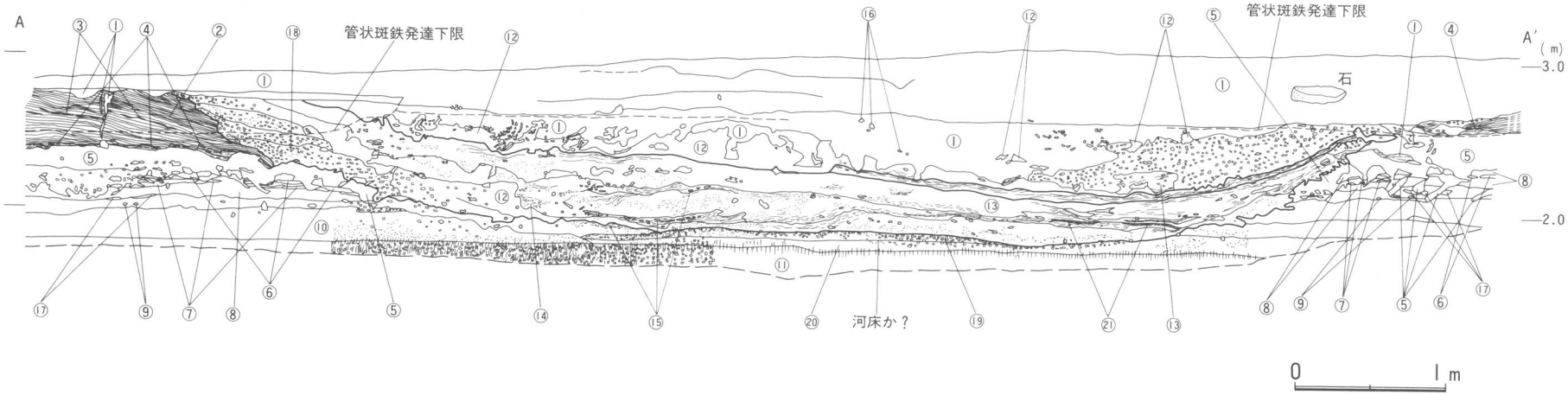


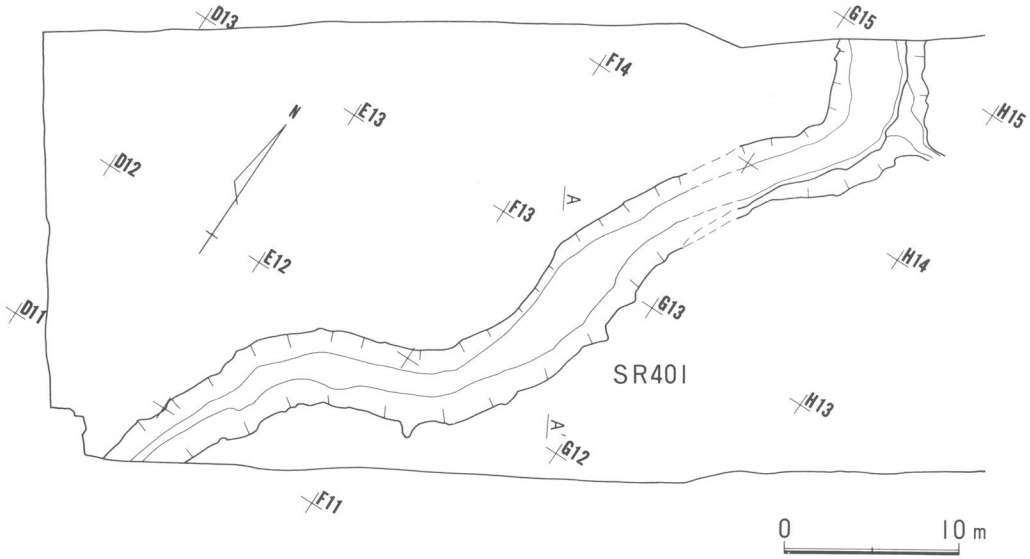
②黒色粘土層上面等高線図
（水田耕作層最下面
――耕起による攪拌がおよんだ最下面か？）



③ＤＩ層上面等高線図
（弥生後期～古墳前期の水田耕作
土の最上面の起伏を示す。ただし
南西部は台状遺構の起伏を示す。）

第134図　5区地形起伏変遷図





①灰色粘土
②C層〔灰色粘土と灰白色粘質シルトとの互層〕
③黒色腐植薄層
④DⅠ層
⑤DⅡ層
⑥緑白色粘土
⑦Os類似火山灰
⑧黒色粘土
⑨Kgp
⑩暗灰色礫まじり砂質粘土層
⑪暗灰色礫まじり砂層
⑫暗灰色粘土
⑬淡暗灰色粘土
⑭暗褐灰色粘土
⑮流木片堆積層（ラミナ状）
⑯淡灰色粘土
⑰Os
⑱灰色粘土（灰白色粘質シルト粒子入り）
⑲青灰色砂礫
⑳茶褐色砂礫
㉑腐植層

第135図　4区SR401断面図

第２節　長崎遺跡の遺構の変遷について

１．６区出土の土器編年

前章までに４区から６区の遺構と遺物について報告した。調査区の異なる遺構の相対年代を考えるため、つぎに弥生中期から古墳時代前期までの土器がスムーズに追える６区の遺構から出土した土器について編年的位置を考え、本年度に報告する調査区の共通の物差し（基準）としたい。

長崎１期土器

河道ＳＲ601（古）の最下面では河川堆積による砂礫層物上には弥生中期の土器や木製品がまとまって認められた。これより出土した土器は、少ないながら長頸で球形胴をもつ器形の壺と深鉢形で胴部にヘラ描き羽状紋を描く甕、台のつく鉢あるいは高坏という基本的セットが把握できた。従来、静清平野では原添式土器や有東式土器と呼称されていた土器に相当する。第106図６区出土土器１～４である。

長崎２期土器

河道ＳＲ601（古）が低地化していく過程で出土した土器を２期の土器とする。挿図６区出土土器６、７、８、９、10の壺がある。壺６、７は外面をハケ目調整を施す。７は口縁部を面取りしている。壺ａとする。壺８、９、10は口頸部に紋様帯をもつ従来、登呂式土器の壺の特徴とされれたタイプである。壺ｂとする。図化できなかった土器のうち甕は胴部があまり開かないタイプで口縁部の刻み目は大きい。複合口縁の壺は認められるが少ない。なお、このＳＲ601（古）には、中嶋郁夫の菊川様式（古）の壺片が伴っている。

長崎３期土器

ＳＤ627出土土器を基準とし、第106図～第108図の14～49である。壺は壺ａは少なく、壺ｂとともに紋様帯を胴部上位にもつタイプ壺ｃが認められる。また胴部から口縁部にかけて大きく外反する広口壺ｄが出現する。小形壺は単純口縁で口縁部に穴がうがたれている。このほか在地の複合口縁壺は壺ｅとする。甕は口縁部に大きな刻み目をもち、胴部はあまり開かない。高坏は伊勢湾系の搬入品で欠山期の古い段階に比定できる。在地と考えられる高坏は認められず、搬入土器を含めても量的に極めて少ない器種である。

長崎４期土器

畦畔ＳＫ622出土土器を基準とする。挿図６区出土土器55～64である。水田面からは54のような壺ｂが認められたが、一括資料にはみられない。壺ｃ、ｄ、ｅがある。ＳＫ621上部から欠山期の新しい段階を模した高坏78が出土しているので、それ以前といえよう。

この段階の壺ｄは、従来、飯田式土器に含まれていた特徴をもつ。甕は口縁に刻み目をもつタイプである。

長崎５期土器

ＳＤ610（新）出土土器を基準とする。挿図６区出土土器87～102である。そのうち94は覆土資料で、出土状況から下部堆積層からの混入と判断された。壺ｅのほか二重口縁と呼称されている89の壺が出現している。壺ｆとする。甕は刻み目をもたないタイプがほとんどである。廻間期の搬入品高坏102を伴い、

またこの遺構の覆土からはＳ字口縁甕ｂ類が出土している。数量的には少ないため、前後の土器構成との比較はできないが、他地域との併行関係を知り得た。

長崎６期土器

ＳＸ602の基準とする。ただし７群はＳＸ603との分離が不安定なのでひとまず除外して置く。器種は壺、甕、高坏、器台、ひさご形土器、長頸壺、鉢などであり、新たに伊勢湾系の搬入品や在地でその器形を模した土器が多くなる。壺ｃ、ｄ、ｅ、ｆが認められる。出土したＳ字口縁甕はｃ類である。さきにこの土器群の位置を概報や『長崎遺跡Ｉ』に報告した際、駿河湾東部地方の大廓式期（新）に併行させているが、今回も同様に考え、Ｓ字口縁甕の特徴から伊勢湾地方の塔の越期にも併行関係を認めたい。

以上、６区出土の土器編年について考えた。『長崎遺跡Ｉ』では従来の静清平野における弥生土器編年を大つかみな年代の目安とし、遺構の相対年代を弥生中期を丸子期、有東期とし後期を登呂期、飯田期として、それぞれ前半、後半の２区分した。今回、６区の土器編年では『長崎遺跡Ｉ』で用いた有東期を長崎１期土器とし、登呂期は長崎２期土器から長崎３期土器に相当する。飯田期は長崎３期土器から長崎４期土器に相当する。このように弥生後期を３期区分したが、もとより壺、甕を基本器種とする地域の様相は、中嶋郁夫が指摘するように、土器様式内の古、中、新という様相の違いとして考えている。ただし中島が駿河東部の土器を資料とした基本器種のうち、静清平野では鉢形高坏は認められず、土器構成上、地域差をみせている。それ以降の長崎６期土器は、『長崎遺跡Ｉ』や概報でも指摘したように大廓期（新）に併行するので、長崎５期はそれ以前、と考えている。この物差しをもって今回報告の４区、５区、６区の遺構の年代を考えてみたい。

２．４区の遺構と相対年代

４区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と中世の遺構が認められた。なお、中世遺構については性格を異にし、第Ⅱ章に小結としてまとめているので、割愛し、ここでは、前者の遺構についてふれてみたい。

４区の特色としては、１～３区・５区・６区にみられたような水田域が広範にひろがる状況は認められず、わずかに調査区北側に杭打ち畦畔が検出された。

畦畔に伴う土器等年代を提示できる資料は得られなかったので、具体的な年代は不明であるが、４区から出土した土器は長崎３期～５期の中で収まる。また、畦畔の作り替え等が認められなかったので安定した状況の中長期間つくり替えずに使用されたものかはたまた、短期間で廃棄されたものかのいずれかの解釈ができた。

この他の４区の遺構は、河道と微高地であり、微高地には土器集中箇所、掘立柱建物群、溝状遺構が認められた。

土器集中箇所ＳＸ410、411、412であるが、溝状遺構が埋没していく過程の凹地に投棄されたものや、ピット上部の凹地に投棄されたものであった。

なお、出土した土器は、接合作業において準完形品となるものも少なく、別の場所で破砕された破片を投棄されたと考えられる。なお、壺がほとんどであり、甕は極めて少ない。単なる生活容器の廃棄とは異なるのではないだろうか。

また、土器型式の特徴はかって飯田式土器と呼称された土器群に近い。今回の分類では、長崎４期のまとまった土器群と理解できる。河道ＳＲ440は、微高地から流入した土器・一括廃棄された土器が出土した。型式的特徴から長崎４期から５期に属する。

ＳＸ4101は河床上から検出された土器廃棄遺構である。個体数としては約350点ほどが推定され、器種構成上、95％が壺型土器であるという特殊な在り方を示した。また、いずれも小破片で接合作業によっても図化できた例は４個体にとどまった。別の場所で破砕され、破片として投棄されたと考えられる。また、この遺構に尾張からの搬入品である廻間期の高坏１点が伴っている。微高地上では、掘立柱建物群が検出されたが、ほとんど同じ場所につぎつぎと建て替えられた状況が認められた。

河道の岸に近い位置に存在したという点は、６区でも認められた。また建物跡の礎板は同一の鼠返しや建築材と考えられる板材を分割し、同じ建物の礎板としており、建物と礎板との関係が、みごとに整合したという点も特筆されよう。

また、河岸の流路変更によって護岸杭列をつくりかえて整地し、建物の基盤整備をするなど当該期の土木水準を提示できた。なお掘立柱建物跡と護岸杭列については密接に関連すると考えられ、護岸杭列から出土した土器から、長崎４期～５期という年代中に存在したと考えられる。

微高地上の溝状遺構や礫群ＳＸ409、ＳＦ423は出土遺物が少なく、安定した見解とはいえないが、長崎４期と考えられる。したがって、４区は長崎４期には、性格不明で遺物をあまり出土しない溝状遺構と河川があり、河川に近接した南側に掘立柱建物が数棟並んでいる風景が浮かんでこよう。したがって、河川をはさんで、集落の中心は、４Ｂ区の南側と推定される。

他方、長崎５期に入ると、立木が微高地に存在し、掘立柱建物と少数の遺構が存在したものと推定される。

出土遺物についても、長崎３期、長崎６期の遺物はほとんど認められないという現象と相通じ、４区については長崎遺跡の中では耕作地と集落との境界とよぶべき場所であったと考えておきたい。

３．５区の遺構と相対年代

５区は、微高地と低地部分に別れ、水田、溝状遺構群、掘立柱建物群、台状遺構が、層位的に明瞭な形で検出された。個々の遺構の切り合いや各面での遺構の把握については報告されているが、今回出土遺物－特に土器－から遺構の年代のおさえる作業が十分ではない。したがって遺構の新旧がある程度間隔をおいたものか、ほとんど連続したものかの判断は十分とはいえず、年代幅も大きくとらえ、それぞれの遺構を弥生後期から古墳前期という時間幅で考えられているものもある。また、他の調査区の相対年代についてはほとんど意識の中に入れられていないという報告となってしまった。ところで５区の遺構単位でとらえられた土器を本書の年代的物差しでとらえなおすと大略つぎのようになった。

５区の水田初現期の可能性をＤⅢ層としているが、ＤⅡ層からの水田耕作深度がどこまで及んでいたか、また、旧い水田の遺構遺物を如何に考えるかという点、すなわち何もないものをもって認識するという点で、今回の課題となっている。また、長崎１期、２期の土器は極めて少なく出土状況も安定したものとはいえなかった。

では、もっとも下位でとらえられた溝状遺構群の年代はＳＤ569、ＳＤ5108ではあるがやはり長崎３期～

4期の幅でとらえることが出来る。

したがって5区水田の開始時期をどこまでさかのぼることができるかという点であるが、遺物でみる限り、この辺であろうと考えられる。ところで長崎3区での堰、水路等から弥生中期からの水田耕作の可能性が5区において認められるかという点であるが、遺物による証明は出来ないのであくまでも可能性としてとどめざるをえない。また、長崎1～6区までの範囲で仮に弥生中期の水田を考えるとしても、ある程度限定的に耕作されていると考えてもさしつかえないと考えられる。

DⅡ層中の水田遺構についても、畦畔や溝の付け替えによって、いくつかの時期の水田であると考えられた。ところで、今回、発掘調査によって検出された遺構は最終的に廃棄された水田の姿を最もよく露呈したものであるが、報告者はつぎの耕作の攪乱のおよばない範囲の検出と遺構の切り合いによって、それ以前の水田についてもよく検討している。しかしながら、畦畔の同時性を証明できる遺物についてはあまり明瞭ではない。したがって長崎3期から6期までの水田と考えるほかはないが、つぎに述べる掘立柱建物跡や台状遺構の年代からいくつか水田の時期を分離する作業が行われ、水田の一部をこわして建物や台状遺構がつくられている過程が追求できた。

つぎに掘立柱建物群の時期である。建物を建てるための整地が2度にわたって行われている。整地層から出土した土器や下位の溝状遺構との新旧関係からすれば、その時期は長崎4期・5期であり、低地部分の水田との併行関係がうかがえる。さらに、台状遺構とそれ以前の炭化物・焼土面のとの関係である。

出土した遺物をみると、いずれも長崎6期の土器である。やや詳細にみると標識としたＳＸ602の土器群とやや異なる点もみられる。

しかしながら、台状遺構とそれ以前の炭化物・焼土層との関係はほとんど連続した時間幅であり、むしろ台状遺構を構築するための一連の行為として押さえたほうがよいといえよう。

したがって焼土や炭化物のつまった土坑は、台状遺構を構築するために、単に枯草や木枝をかたずけるだけでなく一定の清めの儀式をしたあとの処理とみられよう。

台状遺構については上面から多くの土器が検出されたが、原位置に置かれものと破片で廃棄されたものが認められた。また、いくつかのブロックでまとまっており、何回かの行為が繰り返されたと推定される。

これらの器種をみると坩、高坏、器台等小型の精製土器群と粗製のミニチュアである手捏土器が多く認められた。その出土状態は原位置もしくはそれ程原位置から遊離していないと考えられる。おそらく供献土器と考えられる。破片で出土したものも壺を中心とする組成からすれば、別の場所で祭器として使用され、台状遺構の西側斜面を中心に廃棄したと考えておきたい。

すでに述べたようにこれらの時期は、長崎6期土器の範疇でとらえることができる。それとともに新しい系譜の坩が安定して出現しており、器台についても器台部と脚部の境界が直立気味になり、さらに脚部の形態が退化している。Ｓ字状口縁甕も胴部に横線を描かないタイプが多くを占める。これらの特徴からすれば、ＳＸ602土器群より台状遺構の土器は、やや新しい要素が認められた。さらにＳＸ602土器群と器種構成が異なり、対象の祭祀と、時期の新旧の差をもっていると考えておきたい。

また、古墳時代の手捏土器では、県内でのきわめて古い様相を呈している点も指摘出来よう。

以上、5区の遺構と相対年代について考えた。5区で出土した土器と量が必ずしも、遺構の時期とピークを反映するとは限らないが、掘立柱建物跡群と耕地である水田を有機的に考えると、長崎4期土器の時期から長崎5期の時期が一つのピークと考えられ、長崎6期土器の時期の台状遺構に連なると考えておきたい。

4．6区の遺構と相対年代

長崎1期

6区は他の調査区と異なり、河道ＳＲ601（古）が最下面としており、河川堆積による砂礫層物上には弥生中期の土器や木製品がまとまって認められた。これらの遺物は完形、もしくは準完形であり、摩耗は認められず、別の場所から流れ込んだとは考えられず、遺物の下には砂層が薄く堆積し、本来、河川の浅瀬か河原のようなところといえよう。検出レベルは海抜－0.4mから－0mであり、6区の土器や遺構を考える上で、それ以後の出土しているレベルと異なり、ひとつの画期といえよう。

長崎2期から3期

弥生後期以後、河道ＳＲ601（古）は堆積が進行し、一部に河川ＳＲ635のような小河川も認められたが、覆土をみると静穏な堆積を示すが、河道は全体として低地と化す。この中に舟形木製品や卜骨など特殊な遺物を含んでおり、単に包含層と呼ぶ以上に豊富な内容をもっている。とくにＳＤ627では卜骨を含んだ土器廃棄がみられ、これらの土器片と先に述べた河道内包含層の土器と接合関係が認められた。このことは低地において出土した土器のうち、接合関係の認められたものについては、単に流れ込みというよりも、この場所で土器が破棄され、ＳＤ627に一括廃棄されたといえる。また同時に両者の土器が同時に存在したということも確認されたともいえよう。

第9表　長崎遺跡土器編年対比表

<table>
<tr><th>長崎Ⅱ</th><th>長崎Ⅰ
（1）</th><th>杉原編年
（2）</th><th>中島編年
（3）</th><th>尾張
（加納編年）
（4）</th><th>Ｓ字甕
（赤塚編年）
（5）</th><th>他の
併行関係</th></tr>
<tr><td>長崎1期</td><td>有東期</td><td>原添・有東</td><td>有東</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>2期</td><td rowspan="3">登呂期

飯田期</td><td rowspan="3">登呂

飯田</td><td rowspan="3">登呂

飯田</td><td></td><td></td><td>菊川(古)</td></tr>
<tr><td>3期</td><td rowspan="2">能田旭期</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">欠山(古)</td></tr>
<tr><td>4期</td></tr>
<tr><td>5期</td><td rowspan="2">ＳＸ602
大廓期(新)</td><td rowspan="2">曲金</td><td rowspan="2">大廓</td><td>廻間期</td><td>Ｂ類</td><td></td></tr>
<tr><td>6期</td><td>塔の越期</td><td>Ｃ類</td><td>大廓(新)</td></tr>
</table>

（1）　佐藤・矢田・足立『長崎遺跡Ⅰ』1991
（2）　杉原『登呂』1949
（3）　中嶋郁夫「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』2号　1988
（4）　加納俊介「東海」『古墳時代の研究』1991
（5）　赤塚次郎『Ｓ字甕』覚書'85」『愛知県埋蔵文化財センター年報　昭和63年度』1989

他方、6区微高地ではＳＤ610（古）と呼称した遺構が下層として認識できた。この遺構は、本来、河川堆積後の低地にあたるが、北側に土坑ＳＦ639や溝状遺構ＳＤ636が成立しており、はたしてこれらの遺構と微高地の下層が同時期であるかは土層の堆積状態から考えるしかないが、現状ではＳＤ610（古）が古いと判断できた。土器の時期は長崎2期から3期である。

長崎4期

低地の堆積が進行すると先の河川内では水田が営まれた。とくに6区では畦畔の作り替えが行われており、土器型式の上で2時期と考えた。水田の新しい時期には欠山期の新しい段階の高坏を模した高坏78や廻間期の搬入品高坏81が出土している。なお畦畔ＳＫ622に埋め込まれた補強用の転用材などとともに出土した土器片や卜骨は、なんらかの水田祭祀のあと廃棄されたものと考えられる。さきに『長崎遺跡Ｉ』に報告した3－Ｉ区畦畔に埋置された土器群ＳＸ304と同様の性格をもったものと考えられる。

つぎの段階には微高地の堆積が進み、掘立柱建物の倉庫が営まれると、ほとんど同じ場所に作り替えられた。直接、掘立柱建物跡群の年代をおさえる土器の出土状況はないが、後に述べるＳＤ610（新）より古いことは土層と遺構の切り合いから判断できた。なお同一面から溝状遺構ＳＤ613、ＳＤ624、ピットＳＰ606などが同一時期と考えられ、またそのほかの第2面で検出された遺構がこの時期と判断された。こうした点では集落域の端に倉庫が川岸近くに存在し、廃棄穴があったということになろう。

長崎5期

さらに掘立柱建物跡の上層では溝状遺構ＳＤ610（新）が掘削されているが、なんらかの土器を中心として廃棄がなされていた。この遺構の覆土であるＤⅡ層中からＳ字口縁Ｂ類のＰ237が出土しているため、ＳＤ610（新）が掘削された時期がＳ字口縁甕Ｂ類の時期かそれ以前と考えられる。なおこの時期にともなう遺構は数期にわたって作り替えられた掘立柱建物の一部が同時存在とも考えられるが、直接、掘立柱建物跡群の年代をおさえる資料が認められなかったので、判断できなかった。

長崎6期

微高地での最終時期は土器供献ＳＸ602・603や杭列ＳＡ607・609が考えられる。土器供献ＳＸ602はＤⅡ層最上位であって、ＳＤ610（新）より後出の遺構であること、この土器群出土のＳ字口縁甕はＣ類であって、土器様相の上でも後出の遺構であると考えられる。なお河道ＳＲ601（新）が水田を破壊している、さらに微高地上の掘立柱建物の柱穴の一部を削っており、河川の斜面から柱穴が検出されている、河道からの土器が微高地から検出された土器様相と共通するなどの点から、微高地で検出された遺構と河川ＳＲ601（新）が同時に存在していたと考えられる。

このことから低地部分と微高地部分の遺構を整理すると、つぎのようになろう。河道ＳＲ601（古）段階から低地となって水田が形成される段階、微高地には土坑、掘立柱建物の倉庫群が同時に存在し、さらにＳＲ601（新）が貫流していたことが考えられる。この際、水田が破壊され、微高地にはＳＤ610（新）が、その後、土器供献ＳＸ602・603が存在したといえよう。しかし、その後は微高地上にＤＩ層の泥炭層が被覆する頃になると、6区から人為的痕跡は認められなくなる。

（足立順司）

第Ⅵ章　まとめ

『長崎遺跡Ⅰ』においては、その冒頭の例言において「各概報と本書の記述に差がある場合本書の記述をもって報告とする。」との断わり書きがあるが、今回はあえてそれをはずしてある。報告書は客観的な事実記載のみでよいとする論は、客観的な事実とは何であるのかが明確にならない限り、入れられないであろう。調査に係わる様になってから「発掘調査は認識である」という言葉を何度となく聞きいましめてきた。調査員が遺構と認識しなければ掘ることは出来ず、またあるがままに掘れるということなど決してありえない。その意味で、それぞれの調査員の認識と方法は大切にしなければならない。

もとより、調査員の間で十分な論議を尽くさなければならないが、多数決で決すべき問題ではなく、それぞれの見解は尊重すべきであると考える。その原則に従い、本報告書の編集に当たっては、個々の調査員の方法と見解は出来る限り尊重した。逆に思い込みの部分が全面に出てしまっている危険もないわけでもないが、それも一つの考え方であり、そのまま残した。以下、問題の残るいくつかについて列挙して整理しておきたい。

1、泥炭層上面における水田の認定

水田面を被覆している泥炭層の上面において微妙な起伏をひろうことにより、小畦畔の存在を推定出来るという。実際には泥炭層上面のオフセットデータより1㎝ないし2㎝のコンター線を引くことにより推定している。水田上面を明確に捕らえられない様な場合に有効な方法となろう。しかし一方では、1㎝の厚さは調査時のジョレンの一削りにも及ばない微妙な変化である。現地に於ける調査上の精度の問題と、その後の作業の中での調査員の恣意の入る余地があり、慎重な取り扱いが必要であろう。

2、台状遺構ＳＸ510の性格について

5区の台状遺構ＳＸ510、ＳＸ551については、概報においては墳丘墓としているが、今回の報告では台状遺構と改めている。担当調査員は主体部の検出が出来なっかったことから「墳丘墓とは認定しがたい」（本報告書135頁）とし、台状遺構という呼称をとっている。

疑問点は次の4点に整理できよう。

①は主体部の有無である。主体部と明確に認定出来るものは検出されていない。しかし、図でも明らかなように上面全域にわたって粘土採掘と思われる攪乱により大きくこわされており、検出されなかったことがすなわちなかったということにはならない。規模などは、明確にすることはできなかったが、わずかに残ったベルトの中で、土坑状の落込みは確認されている。これをもって主体部とすることも可能性としては残っている。

②は形状である。図は攪乱部分に残るわずかな痕跡をたんねんにひろいながら図化したものである。調査区を最大限拡張した結果南西のコーナーをつかむことができた。方形の墳丘に方形の造り出しをもったものという見方はこの図から導きだされたものである。しかしこのような図の操作の場合想定線をいかに引くかで形状は大きく異なるものとなる。長方形あるいは長楕円という見方も可能である。

③は周溝の深さである。周溝は深さ10㎝程度である。調査にあたってはかなり意図的に周溝を探して

の結果である。この時期の低地での墳丘墓にしては、溝が浅すぎるのではないだろうか。まして上層の盛土の土圧による泥炭層の圧密化の可能性も指摘されており、周溝を否定する考え方もある。

④鏡の評価についても問題となるところである。小型仿製鏡は東側の周溝と考えられた窪地から出土している。保存状態は非常に良好であり、精査したが周囲からは、玉類などは一切伴出していない。小型仿製鏡が集落や祭祀遺構に伴う例はない訳ではないが、非常に少ない。

台状遺構上の土器群については、別に考えたほうがよさそうである。土器群はほぼ全面を覆っていたが、特に西側斜面が多量で厚い。その主体は壺・甕中でもＳ字状口縁台付甕が多量に含まれているのが目立つ。また器台・小形丸底坩、手づくね土器なども多い。小破片も含めれば３万点を越える。これらの土器群を覆うようにして厚さ10cmの暗茶褐色土がある。これは重なるようにして置かれた、あるいは廃棄された土器群をつつみこむように草木が繁茂し、その結果土器の間に入りこんで土壌化しあたかも別の堆積層のようにとらえられた可能性が高い。特に西側斜面には直径数メートルの範囲に根を張った樹木が検出されている。土器の組合わせやその量からすると祭祀的な行為につかわれた供献土器と考えるのが自然である。とすれば台状遺構ＳＸ510は、三重県草山遺跡の台状遺構のように祭祀的行為のためのものと考えることも可能性として残るといえる。

台状遺構ＳＸ510の性格については調査員間でも意見の一致をみていない。これを機会にあえて私見を述べさせていただいたが、今後より詳細な検討が必要であろう。

３、ＳＲ401の馬埋葬について

４区の中世の河道ＳＲ401より馬の骨がまとまった形で出土した。大きく４ヶ所に分かれるが、笹塔婆・金鋺・カワラケも伴出しており、馬埋葬として報告した。

ただし、埋葬とするのか供養とするのか論議のあるところであろう。馬遺体と塔婆・金鋺等は同時期と考え、馬に対して（むしろ、馬そのものの供養という側面より馬が殺傷されたこの場所あるいは乗馬した人物または、殺傷した行為そのものに対して）手厚い仏式供養がなされたと解釈したい。

報告者は「さらに想像をたくましくすれば」と限定しながらも梶原合戦との関わりを推定しているが、あながち間違いともいえない状況をもっている。

４、礎板の接合関係について

今回５区の掘立柱建物の認定において礎板の接合関係をひとつの指標としている。５区では礎板の検出された柱穴は217個あり、それから検出された礎板をすべて並べ、それぞれの接合関係を検討している。

この検討は現在も継続中であり、改めて次の報告書において整理されるであろうが、中間報告の形で本報告書において示されている。かなり高い割合で同一の建物は同一の材のものを利用していることが、明かとなった。掘立柱建物の認定に有効な武器となろう。問題となるのは、これらの接合関係の認定である。土器片のように割れた接合面を持ち、ピタッと接合できるものだけではない。建築材などからの転用が多く礎板として利用する際、きれいに切断・加工し、接合点がほんのわずかしか残っていないものも多い。あるいは同一の材と思われるものの中間部分が欠けているものなどもある。接合関係の信頼性を高める意味からもこれらの段階を明確に示し、根拠を明らかにしなければならない。

なお、礎板の検討の中で、礎板の用途が一般にいわれているように、柱が沈みこまないようにするた

めの他に、柱の高さを調節するための用途も明らかにされており、注目しておきたい。

5、木製品の用途について

木製品の認定にあたっては、かなり意見の相違いが認められる。大きな機材や建物の一部を構成するものであり、まして、破片であればその認定が困難なことはなおさらである。特に機織具の認定については論議の分かれるところである。

また礎板の接合関係の検討の中で、扉などの建築部材であることが明らかとなってきたものもある。礎板の場合時期は限定されるため、建築の方法・技術とあわせて厳密な検討が必要となる。

6、土器編年について

今回の調査では6区出土の土器を指標として、1期～6期とし、編年の大網を示した。特にその主体である弥生後期を2期～4期の3区分としている。この大網は静清平野のこの時期の基本的な組み立てを示したといえよう。しかし、これには5区出土の膨大な資料が読み込まれていない。今後の整理の中でより詳細な検討が加えられなければならない。

特論１

長崎遺跡の水田立地に関する地学的・土壌学的検討

静岡大学名誉教授　加　藤　芳　朗

Ⅰ．まえがき
Ⅱ．立地環境の概況
Ⅲ．ボーリング資料による低地の地下地質
Ⅳ．礫の岩質組成調査
Ⅴ．遺跡に出現する土層の地質学的意義
Ⅵ．検出水田の土壌学的考察

Ⅰ．まえがき

本遺跡から弥生中期～古墳前期にわたる水田遺構が発掘された。これらを含めて本遺跡およびその周辺の生成環境について、地学的、土壌学的検討を試みたので報告する。なお、本遺跡の調査概報、報告書は本文中で下の略号で引用した。

年報Ⅵ　：静岡県埋蔵文化財調査研究所、年報Ⅵ（平成元年度事業概要）、1990

概報 '90：長崎遺跡、昭和63年・平成元年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財調査概報、静岡県埋蔵文化財調査研究所、1990

『長崎遺跡Ⅰ』：『長崎遺跡Ⅰ』（遺構編）、本文編、静岡県埋蔵文化財調査研究所、1991

Ⅱ．立地環境の概況

本遺跡は清水市の長崎・長崎新田にわたる巴川低地（海抜２～４ｍ）に位置する（図１）。南西から北東に向かう巴川の現流路は改修工事によってゆるやかなカーブを描くだけだが、それ以前は著しく蛇行して（巴状を呈して）おり、低地の勾配がゆるやかだったことを物語る（この付近の低地の平均勾配0.24％）。低地の幅は1.5－２㎞で、平野全体でもっとも狭い。北西側は竜爪山から派出する新第三系中新統（静岡層群）の山地が迫り、南東側は有度山（日本平）丘陵の山裾と接する。それぞれから流出する河川が砂礫を運び出し、流域規模に応じた大きさの扇状地（崖錐）を出口に展開している。著しいものは、北西側の長尾川、南東側の吉田川、草薙川、谷津沢川である。

巴川ぞいの自然堤防の発達はわるく、ところどころに微高地（門村、1966の自然堤防的微高地）が散在するだけである。本遺跡付近では、長崎、長崎新田の微高地は巴川からやや離れて並走し、南西の楠－楠新田－草薙と続く微高地に連なり、草薙川の扇状地に接続するようである。（後述）。

能島には海浜礫（と解釈される）層が微高地を構成する。これは南方の吉川方面の谷津沢川扇状地に続きそうである（後述）。

Ⅲ．ボーリング資料による低地の地下地質

１．静清バイパスぞい

本遺跡を含んで、能島から鳥坂（東名西側）まで（STA220～344）の巴川低地の地下地質の断面を図

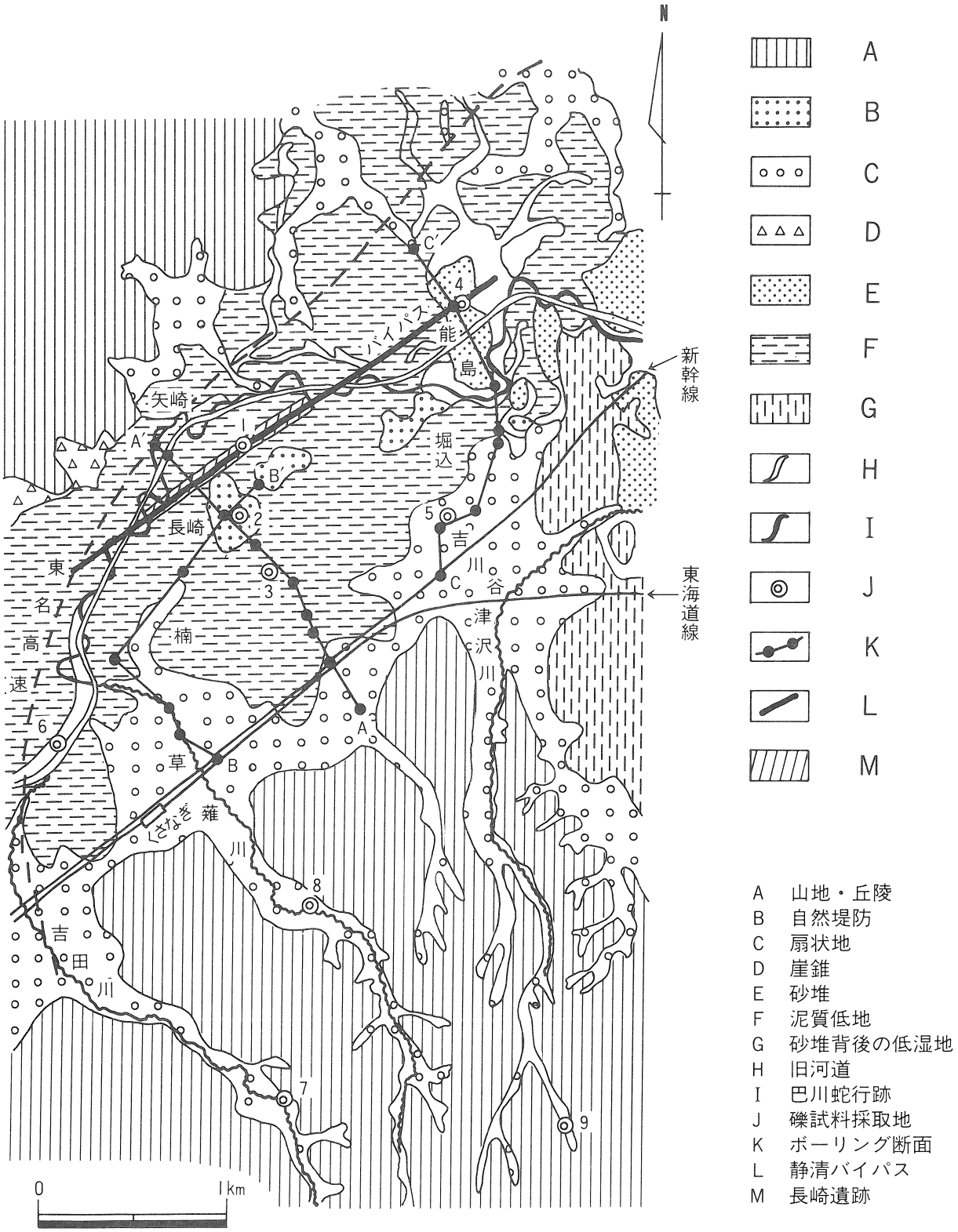


図1　遺跡周辺の地形分類図（門村、1966を簡略化）

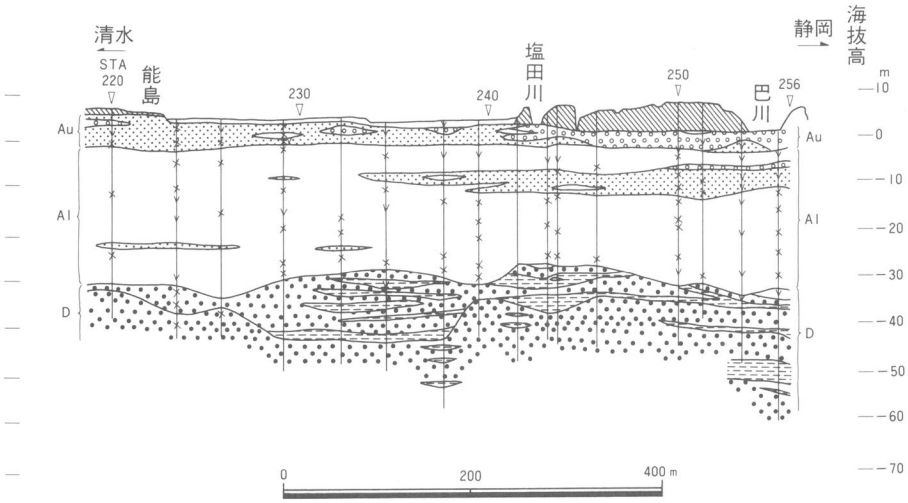


図2　静清バイパスぞいの地下地質断面図（1）　凡例は図3参照
建設省資料（東建地質調査ＫＫ、中央開発調査ＫＫ調査報告書）による。

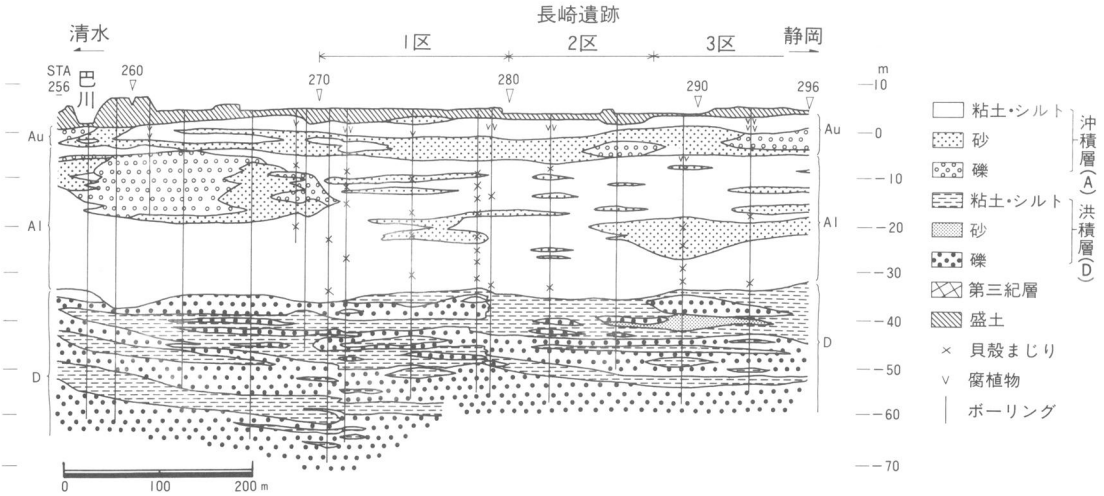


図3　静清バイパスぞいの地下地質断面図（2）　建設省資料（明治コンサルタント、日本パブリックエンジニアリング、基礎地盤コンサルタント調査報告書）による。

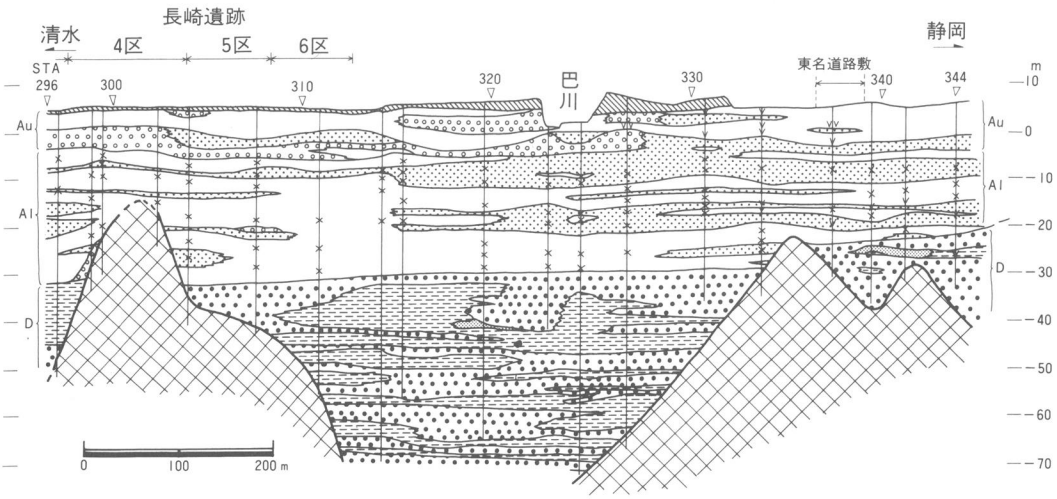


図4　静清バイパスぞいの地下地質断面（3）　凡例は図3参照
建設省資料（川崎地質ＫＫ調査報告書）による。

2～4に示した。これらは、下位から洪積層（D）、沖積層下部、上部（Al，Au）に分けられる。この点は、本地区より西方の川合遺跡地区のそれと同じである（加藤、1990ｃ）。Dは泥と礫の互層をなす。その泥層は上位のそれに比べてN値がやや高い。Alは貝殻片を含む、砂ないし泥層よりなる。砂層は西方に行くにつれて優勢となり、その供給源がそちらにあることを暗示する。Auは泥、礫、腐植物（泥炭）よりなる。礫層は連続性が悪く、局部的にしか分布しない。かつ、その上部は泥層に覆われる（後述、遺跡内の土層）。巴川低地全体の地下地質を検討した松原（1989）の地層区分のうち、HG・MCが、ここでのAu・Alに、また、Lがここでの D に、それぞれ、ほぼ該当するようである。MC上部にアカホヤ火山灰（Ah）が、L上部に姶良火山灰（AT）が、それぞれ、含まれているという（後述、Ｖ－５）。

図２～４と松原の研究とを総合すると、Alは縄文海進によって生じた巴川ぞいの入江に堆積したもの、Auは海進が絶頂を過ぎた後の、淡水の堆積物と、それぞれ、推定される。川合遺跡地区では、後者の年代は約5,500年前以降と算定された（加藤、1990ｃ）。

２．静清バイパスと直交方向

（１）七ッ新屋－長崎－矢崎（図５左、Ａ－Ａ′）

ここでも、Au，Al，Dに相当する地層区分が可能である。上部礫層（Ｇ１）以上とAu、貝殻まじりの泥層とAl、下部礫層（Ｇ２）以下とDとが対比されよう。これらは巴川低地の方に傾いている。上部礫層（Ｇ１）は七ッ新屋の北から出現し矢崎まで連続する。直接、有度山丘陵内の谷出口の礫層（図５左の上原）につながる気配がない。Ｇ１の上位の有機質泥層から大沢スコリア（Os）、カワゴ平軽石（Kgp）が見出された（加藤、MS）。上記の谷出口の礫層は急傾斜で貝殻まじりの泥層の下にもぐりこんでいる。

（２）吉川－北脇－能島－押切（図６、Ｃ－Ｃ′）

ここでも、前項と同様に層区分ができる。上部礫層（Ｇ１）は有度山丘陵の谷津沢川の谷の出口から連続し、能島まで達する。能島遺跡の微高地に出ている海浜性の成層扁平礫層（加藤、1989ａ）がその一部に相当するらしい。下述Ⅳ、礫の岩質組成も考え合わせると、Ｇ１および同礫層が谷津沢川から供給されたとしてよいであろう。

（３）草薙－楠－長崎新田（図５右、Ｂ－Ｂ′）

地層の構成は上記と同じである。長崎新田から楠に続く上部礫層（Ｇ１）は楠新田で消えるが、ほぼ同層準の砂・砂層は近くを通る同礫層の延長部の末端相とも解釈される（後述）。１でのべたように、Au中の上部礫層（Ｇ１）が連続性が悪いのは、供給源の有度山丘陵系河川がたがいに離れているためであろう。

Ⅳ．礫の岩質組成調査

１．方法と試料

遺跡発掘区ならびに周辺地区の礫層（図１参照）の供給源を探る手段として礫の岩質組成を調べた。礫層から採取した礫を水洗、風乾の後、16～32㎜の画分をふるいによって選別した。その結果は図７に示した。岩質組成は砂岩（含礫岩、Ｓ）泥岩・頁岩（M）、チャート（含珪質頁岩、C）、火成岩（花崗岩、蛇紋岩を除く各種、Ｉ）に整理される。

２．河床礫（対照試料）の組成

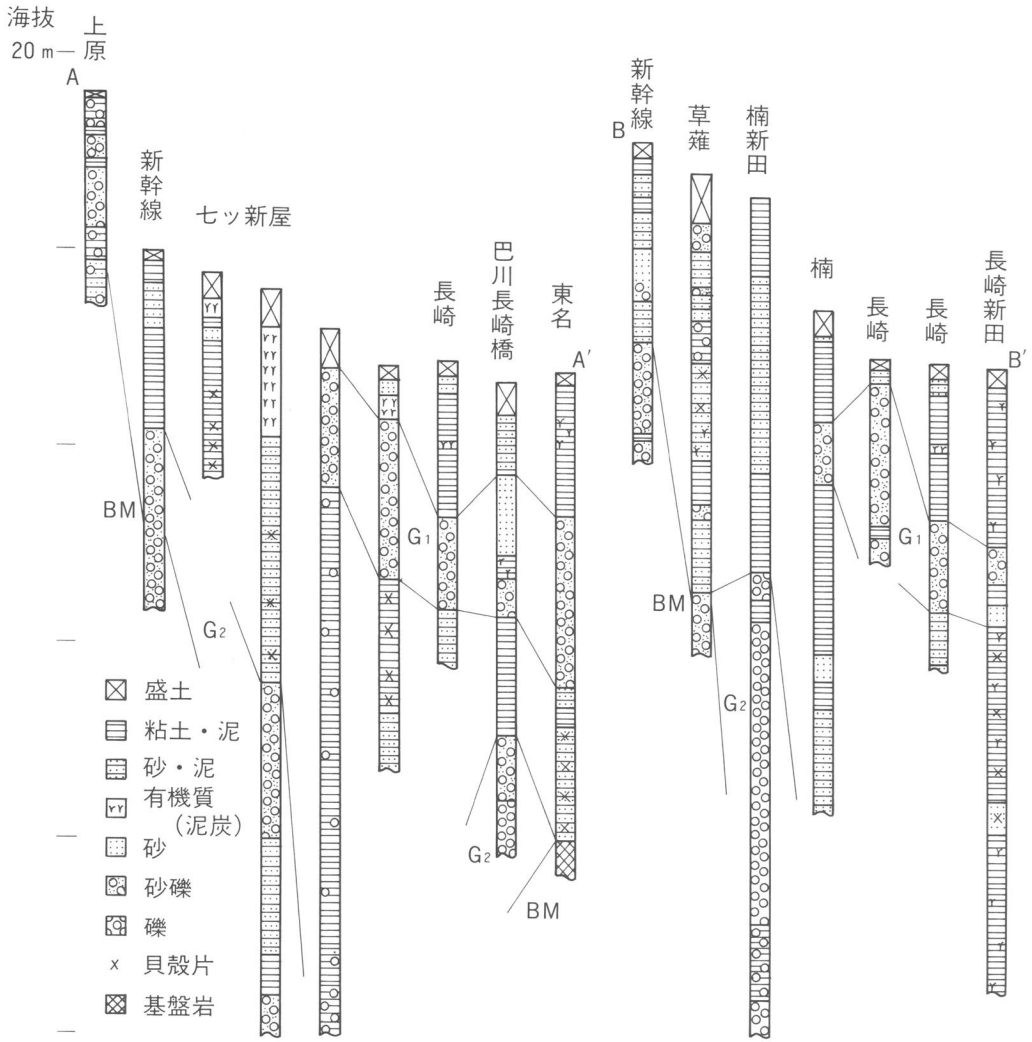


図5　遺跡周辺低地の地質柱状図（1）
（ボーリング資料は土ほか、1976による）

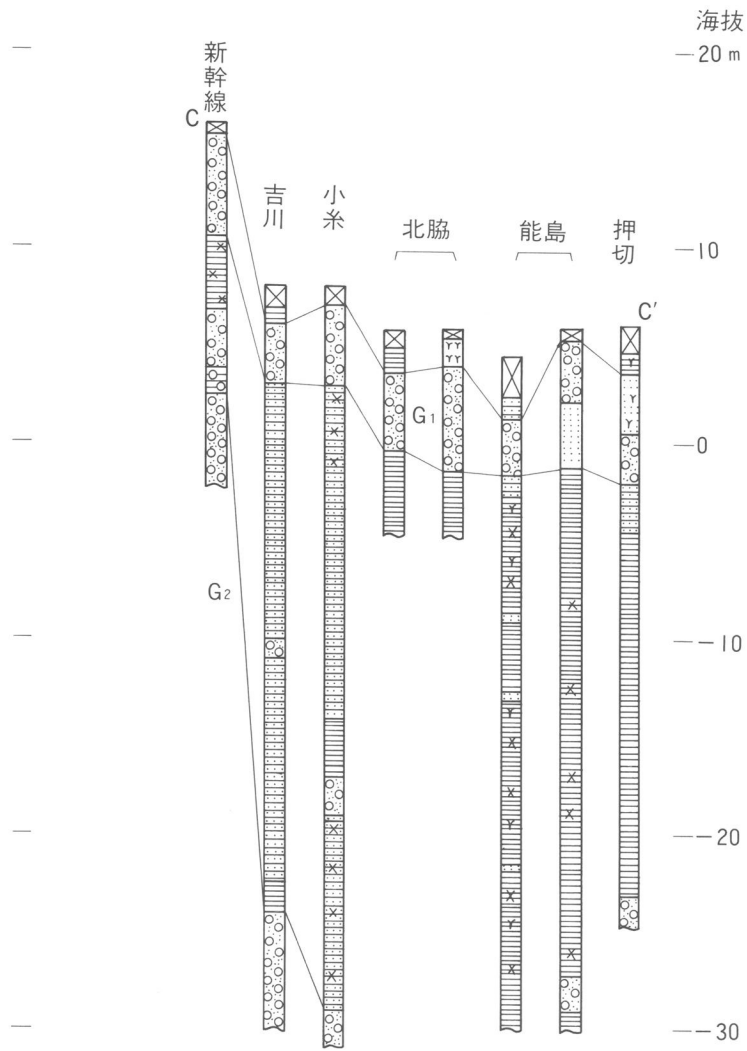


図6　遺跡周辺低地の地質柱状図（2）凡例は図5参照
（土ほか、1976、建設省資料〈東名開発ＫＫ調査報告書〉による）

長尾川はほとんどS、Iからなる。Sは静岡層群（中新世）のやや軟質の中～粗粒砂岩である。有度山丘陵系の谷津沢川、草薙川、吉田川はS、Cが優勢である。Sはほとんどが硬いグレイワッケ質砂岩である。土ほか（1976）によれば、これは同丘陵の久能山礫層、小鹿礫層（更新世）が由来した古安倍川流域の瀬戸川層群（古第三紀）中の砂岩である。ただし、同氏らのデータでは、これら礫層の礫（粒径2～5㎝）にチャートが著しく少ない（9％以下）。これは珪質頁岩を頁岩の中に含めたためと思われる。筆者は、細粒で一見、頁岩らしくてもナイフや釘でこすったとき傷がつかないものは珪質頁岩とし、チャートに含めた。

3．長崎地区の礫層の組成とその起源

本遺跡2区のそれはC、S（ほぼ同量）を主とし、有度山丘陵系の河川のそれとよく似ている。清水市教委発掘の11G、29GはCの値が変動するが、長尾川のそれとは、Iが少なく、Cが多い点で異なるので、やはり有度山丘陵系の河川に起源を求めなければならない。

そうすると、これらの礫は有度山丘陵系の、どの川に由来したであろうか。前述の地下地質から見て、七ッ新屋方面や吉川方面の上部礫層（G1）とは直接つながりそうもない。残る可能性は草薙のG1と楠を経てつながらないか、ということである。しかし、草薙、楠新田ではG1がなく、それと同層準に砂質層があるだけである（前述）。後者がG1の縁辺相であるとの解釈が成り立てば、その可能性が強まる。今後の課題としたい。

4．吉川地区（原添遺跡）

吉川の試掘ピットでのG1層（静岡県埋蔵文化財調査研究所、1990）については、より上位から採取された1PA、1PBのそれが、C、S（ほぼ同量）を主とし、M、Iが乏しい事から、有度山丘陵系の川のそれに似ている。おそらく、近くの谷津沢川から供給されたものと思われる。これで、前述、能島の海浜性礫層が谷津沢川に由来したとの推論が補強されたことになる。5PC、5PDはこれらと比べ、I、C、Mがやや多く、Sがやや少ない。

V．遺跡に出現する土層の地質学的意義

1．基底土層

2区において、粘土、砂よりなる土層が最下部に見いだされた。その上部には縄文後～晩期と見られる土器片が含まれ、さらに下位には内湾性の珪藻が検出された（発掘担当者による）。この土層はつぎに述べる旧河道によって削られている。このような産状は静岡市の神明原・元宮川遺跡大谷川地区の微高地土層と低湿地土層との関係とよく似ている（加藤、1989b）。上記土器に付着した木炭の^{14}C年代は3,690±290年B.P.であった。（発掘担当者による）。一方、大谷川地区では、微高地土層の最新の^{14}C年代は4,500±150年B.P.（C層上位の泥炭層）であり、また、低湿地土層の最古の^{14}C年代は3,550±120年B.P.（縄文後期の遺物包含層中の木片）であった（加藤、1989b）。削りこみの時期が本遺跡の2区の方がすこし遅れているようである。

2．基底土層の削りこみ

2区において、基底土層を削りこむ南南西から北北東に向かう旧河道（SR240）が検出された（下述）。その充填土層の下半に出現する砂礫層はこの川が運んだものと推察できる。その起源は前章で述べたよ

うに、有度山丘陵系の草薙川になりそうである。充塡土層の上半の黒色粘土層中にカワゴ平軽石（Kgp）と大沢スコリア（Os）のペアが含まれる。これらの年代（後述）から、削りこみの時期は縄文後期後半であろう。

旧河道東岸は多数の小断層（正断層）によって河道側に土層がずり落ちている。さらに、微高地土層と削りこみの充塡土層とをともにおおう黒色有機質土層（弥生～古墳前期、D層）、灰白色シルト・砂細互層（古墳？C層）、B層下半も河道の中心に向かって曲がり落ちている（撓曲崖）（図８）。河道の東岸の黒色土層の中に多数の展張亀裂が見いだされた。黒色土層は水田遺構を包含するので、本来は水平またはそれに近かったはずである（原像 '89）。ＤＩ層面の等高線の形から撓曲崖は南南西－北北東へのび、かつ、低くなる（発掘担当者による）。旧河道もこの方面に流れたものと推定される。これらから、土層がなんらかの作用で陥没したと考えざるをえない。もっとも可能性が高い作用は地震であろう。B層内に鎌倉時代の河道の掘りこみがあるので（発掘担当者による）、この地震（もしそうなら）はそのすぐ前あたりであろう。

３．低湿地を暗示する土層（黒色有機質土層）

Kgp、Osは黒色有機質土層（D層）中に挟まれるので、両火山灰の年代（縄文晩期前葉）以前、おそらく、縄文後期後半からこの地域に低湿地が出現したことが分かる。以後D層の上限の古墳前期まで、中断があったとしても、この状態が続いたと見られる。本遺跡の水田立地はこれに助けられたであろう。この傾向は静岡・清水平野の各地で確認されつつある（加藤、1989ｂ、加藤、1990ｃ）。

４．砂礫氾濫を暗示する土層（灰白色シルト・砂細互層、Ｃ層）

D層の上にくるC層は細かい縞模様をなすので現場では「ストライプ層」と呼ばれていた。これは何となく洪水による氾濫堆積と推察したが、川合、池ヶ谷遺跡で砂礫層と関連することが分かった（加藤、1990ｃ）。すなわち、低湿地内の池、沼のような静水に氾濫で砂礫が搬入されると、流路ぞいに砂礫が帯状に堆積しその両側、下流側で急に粒径が小さくなり、砂－礫互層、砂、シルト－砂互層、シルト、シルト－粘土互層、粘土という順で変化するのが認められた。これらを砂礫の末端相、縁辺相と呼ぶことがある。帯状の砂礫層は微高地をなし、流路に当たる溝状凹地と両側の自然堤防よりなることが多い。長崎集落の微高地での清水市教育委の発掘区でも、その中心部を構成する礫層が巴川低地に向かって、短距離の間に、砂－礫互層、砂層、泥層に移行するのが観察された（加藤、MS１）。ただし、本遺跡のC層に対応する砂礫層はまだ特定されていない。B層中に鎌倉時代の旧河道があるのでC層の堆積完了はそれ以前である。巴川低地では、各遺跡とも古墳中期を中心とした時期に砂礫層または末端相が存在し、河川氾濫の最盛期だったようである（加藤、1990ｃ）。

５．火山灰

（１）姶良（あいら）火山灰（AT）、アカホヤ火山灰（Ah）

松原（1985;1989）によれば、巴川平野の地下地質でMC（Al）上部からAhが、L（D）上部からATが、それぞれ見いだされたという。カッコ内は本稿の地下地質区分である。Ahが約6,300年B.P.、ATが2.1～2.2万年B.P.の^{14}C年代を示す。

（２）カワゴ平軽石（Kgp）、大沢スコリア（Os）、大沢スコリア類似（Os'）

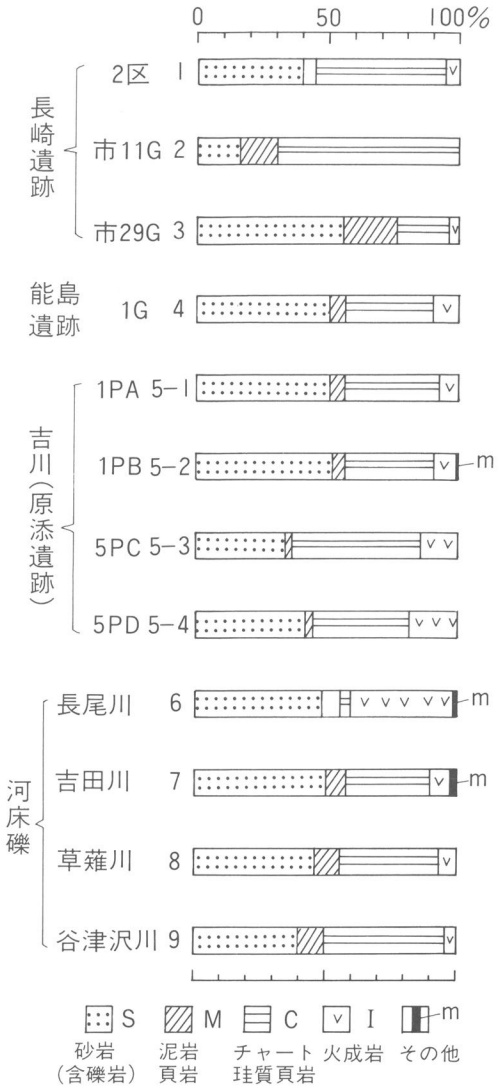


図7　遺跡とその周辺の礫層の岩質組成
(粒径16〜32mm)

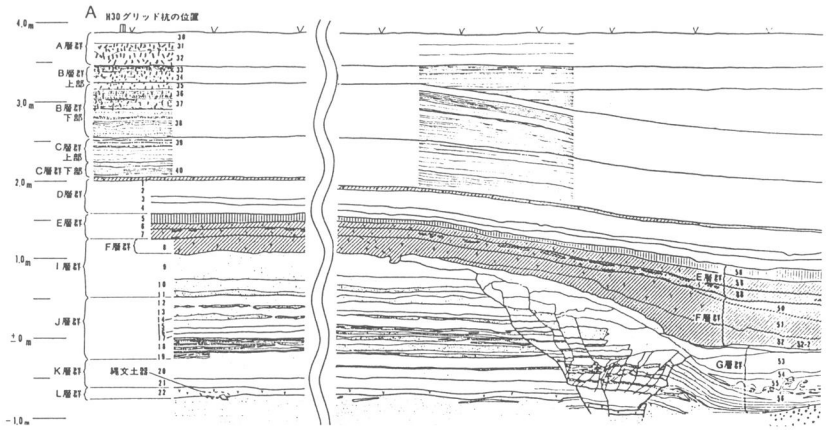


図8　2区土層断面図(『長崎遺跡Ⅰ』より)

表1　1−3区SR118の白色粒子まじりの土層の細砂画分(0.2−0.05mm)の鉱物組成(粒数%)

A　細砂全体		B　火山灰組成***	C　重鉱物全調査	
#石　英	2.5	—	角閃石	7
斜長石*	28.4	88	シソ輝石	62
#酸性斜長石	1.2	—	普通輝石	24
シソ輝石	0.3	1	ザクロ石?☆	7
スコリア**	3.7	11	鑑定粒数	29
#植物片	26.2	—	☆高屈折率、無色、光学的等方性	
#木　炭	6.2	—		
#植物珪酸体	2.8	—		
#岩　片	27.8	—		
#酸化鉄	0.9	—		
鑑定粒数	324	100		

#　火山灰以外の不純物
*　屈折率が大、スコリアの付着したものあり
**　微細気泡、風化粒を含む
***　Aから#印粒子を除いた残りだけの百分率

表2　湛水土壌中における還元過程

(高井, 1987より, 一部省略)

物質変化	反応の起こる土壌 Eh_7 (mV)	アンモニア生成からみた有機物分解	CO_2 生成	有機物分解形式(仮説)	
分子状酸素の消失	+500〜+300 臨界電位 +332	活発に進行する	活発に進行する	好気的および半嫌気的分解過程	第一段階
硝酸の消失 窒素ガスの生成	+400〜+100 臨界電位 +226				
Mn(Ⅱ)の生成	+400〜−100				
Fe(Ⅱ)の生成	pH 6〜7で +200〜−200				
S(Ⅱ)の生成	0〜−200 臨界電位 −150	緩慢に進行する	緩慢に進行するか、停滞ないし減少する	嫌気的分解過程	第二段階
CH_4 の生成	−200〜−300				
H_2 の生成	−200〜−420		湛水初期:活発に進行する		

初めの２つはすでに静清平野の各地で発見されているので、現地で判別することが可能である。Kgpは黄白色で白い軽石の微粒（砂粒大）、その上位にあるOsは茶褐色の中粒砂（スコリア粒）よりなり、厚さはいずれも１㎝前後、レンズ状の層として観察される。巴川低地で最初に両者がそろって見いだされたのは押切石川遺跡、ついで長崎新田遺跡（いずれも清水市教委が発掘したグリッド）である。両遺跡では、それらの上にOs'が重なることが分かった（加藤、1987ａ、ｂ）。これはOsとよく似ているが、それよりも細粒で層も薄い（加藤、1987ａ，ｂ）。本遺跡の２区、３－２区のＥ層でも三つが揃って発見された（筆者実見）。なお、Os'は「押切石川火山灰、OsI」と改称することにした（加藤、印刷中２）。

上下層の^{14}Ｃ年代資料から、Kgpは約2,900年B.P.、約2,700年B.P.の概略年代値が使用される。Os'はKgp、Osとの垂直距離と後２者の年代値とから約2,300年B.P.の年代と推定された（加藤、1990）。土器との関連では、Kgpの下位で最新のものは縄文後期末の安行Ⅱ式平行（加藤、1990）、Osの上位で最古のものは大洞Ａ式である。Kgp、Osの間の土器は未発見である。

（３）弥生中期の火山灰

①本遺跡１－３区の弥生中期包含層（黒色粘土層）を覆土とする溝（ＳＲ118）がある。同層の上部の淡茶褐色泥炭層中に白色粒子（径0.2㎜位）が水平に散在するのが発掘担当者によって発見された。筆者はこのうち密集度の高い部分を掻きとり、風乾後、音波処理、ふるい分けで砂画分を分離し、細砂（0.2－0.05㎜）の顕微鏡観察を行った。不純粒子が多いのはこのためである（下記）。

②観察結果を表１Ａ～Ｃに掲げた。Ａの＃印は不純粒子とみなされるものである。Ａの鉱物のうちで、上記の白色粒子の主体をなすと思われるものは斜長石である。これは屈折率が高く、亜灰長石に相当するものと思われる。中にはスコリアと同物質を表面に付着したものもある。＃印を除いて百分率を再計算したのがＢである。斜長石とスコリアが大部分を占めることが分かる。Ａの岩片の中に区別がよくできないスコリアが計数された可能性もあるので、それを勘案すればスコリアの率はもっと増えるかもしれない。顕微鏡下のスコリアは黒色（不透明）で輪郭が細かい凹凸を示し、透明な斜長石の微晶が時に含まれる。別に行った試料中の重鉱物の全数調査の結果がＣである。シソ輝石と普通輝石とが重鉱物の主体をなすことが分かる。

③以上をまとめると、高屈折率の斜長石を主とし、スコリアを従とし、重鉱物ではシソ輝石と普通輝石が優勢であることから、これらが玄武岩質火山灰に由来すると推定される。もっとも近い給源火山は富士山であるが、西麓にこの時期の同質火山灰は、今のところ検出されていない。今後のデータの蓄積を待ちたい。

④なお、瀬名遺跡９区の方形墓の周溝中の覆土、上土遺跡（静岡市教委発掘、水田の畦畔）、池ヶ谷遺跡１区のＦⅡ層（いずれも弥生中期）に火山灰が見いだされたが、本遺跡の上記のものと違う特徴をもっているようで、これらが同一であると判断できないのが現状である。この見地から、本遺跡３－２区のＳＲ316の有東式土器（弥生中期）包含層直上の白色火山灰（概報 '90）が上の１－３区の火山灰と同じであるとは必ずしも断言できない。今後検討したい。（加藤、印刷中２）。

Ⅵ．検出水田の土壌学的考察

１．水田の土壌学的検出（水田の存在確度の判定）

筆者は最近、埋没地下水型水田土壌検出の基準を設け、それに従って水田の存在確度を判定しようとしている（加藤、印刷中１、1992）。その概要は、

土層が還元状態にあり（発掘後の酸化は除外）

イ．土層攪乱がある（作土）
ロ．作土下に炭酸鉄がある
ハ．縦根跡の極大がこれらと一致する
└─田面は作土層の上面である。

地下水型水田土壌の存在確度は、三つがそろえば「強」、どれか二つなら「中」、一つしかなければ「弱」と判定する。

本遺跡の水田土壌について、この観点から筆者が調べた例（1988年８月、10月）は二つである。

（１）３－２区５Ｔ南壁　筆者の観察結果は（++富む、＋含む、±あり）、

ＤⅡ１－１層　炭酸鉄　なし、　縦根跡　++、　（植物片　++）、強還元土層

ＤⅡ１－２層　炭酸鉄　±～＋、　縦根跡　++、　（植物片±～＋）、強還元土層

ＤⅡ２層　炭酸鉄　なし、　縦根跡　++、　（植物片±～＋）、強還元土層

植物片は水平堆積せず、土層の攪乱が暗示される。

以上から、この土層は上記の基準イ～ハがすべて満たされ、水田土壌の存在確度は強、田面はＤⅡ１－１層の上面に推定される。

（２）３－３区、ＤⅡ１層下部からＤⅡ２層にかけて比較的顕著な炭酸鉄が検出され、ＤⅡ１層が灰白色粘土塊微粒子を含み攪乱の微候を示す（概報 '90、年報Ⅵにもこの記述あり）。上記の基準イ、ロが満たされ、水田土壌の存在確度は中、田面はＤⅡ１層の上面に想定される。縦根跡の存否はチェックしなかった。もしそれがあれば存在確度はさらに強まる。なお、ＤⅡ１層から炭酸鉄の帯状密集部が検出され、畦畔状遺構と推定された（下述）。

２．水田土壌の類型

水田土壌の主要構成土層とこれらの組み合せによる同土壌の類型化についてはすでに解説したので省略する（加藤、1990ｂ）。

検出された弥生中期～古墳前期の水田遺構の断面をみると、黒色有機質土層（黒泥土）、泥炭層あるいは暗青灰色強グライ土層が、作土や下層土を構成する。従って、それら遺構の水田土壌のタイプは、

有機質水田土壌……黒泥土水田土壌または泥炭土水田土壌

無機質水田土壌……地下水型（またはグライ型）水田土壌

のどれかに属することになる。

いずれも、地下水位が地表近くまで達する湿田型である。

３．炭酸（第一）鉄（$FeCO_3$）の生成

本遺跡の１－３、３－２、３－３区などのＤⅡ１層で、炭酸鉄の白色沈澱物密集部が暗青色の土層中に帯状に出現した。直角に枝分かれしたりして畦畔を連想させる。発掘担当者（矢田氏）は、この部分に多くの植物片が共存し、しかも、炭酸鉄の沈澱がその表面や周辺土層中に多いことから、イ．炭酸鉄が植物またはその分解物を核として生成しやすい、ロ．植物片は湿田の軟弱な畦の補強材として使用さ

れた、と解釈した（概報 '90、年報Ⅵ)。そこで、主としてイに関連して炭酸鉄の土壌学的生成条件について考察を試みることとする。

①炭酸鉄が第一鉄（還元鉄）化合物であることから、還元状態下で生成したと解釈される。酸化－還元状態を表す指標として酸化還元電位（Eh、mV単位）が使用される。この値が小さいほど、還元側に偏ることを示す。

還元状態下で第一鉄が増大することは、現地測定、室内実験でも確認されている。山崎（1960）は地下水型水田土壌の第２層［Eh_6（pH６のEh）＝350～230mV］での第一鉄が50～100mg、第３層［Eh_6＜100mV］での第一鉄が＞450mg、いずれも、乾燥土壌100ｇ当り、含まれることを示した。

作土の湛水還元のポット試験や室内実験で得られた結果も第一鉄とEhとが逆の相関関係にあることを明らかにしている（高井、1978、p.36－40)。理論式からも同様である（和田、1978、p.59－61)。

②CO_3の起源は植物など有機物の分解によって遊離するCO_2であろう。炭酸鉄の沈澱が暗味を帯びた（有機物の分解物＝腐植を含む）グライ層でもっともよく見いだされるのもこれ（と①）に符号する。

イネのポット栽培試験で、湛水下の作土の還元過程を追跡すると、２日後に酸素、硝酸が消失し、ついで第一鉄が増大する。これに伴いEhがいちじるしく低下し（＋500mV→－100～－200mV)、CO_2（炭酸ガス）が活発に発生する。第一鉄とCO_2の量的な相関が高いことから、鉄の還元（第一鉄の生成）と共役して有機物分解（CO_2の発生）が進行すると考えられる。これらの過程は表２のようにまとめられる（高井、1978、p.36－47)。つまり、第一鉄の生成とCO_2の発生とがペアで起こるというのである。

③還元が強まるとpH（H^+イオン濃度の逆数の対数）が高くなる。反応系に電子（e^-）がとりこまれると、H^+イオンが減るからである。(次式)。

$H^+ + e^- \rightarrow 1/2H_2$（g）　　［gはガスを示す］

還元にH^+が使われて、相対的にOH^-濃度が高まる。

上記はEhとpHとが逆相関をなすことを意味するが、室内実験、理論的考察によって裏付けされている（和田、1978、p.55－63)。

④炭酸鉄（$FeCO_3$）の生成条件　Yamane（1970)、Lindsay（1979）は理論式から$FeCO_3$の、Eh－pH（pe＋pH＊）,CO_2、Fe^{++}に対する安定条件を求めている。くわしい説明を省くが、CO_2の濃度が高いほど、より低いFe^{++}濃度、より高いEh（pe＋pH）……より酸化的……にわたって$FeCO_3$の安定域がひろがることが示される。(＊peは電子（e^-）のモル濃度の逆数の対数)

⑤現在の地下水型水田土壌の下層で、やや、または、かなり有機質な強グライ土層に炭酸鉄が見いだされることが多いのは、土壌の還元化が＋200～－200V程度で、鉄の還元と有機物分解（CO_2の発生）が同時進行する第一段階（表２、上記②）にとどまっていること、有機物が多いとCO_2濃度が高まり、炭酸鉄の生成に有利な条件（単に材料提供だけでなく、④の効果が生じる）が展開することで説明されよう。すでに強グライ条件下にある場合に、有機物が添加されるとCO_2の発生が加速され、上と同様な効果が生まれるであろう。本項の初めに記した１－３区と３－３区の畦畔状の炭酸鉄の沈澱物密集部の形成に対して、畦というやや酸化的条件下でも、補強用の植物が炭酸鉄生成に有利に働いたと解釈できるであろう。

⑥なぜ炭酸鉄は作土に少ないか。これには二つの理由が考えられる。

イ．落水期の酸化による消失。地下水型水田土壌でも、秋からの落水によって田面から酸素が拡散・侵入しやすいので、かりに炭酸鉄ができていても、酸化により酸化鉄に変化してしまう。

ロ．炭酸化作用による溶解。炭酸鉄（$FeCO_3$）が、易溶解性の重炭酸第一鉄｛$Fe(HCO_3)_2$｝に変化する。（次式、gはガス状態を示す）

$$FeCO_3 + H_2O + CO_2\ (g) \rightleftarrows Fe(HCO_3)_2$$

強還元の水田作土から下方浸透する第一鉄のほとんどが$Fe(HCO_3)_2$の形であるという（和田、1978、p.127）。上式が右方に進むためにはCO_2（g）の分圧が大きいことが要請されるが、作土内でさかんにCO_2（g）が発生することは②で述べたごとくである。

下層に到達した$Fe(HCO_3)_2$から炭酸鉄（$FeCO_3$）が生成する（上式が左方に進む）には、下層土のCO_2（g）の分圧が作土より小さいことが必要である。炭酸鉄の不定型沈澱が地下水型水田土壌下層の孔隙ぞいに観察されることがあるが、このメカニズムが働いているのか、筆者にはつまびらかでない。

参　考　文　献

門村　浩（1966）静清地域の地盤と防災上の問題点。「静清地域および周辺地域の防災上の諸問題」、7－29頁、静岡県消防防災課。

加藤芳朗（1987ａ）清水市押切石川遺跡の土層の地質学的検討（続）。「石川遺跡」、18－22頁、清水市教育委員会。

加藤芳朗（1987ｂ）清水市長崎新田遺跡の火山層の地質学的検討（続）。「静清バイパス長崎地区発掘調査概報、昭和61年度」、13－16頁、清水市教育委員会。

加藤芳朗（1989ａ）能島遺跡の礫層の地質学的検討（続）。「能島遺跡（本文編）」、128－133頁、静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（1989ｂ）神明原・元宮川遺跡の土層と静清平野の地学環境。「大谷川Ⅳ、遺物・考察編」、269－282頁、静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（1990ａ）静岡市蛭田遺跡の土層の地学的検討。「蛭田遺跡（自然科学分析編）」、Ⅲ－１～４、静岡市教育委員会。

加藤芳朗（1990ｂ）静岡市川合遺跡の水田遺構の水田土壌学的試論。「川合遺跡、遺構・本文編・付編４」静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（1990ｃ）川合遺跡の立地に関する地学的検討。「川合遺跡、遺構・本文編・付編５」静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（印刷中１）坂尻遺跡の環境・水田・噴砂の地学的・土壌学的検討。「坂尻遺跡」、静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（1992）遺跡発掘現場における埋没水田認定に関する土壌学的問題。ペドロジスト、36巻、167－174頁。

加藤芳朗（印刷中２）巴川流域の遺跡からの火山灰－とくに弥生期火山灰群の検討。「池ヶ谷遺跡」、静岡県埋蔵文化財調査研究所。

加藤芳朗（MS１）清水市長崎遺跡微高地の地学的環境。（1989年１月に清水市教育委員会に提出）

加藤芳朗（MS２）鷹ノ道遺跡（第２次区）の土層の堆積環境と水田址の土壌学的検討。（1991年３月に静岡市教育委員会に提出）

Lindsay, W. L. (1979) Chemical Equilibria in Soils. 449 pp., Jhon Wiley & Sons, N. Y.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカ

タログ－。「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学、総括報告書」、865－928頁。
松原彰子（1985）静岡・清水平野の地形と地質。日本第四紀学会演旨集15号、60－61頁。
松原彰子（1989）完新世における砂州地形の発達過程－駿河湾沿岸低地を例として－。地理学評論、62巻Ａ２号、160－183頁。
静岡県埋蔵文化財調査研究所（1990）平成２年度清水合同庁舎建設に伴う埋蔵文化財試掘報告書。
高井康雄（1978）湛水下の土壌中における酸化還元過程。「水田土壌学」、23－55頁、講談社。
土　隆一・北川光雄（1976）「静岡清水地域の地質－地質図説明書－改訂版－」、静岡商工会議所。
和田秀徳（1978）湛水土壌のpHとEh、水田土壌化作用。「水田土壌学」、55－63、115－132頁、講談社。
矢田　勝（1989）土壌の検討について。「低湿地遺跡の調査」、47－66頁、静岡県埋蔵文化財調査研究所
Yamane, I. (1970) Eh－pH diagrams of iron system in relation to flooded soils. Rep. Inst. Agr. Res., Tohoku Univ., Vol. 21, p. 39－63.
山崎欣多（1960）水田土壌の生成論的分類に関する研究。富山農試報告特１号、１－105頁。

長　崎　遺　跡　II
（遺　構　編）
本文編

静清バイパス（長崎地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成４年３月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印　　刷　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の１
ＴＥＬ（054）282－4031